
言葉と意思の行軍記

嶺上

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

言葉と意思の行軍記

【Nコード】

N7797N

【作者名】

嶺上

【あらすじ】

病院から外に出る事なく生涯を閉じた少女は、神からのネギの保護者役を務めるように依頼される。本で世界を想像していた彼女は神様より貰った世界の法則を変える力と言葉を持ち、大戦（大分烈戦争）前に送り込まれる。彼女はそこで、紅き翼くの面々と出会い、自分の意思で彼らと歩き始める。

本作は、大戦期（大分烈戦争）の話となります。

また、オリジナル主人公及びチート、原作ブレイク、原作キャラと

の恋愛、終わりのクロニクルの一部ネタバレが展開されますので、ご注意ください。

また、原作設定は三十巻前後まで確認して構成しておりますが、判明していなかった設定は捏造して見事に外しておりますので、笑いながらご了承ください。

処女作となる為、拙い点が多々あるかと思いますが、お付き合いいただければ幸いです。

プロローグ

締め切られた病院の一室に、少女が一人眠っていた。

布団から覗いて見える彼女は、髪、肌、衣服の全てが白く染まっている。

その白さは美しさよりも、脆さと儚さを感じさせるものだ。

風が吹き、カーテンが舞うと共に鈴の音が鳴り、それを目覚ましに少女が目を覚ました。

赤い。

全身が白に染められている少女の中で、一点だけ赤い箇所がある。目だ。

少女は原因不明の奇病により、生まれた時からこの病院を出る事が無かった。

生まれて三年は滅菌され、窓すら無い締め切った個室で、防護装備の両親と触れ合っていた。

外出を禁じられた彼女は、その代わりに幾つかの玩具や絵本が与えられた。

彼女は玩具よりも絵本が好きだった。

一度読んだ絵本も何度も読み返し、新しい本を与えると消灯時間まで読みふける。

生まれて四年目も変わらず滅菌室に閉じ込められ、たまに動物と触れ合いながら過ごした。

その動物は所謂実験動物、彼女の病気が接触・空気感染するものが調べるものではあったが、彼女が初めて肌から熱を感じる物体だった。

そうして彼女の病気が感染しないものであると確認が出来て、その後五年、彼女は初めて両親と直接触れ合った。

彼女の名前を呼びながら、母親がいきなり彼女を抱きしめる。

「未央^{みお}、未央……！」 「ごめんなさい」

「ごめんなさい、と。元気な体をあげられなくてごめんなさい、と。母は涙を流しながら少女に謝った。

その言葉を受けた少女は、母の涙を拭って言った。

「だいじょうぶ、わたしはいきてるよ」

笑顔をもに送った。

こんな体でも、生きているのだから大丈夫だ、と。

その言葉を受けた母は、涙を止めることなく笑顔で少女を抱きしめた。

少女 柳^{やなぎ} 未央^{みお}は、病気で弱った体ではあったが、心は健やかに育っていた。

それから、十三年の時が過ぎた。

少女はゆるやかに成長したが、病気は一向に改善する気配を見せなかった。

成長に伴い、彼女の読む本は絵本から漫画に、漫画から小説に読む範囲を広げていった。

割り当てられた個室で一人、本を読む。

1ページごと、ゆっくりと大事に読み進める。

捲り、痛快と喜び。

捲り、不正に怒り。

捲り、悲劇に哀しみ。
捲り、喜劇を楽しむ。

ページをめくる度、本の世界を想像しながら感情を変化させる。
ころころと変わる表情。

彼女はこの時間がとても好きだった。

いや、この時間以外に好きと思える事が無かった、と言った方が正しい表現だろう。

彼女の体は常に痛みを感じさせるものになっていた。何度検査しても、彼女の体から原因は見つからない。だが、彼女は痛みを感じて、酷い時には血を吐き出した。医師達は頭を抱え、幾つもの検査を試したが何も進展は無かった。

闘病生活の中で、彼女はこう思うようになっていた。

このまま、いずれ死ぬんでしょね。

生きている事の有り難味はわかっている。本を読む事が出来るし、両親や数少ないが友人と話す事も出来る。しかし、十八歳という年齢で感じるのもおかしな話ではあるが、生きてく事に疲れを感じ始めてもいた。常に痛みを感じ、食べる食事は味気ない病院食ばかり。たまに抜け出して友人とお菓子を食べたりはしているが、運が悪いと痛みと共に吐き出してしまふ。

自分が死んだら皆はどう思うだろうと、未央は普段触れ合っている人たちの事を思い返す。

両親は自分を愛してくれている。それは疑いようのない事だ。

毎日とは言わないが、休日には新しい本を土産に顔を出してくれる。自分の人生と共に増え続ける本は、ついには病院に図書室が出来るまでの蔵書量となった。一度お金は大丈夫か聞いてみたが、自分の病気は援助金が出ているようで心配ないとリアルに答えられた。

少々親の愛を疑うシーンだったわね。

着服せずに本を買ってくれるのでそれはないだろうと思いきす。次に、数少ない友人の事を思い返した。

スポーツの怪我で長期入院していた彼女に、入院生活中のコツを教えた事から始まった付き合いだ。

自分とは違い、ハツラツとした生命力に溢れる女の子だ。羨ましいと言った事があるが、

「いやあ、深窓病弱系の未央も結構なもんだと思うわ」

「人を勝手にジャンル分けしないで頂戴」

よく人をギャルゲーヒロイン枠にする困った人物だ。

それでも、彼女は自分を腫れ物のように扱わない数少ない友人だった。

両親も友人も、おそらく自分が死んだら悲しんでくれるとは思っている。しかし、未央はこうも思う。

私の存在は、負担なんじゃないかしらね。

昼夜問わずに容態を悪くすれば両親に電話が行く。それは両親の生活を妨げるものだ。

両親にそう言えば殴られるかもしれないが、事実だろう。

友人もショックを受けてはくれるだろうが、彼女の性格だ。きつとすぐ立ち直ってくれるだろう。

ぼんやりと考えるが、自殺願望があるわけではない。自分が死んだ時の事を考えて暗く笑うとは、まるで中二病だ。馬鹿らしい妄想と先ほどまでの思考を切って捨てる。

気分転換に娯楽室にでも出かけ、誰かと囲碁なり将棋なり相手をお願いしよう。長期入院患者のシゲさんと囲碁の決着もつけていな

かった気がする。相手がボケているので毎回勝敗を誤魔化されるが、今日こそ白黒つけてやるう。

腰までかけていた布団を外し、スリッパを履こうと足を下ろす。瞬間、床が目の前にあつた。

額と膝に鈍い痛みが走り、自分の身に何が起きたのか考えを巡らせる。

床が目の前にあり、額と膝に痛みがある事から自分が転んだのだと気づく。

今までにも何度かあつた事だ。

すぐに回復するはずと気楽に考えていると、目の前に何かが広がっていく。

赤い。

未央の目が床に写っているのではない、血が床に広がっているのだ。

彼女の口は咳き込み、大量の血を吐き出し続けている。

これは、やばい？

流石に焦り、立ち上がるうとするも指先一つ動かせない。

誰かを呼ぼうとするが、口は咳をするだけで、声を発しない。

誰か居ないかと目を動かすが、視界が暗くなっていく。

先ほど感じた痛みが引いていき、床の冷たさも消えていく。

まさか、ここで終わり？ 随分唐突ね。

死ぬかもしれない、そんな時にも未央の心は波打つ事は無く。

ただ、読み続けていた幾つかの本の続きだけを、気にしていた。

ぼんやりと、目が覚める。

眠りすぎてしまった時特有の倦怠感が、じんわりと体を覆っていた。

体に意識を向けると、仰向けに寝ている事に気づく。

意識を失った時は床にうつ伏せになっていたはずだが、誰かに姿勢を変えてもらったのだろうか。

ふう、と一息つき、体の感覚を確かめる。

両腕、良し。両足、良し。呼吸、良し。

どうやら生きているようね、そう思いながら体を起こした。

今何時だろうか、また両親を呼び出してしまったのだろうか、そんな事を思いながら目を開ける。

目の前には、全く見覚えの無い、一片の線すら無い白い世界が広がっていた。

一瞬空け、呟く。

「あらやだ、やっぱり死んだのかしら？」

思わず独り言を呟く。勿論何者かの返答を期待したものではなかったが、

「はい、貴女は死にました。ご愁傷様です」

返答があった。

何者と思ひ声のした方を見るも、やはり白い世界が広がるのみ。

「話しかけてきたのなら、とりあえず姿を見せたらどう？ 独り言を続ける趣味は無いのよ」

「おっと、これは失礼しました」

そう答えた声は、白い世界の中で線を作り始める。
まずは胴体、そこに足、手と描いていき、最後に顔を作る。だが、その姿には一言文句があった。

「なんで私と同じ顔をしているのかしら……」

「すみません、実は顔を持ってないもので」

声の主は、未央と同じ顔を描いた。いや、正確には全く同じではない。

顔を構成するパーツは同じものだが、相手は雰囲気異なっている。

触れれば砕けそうな、生命力を感じさせない本来の自分の雰囲気ではなく、荘厳な雰囲気を感じる。後光すら見えそうだ。同じ顔なだけに、未央は少々敗北感を持つ。

あまり長々と敗北感を感じたくないなので、話を進める。

「……それで、何の用かしら。もしかして死神？ 三途の川ないけど、ここ死後の世界じゃないの？」

「えと、まず私は死神じゃありません。それと、ここは死後の世界ではなく、生と死の狭間です」

せいとしのはざま、て。

思わず膝に手をつき、額から吹き出る汗を拭う。

その理由は、自分の過去にあった。

昔こんな二次創作書いたわあ……！　そういえば途中で止めたけど、あのノートどうなったの……！　私の黒歴史！

思わず頭が落ち、呻いてるようにも見える態勢になる。両親が遺

品整理してる中で自分の黒歴史ノートが出てきたらと想像する。涙ながらに本を片付ける両親が手書きのノートを見つけて中身を見ると、娘の中二創作。

思わず別ベクトルの涙が出そう！

「あの〜……お話を続けても大丈夫でしょうか？」

「だ、大丈夫、続けてちょうだい」

自分と同じ顔をしたものに心配されてしまった。膝をついた自分を屈みこんで見る相手の表情を見ると、正直可愛い、本当に自分と同じ顔だろうか。しかし、どのような用件があるのだろうか。

こちらの心を読んだかのように、相手は話し出した。

「えと、実は貴女にお願いがありまして、こちらにお呼びしました。お願いというのは、ある平行世界に行って、その世界の人を救ってほしいんです」

その話を聞いて、色々な物語が脳内を駆け巡り、その統括として問いを作る。

「救世主モノ？」

「だいたいその理解であってます」

彼女が言うには、その平行世界の行く末が大変厳しく、手助けをしたいという話だ。

「自分で行けばいいじゃない」

「いやあ、それだと情緒が無いというか……何事にも様式美ってありますよね。やっぱり救世主モノの主役といえばティーンエイジで

すから」

随分ふざけた神様も居たものだ。しかし、神様なんて所詮そんなものかもしれない、と思い直す。

今まで読んだ本の中では、これくらい風変わりな神様も居た気がする。

しかし、大抵そういった神は世界を滅ぼそうとしていた気がするが、この神は世界を救いたいらしい。

(作風の違いかしらね)

そう思う事にした。

「それで、貴方はどういう存在なの？ 私が居た世界の神様でいいの？」

「理解が早くて助かりますよ。私は貴方の世界を含めたいくつかの世界を担当しています。貴方に行ってほしい世界についても、私が担当しているんですよ」

予想通りの回答、つまりはテンプレ展開だ、しかし故にわかりやすく好ましい。

そう思い、話を先に進めようと、続けて問う。

「それで、行ってほしい世界って何処？ 自慢じゃないけど、私はバトル能力0のモヤシ女よ！」

「呼び出しておいて何ですが……順応早いですね。普通、もっと死んだら動揺するんですが……」

「死ぬのが十年や二十年早まっただけよ。それとも蘇生出来るの？」

無理でしょう？ 様式美とか言ってたからそんな気がするわ。だから話を先に進めましょう」

そう言つと、相手は困つたようにひきつった笑顔を浮かべる。

あ、私神様を言いくるめた！ 人類初かもしれないわねククク！

相手は言葉に困りながらも、話を進めようと背後から本を取り出して、こちらに放り投げる。

思わず身構えるも、本はゆっくりと滞空しながら未央の手に収まった。

本を見ると、カラフルな表紙に少年少女が描かれていた。

「行ってほしい世界は、その本の世界です」

「魔法先生ネギま。ね……私、あんまりこの本読んでないんだけど、どう面白いの？」

「簡単に言えば、主人公の保護者が頼りないといいますが……。主人公の人生がハードモードなんですよ」

「主人公の人生なんて大体ハードモードじゃないの。私は構わないけど、保護者役なんて出来るかしらね」

改めて説明するが、未央は十八歳だった。

母親になる経験どころか、学校に通つてもいない為、後輩も居ない。入院生活のコツを何人かに教え、交流を持ったが対等な友人としての付き合いだった。指導という経験が無い以上、未央の抱いた不安は当然のものだ。

未央の不安を読んだように、相手は「ですので」と前置きをつけて続ける。

「貴方には、主人公が生まれる前に転生していただき、経験を積んだ上で、主人公の保護者役を努めてほしいんですよ」

「なるほど……相応に苦労しろって事ね。それで、他に何かある？」
テンプレ展開といえ、YES連打して重要な情報をもらい忘れる可能性はある。

生前も本に熱中しすぎて看護師の質問にYES連打して、不健康判断を食らって食事抜きになった事は一度や二度ではない。食事抜きは辛い、ましてや新しい生を授かる時、聞き忘れがあっては事だ。主人公ではなく自分の人生がハードモードになってしまふ。

問いの答えは、すぐに返ってきた。

「では、貴方の転生について、ご説明させていただきます。まず、体力はあちらの世界の標準に合わせて設定されます。あちらの世界は魔法がありますので、魔力についても同様に標準に合わせてます。まあ、成長限界は設けませんので、鍛えれば鍛える程、能力はあがりますよ」

「ふむ、最初から無敵だと、指導に支障が出る可能性があるものね。他には？」

「もしかしたらお察しかもしれませんが、転生される方には一つだけ希望の能力を与える事になっています。どういった能力をご希望されますか？」

やはりというべきか、テンプレ展開だ。

与えられる能力は一つ、汎用性のある能力にすべきか、特化した能力にするべきか。

既に魔法のある世界なのだから、ある程度はそちらでフォロー出来るのではないか。

どうせ転生するのだから少しは優遇されてもいいと思い、浮かんだ中でも万能な物を希望する

「概念を司る能力、って出来るかしら」

「概念……ですか？ ああ、この本の能力ですか？」

相手は、背後からまたしても本を取り出す。

随分と便利な能力ねえ、羨ましいわ。あれがあればどんな量の本でも持ち運び自由……！

取り出した本をまたしてもこちらに放り投げる。ゆっくりと滞空してきた本は、手に収まると同時にズシリと重さを主張してきた。本のタイトルは「終わりのクロニクル」と言う。

「そうそう、私この作家の大ファンなのよ」

「わかります、実は私も大ファンです」

「……神なのに!？」

転生の話より驚いた。思わぬところで同好の士を得た事に感動し、少々作品について語り合う。

小一時間ほど語り合った後、相手は二つ返事で少女の申し出を快諾する。

「あちらの世界に賢石はありませんので、貴方の好みの形態で概念を適用出来るようにしておきます。」

使い方は、あちらの世界で試してください。それとブレン先輩は私の飼い主です」

「引くわ、このドM野郎……！ まあ、了解したわ。飛ばしていいわよ。いや、最後にこちらから希望があるわ」

相手は話を最後まで聞かずに答える。

「わかっていますとも、新刊が出たらお送りします」

同好の士である相手の言葉を聞き、最後の憂いが無くなった事を
確信した。

同時に自分の体が光に包まれ、浮遊感を得る。
瞬間、意識が暗転した。

第一話

意識を取り戻して目が覚めた時、視界は緑と青に染まっていた。ぼやけた頭を振り、上体を起こして周りを見ると、左右は木に囲まれており、上を見れば木の葉と空が見える。今だ覚醒し切らない頭をフル回転させ、現状を把握しようと思考する。

寝ぼけている脳が必死に考えた末、結論が出た。

「森に出たのね、本物の木は初めて来るのだけど多分間違いないわ」

本で読んだ知識によれば、森の空気は体に良いらしい。一度、思い切り深呼吸してみると、木の香り、葉の香り、土の香り、今まで経験した事の無い感覚が飛び込んできた。

落ち着くわ。

初めての感覚だが、そう思う。病院では経験した事の無い自然の香りだ。よくよく考えてみれば、本は木から出来るのだから、自分は以前も木に囲まれて居たと言ってもいいのではないか。

つまり私は森の申し子……！ いや、流石に妄言かしらね。

思いながら、まずは自分の体を確認する。視線の高さから察すると、どうやら幼くなっているようだ。

大体130cm程度だろう。記憶が正しければ、10歳くらいの時にこれくらいだった。

顔の造形や髪・瞳の色がどうなっているかは、自分では見えない。美醜には余り頓着しないが、相手に警戒心を与えない容姿である事を祈るばかりだ。テンプレ展開を好む神だったので、あまり奇想天

外な事はしないと思うが、万が一悪鬼羅刹のような顔だったら困る。手で顔を撫でて造形を確かめてみるが、恐らく変ではないだろう、と思う。少なくとも角や牙は生えていなかった。

次に体の調子を確認すべく、意識を向ける。

前世で常に体を覆っていた倦怠感や痛みが無い。それだけで随分救われる。両親に恨みは無かったが、やはり痛いものは痛かった。痛みが無いと、前世で出来なかった事を試してみたい欲求に駆られ、少し走ってみる。右足、左足と踏み出し、そのまま加速に乗る。10歳の体という事もあり、あまり速度は出ないが、それでも走っている。前世では走り出した途端、全身に痛みを感じてそのまま倒れたが、この体ではそれが無い。それだけで、心が軽い。幾らでも走っていけそうな高揚感を感じるが、今は現状確認を優先すべきだ。

逸る心を抑えながら、改めて体を見ると、次に気づいたのは服装だ。

緑のワンピースに、濃い緑のローブを羽織っている。凝った衣装ではなかったが、十分だ。

追記しておく、勿論下着もつけてる。

人の目が今は無いと言え、流石に全裸は困るので、この服装は有り難かった。

しかし、何故緑で統一されているのだろう。

まさか、ステルス迷彩です、とか言い出さないわよね、あの神。

偶然だろうと思う事にした。

最後に、以前の世界ではなかった魔力と能力について確認する。魔法が使えれば、灯りをつける事や身体能力を強化する事が出来る

為、今後の生活に役立つだろう。いざ使おうと考えるも、ここでも壁に当たってしまった。

魔法って、どう使うのかしらね。

あまり熱心に原作を読んでいなかったが、確か自分なりの呪文詠唱があつた後、使う呪文の詠唱があつた気がする。適当にやれば発動するかもしれないが、大惨事を招く可能性もある為、魔法については保留とした。

そして、概念を司る能力を確認しようと、目の前に聳える巨木を見る。指を木につけ、そのまま文字をなぞると、自分の指に添うように青白い光が文字を作った。

【・ 思いは通じる】

原作では【人の思いは通じる】という概念で、思いが通じている人間の意思が交換されるという変わった概念だったが、相手は人ではない上にそういった効果は期待していない。人を削って文字を変え、こうすればテレパシーのような効果が得られるのではないかと想像して、実際に試してみた。仮にこれが成功すれば、自分の力は概念の創造も兼ねている事になる。

「もしもーし、木の方。応答願います」

声をかけた後、ふと自分の行動を思い返してみる。

木に文字をなぞり、いきなり親しげに声をかけている。

これで反応が無かったら、だいぶアホね私。

応答がある事を願うばかりだ。期待と不安に胸を高鳴らせていると、低く響く声が直接心に語りかけてきた。

(これは驚いた……お嬢さん、わし等と意思が通じるのかな)

巨木からの応答があった。月日を重ねた巨木に相応しい落ち着いた声には驚き、応答せねばと焦って声を出す。

「試してみたのですが、成功するとは……！」

(お嬢さんも通じるとは思ってたのかね、ハッハッハ)

正直な感想が口に出た。巨木からの笑い声が心に響く。笑っている巨木の反応で、ふと嫌な想像をしてしまう。

木でも感情とかあるのねえ。バシバシ切ってる時、実は地獄絵図なのかしら……。

想像すると、あまりの凄惨さに鬱気味になる。しかし、そういう時ではないと思いついて巨木に問いかける。

「ん、失礼しました。実はこの辺りの地理に疎いもので、人里の方角を教えてくださいませんか？」

(良いとも、では木のざわめく音を辿るといい)

回答と同時に、目の前の巨木、その左の枝から音が聞こえる。それを少女が確認すると、その向こうの木、更に向こうの木と、木々のナビゲートが連鎖していく。

当初は呆然と見ていたが、気を取り直して走り出す。

「ありがとうございます」

感謝の答えか、文字をなぞった巨木からは思いの声ではなく、一
際大きなざわめきが聞こえた。

木々のナビを受けて走りながら、概念能力の試験を行った。まずは、主な使い方となるであろう空間への概念適用からだ。

【・　ものは下に落ちる】

概念を口に出しながら、走っていく方向を下と設定すると、確かに走っていく方向へと落ち始めた。垂直落下同然に加速しはじめ、足が地面に取りられて転びそうになるも、地面に向かわずに下と設定された空間へ落ちていく。

「おおああああ!？」

目の前には既に木が聳えており、このままでは木に墜落してしまう。慌てて概念を取り消すと、地面に落下する。加速がついた分、地面を削りながらも木に激突する前に止まる事が出来た。しかし、服が汚れて顔を少々すりむいてしまった。思わぬ所で転生後初の怪我をしてしまったが、今後の教訓として覚えておこう。再び走り始めながら、この結果について思う。確かに結果として、概念は適用されたが、よく考えると適用範囲を設定していなかった。まさか全世界に適用された訳ではないだろう、そう思いたい。

いやでも、もしよ？先ほどの数秒、全世界に適用されていた

らどつしよつ。

嫌な考えが浮かび、額に汗が浮かんでいる事に気づく。
袖でふき取り、無い無い大丈夫へっちゃら、と自分を誤魔化す。

でも次から適用範囲もちゃんと設定しましょうね。

時折休みながら、長い間森を走り続けていた。

視界に森の終わりが見えた頃には既に日が落ち始めているが、森が終わると今度は草原が広がっており、民家は見当たらない。途中から走る事が楽しくなったので気にしていなかったが、そういえば野性動物の類も見かけたような気がする。野営の知識は無いはない。前世で読んだ本には、野営教本のようなものがあった。乱読派だった自分を褒めたいところだが、実地で試した事はなく、この世界で通用するかは大変怪しいものだ。

さて、どうしたものかと周囲を改めて見回すと、焚き火の明りを見つける事が出来た。この地域がどこかもわからず、住んでいる人間の知識は無い。

そう思っていると、お腹から空腹であると抗議があった。空腹を自覚すると、少々の人恋しさも感じる。考えていてもお腹は満ちる事は無い。意を決して、焚き火に近づく事にした。

焚き火の主は、白いローブを羽織った男性だった。背後に置かれた背囊に、杖が取り付いてある事から魔法使いなのだろうと思う。赤い髪の毛に、ぱっと見て温和な人と感じられるような顔立ちをし

ており、いきなり現れた自分に笑顔を向けた事からも、その印象が間違っていない事を思わせる。

思わず、ほっと息を吐き出す。

「すみません、道に迷って……休ませてもらってもいいですか？」
「勿論だよ、お嬢さん」

許可をもらい、焚き火に歩み寄り腰を下ろそうと屈んだところで膝が落ち、尻餅をついてしまう。

思ったより疲れているわね、少しはしゃぎすぎたわ……。

焚き火の温度が体を優しく温めていく。前世の病院で感じた暖房とは、暖かさの感じが違うものだ。走り続けた疲れもあり、船をこぎ始めるが、視線を感じて顔をあげると、焚き火の主である男性がこちらをじっと見ていた。

「ふあにかあ？」

迂闊にも、欠伸と同時に声をだした。しまったと思い、口を押さえながら相手を見ると微笑を浮かべており、

「いや、こんな場所に女の子が一人でどうしたのかと思ってね。迷ったのなら、うちの村に案内しようか？」

助かる申し出だ、しかし、即答するのはあまり好ましくない。この男性も目的があり、ここに来ているのではないだろうか。それであれば、自分を連れていく暇など無いはずだ。

そう思っていると、男性はこちらの意図を読み取ったかのように、苦笑しながら告げる。

「遠慮する事はないよ。僕も同じ位の子供が居るからね。森に自分の子を置いていく親にはなりたくないんだ、どうかな？」

「本当にいいんですか？」

「子供は遠慮するもんじゃないさ。まずは休むといい、少ししたら村に案内するよ」

助かります、と声を作ろうとしたが、口がうまく動かない。安心したせいか、眠気が強く意識を引っ張っていく。細くなっていく視界で相手を見ると、背後に置いていた背囊から毛布を取り出して、こちらに持ってきている。

お人好しな人なのね。

そう思いながら、眠気に身を任せた。

安心したのか、少女はすぐに眠りについた。持ってきた毛布をかけ、自分も腰を下ろす。森から子供が一人で出てきた時は驚いたが、それ以上に思う事がある。

こんなに疲れて、可哀相に。

少女は随分深い眠りについているようで、身じろぎ一つしない。そっと支えながら、背囊を枕代わりに横に倒す。起こしてしまわないよう、そっと頭を下ろしながら少女を見ると、あまり見ない容姿である事に気づく。黒い髪に黒い瞳。この地方ではあまり見た記憶

がない。だからこそ、嫌な想像もしてしまう。

不吉な子として、村から追い出されてしまったのかな。

そう思うと、先ほどの子供らしからぬ遠慮にも納得してしまう。事情を聞かずに憶測を重ねるのは、相手にも失礼だ。しかし、思わずにはいられない。家で待つ息子の笑顔を思い、自分の判断は間違っていないという思いを強くする。

少女が起きたらおぶって連れていこう。そう思っていると、森の奥から木々のざわめきが聞こえてきた。そのざわめきは、少しずつこちらに近づいてくる。立ち上がり、目を凝らして奥を見ると、何かが近づいてくる。森の奥は暗く、はっきりとした輪郭は見えないが、間違いなく人ではない。恐らく、森に生息する獣だろう。焚き火に土をかけ、火を消しながらゆっくりと少女を背中におぶる。この一帯で倒せない獣は居ないが、今交戦しては少女が危険だ。背囊から魔法の杖だけ取り外し、他は置いていく。音を立てないように慎重に距離を取ろうとするが、木々のざわめきがどんどん近づいてくる。少女が起きるかもしれないが、追いつかれては意味がないと思ひ、駆け出した。

心配を他所に、少女は駆け出した後も眠り続けている。良かったと思つ反面、深い疲労を心配する心がある。その心配も、背後に迫る獣。大型の狼を振り切らない事には、無意味な事となる。更に速度を出すべく、前に姿勢を倒しながら、勢いに乗る。

背後から、狼の唸り声が聞こえる。

走り負けるわけには行かない。背中で眠る少女の為にも。

思いを強くして、地を蹴る足に力を込める。背に人を背負うハン

デをおっているにもかかわらず、体は意思にこたえて加速していく。

振動で、ふと目を覚ました。目に映ったのは、赤い髪。自分の腰に手が当たっており、背負われているのだと気づく。自分を背負っている男は、大きく前傾しながら走っていた。自分を抱える手に力が籠っており、男の思いを感じる。息を荒くしながらも、自分を抱える手の力は微塵も落ちない。地を蹴る足は、立ち止まる気配を見せない。何から逃げているのか背後を見ると、茶色の毛並みを持った狼が少しづつ迫っているのが見えた。

やっぱり善人なのね。

恐らく自分を唸り声を上げながら迫る狼は、自分達に10メートル程度しか離れていない。見ている間も、少しづつその牙を近づけている。この男性の脚ならば、自分を置いていけば本来逃げ切れているだろう。それをしない男性の為、思う。

後悔は、させないわ。

自分と関わった事を、後悔させたくない。救えなかったと思わせたくはない。自分のせいで怪我をさせたくない。そう思うと、心に闘志が沸いて来る。まだ魔法は使う事が出来ない、使うならば概念能力だ。

今の状況で攻撃に移れる物を考えると、最も応用の利く能力を思いついた。

(半径100mに、概念を展開！)

【・ 文字は力を持つ】

「!? 起きてたのかい!？」

男性が驚いているが、返答している暇はない。自分を包んでいた毛布を取り、文字をなぞる。

【鋭い投刃 狼さん大当たり】

文字をなぞり、10歳の小さな体で精一杯の力を込め、毛布を剥ぎながら投擲する。投擲された毛布は金属のように風を裂きながら狼に向かう。真っ直ぐに狼へ向かう毛布を、狼は右にステップ、それだけで2mは横に移動する。毛布は狼の真横を通過、背後に回る。狼がこちらを睨み、不敵に笑ったように感じるが、

甘いよ、この犬ツッコロ!

大当たりな毛布は狼を逃がさなかった。加速を持って通り過ぎた毛布は、その勢いを更に増して方向転換、狼を背後から襲う。

「……………」

毛布がまるで金属の刃のように、狼を横一文字に切り裂いて命を刈り取る。役目を果たした毛布は狼を切り裂いた勢いのまま、地面に突き刺さる。それを確認し、男性に声をかける。

「もう止まっても大丈夫ですよ」

「君は、一体……………」

男性は、突き刺さった毛布を見ながら呟く。その声には単純な疑問だけが含まれており、疑いの感情が無かった。自分を相変わらず抱えており、手を離す気はないようだ。

此処まで人を疑わないと、善人というよりお人好しね、親の顔が見たいわ。

恩人に向かって失礼だとは思いますが、そう思う。流石に概念能力といても通じないと思い、少々罪悪感を持ちながら嘘をつく。

「ちよつと変わった魔法を使えるんです」

そう答えると、男性はなる程と首を縦に振った。

どこまでお人好しなのやら、そう思いながら再び眠りについた。

第二話

目を覚ますと、白い壁が目に入る。一瞬、また死んだのかと思うが、所々に見られる汚れや、自分にかけられている毛布から、そうではないと気づく。

つまり、これは、

「知らない天井ね」

呟き、心の中でガッツポーズを取る。

決まったわ。

転生系二次創作のお決まりを踏襲したところで、少女は改めて自分の状況を確認する。

服はきているが、ロープは枕元に畳んでおいてある。部屋を見渡すと、自分が寝かされていたベッドの他には、椅子と机が置かれており、机の上には水差しとコップが置かれている。

水差しに注がれている水を見ると、自分の喉が潤いを欲している事に気づいた。勝手に飲んでもよいものかと悩んだが、あまり遠慮しすぎるのも相手に失礼になると思う。

水差しのある机まで移動しようと、ベッドの脇に揃えてあった自分の靴に足を通す。立ち上がると、膝が笑い、太股に筋肉痛が走る間違いなくはしゃぎすぎだ。前世で走り回る経験が無かったとはいえ、今後は自重しよう。

水差しを手に取り、持ち上げようとすると腕まで筋肉痛である事が確認出来た。高笑いしながら走りまくった昨日の自分に恨みの念を飛ばしながら、コップに水を移し、一息で飲む。潤いを得た喉は安心とばかりに、ふう、と言葉を押し出す。

ふと、ドアノブが回る音と、ドアの開く音がする。
振り向くと、森で出会った赤毛の男性が入ってきた。助けられたお礼と、水のお礼をしようと少女は男性を見る。

「すみません、水を勝手に頂いてしまいました。

助けて頂いて、ありがとうございます」

「水は君の為に用意したものだからいいんだよ、それより体に痛むところはないかい？」

「筋肉痛がひどい位で、怪我はありません。

何から何まで気を利かせてもらって……」

重ねてお礼をすると、男性は当然の事をしたまでと、笑顔を作る。その笑顔を見る自分までも笑顔にさせてくれる温かいものだ。

天然の女たらしね、自覚が無いあたり女泣かせに違いないわ。恩人を相手にあんまりな評価だが、こうも思う。

同時に酷い鈍感に違いないわ、主人公属性ね。

そう思い、自分の調子が戻ってきている事を自覚する。心の中で冗談が言える程、余裕が出てきているのだろう。それも、目の前の男性のおかげだ。

「それはそうとお嬢さん、名前を伺ってもいいかな。

いつまでもお嬢さんでは失礼だろう、僕はノギ・スプリングフィールドだ」

あれ？スプリングフィールドって主人公の名字じゃないかしら。

よくある名字なのだろうか、しかし赤毛という特徴も一致する。しかし、原作にノギというキャラクターは居なかったはずだ、と記憶を探ろうとするも、今はその時ではないと思ひ直す。

「私は、未央・柳ミオヤナギと言います。
改めて、スプリングフィールドさん、助けていただきありがとうございます
うございました」

お互いの名を交わし、未央は改めて感謝の為、頭を下げる。

ノギと名乗った男は、未央の感謝に困ったように頬をかく。彼にとつては、未央を助けた事は当然であり、ここまで感謝されては背中がかゆくなる。

未央は感謝を重ね、ノギはそれに遠慮する事で話題は硬直していた。

本当に助かりました、いやいや当然の事をしたままで、そんなやり取りが続く中、乱入者の来訪をドアが告げる。

「親父ー、たっだいまー！ 今日学校は暇だったぜ！」

ドアの向こう、おそらく玄関から声が響く。声の感じから、相手は少年、ノギの息子なのだろう。

ノギはこちらを見て、息子を紹介したいのだが、どうだろうと、声をかける。拒否する理由も無い為、未央は首を縦に振り、肯定の意を返す。

ノギがドアの外へ向けて声をかけると、床をたたくような足音で少年が近づいてくる。そんな足音を聞き、元気がいい男の子なんだろうと思う。

ドアから、赤毛の少年が顔を出してこちらを見る。未央と目が合うと、

「なんだよ親父ってあんた目覚めたのか！ よかったな！ ところであんたの髪の毛珍しいよな生まれつきなのか？ っていうか名前聞いてなかったよな！ 俺はナギ・スプリングフィールドだ！ 宜しく頼むぜ！ しかしなんで森なんて居たんだよ親父がいなかった

らあぶなか」

「ナギ、ちよつと待ちなさい。彼女が混乱してるよ」

……………はっ！台風のような奴ね、こいつ。私を一時とはいえ呆
けさせるなんて、やるじゃない。

数秒で質問を重ねまくってきた、少しはターン制という偉大な概
念を理解すべきね、と思いながら、返答を考える。

「えつと……………まず髪は生まれつきよ、名前はミオ・ヤナギ。森には
居たくて居たわけじゃないわ。」

レディに相對するマナーがなっていないわよ、ナギ」

「ミオか、宜しく頼むぜ！　いつまで居るんだ？今から遊びに行く
から付き合えよ！」

「こいつ話聞かないわねえ、とりあえず今は筋肉痛で動きたくない
から、遊びには付き合えないわよ」

「ええー、しょうがねえなあ。じゃあ俺が庭で魔法の練習するから
それ見てろよ！な！」

「ちよつと筋肉痛で動きたくないっていつて、ちよ、引つ張らない
でよ！筋肉痛に響くのよ！？」

ナギは相手の言う事を気にせず、未央の手を引いて外に走り出し
ていった。まるで台風のような。ノギはそう思いながら、二人のや
り取りをじつと見守っていた。

うちのナギに、良い友達が出来たようだ。出来れば、長く滞
在してほしいな。

庭から響く悲鳴を聞きながら、苦笑しながらもそう思った。

第三話

ノギから良ければしばらく滞在しないかと誘われ、是非にと返事をしてから既に一ヶ月の時間が過ぎていた。

未央はスプリングフィールドの家で家事を手伝いながらも、自分の概念を司る能力のテストしていた。その結果として、いくつかの事実を確認する事が出来た。

まず、世界法則を書き換える概念（例としては、【ものは下に落ちる】）は、展開範囲を設定しない場合、未央を中心として半径10m程度に展開した後、範囲を広げていく。

10秒で5m程度、距離を設定すればどれだけ時間が立とうと範囲を広げる事はなかった。更に、展開させる空間形状は選択する事が出来た。

自分を中心にするのではなく、前面に円柱状の概念を展開する事も出来る為、利用用途は多岐に渡るだろう。

次に、対象を指定して適用する概念（毛布を投刃としたもの）は、少々変わった取り扱いが出来る事が判明した。本来、この概念は【文字は力を持つ】概念下でなければ効果を発揮しないが、未央が扱う場合はその限りではない。つまり、【未央の描く文字は力を持つ】概念が常に発動している状態だとわかった。よく考えれば、一番最初に木と交信した概念もこれであり、狼戦で【文字は力を持つ】概念を展開したのは無駄だった事がわかった。

何かに名前を書く時は、注意しないと名前を書いたものが自分になつてしまつかもしれない、注意しようと未央は思う。

最後に、これらの概念は未央の意識が途切れると効果を失う事がわかった。

眠る前、水入れに【お湯の入れ物】と文字をなぞり、起床して水を確認すると冷たかった。概念を維持したい場合、気絶や魔法による睡眠を防ぐ事が課題と分かる。

しかし、こんな能力を代償無しに使用出来るなんて、チートキアラね。

そう思いながら、未央は木の棒を引きずり家中を徘徊する。

この木の棒には【ダニや埃を吸い付ける】という概念を刻んでおり、掃除機の代わりとして大変便利だ。掃除が済むと、衣類の整理に移る。こちらは衣類に【いつでも清潔お日様の香り】と文字をなぞると、そうなる。

便利すぎる……！ 恐ろしいわね、概念を司る能力……！！

家中の掃除と衣類の洗濯をものの1時間で済ませる未央、世の主婦が聞いたらお取り寄せの番号を手に入れようと躍起になるだろう。一家に一人！概念家政婦未央！今注文するとメルディアナ魔法学校最大の問題児もセツトで！

閑話休題、家事が終わると、未央は自己鍛錬を始める。

基礎体力をつける為、近隣を走る。当初は近所のおば様方から距離を置かれていたが、今では手を振り挨拶を交わす仲だ。

ランニングが終わると、魔法の鍛錬に移る。ナギに駄目元で魔法教本を貸してほしいと頼んだところ、初心者用の杖ごと貸してくれた。曰く、俺はもう自分の杖があるしな！教本も読まないからやるぜ。との事。その割に、庭で見る魔法の練習では、あんちよこを見ながら詠唱している。

詠唱くらい覚えなさいと何度も言ったが、改善する気は無いよう

だ。
未央自身は、火を灯す魔法から初め、それなりの速度で成長していた。本から読み取る自主学习では、こんなものと日々訓練に励む。

訓練が終わり、夕食の支度を始める。

ノギは、立派な魔法使いだったようで、毎日あちこちへ飛び回っている。ナギは日中学校に行くが、すぐに戻ってくる日も間々あった。

当初は料理が出来ない未央だったが、またしても概念で解決した。【煮込むと食材が美味しくなる鍋】である。

一ヶ月で、未央はもはやスプリングフィールド家にとって欠かせない家政婦となっていた。

そんなある日の事である。

珍しく日の落ちる前に帰宅したノギが、未央にメルディアナ魔法学校への編入を勧めて来た。

「え、え？　なんでですか？」

「いや、校長とは知り合いだね。先日世間話で君の話をしたらとても興味深いとおっしゃってね。」

奨学金の手配は出来るから、良かったら通わないかい？」

「いえ、確かに魔法学校に興味はありますけど……」

「そこまで迷惑をかけられないって？　迷惑なんかじゃないよ。よく家の事を手伝ってくれるし、正直娘が出来た気分だからね。だから、どうだろう、ナギと一緒に学校に通って見ないかい？」

真性の主人公属性、スプリングフィールド一族の血だったのね。

やれやれと、そう思う。10歳の体でなければ、口説かれている

のかと勘違いしてしまいそうだ。

そうまで言われて、断る理由も無く、未央は魔法学校への編入を快諾した。

そして、さらに一ヶ月ほど時間は流れる。

教室の窓から、日の光が差し込んできている。窓際の生徒はその光を存分に浴びており、ある生徒は眩しそうに、ある者は良い暖房と机にうづくまっていた。

メルディアナ魔法学校のとある教室で、未央は教本に没頭していた。中身は英語だ、前世では洋書を読む為に勉強していた為、読めなくて困るという事はない。

本を読む事を何よりも好む彼女は、魔法学校から支給された教本をひたすら読みふけていた。

微笑を浮かべながら、本を静かに読む彼女の姿はなかなか映えるものであり、人気が出ていてもおかしくはない。

おかしくはないのだが、彼女の周囲にある机には誰もおらず、近寄る生徒も居ない。

その理由は二つある、その一つが今廊下から現れた。

床の耐久度など考えない速度で走ってきたソレは、未央を見つけると、その速度を維持したまま突撃を敢行する。進路上に居た生徒は避ける事に必死だ、なにせ直撃すれば途方も無い魔力に任せた魔法障壁で吹っ飛ばされる。最大最強の問題児、ナギ・スプリングフィールドが度々彼女を訪ねて来る為、巻き添えを恐れた生徒は近寄る事を避けていた。

進路上の机や椅子を吹き飛ばしながら、ナギは未央に向かう。それを見た未央は、読んでいた本に頬を挟み、やれやれと立ち上がりながら、迎え撃つ。

本に指を這わせ、何か文字を書き込むような仕草をする。

「ミオオオオオオッウブハア！！！」

「やかましい、黙りなさい、静かにしなさい、口を閉じなさい」

迎え撃ったミオは、相手の進路上に分厚い教本を構え、背表紙で容赦なくナギを打撃する。

背表紙で容赦なくナギの顎をかち上げる。背表紙による迎撃を受けた顎を支点として、運動エネルギーを保持した足はそのまま逆上がりをする。結果として、ナギの後頭部は床で快音を鳴らす事になった。ナギの魔法障壁を容易く貫いた本は、概念によって強化された概念兵器だ。書かれた文字は【魔法は通じない】、魔法の教本はこの文字を書かれて、果たしてどのような思いを持つのか。

「いつも言ってるでしょ。私の読書を邪魔すると容赦しないわよ。返事が無いわね、聞いてるの？反省してるの？」

倒れたナギに追撃の口撃を加える。ちなみに、返事をしないのは気絶しているからだ。

彼女に生徒が近寄らない理由の二つ目がこれだ。普段は愛想も良い彼女だが、読書の邪魔をすると悪鬼羅刹に変化する。その迫力たるや、一部生徒の間では「闇の福音」のようだと恐れられている。その反面、ナギを抑える事の出来る唯一の希望と教員からは認められていた。

一ヶ月前にこの学校へ編入されたばかりだが、未央は既に確固たる立ち位置を得ていた。

ナギは気絶から復活すると、即座に立ち上がり、未央に言う。

「授業が退屈だから遊びに行こうぜ」

「嫌よ、あんたと違って私は凡人なんだから、教育必須なのよ。」

折角だからあんたも付き合いなさい、ノギさんから宜しく言われているのよ」

「面倒くさいからことわ」

「夕飯抜くわよ」

「付き合っぜ！」

未央が学校に編入してから、ここまでのやり取りが慣例となっていた。

ナギは未央が隣に座っていれば、黙って授業を受ける。

そのうち、ナギのクラスがいつの間にか未央と同じクラスとなり、授業の進みが良くなったと教員の方々は大変安心したそうだ。

行動を共にする時間が増えると、必然的に未央とナギの体力差が問題になる。当初は未央にあわせていたナギも一週間程度で急かすようになり、さらに一週間経つと、こんな事を言い出した。

「ミオ！ 放課後は俺と武術の訓練しようぜ！」

「ふむ、いいわよ」

既にナギは瞬動どころか虚空瞬動すら使いこなしている。一方未央は瞬動はおろか、基礎体力すらナギの足元に及ばない。

ただ走るだけの訓練では限界もあり、素直に申し出を受ける事にした。

家の庭で、ナギはあんちよこを持ちながら、

「御生徒の未央、本日よりあなたの訓練教官を務めますナギ・スプリングフィールドだ。」

先生、難しい事は言わねえ。先生が何か言ったら、『はい先生』イエス・ティーチャーと答る」

「はい先生！イエス・ティーチャー 質問よろしいでしょうか！」

「質問は許可してねえけど最初だしいいや、なんだ」

「何そのチンピラとインテリが混じったような喋り、キモいわよ。正気？っていうかそのあんちよこ何よ」

「これは親父に未央の稽古相談したら渡されたメモだ、こっぴどく書いてあるぜ。」

あと稽古メニユーも書いてある」

近寄ってみると、確かに書いてある。

未央は、ノギの評価を「底抜けのお人好し、ところにより変人に修正する。」

「まあわかったわ。じゃあ始めてちょうだい」

「おうよー！」

そして、訓練が開始されて1時間が経過する。

甘かったわ！

ナギの稽古は予想以上に本格的なものだった。今までの走る量を倍にして、さらに体術の稽古が入る。

姿勢、足の運び、呼吸法すら1から叩き直され、肉体的な疲労は勿論、精神的な疲労が溜まる。

「どしたどしたあ！ もうグロッキーか！？ まだいけるだろう！」
「はい先生！^{イエス・ティーチャー} どんときなさい！」

……好意を無駄にするわけには行かないわね！
心を奮い立たせて、稽古を続ける。

こうして、ミオは学校で魔法を学び、放課後はナギと武術の稽古
をつけてもらう事になった。

半年後、ナギが学校を飛び出す時まで。

第四話

日の落ちかけた森で、打撃音が鳴り響く。

空を飛ぶ二つの影が、時折交差する度、連続した打撃音が鳴る。影の片方は雷の槍を展開し、投擲する。もう一つの影は、雷の槍に対して回避を選択。腰かけた杖に、力強い光が宿る。瞬間、速度を得た影が槍の穂先から逃れる。逃れる為に高度を上げた影は夕日に照らされる。

未央だ。

急上昇で高さを得た彼女は、槍を回避した勢いのまま、旋回する。その速度は、もはや並の魔法使いでは追従すら許さない。

7ヶ月に渡る魔法学校での生活で得た知識と、ナギとの稽古で体に染み付いた武術は、現時点でナギに追従する程に高まっていた。

「どういってもりよ、ナギ！」

相対する影に叫ぶ。叫びを無視するように、魔法の矢を出しながら上昇して、ナギは未央に迫る。

未央は、同じように魔法の矢を展開し、下降しながら未央はナギに迫る。

接近すると、両者の魔法の矢が、各々の拳に寄り添う。未だ、身体能力はナギに劣る未央だが、高所からの下降を利用した速度により、力を上乘せする。交差する瞬間、魔法の矢を纏った両者の拳が突き出される。破裂音が鳴り響き、周囲に衝撃の余波が撒き散らされる。

速度を持って力を上乘せした未央に、ナギは生来の魔力量と才能で拮抗する。

「魔法学校を中退するなんて　　！！！」

改めて、未央はナギに問う。

魔法学校を辞める、夕飯の食卓でナギはそう言った。ノギは理由を問い、ナギはこう答えた。

どうしても今やりたい事がある。旅に出るんだ。

ノギはその答えを得て、好きにやりなさいと、そう答えた。

親子の会話にしては、あまりにも簡素なソレに未央は食ってかかった。

まだ10歳の子供が一人旅なんて、認められるわけないじゃない！

やりたい事とはなんだと問う未央に、ナギは首を振るばかりで答えようとしない。

普段、ナギはこういった反応をしない。トラブルの理由も未央が聞けば、笑いながら答え、未央が頭を抱えてノギが笑う。

それが、この半年の日常だった。前世で得られなかったものを手に入れたようで、口にはださずとも、未央はナギにも感謝していた。しかし、この少年は今、その日常から離れようとしている。

それを止めるのは、未央の我俣だ。自分でもそれはわかっている。わかってはいるが、

やめてほしいと。まだここに居ようと。言わずにはいられないのよ！

前世でこんな思いを得た事は無かった。面会に来た親を引き止めた事も無い。

ノギに拾われ、ナギと学校生活を送り、三人と食卓を囲む。

作った料理を美味しいと言われ、明日の予定を話し合う。そんな日常に甘えていた。

ナギの旅立ちは原作でも重要な点だ、変更する事は出来ない。

しかし、自分の感情はそんな事はお構いなしとばかりに、叫ぶ。

行かせるな、まだ大丈夫だ。まだここに居ていい。

こんな事は初めてだ、そう思い、自分が感情を持って余している事に気づく。

結局、二人とも引かずに喧嘩がエスカレートして、今の状況に至る。

拮抗していた拳は、既にナギに押され始めている。衝突の瞬間は拮抗するも、地力の違いはやはり覆る事はない。未央は拳で打ち勝つ事を諦め、手を引く。ナギの拳が迫るが、体を捻り、杖から落下しながら回避する。

空に身を投げ出しながらも、捻った体の勢いで蹴りを繰り出す。ナギの胸に蹴りがねじ込まれ、互いに杖から落下する。

空に投げ出された身で、勢いを制御しながらナギを見ると、既に体勢を立て直して雷の槍を準備している。こちらは未だ体勢が整っていない。

槍が投擲される。直撃コースだ。虚空瞬動、駄目だ、入りのタイミングで着弾する。

つまりは回避不可能だ。そこまで認識したところで、槍が着弾する。

雷撃の衝撃と痺れを得て、未央は落下ではなく、墜落し始める。

魔法と武術じゃ、まだ、勝てないわ。

相手はいずれ世界最強と呼ばれるようになる魔法使いだ。自分のように、未だ魔法使いを初めて一年も満たない人間に勝てる可能性は無い。

勝つならば、概念能力を使う必要がある。しかし、未央は思う。

これはただの喧嘩だ、自分の感情を整理する為の戦いで、他人から貰った力を使いたくない。

改めて気を入れる、墜落する自分を追いかけてくる杖を取り、墜落の勢いをそのまま飛行速度に変える。相手を見ると、こちらを見ながら迎え撃つ構えを取っている。

そう、最後まで付き合ってくれるのね。

ありがたい、ここで止めよう等と言ってきたらそれこそ概念能力で殴り飛ばすところだ。

長期戦に勝ち目は無い。魔力の量も体力もあちらが上だ。

だから、次の一撃で決める為、未央は距離を取る。高度を上げながら、ナギを見る。

雷の槍の展開は終わっているが、投擲してくる気配が無い。

次で最後だと、察してくれているのね。

十分に高度を取り、止まる。自分の出せる最大数まで魔法の矢を展開し、降下を開始する。

風を切りながら、加速を続ける。決着は正面からぶちあたってつけると、お互いの思いは一致している。先の降下より倍以上の加速を得て、さらに杖から虚空瞬動で飛び出す。

自分の出せる最大の速度で、未央はナギで飛び込むように右ストレートを突き出す。

ナギは完全に迎え撃つ形で、未央に合わせるように左のストレートを突き出す。

まず衝突したのは、お互いの魔法。

未央の展開した魔法の矢が、ナギの雷の槍によって消滅していく。しかし、威力は減衰し、未央の魔力障壁を貫くには至らない。

次にお互いの拳が衝突する。速度の乗った未央の拳が、ナギの拳を押し出していく。

「オオ」

ナギの声だ。上空に上がってから沈黙し続けたナギは、

「オオオオオオ!!!」

裂帛の気合を最後の一撃に加える為、吼える。

押し出していたはずの未央の拳が止まる。拮抗状態は無く、ナギの拳が未央を押し込んでいく。

未央はナギの表情を見る。この喧嘩中、彼を真っ直ぐに見る事は無かった。

その表情に怒りの影は無く、ただ真っ直ぐと自分を見ている。

これは、勝てないわね。

ナギの拳が振り切られる。完全に押し負けた未央は、抵抗をやめて、自由落下を始める。

落下の中で、どうしようと思う。自分は、いずれ生まれるネギの保護者役として転生してきたのだ。

正直、最近はその事も忘れていた。目の前の生活に甘え、ただ続けるのもいいと思っていた。

さて、困った。

そう思いながら落下していると、落下の勢いが消える。何かと目を開くと、ナギが居た。

抱きかかえられているのだと気づく。

「ミオ、頼みがある」

ナギは、見た事の無い真剣な表情でこちらを見ている。

「旅に、ついてきてくれないか」

彼は、そう言った。

「親父が、戦争が始まったって言ってた。家に帰る事も少なくなるって。」

人も沢山死ぬし、世界がめちゃくちゃになっちまうらしい。

だから、俺は少しでも親父の手伝いがしたいんだ。

世界を、見て回りたいしな」

学校では、退屈だとイタズラをして暇を潰し、勉強をサボっていた少年は、決意を秘めた瞳で言葉を重ねる。

「ミオが居れば、俺はきつと無敵になれる。辛い現実って奴にぶちあたっても、きつと立ち上げられる。」

だから、頼むミオ。　一緒に来てくれないか」

ともすれば、プロポーズにも聞こえる言葉だ。

誤解を招くわよ、と声に出そうとするも、自分の口は別の言葉を紡いでいた。

「Testament……私は、貴方についていくわ」

第五話（前書き）

「そういえば、さっきのテスト・・・ってなんだ？」

「テストメント、契約するって意味よ」

「契約　ああ、仮契約してくれるのか！
じゃあ帰ったら早速頼むぜ未央！」

えっ？

第五話

月が空に上り、昼の喧噪が鳴りを潜める頃、未央は部屋でナギと相對していた。二人とも床に正座しており、未央はなにやら小刻みに震え、ナギは未央をまつすぐ見据えている。二人の足下には魔法陣が仄かに光っており、部屋をぼんやりと照らしていた。

未央は思う。

ど、どうしてこうなった。

今、二人は仮契約の儀式をすべく相對している。準備は既に出ており、後は唇を重ねるだけというタイミングで、未央から待ったが入った。

いや、いずれ仮契約は結ぶとは思っていたけど・・・

早い、早すぎる。しかもキス形式とは・・・

全てはナギの誘いをああ答えた自分の責任だ。そう思いながらも、未央は踏み切れずにいた。素直に言えば、恥ずかしいというか、照れる。前世ではファーストキスすら経験していないのだ。というか何故ナギはあんなにも堂々としているのだ。納得がいかず、思わず問う。

「ちょ、ちょっとナギ、あんたは照れとかそういうのではないの？」

「そりゃ少しは照れるけど、未央が仮契約してくれるなら嬉しいからな！」

そう答えて、ニツと歯を出して笑う。

自分の頭から、蒸気が抜けるような音が聞こえた気がした。

いかん、反則だ。いきなりジゴロ覚醒してる。
というか私はこんなにも惚れっぽかったのか。

落ち着け、と思う。自分達は未だ10歳だ。ここで仮契約しても、将来心代わりする事はある。だからこそ仮の契約だ。そう、あくまで仮契約だ。原作だとネギが大量に契約していたではないか。うん、OKOK。まだ問題ない。

「よし、いいわよ」

そう答えて、目を閉じる。自分の顔が熱を持っているのを自覚し、心臓が激しいビート音をかきならしている。

目を閉じた結果、耳に神経が集中しているのか、周りの音がよく聞こえる。ナギが立ち上がった音がする。自分の方へ1歩2歩と近づき、膝をつく音。そして、自分の頬に手が当てられる。ナギの呼吸音が近づく。

「いくぞ、ミオ」

わざわざ言うな！死ぬ！早く済ませないと照れ死す

思うと、唇に何か当たる。見えずとも何かはわかる。

ナギの唇だ。

当たると、ナギも軽く震えている事がわかる。

お互い様よ。あんたも照れ死しないと不公平だわ。

「仮契約」

声が響き、魔力が収束する音がする。
唇を伝い、ナギの存在を確かに知覚する。見えずとも、視える。
仮契約の執行により、自分とナギの間を繋ぐ何かが出来た事が感じられた。

『……………ぷはっ』

二人同時に首を後ろにそらし、目線を合わせまいと俯こうとし、互いの額を打ちつける。

『あいたあー！』

またしても二人同時に、今度は悲鳴を上げ、額を押さえながら前を見て、視線を合わせる。

未央は顔を真っ赤にしており、目から涙が出ている。
ナギは顔を真っ赤にしており、しかし口元は笑っている。

未央は何か声をかけようと、必死に今まで読んだ本を思い返す。
ど、どれを参考にしたらいいのか。

迷いながらも高速で思い返すと、自分の脳は恋愛小説を検索結果としてバシバシと弾き出す。

ち、ちがうそうじゃない！違うの！

検索条件に一致するファイルがありません。

馬鹿なー！

「未央」

「は、はい！！！」

ナギに声をかけられ、思わず返事をする。ナギも未だ顔を赤くしているが、笑顔で告げる。

「宜しく頼むぜ」

「ま、任せなさい……………」

かろうじて二言目はいつもの調子で返すも、声色は小さい。未だ心臓の鼓動は激しく、落ち着くには随分かかりそう、そう思っている。

「ではミオ、ナギを宜しくお願いします」

傍らに控えるノギが、そう言った。

一気に頭から血が引き、硬直しながら未央は思う。

何故いる。

理由はすぐに思いついた。

当然だが、キスをしながら魔法の詠唱は出来ない。では、先ほどの仮契約を詠唱・発動したのは誰か。勿論自分とナギではない。

ならば、消去法で回答は出る。

この家に住む三人目、いや、この家の主。
ナギの父親。

お、親同伴でファーストキス!?

プツリと何かの切れた音がして、未央は自分の視界が暗くなっていくのを感じた。

照れの臨海点を突破したのだ。

未央の乙女回路は完全にオーバーヒートを起こし、正気を維持する為、一時撤退とばかりに意識を遮断したのだ。

倒れ込む未央をナギが慌てて抱え、ノギはそんな二人を微笑ましく、しかし少々意地の悪い笑みで見守っていた。

翌朝、目を覚ました未央は、自分の枕元で一枚の紙片を見つける。

仮契約カード。

昨晚の事を思い出すと、再び心臓の鼓動は加速を始めるが、深呼吸する事で対処する。自分のカードを見ながら、これからの事を思う。

大戦に飛び込んでいく、戦争を経験するのだ。
恐怖はある、不安もある。
しかし、

まあ、あの馬鹿と一緒になら、なんとかなるでしょ。

なんとかしていけるだろうと、確信がある。

ナギのサポートとして、やる事は多い。紅き翼のメンバーを探し、悠久の翼を立ち上げる事が当面の目標だ。

自分の気持ちにも整理をつけねばなるまい。なにせ、ネギはアリカとナギが結婚した末に生まれた子供だ。ナギの保護者役として転生した自分が、ネギを消滅させるわけには行かない。

まさか初恋がここまで面倒な事になるとは。

ふう、とため息をつきながら、気づく。

そういえば、中身18歳の自分が10歳のナギに惚れるのは、シヨタコンになるのではないか？

気づいてしまうと、またしても頭痛の種が増える。呻きながら枕に顔を当て、ベッドの上をごろごろと回る。

結局、未央が部屋から出てこないのを心配したナギが部屋に入ってくるまで、未央の苦悶の時間は続いた。

まあ、代わりに痴話喧嘩が始まったのはご愛敬だろう。

喧嘩を終え、スッキリとした表情で居間に下りてくる未央。後ろに続くナギは、なにやら疲れた表情をしている。居間にはノギが控えており、机の上には旅に必要なと思われる背囊やローブが積まれていた。

「おはよう、ミオ。よく眠れたかい？」

「はい、？」

未央と呼ばれた事に、違和感を覚える。ノギはいつも自分を「未央さん」と呼ぶからだ。

疑問に思っていると、ノギが続ける。

「旅に必要な道具は揃えておいたよ。二人とも、最初は麻帆良学園に行くんだ。」

もうすぐ魔法使い達の武道会が開催されるからね、そこで自分達の今の実力を把握するんだ」

「わかったなぜ親父！」

意気揚々と答えるナギ、一方未央は示された目的地に、なるほどと思う。

そこで早々に負けるようであれば、ナギも考え直してくれるだろう。

「それと、仮契約の事、改めて説明するよ」

「あ、ああ。はい、お願いします」

駄目だ、まだ仮契約と聞くと昨晚の事を思い出す。

今回の仮契約は、ナギを主として、ミオを従として契約している。カードの絵柄には、剣、槍、弓、銃など、いくつもの武器が周囲に展開されており、白と青で染まったコートを羽織る未央、その背後に獣のような影が書かれている。

アーティファクト付の契約となるようで、呪文を呟く。

「来たれ！」

光と共に、未央の手中に無色の粘土が現れる。

「何故に粘土？ 武器じゃないのかしら…去れ！」

後程、色々試してみようと思う。アーティファクトである以上、有用な道具のはずだ。

「さて、では二人とも。準備をしようか」

「おう！」「はい」

ノギの声に、二人は応じる。背囊の中身を確認し、ローブに袖を

通す。準備は万端だ。

玄関まで歩き、ノギは二人に送り出す言葉を贈る。

「二人とも、いいかい？」

決して意地を張って、命を危険に晒さない事。

辛い事があつたら、無理をせずに戻ってくる事。

二人の家は、ここなのだからね」

その言葉を受けて、頷くナギ。それを見て、未央は思う。

先日の簡素なやり取りは、心配していないのではなく、ナギの成長を願う心からのものね。

その心が、自分にも向けられていると、そう感じる。

ナギを見ると、瞳を輝かせ、今にも飛び出そうな表情をしていた。それを見て、未央はいつもの通りやれやれと思う。

そして、二人はノギに向けて、声を揃えて言う。

『いってきます！』

すぐに走り出すナギを、未央が追う。

学校の鞆を、旅の背囊に。学校の制服を、旅のローブに変えて、いつもの通り二人は並んで走っていく。

向かうは日本、麻帆良学園。

後に紅き翼となる二人は第一歩を踏み出した。

第六話

麻帆良学園は明治に創立された長い歴史を持つ学園である。

広大な敷地には、小学校から大学までの教育課程を受けられる学
び舎があり、エスカレーター式に進学出来るようになってい
る。また、敷地の中央には樹高270mを誇る神木「蟠桃^{ぱんとう}」、生徒達には
世界樹と呼ばれて親しまれている樹が聳えている。

その世界樹は22年に一度、大発光してその身に溜め込んだ魔力
を放出させる。

麻帆良学園観光案内図書（魔法使い向け） 序章より抜粋

「つまり、武道会はどこでやってんだ？」

「待ちなさい、今それを探してるんだから」

アイスクリームを舐めながら、ナギは傍らでベンチに腰掛ける未
央を見る。未央はガイドブックに集中しており、ナギに視線を返す
事はしない。ナギが未央を見ると、ゆっくりとガイドブックを捲っ
ており、項目を探している手つきではない。

まあた始まった。未央の悪い癖だぜ。こりゃ長くなる。

アイスクリームのコーンを口に放り込み、咀嚼する。麻帆良学園
の広大な敷地に最初は喜んだものだが、いつまでたっても武道会会
場に行けず、未央がガイドブック兼地図を買ってきて今に至る。

未央が本を読み始めると、長い。しかも邪魔すると酷い目にあう。
一年にも満たない付き合いだが、それは身をもって知っている。

口の中のコーンも無くなり、さてどうしたものかと、ナギは周り
を見渡す。

現在、麻帆良祭の真つ最中であり、周りには暇をつぶせそうな催しがいくつもある。武術の催しが見当たらないのは残念だ。

「ミオ、ちょっとろついでくるわ。なんかあつたら念話で呼んでくれ」

「わかったー」

おざなりな言質を得て、オーライと返答する。後の保身を保つたところで、ナギは散策を始める。

学園の部活による出し物や、外部の商店が経営する露店、射的や輪投げといった定番のコースを冷やかしながら時間を潰す。その途中、度々年上の女生徒から囲まれ、走って逃げる事になり、暇を潰すという当初の目的はある程度達成出来ている。

そうやって暇を潰していると、なにやら出店も無いのに人が集まっている場所を発見する。野次馬根性で近づいてみると、チンピラが誰かを囲んでいるのが見える。

そうそう、こついうのを待ってたんだよ！

思うより早く、ナギは走り、人垣をジャンプで飛び越える。チンピラ集団の真ん中に居るのは、メガネをかけ、腰に長物を挿した男だ。

「助太刀するぜ！」

声をかけながら、手前のチンピラの頭に着地し、一人撃破！と言いながら体を回す。左右のバックハンドで手の届く位置にいたチンピラ二人を打撃。三人！その勢いのまま、更に回転して左のチンピラに回し蹴りをぶち込む。周りを巻き込みながら吹っ飛ばすチンピラを見て、ナギは数えるのを止めた。

突然の乱入者に呆けていたチンピラ達は、ようやく気を取り戻し、眼鏡の男とナギに襲い掛かる。

四方から敵が襲い掛かる状況に、ナギは思う。相手から距離をつめてきてくれて助かる、と。

旧世界の街では魔法を隠さなくてはいけない為、杖は滞在する宿に置いてきているが、武術のみでもこの程度の相手ならば十分お釣りが来る。

1分後、その自信が実力に裏づけされたものである事が証明された。

山と重なったチンピラ集団を前に、ナギは眼鏡の青年と相対する。

「サンキュー、おかげで暇潰しになった」

「いや、礼を言うのは私の方だな。あの数は少々面倒だったので助かった」

ナギが手を出すと、青年は握手に答える。手の内側が硬く、剣で長く生きてきた説得力を持っている。腰の長物が伊達ではないのだと、青年の手が主張していた。

先ほどの乱闘の時、ナギは直接青年の戦いを見ては居なかったが、戦闘音とチンピラの傷跡を見れば、自ずと戦闘スタイルを把握出来た。風を切るような硬質の音と、チンピラ達の体にある細い打撃痕。魔力を感じないところを見ると、純粋な剣術使いなのだろうと思う。

「あんたも武道会に出るのかい？」

「ああ、も、という事は君も出るのか。随分幼い いや、すまない。

格闘技に年齢は関係なかったな」

わかる相手だ。自分より小さいからといって、相手を侮らない心

構えが気に入ったぜ。

「おう、武道会でかちあったら宜しくな。

俺はナギ、ナギ・スプリングフィールドだ」

「私は青山 詠春だ。手加減はしないぞ」

互いの名を聞き、ナギは思う。思ったより楽しめそうな武道大会だぜ、と。

眼鏡の青年 青山と別れたナギに、ミオから念話が入る。やっ
と受付が分かったから、合流しよう。こちらもやっ
と進めるよう
だ。急いで合流しようと、ナギは走り出した。

武道会へのエントリーを済ませ、宿に戻りながら、ナギは青山の
事を未央に話す。

「というわけで、なかなか強そうな奴にあっ
たぜ」

未央は、ふむ、と言いながら、腕を組み、

「ぬう、青山 詠春！まさか京都神鳴流の宗家の…！」

「なんだ！知ってるのか未央！」

未央の背後に、いかついハゲが一瞬見え、ナギが目を擦ると幻視
は既に消え去った。

「ええ、京都神鳴流といってね、野太刀といわれる巨大な片刃の剣

を使う流派らしいわ。

旧世界・魔法世界を問わずかなり有名なはずよ、しかも青山といったら宗家、強敵ね」

「く、詳しいなミオ………すげえぜ」

読書担当として当然の嗜みよ、と未央は前髪を書き上げながら言う。

こいつ、調子に乗ってるぜ！　と思うも、口に出す蛮勇を犯さないナギ。

「まあ、なんにしろ、その人と当たったら全力で戦うしかないわね。話を聞けば紳士らしいから、正々堂々あたれば酷い怪我をする事もないわね」

「なるほど、わかった。元々回りくどい戦いは好きじゃねえしな！」

「そうね、あんたバグキャラだものね…。（私は正々堂々こすい手を使うとするわ）」

「そう褒めるなよ未央！」

褒めてないわ、と口と手で突っ込みを入れながら未央は歩く。照れるなよ、と突っ込みを捌きながらナギもついていく。

麻帆良学園一日目、二人は後の仲間となる青山　詠春とのファーストコンタクトであった。

麻帆良学園二日目、二人は早速武道会の受付に向かい、予定表を受け取る。

まず、予選は20名が1グループとなり、バトルロイヤルで2名づつ選出される。

ナギと未央は予選Aグループ、青山 詠春は別グループの為、相対は本選までお預けとなった。

予選Aグループの選手が、続々とリングの上にかかる。

ナギは周囲を見渡し、目を輝かせながら、

「よしミオ！どっちが多く倒せるか勝負しようぜ！」

「どうせ断つても意味無いのよね…ええ、わかってるわよ。精々頑張るわ」

「おいおい、オチビちゃん達、ここはお化け屋敷じゃないんだぜ」

二人に声をかけてきたのは、巨大な体躯を持ち、ヒゲを蓄えた男、明らかにカタギではないツラだ。

「ケガしないうちに帰った方がいいぜ！リングの上じゃタダで帰れないからな！」

そう言い捨て、笑うのはモヒカンで筋肉質の男。こちらもカタギではないツラをしている。

ああ、あれには負けそうにないわ。

そう思う未央。明らかにカタギではない無骨な面構えをした彼らを見て、全く強そうに思えなかったからだ。

単純な体術だけでは、未央は未だナギに勝った事がない。しかし、未央自身も認識していないが、彼女は既にナギに追従する事が可能な腕前なのだ。

最低でも、気を使いこなす達人でも来なければ苦戦すらありえない。

試合開始と同時に、ナギと未央に周囲の人間が飛び掛る。バトルロイヤルである以上、弱そうな相手から狙うのは当然である。

しかし、最初に飛び掛った男は未央の拳にアゴを跳ね上げられ、浮いた体を蹴り飛ばされる。吹っ飛びながら後ろで様子を見ていた男を巻き込み、リングアウト。

ナギに飛び掛った相手は、カウンター一閃で吹き飛ばされており、ボーリングピン宜しく吹っ飛んでいた。

バグキャラめ、と思いつながら未央は打って出る。近い相手から順に、出来るだけ吹き飛ばすようになぎ倒していく。

観客席は呆然としていた。

最初は、大の大人が子供を本気で襲うとは何事だという空気が流れていたが、試合開始直後、その認識は改められた。

子供達が一撃を振るう度、大の大人が紙切れのように吹き飛んでいく。試合開始から1分も持たず、リング上には子供達しか居なくなっていた。子供達に疲れは見えず、むしろお互いが何人倒したのかと元気に言い争いをしている。

今年の麻帆良武道会は、色んな意味で波乱になりそうだと、会場に居た全ての人間は思った。

第七話

麻帆良武道会は、異様な熱気に包まれていた。格闘技の祭典である以上、観客のテンションがアツパーなのは毎年恒例だが、今年はそれを更に跳ね上げる要因があった。

ナギと未央だ。若干10歳の子供が、大人の容易く一蹴し、本選出場を決めた。このニュースは矢のような速度で広まり、普段は格闘技を見にこない客層まで足を運ばせる。

結果として、観客の層は多種多様になっていた。純粋に格闘技の大会を見に来る者。可愛いもの見たさで足を運ぶ者。将来性があるのか見極めに来る者と、各々目の色が違う。

そんな事は露知らず、他の予選を観戦する二人。場内で売っていたアイスクリームをなめながら観戦する様は、仲のいい小学生カップルにしか見えない。

「あー……本選まだかよー……」

「まだ予選が半分も終わってないわよ、相手でも見繕って待ちなさい」

ナギはただの観戦に既に飽きており、齧るようにアイスクリームを消費していく。

一方の未央は、本選に出場する選手をじろじろと観察しており、時折喉を潤す為にアイスクリームを舐める程度だ。

どこまでも正反対の二人だ。

「あら、青山ってあの人じゃないの、ナギ」

「お？ 出てきたか！」

お目当ての人間が出てくると、ナギは途端にやる気を取り戻す。リングに目を向けると、青山は中央に追いやられていた。未だ試合開始の宣言はされていないが、四方を囲まれている。

取り囲む男達は一様に顔を引きつらせながらも構えを取っており、青山は目を閉じて腰に指した長物の柄に手を置いている。動揺していない。

あれは格が違うわね。流石京都神鳴流、問題はアレが魔法世界でどの程度のランクか、って処ね。

紅き翼のメンバーにナギが勧誘する程なのだ、並ではないと思う。どうやって勧誘したのだろうと考える。

殴り倒したら起き上がって仲間になりたそうな目でもしたのかしら。

そんな訳は無いわね、相手は魔物ではなく人間なのだから、仲間になるのであれば酒場だもの。

真面目に考える振りをしてふざける未央だった。

思考に没入していると、周囲の歓声によって意識を引っ張り挙げられる。何事だとリングを見ると、青山のリングには19人の敵が倒れていた。本選への出場者は予選グループ2名つつだが、青山しか立っているものが居ない為、審判が困っている。

やば、見てなかったわ。思い、ナギに先ほどの戦闘の顛末を尋ねる。

「試合が始まったら、詠春が腰の奴を抜いて全員峰打ちにしたぜ！」

「それは見れば分かる、動きとか、特徴的な攻撃とかなかったの？」

「剣が特徴的でかっこいい！」

「あんたに期待した私が馬鹿だったわ」

グダグダだ。事前に戦闘スタイルの情報が欲しかったが、仕方が無いと諦める。

元々、事前に情報を得て相手と交戦する機会の方が少ないのだと思ひ、失敗を自分でフォローする。

結局、青山に倒された19人のうち、最初に立ち上がった者が本選に行く事になった。

観客の誰も得しない対応と未央は思ったが、異様に盛り上がっている。好奇心を刺激されて見にいくと、誰が立ち上がるかトトカルチヨが催されていた。

倒れている者達の名前が叫ばれ、ガッツを出せだの、国のカアチヤンを思い出せだの、ヤジか激励かわからない声が飛ぶ。

痙攣する選手に向けて、熱の入った声援が飛び交い、一人の選手が反応する。

ジョーン！ジョーン！立て、立つんだジョーン！！！ワー
ン…ツ… …立った！ジョーンが立った！カウント2・9！！

途端に、歓声と怒声が飛び交い、外れた券が舞い上がる。

歓声はそのままジョーンコールとなり、会場は熱い空気に包まれた。

「なんで青山よりあっちの歓声がかいんだ？」

「知らないわよ、大穴だったんじゃないの…」

よくわかっていないナギを尻目に、未央は疲れたようにため息をついた。

先ほどの失敗を挽回すべく、未央は他の予選を観戦する。
一通りの予選を見て思うのは、

思ったよりレベルが低いわね、

ノギが力試しとして指定するのだから、今のナギクラスがゴロゴロしている大会をイメージしていたが、本選参加者でも未央は勝てそうだと思う。

全ての予選が終了した後、開会式の為、本選出場者全員がリングの上に呼ばれて、主催者の学園長から本選を開始が宣言される。

「ミオ！ミオ！見ろよあの爺さん！妖怪じゃねえの！？俺初めて見たぜ！」

「ナギ、落ち着きなさい。あれは一応人類よ、後頭部が異常なだけ」
はしゃぐナギを落ち着かせながら、未央は思う。

生で見るとやはりすごい、ナギにはこう言ったが、あれを人間に含めるのは何か間違っている気がする。

あっ、こっち睨んだ！心読むのかしらあの妖怪、後頭部アンテナの受信性能すごいわね！ククク！

「あー、本選へ勝ち抜いた選手諸君。まずはおめでとう。
しかし、ここからが本番じゃ。」

己の持ちこたえる力を尽くし、全力で相手に向かっていってほしい。

そう、あらゆる力を尽くし、全力でじゃ」

言外に、魔法を使ってもよい、そう言っているようだ。

開会式の後で知った話ではあるが、麻帆良武道会の敷地には認識
障害魔法を強めにかけてあり、この大会で魔法の存在が露呈する事
はないそうだ。

「では、各々後悔の無い様、力を尽くしてほしい、以上じゃ」

開会の挨拶が終わり、組み合わせが発表される。

そして組み合わせを聞いた未央は、思わず顔を顰める。

第一試合 柳 未央 VS 青山 詠春

最悪の展開だ、一回戦で当たらなければ、ある程度手の内もわか
ったが、いきなり当たってしまったてはどうしようもない。ナギが横
から譲ってやるぜなどと言っているが、正直変わってほしい。

呻いていると、青山が未央に近づいてきた。

「君が私の対戦相手だね、宜しく頼むよ」

「ええ、Mr・青山。お手柔らかにお願いします」

猫を被り、握手に答える。

「詠春、俺ほどじゃねえけどミオも強いからな、覚悟しとけよ」

「ああ、予選は見ていたよ。君のパートナーというわけだな。気を
つけるでしょう」

「いえいえ、まだまだ未熟な身ですから……」

そう答えるも、青山は油断の表情を見せない。

面倒な相手だと、そう思う。

そして、試合の為に二人はリングへ呼ばれる。

ミオは思う、恐らく素手では勝てないだろうと。

自分の力を試さなければならぬ、その為には全力だ。

周りの目が届かない処に飛び込み、懐から仮契約カードを取り出す。

「来たれ！」

ミオの手中に無色の粘土が現れる。この数日、夜はこのアーティファクトの取り扱いを覚えようと奮闘し、結果は出ている。

アーティファクトの名は、『原初の泥』。

自分のアーティファクトを信じ、彼女は呟く。

「造形、開始」

「大人から子供まで！観客の皆さんお待ちせしました！

これより麻帆良武道会、本選を開始します！！」

リング中央に立った審判兼実況アナウンサーの女性が叫ぶ。

「第一試合は、このカード！」

京都神鳴流からの刺客！青山 詠春！

対するは、本大会最年少参加者の片割れ、柳 未央！」

控え室からは青山だけが歩いてくる。本来は並んで出てくる為、アナウンサーは疑問を抱く。青山がリング中央に立ち、控え室の方を見る。すると、控え室から影が飛び出した。

「 すいません、遅れました」

未央だ。

だが、予選の時とは装いが違う。

白い布地の縁を青く染めたコートを羽織り、体には黒いシャツとズボンに身を包んでおり、手には装甲を貼り付けたような白い槍を持っている。

「おお！ 未央選手、本選用の装備ですか？」

「ええ、一張羅って奴よ」

アナウンサーが興奮しながら問う。

未央は答えながら、青山を見る。彼は少々驚いたようだが、すぐに気を取り直して、こちらを見て、腰の長物を抜く。

「では、その一張羅に見合う戦いをしましょうか」

「ええ、お願いするわ」

未央も槍を構え、青山を睨む。

「両選手、気合十分のようです！」

では、麻帆良武道会本選、第一試合、開始！！！！

合図の直後、先に動いたのは白い影。

踏み込みの勢いのまま、槍を突き出すが、その空間に青山は居ない。

瞬動　！　気配がつかめなかった！　と思いを得ると同時に、背中に悪寒が走る。

前に倒れこむように飛び出すと、数瞬前まで未央の居た空間に刃が突き刺される。

背後を取られた不覚に舌打ちをしながら、後ろの敵に向かって反撃。

倒れこむ勢いを軸足に乗せ、遠心力として力を槍に伝える。更に体全体を捻り、力を追加して槍を加速させる。

青山は、その動きを見ながらも距離をとる事はせず、槍を見ている。

我武者羅に動くのだな。

未央の動きは、ひたすら相手に食いついていく動きだ。

その動きは、常に自分より上の相手と戦い、必死に抗う思いによるものだ。

並びたい相手が居るのだろうと思う。

しかし。

槍が自分の胴体に接近すると、青山はその槍に足裏をかける。

槍が振りぬかれる力を利用し、右の回し蹴りを相手に叩き込む。

相手は顛こめかみ？で回し蹴りを受けてしまい、側転気味に吹き飛ぶ。

それくらいの実力に、負けてやるわけにはいかん。

コートに何かしらの防御手段が講じてあるのかとも思ったが、蹴りの感じでは特に干渉された様子はない。吹き飛んだ相手を見ると、槍を支えに起き上がっている。

立つならば、全力を持って相手をするまで。

京都神鳴流の宗家 青山 詠春が、明確な敵意を持って未央に迫る。

槍を放さなかった事で、自分を褒めたいと思う。

先ほどの打ち合い、そう呼べる程対等なものではなかったが、自分と相手の速度差を思い知る。まさか、槍に足をかけて勢いを利用されるとは。

この先、こんな相手と戦っていくのだろうと考え、未央は思う。

なら、こんな処で負けてやるわけにはいかない！

槍に魔力を込め、迫る敵を見据える。

最初の一撃も、続いた攻撃も大振りだった。

ならば、と未央は槍は槍の持ち方を変える。柄を長く持った威力重視の持ち手から、柄の中ほどを握る、インファイト用の持ち手に変え、相手に向かう。

まずは、相手が利用できない速度まで上がっていく事が肝要だ。

青山が低く落とした姿勢から、左手で切り上げてくる。

急停止しながら、身を捻り刃をかわす。体の姿勢を変えたことで青山から槍頭が遠くなるが、相手の姿勢も開いている。未央はそのまま回転し、石突きで相手の足を狙い、払う。青山は石突きをかわす為、シヨートジャンプで後ろに飛び跳ねる。

槍はその動きに連動するように、槍頭を突き出してくる。その速

度は、先ほどより速いものの、青山を捉えるに至らない。体を捻り、槍が青山の前髪を切りながら目前を通過する。その槍を切り払う事で相手の姿勢を崩そうと青山は刀を動かす。槍と刀が硬質の衝撃音を鳴らす、槍が切り払われる事はない。

「何度も、そつちの思い通りに行くわけないでしょ!!」

鏢迫り合いになり、未央は青山に向かって叫ぶ。
拮抗状態に入り、お互いは考えを巡らせる。

未央は思う、押し切り、弾き飛ばす。
青山は思う、かわし、切り捨てる。

未央は青山を押し切ろうと、更に力を込める。膂力ではなく、魔力によって強化された力だ。少女の体だろうと、不足はない。
青山は機を伺う。ただかわすだけでは、今の相手は追従してくるだろう。自分が押し切られる直前、相手の意識が抜けた時を狙うしかない。

徐々に未央の槍が青山の刀を押し出す。その中で未央は思う。
相手が静かすぎる、鏢迫り合いには対抗してきているが、狙いは別か。

相手は自分より格上だ、このまま押ししても勝てないのではないか。
考えを巡らす前に、体は動いた。
突如槍を引く。機会を伺っていた青山は、ほんの一瞬虚をつかれる。

もらった!!

槍を引きながら、石突きを相手の顎目掛けて振り上げる。

打撃の感触が手に帰ってくる。当たったと思い、止めと槍頭を相手の胴目掛けてなぎ払う。一際大きな硬質の音が鳴り響き、青山は場外まで弾き飛ばされる。リングの周りに張られた水に着水し、場外カウントが開始される。

カウントを聞く未央は、石突きを床につき、槍にもたれかかる様にしている。

場外に落ち、20カウント以内に戻らなければ敗北となる。

既に8カウントまで進んでいるが、未央は思う。

早く、カウント終わりなさいよ、もう10から19省略でいいじゃない。

時間にして数十秒程度の打ち合いではあったが、自分が酷く消耗していると気づく。

実力者と武器を持って戦う経験は初めてだ、これだけ消耗すると先に知ってよかったと思う。

早く終われと、祈りながら待つ。

しかし、未央の祈りは届かず、場外の水面が大きく飛び上がり、青山がリングへ舞い戻る。

カウント19、あと1カウントであった。

未央は息を吸い込み、再び構えるが、青山は構えを取らない。

「ギブアップするよ、刀が折れてしまった」

そう言って、もはや柄しか残らない刀だったものを見せる。未央の最後のなぎ払いを受け、完全に刀は破碎されていた。

勝っ…た？

信じられずに呆然とする未央の耳に、観客の歓声が飛び込んでくる。

リングの外側に避難していた審判が、高らかに、「第一試合の勝者は、柳未央選手です!!!」

そう言い放った。それを耳にして、青山を見る。

「いやぁ負けたよ。てっきり鏢迫り合いで押し切ってくると思ったんだけどね。」

おめでとう

「あ、ありがとうございます……。私も、最初は鏢迫り合いで押し切ろうと思ったんですけど、貴方程の人がただ押し切られるわけではないと思って……」

そう答えた未央に、青山は苦笑する。

「どこか、相手は子供だと思い侮っていたようだ。やはりまだまだ修行が必要だ。」

勝利を得て控え室に戻る未央を、ナギが迎える。

「流石ミオだな！ 譲った甲斐があつたぜ！」

「ありがと、いい勉強になったわ」

そう、いい勉強になった。予選で緩んだ心を引き締め、今後の参考にもなる試合だった。

「ナギ、あんたこそつまんない相手に負けるんじゃないわよ」

「おう！ 見てろよ！ 完全勝利してきてやるぜ！」

「ん、私はちよつと次の試合まで休んでるわ……」

そう言い、未央は椅子に座り込み、息を吐き出す。

勝つ事が出来たと思い、安心すると、急に眠くなってくる。

「去れ！」

アーティファクトを解除し、楽な姿勢で背もたれに倒れこむ。疲労と安心感を得て、未央は笑顔で次の試合まで眠り続けた。

第八話

未央と青山の対戦後、麻帆良武道会の熱は高まっていった。

第一試合からの熱戦に、勝率は低いと思われていた未央の勝利により、賭けにも熱が入り、実際に戦う者や観戦する者にもその熱は伝わっていった。

一方、未央とナギは順調に勝ち進んでいった。

ナギはバグキャラとしての資質を存分に発揮し、魔法すら使わずに勝ち上がる。

未央は二回戦からはアーティファクトを使わず、無詠唱魔法と瞬動を駆使して勝利していった。

そして、麻帆良武道会はついに決勝戦を残すのみとなる。

対戦カードは、開会式では誰も想像していなかった組み合わせ。

決勝戦 柳 未央 VS ナギ・スプリングフィールド

控え室は、静寂に包まれていた。

既にこの部屋に居るのは、未央とナギだけだ。いつも騒がしいナギも未央と向かい合い、瞑想している。未央もまた、ナギと向かい合うように瞑想していた。

決勝戦を待つ観客のざわめきが遠く聞こえ、控え室の中は時計の針が動く音が支配している。

目を開き、ナギが言う。

「ミオ、本気でやってくれよ」

目を開き、未央が答える。

「私は、いつだって本気よ」

その言葉に、ナギは首を振る。それは違う、と。

「お前は、詠春に使ってない力があるだろ。

旅に出る前、俺の魔法障壁を無視して攻撃してきた。

ああいった力も、今回は使ってくれよ」

確かに、青山戦では概念能力を使わなかった。自分自身の力がどこまで高くなっているか試したかったから。

そして、ナギは自分を相手にそういった事はするな、そう言った。

「アーティファクトを使っただっていい。

俺も本気でやる、だから、頼む」

真っ直ぐと未央の目を見据え、ナギは頼む。

未央はその目を見て、少々顔を赤くしながら、思う。

なんでこいつはこう、私に頼みごとをするコツを心得ているか。

「わかった、私に備わる全部の力で、ナギに当たるわ」

「おう！ 負けねえぜ！！」

二人は立ち上がり、拳をあわせて互いに誓う。

全ての力を持って、戦おう。

ナギは無手で戦うつもりだろう。未だ一部の魔法を除き、長い詠

唱をあんちよこ無しで唱えられない。リングの上では暢気にあんちよこを読んでいる暇は無い為、魔法は無詠唱魔法のみで戦う。

一方未央は、アーティファクトを呼び出し、青山戦と同じ格好を取る。コートを羽織り、槍を振るいながら調子を確かめる。

互いに万全だ。二人は並び、リングへ歩き出した。

「さあ、麻帆良武道会決勝戦、一体誰がこの結果を予想出来たでしょうか！」

彗星の如く現れた二つの新星の實力はまさに本物！

決勝戦、柳 未央 VS ナギ・スプリングフィールド！」

二人は既に構えに入っており、観客も水を打ったように静まっている。

アナウンサーの声だけが響き、会場は緊張感に包まれていた。

「麻帆良武道会、最終戦 開始！！！」

台図と共に、ナギが無詠唱魔法を発動。白き雷を未央に向かって放つ。

未央はそれに対し、リアクションを全く取らない。ただその魔法をじっくり見ている。

リングの上を雷が走る。着弾の瞬間、

【・ 世界は一瞬で真逆となる】

眩きが聞こえ、白き雷が着弾する。衝撃で煙が舞い上がり、人影

がリングの外に転がり落ち、水に落ちる。すぐに水から人影が飛び上がり、上空に舞い上がる。

上空に舞い上がった人影は、ナギだ。

観客からどよめきが走る、雷に着弾したのは未央ではなく、ナギだ。

結果だけ見ればそうなるが、未央を除き、状況を把握できていない。

ナギは思う。

やっぱり不思議な力を隠し持ってやがったな、ミオ！

いつも感じていた。ミオは何か俺に隠し事をしている。直感だが、間違いない。

その一つがこの能力だ、稽古では見た事がない。

いつの間にかミオと自分の位置が逆となり、自分で放った魔法を自分で食らう破目になった。魔法が当たる直前に、ミオの声が聞こえた。世界は一瞬で真逆となる、つまり場所を交換する能力だと思う。

「ナギ、先に言っておいてあげよ」

未央が、自分が立っていたリングの位置から言う。

「一つじゃ、終わらないわよ」

自分を貫くような視線で、未央は言う。

「望むところだぜ！！！」

浮遊術から、虚空瞬動で未央の左右に移動しながら、背後を目標

す。未央はこちらの動きを追いながら、牽制のように魔法の矢を放ってくるが、あたりはしない。

あと一回の移動で背後を取れる、未央は未だ行動を起こさない。

やっぱ、さっきのはカウンター系の能力か。

なら、未央が知覚できないタイミングで攻撃を放てば攻撃が届くはずだ。

牽制として、未央の目の前に白き雷を着弾させようと、振りかぶる。

【・ 世界には真実しかない】

先ほどとは違う言葉だ、そう思いながらナギは魔法を放とうとするも、

体がうごかねえ！！

体の硬直と動揺を得て、未央から視線を外してしまう。

未央が動く。

槍を構え、ナギに向かって突き出す。

速度と槍の質量から、魔法障壁を突き破りはしないと思うが、未央は更に言葉を重ねる。

【・ 攻撃力は最大となる】

いかにもやばそうだな！！ 思い、回避を試みるも、未央の槍の方が早い。

せめてもの抵抗に、魔法障壁へ最大限魔力を回し、防御の構えを取る。

未央の槍が魔法障壁をあっさり貫通し、自分の腕を打撃する。予

想を遙かに超えた打撃力が加えられ、ナギは観客席の更に向こう、麻帆良学園内の湖まで吹っ飛ぶ。

概念能力を遠慮なく使つと、やはりこうなるか。

予想通りだと思いながらも、ナギならまだやってくると思う。

あの馬鹿なら、やられっぱなしで終わるわけがない。

ナギが落ちたあたりを見ながら、未央は構えを解かない。

場外カウントが進む。

未央はカウントを待たず、水中で考えをめぐらせていると思われるナギに追撃を加えるべく、飛翔する。上空に飛び上がり、槍へ魔力を集中する。槍にまわりついていた装甲がズレ始め、槍頭に砲身のようなスペースが出来る。

「行きなさい、砲撃の槍……!!!」

槍頭に光が点り、光が増大していく。未央が槍頭を下に向けると、光は白い光線となり、水面へ着弾し、上空まで水しぶきを上げる。

思わず、未央は言う。

「やったか!？」

その声にこたえるように、水中からナギが飛び出してくる。

高速で未央に迫り、ナギは未央に耳にタコが出来るまで言われながら、たった一つだけ完全に覚えた呪文を唱える。

「契約に従い、我に従え、高殿の王！
来たれ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆！」

不味いと思い、一瞬体が硬直する。その隙をナギは見逃さず、未央の首を掴む。

「百重千重に重なりて、走れよ稲妻！」

ナギが自分の魔法障壁を最大にしている事を見て、未央は相手の狙いを悟る。

自分の魔法障壁強度を信じた、相打ち狙い！？

世界を一瞬で真逆にする概念を利用しても、相手も効果範囲に居れば意味は無い。

「千の雷！！！」

ナギの詠唱に答えるように、未央とナギを包むように雷の柱が振り下ろされる。

未央の魔法障壁は即座に砕け散り、雷に直撃する。
体中が燃えるような痛み支配され、意識が遠くなる。

失敗、待ちに徹すればよかったわ。

リング上で待ちに徹すれば、開始直後と同様の対応で完封出来た自信はある。

そうしなかったのは、自分の本当の全力を試す為だ。概念を駆使し、この世界で培った魔法と武術で、ナギに勝てるのか試したかった。

まあ、その試みは負けで終わったわね。

残念だ、そこまで思い、痛みに耐え切れず、未央の意識は途切れ
る。

第九話

千の雷が落ち、湖から水煙が立ち上る。

雷鳴が鳴り響き、湖に落ちた雷が観客席へ津波を作り、観客からは悲鳴が上がっている。

未だ上空に居るナギは、未央が落ちない様、抱え込むようにして持ち方を変えていた。

雷属性最上位 対軍魔法「千の雷」。本来、一個人に向けて使用されるものではない。

使用者であるナギが未だ使い慣れておらず、術式的最適化もされていないが、その攻撃力は戦略兵器である鬼神兵や戦艦にも通用するものだ。

直撃した未央は全身に裂傷があり、既に意識を失っている。それはナギ自身も同様で、未だ未央を抱えたまま浮遊術を行使しているのが奇跡的な状態だ。

ゆっくりとリングに戻ってくるナギ、それを見る観客に歓声は無く、誰しも沈黙していた。一人、アナウンサーが職務を果たそうと声を出そうとするが、声が出ていない。

時間が止まったように静かなリングの中央に着地し、未央を横に寝かせながら、ナギは自身も倒れこんだ。そこで、初めてアナウンサーが声を出した。

「きゅ、救護班！ 急いでー！！！！！」

叫び声のような指示をきっかけに、会場の時間が動き始める。

千の雷について考察をする者、二人の容態を心配する者、不謹慎だが賭けに負けた事を嘆く者と、その様子は様々だ。

その中でも、周りと異なる反応をする者が3人居た。

一人は青山 詠春。彼は二人の様子を見ようと救護室へ駆け出していた。一時とは言え、会話を交わし、刃を交えた相手だ。

ましてや二人とも自分より一回りは小さいような子供だ、助けられるものなら、何でも手伝おうと彼は駆け出した。

もう一人は、白いローブを羽織った長身の男。黒い髪を後ろで束ねており、線のように細い眼で未央を見ていた。

彼女の使った魔法、自分と相手の位置を入れ替え、相手の体を硬直させ、攻撃力を増加させる魔法を一言の詠唱で発動させていた。

興味深いと、見る者に不信感を与える微笑を浮かべ、誰にも気づかれず、影に潜むようにその場から立ち去った。

最後の一人は、白い髪をした少年だ。半袖のジャケットを羽織り、年頃の少年らしい格好をしているものの、長い年月を経た大樹のような雰囲気をかもし出している。

少年はナギを見ていた。千の雷を放った際に展開された魔法陣は、効率化を全くされていない落書きのようなものだったが、威力は並の魔法使いを遥かに上回っていた。

また、自らも範囲に置いた中で魔法を発動させる精神力は特筆すべきものであり、磨けば磨く程光る原石を思い起こさせる。

後遺症によってつまらない人生を送らせるのはもつたいない、そう思いながら、少年は救護室へ歩き出した。

救護室は戦場の様相を呈していた。ナギも未央も重症であり、魔力もほぼ残っていない。医療魔法使いが交代で魔法をかけ、容態を

安定させようと帆走している。

詠春はその中、医療魔法の効果を促進させる薬品を運ぶ為に帆走している。

誰しもが幼い二人の将来を守るべく力を尽くしている中、白髪の少年がゆっくりと救護室へ入ってくる。誰も少年に気づかないまま、少年は二人の枕元に立つ。医療魔法使いに、少年　ゼクトは言う。

「退いておれ」

言つと、両手で魔法陣を紡ぎ出す。ゆっくりと、朗々と詠つように詠唱を続けるゼクト。その姿は、教会で信者達に説法をする大司教のように見える。

魔法陣は二人に寄り添う様に展開され、ほんのりと魔法陣からもれる光は、二人の傷を癒し始めていた。聖書を読み上げる司祭のように、ゼクトは詠唱を完了する。

「汝が為に、ユピテル王の恩寵あれ。> 治癒<」

魔法陣が一際大きな光を放ち、二人の体を包み込む。煌々と光り輝く魔法陣は見る者に無償の愛を信じさせる。

光が収まると、そこには全身の傷がふさがり、穏やかな寝息を立てる二人が見えた。

「ふむ、こんなもんかの……。すぐに目を覚ますじやろう」

肩をぐるりと回し、一仕事終えたような仕草をするゼクト。その仕草は少年の体に似合うものではないが、不思議と違和感を抱かせない。

言葉の通り、未央が何かむず痒そうに咳をしながら目を覚ました。ナギは目を覚まさないが、寝息がイビキになっており、周りの魔法

使いが苦笑のまま安堵している。

未央は周りを見渡し、状況を把握しようとする周囲を見渡す。

魔法使い達の中に詠春が居るのを見つけると、相手は笑顔で頷き、未央の枕元に居るゼクトに視線を向ける。

未央がゼクトに目を向けると、

「体の調子はどうじゃ？」

「んー……大丈夫。特に問題ないわ。皆さん、ご迷惑おかけしました」

ベッドから降りて一礼しようとする未央を、少年が止める。

「まだ安静にしておくのじゃ、体力は戻っておらんからの」

「あ、はい。わかりました。」

ところで水頂いてもいいですか？」

水差しを持った医療魔法使いが、未央に水を差し出す。受け取った未央は、コップに文字をなぞる。少年は枕元に居た為、未央がコップになぞった文字が見えた。

【体力と魔力が回復する水の入れ物】

何かのまじないじゃろうか。

未央が水を一気に飲み干すと、途端に未央の体から魔力が溢れ出るのをゼクトは見た。間違いなく唯の水であったが、未央は水を飲んだ途端に回復した。

先の試合でも変わった魔法を使っておったが、その応用じゃろうか。

少々興味があるのう。

未央は同じコップに水を貰い、今度はナギに飲ませている。眠っているナギに強引に飲ませ始めた為、うがいのような状態になり、最後は鼻と喉を強引に手で塞いで飲ませた。

「ぐごばああ!? ミ、ミオ! たまにお前俺を殺すつもりかと思う事があるぜ?!」

もうちよつと優しくしてくれよ!」

「お・だ・ま・れ。あんたが相打ち覚悟の千の雷しなきゃお互いここまで怪我しなかったのよ!

皆さんにご面倒をかけた分、私が! あんたに罰を与えるツ!!」

未央はナギに布団を被せ、【超重い】と文字をなぞる。ナギは首から上だけが見える状態となり、逃げ出そうと必死に力んでいる。

未央は違うコップを用意し、ナギに見える様、ゆっくりと文字をなぞる。

【超苦いが健康にいいネギの味のする汁】

!!!

ナギの悲鳴があがり、未央の高笑いが響き渡る。未央の口元は釣りあがっており、恐ろしい笑顔を作っている。

ゆっくりと見せ付けるようにナギの口にコップをつける。ナギはなんとかネギ汁を回避しようとするが、誰しも雰囲気には押し、動けない。

詠春は漫画のように大きな汗を額に浮かべながら苦笑し、ゼクト

にいたっては未央のコップを興味深そうに観察している。

俺、終わったな。

そう思い、口をあけてネギ汁を待っていると、未央の声が聞こえる。

「あつ、手が滑った」

その言葉は嘘か真か、しかし確かにナギの口からコップは角度を外した。鼻の穴に角度を修正をしたのだ。鼻からネギ汁を受けたナギは予想の斜め上に行く事態に混乱し、悲鳴を上げた後、気絶した。未央はその様子を見て、悪は滅びた……と呟いており、一切遠慮の無いその手段を見た医療魔法使い達は、決勝戦でのナギが相打ちをしてでも勝ちたかった理由がちよつとだけわかったような気がした。

第十話

早朝、まだ朝日もあがり切らない頃から未央はゆつくりと起きる。頭に血を巡らせるように、ベッドから起きた後は窓から外を数分眺めると、寝巻きから運動着に着替え、ジョギングをする。

ナギは同じ時間に起きられない為、早朝稽古は未央一人だ。麻帆良学園を一周、とは行かず、手近な区画を一周した後、武道会会場の近くにある湖に向かう。

湖は霧が立ち込めており、周囲に人も居ない事から、稽古には最適だ。

魔力を込めて、水面を歩きながら、拳を振るう。体の運びはノギから伝えられたものだが、記憶の中にあるどの武術とも一致しない。相手を掴み、打撃する事を主体とする動きだ。打撃する手は爪を立てるように構えるか、力強く握り相手を砕くように振るう。

霧を貫くように拳を突き出し、その手を開いて横に振るう。漂う朝霧が風圧でなぎ払われる。

でも、勝ちを得ていないわね。

未だ、無手でナギと稽古をすると全く歯が立たない。身体強化に継ぎ込まれる魔力量が違う事もあるが、動きが馴染んでいる。武器を使い、概念能力も行使して戦ったがそれでも負けた。稽古の手を止め、自分に合う武器とは何か思いを巡らせる。

「来たれ！」

アーティファクトを呼び出し、手中に現れた粘土に魔力を込める。『原初の泥』は、未央が思い描いた形に造形する事が可能なアーティファクトだ。粘土をちぎり、複数思い浮かべれば質量を増大さ

せながら、形を変える。

粘土を二つにちぎり、右手で槍を、左手でコートを造形する。左手のコートを羽織ると、槍を両手で持ち、構える。前方の空間を突き、そこから左に払う。槍を払った勢いで右足の蹴りを繰り出し、更に槍の石突きで足元を払うよう打撃を連続させる。独楽のように回りながら、無詠唱で魔法の矢を展開する。槍頭に寄り添うように収束し、突き出すと同時に矢が射出され、前方に水柱を作る。

魔法を交えた近接格闘だ。

しかし、と未央は思う。自分の能力を生かすならば、やはり魔法に専念した方がいいのだろうか、と。

槍が形を変える。槍頭として突き出していた部分が丸くなり、更には四角く変形しながら、中央の面に穴をあける。柄であった部分は太くなり、取っ手が突き出し、トリガーが造られる。

機殻杖だ。杖と名付けられているが、見るものはそれをバズーカと呼ぶだろう。その砲身に、未央は文字をなぞる。

【威力は無限大となる、根性入れて更にドン】未央は前方の空間に狙いを定め、詠唱を開始する。

「来れ、虚空の雷、薙ぎ払え！」

詠唱が完了すると、砲頭に雷が宿る。

それは発動を待ちきれずに、周囲にバチバチと音を鳴らしている。

「い！ か！ ず！ ち！ の！ お！ のおおおおお！」

根性を込めて腹からひねり出した詠唱により放たれた雷は、轟音を備え前方の水面に着弾する。概念能力によって無限大に強化された雷は、水面を穿ち、触れる水を蒸発させながら湖の底まで到達し、湿った土に巨大なクレーターを作る。威力のみでいえば、昨日にナ

ギの放った千の雷よりも大きい。

これに追尾や散開術式を加えて、後方からの砲撃がいかしらねえ。

水面が荒れてしまった為、浮遊術で浮かびながら思う。着弾した周囲に水が戻る音を聞きながら、未央は考えを巡らせていた。

だから、白いフードを羽織った男が、背後からじっと見つめているのに気づくことはなかった。

素晴らしい。

行使した魔法は、間違いなく雷系の上位魔法である雷の斧だが、その威力や千の雷を凌駕するものだ。放った少女に疲労は見られず、腕を組み、魔法がもたらした破壊跡を見ている。作り出した杖の効果であるうか、それとも先日の魔法の応用であろうか。まさか根性で威力が上がったわけではないだろう。思わず笑みが零れる、このような変わった相手に会う為、旅をしていたといっても過言ではない。

「お嬢さん、調子は如何ですか？」

「ひよああ!？」

声をかけると、驚いた少女はこちらに杖を向けて、魔法の矢を放ってきた。

「!?」

迫る魔法の矢を精一杯に背を逸らして回避する。標的を見失った魔法の矢が上空で炸裂し、衝撃を伝えてくる。明らかに、魔法の矢の威力ではない。

額から冷たい汗を流しながら、男は話を続けようと声をかける。

「ちょ、調子は如何ですか？」

「もう一度言ってくるとは、なかなかの猛者ね。調子は良好よ、ところで貴方はどなた？」

「旅の途中で武道会に立ち寄った変わり者です、少々お話してもよろしいですか？」

少女は杖を下げ、こちらの話題に付き合うような仕草を見せる。流石にあの杖を向けられたまま話を出来る心構えは出来ていなかった。助かった。

「未央、ミオ・ヤナギよ。好きに呼んでちょうだい」

「ではみっちゃんと「ミオでいいわ」残念、それではミオとお呼びしましょう。」

魔法の扱いに大変秀でていらっしやるようですが、どちらで習われたのです？良ければ師を教えてくださいただければ」

「メルディアナ魔法学校に7ヶ月ほど通ってたわねえ、あとは独学よ」

「なるほど、独学でそこまで到達されるとは、おみそれしました」

メルディアナ魔法学校に特別優秀な魔法使いが在籍しているとは、聞いた事がない。となれば、本人の言う通り独学で到達したか。少

女の片割れの少年は、才気を溢れさせる魔法使いだ。生来の魔力量と格闘術の才能を持っている事は昨日の決勝戦で確信した。だが、少女の使う魔法は系統不明だ。

新系統を生み出した天才、ですか。

新たな系統の魔法、そう考えれば不可思議な現象にもとりあえずの納得は出来る。

しかし、あくまでも取り合えずの納得だ、魔法であれば、学ぶ事で自分にも扱えるはず。

思い、問いを作った。

「貴方の使われる魔法、私にも使えるでしょうか？ 良ければ教えていただけませんか？」

「はあ……。まあ使えるんじゃないかしら？ でも私も教える程使えるわけじゃないのよねえ……。」

「ま、良いわ。ところで、貴方名前は？」

「おっと、申し遅れました」

フードを脱ぎ、露になったのは黒い髪に黒い瞳。

微笑を浮かべながらも、本心が全く見えない物腰。

「アルビレオ・イマと申します、宜しくお願ひしますよ」

ナギは起きると、階下が騒がしい事に気づく。騒ぎといえば、昨晚の宴会は楽しかったと、記憶を辿る。 昨晚は麻帆良武道会の賞

金を使い、救護室に居た皆と宴会を催していた。詠春に酒を飲ませたら、泣き上戸な上に絡んできたので、やかましいと思って殴つたのを覚えている。ゼクトと名乗った少年は、自分の千の雷がいかにも無駄な術式をしているかを説教してきた。

イラッとしたので、こう言った。

「じゃあ教えてくれよ！」

「良いじゃろう、明日からお主と連れれの少女もまとめてわしが鍛えなおす」

あっさり弟子入りとなった。そこらへんの魔法使いに聞くと、並ではない腕前の魔法使いである事はわかったので、ラッキーと思う事にする。

その後、詠春の手元にあつた酒をかつさらい飲み、いい気分になつてミオの処に行つた。

その後、どうなつたんだつたかなあ？ イマイチ思い出せねえ。

妙に痛む頭を押さえ、ナギは部屋を出る。食堂からミオの声が聞こえた為、足を向ける。

声をかけようと見ると、見知らぬ男と話している。何を話しているのかと耳を澄ますと、

「ええ、それでは宜しくお願いしますよ。みっちゃん」

「てめえ何様だコラァー！！！」

見知らぬ男に全力で殴りかかった。打撃が当たった感覚はあるが、浅い。食事が乗ったテーブルを足場として、蹴りを経て加速する。相手を見ると、肩を抑えながらも微笑を浮かべてこちらを見ている。

余裕そうだが、気にいらねえ。

拳を振るう事で、そういう思いである事を相手に伝える。魔法障壁が硬く、攻撃を通していない。

ならばと、魔法を使おうと、

「ちょっと待ちなさいって言ってるでしょ」

背後から未央の声と、衝撃が来た。相手の男に皿がぶつかっている事を見ると、自分にも皿がぶつけられたようだ。

抗議しようと思えばと、

！！

声が出ない。

「1分ほど黙ってなさい、そういう魔法をかけたから。」

いい？ その人はアルビレオ・イマ。魔法の研究と暇つぶしの為に私達についてくるそうよ。

あとアル、みっちゃん言うな」

口パクで謝罪をする相手 アルビレオ。よく見るとなかなか愉快な顔をしている、キツネのような目だ。しかも、先ほど未央をみっちゃんと呼んでいた、多分今後面白い事を言うに違いないと、勘が告げている。旅に同行するのはいい、そう思うが、

(ミオをみっちゃん呼びかよ、親しげだな)

そこだけが、少々気に入らなかった。

第十話（後書き）

追記：未央がナギとアルに投げた皿には、【黙れ馬鹿ども】と書いてありましたとさ。

第十一話

ナギとアルが口パクとジェスチャーで意志交換をしていると、ゼクトと詠春が食堂に現れる。

「朝から騒がしいのう、お主等」

「まあ、らしいといえればいいですね」

「いきなり嫌な納得をされたわ……！」

武道会後の宴会で二人と交流を深め、ゼクトはナギと未央を指導する為に行動を共にする事になり、詠春は腕試しの旅の途中である事から、未央が詠春を誘い旅を共にする事となった。

常識派の二人が席についた事を確認して、沈黙している馬鹿二人を見る。ナギは未央を指さしながら、本を読む真似をする。そのまま顔をあげると、勢いよく虚空に向けてバツクハンド。

何あれ、私の扱いに関する諸注意？

アルはそのジェスチャーを見ると、未央に視線を向けた後、ナギに視線を戻して首を何度か縦に振る。

あれでわかったのかしら、怪しいものね。

そう思いながら、沈黙しながらも騒がしい真似をしていた馬鹿二人の概念が解除する。

「お、声が出る！アル、つまりミオが本読んでる時に声かけると死ぬぜ！」

「ええ、大変よくわかりました。気をつける事にしましょう」

もう一度皿が飛んだ。

馬鹿二人の頭に大きなたんこぶが二つ出来た後、5人は席につき、改めて各々の目的を確認する。

ナギと未央は、魔法世界を見て回り、戦争で困っている人を助ける為。

詠春は、武者修行と名声を得て故郷の婚約者の所に帰る為。

アルは、未央の扱う概念能力を調べる為。

ゼクトは、ナギと未央に魔法の師事をしながら、アルと同じく未央の概念能力を調べる為。

仲違いしそうな目的がない事を確認し、今後の予定を話し合う。

ここで未央が立ち上がり、まずは、と声を出す。

「麻帆良学園の敷地内にある図書館島という施設があるのよ。」

そこは麻帆良学園創立と同時に建設され、世界でも最大規模の図書館で、世界大戦中に戦火を避けるべく貴重書が集められた結果、蔵書量も日本最大であり、読書好きの人間にはたまらない施設となっているわ。大事な事なのでもう1度言うわ。読書好きにはたまらない施設なのよ。わかる？

麻帆良学園にきて、図書館島を外す事は許されないのよ」

実に堂々とした、本をじっくり読みたいという主張だ。

この主張に、ナギは難色を示したが、アルとゼクトが賛成する。

「図書館島はともかく、あと数日で麻帆良学園の地下にあるゲートが開くからのう。」

魔法世界へ旅に出るなら滞在した方が早いじゃろ」

「ええ、私は図書館島も興味がありませんから、数日滞在したいですね」

詠春も特に反対はせず、ナギも不満ながらも滞在案を了解した。途端、未央は席を立つ。

「じゃ、早速行ってくるわ!」

「では、私もお付き合いしましょう」

ついでアルも立ち上がり、足早に出ていく未央を追う。

「じゃあ俺は適当にぶらつくか」

「お主はわしと魔法の基礎からやり直しじゃ」

「ええ〜……………面倒くせえなあ。千の雷使えるからいいじゃねえか」

「馬鹿者、お主のあれは未だ完成には程遠い。お主の魔力なら倍の威力は堅い。」

「さあ行くぞ」

渋々と立ち上がり、ゼクトについていくナギ。

「……………私は散策でもしよう」

えいしゅん は さびしそう に さっていった。

未央は鼻歌を歌いながらスキップしていた。

図書館島だ。本の島だ。夢の本墮落^{ほんたらく}だ。

その顔は笑顔であるが、目の色がおかしい。言葉を選ばずに表現するならば、トリップ状態だ。スキップしながらであるが、その速度はトップアスリートより早く、すれ違う人物は思わず振り返り、あれは人間かと二度見する。全力で身体強化をかけた体で、全力のスキップを敢行する未央。通り過ぎる全てのスカートを捲り上げ、風と共に図書館島に突撃していく。

図書館島の受付に到着し、輝く瞳で入場する。微笑しながら受付譲は簡単に規則を説明し、未央は地下3階までの出入りを許可された。走らないように注意を受けた為、競歩で急ぐと、図書館のエンランスホールに出る。

瞬間、未央は思う。

本の城だわ。

壁は一面が本棚になっており、フロア全体にも本棚が乱立している。乱雑に配置された本棚は、迷路を思わせる。見える範囲だけでもいくつか読書用スペースとして配置されている机と椅子以外は全て本棚だ。

もうここがゴールでいいんじゃないかしら。

不気味な程に穏やかな笑顔を浮かべながら、手近な本棚へ向かう未央だった。

完全に忘れられているアルが声をかける。

「ミオ、もう少し奥に市場には出回らない本が置いてありますよ。そちらに行ってみませ「行きましよう」そうですね」

目の色が危険ですね。

アルはそう思いながら、案内に先導する。歩きながら、アルは未央に問いを作る。

「そういえば、貴方の使っている概念能力でしたか……やはり他人には使えないのですか？」

「そうねえ、私もいつの間にか使えるようになってた力だし、魔法みたいに詠唱もないから……」

教えるのも難しいわね」

未央はアルにそう言った。

神様からもらった力だから無理と、そう言って信じられる訳がないと思ひ、嘘をついた。

アルは未央を微笑のまま見ながら、

「そうですか、非常に残念です。まあ少しずつ研究してみましようか。」

未央も、いつの間にか使えなくなったら不便でしょう」

アルの答えに、何か見通されたような感じを受けながら、未央は頷く。

確かに、概念能力の研究は必要だと感じていた。自分の意識が無い時に概念能力が必要になる場合も、この先あると思う。未だ自分は普通の文字を書く事も出来ない、全ての文字が概念効果になってしまう為だ。魔法学校では、魔法の詠唱をノートに書いたら酷い事

になった。

まさか、ノートから炎が吹き上がるとは。おかげで教室の屋根が吹き飛んだものね。

あれ以来、周りから距離を少々置かれた気がするけど、まあ無関係でしょう。

思いながら、アルの言葉を改めて考える。

概念能力の研究が進めば、恐らく出来る事は加速的に増えていくだろう。その為にはまず、自分が概念能力を完全に把握する事が必要だ。

まずは、と思いながら、

まずは目の前の大量にある本に墮落しましょう。

ニヤリ、と笑いながら本を手を取った。

第十二話

図書館島地下5階、薄暗いフロアに本の匂いが漂っている。その中で、とあるテーブルでは本が積み重ねられていた。テーブルに積み重ねられた本を見ると、市場には出回っていない貴重な古書ばかりだ。積み重ねられた古書が壁となり、外側からは本の壁しか見ることが出来ない。耳を済ませると、本の壁の向こうではページの捲られる音と、本が置かれる音がする。かなりの速度でページが捲られており、次々と本が読み終わっている事が窺い知れる。

本の壁が中心に引き寄せられ、壁に隙間が開けられると、中心に居る読者の姿を見る事が出来た。

未央だ。表情をころころと変えながらも、楽しそうに本を読み進めている。ページを捲る手は早い、それ以上の速度で目が動いており、彼女が本を楽しんでいる事が雰囲気から伝わってくる。

同行していたアルビレオ・イマは、歩きながら自分の読みたい本を探していた。時折、彼自身が過去に読んだお勧めと思われる本を手に取り、未央のテーブルへ本を積んでいく。彼自身も読書家であり、未央の読書の邪魔をする事は無かった。

本来、未央は年齢上の制限により、地下3階までの通行許可しか得ては居なかったが、アルは地下5階までの通行許可を得ていた為、忍びついてきた。結果として、今のように未央は本の城を作り、その中に引きこもっている。アルはそれを微笑ましそうに見ており、城の外壁を次々に強化していった。城の中に溜められた不法投棄物（もう読んだ本）は、溜まりすぎたと城主である未央が判断するまで放置され、気づいたら外壁の外に置かれるといった具合だ。あまり褒められた行為ではないが、地下5階は学生の立ち入りが原則的

に禁止されており、周りに咎める人間は居なかった。

アルが本を棚に戻しながら散策していくと、壁にかけられた図書館島の地図に目が留まる。

現在地が記載されており、目を通していくと気になる文字を見つける事が出来た。

一般人の目に触れない様、魔法で記載された文字だった事から、アルの目を強く惹きつけた。

【地下11階 魔法書】

これは面白そうですね、色々な意味で。

そう思い、本の城に引きこもっている未央へ声をかけるべく、足を向けた。

本の城は既に外壁が消滅しており、城主の間に崩壊の手が迫っていた。

伝令役と化したアルが、城主未央に報告する。

「ミオ、少々よろしいですか？」

その声に、ゆっくりと顔を上げる未央。

「何かしら、今いいところなの。」

架空戦記モノでね、織田信長がザビエルと手を組んで悪魔召喚して本能寺の変乗り切ったと思ったら、悪魔との軍勢バトルが始まってね…！ 熱いわ！」

「それは申し訳ありません。」

ですが、地下11階にもっと面白い本があるようですよ。

行ってみま「向かいますよ」はい、そう言ってくれると思いま

した」

未央は立ち上がり、詰みあがっていた本を元の場所に戻し始める。アルもそれを手伝い、二人は無許可で地下11階へ向かっていく。

地下11階の魔法書フロアへ向かう為、未央とアルは歩を進めていた。

無許可ではあるが、遮る司書もない為に順調に進んでいたが、8階から本棚により道が遮られている。アルが複写した地図があるものの、各階の詳細な図面は無く、各階の繋がりが大雑把に記載されているのみだった。アルが未央を振り返ると、目の色は全く変わっておらず、探索に意欲を燃やしている事が見受けられる。

「GO AHEAD、GO AHEADよ。アル」

そう言うと、未央は浮遊術により飛び上がり、本棚の上に着地する。

本棚の上からフロア全体を見渡すと、床伝いに歩いているだけでは進めない事がわかる。アルもまた浮遊術で未央に並ぶと、二人は飛行しながら進み始めた。本来、本棚の上を歩きながら進むフロアになっており、対侵入者用のトラップが仕掛けられているもの、浮いている二人には関係ない。数時間かかると見込まれる道を、二人は数十分で踏破していった。

順調に二人の不法侵入は進み、地下10階まで到達すると、辺り

の風景が一変した。周りは柱ではなく樹で支えられており、石床は砂となつている。また、湖の水が流れ込んでおり、フロアの多くは水に沈んでいた。天井は9階部分の床を除き、何故か陽光が降り注いでおり、一定の明度が確保されている為、本を読む事に苦勞はない。

「……何、ここ？ 壮絶なまでに本に悪そうな環境ね」

「いえ、どうやら魔法でコーティングされているようですよ。」

見てください、先ほどまで水に浸かっていた本ですが、全く濡れていません」

アルの差し出した本を手にとると、全く湿り気を帯びておらず、本の風化も見られない。

本自体も大変貴重なものであり、当然の如く未央はそれを読みはじめた。

その様子を見たアルは、ハッと気づく。

「いけません、このままでは足止めになります。」

思い、アルは未央から本を取り上げる。ギロリという擬音が似合う目つきで睨む未央。

「ミオ、確かにこの本は貴重なものですが、もう少し先にはより貴重な本が待っています。」

貴方は、彼らをこれ以上待たせるのですか？ いえ、貴方はそんな愚かな事はしないでしょ？」

「さあ進みましょう」

反論を許さず、少々早口でまくし立てる。重ねるように、さあと先を促すと、未央は不満ながらも先を急ぐ。やれやれと、一仕事し

た後のような口調で笑いながらアルは後を追った。

二人が進むと、巨大な扉が見つかった、

扉　　というより門のような大きさと、周りには通路を作るように柱が立てられている。地図によれば、地下11階への階段がある扉だ。

「いやあ、長かったわね。さあ行きましよう……って、何よ、アル？」

先を急ぐ未央を、引き止めるアル。未央が振り返ると、アルは黙って扉の上を指差す。見ると、扉の上で巨大な竜種が居眠りをしている。横幅だけで10mは優に超えており、翼を完全に広げれば20mを超える体躯は、真正正銘のドラゴンだ。

「アル、アル！？ あれは何？　最近の図書館は地下にドラゴンを飼うのがブームなの？」

最も優秀な警備員は犬っていうけど、麻帆良では警備ドラゴンなの？」

「落ち着いてください未央。まずドラゴンはブームになる程、数を確保出来ません。」

ですから麻帆良特有の風習、警備ドラゴンですね。略してケイドラでしょうか」

「恐ろしい、恐ろしいわねアル……！」

手近な本棚に身を隠し、相談する二人。未央は完全に慌てている

が、アルはいつもの飄々とした様子を崩さない。目的の魔法書フロアはすぐ先ではあるが、真正面からドラゴンと戦闘しては命の危険がある。

「よし、こうしましょう。私は隠れて、アルが囷になる。その隙に私が奥で魔法書を堪能するという作戦よ。名づけてプランA、どうこれ？」

「少女を殴りたいと思ったのは初めてですよ、貴重な経験をありがとうございます。ありがとうございます、ミオ。」

そのプランは却下です、他のプランは無いんですか」

「プランB？ そんなものはないわ」

つまりはお互いに作戦が無い事を確認できた。頭を突き合わせ、状況を打破しようと考えを巡らせる。よし、と未央が立ち上がり、作戦を説明する。

「とりあえず話し合しましょう、ドラゴンなら知能も高いはずよ！」

「ミオ、確かにドラゴンの知能は高いと言われていますが、交流が出来たという話は聞きませんよ。」

貴方はドラゴン語が堪能なのですか？」

「我に秘策ありよ…！」

言つと、未央はドラゴンに近寄っていく。眠っているドラゴンは起きる気配が無く、容易く未央の接近を許した。未央はドラゴンの額に指を当て、文字をなぞる。

【・ 思いは通じる】

「ドラゴンさん、申し訳ないけどちょっと起きてー」

未央の言葉に、ドラゴンが目覚めます。

(……君、誰？　ここから先は通行禁止だよ？)

「そこをなんとか、どうしても読みたい本があるのよ。お願い！」

手のひらを合わせ、ドラゴンに頭を下げる未央。

少々遠くから見ているアルは、その様子を見ながら思う。

(まさか、本当に会話しているのでしょうか……)

(うーん……じゃあちょっと遊び相手になつてよ。暇なんだ)

「いいわよ、遊び相手くらいなら。何して遊ぶの？」

(狩りごっこ)

「えっ？」

言うと、ドラゴンが起き上がり、未央を見据えている。ドラゴンの口に空気が大量に吸い込まれ、口の奥に赤々とした灯火が見える。

(さ、いくよー)

「ドラゴンの知能が高いなんて私に吹き込んだのは誰よー！！」

炎の塊である竜の吐息が炸裂した。意表をつかれた未央は逃げ遅れたが、控えていたアルが未央を抱え、炎から回避する。

「ミオ、プランBは失敗のようですね、相手はなんと聞いていたのですか？」

「狩りごっこして遊ぶ、だそうよ！　またプレスきた！」

浮遊術で左右に回避しながら高度を上げる二人。竜が吐き出した炎の行く先を見ると、本棚に着弾はしたものの、本棚自体には焦げ一つついていない。図書館を作った人間の魔法の腕前に感心すると

共に、竜を配置した事を罵倒する未央。竜は翼を広げ、翼を振る度に高度を上げる。二人を追うつもりだ。

「ねえアル？ 竜って強いよね、貴方何か手はある？」

「竜種もピンキリかと思いますが、一般的に手が出せる相手ではありませんね。」

まあ、私も少々心得がありますので、ここはお任せください」

言っと、アルはその場に滞空し、竜を見据える。竜は上昇しながらも加速し、矢のような勢いでアルに迫る。アルは自然体のままそれを見ており、いつもの飄々とした態度を崩しはしない。竜の吐息がアルに向かって放たれるが、

アルが手をかざした途端、炎の向きが変わり、竜を襲う。

竜は自らの炎にぶち当たり、もがくように炎を振り払う。アルは更に追撃を加える為、竜へ手を向ける。黒い球体が竜の上に出現し、アルが手を振ると、黒い球体は鎖に繋がった鉄球のような勢いで竜を打撃する。打撃された竜は精一杯翼を振り抗うが、まるで重力が増加したように墜落していく。墜落していく竜は、湖の水で出来た水溜りに勢いよく飛び込んでいく。巨大な水柱があがり、相当な速度で突入した事が推測出来た。

おや？ あれって概念能力にすごく似てる？

思いながらも、未央は竜に呼びかける。

「ドラゴンさん、大丈夫ー？ そろそろ通っていい？」

(効いたアー……！ 面白かったから、通っていいよ)

水中から飛び上がり、吼えるように答える竜。未央が手を振ると、答えるように翼を振るう。

なかなか、可愛らしいドラゴンだったわね。

地下11階、魔法書フロア。地下10階と同じく、樹木と湖水に守られたフロアだが、魔法書のフロアだけあり、魔力が満ちている。

「いやあ、やっと到着しましたねミオ……なんと、もう居ませんか」

到着した刹那、未央は数冊の本を取り、手近なテーブルに移動していた。その速度たるや瞬動を極めた域、縮地に迫る。アルもまた、数冊の本を手に取り、同じテーブルについた。図書館島の最深部に位置するフロアだけあり、魔法書も非常に貴重なものが揃っている。未央は手当たり次第に読んでおり、中には外道な本も混じっている。流石に隙を見て抜いておこうと思うアルに、珍しく未央から声をかける。

「そつえばアル、さっきの魔法何かしら。見た事ない系統だと思っただけど？」

「企業秘密……と行きたいところですが、お教えしましょう。私のオリジナル魔法で、重力を操作する魔法ですよ。主に土系統の魔法と契約して、対象に重さを加える術式です」

「なるほど……私の概念能力に似てると思っただけど、理論的に構築されてるのね、すごいわ」

「私からしてみれば、理論無しであんな力を行使するミオがすごい

ですよ。バグキャラのようですね」

その評価に、未央は思わず呻く。この少女は、何故か褒められる事を嫌いますね、アルはそう思いながら手元の本を読み進める。会話が終わると、しばらく二人の間にはページを捲る音だけが響く。

未央が立ち上がり、本を戻しながら次の本を探していると、ある本棚が目についた。それは本棚自体がぼんやりと青い光を放っており、空気が多い本棚だ。近寄ってみると、本の背表紙を読み取れる。

こ、これは…！？ 前世で読んでいた【終わりのクロニクル】全巻、他シリーズ勢ぞろい…！

驚愕に手を震わせながら本を手取る、中身も間違いなく同じものであり、全て揃っている。

しかも、自分が知らない本も幾つか置かれている。

GENESIS…新シリーズ…ですって…！？

驚愕していると、空いている本棚に一枚の手紙があった。手に取り、読む。

『未央さんへ、神です。ここは神木「蟠桃」^{ばんとう}の魔力のおかげで、私が干渉しやすい場所になっています。

お約束の通り、新刊が出たので送ります。 ゆっくり楽しんでね！

追伸：持ち帰っても構いません』

「今ならあいつを信仰してもいい、私はそう思うわ」

言葉に出す程強く思いながら、未央は本を回収していく。
持ち帰ると、アルが驚く。それは、本の量もあるが、彼がそれを
見て最も驚いた事は、

それは辞書ですか？

厚さであったとき。

第十二話（後書き）

終わりのクロニクル最終巻、それはライトノベルながら1000ページを超えて当時の電撃文庫最厚記録を更新した本の鈍器であります。

第十三話

深夜、学生が寝静まり、昼の喧騒が嘘のような静けさに包まれた麻帆良学園の地下深くには、30人程の魔法使いが集まっていた。誰もがローブを目深にかぶっているが、陰気な雰囲気は感じない。それは、彼らが集まっている場所のせいでもある。そこは石造りの古代遺跡が広がっている。その正体は、円柱状に空いた穴へ建築された魔法世界への転送ゲートだ。上下ともに吹き抜けとなっており、天井も底も見えない。中央にある儀式場の周辺は光を放っており、ゲートが開く時間が近いと告げていた。

集まった人々の中で、固まってゲートを待つ5人が居る。中央の少年は出発はまだかと急いでおり、傍らの少女が本を読みながらそれを制している。周りに控える3人は、少年と少女を見て微笑みながら、地図を広げ、旅の予定を確認している。地図を確認していた一人が少女に声をかける。

「ではミオ、オスティアに滞在して情報収集、しかる後各地を回るという事でよいですね」

「ええ、当ても無く歩くのも悪くはないと思うけど、情報があつて損はしないものね。ナギ、それでいい？」

「おう、ミオに任せるぜ」

その言葉に、未央は微笑で応えながらも、内心は別の思いを得ていた。

紅き翼の意思決定はナギだったけど、このままだと私になるんじゃないかしら……ちょっと不味いわねえ。

紅き翼はあくまでナギが中心となつて動く集団だ、そのナギが未央に判断を仰ぐのは好ましくない。そう思い、今後はナギ自身に判

断を仰ぐように話題を回そうと考える。

考えていると、ガイドの魔法使いから声が飛ぶ。

「そろそろ出発となります！ 中央へお集まりください！」

「よっしや！ミオ、行こうぜ！」

「はいはい、ゲートは逃げないわよ」

「まるで母親のようですねえ」「保護者に違いない」「そうじゃのう」

ナギが駆け出し、他の4人は歩きながらそれを追う。中央付近には、既に他の人々も集まっており、ゲート設備の発光も強まっている。5人が中央付近まで集まると、待っていたかのように設備全体の光が強まる。係員が辺りを見回し、乗り遅れが居ないか確認しており、出発間近だという実感を得る。未央が上を見ると、巨大な魔法陣が連なって展開され、その中央を光の柱が貫いた。同時に、魔力の収束する地響きのような音が鳴り始める。係員が見回りを終えて中央に戻ると同時に、魔法世界への転移魔法が発動する。視界一面が白い光に包まれ、浮遊感が体を包み、転移が開始される。

一秒にも満たない転移の後、魔法世界への転移が完了する。目を開けると、一面に広がる浮遊諸島。浮遊する大地の上に建てられた都市、ウェスペルティア王国の王都オステリアに到着したのだ。ゲートの到着地点も浮遊島であり、いくつかの石柱の上に魔法陣が描かれた舞台が建てられている。浮遊島同士は通路で繋がっており、その先には空港のような受付を見る事が出来た。視界を遮らぬ様、

ゲート周辺には高い建築物が立っておらず、屋根も無い。空が近いと思う一方、雨が降ったらどうするのだろうと思ってしまう、我ながら無粋な考えだと未央は思う。

一方ナギは、到着の喜びを全身で表しており、周囲を嬉しそうに見渡している。

「着いたぜオステイアー！　　すげーな！　　島が浮いてその上に住んでるぜ！　　怖くね？」

「いきなり素に戻るんじゃないわよ、長い間浮いてるからそこらへんの感覚無視してるんじゃない？　オステイアの人は鈍感なのね」

「到着するなり現地民を遠まわしに馬鹿にするのも、どうかと思うぞ。未央……」

「別に馬鹿にしてないわよ詠春。　　鈍い奴らだと思っただけで」
「ガイドが！　ガイドの人がこつち睨んでるぞ未央！」

詠春はガイドに頭を下げながら苦笑いをしている。詠春の気苦労の元凶は、そんな事など知らぬとばかりにナギと入国審査に赴く。入国審査自体は、たいした事ではなかった。大人が同伴しているとはいえ、二人の子供　　外面だけ子供のゼクトも含めると三人の子供が旅していると聞いて、係員が困ったような笑みを浮かべた。係員の困惑とは別に、手続きはスムーズに進み、預けていた荷物を受け取り、正式にオステイア入りを果たす。改めて周囲を見渡すと浮遊島の上に古風な建物が立ち並び、幻想的な風景を見る事が出来る。それを見て未央が思うのは、綺麗だのといった感情ではなく、

「やっぱり落ちそうで怖いわねえ、オステイアの人つてにぶ」

「やめる、頼むからやめてくれ。　　周りに現地の方々がいる」

「でもよ詠春、やっぱり怖くね？　　お前どう思っただよ、そこらへん」

「む……確かに、私も少々違和感がありはするが……」

旧世界出身であり、オスティアの歴史もあまり詳しくない三人に、アルが補足する。

「大丈夫ですよ、オスティアの浮遊島は島自体が魔力で浮いているものですから、魔力が消失でもしない限り落ちません。魔法世界でも極一部地域で魔力が無い地域はありますが、まあ、オスティアからいきなり魔力が消失するような事はありませんよ」

ナギと詠春はなるほど納得していたが、未央は少々微妙な思いを得ていた。

原作だと落ちるんだけどね。まあ、その時は【ものは下に落ちる】で島を無重力状態にすればいいか。

そう思い、気を取り直す。

「じゃ、とりあえず宿取って情報収集行きましょうか」

宿に荷物を置き、情報収集の為と、夕食をとる為に酒場と食堂を経営する店へ赴く事となった。情報収集といえば、酒場というのは定番である。しかし、同時に礼儀がいいとは言えない連中との付き合いも発生する。格好でアドバンテージを失うのは宜しくないと、未央は酒場にいく前に魔法薬を取り出した。それを見たナギが、未央に問う。

「ん？ ミオ、それなんだ？」

「年齢詐称薬よ、18歳くらいに体を変身させる奴。流石に5人中

子供が3人じゃ舐められるでしょ」

答え、未央は一人部屋に入る。中で軽い爆発音が聞こえ、すぐに扉が開かれる。年齢詐称薬で成長した未央を見て、アルが感想を漏らす。

「おやおや、見違えましたよ、ミオ。なかなか美人に成長するのですね」

「ふふん、いいわよアル。もっと言いなさい。まあ私もここまで変わると思わなかったわ」

成長した未央は、平凡を体言した子供時代とは異なり、なかなか見栄えする容姿となっていた。

長く腰まで伸びた黒い髪は、年齢相応に伸びた身長とよく合っている。体型はある程度、出るときところは出ており、引つ込むべき処は引つ込んでいる。黒い瞳は吊り目で、気が強い印象を相手に与える。印象を問われれば、『不敵な女』と返されるだろう。

「さて、じゃあ行きましようか。変なのに絡まれると嫌だから、適当に彼氏役してね、アル」

「ええ、承りました」

アルは一瞬視線を別に移し、了承する。疑問に思い、未央がアルが一瞬視線を移した方向を見ると、ナギが凄い顔をしていた。下唇を突き出して口を歪ませており、目線は未央に不満を訴えるように細めている。

「……ナギ、何その凄い顔」

「その魔法薬もう1個ねえの？」

「あるけど……」

差し出すと、ナギは少々強引に受け取り、部屋に入る。先ほどと同様に軽い爆発音が聞こえ、成長したナギが現れる。ナギはそのままに成長した姿で、やんちゃな子供から不敵な青年：いや、自信溢れる印象は頼もしさを感じさせる青年に成長している。ナギは笑顔に戻っており、未央に向かい、親指を突き出した手を掲げ、

「じゃ！ 俺がミオの彼氏役ってことで！」

「へあ！？ べ、別にいいけど、なんでまた！？」

「なんでもへちまもねえ！ じゃ、行こうぜ！」

ナギはそういうと、未央の肩に手を置き、強引に歩き始めた。未央はあたふたと困惑していたが、ナギに離す気がないとわかり、小さく縮こまる。

それを見ていたアルは、何かを閃いたような仕草をし、二人を呼び寄せてひそひそと何かを語る。二人はそれを受け、ニヤリと笑うとローブを羽織り、部屋に一枚のメモを残して宿屋を離れる。宿屋を出る三人の口元は、楽しそうに笑っていた。

「全く、酒場の場所知らないのに先に出ないでよ、ナギ」

「細かい事気にするなよミオ、謝ってるじゃねえか」

ナギが酒場の場所を知らず、三人とはぐれてしまった事を未央が知るのには宿を出て10分後の事であった。宿屋に戻り、合流しようと三人の姿が探すが、エントランスに姿が見えない。怪訝に思い部屋に戻ると、置かれたメモに気づく。

【みっちゃんへ、我々が情報収集に行ってきますので、お二人は遊

んできてください。 アルビレオ・イマより】

「……どういう事なの」

未央は困惑し、メモの裏面なども見るが、特に追記は無い。背中に冷たい汗が流れている事を感じ、言葉が出ない。沈黙が部屋を支配し、刻々と時間が流れる。部屋の外からはナギが呼ぶ声が聞こえ、足音が近づいてくる。

アル、一体どういっつもりなの……！？

未央が知る術は無いが、先ほど、三人の間で以下のようなやり取りが交わされた。

「いやあ……微笑ましいじゃないですか、年頃の少年少女らしいですね」

「そうじゃのう、ミオも色恋事には弱いようじゃな」

「やはり少年少女はかくあるべきだな。もう二人はほっっておいて私達だけで情報収集に行かないか？」

「詠春、何を言っているんですか。彼らはまだ10歳ですよ。」

「ちゃんと見ていてあげませんか、勿論見つからないように」

「そうじゃの。何せ二人はまだ子供じゃからの。心配じゃ！」

「……それもそうだな！（たまには私もこちら側に居たい、許してくれ、未央）」

このように、アルビレオ・イマ主催によるナギと未央の観察会が開催されていた。勿論、宿屋で困惑する未央も三人はしっかりと捉えている。アルは未央の様子を見て、満足そうに笑っている。

無論、アルとて考えなくこのような企みを実行したわけではない。ナギと未央とは未だ数日の付き合いではあるが、アルは二人 特に未央を気に入っていた。

少女らしからぬ賢しさを持ち、概念系統という新たな系統を操る天才。しかし、彼女を見ているとある事に気づいた。

何やら、ナギに対して遠慮をしていますね。

ナギは未央を頼りにしているのは見ていてすぐにわかったが、未央の態度が少々気になった。ナギに対して好意を抱いているのはわかったが、踏み込むでもなく、引くでもない中途半端な態度を取っている。自分が抱く好意に気づいていないのか、判断はつかないが、

突いてみれば、面白そうですね。思い立ったが吉日です。

自らの欲求に従い、アルは二人へ尾行を提案したのだった。首尾よく二人の同意を得られ、アルは隠れながら思う。

さあミオ、遠慮する事は無いのですよ……フッフ……

彼は、どこまでも胡散臭い、自分の欲求に素直な男だった。

第十四話 前編

(どうしてこうなった……)

心の中で頭を抱える。とりあえずと宿屋を出て通りに面した喫茶店に入ったまでは良いが、行き先が全く思い浮かばない。自分一人であれば、オステイア国立図書館にでも行き、魔法世界の雑誌でも読み漁るが、ナギが一緒ではそうもいかない。

さてどうしたものかと悩んでいると、ウェイトレスが注文したオステイアンティーと伝票を置き、一礼して去っていく。ナギは紅茶を手元に寄せると、一口も含む事なく紅茶にミルクを投入。琥珀色の液体が瞬く間に乳白色に変わっていく。

「ちょっとナギ、一口くらい飲んでみなさいよ。ここの紅茶は薫りがいいらしいわよ」

「別にミルク入れたくらいじゃ匂いなんて変わらないだろ、こっちのが飲みやすいぜ」

子供かあなたは、と内心突っ込みをいれるが、気づく。

そういえば子供だったわ。

年齢詐称薬で18歳の体に成長してはいるが、精神年齢は10歳だ。

ミルクティーを一口飲み、美味いと呟き笑顔になる。その笑顔はいつものナギのままだ。

笑った顔の印象は、意外と変わらないものね。

未央はストレートで紅茶を飲みながら、そう思った。

しかし、口に含んだ紅茶は意外と苦い。ミルクを入れ、ついでに角砂糖1つ放り込む。

「未央も入れるのかよ、子供だな！」
「あんだだつて入れたじゃない、お互い様よ」

互いに軽口を叩きながら笑う。落ち着いて考えれば、10歳の子供同士が遊びに行くだけだ、何の問題もないと思う。しかし、行き先は相変わらず決まらない。遊び歩くという経験は前世ではなかった。せいぜい友人と売店におやつを買いに行く程度で、今の状況には役立たない。

ガイドブック片手に観光名所でも巡ろうか、いや、少々違う気がする。それならば買い物でも行こうかと思っただが、旅に必要なものは揃っているし、そういった物を買う時ではない。

考えていると、ナギが立ち上がる。紅茶は既に飲み終わっていた。

「とりあえず歩き回ろうぜ！ 変わった風景だしな！」

「確かにそうね。浮遊島の国など変わった風景に違いないわ」

応えて立ち上がると、ナギが肩を抱いてくる。実に自然な動作であり、ナギの顔を見ると笑顔でこちらを見ている。

この女たらしが！ 思いながら、手を払う事はしなかった。

その様子を、怪しげな三人が少々離れたテーブルで見ている。

当然だが、アル、ゼクト、詠春の三人だ。店内でもローブを羽織ったままの三人は大変怪しく、ウェイトレスは若干引いていた。認識障害魔法がかかったローブではあるが、店内でローブを羽織っているという違和感を消す事は出来ない。

三人とも各々が飲み物を飲みながら、未央とナギを見て思い思い

の感想を漏らす。

「ミオは悩んでいますねえ、あまり遊び歩く子ではないと思っていましたが、予想以上に悩んでいますねえ」

「逆にナギは適当に笑っておるのう、あやつは多分何も考えておらんぞ。適当にぶらつく気じゃな」

「付き合いはじめのカップルのような距離感だな。私も婚約者となん頃があったよ……」

「おや、詠春は婚約者がいるのですか。貴方の伴侶になる方ですか、さぞかし器量よしなのでしょうね」

「そう思うか？ まあ事実として彼女はよく出来た女性だからな。なにせ彼女は」

詠春が婚約者との馴れ初めを話し始めるが、アルもゼクトも聞いていない。しかし、詠春は明後日の方向を見ながら話を続けている。

「おや、二人が店を出るようですね。我々も出ましょう」

「そうじゃの…… おい、詠春。戻って来い」

「しかしそこがまた……む、そうか尾行中だったな。すまないが、先に行ってくれ。手洗いを済ませてくる」

詠春が手洗いに立つと、アルとゼクトは二人を見失わぬ様、一足早く店を出て行く先を確認する。

詠春が戻ってくると、既に二人は店外に出ており、しょうがなく伝票を持って会計を済ませて合流すると、アルが二人の行く先を指し、行きましようかと歩き出す。ゼクトはそれに頷き、続いて歩き出す。

会計の話が出ない事で、詠春は気づく。

しまった、これはおごりの流れか！

未央とナギは喫茶店を出て景色を楽しみながら散策していると、バザーが催されている通りを見つけた。その通りでは、確かに未央やナギにとって珍しい景色を見る事が出来た。オスティアの国民達だ。

最古の国であり、更には人間種の北部と亜人種の多い南部の境に位置している事から、様々な種族が住んでいる。狼が二足歩行しているような種族に、人間に獣耳をつけただけのような種族、骨しかない種族も居る。最後のは悪魔ではないか？ そう思うも、普通に接客しており、受け入れられている。懐が深い国なのだろう。

「おいミオ！ あの骨しかねえぜ！ もう人っていうか骨だよな
すげえつくはあ！」

「人様を指差すんじゃないわよ、しかも発言内容が超失礼だわ。」

馬鹿を殴って一礼すると、相手は手を振って構わないよと笑う。
懐の広い骨だ。

「ミ、ミオ。 顎を勝ち上げるのはやりすぎだと思っぜ。 舌かみそ
うになった」

「そう思ったなら、次から人様を指差すのはやめなさい。 超失礼だ
から」

「俺の舌が軽く見られている……！」

ナギをあしらいながら、先ほどの骨の人（仮称）のバザーに目を向けると、様々なアクセサリーが並んでいる。屈み、断りを入れて

手に取ると、金属細工に色のついた硝子をはめ込んだ物とわかった。硝子とはいえ、製法により様々な色に変化する為、宝石に見劣りする事はない。前世からここまで、こういった装飾品には全く興味が無かったが、実際手にとって見ると興味深いものだ。

そう思っていると、骨の人から声がかかる。

「兄さん、女の子が興味深そうだよ。 どうだい一つ？」

「ん？ おおそうだな！ 買ってやるぜミオ！」

「む……そうね」

これといって欲しい装飾品も無いが、ここで買わないと応えるのは骨の人にも失礼だろう。

一通りの装飾品がそろっており、さてどうしたものかと考えていると、ちよつとした悪戯を思いつく。その悪戯を実行すべく、少々意地の悪い笑顔を浮かべながら、ナギに伝える。

「じゃあ、ナギが選んでくれるものが欲しいわ」

「俺が選んでいいのか？ じゃあどれにすっかなあ」

未央と位置を交換し、装飾品を選び始めるナギ。ククク、と意地の悪い笑みを浮かべながら立ち上がる未央。

子供の貴方には装飾品などわからないでしょう、困るがいいわ。ククク！

ふと骨の人を見ると、未央とナギを見比べ、微笑んだ気がした。骨だけの顔を見て微笑みを感じるのはどうかと思ったが、雰囲気だろう。しかし、そのリアクションに疑問を得る。未央としてはナギを困らせるちよつとした悪戯のつもりであったが、違う受け取り方をされたようだ。

手を頬に当て、少し考えると骨の人のリアクションの意味が理解出来た。瞬間、顔から蒸気が吹き出る。

（か、完全に恋人同士の会話だわこれ！ 不覚！ いや、別に個人的な欲求としては失敗ではないけど、転生者の目的に対してはやっぱりというか、なんというか）

少し離れた路地からその様子を見ている三人。

ナギは装飾品を選んでおり、未央はその後ろで腕を組み、待っているが、

「見てください、ミオは首と耳だけ真っ赤ですよ。奇怪な照れ方をしますね」

「耳はわかるが、首まで赤くなるとは……」

「初心じゃのう」

「初心なら首まで赤くなるのか……！？ 素直に顔を赤くするべきだろう」

壁に身を隠し、顔だけ出して二人を見守っている。顔が出ている順は下からゼクト、アル、詠春だ。

外見が子供のゼクトだけならともかく、いい大人であるアルと詠春がそうしている様子は大変怪しく、道行く人も引いている。

「さて、ナギが何を買うか予想してみましようか。一口ドラクマです。私は指輪で」

「流石にナギもそこまで大胆ではなかるう？ ワシは腕輪で」

「いや、ナギなら意味もわからず買う可能性もあるな……。私はヘアピンで」

予想が出揃うと同時に、ナギがある品物を手に取る、それは

「ヘアピン……ですって……?」

「意外にも手堅い選択じゃの……」

「深読みしすぎなのではないか? 彼らはまだ10歳だぞ」

珍しく表情を驚きに変えるアル、ゼクトもナギのチョイスに驚いており、詠春はそんな二人を見て呆れていた。二人は財布から1ドラクマを取り出し、詠春に渡す。詠春としては、先ほどの喫茶店での取立てが出来たので僥倖だ。

改めて三人が未央とナギの様子を見ようと顔を出すと、

「おや、二人とも居ませんね」

「詠春に金を渡していたおかげで見失ったようじゃのう」

「私のせいか……!? 誰が当たってもそうなたただろう?」

「詠春、世の中結果ですよ」「そうじゃな、世の中結果じゃ」

「厳しい……世の中が私にハードモードだ……!」

「とにかく、一刻も早く見つけなければ、面白い場面をみのが……もとい、二人が心配です」

アルの一声で、三人は別れて未央とナギを探し始める。

詠春は純粹に二人の心配をし、ゼクトはあの二人ならほっというも大丈夫じゃろと思いつながら探す。

アルだけは、個人の娯楽半分、未央への応援を半分心に秘めて探し始めた。

第十四話 後編

ナギが装飾品を手に取り、空へかざして自分と見比べる。幾つもの装飾品を見比べており、時折漏れる唸り声から、彼が真剣に悩んでいる事を察する。

彼の視線がこちらを向いていない事から、頭を冷やす事が出来た。冷静になった頭で考え、思ったのは、

ありがたいわね。

自分は最初、彼を困らせる悪戯のつもりで装飾品を選んでほしいと提案した。彼はそれに対して即答し、今も悩んでいる。その真剣さありがたい。

重ねて思うのは、彼は自分の事をどう想っているのだろうかという事だ。嫌われているという事はないだろう、それは確信している。好意を持たれているだろうとも、思う。しかし、その好意がどういった好意かはわからない。相手は10歳の子供ではあるが、だからといって思いは変わるものと疎かに扱っていいものではない。どういった種類の好意にせよ、それに対する態度を取る為には自分の気持ちを確認しなければいけない。

「オ、い、ミ」

白状してしまえば、間違いなく好意を抱いている。LikeではなくLoveである自覚もある。

なんでここまで惚れこんでしまったのか。

原因を探ろうと、共に過ごした七ヶ月を振り返る。ノギに保護してもらい、一ヶ月を彼らの家で過ごした時は、そんなに変わった事は無かったと思う。彼に対してやった事を言えば、朝は起こして食

事を共にする。昼は別行動、夜は出迎えて食事出して風呂にぶちこんで、雑談して就寝だ。

その後の六ヶ月、魔法学校に入学してからも大して変わりではなく、昼にナギと一緒に居る場所が学校に変わっただけのようなものだ。学校では、ナギと一緒に居ると他の生徒も寄り付かなかったため、結果として二人だけで行動する事になった。

そういえば、最初からナギからの好感度高かったようなやつぱり二人で行動してるからかしらねえ。

「ミオ！ おおいミオ！ 無視は流石にキツイぜ！？」

「ん……ごめん、ちょっと考え事してたわ、何？」

「何ってというか、アクセサリー選んだからやるぜ」

やば、考え事してて忘れてたわ。

途端に顔に熱が湧き上がってくるが、気合を込めてなんとか平静を保つ。耳と首が熱を持っている気がするが、気にしないでおこう。彼の手を見ると、赤いガラス細工で翼をあしらったヘアピンを持っている。紅い翼 なるほど、そういうの好きなのね、こいつ。

ありがとつと、受け取るつと手を出すと、骨の人から声がかかる。

「いやいやお兄さん、そういうプレゼントは手渡しじゃなくて、つけてあげるんだよ」

「おお、なるほどー！」

「……Oh」

何を言っているんですかねこのスカルマン。

スカルマンの言葉を受け、気軽な足取りでこちらに向かってくるナギ。

「ナギ……あんた、ヘアピンの着け方知らないでしょ？ 別にいい

わよ?」

「おいおいミオ、いくら俺が馬鹿でもヘアピンくらいつけれるぜ！
遠慮するなよ」

絶対絶命ね……！

ナギが軽い足取りでこちらに向かい、髪に手をかける。

距離が近い。自分の顔の横にナギの顔があり、息遣いまで聞こえる距離だ。

スカルマンを見ると、笑いで肩を揺らしている。顎抜くわよこの肉抜き。

「ミオ、あんま動かないでくれよ、髪がずれちまう」

「お、おうよ!」

ナギがもう一歩踏み込んでくると、体が密着する。

近い、近すぎるわよ!?

自分の胸と彼の胸が当たっている、もはや抱き合ってるようにしか見えない。

骨抜き野郎は笑いすぎで全身からカタカタ音を鳴らしている。こいつ絶対砕いてやるわ。

「! ! ! ! ! ?」

「よし、出来たぜミオ」

声を上げずに悲鳴のようなものを発していると、ナギから声がかけられる。

体が離れ、胸に冷えた空気が差し込んでくると、気分もだいぶ落ち着いた。

自分の左側の髪がヘアピンで留められ、サイドテールになっている。

軽くまとめられた髪は、ただ伸ばしていたよりも軽く感じた。
お礼を言おうと、ナギを見る為に顔を上げる。

「ナギ、ありがとう」

見た。ナギではなく、その向こうに居る白い髪を。

未央はヘアピンを撫でて、髪留めの感触を確かめている。
それは笑顔で、少なくとも自分の選択が間違っていない事が確認
出来た。

彼女は顔を上げ、笑顔でこちらを見ると、

「ナギ、ありがとう」

声が途中で止まる。笑顔だった顔は驚きに満ちている。

「おい、ミオ。どうしたんだ？」

「ごめんナギ、ちょっと行ってくる」

言って、彼女は駆け出す。

「なんだなんだ？ おいミオ！ 待ってっ！」

骨人間にヘアピンの代金を渡し、急いで未央を追う。
すぐに追いつき、併走するも未央は一向に止まる気配を見せない。
未央の視線の先を見ると、白い短髪の男が見えた。

「知り合いか？」
「……」

未央は答えない。ただ目の前の男に目を向けており、こちらに意識を向けていない。

彼女の表情は、何か急いでいるようにも見えて、普段の余裕や落ち着いた雰囲気は無い。

なんだってんだ？

彼女がこんな様子になる処は見た事が無かった。随分前に、自分が彼女の本を燃やした時だって怒りはしたが、ここまで余裕をなくしたりはしなかった。

「ナギ」

「ん？ なんだ？」

急に声がかかる。しかし、彼女の視線はこちらを捕らえていない。

「ごめんね」

「は？ 何を言って」

【・ わかりあえるものはない】

声が聞こえたと同時に、未央が自分に向かって手を振り上げる。

しかし、その行動の意味が理解出来ない。自分の後頭部に向けて打撃を繰り出そうとしているが、その行動の意味が理解出来ず、リアクション出来ない。

なんだこれ、意味がわかんねえ！ 未央は俺に何したんだ！？

間違いなく彼女は見えているが、わからない。彼女が自分に殴りかかってきているが、わからない。

その意図、その行動が何を意味するか、何一つ分からない。

思っていると、打撃が来た。後頭部に手刀が直撃し、意識が闇に沈んでいく。

最後まで、未央の行動の意味を理解出来ずに。

崩れ落ちるナギを抱き寄せ、近くの壁に寄せ掛けると、走り出しならアルに念話を送る。

(アル、ナギが倒れたわ。悪いけど迎えに来て)

(ミオ？ わかりました、どこですか？)

ナギの位置を教え、アルが何か言っているが、念話を切る。そして追う相手を見る、白い短髪に白い肌、ブレザーのような服を着込んだ青年。

間違いない、アーウェルンクスね。

秘密結社「完全なる世界」の中枢に近い男だ、これから始まる戦争の黒幕といってもいい。彼をここで倒してしまえば、戦争の開始を遅らせる事が出来るはずだ。その間に力をつけて、戦争が始まる前に「完全なる世界」を潰してしまえば

最大の原作ブレイク、やり遂げてしまえばネギの母親が誰かなんて些細なブレイクね……！

思いながら、尾行を続ける。相手は自分の庭を歩くように気楽な足取りで、オステシアの深部に歩を進める。既に一般人は立ち入る

事が出来ない区画だが、彼は歩みを止める事はない。何度かオステアの警備兵とすれ違うが、アーウェルリンクスに視線を送らずに立ち去っていく。

認識障害魔法かしら、何にしてもこの先に相手の拠点があるのは確実ね。

自分は相手に無視させるような認識障害魔法は使えない、代わりに「わかりあえるものはない」概念を自分と相手の周りに展開し、相手が困惑している隙に通り抜ける。そうやって自分もオステアの深部に侵入して行く。見つかったら、間違いなく犯罪者だ。念のため、ナギを置いてきてよかったと思う。

失敗しても、私が犯罪者になるだけですもの。

元タイレギュラーである自分が消えるのはいいが、ナギが「完全なる世界」に捕まるのは不味い。

後に始まる戦争で英雄となる紅き翼のリーダーたる……いや、

私の我侭ね。

これは独占欲だ。前世では持ち得なかった感情が、今の自分を突き動かしている。

戦争さえ起きなければ、ナギとアリカが出会う事は無いだろう。今の5人組で世界を回り、賞金稼ぎや困った人の手助けをして、いずれあの家に帰る。

そうする事が出来る。思わず口元が緩むが、気を引き締めてアーウェルリンクスを見る。

既に周りは都市部と連なる王宮区画の最深部である「墓守り人の宮殿」に近づいている。ここから先は、敵の本拠地だ。

「ここで叩く！」

無詠唱で魔法の矢を展開する。そして【攻撃力は無限大となる】の概念を自分の周りに展開しようと思った時、敵が振り向く。

気づかれた！

逃げようと振り返ると、筋肉質で髪の毛の長い男が背後に聳えていた。左右も別の男達が控えており、完全に囲まれている。

「誰だろうね、君は。誰か招いたつもりは無いよ」

「アポ無しの突撃取材って奴よ、私雑誌の記者なのよ」

「自分でも無理だと思っただけはつかない方がいいよ。相手にもバレているからね。そもそも魔法の矢を相手に展開する記者は居ないだろう？」

アホか、私は。

しかし、魔法の矢を解除した瞬間、自分の取れる手段も消える事になる。敵を確認してみる。

アーウェルンクスは、左手をポケットに入れ、右手はリラックスしながら掌をこちらに向けている。いつでも魔法を放てるだろう。

背後に居る筋肉質の男は、真っ赤な髪の毛を伸ばしっぱなしにしており、その髪の毛は炎に変わっている。また、全身の筋肉からいかに格闘家である事を思わせる。

右の男は、黄色い髪の毛を逆立てており、ノースリーブの上着から見える腕は鍛えこまれている。タイプは違うが、こちらも格闘家だろう。

左の男は、水色の髪の毛が腰まで伸びている。ローブから覗く服は、黒いスカートのように見える事から、恐らくこちらは魔法使いだろう。

「いやあ……大ピンチって奴ね、これは」
「そうだよ、素直に降伏して目的を話してくれるかな」
「そうね……貴方達の目的を教えてくれたらいいわよ？」
「それは出来ないね、じゃあ正直に話してくれるようにするとしようか」

周囲の相手が一步踏み出す。同時に概念を展開する。

(半径100mってどこね！)

【・ わかりあえるものはない】

概念を展開し、上空に飛び上がる。しかし、敵が一步上手だった。飛び上がった未央の更に上空から、影の矢が襲ってくる。

真上の警戒を怠った未央に、影の矢が直撃。四肢を貫かれ、流血するも、彼女は堪えて浮遊術を維持する。しかし、浮遊術の維持に意識を向けた為、概念が解かれる。途端に、更なる迎撃が飛ばされる。上空には先ほどの影の矢が更に飛んできており、他にも巨大な石柱が展開される。下からは、火炎と雷撃、更には水撃が襲いかかってくる。回避する事は不可能だ。

隠し玉だったけども！

思い、ある概念を展開する。直後に彼女に全ての攻撃が着弾した。着弾の余波で煙が上がり、彼女の姿は見えなくなった。

「死体くらい残るかな？」

アーウェルンクスは、後方に控える黒衣の魔法使いに念話で礼を言う。

万が一に備えて、距離を置いて待機してもらっていたけど、功を奏したようだね。

侵入者を覆う煙を見るが、一向に落ちてこない。未だ生きているのだろうか。

念のためと、新たに石柱を一つ上空に展開し、煙へ向かって放つ。石柱が煙を貫き、大地に直撃する。手ごたえが無い。疑問に思い、石柱を5つ展開し、煙を包み込むように放つ。やはり手ごたえは無く、石柱同士がぶつかり、煙を新たに巻き上げるだけだ。

周囲の仲間も疑問に思い始め、煙を訝しげに眺めている。耳を澄まして様子を見てみると、途端に声が聞こえた。

「テスト・テイスティ・テストメント！ 影の地 統ぶる者スカサハの 我が手に授けん 三十の棘もつ霊しき槍を！」

少女の声だ。しかも魔法の詠唱をほぼ完了している。しかし、その魔法は単体魔法の「雷の槍」だ。仲間達と共に防御を固めるが、自分が対象でないとわかった者は即座に少女に止めを刺す。

「雷の投擲！！」

魔法が完了し、煙から雷が現れる。しかし、現れた雷は煙から出た途端に、詠唱の言葉通り30に別れる。30に分裂した雷の槍は、アーウェルンクスを含む4人だけではなく、遠方で控える影の魔法使いにも向かっていく。驚愕を覚えながらも、魔力障壁に力を込めるが、雷の槍は軽々と障壁を砕き、アーウェルンクスの右腕を切り裂いた。

「何……!!」

アーウェルンクスの魔力障壁は、完全なる世界の仲間だけが使える多重防御結界だ。その防御力は防御系最強魔法である最強防御すら越える。それを易々と貫き、右腕を持っていかれた驚きは表現出来るものではない。思わず呻きながら煙を見ると、彼女は白い槍を携えている。先ほどは持っていなかったものだ。彼女自身は、影の矢による四肢の怪我以外、衣服が焦げているだけだ。

「何者だい……?」

「あんた達の敵である事は、確かよ……!!」

彼女の発した声は消耗している事を隠しきれておらず、追い込まれている事はわかった。しかし、アーウェルンクスを含む仲間達も先ほどの雷で負傷している。にらみ合いが続くと思われたが、少女はこちらが手を出しあぐねていると察し、逃亡していく。

「追いますか?」

「……やめておこう、相手にも仲間が居るかもしれないしね」

それに、追わなくとも相手を始末出来る方法はあるよ。

未央はオスティア王宮の上空を飛翔していた。

「完全なる世界」との初戦は完全に失敗とあっていいだろう。そもそも無謀な試みだったかもしれない。切り札として展開した概念は【期待外れ】という概念だ。相手の期待した結果を必ず外す概念

であり、明確な殺意を持った相手には生存手段として有用だ。しかし、魔法同士が干渉し、相殺する際に発生する余波は相手の期待に含まれない為、少し衣服が焦げてしまった。

まあ、生きて撤退出来ただけ僥倖ね。

手に持つ槍に感謝する。アーティファクトで造形した槍は、槍と砲を一体化させたような武装であり、概念槍「G i - S P」と名づけた。雷の槍の詠唱を聞き、元となった槍であるゲイ・ボルグを模して作った武器だ。ゲイ・ボルグは投擲すれば三十に分かれて相手の軍隊を切り刻んだと言われており、刻んだ概念は【投じれば三十に爆ぜる】【敵さん大当たり】【攻撃力は無限大になる】の三種類。今後、大量の敵と当たる可能性を考えて試作したものだが、早速役に立った。

インスピレーションに感謝……！

思いながら、王宮を抜け、市街地に入ると人ごみを避けるように地上へ降りる。

すると、巨大なテレビスクリーンが目に入った。アナウンサーは、こんな事を言っている。

「速報です。先頃オステイア王国の重要地域にて、爆破テロが発生。犯人の姓名や所属団体は不明ですが、警備に当たっていた魔法使いが容姿の撮影に成功しています」

映し出された映像は、18歳の未央の顔だ。

だ、大失敗……。

人気の多い通りに出ようとした足を止め、まずは魔法薬を解除しようとする。

すぐに解除できた為、10歳の体となった未央は安心して通りに入るも、別の介入があった。

(ミオ！ おいミオ！ 今どこだ！？ テレビでミオ映してるぞ！)

(ナ、ナギ……ごめん、ごめんなさい……)

彼の声を聞き、安心すると共に、

もう駄目だ、彼らと離れるしかない。

絶望する。

紅き翼は確かに一時期テロリストとして手配される。しかしそれは4年後の話であり、彼ら自身が「完全なる世界」を敵と認めた時だ。今の彼らは、「完全なる世界」など知らず、ナギも未だ成長期だ。犯罪者であり、「完全なる世界」にマークされた自分が居ては危険すぎる。

(ごめん……そういうわけで、合流出来ない)

(おいミオ！ いいから訳を)

念話を一方的に切り、宿ではなく、オステイアの外へ向けて駆け出す。

既に日は落ち、暗い。まるで未央の行く先を案じるが如く。

第十五話

オステイアから飛び出し、地上の森に下りる。夜の暗さと森の深さで下手な追っ手からは逃れられるだろう。月が雲に隠れ、僅かな星の光も森の木々に遮られており、眼前は一切の闇だ。

その中を、一人歩く。足元が全く確認できない為、木の根に足を取られてしまい、転ぶ。

痛いわよ。空気読みなさい、木の根め。

うつ伏せに転がったまま、そう思う。手足は先の戦闘で負傷しており、簡単な血止めはしたが、治療は出来ていない。何故か、概念能力も展開出来ない。気分が最悪な事が影響しているのだろうか。魔力はあまり残っておらず、手足の痛みで体力も削られていく。頼みの綱だった概念能力も使えない。

状況は最悪とあっていい。オステイアで手配された姿は18歳のものだが、入国管理局に保管されている入国者リストを確認されれば、10歳の自分の写真が見つかるだろう。ただの年齢詐称薬に認識阻害効果はない。すぐに看破される事だろう。

ここまで悪い要素しかないと、笑えてくるわね。

衝動的な一手で、ここまで状況が悪化するとは「完全なる世界」を甘く見ていた。転がったまま仰向けになり、空を見上げようとすると、森の枝葉に遮られ、星を見る事は出来ない。

ふと、前世の事を思い出した。あの頃も、今のように病気で痛む体を堪えて、カーテンとコンクリートで出来た闇の中、蹲っていた。その時に感じていた感情が、今の心にも伝播しはじめる。それは、不安と孤独感だ。ナースコールをすれば看護師は駆けつけてくれる

が、自分の病気は原因不明だった。急に手足が痺れば、ボタンを押す事も出来ない。夜は常に恐怖の時間だった。眠る前は、せめて痛みを感じないようにと祈り、目を閉じる。無事に朝を迎えると、安心する反面、まだ続くのかと思った一面もあった。今の状況は、それを思い出させる。

やば、泣きそう。駄目だ、泣いたら流石に心を立て直せない。

必死に涙を堪える。怪我に力を込め、痛みで孤独感を誤魔化そうと試みるが、今度は痛みで涙が出そうになる。力を抜き、体を大字にして息を吐くと、冷たい空気が肺に入り、体を冷やしていく。

そういえば、転生してこの世界にデビューした時も森だったわね。

よく昔の事を思い出す日だ。あの時は、初めて訪れた森への興味と、先の展開への楽しみで満ちていた。それが今はどうだろう、衝動的な行動で指名手配を受け、負傷した身で仲間の下から飛び出した。

嫌になるわ……天罰って奴かしらね。

そう思う一方、思考がループしているな、と考える。自嘲的な思考がひたすらに巡っており、前向きな考えが浮かんでこない。なんとか立て直そうと必死に前向きなイメージを作ろうとするが、どうしても自分が指名手配されたニュースの画面がフラッシュバックする。

やめた、諦めて寝ましょう。

ローブを羽織り、眠ろうと目を閉じると額に何か落ちる。何が落ちたか確認しようとする手を持ち上げると、その手にも何か落ちた。水滴。雨だ。

ぽつぽつと降り始めた雨は、すぐに本降りとなる。雨を避けようと木の根元に這うが、木の幹を伝って流れる雨に濡れてしまう。ずぶぬれになった自分の体を確認し、思わず笑いが漏れる。

「悲劇のヒロインごっこ……！」

叫び、倒れ込むように上半身を木の幹に預ける。ますます体が冷えるが、最早知った事ではない。

まずは眠ろう、そう思い目を閉じる。

枝の折れる音が雨音の中で響く。

眠っていた未央はその音で目覚め、音のする方角を確認する。

その方角からは、枝が折れ、木々の軋む音が近づいてきている。

体の状態を確かめると、肌や筋肉は冷え切っており、指先が震えている。加えて魔力は回復しておらず、万全には程遠い。概念能力も試したが、能力が発動する兆しささえ見せない。

「なんで使えないのかしらね……！」

彼女は自らの手を見る。概念能力は手から発生するものではないが、感覚的なものである。

一際大きく木の軋む音が響き、暗視の魔法を使用して相手を確認

する。

夜に溶けるような黒い毛皮、獲物を睨みながら光る目、むき出しになった牙に全長5mにも達するような体躯を持った四本足。

黒く、巨大な狼だ。

彼女に補足された事を察したかのように、狼は吼える。その咆哮に誘われるように、周囲から同じ咆哮があがり、群れである事を彼女に悟らせる。彼女は交戦を選ばず、逃亡しようと浮遊術を使用して空へ上がる。雨粒が目に入り、煩わしいと手で拭いながら高度を取り、狼達の様子を見る。空へ上がった彼女を見て、狼達が咆哮すると、それに呼応するように魔法の矢が発生、彼女に向かって放たれる。

「そんな……！ 高位の魔獣は魔法使うって聞いたけど、それが群れてるなんて！」

振り切ろうと上下左右に旋回するも、魔法の矢に付与された追尾性能を超える事は出来ない。彼女自身の体調が悪い事もあり、じりじりと魔法の矢に囲まれ始める。逃げながらも魔法の矢を相殺していくが、狼達が新たに矢を展開するペースの方が速く、数は減るところが増えている。

「…これは駄目そうね。いや、丁度良かったかしら。魔獣の腹の中なら見つかりはしないでしょ……」

そう呟いた彼女の瞳には、既に光が無い。抵抗の手を止め、群がる魔法の矢に視線を向けている。旋回を止めて滞空すると、魔法の矢が殺到する。一発、二発、三発と少女へ向かうも、彼女の魔力障壁が自動抵抗し、軌道を捻じ曲げる。四、五、六と続けて抵抗するも、魔力障壁は早くもひび割れ始めた。少女の表情は変わらない。

ただ無表情に魔法の矢を見つめる瞳は、罪を受け入れ、罰を待つ罪人のようだ。

七発目が魔力障壁と拮抗し、続く八発目が七発目とほぼ同箇所に飛び込む。

硝子の割れるような音と共に、少女の魔力障壁が消滅する。

九発目は彼女の頭部に直撃し、その勢いで彼女は後ろに吹っ飛ばす。吹っ飛んだ先にも魔法の矢があり、背中に突き刺さるように直撃。背中を突き上げられ、胸を逸らす少女の目は、自分の髪が舞い上がるのを見た。

その髪には、少女が少年よりもらったヘアピンが留められていた。

少女の手が伸びる。ヘアピンを手に取るうとしたが、魔法の矢によつてヘアピンごと頬を強打される。口から歯の折れるような音と、頬からは硝子の割れる音がした。同時に、少女の中で何かが切れる音が響いた。

「あ」

間隙無く降り注ぐ魔法の矢に対して、少女は反応を返し始めた。魔力障壁を張りなおし、浮遊術を切る。結果として、真下から襲う矢の群れを突き進むように落ち始めた。残り少ない魔力を全て障壁の強化に回し、囲みから抜ける事に成功する。

「あんたら」

地面に墜落直前に浮遊術を展開し、衝撃を和らげながら着地すると同時に狼の群れに向かって突撃する。

「許さないわよ……！」

少女の表情は既に変わっていた。怒りに燃え、体中から怒気を発して狼に向かって走る。狼が少女に向かって飛び掛る。5mを超える体躯と2mにすら届かない少女の小柄な体では、質量差がありすぎる。しかし、少女はそんなものは知らぬと狼に向かって拳を放つ。打撃音が響き、巨大な影が吹き飛ばす。少女の拳が狼を吹き飛ばした。

【・ 攻撃力は最大となる】

概念能力が発動している。先ほどまでの無気力な状態から一気に怒りの絶頂まで上がった精神状態は、再び概念能力を展開し始めた。ヘアピンを壊し、少女の感情を怒りに染めた時点で戦闘の結果は確定した。

数分後、周りには何も残っては居なかった。

戦闘の余波で森は吹き飛び、狼達は途中から撤退していった。

追撃しようとも思ったが、魔力も残っておらず、意味も見出せなかった。

未だ雨は止まず、体を打っている。

手に壊れたヘアピンを持ち、確認する。

ヘアピンは硝子が割られており、金属で出来たフレームしか残っていない。

そのフレームも歪んでおり、原型を止めていない。

「あ」

思わず、口から嗚咽が漏れる。駄目だ、泣いては駄目だ。泣いている場合じゃないのだ、これだけの騒ぎを起こしたのだ、オステイア警備隊が駆けつけるのは時間の問題だ。

しかし、

「あああああ！」

嗚咽が止まらない。膝が落ちる。壊れたヘアピンを胸に寄せ、後悔する。

何故こんな事になってしまったのか。

先ほどまでの怒りの反動か、胸に悲しみが溢れてくる。

背後から、足音が聞こえた。

必死に泣き声を止め、立ち上がり振りかえろうとする。

「ミオ」

ナギ。なんでここに。

少し考えれば分かる、森を吹き飛ばす程の戦闘を繰り広げたのだ、誰かに発見されるのは当然だろう。しかし、よりもよって、何故ナギなのだ。

「……何よ、テロリスト捕まえに来たの？」

「俺が、そんな事すると思ってるのか？」

ナギの声色は感情が見えない。

こんな声は初めて聞くわね。

「話をしようぜ、ミオ。こっち向いてくれよ」
「話なんて無いわ。じゃあね」

逃げるように、いや、事実彼から逃げようと歩き出す。
しかし、彼が目の前に立ち塞がる。疲労困憊のこちらと違い、あちらは万全なのだ。

逃げ切れるわけがない。顔を上げて、彼の顔を見る。
ナギの瞳は、真っ直ぐに少女を見ている。その目に疑念はなかった。

「……何よ」

「ミオ。後悔しないか？」

「……何の事が分からない。今回の事なら後悔なんてしないわよ」

嘘だ。しかし、後悔があるといってもどうしようもない。

「ミオ。戻ってこいよ」

「戻りたくないのよ」

嘘だ。戻りたいが、戻っては迷惑がかかる。

「ミオ。俺の事嫌いだからか？」

「そうよ！」

ナギにたたきつけるように声を出す。

彼はその答えに、そうか、と応答しながら近づいてくる。

後退しようとするが、ナギが未央の手を取り、指で未央の手に文字をなぞる。

せかいにはしんじつしかない

慣れない手つきで、文字をなぞり、良しと声をつく。自分が彼に教えた、嘘をつくなどという概念の文字を。彼を見ると、表情は笑顔で、自分を見ている。

「ミオ、お前は俺についてきてくれるって契約してくれただろ。俺は、ミオを信じてる。だから、話してくれよ」

「……」

手で体を引き寄せながら、ナギは言う。体が近い、手からは彼の体温が感じられる。

彼は再び自分に問う。

「ミオ。後悔しないか？」

「……後悔してるわ」

後悔している、誰にも相談しなかったし、誰も信頼していなかった。

「ミオ。戻ってこいよ」

「戻りたい、戻れないのよ……」

戻りたい、しかし、戻っては皆に迷惑をかけてしまう。

「ミオ。俺の事嫌いか？」

「好きよ」

言った。

更に手が引き寄せられ、自分の体が彼の体に飛び込む。手が背中に回され、抱きしめられる。

暖かい。体温だけではなく、彼の心遣いから、そう思った。

「テロリスト？ 賞金首？ かまいやしねえよ。言ったら、ミオが居てくれれば、俺は無敵だぜ。」

傍に居てくれ、ミオ。俺もお前が好きだ」

「……わかった、でも覚悟しなさいよ。私は嫉妬深いんだから」

ああ、と返答して、未央の頬に手が当てられる。

更に体が引き寄せられ、顔が近づく。ふと引き寄せる力が止まり、ナギを見ると顔が赤い。

意図に気づき、思わず笑顔になる。

目を瞑ると、再び背中に回された手に力が入る。

お互いの息がかかる。それに気づいたように、ナギの息が止まる。最後の勢いとばかりに引き寄せられ、口付けをする。

勢いが強すぎ、お互いの歯がぶつかるが、構わず続ける。

「血の味がするな、ミオ」

「こつという時は、嘘でも気の利いた事言いなさいよ、ナギ」

視線を合わせ、笑いあう。最早迷う事は無い。

ここに居ていいだろうかとは、尋ねない。ここに居ようとして、そう決めた。

かつて本で読んだフレーズが心に響く。

「さて、そろそろ私達とも話し合いませんか、ミオ」

全く予想外の声が聞こえ、思わず停止する。視線だけナギの後ろに送ると、アルだけではなく、詠春とゼクトも控えている。アルはいつも通りの微笑を携えている。詠春は困ったように笑い、ゼクトはやれやれと瞑目している。

「……いつから見てたの？」

「最初からですよ」

悲鳴と共に、思わず頭を抱えた。

信じてもらえるかはわからないが、と前置きして事情を話し始める。

これから始まる北部と南部の戦争の事、「完全なる世界」の事、追った少年がその中枢に居る事。

戦争が始まる予兆があるとはいえ、妄言の域を出ない情報だが……

「なるほど、そういう事ですか」

「ええ〜……なんで信じてるの、アル。自分でもどうかと思うわよ」

「まあ、私はミオがそういう存在である事を薄々感じていましたからね」

馬鹿な、と思っていると、アルは懐から何冊か本を取り出す。

貸していた「終わりのクロニクル」だ。

アルは本を捲り、最終ページで止めると、

「終わりのクロニクル、初版発行 2003年6月。おや、今何年でしたかね。私の記憶する限り、1978年だったと思いますか」
「え、えええ！？ そ、そんなバレ方！？ そういうのあり！？」
「迂闊でしたねえ未央。ハハハ」

持ち物から身元バレするのはドラマの定番だが、まさか本の奥付でバレてしまうとは予想外だ。

アルは笑い終わると、満足したとばかりに一息つく。

「まあ、こんなもの無くとも、ミオの目を見れば嘘を言っていないのは分かりますからね。信じますよ」

「かつて手合わせした身だ、私も未央が嘘をつく人間かどうかは分かっているつもりだ」

「ワシはどつちでも良いが、まあお主はナギに惚れる馬鹿じゃからの。嘘は言わんじやろう」

三者三様に信頼を寄せてくれている。その事実には、先ほどとは違う涙が出そうになる。

その様子を察したナギが肩を抱いてくる。最早遠慮なくそれに甘える。

「さて、子供カップルがイチャイチャし始めましたので、今後の方針を話しましょうか。

まずはオスティア：ウエスペルタィア王国の領土からは離れましょう。

そうですねえ、アルギユレーまで行けば、早々捕まらないでしょう」

アルギユレー、正式な地名をアルギユレー大平原と言う。オステ

イアから北部に位置しており、メセンブリーナ連合の領土ではあるが、平原に魔獣が多く住み、遊牧民が住む程度だ。国として成り立つ程の大都市が無く、連合軍の兵士も国境にわずかな数が配備されているのみで、逃亡先としては最適だ。

「逃亡生活になりますが、まあ気楽にやっていますよ。」
我々五人が揃っていれば、早々負ける事はありませんよ。」

アルが一同を見渡し、微笑む。一同はそれを受け、頷きを返す。方針は決まった。異議のある者も居ない。各々がまずは今晚の準備と動き始める。

だから、言い損なっていた言葉を言う時だ。

「皆……その、ありがとう……」

言葉を受け、皆は笑う。

アルと詠春は見張りの為、テントを出る。

アルが空を見ると、雨は上がり、月明かりが周りを優しく照らしていた。

第十五話（後書き）

今回で10歳編は終わり、次回から14歳編になります。

第十六話

未央とナギは王都オスティアへ向かい、地上を疾走していた。その速度は地上を走る姿からは想像出来ない程の高速だ。魔力で強化した身体能力に加え、概念能力による重力制御を駆使しての高速移動。その結果、二人は人が走るといふ行為で音速に迫る。

その速度がもたらす結果は、空気を裂いて走る轟音と衝撃波による周辺への被害だ。周辺に人が住んでいる場所はない為、人的被害は無いが二人の通った後は木々がなぎ倒されている。

そこまでして急ぐ理由は、オスティアがついに帝国から侵攻を受けているという情報を得たからだ。未央がオスティアでテロリスト認定を受け、賞金首となつてから四年が経過しており、オスティアへ近づく行為はデメリットが多い。しかし、オスティアが帝国の手に、背後にある>完全なる世界<の手に落ちるのは危険と未央とアルは判断した為、援軍に入る事となった。当然>紅き翼<全員で援軍に入る予定ではあつたが、出発準備をしている処に帝国軍の>紅き翼<討伐隊が乱入してきた為、二人が先行する事となった。

二人はオスティアを見渡せる位置にある小高い丘へ到着。時速1200kmを超える速度から急停止をかける。地面を削り取るように滑りながらも、なんとか停止する。丘の上からオスティアを見渡すと、既に都市部に戦火が上がっており、遠くからでも火事の煙を確認出来る。

「ナギ！ もう戦闘が始まつてる！」

「遅かつたか！ 未央、今回は>黄昏の姫御子<が出るつてマジか！」

「私の知つてる歴史とまだ変わつてないなら、出てるはずよ。オス

ティア防衛の要ですもの」
「ち……気にいらねえぜ」

>黄昏の姫御子<とは、オスティアの王族のとある少女の呼び名だ。

魔法無効能力を持ち、帝国の高い魔法技術だろうと無効化する為、防衛拠点として配置されるのだろう。しかし、魔法以外に対してはただの少女だ。帝国の主力兵器である鬼神兵や質量兵器で簡単に命を落とす。そして、>完全なる世界<のメインターゲットだ。

「まだ小さな女の子なんだろ!? 何だってそんなもん担ぎ出すんだ!」

「それしか手段が無いからよ。それに、その子を助けに今から行くんでしょ」

未央はアーティファクトを展開、2本の杖を作り出し、片方をナギに渡す。杖自体は、簡素な木造の杖に見えるが、当然の如く概念によって強化されている。【魔力効率最大】【疲労は魔力となる】と二つの概念が杖の内部に刻まれており、戦闘が長期化しても魔力切れを起こす事なく戦闘を続けられる特製の杖だ。

二人は杖に跨り、勢いよく戦場へ飛び込む。黄昏の姫御子が配置されている尖塔を探しながら、戦場の空を翔ける。

戦場を見渡すと、帝国軍の空中戦艦と鬼神兵がオスティアの防衛陣を押し込む形で展開されている。帝国軍の主力である空中戦艦と鬼神兵。空中戦艦は鯨のような形状をしており、機械仕掛けの鯨が空を飛んでいるようにしか見えない。鬼神兵は人型兵器だ。個体ごとにサイズは異なるが、2m程度の個体から50mを超える巨大な個体も存在している。

両兵器ともにヘラス帝国の高い魔法技術によって生み出されてお

り、強固な魔法障壁、精霊砲を標準装備している。

一方、オスティア防衛陣を形成しているのは浮遊島を利用した固定砲台だ。大出力の精霊砲を浮遊島へ配備し、物理的に強固な建築物でそれを覆う事で射程内の敵を撃墜する設備だ。

既に一部の防御陣は決壊しており、オスティアの劣勢は見て明らかだ。

そんな中でも、鬼神兵と空中戦艦が不自然に大挙している一角がある。帝国領からオスティアへの最短距離となる場所だ。魔法で強化した視力で確認すると、鬼神兵の隙間から尖塔が見える。既に尖塔へ向けて鬼神兵が手を伸ばしており、尖塔は崩壊の危機を迎えていた。

「あそこよ！ ナギ！」

「おう！」

二人は一直線に尖塔へ向かう。進路を遮る鬼神兵へ向け、ナギが魔法を行使する。

杖に魔力が充填され、雷を纏い始める。雷が増幅されていき、まるで巨大な剣のような形状を取る。それを認めるとナギは鬼神兵の胸を雷の杖で薙ぎ払う。弾けるような音と共に、雷が鬼神兵の胸を一撃で破壊。鬼神兵の上半身がそのまま地面に落ちる。

ナギはそのまま周囲の軍勢を牽制するように魔法を放ち、未央はナギが開いた道を行く。

尖塔へ未央が飛び込み、続いて周囲を牽制していたナギも到着する。

尖塔には数人のローブを羽織った魔法使いと、一人の少女が居た。少女には両手に床と固定された鎖付きの腕輪がはめられており、口の端から血が流れている。

「き、貴様らは……！ >紅き翼く、>千の呪文の男くと>契約の魔女く！」

「おお、俺らも有名になつたな！」

「あいつの顔見てみなさい、あれは有名な奴っていうより悪名高い奴らを見たつて顔してるわよ」

未央は少女に歩み寄る。他の魔法使いは後ずさり、進路を邪魔する者は居ない。

少女の頬に手を当て、血を拭く。近くで見る少女の瞳からは意思が感じられない。

「んー……お嬢ちゃん、お名前は？ 私は未央、未央・柳よ」

「ナ……マエ……？ アスナ、アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフユシア」

「名前長いわね」

「なげーな、でもいい名前じゃねえか。俺はナギ・スプリングフィールドだぜ」

後ろに控えていたナギが自己紹介をしながら少女　アスナに近づき、頭をなでる。

少女はそれを振り払う事なくナギを見つめており、痛ましかった先ほどの姿から少しだけマシになる。その光景を眺めながら、未央は思う。

ついにメインキャラ来たわー。感無量ねえ……。いや、>紅
き翼くもメインかしら？

しかし、今の彼女はどう見ても10歳かそこらの少女だ。ネギが
生まれてくるまで大戦期を含めて20年はある。どう考えても年齢
が合わない。原作もあまり詳しく読んでいなかったが、説明されて
いただろうか。そう思考を巡らせていると、戦場の爆音に気づく。

「ナギ、とりあえず戦場を制圧しましょう」

「おうよ。待つてなアスナ、すぐに終わらせてくるぜ」

ナギと並び、戦場を見渡す。状況は俄然帝国有利だ。3時間も経
てば、帝国軍に押し切られるだろう。ここから巻き返すには、自分
達が力を尽くさなくてはならない。

「ナギ、鬼神兵は宜しく。私は戦艦と周りの魔法使いを叩くわ」

「おうよ！ 俺達二人が揃えば無敵だかな！」

「ええ、当然ね」

二人で役割を決め、笑顔で軽口を叩き合う。この四年間、確かに
二人が揃って負ける事は無かった。勿論今後も誰かに負ける事は無
い、そう確信している。

それは、ナギの力だけではなく、自分の力が増している事も自覚
しての自信だ。

「さて、じゃあ……手早く済ませましょうか」

概念を展開する。

各地でオスティア兵達は奮戦していた。

各浮遊島に防御陣地を構築し、固定式の精霊砲を用いて帝国軍の戦艦を一つづつ撃墜していく。しかし、技術力も帝国が高く、数も多い。ただでさえ集中砲火でなければ相手の魔術障壁を抜く事が出来ないが、相手の空中戦艦を一隻落とす間に他の戦艦が前線を押上げられ、防御陣地が制圧されていく。

既に敵戦艦による攻撃は王都を射程に捕らえ始めており、誰もが自分達の無力さを感じていた。

そんな中、戦場では聞こえるはずのない、少女の囁くような声を聞いた。

【 ・ 全ては落ち行く 】

誰もが聞いたその声は、頭に直接響くように聞こえて、声のする方向が特定出来ない。しかし、戦場の爆音にかき消される事なく響き渡った。

瞬間、言葉通りの現象が発生。帝国軍の空中戦艦が全て地上に墜落したのだ。地面をえぐるように墜落した空中戦艦は損傷を受けて煙を上げており、再浮上する事はない。

「なんだ……？ 誰が、何をしたんだ？」

「真上だ！ 何か居るぞ！」

声に反応して彼らは上を見る。そこには白い装甲服を纏った少女が杖に腰かけ、戦場を見渡していた。真下からは顔が見えず、彼らには少女が誰か判別する事は出来ない。視線に気づいたように少女

はオステイア兵達を見る。遠景だが、少女の顔が見えた。そこで彼らは気づく。

四年前のオステイア最奥部爆破事件の実行犯、その後に世界各地で連合・帝国の区別無く重要施設を破壊して回っているテロリストグループ>紅き翼<の一角。

「>契約の魔女<……！ 何故我らの援護を！？」

「今は前を見なさいよ。オステイアの担い手達」

魔女が声を響かせる。言われて前を見ると、空中戦艦が墜落して出来た前線の穴を埋める様に鬼神兵が詰め寄ってきている。オステイア兵士達はそれを見ると急ぎ防御陣地の障壁を張りなおす。空中戦艦は精霊砲のみだが、鬼神兵はそれに合わせて物理攻撃を繰り返して来る為、障壁の変更が必要だ。

慌しく兵士達が動く中、上空の少女はゆっくりと懐から何かを取り出す。目を凝らしてみると、一冊のノートである事がわかった。

魔女の声が再び戦場に響く。

【・ 文学は力を持つ】

声が響くと同時に、魔女が持つ本が青白い光を放ちながら分解されて行き、紙片が魔女の背後へと展開される。

紙片の一枚一枚が青白い光を纏っており、背後に展開したそれは青白い翼のように見える。魔女は杖を足場に立ち上がり、鬼神兵を指で指す。紙片の発光が一際強くなる。

「自由帳40ページ分、食らうといいわ。テスト・テイスティ・テストメント >千の雷<！」

魔女の声と共に、背後の紙片に変化が起きる。纏っていた青白い

光が一際強くなり、紙片から雷が飛び出して行く。魔女の指差した方向へ向かい、40の>千の雷<が突き進む。その雷は相互に干渉を起こし、一つの巨大な雷の竜に姿を変えた。

直撃。

雷の竜が鬼神兵の魔術障壁に食いつくと、魔術障壁は弾けるように霧散する。そのまま竜の顎が鬼神兵を噛み砕く。竜は勢いをそのままに、背後に控える兵力をも食い尽くした。

残ったのは、魔女の下や後ろに配置されていたオスティアの防御陣地のみ。魔女は杖に座り直し、オスティアの兵士が健在な事を確認して呟く。

「ちよろいものね」

王都オスティアの王城では、報告を待つ王族達が会議室へ集まっていた。誰もが表情を暗くし、敗戦を覚悟している事を察する事が出来る。その会議室へ伝令の兵士が駆け込み、告げる。

我らの勝利である、と。

瞬間、会議室は一瞬の静寂に包まれる。誰もが兵士を見つめ、その内容が間違いではないかを確認していた。兵士はその視線を受け、間違いないと首を縦に振る。確認が取れると、王族達は一瞬で歓喜の表情を浮かべる。祝勝会の準備だ、戦勝パーティだと騒ぎ始める中、一人だけ緊張を保った人間が居た。

アリカ・アナルキア・エンテオフュシア、王都オスティアの姫たる彼女は、戦闘の勝利より何故勝利できたか、その理由に注意を向

けていた。

> 契約の魔女くとも千の呪文の男くが援護に入った、とな。
何を要求される事やら……。

> オスティアの怨敵くとも呼ばれる魔女が何故自分達の援護に入ったのか、周りの人間は勝利に浮かれてその点に気を回してはいない。かの魔女は確かに人助けもすると聞き及ぶが、それは対価を要求しており、契約相手が受け入れなければ手を貸さぬというビジネスライクなものだ。何を要求されるか思案し始めるが、周囲の雑音で集中できない。

虚け者どもが！祝勝会などしている場合ではなからう！

一喝し、今後の対策や>契約の魔女くについて相談したいところではあるが、自分の発言など無視されるに決まっている。そう思い、一人会議室を出る。

自室に向かいながら、今後起こり得る展開に思いを巡らせる。

やはりテロリスト認定の解除か、もしくは金か？ いや、もつと違う狙いがあると見るべきじゃな。

相手はこの四年間の間に連合・帝国問わず破壊工作を繰り返してきた魔女だ、金で動く人間とは思えない。また、テロリスト認定の解除も最早オスティアだけの問題ではない為、こちらに要求してくると思えない。悩みながら自室に入る。椅子に座り、執務机に肘をつけて頭に手を当てる。

頭が痛い問題だ、そう考えながらため息をつく。

「お疲れじゃない。お酒でも飲む？」

「虚け者、私は酒を嗜まな……!?!」

自分しか居ないはずの部屋で、声をかけられる。あまりにも自然に声をかけられたので返答しそうになったが、椅子から飛び跳ねて声の方向を見ると、寝台に女が座っている。

黒い髪に白い装甲服、間違いない。何度も手配写真で見た顔だ。

> 契約の魔女く、> オスティアの怨敵く、未央・柳だ。

「侵入者じゃ!」

「あ、ごめんそれ無駄。この部屋に音通さない仕掛けしちゃった」

相手は手に持った酒瓶をもてあそびながら答える。その仕草は、

なんとも不遜な女。しかし、体型は私の勝ちじゃな。

そう思い、精神的な余裕を自分に持たせる。少なくとも交戦する気は相手に無いようだ。ならば相手のペースに乗り、狙いを聞きだしてくれる。

「ふん……何様じゃ、> 契約の魔女く」

「流石賢いと噂のアリカ様、話が早いわね。でもさっき失礼な事思わなかった?」

気のせいだ、と返す。相手はそれに首を傾げながらも納得し、寝台から立ち上がって自分の座る執務机の前に椅子を置き、こちらと相對するように座る。手に持つ酒瓶を机に置き、グラスを二つどこからともなく取り出し、酒を注ぐ。

「私はやらんと言つのに」

「まあまあ、付き合いなさいよ」

「酒は人生を駄目にする。お主もこれを機会に辞めるが良い」

「堅物ねえ……お酒は百薬の長という言葉を知らないの？」

「万病の元とも言っじゃろっに」

そう返すと、相手は詰まったような表情をする。ざまあみるじゃ。仕方が無いと相手は呟き、またしても何処からか別の瓶を取り出す。

「オレンジジュースならいいわよね？」

「良いじゃろっ、注ぐが良い」

自分のグラスに黄色い液体が注がれる。匂いを嗅いでみるが、特段変な匂いはしない。

相手が口をつけるのを待った後、自分も口につける。

「どこまでも疑っわねえ……」

「当たり前じゃ、いい加減目的を話せ」

「ん……いいでしょう」

相手はグラスを置き、姿勢を正してこちらを見る。

その目は、こちらを対等な人間と見ている目だ。

果たして、何を要求してくるかと身構えていると、

「一身上の都合により、私 未央・柳。貴方の良い友人となるべく、力を貸しに来たわ」

予想外の言葉を綴った。

第十七話

王都オスティアの王宮にあるアリカ姫の自室では、奇妙な光景が繰り広げられていた。

二人の女性が執務机を挟んで、オレンジジュースを飲んでいる。

片方はこの部屋の主であるアリカ姫だ。彼女は相手を疑惑の目で見ながら、グラスに手をつけている。少しづつオレンジジュースを飲みながら、相手に問う。

「私の力になる、と……？ どういう理由で？」

相対する相手は、オレンジジュースを勢いよく飲んでおり、今は注ぎ足していた。

> 契約の魔女く、> オスティアの怨敵くと呼ばれるテロリスト、未央・柳だ。

アリカの問いに、未央はグラスを手に取りながら答える。

「さつきも言ったけど、一身上の都合よ」

「お主は対価を払った相手にだけ力を行使すると聞いておるぞ。何を要求するつもりじゃ？」

「対価ならある意味もう貰ってるのよ。だから無償で聞いてるってわけじゃないわ」

ますます意味がわからん。4年前の爆破テロの事を言っておるのか？

こちらの疑惑を読んだかのように、相手は続ける。

「まあ、いきなり信頼してもらえとは思ってないわよ。今回の参

戦は挨拶みたいなものだし」

「今すぐ信頼してやってもよいぞ。捕まって国民の士気向上に貢献するがよい」

「別にいいけど、すぐ脱走しちゃうわよ？ 私にも目的があるもの」
「では、その目的とやらを話してみるがいい」

会話の中でやっと相手の目論見を聞く流れを得る。

相手はその問いに、胸を張って答える。

「世界平和！」

なんだと？

「すまんがもう1度頼む」

「いいわよ、私の目的は世界平和！」

聞き間違いではないようだ。このテロリストは世界平和が目的らしい。

爆破テロも世界平和に繋がるのだろうか、試しに聞いてみよう。

「お主はあれか、4年前の爆破テロ事件も世界平和の為に起こしたというのじゃな？」

「あれは失敗だったわ……悪の組織を倒すつもりがテロリストにされてしまったもの」

「悪の組織、悪の組織ときたか！ ハハハ！ おい>契約の魔女く、誇大妄想が盛んな時期か！？」

世界的にはお前のグループこそ悪の組織だぞ！」

「フフフ、賢いと評判のアリカ姫も世間の風評だけで判断するとは……嘆かわしいわね？」

「なんだ、なんだこいつは……！ 本当に私の味方になり来たの

か！」

「さつきからそう言ってるじゃない。リアクション大きい人ねえ、クール系の美女かと思ったたらそんな事も無かったわ」

間違いない、こやつは虚け者だ。

こちらが正常な思考をしているから相手についていけないのだから。

ここは一度、相手の発言を全肯定して喋らせるだけ喋らせよう、そう決めると次の言葉が出る。

「わかった、お主が私の味方になってくれるんじゃないな。

ではまず倒すべき悪の組織について話すが良い」

「なんと……わかつてくれるとは予想外ね。じゃあ説明するわよ」

相手の話し始めた内容は、想像した通りの滑稽なものだった。この戦争に黒幕が居る事、その黒幕は > 完全なる世界 < といい、4年前のテロ事件はそれを打倒しようとしたものである事。 > 完全なる世界 < は既に各国の中枢に入り込んでおり、オステイアも例外ではないとの事。この話が事実であれば、確かに相手の目的は世界平和とっていいだろう。

相手は真面目な表情で滑稽無等な話をしており、笑いを堪えるのが少々辛い。

「……と、言うわけなんだけど。笑い堪えてないで、聞いてる？」

「ああ、勿論聞いていたぞ。で、その組織があるという証拠は？」

そこまで分かっているのだから、勿論あるのだろう？」

少々付き合ひすぎた。そろそろ寝なければ明日の公務に差し支える。

そう思い、話を打ち切る為に証拠を求めた。誇大妄想の類であれ

ば、これで話は終わりだろう。

「あるわよ」

「え？」

「ある。ではこれをご覧くださいませしょう」

そういつて、相手は幾つかの巻物スクロールを机に広げる。映像と音声を録画して郵送するメール式の巻物だ。魔法技術でも簡単には複製出来ず、映像と音声をセットで偽造する事は帝国でも成功していないと聞く。

そして巻物が映し出したのは、連合や帝国の中枢に居る人間だ。彼らは相手に向かい、戦争の打ち合わせをしている。その内容は戦争を長期化させる為の算段であり、自国の為に動いている人間が発言出来るものではない。しかも、最後には、>完全なる世界<の為に発言しており、先ほどの話と一致する。

幾つかの巻物を続けて見る。既に就寝時間は過ぎているが、映像から目を離す事が出来なくなっていた。連合の元老会、帝国の皇族、他にも要職についている魔法使い達が次々と映し出され、最後には自分の父 ウェスペルティア王国の現国王すら映し出された。

思わず、拳を机にたたきつける。

「……馬鹿な、酷いイタズラじゃ」

「事実よ？ その証拠集める為にこの4年間、>完全なる世界<の拠点潰してたんだもの」

「お主は……この情報を持って、私に何を求めておるのじゃ。信頼させるだけではあるまい!？」

思わず立ち上がり、声を荒げて問う。相手はゆっくりと立ち上がり、自分を指差す。

「何度も言わせないで欲しいわね。私は貴方の力になりに来たのよ、アリカ・アナルキア・エンテオフュシア。

この戦争で、今最も窮地に立っている国で、今最も力を欲している貴方の力になりに来たのよ。

私と、私の男と、私の仲間。全て貴方と同じ方向を向いているのよ。一刻も早い平和を、つてね」

先ほどまでのおどけた雰囲気は無い。こちらを真つ直ぐに、力強い意思を携えた瞳で見ている。

「貴方の為、私達は力を振るいましょう。貴方の民の為、貴方の心の平穩の為にね」

「……何故、そこまで私に肩入れする？」

「一身上の都合……かしらね、もっと親しくなったら教えてあげるわ」

「はあ、そこは隠すんじゃない。まあ良い、お主の話、乗ったぞ」

「ん、ありがとう。でも返答はもうちょっと変えて欲しい処ね」

返答を変えろ、という相手の回答に疑問を得る。特に的外れの返答をした覚えは無かった。

相手 未央は自分自身を指差しており、こちらの返答を待っている。

自分自身を指すという事は、何かしら彼女の流儀があるのだろう。考えを巡らせると、すぐに答えは見つかった。

しかし、このような要求をするとは、案外本気で友人付き合いがしたいのかもしれない。

「Testament・ 契約の魔女よ、お主と契約を交わそう」

「Testament・ オスティアの姫よ、貴方の力になりましょう」

> 契約の魔女くは、芝居がかった仕草でこちらに一礼した。

アリカ姫との契約は上手くいった。勝算はあったが、やはり緊張した。今後の予定を話しておこうと思うが、だいぶ時間が経ってしまった。渡す物を渡してお暇しようと席を立つと、ドアが開く。

「未央おく、まだかよ。俺疲れたぜ」

「む……ナギ、勝手に入つてきちゃ駄目よ」

ドアの外で待っていてもらったナギが室内に入ってくる。当然、ナギの姿がアリカの目に触れる。

Shit!! どこで運命の悪戯があるかわからないから、隠し通そうと思ったのに！

アリカはナギを見て、感想を零す。

「おい魔女よ、それがお主の番か？ 噂によれば千の呪文を使いこなすとか」

「おいおい姫さん、そんな簡単に惚れるなよ？ 困っちゃうぜウエ！？」

「それ微妙に間違ってるのよ。千の呪文を使いこなすんじゃなくて会ったら即>千の雷くを撃つから>千の呪文の男く。称えてるんじゃないくて皮肉ってるのよ」

「み、未央。いつも言ってるが喋ってる時の顎打撃はやばい。舌を挟んじまうー！」

「挟んでしまえ」

うわん、と泣き真似を始めたナギを無視して、アリカと話す。

「まあ、こんなアホでも私のだから。取ったら嫌よ」

「別にいらん」

よっしや言質取ったあー！

心の中でガッツポーズを取る。原作を見る限り、誰かの恋人を取る人物には見えなかったが、これで予防線も完成した。上機嫌に懐から一枚の符と、青い石を金属製のフレームに嵌めたイヤリングを取り出す。

「じゃあアリカ。これ、私達の元に飛ぶ転送符ね。距離関係なく飛べるから、危なくなったら使って。それと、こっちのイヤリングは念話補強アイテムよ。こっちも距離関係なく通じるわ。私にしか通じないけね。気軽に念話してきていいわよ」

「またすごい物をおっさり渡す……お主はよくわからん」

アリカは二つのアイテムを受け取り、懐に忍ばせる。

二つとも概念によって強化したアイテムだ。

この4年間、アルとゼクトの3人で能力を研鑽した結果、意識が途切れても概念能力を途切れさせる事は無くなり、更には賢石を創造出来るようになった。転送符もイヤリングも賢石によって術式を強化してある。魔法の効力に【力は最大となる】という概念を付与した結果、どのような妨害も受け付けず、世界の果てだろうと転送可能なアイテムとなった。

目的を全て達成できた事を確認して、未央はナギを連れて部屋を出る。

「じゃ、アリカ。また成果が出たら報告に来るわ」
「とりあえず今日は帰れ、私は色々疲れた……」

椅子に深く腰掛けるアリカを見て苦笑する。部屋を出ながら、未央は概念能力を使い眩く。

【・　　良い夢を。】

ナギと暗闇の中、オステイア王宮を脱出する。

今日は色々忙しい日だったが、その分収穫はあった。帝国軍を退け、アリカ姫と契約を交わす事が出来た。この調子で他の国の要人とも契約を結んでいこう。そうすれば、あの最終決戦　>完全なる世界<との決戦準備が整うはずだ。

思いながら歩みを進めていると、ナギから声がかかる。

「なあ、未央。さっきのアリカって姫さんなんだが……」
「な、何!？」

まさか、あんなやり取りで気になる相手にランクアップしたのだろうか。やはり原作補正は強いのか。14歳だからと未だキス以上の行為は致していなかったが、こうなれば……! !

「おっばいでかかったな!」

【・　　攻撃力は最大となる】

思い切りブン殴ってやった。

第十八話（前書き）

息抜きギャグ話、短めです。

第十八話

オスティアでアリカと契約を交わした後、ナギと共に、紅き翼の皆と合流する為、郊外の丘へ向かう。アリカが味方になったとはいえ、未だ指名手配中の身である二人は夜の闇に紛れながらオスティアから脱出を目指す。

戦闘後という事もあり、オスティア内外ともに警戒が厳しくはあるが、概念を利用して通過する。

【・ よく馴染む】

「見回り、お疲れ様」

「はい、ありがとうございます」

巡回の兵士に慰労の声をかけて通過する未央、ナギはそれを不思議そうに眺めている。

「いつ見ても訳わかんねえよな、未央の能力」

「今のは認識阻害の逆よ。自分を相手にとって違和感の無い存在にしてしまうの。」

私達がここに居るのが普通、という認識を植えつけて捕まえるという発想をさせないの」

「なるほど、わかんねえ」

だと思ったわ、と答えながら未央は先導する。同じような手でオスティアを無事に脱出。

浮遊島から周囲の森へ紛れ込み、郊外の丘へ走る。

深夜の森を走っていると、四年前の事をふと思い出した。自分の

軽はずみな行動でテロリスト認定を受け、皆の下から飛び出した。結果としては、ナギが自分を見つけて連れ戻してくれた。その時、ナギは自分に居て欲しいと言い、それを受けた。そこで自分がこの世界で生きる為の目的を見つける事が出来た。転生の際に言われた目的ではなく、自分の意思から出た目的だ。

ナギを見ると、眠そうに欠伸をしている。そんな彼を見ると、自然と笑顔になる。

「あゝねむ……ん？ 未央、どうかしたか。機嫌よさそうだな」

「なんでもないわよ。さつさと帰って寝ましようか」

「一緒に寝てくれんの!？」

「変な事したら嫌よ」

テンションを上げて喜ぶナギ。それを見て、ふと未央は思った。

やば、アルにからかわれる。どうやって逃げようかしら。

味方であり最大の天敵である男の事を思い出して、少々憂鬱になった。

そのまま数時間森を走り続けて、目的地である丘に到着する。オスティア行きの時のように音速に迫る速度で走れば30分足らずの距離ではあったが、そんな事をすれば流石に馴染まないし、何より疲れる。概念能力で肉体的な疲労は他のエネルギーに転換する事が出来るが、精神的な疲労は別だ。

既に夜が明けており、地平線からは太陽が顔を出している。陽光に照らされた周囲を見渡すと、>紅き翼<のメンバーを見つめる事

が出来た。近づきながら様子を見てみると、朝食の用意を始めており、食欲をそそる匂いが漂っている。親しみのある匂いを感じ、体から緊張感が抜けていく事を自覚しながら、皆に声をかける。

「ただいま、私達の分は？」

「おかえりなさい、勿論用意してありますよ」

アルがナギと未央のコップを差し出しながら迎える。手に取るとココアの甘い匂いが漂う。

一息で飲み切る。熱湯が舌を刺激するが、甘い匂いが体に染み渡る。

ナギも同様に一息で飲み切り、大きく息を吐いていた。

「こちらは数が多くて手間取りましたが、撃退出来ました。そちらの首尾はどうでした？」

「ん……オスティアの防衛、アリカ姫との契約。両方上手くいったわ」

それは良かった、と頷くアル。その後ろでは詠春が片手でフライパンを操りながら、もう片方の手で卵を割っている。割られた卵を器用にフライパンへ放り込み、見事な目玉焼きを量産していく。

あれ？ サムライだったわよね貴方……？

その姿はどう見てもコックだ。詠春の横ではゼクトが皿を持って待機しており、餌を待つ子犬のようにも見える。尻尾があれば勢いよく振り回していることだろう。更にゼクトの横にナギが腰を降ろし、同じように皿を持って餌を待つ。子犬が増えた、そう思いながら自分も子犬になるべく皿を持って腰を下ろす。

「詠春、私ベーコンエッグがいいわ」「あ、俺も俺も!」「ワシはベーコンだけでもよいぞ」

「贅沢な事を言う子犬達だ……!」

そう言いながら、既に出来上がった目玉焼きを自分の分として、新たにベーコンエッグを作り始める詠春。彼は間違いなく、紅き翼<の中心人物だった。皆のお父さんの意味で。

食事を済ませると、満腹になったという安心感から眠気が襲ってくる。背を逸らしながら真上に手を伸ばす。体中から骨の鳴る音がある。オステイアへの強行軍から戦闘、更にアリカとの交渉と脱出と流石に疲れた。急いでどこかに向かう予定もない。とりあえずは寝ようと立ち上がる。

「さて……一眠りしましょうかっておわ!」

「さあ寝るか未央! 連れてってやるぜ!」

背後からナギに抱きかかえられる。

不味い、この状況では……!

悪寒と共にアルに視線を送ると、わかっていますといった表情でアルは頷いている。

「わかっています。ええ、わかっていますよ。我々は近づき

ません。防音処理もしておきましょう」

「何も分かってないいいいい!!! 何をする気だと思ってんのア
ンタアアア!!!」

「いやあ、とても口にだしては……」

「寝るだけよ！ 寝るだけ！」

「ええ……寝るんですよね？」

「含み笑いを消しなさい！！ ナギも何か言っただんなさいよ！」

「近づくんじゃねえぞアル」

「私に味方が居ない……！！」

ナギの腕から降りるべく体を暴れさせるも、巧みに押さえつけられる。

その間にもナギは着々とテントに歩み寄り、暗がりに入れ込まれる。

「変な事するなといったでしょうにー！！」

未央の叫びが響き渡るのだった。

何かの音が耳元で木霊し、眠りから目が覚める。テントの入り口から漏れる光を見ると、オレンジ色の光になっており、既に日が傾いている事がわかった。何の音かと上半身を起こして頭を振り、意識を覚醒させると念話のコールが入っている事に気づいた。コール元はアリカだ。少々意外な思いを得て、念話に回答する。同時にアリカの映像が目の前に現れる。念話補強アイテムに標準装備してある映像転送機能によるものだ。

「はい、どうしたのアリカ？」

「おおぅ……映像も出るタイプか。寝起きか？ ……あ、なんかす

まんの」

頬を赤く染めて顔を背けるアリカ。何故だろうと自分の身を確認する。寝巻きには着替えている、別に裸で寝ているわけではない。ならば何故だろうと考えを巡らせる。考えていると、アリカはちらちらと視線を送っている。視線の先は自分ではなく、自分の背後だ。背後を見ると、ナギが未だ寝ている最中だ。しかし、原因がわかった。

「こいつ、上半身裸だけど別にそういう事してたわけじゃないわよ」「そ、そうか？ まあ邪魔をしたのではないならいいんじゃない……」

顔を赤くしつつ、目線を手元に落としながら向き直るアリカ。

やば、この人可愛いわ。ナギが落ちるのも納得！

このアリカを堪能したくもあるが、話が続かないので先を促す。

「それでどうしたの？ まさか本当に寂しくて念話してきたの？」

「違うわ虚け者！ 私個人が雇っている諜報員に貴様らが味方になった事を伝えたら、面白い事があると話しおった。おぬしら、帝国の部隊に足止めをされたりせんかったか？」

「わりと頻繁に……ちなみにオスティアに援護に入る時も帝国軍から攻撃受けたわよ？」

「ああ、なら気をつけるんじゃないぞ。正規軍じゃ倒せないと踏んだ帝国が腕利きの賞金稼ぎを雇ったらしいからの。なんでも剣闘奴隷から腕一本で自由を掴んだ豪傑との事じゃ」

「へー……ありがとう、気をつけるわ」

念話を切り、先ほどの情報を整理する。十中八九、ジャック・ラカンだろう。原作では確か帝国軍と連携を取ってはいなかったと思うが、自分の介入による変化だろうか。

まあ、問題ないでしょう。原作で見た限り、結局は一人でかかってくるだろうし。

思いながら、寝巻きから着替えようと服を脱ぐ。寝巻子を脱ぎながら着替えを探していると、背後から衣擦れの音がする。ナギが起きたのだろうかと背後を見るが、未だ寝息を立てている。気を取り直して着替えを探すと、まもなく見つかる事が出来た。着替えようと下着に手をかけると、視線をはっきりと感じた。

起きているわね、これは。少し肩透かしさせてやろうじゃないの……！ククク！

下着から手を離し、着替えの上着を羽織る。上着から腕を抜き、羽織ったまま下着を外す事で、肝心な処を見せない着替えをする。すぐに反応が来た。

「おい未央！ それは男の浪漫に対する挑戦だな！？ 覗く時はもっと上手くやれと……！」

「覗くんじゃないって言ってるのよ」

寝たままの体勢だったナギの顔を裸足で踏みつける。

「うおおお……。 やめる未央、俺にはこういう趣味はねえ！」

「じゃあ今後私の許可なく着替えを覗くのはやめなさい」

「へっ、そりゃ約束できねえっておごごご」

「うーん……私なんでこれに惚れたのかしら……」

思いながら、足に力を込める。踏まれたままの馬鹿が暴れるが、無視だ。

そのままラカンへの対応をどうしようか考えていると、テントの入り口から声がかかる。

「未央。そろそろ夕飯ですよ。イチャつくのもいいですがそろそろ出てきてください」

「これがイチャついてる音に聞こえるなら耳鼻科に行くべきよ、アル」

「いつも通りの二人で十分イチャついてるように聞こえますよ」

どうしてこうなった。真剣に考えなければならない。

そのままの姿勢で考え込む未央。ナギへの踏み付けは詠春が呼びに来る30分後まで続き、流石にやりすぎだと説教される未央であった。

第十九話

オステイアを脱出した後、仮眠とは言えない長い睡眠を取った未央は、>紅き翼<のメンバーと夕食を取ろうとしていた。目の前にあるのは未だ調理されていない野菜や肉だ。既に腹から唸るような抗議の音がきており、未央自身の限界も近づいている。他のメンバーも同様ではあるが、もう少し待てと止める人間がいる。

詠春だ。夕食も当番となっていた彼は、故郷の鍋料理を仲間達に振舞おうと手を尽くしている。

鍋に脂を溶かし、肉 近くに生息していた竜種の肉を鍋に入れ、下味をつける。軽く煮込んだ後、野菜や豆腐を順次投入してだし汁を加え、改めて温める。途中でナギが開けそうになり、詠春から鍋防御指令を受けた未央に殴られていた。倒れて泣き真似をする馬鹿を横目に、具材に火が通った事を確認する。

完成だ、しかしトカゲ肉と溶き卵は合うだろうか。

自らの料理の出来に少々疑問の残るサムライマスター。プロである。しかし、完成した料理を前にした彼の仲間達は、彼の疑問など知らぬとばかりに鍋に飛びつく。ナギが肉ばかり食べており、未央に窘められている。アルも肉を主に食べている。外見に似合わず旺盛な男だ。ゼクトは予想通り野菜ばかり食べている。肉は最初に2〜3切れ食べた程度で、外見でいえばこちらこそ肉を食べるべきだ。未央は肉と野菜を交互に食べており、鍋料理を行儀良く堪能している。

「よっし、肉追加しようぜ肉！」

「待てナギ、お前はもう少し野菜も食え！ 鍋料理を堪能しろ！」

「好きに食べば堪能してんだからいいじゃねえか」

「馬鹿者、鍋料理にはバランスというものがあってだな……」

「ああうるせえええ!!!」

「フフフ……詠春、知っていますよ」

ナギと詠春の言い争いを止めるように、アルが口に物を入れながら喋る。物を食べながらしたり顔をする様子は、少々シユールだ。

「日本では貴方のような者を……『ナベシヨーグン』と、呼び習わすそうですね」

「ナ、ナベシヨーグン!？」

「っ、強そうじゃな……」

「な、なんて強大な雰囲気を漂わせる名前なの……」

「おい未央、お前は日本人だろ!? 『鍋奉行』の間違いだと知ってるだろう!？」

「ワタシ、ニホンジン チガウアルネー。インドジンデスヨー、カレーアルネー」

片言でわかりやすい嘘をつく未央、しかし何故カレー。詠春は気になって追撃出来なかった。その間にも、アルの言葉はナギとゼクトに信じられてしまう。

「わかったよ……詠春、俺達の負けだ。今日からお前は『カレーシヨウグン』だ」

「全て任す、好きにするがよいアルネー」

「カレー デスネー」

「なんか混ぜてるぞ!? 全然嬉しくない任され方をした……!」

しかも未央がバグったままだ。片言でカレーカレー言いながら鍋

をつまんでいる。しかし、他の面子の箸は止まった。とりあえず鍋を管理しようと、手を動かす。その後は大人しく詠春の勧め通りに食事を取る面々だった。ナギが醤油の美味しさに感動し、アルが大根おろしの調和に感心する。

穏やかに食事が進む中、ポツリとナギが零す。

「んー……オスティアの姫子ちゃんにも食わしてやりたいな」

「姫子ちゃ……ああ、オスティアの姫御子の事じゃな」

「まあ、戦が終われば彼女を自由にする機会も掴めるやも……ですね、未央、どうなのですか？」

「んー……私の知ってる歴史では色々あつて最終的には自由にはなつてたわよ」

「なんだよ、つまりまだ辛い目に会つて事か？」

「そうさせない為の私よ、まあ、完全なる世界への目的を防げれば半分達成、あとは連合の元老院をなんとかしないとね……」

「>完全なる世界へだけでも頭が痛いというのに、元老院もか……。先は険しいな」

詠春の感想に、誰しもが頷く。しかし、一人だけ少々違う反応をした者が居た。

ゼクトだ。

彼は皆が気づかないような僅かな反応ではあるが、瞑目して、呟いた。

「武の英雄には、世界は救えんよ……」

誰もが見逃したその一瞬の表情からは、深い悲哀を感じさせた。

未央は食事を続けながら、思い出したように話し出す。

「あ、そうそう。アリカからの情報だけど、帝国が腕利きの賞金稼ぎ雇ったそうよ。」

私の持つてる情報とあわせると、十中八九、ジャック・ラカンね」

「ああ、ついに来ましたか。いずれ我々に加わるそうですね」

「ええ、今回は加入しないはずだけど、撃退の時は気をつけてね。殺しても死なないような相手だけど、実力はナギ並みよ」

「そいつは楽しみだな！」

「私は頭が痛いよ、ナギのような馬鹿で強い奴が増えるかと思うとな……」

「フフフ……詠春、そう言いながら拒否しないのは誘い受けという奴ですか？」

「アルに悪い日本語を教えたのは誰だ……！！ 未央か!？」

「カレー アルネー」

「意味の分からないコメントをするな！」

詠春の抗議を無視しながら、改めてジャック・ラカンの事を思い出す。帝国の剣闘奴隷から腕一本で自由を得た豪傑、馬鹿に見られるが、その実力は豊富な戦闘経験に裏打ちされた努力の結晶だ。油断すれば負けるだろう。自分の概念能力は戦闘経験で覆せるものが多数ある。

意外と、私の天敵かもしれないわね。

考えを巡らせていると、いつ襲撃されるのか、という考えが巡ってくる。原作を読んだのは既に遙か昔にも感じられる為、必死に思い出す。

えーと確か……皆が鍋料理食ってる時？ あ。

思い至ったと同時に、上空から何か投擲された気配を感じる。他の面々も気配を察して立ち上がり、軽くバックステップ。詠春だけは未央に未だ抗議していた為、気づいていない。

その様子を見て、未央は原作のシーンを鮮やかに思い出した。

投擲されてきたのは巨大な剣、2mを超える巨大な剣は鍋を弾きながら地面に突き刺さる。具材が飛び跳ねた。瞬間、4人が高速で腕を動かす。

ナギとアルが争うように空中に漂う肉を取り合う。ナギが箸でアルの箸で弾きながら肉を搔っ攫おうとするが、アルはその勢いを利用して更に高速で箸を動かす。しかし、勢いを利用した代償に腕が伸びる。その隙を見逃さずにナギはアルに近い肉を奪う。

(やりますね、ナギ)

(お前もな、アル)

視線で会話をしながら、引き続き肉を奪い合う二人。

未央とゼクトはお互いの隙をカバーするように野菜や豆腐を取る。未央は野菜を多く取り、ゼクトは豆腐や白滝を掬い上げるように取る。お互いが欲しい具材で、手が届かないものをお互いが箸で弾き、フォローしあう。

(あ、ゼクト。豆腐ちよつと頂戴)

(よかるう、では椎茸を貰うぞ)

こちらは実に平和なやり取りだった。

一人出遅れた詠春は完全にハズレクジを引いた。投擲の気配に気

づけなかった為、目の前に現れた剣に驚き、体が硬直する。1秒にも満たない硬直ではあったが、その硬直中にも弾かれた鍋は彼の頭上に移動する。

落下。

詠春の頭に見事被られた鍋は、彼の体に残ったダシ汁や具材をぶちまける。

ここまでのやり取りが極短い時間で行われ、崖の上から剣を投擲した乱入者の声がかかる。

「食事中失礼〜〜〜〜！！ 俺は放浪の傭兵剣士、ジャック・ラカ
ン！！」

「いっちょやろうぜツ！！」

「見事な馬鹿具合じゃな、確かにナギと同等じゃ」

「おいおい、俺はあんな感じじゃねえよ。とりあえず相手すつか…

…」

「ナギ、私がやる」

「詠春？ つておお……」

珍しく殺気を飛ばした声をする詠春を見ると、鍋をすっぱりと被っている。

怪人、鍋サムライ……！？

未央は心の中で変な命名をしてしまった。

「フ…フフフ…食べ物を粗末にする奴は……」

「どしたあー！ 来ねえのかー！？ 来ねーならこっちから」

詠春の姿が掻き消える。その場には鍋だけが残され、一瞬のうちに詠春はラカンに詰め寄った。挑発の声を出していたラカンを黙ら

せるように、相手の持つていた剣を一閃。詠春の刀がバターを切るように、ラカンの剣を両断する。

「おっほ」

「斬る」

殺気だった詠春の斬撃に容赦は無い。普段であれば賞金首を峰打ちで仕留める彼だが、腕の一本でも斬り飛ばすつもりのような。しかし、その斬撃をラカンは受け流している。剣身を半分にされた剣をもって、詠春の刀の峰を打撃して逸らしている。逸らされた詠春の斬撃は崖を削り、大地を割る。

普段は>紅き翼<の良心として目立たない彼だが、その実力は間違いなくナギと並び立つ。

「ちょっとタンマ、タンマ！ あんたマジでつええな！ ちよいと待たね？」

「ふざけるな！！ 食材の恨みを思い知るがいい！！」

その言葉を聞き、未央は鮮やかに蘇った記憶を元に、あるアイテムを手を持つ。望遠レンズ付き一眼レフカメラだ。三脚にカメラを固定してシャッターチャンスを待つ。

「5対1だしまだ本気を出す訳にはいかんのよね。 あんた達の情報ハリーサーチ済みだぜ！」

ラカンは懐から4つのカプセルを取り出す。望遠レンズから見るそのカプセルは、精霊召喚用のカプセルだ。

間違いないわね、あのシーンが来る……！

撮り逃しは許されぬ、未央は気合を入れて二人の動きをレンズに捉え続ける。

ラカンがカプセルと投げると、軽く弾けるような音と共に、精霊達が女性の裸体となって現れる、詠春はそれを直視して噴出している。

シャッターチャンスその1！

心の中でガッツポーズを取りながらスイッチを押す。

「情報その1、生真面目剣士はお色気に弱い」

「くっ……卑劣な！いや、何のこれしき心頭滅却すれば火もまた」

いいわよ詠春、振り解かないでそのまま堪えるあたり言い訳不能ポイント高いわ！

思いながら撮影を続ける未央。レンズに写った幼女精霊が背後から狸の置物を詠春の頭部に振り下ろす。心構えも無しに頭部に打撃を受けた詠春はそのまま昏倒。周りの精霊達は彼をそのまま介抱し始めた。

予想外のシャッターチャンスゲエーット！！ いやあ私外道ね！

思うままに撮影を終了した未央がカメラから目を離すと、既にナギが構えている。二番手として向かうつもりなのだろう、わざわざ止める必要もないと、そのまま見送る。

ナギが>雷の斧くをラカンへ放つも、ラカンはそれを飛び上がり回転しながら回避する。

アクションが日々派手な奴ねえ。

ナギがラカンの近くへ降り立ち、相手を見据える。

「てめえら！ 手え出すなよ！！」
「おう、出たな情報その4。赤毛の魔法使いは弱点無し、特徴は…
…戦場でも尻に敷かれてる」
「な、なんだそりゃあ！？ そこは無敵とか言う処じゃねえの！？」
「とても正確な情報ですね」
「帝国の情報機関もなめられぬのう」
「やりすぎたかしら…どうしてこうなった…」

アルとゼクトは得心しているが、こちらは堪ったものではない。
戦場では真面目にしているつもりだったが、今度自分の行動を見直
してみよう。

「しかし小僧、無敵ってのは違うな……。何故なら、無敵なのは俺
様だからな！」
「へっ、そんな事いつていいのかよおっさん。恥かくぜ」
「心配すんな、恥かいて凹むのはお前さんだ」

二人は軽口を言い合いながら、不敵な笑みを交換する。ナギが身
体強化魔法の出力を上げ、ラカンからは気が強まっているのを感じ
る。二人の周囲から土ぼこりが巻き起こり、合図があつたかのよう
に、同時に突撃。

激突。

お互いの右ストレートがお互いの頬に突き刺さる。体格差からか
ナギが吹き飛ばされて土煙をあげる。しかし、ラカンもダメージが
あるのか追撃に入らない。その間に体勢を立て直したナギが再度襲
い掛かる。土煙から現れたのは10人に増えたナギだ。風の中位呪
文による複製だ。複製はオリジナル程の力量は持たないが、目くら
ましとしては十分役割を果たす。

「うおっ！？ たくさん！？ ニンジャかよ！」

対応を一瞬迷うラカンであったが、面倒臭いとばかりに足元の地面をかきあげる。衝撃と土砂が分身したナギをまとめて襲い、ナギはその勢いで上空へ上がる。

「百重千重と 重なりて 走れよ 稲妻！！」

「大呪文か！」

>千の雷くを詠唱するナギ。四年間の修行とゼクトと未央による授業により、もはやアンチヨコを手に持つ事はない。ラカンはナギの気配を察して気を強める。強まった気の防御力は>千の雷くをほぼノーダメージで堪えきった。

「うっわぁ……予想はしてたけど、酷いチートキャラねあいつ……」

「フッフ、未央にだけは言われなくないと思いますよ」

「お主のチート具合はワシらの内でもダントツじゃろう」

「皆と私にこんなにも意識の差があるとは思わなかつたわ……」

その間にも、ナギとラカンは一進一退の攻防を繰り返している。お互いの実力は伯仲しており、決着は長引きそうに思えた。

面倒臭いわねえ、でもナギが手を出さなうて言っただしなあ。手を出さか悩むも、無闇にナギを怒らせるのは好ましくない。普段からよく殴っているが、別に彼を低く見ているからではない。あれはあれでコミュニケーションだ。

未央が悩んでいる間にも、二人は周辺の崖を削り、森を消し飛ばしながら戦闘を続けている。1時間、2時間と経過するも、お互いの勢いは衰える事はない。

「面倒臭くなってきたわ……」

「存外粘りますね、未央の言う通りナギに匹敵しているようです」

「おぬしら、いい加減詠春助けてやらんか？ 精霊に膝枕されてもがいておるぞ」

「あれはシャッターチャンスだからいいわ」

「未央、あとで私にも焼きまわしをください。婚約者に送ってあげましょう」

「いいわねそれ、フフフ……」

「おぬしら、身内にも厳しいのう……」

詠春は結局精霊の契約時間一杯……3時間後まで復帰出来なかった。戻ってきた彼は酷く憔悴しており、見る者の哀れみを誘う。しかし、

「詠春おかえり、裸婦の膝枕どうだった？ あ、近衛さんが近況聞いてきたからメールおくつといたわ、さっきの写真つきで」

「……なん、だと……？」

未央の一言が止めの一撃となり、再び昏倒する。流石に捨て置くのは可哀相とアルが抱き上げる。アルは白い重力球を発生させ、詠春をそれに載せる。反重力球のそれは、触れたものを浮かせる性質を持つ。その間にも、飽きずにナギとラカンが戦闘を継続している。既に戦闘開始から5時間が経過しており、深夜に突入している。いい加減寝たいものだ、戦闘に参加していない3人は揃ってそう思っている。

未央は念話でナギにコンタクトを取る。

（ナギ、随分長引いてるけど、手出しているの？）
（駄目だ！今すげえ面白いところだからな！！）

駄目だ、完全に面白がっている。ここで手を出したらヘソを曲げるわね。

ああなつたナギは頑固だ。確か原作では夜が明けるまで闘っていたと思う。寝て起きれば流石に戦闘も終わるだろうと思いつ、杖の上で横になり、寝る体勢を整える。ローブを羽織り、目を瞑る。魔法で防音結界を張る事で簡易寢所を作る。

その様子を、戦闘中のラカンが見ていた。

「小僧、あの嬢ちゃんはお前のツレらしいな」

「ああん？ だからなんだよ、やらねえ……ぞっ！」

高笑いを交わしながら闘っていたラカンが、ふと真面目な表情になる。ナギは関係ないとばかりに魔法を繰り返す、ラカンが土煙に覆われて姿が見えなくなる。

「いいか、避けるって言うんだぞ」

「はあ？」

瞬間、土煙から巨大な剣が投擲される。ナギは身構えるも、投擲された方向は全く違った。

狙いは未央だ。

「は!?! 未央オ!?!」

ナギが声をあげるも、未央は動かない。防音結界はナギの声を完全にシャットアウトしている。しかし、アルとゼクトはそれを見逃さない。ゼクトは剣の前に防御魔法を展開し、アルは未央の周囲に重力結界を展開。鍋を吹き飛ばした剣と同様のものでは、十分すぎる程の防御だ。

しかし、投擲された剣は防御結界を触れた傍から突き崩していく。幾重にも展開された防御結界は、勢いを減じる事さえ出来なかった。剣は未央の周りに展開された重力結界に到達。少々拮抗するも、これすら剣は突き崩した。

「なんじゃと!?!」

ゼクトが驚愕する。アルに至っては声が出ていない。全ての結界が破壊された事で、未央も漸く事態に気づくが、既に剣が背後に迫っている。

「!?!」

未央は身を捻りながら剣の峰をバックハンド。剣に触れた瞬間、未央に囁くような声が聞こえる。

【・ 魔法は通じない】

概念を展開した時に聞こえる声だ。しかも、その声は未央自身のものに聞こえる。剣はバックハンドを受け、軌道をずらすも未央の

腕を削りながら、肩を抉り後方へ飛び去る。無理な体勢から動いた未央は杖から落下するも、浮遊術で持ち直す事に成功する。

「な、何事！？ どういう事！？ 今の剣何！？」

「我々の魔法を簡単に突き崩すとは……」

「なんらかのマジックアイテムかのう」

アルとゼクトは気づいていない。先ほどの剣は概念能力が付与されていた。つまりは、

敵方に概念使いが居る！？ そんな馬鹿な……！

ラカンを見ると、憮然とした表情でこちらを見ている。

「出来れば一発で済ませたかったんだがなあ……後味悪い仕事だしよ」

「てめえ何のつもりだ！ 俺とやってる最中だろうが！！」

ナギは怒りのまま、拳に魔法の矢を纏わせて殴りつける。それを迎え撃つラカンは、気を纏った拳だ。見る限り、ラカン自体が概念能力を付与できている様子はない。

「ナギ、悪いけど手を出すわよ！ 皆、ボコって情報収集！」

「その前に未央、腕の治療を」

戦場に飛び込もうとする未央を、アルが押し止めて治療を開始する。その間にも、ゼクトと詠春は戦場に飛び込む。

「ワシらは先にいくぞ。詠春」

「承知！」

3対1となつた戦場は、先ほどと違う様相を繰り広げる。ナギと詠春がラカンに接近戦を挑み、後方に控えるゼクトが要素所で魔法による射撃を加える。しかし、ラカンは巧みに接近戦を捌き、魔法を気合で弾く。

「間違いなく、今までで最強の相手ね……」

「ええ……よし、治療が済みました。出来れば未央には離れていて欲しいのですが？」

「お断り！」

「だと思いました、ではゼクトと同じく支援に回りましょうか」

未央とアルも続き、戦場へ飛び込む。既に周囲は完全に荒野と化しており、幾つものクレーターが出来ている。援護の為にアーティファクトで機甲杖を作り出しながら、未央は思う。

誰が概念を……！ あの剣の出所を聞き出さないと！

思いながら、アーティファクトによる造形が完了。概念によって強化された魔法をラカンへ向かい、放った。

5対1となつた戦場は、それほど時間をかける事なく幕を閉じた。ラカンの経験による攻撃を受け流す力は驚嘆するものであったが、質と物量を兼ね備えた攻撃に耐えられるものではなかった。

「フ……フフ…… やっぱ長期戦になると駄目だったか。やるじゃね

えかお前ら……」

息を荒くして膝をつくラカン。ナギが声をかけようとするが、未央がそれを静止する。

「ちよつと、負けたんだから色々教えなさい。私に投げた剣、誰からもらったの？」

「あれか？　ありや依頼人のガキから貰ったもんだ」
「依頼内容教えて」

「率直な嬢ちゃんだなおい、まあ教えてやるか。>紅き翼<の排除だよ。」

とくに嬢ちゃん…>契約の魔女<だけは生かす事なく殺せつてな」

無然とした表情で語るラカン。依頼内容に不満があったのは明らかだ。

「なんか不満そうだけど、なんで受けたのよ」

「ガキ殺すのは嫌だったが、あんたらとはやりあってみたかったからな！」

一応投げたけどあんたら避けてくれて助かったぜ」

悪びれる事なく笑う。結果として回避する事は出来たが、危うかったのは間違いない。しかし、その時の事を聞けば、自分が戦闘中に防音結界張ってまで寝ようとしたのが悪いのは明らかだ。分が悪いと感じた未央は、追及する事なく次の話題に移る。

「依頼人ってどんな相手だった？」

「んー……ずっとフード被ってたんでよく見えなかったが、ちらっと見えた顔はそうだなあ……」

考え込むラカンだが、未央の顔を見て手をポンと鳴らす。

「白くて赤い目をしたあんだな。そういえばよく似てるぜ」
「……は？」

それは、自分の前世の姿だ。病気でアルビノ体質だった自分は、髪は白く、目は赤かった。転生後はそれも改善され、髪も目も黒い。だから、その容姿を持つ者は居ないはずだ。

いや、一人……一人と表現してよいかわからないが、心当たりがあった。

自分を転生させた、あの自称神か……！

第二十話

ジャック・ラカンの持つていた概念が付与された剣。彼の話す依頼人は、白髪で赤目の自分だと言った。心当たりは一人しか居ない。未央を転生させた神だが、その目的を考えているうちに二つ程、疑問が浮かんだ。

一つ目は、今回の行動だ。未央を排除するだけならば、自分がラカンの依頼人として出てくる必要はない。原作通り帝国からラカンに依頼させればいい。帝国のエージェントから概念剣をラカンに渡させれば、自分の存在を知らせる事なく、未央を混乱させる事が出来るだろう。

次にその目的だが、普通に考えれば未央の原作ブレイクに対するペナルティだろう。しかし、そもそも未央をこの世界に送り込んだ目的がネギの保護者役の追加、つまり原作ブレイクだ。自分の想像した以外のブレイクを認めないというなら、随分狭量な神だ。

まあ、直接聞いてみれば早いわね。

未央はそう考え付いたところで、アルとゼクトが自分の様子を見ている事に気づいた。

「ん？ 二人ともどうしたの？」

「未央、先ほどの剣ですが……率直に聞きますが、貴方と同じ概念能力によるものですか？」

「あれほど容易く結界を突き崩したんじゃないから、ただのマジックアイテムでもあるまい。」

アルビレオの重力結界が少々拮抗したところを見ると、お主と同

じ能力じゃろう？」

アルの使う重力結界は、未央が作った防護の概念を發揮する賢石を利用したものだ。防護の賢石は込められた魔力に反応してそれぞれの属性を持つ魔法障壁を展開するものだ。彼は賢石に重力魔法を込める事で、身を包むように重力を展開する事を可能にしている。彼の重力結界が剣に拮抗したのは、重力結界というよりは防護の概念が拮抗したのだろう。

「んー……その推論は正解ね。私の拳が触れた時、概念条文が聞こえたし。」

相手方にも私と同じ能力を使う相手が居るようね」

「しかし未央、貴方の能力はこちらに来る際、自称神様から貰ったと言っていないませんでしたか？」

「ええ、だから最悪神様が敵ね。はい、感想」

「流星に神様が相手といわれると苦笑しますね……」

「ワシは神様が相手と聞くとワクワクするのう。一度殴ってみたかっただのじゃ！」

「過激……！ゼクトが妙に過激ね！頼もしいけど珍しいわね」

普段ゼクトはあまり感情を表す事なく淡々とした反応をするが、珍しく好戦的な笑顔を浮かべている。一方のアルは額に汗を浮かべた苦笑いだ。流星に神が相手という状況は頭の中で処理できないようだ。どちらが一般的な反応かといえば、間違いなくアルのものだ。

「アル、アル。こう考えればいいじゃない。都合のいい事だけ言ってくる親を殴るチャンスだ、と」

「未央の発想はたまにナギより飛びぬけていますね……」

「失礼な、私はそんな突拍子もない事は言わないわよ」

「この世界に転生してきたと言い出す人に突拍子もないといわれた

くはないですね」

「突然昔の話を持ち出してくる男は嫌い……！！」

アルから視線を逸らしながら、話題に出たナギはどうしているのだろうと、背後を振り返る。ナギはラカンと笑いながらお互いの健闘を称えている。詠春は一応とラカンを警戒しながらナギの手当てをしている。最近戦闘といえは自分達を狙う賞金稼ぎの一団や軍隊ばかりで、一人の相手と長く戦ったのは久しぶりでナギは上機嫌のようだ。

「しかしやるじゃねえか小僧」

「あんたもな！」

「まあ5対1だからこのザマだが……必ずリベンジしてやっからな、タイムンで決着つけてやるぜ……！！」

「おおいつでもこいや……！　ぐだぐだ言う奴ら相手にするより気が晴れるぜ……！！」

随分お互い気を許している。夕焼けをバツクに殴りあった効果だろうか。

その様子を見て、ふと思った。

別に今引き込めばいいんじゃないかしらね。

「ちょっと、ジャック・ラカン。話を聞きなさい」

「あん？　なんだよ嬢ちゃん」

ラカンはどこからか取り出した医療用具で自分を治療し始めてお

り、血止めをしながらこちらに反応を返す。意外と几帳面に包帯を巻いており、怪我に手馴れている事がわかる。

「腹芸の通じない相手だと思うから、単刀直入に言うわよ。私達についてきなさい、色々面白いわよ」

「自分を殺そうとした相手についてこいって言ってるぜこの嬢ちゃん……。馬鹿なのか？」

ラカンは横で聞いていたナギと詠春に問う。詠春は大きくため息をつきながら、ナギは笑顔で、

「未央は馬鹿ではないのだが、たまに突き抜けているからな……」

「そこがいいんだる詠春！ いつも俺達をバグやらチートやら言ってるけど自分が一番バグでチートなの自覚してねえしな」

「失礼な、私は常に先を考えて行動してるだけよ。で、どうするのラカン。依頼失敗で傭兵業も微妙でしょう？」

「痛いところ突くじゃねえか……」

ラカンは苦い顔をして呻いている。即答で断られない分、脈はあるだろうと考える。

攻めるべきだ、少なくともしばらく行動を共にすればいつの間にか馴染むだろう。

「考え込むならこうしましょう、私が貴方を護衛として雇うわ。一ヶ月100万ドラクマでどう？」

「おいおい嬢ちゃん、そりゃ喜んでついていくが本当に払えんのかよ？ 大金だぜ？」

「勿論よ」

自分の影に手を突きこむ。これは影系統の魔法で、自分の影の中

に倉庫を作り出すものだ。影の倉庫を手探りで探すと、すぐに目的の品を掴む事が出来た。

つかみ出したのは金貨袋だ。

>完全なる世界への拠点は連合や帝国の軍事拠点でもある。つまりは軍費も置かれている。証拠探しのついでに失敬してきた結果、既に働かずとも人生を過ごせる金額が倉庫には入っている。

ラカンに100万ドラクマの入った袋を乱暴に置くと、地面が重さで軽く沈み込む。金貨と自分の顔を交互に見比べ、ラカンは噴出すように笑い始めた。

「ハツハツハ！ おもしれえ奴だなあアンタ！ で、どんな奴らから狙われてんだ？ 言ってみ？」

「連合軍、帝国軍、あとは>完全なる世界へっていう秘密結社に、今度神様も相手にするかも。まあ世界全部といってもいいわね」

返答を聞き、ラカンは倒れこみながら笑い続ける。咳き込みながら笑いこむ姿はまるで子供のようだ。とても歴戦の戦士とは見えないう姿だが、笑いの理由はそれらしいものだ。

「よし！ あんたについていくぜ、嬢ちゃん。 あんた風にいえば Testament って奴だな」

「ええ、宜しくねジャック・ラカン。ラカンでいいかしら」

「ジャックでいい、俺もあんたの事は未央って呼ぶからな。一つ宜しく頼むわ」

ラカンの了承を得て、お互いが握手を交わす。ラカンは上機嫌に自分の背中を叩きながら、自分の武勇伝を語り始める。少々痛いけど、友好の証と思えば問題ないものだ。ラカンの武勇伝も中々面白い。剣闘奴隷時代、いかにして日々を生き延びたか熱く語るラカンに付き合っていると、急に背中から腕を回される。驚きはしたが、予想

出来た事だ。後ろを見るとナギが不満そうな顔をしている。
言われる前に攻める、ここでも先手だ。

「ナギ、別に貴方を信頼してないわけじゃないのよ？」
「……………」

うわ、珍しく聞く耳持たないモードだわ。

こちらの体を抱くように腕を回し、ラカンを半目で威嚇するナギ。
その様子を見たラカンは、未央を指差しながら笑い飛ばす。

「おいおい心配すんなよ。乳の小さい女は俺視点じゃ女じゃねえからー！」

「馬鹿じゃねえのジャック。乳が小さいが未央はれっきとした女だからんな！ 乳は小さいけどよ！」

「あんた達、そこに跪け」

【・ 打撃は上から振り下ろされる】

指を鳴らすと、二人の乳マニアが打撃音と共に地面に突っ伏す。
相手の真上から打撃する概念攻撃だ。攻撃力は込めた魔力に比例する、先ほどは大した魔力を込めずに放ったが、次は別だ。

「いい、あんた達」

指を擦り合わせながら、地面から顔を引き抜いた二人に告げる。

「女の価値は乳じゃないわ」

『尻か！？』

懲りない馬鹿二人に全力の打撃を敢行した。指が軋む程に力を込め、引き絞るように弾く。瞬間、魔力と共に怒りが二人を真上から打撃した。馬鹿二人は顔面から地面に激突、土を押しつけて胸まで突き刺さる。突き刺さった反動で空に向かった足は痙攣しており、見る者の同情を誘うが、この場にそのような慈悲を持つ者は居なかった。

「悪は……滅びた……!!」

「ええ、未央。女性の魅力は胸やお尻ではありませんね」

アルが横に並び、語りかけてくる。いつも通り微笑を浮かべながら、親指を立て、

「幼く可愛らしい体躯と獣耳が似合う事が女性の価値ですね」

「まだ馬鹿が居た……!!!!」

面倒臭いので警告無しに打撃すると、スケキヨが三人に増えた。癒しが欲しい、常識が必要だ。> 紅き翼くの良心である詠春に顔を向ける。

「詠春、女の価値ってなんだと思う?」

「近衛さんの素晴らしさについて語れという事だな、長くなるがしよつがないまずは」

長くなるならしよつがないので打撃したところ、聳え立つ脚が四本になった。

最後の砦は年の功、ゼクトに視線を向ける。

「ゼクト……!!」

「わかっておる、皆違って皆いい。そつじゃろつ?」

「流石ゼクトね、わかっているじゃない！ グレイトよ……！」

ゼクトは額に汗をかいているようだが、話す内容はまともだった。やはり年の功は一味違う。一息ついていると、ゼクトがふと呟いた。

「美少女は世界の財産じゃらかな……。体型に拘るのは愚かな事じゃ」

「やだ、こいつらどっかの組織みたいな変態具合……！」

世の中に絶望したので打撃した。結局五組の脚が聳え立つ事になった。

脚の前に立ち、悪を滅した達成感に浸りながら今後の予定を思い返す。

オステイアはアリカの契約で問題ないだろう。連合についても、アリカを経由すれば元老院への接触も出来る。この後は、> 紅き翼<の隠れ家に戻って帝国かアリアドネのどちらかの交渉に向かうか検討だ。しかし、自分は神とも会ってみなければならぬ。先に済ませてしまふべきか、と思いつつながら脚の森を眺めっていると気づいた。

あ、やばい。これどうやって隠れ家に運ぼう。

第二十一話 前編

未央は悩んでいた。

目の前には、先ほど怒りに任せて打撃した結果がそそり立っている。人間の脚だ。しかも5組。>紅き翼<の面々が埋まり、脚を天に向けて突き出している。セクシャルなハラメントを受け、傷ついた心の報復行為で正当なものだ。詠春だけは少々八つ当たり気味だった気がするので、後で謝っておこう。ともあれ、目の前には5組の脚がそそり立っている。埋めてしまっただけからそろそろ3分程経つ。

流石に不味い。>紅き翼<、身内セクハラで地面に埋まり全滅とか笑い話にも程があるわ……！

焦り、ナギの脚を引っ張ってみる。しかし地中で固定されているようで抜ける事はなかった。しかもナギ自身の反応がない。

気絶してる……！ これじゃあ自分から出てこないわね、ピンチが倍増……！

不味い、原作ブレイクはするつもりだがこんなブレイクは真つ平御免だ。最早手段を選んでいる暇はない。魔法で地面を吹き飛ばして発掘しようとアーティファクトで杖を造形する。さてどの魔法で発掘するべきかと振り返ると、ラカンの脚がジタバタと動いている。いち早く気がついたようだ、流石の頑丈さと感心していると、脚の動きが変わる。

ラカンの脚がまるでポーズを取るように動く。左足は膝を曲げ、右足は天を突くように伸ばしている。左右の脚がポーズを2度3度

と入れ替え、脚に纏われた気が高まっていく。そして、最後の締めとばかりに両足が天を突く。
瞬間、爆発した。

「何それええええ！？」

ラカンを中心として地面が爆破される。その範囲は30m程に渡り、周囲に埋まっていた>紅き翼<と立っていた未央ごと吹き飛ばす。土塊と共に>紅き翼<の面々が空を舞い、くるくると回転しながら周辺の森に墜落した。未央は吹き飛ばされながらも浮遊術で体勢を整え、土塊を魔力障壁で防ぐ。爆破中心点を見ると、ラカンが片腕立ちの姿勢で鎮座しており、見方によってはパンチで地面を炸裂させたようにも見える。

ラカンは片腕立ちの姿勢から地面に脚を下ろし、一息つきながら右腕で額を拭う。

「ふう……やばかったぜ。気合がなけりや危ない所だった」

言葉とは裏腹に、大して消耗した様子もない。先ほどの爆破技も彼にとつてはたいした事ではないのだろう。頭に加えたはずの概念打撃も痛みを与えている様子はない。服についた土塊を払いながら、こちらに手を振ってきている。

背中見たら【頑丈】とか書いてないでしょうねえ……。

相手に概念使いが居るならありえない話ではないが、原作でもこうついた感じの人物だった気がする。恐るべし、ジャック・ラカン。そんな思いを得ながら、未央はラカンの傍へ着地した。

「ジャック、今の何？」

「あ？　今のは気合大爆発だ。かつこいいだろう？　真似してもいいが、ライセンス使用料を頂くぜ」

「真似なんて出来ないわよ……。それより他の皆探すからあんたも手伝いなさい。あんたが吹き飛ばしたんだから。」

「吹き飛ばした理由を作った女が何言ってるんだ？　待て待て、わかつた探せばいいんだろ」

ラカンの返答に未央は指を弾く姿勢を作り、答えを変えさせる。

探し始めて程なくして全員発見され、治療が施される。全員大きな怪我はなかったが、随分体力を減らしていた。

全員が復調するとすぐさま第61回>紅き翼<内裁判が執り行われ、未央のやりすぎに対して訴えが起こされたが、未央の「セクハラは絶対悪よ」の一点張りに大した効果は挙げられなかった。しかし、証人として出廷した詠春からの「自分は許婚の長所から女性らしさを話そうとしただけ」という訴えは未央の心に届き、今後打撃は自重するとの口約束が交わされた。

一連の流れを傍観していたラカンは、傍聴人席相当の地面に座っていたナギに問う。

「お前ら、いつもこんな面白いテンションしてんのか？」

「今日は大人しい方だぜ？　一番激しかったのは第25回の『詠春の惚気がウザい』裁判でな、弁護に回った未央と検察側の俺が本気バトルになつて大変だったぜ」

「そんな理由で本気バトルに入るお前らに、流石の俺様も失笑だわ……」

肩を竦めるラカンだが、ナギは内心思う。

いや、お前も相当なもんだと思うぞ。

結局は、五十歩百歩という事だろう。

> 紅き翼く内裁判が終了し、一行は近くに設置してある隠れ家へ向かった。4年間、世界各地で逃亡しながら>完全なる世界くの拠点を潰し、人の近寄らない廃墟を見つけると隠れ家として改修した。今向かっている隠れ家もそうして改修された廃墟の一つだ。移動手段は基本的に杖による飛行となる。あまり飛行呪文が得意ではない詠春は未央が作った二人乗り用の杖に相乗りしている。今回は更に飛行呪文の使えないラカンが加入した為、未央が二人乗り用の杖をもつ1本作り、ナギに渡された。普段とは違う重量バランスに戸惑い、蛇行運転になるナギとラカンを尻目に、一行は隠れ家に到着した。

しかし、ラカンが皆に問う。

「到着しても、何も無いじゃねえか。地下にあんのか？」

ラカンは傍にあった石に手を当てながら言う。それに答えたのはアルだ。

「いえ、地表にありますよ。今貴方が触っているのがそうです」

「はあ？ 触ってるのはただのでかい石だぞ」

「そういう隠蔽をしてあるんですよ」

アルが続けて答え、懐から青い石 賢石を取り出す。魔力を込めると、賢石から軽く音が響く。

【・ アルビレオ イマ】

アルの囁くような声がラカンの耳元で響く。ラカンは思わずアルを見直すが、彼の目の前に立っており、耳元で声を出せる位置ではない。更には、手をつけていた石に違和感を覚える。違和感の正体を確かめようと見ると、目の前には壁が出来ていた。

「……な」

突然の事態にラカンは圧倒され、後ずさる。下がった事で壁の向こうにある物が見えた。

洋館だ。

古びた様相ではあるが、見逃し様の無い大きさの洋館が目の前に現れている。

「なんじゃこりゃあ!？」

驚きをそのまま声にする。彼自身、既に40年以上魔法世界で過ごしており、並大抵の事に驚かないという自負はあった。しかし、ただの石だと思っていたものが突然壁となり、更には突然洋館が現れるという事態には驚いた。

「【ここには何も無い】という概念らしいですよ。その概念を解く鍵がこの石で、我々の名前に反応して扉が開く。……という仕組みでしたか、未央」

「ええ、パーフェクトな解説よ、アル」

洋館を見上げるラカンの横を未央が通り過ぎ、他の面々もそれに続く。

ラカンは慌ててそれに続く。

洋館の中に入ると、ラカンは更に驚く事になった。古びた様相からは想像出来ない程、屋内は清潔に保たれている。エントランスには汚れのない絨毯がしかれており、照明が明るく照らしている。

中央には、白黒の侍女服を着た金髪の女が立っていた。侍女服の女は彼らを見ると、丁寧に一礼する。

「おかえりなさいませ、未央様と愉快なご一行様」

「ただいま、ティア。その愉快なご一行つてのやめなさいと何度言わせるの」

ティアと呼ばれた女は、未央に最上級の礼を尽くした後、他の面々に礼をする。それを嗜める未央であったが、彼女は首を横に振り、答える。

「創造主たる未央様と他の方々を同列に扱ふ事は出来ません。自動人形の判断機能からも、未央様を最上位に置く事は間違いないと判断出来ます」

「貴方、変な所だけ硬いわよねえ……教育間違えたかしら。」

それと、新しく主人設定追加して。この男、ジャック・ラカンよ
そういつてラカンを腕で指す。ティアはラカンを確認すると、改めて一礼する。

その仕草は優雅で、王宮に勤めるような侍女を思い起こさせる。

「ジャック・ラカン様。初めまして、私は未央様によって製造された侍女式自動人形一号機、ティアと申します。何か御用がありますら、お申し付けください」

「お、おう……まあ頼まあ」

先ほどから続く予想外の事態に、普段であれば余裕を持って対応できる事柄も上手く対応出来ていない。

ペース取られてんな。

そう思い、改めてティアと呼ばれた侍女を見る。金色の髪は白のヘッドドレスで止められており、髪は腰まで届いている。身長は170程だろう、白のエプロンに黒の服に包まれた体は女性らしいプロポーションをしている。

言ってしまうえば巨乳だ。Eは下らないだろう。

「でけえな……！」

「そう？ まあティアは女性型にしては身長高めよね」

未央の返答がかみ合っていない。しかし、ティアはこちらの意図を相違なく拾い上げた。

「T e s . 私のスタイルは未央様の理想として形成されております」

「ちょ！？ 何を言ってるのティア!？」

「未央！ 俺にいつてくれればデカくする手伝いをグア！」

ティアの返答に、馬鹿ツプルがイチャつきはじめたが無視だ。しかし、創造主も勘違いした話の意図を間違えない所が彼女の優秀さを伺わせる。ティアはラカンへ歩み寄り、手を差し向ける。手の平には青い石が置かれていた。

「ラカン様、こちらが>紅き翼<の隠れ家に入る為の鍵となります。

使い方は石に魔力を込めるだけとなります。お見受けしたところ、魔法ではなく気を主に使われるようですが、魔力と同様に気を込めていただければ問題ございません。アバウトにその場の気分でお選びください」

「おう、サンキュー」

石を手にとると、特に変わった手触りは感じない。普通の石と同じく冷たい感触だ。薄い長方形にカットされており、懐のポケットに収まる大きさだ。軽く気を込めてみる。

【・ ジャック ラカン】

自らの声が耳元で聞こえる。振り返ってみるが、当然誰も居ない。

慣れが必要だな、この環境は。

護衛として同行している以上、環境には早めに慣れなければならぬ。ない。

気を引き締めようと、石をポケットに入れて周りを見ると誰も居ない。女に殴られた馬鹿は倒れている。

どこへ行ったと思うと、ティアから声がかかる。

「ラカン様、よろしければ個室へご案内致しますが、如何致しましたよう?」

「ん? おお、頼むわ。というか、それは放っておいていいのか?」

「Tes・ナギ様のお世話は未央様のお役目と申し付かっておりますので……放置で」

「それならしょうがねえな。じゃあ頼むわ」

Tesと返答をして、廊下を進み始めるティアに続く。歩きなが

ら館を見回すが、どこを見ても汚れが見えない。エントランスから2階へ上がり、西へ向かう廊下を歩いていると、ある一室の前で立ち止まる。

「こちらがラカン様の私室となります。何かございましたら、賢石に気を込めていただければ参ります」

「おう、しかしこの後の予定を聞いてねえんだが、待ってりゃいいのか？」

「Tes・ ベッド横に館内念話装置も備えられておりますので、未央様よりお声がかかると思われます」

「わかった、んじゃ休ませてもらうぜ」

声をかけて宛がわれた部屋へ入る。普段使われていない部屋にもかかわらず、こちらの部屋も清潔に保たれていた。ベッドに腰をかけてみたが、埃が飛ぶ事もなく、柔らかく腰を沈ませた。

こんな隠れ家があんなら、ストレスなく逃げ回れるだろうさ。

遠慮なくベッドに寝そべり、一眠りしようと思つて目を閉じる。

考えてみりゃ、こういふベッドで寝るのはいつ振りだろうな。

闘技場の床に藁を敷いただけの時代を何故か思い出す。最近は思いつく事も無かったが、それだけ余裕が出てきた証拠か。思っていると、眠気が意識を覆い始めた。

ふと何かの音が聞こえ、目が覚める。窓から見える景色は既に日が落ちており、長い間眠っていた事がわかる。音の正体を探ろうと周りを見る。ベッド脇の机においてある念話装置がコール音を鳴らしていた。相手は未央だ。

「はいよ」

「ああジャック、寝てるそこ御免なさい。でも晩御飯の用意できたから降りてらっしゃい、ティア行かせたから」

「飯まで出してくれんのか、待遇いいな。わかった」

念話を切り、部屋から出ようと振り返ると、金色の髪が目に入る。

「ぬおお！？」

「おはようございます、ラカン様。お食事の時間です」

「おいおい、侍女が勝手に部屋へ入るんじゃないよ」

「申し訳ございません。よくお眠りのようでしたので、抱えてご案内しようかと」

とんでもない事を言い出す案内役も居たものだ。既に起きているから不要と断り、食堂への案内を頼む。私室からエントランスを経由して1階へ降り、少し北へ歩くと食堂に到着した。既に他の面々は揃っており、ラカンの席と思われる箇所が空いている。遅れてすまんと一言かけて席へ座ると、ティアがカートを押しながら入ってくる。カートから料理を手際よくテーブルに並べていき、晩餐の用意が整った。

思ったより待遇がいいな、こりゃ安く継続してもいいかもしれん。

目の前に置かれた料理を前に、そう思った。

晚餐を終えて、ラカンが部屋を戻る。明日以降の予定は、明日の朝食以降に話し合うと晚餐の席で言われた為、今夜はもうやることがない。日課のトレーニングをこなしていると、随分遅い時間までかかってしまった。そろそろ眠ろうと思い、ベッドに歩み寄ると、ドアがノックされる。

「ん？ 誰だ？」

「Tes . ティアでございます。皆様にお伝えすべき事がございますので少々宜しいでしょうか」

何の用かと思い、ドアを開ける。

「夜分遅く、大変申し訳ございません」

「まあ寝る前だからいいが、伝える事ってのはなんだ？」

Tes . と相手は答え、用件を伝える。

「未央様がお一人で戦場へ向かわれました。準備をお願い致します」

依頼人のとんでもない行動を告げた。

第二十一話 中編

ティアとラカンの会話から、時間は少し前へ戻る。

未央は私室にて、本を読んでいた。読んでいる本は白い背表紙に王冠のような模様が描かれており、中央には【BIBLIOLOG I A】と書かれている。アルのアーティファクト>イノチノシヘン<により、詠春の半生を転写した本だ。詠春の許可を取り、アルから借り受けた。本を出している間はアルの魔力を常に消費するものではあるが、大した消費量ではない為、借り受ける事が出来た。

詠春の半生を読みながら、自分のものを皆に見せた時の事を思い出す。アーティファクト>イノチノシヘン<は魂が持つ記憶を転写するもので、前世から連続した記憶を持つ自分の本は前世の18年とこの世界で生きた4年分、合計22年分だ。

自分の半生を見た皆は、各々思う処があつたようだ。

ナギは「年上なのか？」と単純な疑問しか持たず、自分の病気に関しては一切触れる事は無かった。彼なりの気遣いかもしれない。

詠春は本を読み終わるなり、目から大量の涙を流して「何でも言ってくれ……！」などと叫びてきた。勘違いしたナギと喧嘩になっていたが、彼の人柄を改めて認識する事が出来た。

アルは一通り読み終わると、前世の世界の歴史や文化を細かく聞いてきた。知識の蒐集が趣味の彼らしい。

ゼクトは老成した彼らしいリアクションで、「お主も大変じゃのう」と零すだけだった。

今度ラカンにも読ませてみようと思うが、あまり面白いリアクションは期待出来ないだろう。

思考は横道にそれてしまった。一旦本を閉じて紅茶を口に含む。苦い。

ティアに頼んで淹れてもらったものだが、毎回苦く淹れるのはわざとだろうか。確かに気分転換にはなるが、甘い紅茶で気分転換させてほしいものだ。何故苦く淹れるのか、今度聞いてみなければならぬ。どうせなので他の不満を突きつけてやろうと、ティアへの苦言を考え始めるとドアがノックされた。

「誰？」

「ティアでございます。未央様へお手紙が届いております」

「手紙？ 外面は廃墟な上、概念で隠蔽してあるのに？ ……まあいいわ、入って」

Tes . と返答があり、ドアが開けられる。ティアが封書を持ち、自分へ歩み寄ってくる。ティアが歩いていると、自然とある部位に視線が集中してしまう。

くっ、揺れているわね。私もあと4年すればあの位には……！

邪念だ、口に出してはセクハラになる。振り払うように顔を振り、ティアが差し出してきた封書を手取る。

【 ・ 届かぬものはない】

手に取った瞬間、概念条文が聞こえる。確かにこのような概念を刻んでおけば何処であろうと届くだろう。表には『柳 未央 様宛』とあり、間違いなく自分宛だ。裏を見ると、『私』とだけある。封書を開けると、時間と場所が簡単に記載されており、最後に一文だけ文章がある。

『罪科を問う、一人で来るように』

間違いない、自称神からの手紙だ。罪科を問うと来た。文面を見ると、自然と眉間に皺が寄る。相手が自分に良い感情を持っていない事は明確だろう。

呼び出された場所は、偶然か意図したもののかこの近くだ。時間も近い。向かわなければならぬ、椅子から立ち上がると、ティアがこちらの視線に入る。

「未央様、とうに夜半を過ぎておりますが、お出かけでしょうか？」
「ええ、ちよつとそこまで。皆には言わなくていいわ、朝には帰るから」

その返答に、ティアは親指を立てて答える。

「Tes・朝帰りという奴ですね、ナギ様には黙っておきますので、お楽しみを」

「そういうのじゃないわよ!? 貴方どこでそんな話拾ってきたの!?」

「Tes・先日搭載いただきました>どこでもまほネット<機能により、情報収集した結果となります。

「ご満足頂けたでしょうか？」

「これが満足している表情に見えるの!？」

「Tes・大きく感情を揺り動かされており、感動されているものと推測されます。

お言葉については、アル様曰く いやよいやよも好きのうち、と」

自分の娘が手に届かない処に行ってしまった感覚に陥る。アルには今度変な事を教えないように言い含めなければならぬ。

「とりあえず、出かけてくるわ。改めて言うけど、皆に聞かれてもすぐ戻ると言っておいて」

「Tes . . . 行ってらっしゃいませ」

ティアの見送りを背中に受けて、部屋を出る。

夜の丘陵地帯を飛ぶ。既に夜も更けており、近くに人の住む場所も無い事から、生き物の気配は無い。指定された場所が見える。周りは夜の闇に包まれているが、そこだけは仄かに光っている。

未だ相手は来ていないようだ。杖から降りて待ち合わせ場所に歩み寄る。近くで改めて見ると、中央にランタンが置かれており、木製の椅子が二つ、向かい合うように置かれている。

座り、視線を上げる。

白い髪が見えた。

「お久しぶりです、未央さん」

「……いつ来たのよ、さっきまで居なかったでしょう?」

「居ましたよ。【ここには居ない】という概念で隠れていただけで驚かれました?」

「残念だけど、そういうドッキリにはもう慣れたわ」

残念です、と相手は答える。その様子はまるで友人と世間話をしに来たようだ。

相手を見る。

白い髪に肌、赤い目をした前世の自分だ。服装も病院で着ていた白い無地のもので、見るのは随分久しぶりに感じる。ラカンの話ではローブを羽織っていたようだが、夜で紫外線を気にしないからか、特にローブらしきものは羽織っていない。転生した時と同じように、相手からは自分がない荘厳な雰囲気を感じる。いきなり賛美歌が流れても驚かない自信がある。

「そういえば、送った新刊読まれました？ 新シリーズも面白いですよね」

「4年前に読んだわよ、面白いのは同感だけど、続きが一向に来ないわよ。クレーム電話でもしたいわね」

「そちらの時系列と時間の流れが違うので、まだ出てないんですよ。我慢してください」

「出てないならしょうがないわね……。それで、こんな夜中に何の用よ。新シリーズの座談会だったら怒るわよ」

本来であれば、既に寝入っている時間だ。新シリーズの面白さについて語るのは構わないが、それでは朝までかかってしまう。こちらが用件を問うと、相手は一つ咳き込み、雰囲気を変える。

「では、本来の用件に入りましょう。未央さん、どういっつもりですか？」

「主語が抜けた質問するんじゃないわよ。意味がわかるようにもう1回言ってくれないかしら」

「では言い直しましょう。約束とは随分違う原作ブレイクをされているようですが、どういっつもりですか？」

想定通りの質問だ。4年前にナギと付き合い始めてから、いつか来ると思い、何度もシミュレートしてある。

言い負かす。自分は既にこの世界で、彼と共に在ると決めた。

その為にも、ここで相手を言い負かす。

「約束通り、ネギの保護者になるべく努力しているけど、何か問題でもあるかしら」

「保護者どころか実母になりそうな勢いですよね。お願いしたのは保護者役であって、保護者ではありません。」

アリカさんどうするつもりですか？」

「保護者役、つまり保護者としての役割につけて事でしょう？
実母こそ最大の保護者よ。」

アリカには申し訳ない事をしたわ、いずれ腹を割って話し合わな
いとね」

「つまり、ナギさんと別れるつもりは無い、と」

「無いわね」

答えると、相手の顔が変わる。こちらを問い詰める表情から、頬
を吊り上げ、笑みを浮かべている。

攻撃的な笑みだ。

「自分の為に、恋人達の仲を引き裂くわけですね？」

「会ってもいない人間達を勝手に恋人にするのはどうかと思っわ」

「ですが、彼らが結婚して子供を成すのは確定事項でしたよね？」

「>あの漫画くではそうだったわね。ここでは違っわよ？」

「違っつと言いつ切られる訳を聞きましたっわ？」

「簡単よ。私が居るじゃない」

「そうですか……」

その言葉に、相手は満足そうに頷く。こちらの言葉が想定通りと
言わんばかりだ。

「つまり……貴方が居なければ良いのですね？」

「何？ 今更殺しなおすつもり？」

その言葉に、相手は首を横に振る。

そんなつもりはありません、と前置きをして、

「勝負をしましょう、未央さん。貴方が勝ったら、好きにしていた
だいて結構です」

ですが、と相手は言い、笑みを深めながら言う。

「私が勝ったら、貴方には20年程、眠ってもらいましょうか」

そんな事を言い出した。

「今から20年程経過すれば、丁度ネギ君が麻帆良学園で教師を始
める頃です。」

その辺りで起きて、生徒側から介入してもらいましょうか。

かつての恋人が別の人間と成した子供を見る、どうですか？」

そこで一度言葉を切り、相手は笑みの形を大きくする。口は既に
赤い三日月のように開いている。

「ゾクゾクしますね、その時の貴方の感情を想像するだけで」

笑っている。

低く、抑えるような笑いを、かつての自分がしている。

その様子は非常に気味が悪い。笑いからは悪意が透けて見え、生
理的嫌悪感すら覚える。

相手は笑いながら、こちらを指差して言う。

「真実を隠して、恋人を引き裂いた罪人には、相応の報いがあるべきです。」

judgment 罪人に罰を与えなければ」

白い自分が、そういつて己の白い服に手を当てる。

手の当てられた場所は、インクをこぼしたように黒く染まり、周りに広がっている。

瞬く間に白い服は黒く染まり、黒装束となる。

白い髪をして、黒い服を着る相手は自分の敵だ。

黒い髪をして、白い服を着る自分とは対照的だ。

しかし、何か違和感がある。何故わざわざ勝負など持ちかけるのか、それがわからない。

神として能力を発揮すれば、今すぐ自分を眠らせる事も出来るはずだ。まさかフェアプレイ精神とは言わないだろう。

「私は>完全なる世界<の一員として、貴方と相対しましょう。精々味方を強化してください、私も力を尽くしましょう。心配せずとも、貴方に与えてある概念を司る能力と、>完全なる世界<の一員たる魔力と体力でお相手しましょう。ズルして一人だけ無敵モードではつまらないですからね」

つまらないと、相手の一言で閃いた。

ここで仕掛けてこない、わざわざ目的を話して、再戦する。メリツトが無い、当然だろう。相手はメリツトなど欲してはいないのだ。先ほど、相手はわざわざjudgmentと告げた。それは、>終わりのクロニクル<で主人公達と相対した敵の告げた言葉で、

「貴方 私と世界を使って、暇潰しのゲームをするつもりね」

相手は登場人物の一人としてこの世界に立ち、暇潰しをするつもりだ。正解とばかりに、相手は笑みを深めて立ち上がる。

「そうそう、それと私の一存で一人、こちらに引き込んだ方が居ます。」

原作を読んでいたら、何故参戦していなかったか不思議でしたので」

「誰の事よ？」

「では、紹介しましょう」

相手が合図のように指を鳴らすと、それは影から現れた。

現れたのは、金色の髪を持った長身の美女。羽織った外套は夜の暗さを切り取ったように黒い。傍らに小さな人形を引き連れており、その身に纏った膨大な魔力からそれが誰であるか、すぐに思い至った。

「紹介しましょう。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルさんです。>闇の福音くといった方が分かりやすいですか？ エヴァンジュリンさん、あちらが未央・柳さんです。貴方の敵ですよ」

エヴァはゆっくりと自分の足から頭まで眺める。

そして一言。

「貧相な体だな」

なんですって？

「よく言えたものね、その姿変身でしょ？ この合法ロリが！ 偽巨乳で威張ってんじゃないわよ！」

「なん…だと…!? 貴様、何故私の正体を知っている!」
「やかましい、最強種たる吸血鬼の真祖だからってなめんじやないわよ。こちらら成長期だからまだ伸びるのよ!」

確かに相手は原作中でもナギと最強の座を争う相手だ。しかし、だからといって気後れする必要はない。自分は、そのナギの相棒なのだ。

「確かに強敵。結構、存分に戦いましょう! なんならここでやっ
てもいいわよ!」

「いい度胸だ小娘…! ぶち殺してその血を吸い取ってくれ!」

エヴァが身構えるが、傍らに居た白い自分がそれを制する。

「すみません、時間切れです。> 紅き翼くのメンバーが近づいてきました。今あつたら総力戦になってしまいます」

「何が不味いのだ。殲滅してやればよいだろう!」

「いやあ、お祭りは良いところでやらないと、ここは舞台が残念です。それでは未央さん、また今度」

憤り、撤退を拒否するエヴァをおしとどめ、白い自分が撤退しようとして転送魔法を詠唱し始める。

最後に一つだけ気になる点があった。

「あなた、そういうえば名前を聞いてなかったわね。敵の名前なんだから名乗っていきなさい」

「そうでした、では私の事は…そうですね、ヤミ・オギナとでも呼んでください」

「私のアナグラム? とことん対抗してくるのね」

ヤミと名乗った相手は、そのまま転送魔法の詠唱を終える。ヤミがこちらに一礼した瞬間、彼らを包むように影が競りあがり、押しつぶすように消えていく。相手の転送魔法が終わる頃、背後からナギや皆の声がかかる。

今回の会合で相手の目的は判明した。神ことヤミ・オギナが参戦してくる事は想定していたが、エヴァの参戦は予想外だ。吸血鬼の真祖としての力は油断を許さない、皆と対策を考えなければならぬだろう。

絶対に負けるわけにはいかない。

決意を新たに、皆と合流する為に背後へ飛び立った。

第二十一話 後編

> 紅き翼<の隠れ家の一室、会議室に一堂に会していた。既に深夜2時を回っているにも関わらず、皆の雰囲気は厳しいものだ。円卓に着席している一同は、ある人物に厳しい視線を向けている。

向けられているのは未央だ。

彼女一人だけが、少々居心地が悪そうにしており、この雰囲気を作っている原因とわかる。さて、とアルが声を出す。

「では、第62回>紅き翼<内裁判を執り行います。

議題は『未央が未だに我々を頼らない件』について」

「い、いや、別に頼っていないわけじゃないのよ？ ただ」

「被告人は発言を慎んでください」

「はい……」

先ほど、神ことヤミ・オギナとエヴァンジェリンの二人と別れた後、未央が一同と合流した途端、非難が集中した。良識派の詠春ですら、未央に厳しい態度を取っている。

「4年前の事は水に流したが、今回は流石に許せんぞ、未央。

我々は既に運命共同体だろう」

「う、うん……。そうだけど、ほら、万が一って事も……」

「万が一に備えて我々と行くべきだった、と言っているんだ！

少しは自分の心配もしろ！」

正論だ。

詠春の言葉に、未央は言葉が詰まる。しかし、未央は言い訳を諦めない。

「でもね、ほらこれ！ 手紙で呼び出されてね、一人で来いよって！ これこれ」

「証拠物件として受領しましょう」

風に乗せて、未央の手元からアルに証拠物件Aこと手紙が受け渡される。

それを持ったアルは、手紙を一読。

「確かに一人で来いと書いてありますね。

しかし、我々に黙って行く必要はないのでは？」

「……いや、だって話したら皆ついてくるんじゃない？」

『当たり前だ！！！』

「うう！？」

約全員からの突っ込みを受け、未央は怯む。突っ込みの中でも、一際声の大きかったナギが続く。

「なあ未央。俺達付き合ってるよな？ 俺は未央の事愛してるぜ」

「も、勿論よ……。私も愛してるわ」

「じゃあなんで俺にも黙ってたんだよ？」

「万が一の時に生き残ってほしくて……」

「未央が俺を頼らなかつたって事実と一緒に生きろってのか！

随分嫌味になったな未央！」

机が強打される。打撃音が室内に響きわたり、未央の肩を震わせた。ふん、と怒りと共に息を吐くナギ、それを見てひたすら縮こまっている未央に、今度はゼクトが声をかける。

「まあ、未央の判断は理解できなくはないのう。

犠牲が出る場合、最小限に止める事は必要じゃ」

「ぜ、ゼクト……！」
「しかし、犠牲を出さない為にわしらを頼らなかったという事実は残るがの」

上げて落とした。

最早精神的なヒットポイントがレッドゲージに突入した未央は、思わず机に突っ伏してしまふ。しかし、まだ追撃は止まない。名目上、護衛として雇われているラカンから注文が入る。

「未央よお、折角雇ってんだから俺をこきつかえや」

「いや……でもね、ほら……」

「お前に心配される程、俺は弱くねえ。あいつらもよ」

返す言葉も無く、押し黙る。ラカンは満足したとばかりに、ふんと息を吐いて背もたれによりかかる。メンバーが一回りした事を確認して、アルがハンマーで軽く音を鳴らす。

「では、最後に今回のMVPから一言お願いしましょう。ティア」

「Tes . 失礼します」

「もう勘弁して……」

皆の後ろで、飲み物をカートに載せて待機していたティアが前に出る。ティアを見た未央は、机から勢いよく復帰して問い詰める。

「ティア、貴方がちょっと黙っていてくれれば私は夜間外出しただけと……！」

何故皆に言ったの!？」

直後、約全員から咎めるような視線を受け、再度怯む未央。ティアは構わずに一礼し、話を始めた。

「Tes． 未央様は少々捻くれていらっしゃると思いますので、自動人形の推測機能を使い、

お言葉を分析致しました」

「どう分析したっていうのよ……」

「Tes． 『言うなよ、絶対言うなよ』といわれたらそれは『言えよ、絶対言えよ』と

いうサインだと判断致しました」

「それはお笑いのフリよ！ 今回の件には正しくないから覚えておきなさい！」

「Tes． 流石未央様、素晴らしい突っ込みです。

ちなみに今のはアル様よりご教授頂きました冗談です」

ティアの言葉に、頭を机に強打する未央。完全に翻弄されている。失礼しました、と言葉を作り、ティアは続ける。

「未央様は文面を見られた際、お顔をしかめられました。

好ましくない内容であったと推測されます。

その後、未央様は私に誰にも言わぬよう、指示されました。

未央様はナギ様を愛していらっしゃるっしやいますので、逢引の類ではないと判断出来ます。

情報を統合した結果、危険地帯へお一人で入られるであろう事が推測されました」

ティアの推測に、一同は頷く。

「未央様の指示を無視した理由ですが、未央様の御要望にお答えした結果です」

「私は黙っていてほしかったのだけど……」

「Tes． 未央様は私を作られた際、『常に最善を考えなさい』

と申し付けられました。

未央様のご指示に従った結果、未央様を失う可能性が発生するのは最善ではございません。

私は、未央様にお仕えする為に存在しております。

未央様の為だけに働く自動人形でございます。

未央様に生涯を全うしていただく為、未央様のご機嫌を損ねようとも、

最善へ向かい行動するものです。

よって、皆様にお話した次第です」

Tes . と答え、ティアは後ろに下がった。その答えに、未央は先ほどと違う感情を得ていた。

反省ではなく、感動。

自分が想像した自動人形が、自分の指示を無視して自らの考えに則り、行動した。それは未央の望みでもあった。

「ティア……ありがとう」

「Tes . 感謝は不要です。ですので未央様、今後一人で出歩かぬ様、お願い致します」

最後に釘を刺され、未央は再び額を机に打ち付ける事になった。

そして、未央の向かいに座るアルが、再び手に持ったハンマーで軽く音を鳴らす。

「さて、では罪状を言い渡しましょう。

未央、今後一週間は何処かに移動する時、我々に行き先を告げるように。」

例外は認めませんよ」

「わかったわ……」

「では、監視役としてナギをつけます。ナギ、一日中未央にひつつ

くように」

「おう」

「なん……ですって……」

何時も通りではないか？ という声も出るが、アルより以上との宣言がされて第62回>紅き翼<内裁判は終了した。

各々が大きく息を吐き出し、話題を切り替える。そこにティアが新たにハーブティーを配り、部屋の空気が変わる。緊張と静かな怒りに満ちていた空間をハーブの香りが上書きしていく。

「さて、今度は未央から説明してもらいましょうか。新たな相手を」
「ん……了解」

未央の手元に資料の表示枠がポップアップする。魔法技術による空間転写型の資料だ。

軽く手を振ると、各々の席にも同じような表示枠がポップアップ。表示枠には、先ほど遭遇したヤミとエヴァが写っている。

「新しく参戦してきた敵は二人、一人は私をこの世界に転生させてきた自称神様。

名前はヤミ・オギナだそうよ。

能力は私が敵に回った場合を考えてくれれば早いわ。

対概念戦闘が今後出てくると思うから、皆心しておいて」

「神としての能力は使わないのですか？

未央をこの世界に転生させてきたというなら、生死も操れると思いますか」

「本人曰く、ズルして一人だけ無敵はつまらないから使わないですよ。」

まあ、申告通り使わないと思うわ。こいつの目的は戦争の勝利じゃないもの」

「じゃあなんで介入してきたんだ？」

「暇つぶし、ね」

「ふざけておるのう、殴り甲斐があつて良いがな」

ゼクトが表示枠に写つたヤミを拳で弾く。神を相手に出来ると聞いた時のリアクションは、彼らしくない好戦的なものだ。しかし、特に不都合があるわけでもない。誰もそれを気にする事なく、未央は次の資料を皆に展開する。

新たに写つたのは、エヴァのアップだ。

「二人目、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

吸血鬼の真祖で、闇の福音とか言われてるわね。

まあ説明しなくても皆知ってるでしょ？」

「俺、こいつ御伽噺のキャラかと思つてたぜ」

「ここ数十年は大人しかつたと聞いていますから、ナギが知らないのは無理もないでしょう。」

19世紀には暗黒大陸で大暴れしていましたよ」

「何にせよ、強敵だ。しかし、吸血鬼の真祖であれば京都神鳴流が効果的ではある」

「詠春がメインアタッカーになるかもしれんの」

「私は防御概念の開発してみるわ。」

攻撃力はこちらにも相応だけど、相手は再生する上に上限無しだもの」

未央の言葉に、いつそ再生をとめる概念が開発出来ないか、という声が上がリ、その流れからか、場は概念開発提案会の様相を呈し

始めた。一頻り、皆が言いたいことを言い終えたところで、議題は次のものへと移る。

それは今後の予定となるものだ。

「さて……オスティアのアリカ姫を説得出来た事で、我々が集めた資料が有効だという確証は取れました。次は何処から説得していきましょうか」

「全体の戦況としては帝国有利だから、やっぱり帝国のヘラス皇族と接触すべきじゃないかしら」

「それに異議は無いが、オスティアの防御は大丈夫なのかのう？」

未央の話では、連合が盛り返し始めてから接触したんじやろう？
「つい一昨日に俺と未央で防衛したけど、やっぱり誰か残っとくべきじゃね？」

「それであれば、チームを分けて行動すべきだろう。
遅くなればなる程、お互い腕をおろす場所が遠くなる」

詠春の言葉に一同が賛同し、チーム編成案が出される。

「とりあえずどっちにしても、俺は未央と居るからな！

さっきの裁判でも決まったし！」

「では、ナギと未央はセットですか……。では、こうしましょうか。
ナギと未央はオスティアの防御をしてください。

他のメンバーは私と帝国行きです」

「おいおい、俺は未央の護衛として雇われてんだぜ。悪いが帝国行きはパスだ」

「ジャッック、空気読めよ。俺と未央のデートの邪魔だぜ」

ナギの軽口が飛ぶが、ラカンは仕事なんでねとそれをかわす。彼は>紅き翼<に正式に加入したわけではない、未だ未央が個人で雇った護衛扱いだ。ラカンの持つ帝国の地の理は得がたいものではあったが、本人が拒否するのであれば帝国へ連れて行くのは無理だろう。

「しょうがないでしょう。では、私と詠春とゼクトの3人で帝国と接触してきます。」

オスティアの防御は任せましたよ」

「素朴な疑問なのだが……>完全なる世界<はオスティアでは仕掛けてこないのか？」

詠春の疑問に、未央が答える。

「奴らは無意味に破壊活動はしないから、大丈夫よ。」

4年前も私が突つかからなかったらスルーだったし」

「つまり4年前の行動はやり損という事じゃな」

「ぐ……そ、その通りよ……」

ゼクトは笑いながら未央に言葉のジャブを浴びせる。先の裁判から精神的消耗が激しい未央は、為す術もなくジャブに殴打され、残り少ない精神的HPを更に減少させる。

既に時刻は5時に近い事もあり、今後の方針も決まった事から会議の終了が告げられる。

大きく息をつき、倒れこむ未央。

席を立ち、自室に戻ろうとする皆は、ドアから出る前に未央を軽く叩いていく。

アルは軽く肩に手を置き、詠春は頭を撫でていく。ゼクトは意外にもわき腹を軽く突いていき、未央を驚かせた。ラカンにいたっては、力を込めて背中を張っていく。室内に空気が破裂する音が木霊し、未央は痛みを得てますます蹲った。

そして、ナギは未央の隣に座りなおす。それを見たティアは、一礼して退出。

ナギは何をするでもなく、未央の隣に座り、未央が話しかけてくるのを待っている。

「……………どうしたの？」

「未央、まだ何か隠してるな。ヤミとか言う奴になんか言われたんだろ？」

「お見通しだぜ」

驚いた。本当に彼はこちらの隠し事を見抜くのが上手い。

確かにまだ話していない事はある。しかし、それは勝敗が決した後の話だ。

話す意味は無いと思い、伏せていたに過ぎない。

「ん…………ヤミにね、負けたらナギの事は諦めてもらうって言われたのよ」

「ふーん…………その程度か」

「その程度って、私にとっちゃ大問題よ」

「いや、その程度だろう」

何せ、と彼は一言挟み、告げる。

「俺と未央、二人揃えば無敵だぜ？」

誰かさんがよく一人で背負い込んで居なくなるが、二人揃えば負けるわけないだろ」

だから、そんな話に意味は無いと、笑顔を作った。

「だからいい加減、一人で考えるの止めるよ、未央。俺達まだ14だぜ？」

小難しい事はアルやお師匠にでも頼めよ」

「ん……わかった」

こちらの肩を抱き寄せる。体勢が崩れて、彼に寄りかかるような姿勢になってしまう。

見上げる姿勢になる。

見える彼の表情はいつもの笑顔だ。それを見る度に思う。

この笑顔に、何度も救われてるわね。

いい加減、自分の性根も改善しなければならぬ。最早、一人で動く必要はないのだ。

自分には、彼が居て、頼れる仲間が居る。

それを無視するのは、彼らに対する裏切りでしかないし、いい加減減学ぼう。

ナギに寄りかかっていると、安心感から眠気が襲ってくる。

彼はそれを察したように、自分を抱え上げる。

「別に自分で歩けるわよ……」

「遠慮すんなよ、たまには彼氏面させてくれてもいいだろ」

抱きかかえられてドアに近づくと、外側からドアが開かれる。
開けたのはタイヤだ。

「T e s . お休みになる準備は済んでおります」

「流石タイヤ、んじゃ行くか」

T e s . と返事をして、タイヤは歩き始めた。

その様子を見ながらも、意識は眠りに落ちていく。

最後に感じたのは、顔のすぐ横にあったナギの服の匂いで、

暖かい、春のような匂いね。

そう思いながら、眠りについた。

第二十二話（前書き）

第二次オスティア攻防編、開始です。
まだバトルはありませんが。

第二十二話

夕焼けに照らされるオスティアの王宮の廊下を早いペースで歩く音が響く。

足音の主は、自分是不機嫌とオーラで周囲に示しながら歩いている。

アリカ姫だ。

先日の帝国侵攻で発生した被害を埋めるべく、先ほどまで公務を行っていた。しかし、費用の問題からおざなりにならざるを得ない点が幾つか発生した。

一つ目は一部居住区画の修繕だ。帝都に近い浮遊島にあった区画は戦闘の流れ弾も多く、被害者も相応の数に上った。しかし、その浮遊島は貧民島と呼ばれる居住区画であり、他の官僚から修繕費をかなり絞られた。結果として、被害の半分も修繕は出来ていない。

二つ目は防衛軍の被害だ。先の戦闘では浮遊島に設置した固定砲台による防衛作戦を主としており、途中から>紅き翼<の参戦があった事により予想より被害は少なかった。しかし、犠牲が無かったわけではない。実戦が初めてだった者も多く、辞める者も少なくな。オスティアは軍隊を持ってはいるが、志願制のもので急な増員が見込めるものではない為、将校を悩ませている。更には遺族への弔慰金もあり、裕福ではない国庫はその額を減らしている。

連合への援助も要請してはいるが、相手が渋っている上に要請が受けられても到着するのは更に時間が必要だ。どこを切り取ってもいいニュースが無いと、頭痛を感じて手を添える。私室に到着して椅子に腰を下ろすも、精神状態は少しも改善しない。すぐ横の机には硝子の水差しが置かれており、強い苛立ちを持った心はそれを手

に取る。らしくないと、そう思いながらも、物に八つ当たりする事で少しは苛立ちも解消されるだろうという考えを持った。力を込め、憎い官僚や、完全なる世界くとやらの協力している父の顔を思い浮かべ、ついでに罵倒をもって投擲した。

「ばっかものおおおお!!!!」

「ぎゃああああ!!!!」

おや、奇怪な。幻影に着弾したぞ。しかも悲鳴付きじゃ。

考えていたより随分と手前に水差しは着弾し、中に入った水をぶちまけた。幻影を思い浮かべた空間にぶちまけられた硝子と水は、そこに何者かが実在している事を示している。空間にぶちまけられた水が人の形をなぞるように水滴を流す。

「と、透明人間！ 実在しておったか！」

「いや……私なんだけど……」

空間から一人の女が現れた。>契約の魔女く、未央・柳だ。つい先日、ここを訪れて力を貸すと契約した仲ではあるが、頻繁な交流をする仲ではない。

「とりあえず妾の部屋にまたしても無断で入った言い訳をせよ」

「驚かせようと思って……」

戯け、と言い放つ。流石に硝子の水差しをぶつけたのは悪い気がするが、相手が普通に入ってくれば問題なかったのだ。

そう、妾に問題はない。存外にスッキリしたがな！

思いながら、タオルを投げつける。

「で、何の用じゃ。妾も暇ではないのだぞ」

「友人とお茶をしに、待つて待つて冗談だからその魔法の矢しまつて」

慌てた様子で止めるように言う未央。前回は余裕を持って相対していたが、今回はこちらがペースを取っている。前回のお返しとは言わないが、こちらが主導権を持って話を進められるのは心地よい。

「帝国の停戦派に>紅き翼くから接触に行つてるのよ。その間、私とあと二人でオステイアの防御するから挨拶にね」

「なるほど、なんとも丁度良い。こき使うから覚悟しておれ」

「お任せあれ」

気軽に肯定された。皮肉のつもりだったが、相手は笑顔を作っている。まさか皮肉が通じない相手ではないだろう。試しに今度は嫌味を放り投げる。

「まあ、そもそも妾が頭を悩ませる理由の一つはお主のテロ行為のせいじゃしー？ お主が妾に手を貸すのは当然じゃのう」

「ふ、古い話を持ち出してくる女つてモテないと思うわ……！ そんなのだからお姫様なのに縁談こないのよ！」

「おい、今なんと言つたお主」

「別にー？ お姫様の癖に他国から魅力的に見えないとか、女性の魅力に欠けるんじゃないかなと思つただけでー」

嫌味をスマツシュで返された。しかも気にしている所に直撃したので思わず言い返す。

「妾はまだ15になつたばかりじゃ！ 縁談など早いから来てい
いだけじゃ！」

「うっそ15！？ 同い年に見えない！ 老けてる！」

「なんじゃ同い年か……。それにしても、貧相な体じゃのう……」
「おい今なんていったのアリカ！」

こちらの嫌味がついにスマッシュヒットしたようだ。相手の激昂
ぶりに思わず頬が緩む。

「いやあ、その平坦な体。軽そうで羨ましいのう。妾は無駄に脂肪
があつて困つておる」

「表に出ましようよ……。ここじゃモノが壊れるわ……。！」
「いい度胸じゃ、叩きのめしてくれよう！」

二人揃つて扉を開けると、目の前で白いスーツを纏つた男が立ち
ふさがつていた。男は煙草をふかしており、自分の私室のドアをノ
ックしようとしていたようだ。

ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ、個人的に雇っている密偵だ。
元メセンブリーナ連合の捜査官であり、人脈が広く自身の能力も高
い。

「なんじゃガトウ、妾はこれからこの怨敵に仕置きをしに行く。退
いておれ」

「俺としてもそう出来れば楽なんです、姫様。お二人が暴れると
被害が洒落になりません。自重してください」

被害が出ると言われると、先ほどの悩みもあつて踏みとどまらず
にいられない。未央を見ると考え込んでいる。無闇に被害を出すの
は避ける心を持つているようだ。ガトウの介入で平静を取り戻し、
未央にこれまでにしようかと告げようと口を開くと、

「しょうがないわね……。決着は大戦が終わって平和になるまで持ち越してあげるわ、非モテ女」

「良いじゃろう、それまで精々鼻を高くしている絶壁女」

「そこそこはあるのよ!？」

「妾とてモテないわけではない!」

睨み合う自分と未央を見て、ガトウはふと漏らした。

「……仲いいんですね、お二人」

『どっこが!?!』

ガトウの仲裁でアリカと一時的な和解を果たし、アリカの私室へと戻る。アリカの執務室の周辺に集まり腰を下ろすが、アリカから先ほどの謝罪に紅茶を淹れると命じられる。渋々ながら立ち上がり、部屋の隅にあったティーセットで紅茶を入れながらふと思う。

あれ? 最初に挑発してきたのアリカじゃない? なんで私淹れてんの?

沸々と怒りが沸いて来るが、ここで襲い掛かってはガトウも居る為、2対1だ。ナギとラカンは今頃宿でだらだらと寝ているに違いない、置いてきたのは自分だから自業自得ではある。

こうなるんだったら、ナギだけでも連れてくるべきだったわ

……!

後悔先に立たず、と言葉の意味を理解しながら紅茶を淹れる。せめてもの報復にと、アリカの紅茶に悪戯を仕込み、笑顔で二人に運ぶ。

「お待たせ、はいこれさっきのお詫び」

「ふふん、ご苦労」

「ありがとうございます、柳さん」

「未央でいいわよ、私もガトウって呼ぶから」

「それじゃ、そうさせてもらうかね」

アリカは笑みを浮かべながら受け取り、紅茶を口に含む。ガトウも口に加えた火をつけていない煙草をはずし、紅茶を口に運ぶ。

「ん……美味しい、結構なお手前で」

「ぶはあ!!!」

「ひ、姫様!?!」

ガトウが感想を口に出した瞬間、アリカは口から紅茶を吹き出した。

悪戯成功だ。思わず口元が緩む。

せき込み、口に手を当てながらアリカはこちらに抗議の声をあげる。

「お、お主! これはどういう茶じゃ!」

「これを飲んでも大丈夫なら、貴方は間違いなく健康。角砂糖20個を投下して偽装した『激糖ゲキトウ! シュガーティー!』」

「飲めるかこんなもののおお!!」

魔法で表面を偽装しただけで、実際は砂糖が溶けきらずに漂って

おり、砂を飲み込むような茶だ。当然だが不味い上に口当たりは最悪だ。> 紅き翼<内の罰ゲームとしてよく使用される一品でもある。いかに銘茶と名高いオステイアンティーでも流石に角砂糖20個の投下を受け止める度量は無かった。

アリカはティーカップをこちらに投擲してくる、それを回避すると今度は魔法の矢が向かってきた。

「ちょ!?! 室内なのに本気すぎる!」

「お主は一度殴る、妾はそう決めた!」

魔法の矢を回避すれば室内の調度品を壊し、弾けば屋根を壊してしまう。無詠唱で自分も魔法の矢を展開し、相殺しようと放つ。魔法の矢同士が直撃し、弾けた。

しかし、弾けたのは自分の魔法の矢だけだ。

ちょ!?!? なんで!?!?

驚きと共に、額に衝撃が走る。アリカの魔法の矢が直撃したのだ。魔力障壁も展開してあったが、魔法の矢は障壁を無視してこちらに直撃した。込められた魔力自体は大した事が無く、力を込めて額をチョップされた程度のものだが、障壁を無効化されたという動揺が大きい。

原因はすぐに思い至った。

「そ、そうか……王族の>魔力無効化能力<……」

「そう、妾も若干ではあるが持ち得ておる。これが持つ者と持たざる者の差じゃな!」

胸を張りながら言い放つアリカ。何がとは言わないが揺れている。

事実として突きつけられると、寂寥感が胸に満ち、膝が落ちる。アリカの笑い声が響き渡る室内で、敗北を感じた。

ガトウは一連のやり取りを見ながら、こう思っていた。

まるで年頃の女学生が喧嘩してるようだな。

> 契約の魔女くについてはあまり人柄までは調べていないが、アリカ姫の様子は普段とはだいぶ異なっている。常に冷静である事が心がけ、王族たらんとしている彼女には年頃の娘らしい所は無い。しかし、先ほどから魔女と繰り広げている喧嘩はまるで子供のじゃれ合いだ。人の目がある所では極力感情を乱さないアリカ姫が、今はキーキー喚きながら魔女と押し合いをしている。それは、とても王族の様子とは思えない。政敵に見られたら間違いない批判的になるだろう。

だが、15の娘なら、あんなもんだらうさ。

二人の小娘が騒ぎながらお互いに謝罪を要求している様子を見て、そう思った。アリカ姫にも休養は必要だ。その為の友人が必要だとは思っていたが、雇い主の交友関係には口出し出来ずに苦慮していた所だ。魔女の存在は、戦力以外にも得がたいモノとガトウには思える。

まあ、適度に付き合っしてほしいね、宜しく頼む。> 契約の魔女く

自然な動作で胸ポケットに納めた煙草に手が伸び、無意識に火をつけて一服する。すると、目の前で喧嘩していた小娘二人は急にこちらへ視線を向けて言い放つ。

『煙草臭い！』

仲のいい事で。

第二十三話

喧嘩も30分続ければ相応に疲れてしまうものだ。それが精神的な対決であれば尚の事である。

『シユガーティー』の一件から始まった喧嘩は各々の容姿対決を経て、最終的にいかに自分が不幸であるかという不幸自慢にまで発展した。

「妾など幼少の頃から王族だからとかで遊び相手無しじゃぞ！ 子供に対する仕打ちとは思えん！」

「五体満足なだけマシでしょー！ こちとら24時間フルタイムで痛みに耐える日々だったのよ！ 病気なめんな！」

「今は元気に走り回っておるではないか！ 妾は今でもプライベートルの知人がおらぬぞ！」

「一回死んで治ったんですー！ 友人なら今は私が居るでしょうが！」

「さつときてニコつと笑って友達！？ 子供かお主は？！ しかも彼氏持ちじゃろくに！ 妾のが不幸じゃ！」

「私のが不幸してますー！ テロリスト認定されて逃げ回る気持ちが貴方にわかるっての！？」

「貴様こそ王族の孤独がわかるかあー！？」

取っ組み合いをしながらお互い唾を飛ばしながら口撃を放つ。

しかし、30分も続いた言い合いの末、ついにお互いのネタが切れる。ネタ切れになる程不幸をぶつけ合っていると、不思議な事に怒りを抱いていた相手に同情しはじめた。

炎のように燃える怒りが完全に冷え込み、次第に私達は何をやっているんだと空しさが心に去来する。

大きく息を吐くと、相手も同じように息を吐いている。

「……そろそろ止めときましようか、なんか……疲れた」
「そうじゃの……」

椅子を引き寄せ、糸が切れた人形のように座り込む。更に机にうずくまり、体力回復に努める。

少し顔を上げて目の前を見ると、相手もそうしているようだ。

やりすぎたわ……猛省……！

仲良くなりたい相手と罵倒しあってどうするのだ。相手の事を肯定するだけのイエスマンになるつもりはないが、流石に不味いだらう。

今後はもう少し相手に優しくなるう、そう思っていると、机に硬質の音が二つ響く。

音のした方を見ると、硝子のティーカップが置かれていた。露を纏っており、よく冷えていると周りに主張している。

「お二人とも、お疲れ様です。まあアイスティーでも飲んで一息入れてください」

声の出元へ視線を移す。白いスーツを着込んだ無精ひげの紳士がお盆を片手に立っていた。

ガトウだ。

こちらの視線に気づくと、僅かに微笑み、ウィンクを送ってきた。意外と茶目っ気のある男だ。MPメンスパワーが高いのだろう。

お礼を言つて少し口に含まむと、少々の苦味が来た後、程ほどの甘さを得た舌が喜びを返してくる。

完璧だ。自分の淹れた『シュガーティー』が土下座で謝るレベル

だろう。

「ガトウ、貴方紅茶入れるのも上手いのね」

「新人捜査官の時に先輩の茶を淹れるのが仕事だったもので、喫茶店のアルバイトとして密偵に入った事もありますよ」

喫茶店のアルバイトと聞き、ガトウがエプロンを羽織ってカウンターに居る姿を想像する。

アンティークな家具が並んだ店内に、静かなBGMが流れている。カウンターには無精ひげを蓄えたガトウがカップを拭いており、客を迎える時に不器用な笑顔を浮かべるイメージ。

に、似合いすぎる……！ 行ってみたいわね……ガトウの喫茶店！

アリカを見ると、あちらも同様の想像をしたのか、肩を震わせて笑いをこらえている。

自分とアリカが笑いをこらえている姿を見るガトウは、肩を竦ませて言う。

「似合わないのは重々承知していますがね、あんまり笑われると傷つきますよ」

「ご、ごめんなさい……。でも似合わないっていうか、ねえアリカ」
「そうじゃの、似合いすぎて笑ってしまった。許せ、ガトウ」

はいはい、と首を振って煙草を啜る。火をつける様子が無いところを見ると、何か啜えていないと落ち着かない癖でもあるのだろうか。

話を始めますよ、と前置きをしてガトウが話し始める。

「姫様から承った連合の内部調査ですが、仰っていた通り連合内でも不審な動きをしている者が多数おります」

話しながら、手元で名前の並んだ巻物を広げる。メガロメセンブリア元老院の議会議者名簿だ。名前の縁が赤く光っているものがあり、ガトウはそれを示しながら疑惑の対象者だと告げる。先日渡した資料の裏づけをアリカも取っていたようだ。

「情報の出所が怪しいですが……オスティアの執務官も疑惑の対象者です」

「ふむ……その情報は確定するまで外で話すでないぞ」

「そいつ、>完全なる世界くに繋がってるわよ。……あ」

思わず声に出た。アリカとガトウが不思議そうにこちらを見ている。

>紅き翼くでは既に転生バレしており、原作知識をフリーに喋っている為、補足出来る情報をつい喋ってしまった。なんとか上手い事誤魔化そうと考えるが、それより先にアリカの手が襟を鷲づかみにする。髪で表情が隠れており、その顔がどうなっているか正確に知る事は出来ないが、口元が赤い三日月のように裂けている。

「何か隠しておるなあ……？」

「貴方キャラ変わりすぎじゃない!？」

「貴様に払う敬意などもうない! さあ話せ! 妾の国を救う為に全て吐き出せ!」

最初から敬意などもっていなかったではないか、と反論しようと思ったが、掴まれた襟を上下左右に揺さぶられ、とても話す事は出来ない。

というか、この状態では普通の会話も出来ない。

「ちょ……まっ……やめっ……」
「ならば話さんかぁー！」

アリカの手に更なるパワーが込められ、振動が加速した。世界が全てぶれてみえはじめ、胸のうちに熱い何かが届み上げてくる。

これはやばい。色々な意味で。物理的に全てを吐き出してしまっ
まう。

このままでは色々不味い事態が発生してしまう。救援が必要だ。しかし、頭を激しく揺さぶられてロクな思考が出来ない。胸のうちに発生した熱いなかには既にぐつぐつと煮えたぎってきている。最早一刻の猶予もない。

その時、天の使いが舞い降りた。

「姫様、おそらく喋りたくても喋れないのではないのでしょうか。と
りあえず揺するのをやめてみては」

「ぬ……それもそうか」

「ガドヴ……！ ありがとう……！ ん、ん。今なら貴方の眼鏡
拭き係りになってもいい程の感謝にあふれてるわ」

「い、いや、そういうのは遠慮する」

少々老けた天の使いにより、悪魔の振動から解放される。振動をもたらしした悪魔は今でもこちらを睨んでおり、生半可な嘘では突破出来そうにない。どうやって突破しようと思案していると、相手が更に攻めてきた。

「そっいえばお主、冷静に思い出すと先ほど一度死んだとか言って

おったな。どうやって生き返ったか聞かせてもらおうではないか」

いきなり核心きたあー！？ この人チート頭脳じゃない！

「まあ、話してもいいけど……多分信じられないわよ？ 狂人扱いで追い出すとかやめてよ？」

「安心するがよい。元よりお主を常人とは思っておらん」

それはそれで酷いが、一々抗議しては話が進まないので無視した。そして話し始める。> 紅き翼<の皆に説明した時といい、よく追いつめられて告白する人生だ。

自分の転生の事と歴史をある程度知っている事を正直に話すが、話をしている最中、アリカとガトウは一切質問する事なく、ただ黙って話を聞いていた。

ち、沈黙が痛い！ 押し黙る気持ちもわかるけど少しは相槌でも打ってほしい！

転生してから今に至るまでの経緯を説明する間、沈黙に耐える。アリカは途中、一度だけアイステーを口に運ぶが、何か言葉を発する事はなかった。

ガトウは何かメモを取りながら話を聞いている。

「ま、まあそういう事情で色々知ってるんだけど……あ、ついでに言うとナギは将来アリカと結婚する歴史でした……ハハハ、ご、ごめんね？」

「ふむ、ガトウ。お主はどう思う」

ナギの件をスルーして話の矛先が反れる。話を振られたガトウは、先ほどまで取っていたメモと手元に表示させた資料を見比べている。

表示させている資料には、魔法世界の地図に幾つか印がついたものだ。

「転生だのなんだのは置いておきまして、>完全なる世界<の存在は確定と見て問題ありませんね。」

>紅き翼<が襲撃した連合施設の多くは内通疑惑のある者が管理しているようです」

「よくそんな事まで調べれるわねえ……」
「本業だからな」

そう言っただけで口に咥えた煙草を吸う。しかし、煙草には火がついていないので煙が出ていない。

喫煙者の癖なのだろうか。

「事実としてみれば、彼女の情報は信頼出来ます」

「そうか、おい未央。お主の話信じてやろう」

「か、軽い！ 何故私の周辺の人は、こうも簡単に滑稽無等な話を信じるのか！ いやありがたいけど……！」

最近驚いてばかりだ、落ち着こうと思い、アイスティーを一口飲む。

氷が溶けきっており、温い。

思った程気分転換にはならなかったが、一度思考をリセットする事は出来た。

こちらが一息ついた事を見て、アリカが続ける。

「ハッキリ言うが、転生云々はどうでもよい。お主が極めて高い精度の情報を持っている事が事実であれば問題ない。あ、でも妾を非モテ女と言いつつ未来旦那を取っている件については話がある」

「やっぱりその話はするのね……！」

アリカの言葉に慄きながら答える。一体どのような抗議を受ける事か、想像しただけで恐ろしい。

様子を伺うと、こちらを見ながら机に肘を立て、頬に手を当てて笑みを浮かべている。

穏やかな笑みに見えなくもないが、抗議を待つ自分には裁判官の笑みに見えた。

アリカは視線で未央を脅かしながら思った。

面白い奴、それは間違いないじやろう。

余程こちらに負い目を感じているのか、先日の余裕は欠片もない。視線で打てば響くように肩を震わせている。

チラリ ビクリ！

チラ：チラリ ビクビク！

あ、これ面白いのう。

遊びながら思うのは、相手の事だ。

まさか転生してきた人間とは予想外だが、リアクションや目的からも悪い人間ではないだろう。自分の国にも、とある理由で長い年月を生きている者が居る。それに比べれば転生とてありうるだろうと思う事が出来た。

相手が気にしているナギについては、正直どうでもよい。何せ、

ほとんど知らない相手だ。未来で旦那になると言われても実感も無く、先日見た限りでは魔女にベタ惚れだった。しかし、相手はそう思っていないようだ。こちらのリアクションに一々反応する所を見ると、不安なのだろう。

未央が持っている知識は非常に有用なものだ。 > 完全なる世界に協力している人間の情報は力になる、戦争終結に向けて大きな前進となるだろう。相手もそれを望んでいるのだから、存分に利用させてもらおう。

そこまで考えて、手元のアイステーを手に取る。

口に含み、息を吐き出す。

一息ついて、気まずそうな表情でこちらを伺う未央を見て思う。

それでああ、戦争が終わったら茶でも一緒に飲んでやるうではないか。

第二十三話（後書き）

続くほのぼの回。

次回あたり動きが！

第二十四話

オステイアの王宮を出ると、日は既に落ちており、周囲の闇を街灯が明るく照らしていた。アリカとガトウに転生バレした後、激しい質問攻めにあつた事で随分と時間を食ってしまった。予定では、アリカに挨拶してすぐ帰るつもりだったので、ナギとラカンには夕食までに戻ると伝えてある。

悪い事しちゃったわねえ、それとも先に食べてるかしら。

ラカンは食べているかもしれないが、ナギは意外とこちらを待つタイプだ。さぞかしお腹を空かせているだろう、急いで帰らなければと歩を進める。

ふと、背後に気配を感じた。

足を止めて振り返ると、暗闇からぼんやりと人影が歩み寄ってきた。

「お疲れ、未央」

ナギだ。

宿屋で待っていると思っていたが、迎えに来てくれたのだろうか。街灯に照らされた彼を見ると、片手に紙袋を抱えている。

「てっきり宿屋に居ると思ったわ、どうしたの？」

こちらの言葉に、大げさに肩を竦めて、

「どうしたの？ じゃねえよ。全然戻ってこねえから何かあったのかと様子見に来たんだよ。」

窓から覗いてみたら姫さんとおっさんに質問攻めにされてたからな、軽い飯買って待ってたんだよ」

そういつて片手に持っていた紙袋をこちらに差し出す。持っていると、仄かに温かい。包みを開いてみると、フライを挟んだパンが見えた。少し大きめのサイズで、一人で食べるには少々多い。

「ありがとう、でも少し大きいわよ、これ」

「そうだろ？ そう思うなら気の利く彼氏に少し差し出してくれよ」

なるほど、つまり食べさせてほしいと。

可愛い要求だ。言い回しも気が利いているので得点が高い。普段からこういう態度であれば、こちらとしても鉄拳の応酬をしなくて済むのでありがたい。

こちらに歩みやって来たナギを見て、包みを解いて取っ手を作る。

「はい、あーん」

「あー むぐっ」

大口で食べるかと思ったが、控えめに縁を食べる程度だった。パンを咀嚼する彼を間近で見ると、動物が餌を食べているような可愛らしさがある。しかし、思い返してみると、こういう恋人らしい事をあまりしていない事に気づいた。アリカの件が気かりになっていた事もあり、今一步踏み出す事が出来ていなかったと思う。

やってみると意外と恥ずかしい。> 紅き翼<の皆が居るところでは少々勇気が必要だ。やっても多分皆はニヤニヤ笑うだけだと思うが、だからこそ恥ずかしい。

そう思っていると、ナギがこちらからパンを取り上げて差し出してきた。

「んじゃお返し、あーん」

「あら、私も？ あー むぐっ」

差し出されたパンに噛み付く。

薄くカットされたパンと魚のフライだ。フライの衣のうちにはマスタードが仕込まれており、魚の身も塩味で舌を軽く刺激する。

しつこくない味だ、魚の風味とパンのボリュームが楽しめる。食べ歩きには丁度良いだろう。飲み込んで一息つくと、初めて自分の空腹具合にも気づいた。しかし、次はナギに食べさせるターンだと思ひ、彼からパンを受け取ろうと手を伸ばした。

それを見た彼は、そうはさせじとこちらの手を掴み、

「俺は後でいって、ほらもう一つあーん」

「あ、あー むぐっ」

こちらが口をあけると、少し深めにパンを突きこまれた。やむを得ず思い切り噛み付くと、かなりの量が口の中に運び込まれる。噛むのに苦労していると、ナギは自分なりのペースでパンを食べていた。

ぺ、ペース取られてる！ ナギに！ ふ、複雑！

ペースを取られているというよりリードされている状態なのだと思い直す。そう考えれば、むしろ心地よいものだ。続いて何口かパンを啄ばみ、今度こそナギに食べさせるべく手を振ると、ナギもこちらに渡してきた。ナギにパンを食べさせて、最後の一口を相手に断って食べる。空腹を満たし、彼の腕を取って歩き出す。

周囲からは晚餐の音が聞こえており、静かではないが平和を感じる事が出来る。時折通り過ぎる酒場からは、先日起こった戦場の話

も混じってはいるが、誰もが英気を養い、明日に期待していた。

早く戦争終わらせて、私も普通の晩餐をしたいものね。

そう思いながら、空を見て帝国に行っている>紅き翼<の3人の事を考える。

アル、詠春、ゼクトと頭脳労働組が3人行っているのだから、これ以上打てる手段は無いだろう。

原作ではあまり帝国側の描写が無かった為、自分が行ってもあまり意味はない。

三人の手際を期待して、空を見る。

「帝国にいった皆、大丈夫かしらねえ……」

「ん？ アルとお師匠、ついでに詠春までいってんだから大丈夫だろ。余裕余裕」

彼のリアクションは軽く考えているのか信頼の証か、いまいち判断が難しい。

聡い所を見せる事もあるが、基本的にナギは馬鹿だ。戦闘ではすぐ大火力の魔法を打つし、私生活では割とエロい。浮気はしない所は評価していい。逆に考えれば、大火力ですぐに戦闘を終わらせるようにし、エロ要求の分自分を愛していると考え直す事も出来る。

そこまで考えて、思考が逸れていると頭を振る。どちらにせよ、今更出来る事はない。3人に幸いが訪れるように祈るだけだ。

同じ星空の下、ヘラス帝国の王城にある一室で>紅き翼<の3人

はとある少女と歓談していた。

相手はヘラス帝国の姫、テオドラ第三皇女である。

亜人の国である帝国を率いる一族らしく、長命種であり、頭からは立派な角が生えている。

長命種は外見で年齢を判断出来ないが、彼女は今だ生後10数年であり、人間種でいえば子供同然だ。

彼女は>紅き翼<の3人の訪問に対して、意外ではあるが喜びを持って対応した。

アルがその理由を問うと、意外な事実が判明した。

帝国としても>完全なる世界<の存在を認識しており、>紅き翼<がその施設を襲撃して回っている事を掴んでいたのだ。帝国全体としては敵として認識しているが、停戦を主張する一派からは>紅き翼<に協力すべきと認識されていた。持ち込んだ証拠の確認が済み、連合内でも停戦を望む一派が存在すると説明した段階で、協力するとの確約を取る事が出来た。

今はテオドラとの雑談中だ。

彼女自身としても>紅き翼<には興味があつたらしく、2時間ほど質問攻めにされている。曰く「オスティアで4年前に起きたテロ事件も>完全なる世界<絡みか」、曰く「>千の呪文の男<と>契約の魔女<が恋仲とはマジか」だの。真面目な話題とゴシップが入り混じり、幾つもの質問が投げられた。アルが一つ一つ丁寧に答えではいるが、後の二人はウンザリしはじめている。

「いやあ、しかし>契約の魔女<が妾と同一年とは驚いたの。確か手配写真は20歳くらいではなかったか？」

「あれはテロ事件の時、4年前の写真ですしね。その時も年齢詐称薬を使っていましたから、実際は今年15歳になる少女ですよ」

「なるほどなあ、今度茶でも飲みたいのう。色々噂を聞いておるし」

「ほほう、噂と言いますと……？」

「うむ、>千の呪文の男<をペットにしてるとか、>紅き翼<は彼奴のハーレムじゃとか、実はレズじゃとか。後はそうじゃのう……契約の対価を望むとかいいつつ、金のない者には心意気をもって協力するとか。そんなところじゃのう」

「ハハハ……前半は事実とは異なりますが、後半は合ってますね」

笑いながら答えるアルだが、内心は冷や汗を流していた。

未央が居たら否定しながら暴れていたでしょうね、置いてきてよかった……！

アルが横目で詠春とゼクトを見ると、同様の想像をしたらしく、小刻みに頷いている。詠春に至っては顔色が悪い、未央が暴れた場合の帝国との関係にまで考えが及んでいるのだろう。苦労人だ。そんな>紅き翼<の心情も知らず、テオドラは続ける。

「まあ噂は噂じゃからな！ 実際はもつと過激な人物かもしれんし！」

太陽のように眩しい笑顔を放ちながら、テオドラは更なる爆弾を投下した。爆弾の信管は遙か遠くに居るが、それが爆発した時の規模を想像して、3人は背に汗をかいて、思いを一つにした。

大戦が終わるまで、対面させない方がいい。

未央もわきまえているとは思いが、余計なリスクを背負う必要はないだろう。

大戦後であれば、帝国と喧嘩になろうが構わない。皆で旧世界で左団扇の極楽生活を満喫出来る。

これ以上の爆弾製造を止めるべく、アルは話題を変えようと試みる。

「そういえば、帝国は大規模転移術式の開発をしていると聞き及びましたが、調子は如何ですか？」

その言葉に、テオドラは眉をひそめる。

「極秘情報なのじゃが、何故知っておるのじゃ……？」

まあ良い、貴様らの襲撃した施設がその開発施設じゃったので、頓挫しておるよ」

地雷を踏んだようだが、なんとか爆発せずに済んだようだ。

アルは背中に責めるような視線を感じながら、話を続ける。

「まあ、それによって、完全なる世界への打撃、ひいては帝国の最終的な利益にもなりますので、ご勘弁ください」

「いいじゃろう、妾の慈悲に感激するとよいぞ！」

テオドラは気分よく頷いており、先ほどの話を蒸し返す様子はない。

アルは一息つき、壁にかかる時計を見る。既に時間は深夜にかか

る。また来訪する旨を告げて退席しようとしてテオドラに向き直ると同時に、テオドラの元へ従者が現れる。

従者はアル達3人に一礼した後、テオドラへ耳打ちする。それを聞いたテオドラは眉をひそめてアル達に告げる。

「アルビレオよ、お主達にも関係あるよろしくない知らせじゃ」

「よろしくない知らせ………といたしますと？」

テオドラはそこで区切り、3人に視線を巡らせて、

「信じられぬ事じゃが、魔法開発部門が行き詰っていたはずの大規模転移術式を完成させた。」

数日後にもオステイア侵攻が再開されるとの知らせじゃ」

新たな戦闘の開始を告げた。

第二十五話

> 紅き翼くとテオドラ第三皇女の歓談を盗み見る者が居た。

彼らの周辺は黒一色に染まっており、室内なのか、それとも室外なのかすら判断する事は出来ない。

黒い空間の中で、二つの人影がある。

一人は金色の髪をした長身の女性。闇に溶け込むような衣服を纏っているが、そこから見える白い肌と金色の髪は闇の中でもその美貌を主張している。

もう一人は白い髪をした中背の女性。こちら黒い衣装を纏っているが、彼女の持つ白は闇を拒絶するように強く存在を主張している。

エヴァンジュリンとヤミだ。彼女達の目の前には、> 紅き翼くとテオドラが写る表示枠があった。テオドラの傍へ従者が歩み寄り、耳打ちをする。テオドラが> 紅き翼くに何かを話すと、彼らは途端に騒がしく動き始めた。

それを見てヤミは満足そうに大きく頷く。

「予想通りのリアクションをしてくれますね、皆さん。とてもいい踊りっぷりですよ」

ヤミは左手を振ると、別の表示枠が展開される。その表示枠には、帝国の魔法使い達が写っており、ある者は巻物へ術式を書き込み、ある者は魔法陣の研究をしている。

帝国魔法開発部、その様子だ。

映し出されている彼らの様子は誰も彼もが一心不乱に取り組んでおり、目元には隈が出来ており、頬はこけている。それでも彼らは

研究を止める事は無い。何かに取り憑かれたとしか思えない。
そして、その推測は正しい。

「彼らを使った甲斐がありましたね」

彼らを愛おしいような目で見るヤミ。しかし、傍らに控えるエヴァは瞑目し、何も語らない。いや、よく見ると彼女の口元はかみ締められており、何かを我慢しているようにも見える。
ヤミはそんな彼女の様子はまるで無視して続ける。

「帝国の大規模転移術式完成、これによって未央さんの介入で流れってしまった第二次オステシア侵攻作戦を実行しようと言うわけです。それが終わったらグレート・ブリッジを落として奪還戦です。楽しみですね……。ねえエヴァさん、聞いてますか？」
「……………聞いている」

「ならいいんです、と告げて>紅き翼くとテオドラの様子を見るヤミ。」

彼らは止める手段を検討しているが、オステシア侵攻は帝国の総意によるものだ。テオドラ第三皇女といえど、一声で中止出来るものではない。アルビレオがテオドラに断り、席を外して念話をし始めた。相手は未央だろう、オステシア防御に当たっている彼女と打ち合わせを始めたようだ。

「そうそう、未央さんと相談してください。オステシア侵攻に向ける兵力はそれなりの量ですが、倒しきれないと厄介ですよ。グレート・ブリッジ攻略の際に挟撃しちやいますから」

「……………最初から直接オステシア上空に転移して攻略してしまえばいいではないか。貴様、何故わざわざ中途半端な資料を魔法開発部に与えたのだ？ 完全な転移術式ならそれも可能なのだろうか？」

「わかってませんね、エヴァさん」

エヴァの言葉を否定しながら、ヤミは笑顔で答える。
その笑顔は、悪意を感じない純粹なものだ。

指を揺らして、舌を鳴らしながらヤミは言い放つ。

「これはゲームなんですよ。ソッコー決まったらつまないじゃないですか。どうせやるなら楽しく長引かせましょうよ」

「……そうか。いずれにしても私のやる事は変わらん。今回の侵攻戦には出ていいの？」

「ええ、構いませんよ。あ、でも>紅き翼<のメンバーとしか交戦しちやいけません。貴方がオステイア攻撃したらずぐ終わっちゃいますからね」

「……面倒な、わかった。約束を忘れるなよ」

答えて、エヴァは闇に溶けるように消えていく。

ヤミが表示枠を見ると、>紅き翼<の面々はテオドラと別れ、画面から外れていく。

テオドラもまた部屋から出て行き、表示枠には誰も居なくなった。誰もが、戦争の準備を始めていた。

その様子を見て、ヤミは上機嫌に鼻歌を歌う。

遠足を明日に控えた子供のように、彼女は闇の中を歩く。歩きから早歩きになり、更に感情がとめられない様子で早足からスキップになり、彼女はどこかへ向かう。

「せんつそう〜 せんつそう〜 楽しみだなあ。未央さんはどこまでやってくれるかなあ」

アルからの緊急連絡を受け、未央はナギとラカンを引き連れて再度オステイア王宮へ向かった。念話で呼び出したアリカは眠っており、未央へ抗議を送ったが、緊急の要件と言って押しかけた。アリカの私室に入ると、普段のドレスではなくネグリジエにガウンを羽織ったアリカと対面した。普段よりも脚がよく見える格好な為、ラカンが少々騒いだがそのような暇はないと未央が鉄拳によって黙らせた。

「こんな時間になんじゃ、妾とて睡眠時間は必要なのじゃぞ」

「ごめん、あんまり時間無いから用件言うわ。帝国が数日中にまた攻めてくるわよ」

「……なんじゃと？ 詳しく話せ、今ガトウも呼ぶ」

アリカが念話でガトウを呼び出すと、10分でガトウは到着した。あまり眠そうな様子は見えないが、いつもより無精ひげが濃い。実は手入れをしている髭なのかもしれない。全員が集まったところで、未央は話を始めた。

「さつき、帝国に行ってるアルから連絡があつたわ。帝国が大規模転移術式の開発に成功。」

「数日中にオステイア侵攻を再開する予定、ってね」

「その情報精度はどの程度のものなんだ？」

「テオドラ第三皇女からの情報だから、間違いないでしょうね」

デマの可能性を疑ったガトウの問いは、情報源の開示と共に打ち砕かれた。

「当然侵攻には抵抗する。しかし、先日の被害補填が終わっておらんぞ」

「私達でなんとかするしかないでしょ」

「おいおい、対軍かよ。こんな事なら報酬割増にしとくんだったぜ」

ラカンが愚痴を零すが、出来ないと言う事は無い。ナギは未央の言葉を聞くなりやる気を出しており、任せると言わんばかりだ。

「俺達に任せとけてって姫さん！俺と未央だけでも無敵、そこにジヤックも居るから相手が哀れに思えるぜ……！？」

実際に言った。

彼の自信は能力と実績の裏づけがあるものだ。先日のオステイア侵攻戦もナギと未央が帝国軍をなぎ倒した結果の勝利だ。

しかし、とアリカは告げる。

「お主達が頼りにならぬとは言わんが、相手は先日より戦力を増やしてくるじやろう。」

それに、未だテロリストである事は変わらん。オステイアとして友軍扱いは出来ぬな」

「そうよねえ……守ってるオステイアの固定砲台から精霊砲食らうのが一番の懸念ねえ……」

「気合で防御すればいいだけだろ？」「別に障壁で弾けるだろ」

「あんたらはそうしなさい、私はどうしようかしら……とりあえず何か考えとくわ」

先日の一戦でも、未央とナギはオステイア軍から砲撃を受けた。

帝国軍が退却間際になったタイミングで放たれたオステイア軍の精霊砲は二人を狙ったものだったが、ナギが弾き飛ばしてその場は難を逃れていた。今回の一戦でも同様に撃たれる可能性があり、対処

が必要だ。

「お主、精神操作とかで味方と誤認させたり出来んのか？ 魔女で
あろう？」

「あのねえ……貴方、自分の国民に精神操作しろって言うの？ 後
味悪いし、嫌よ。変な後遺症出るかもしれないし、やりたくないわ
ね」

「やりたくないを我慢して勝てる戦なら楽なものじゃろ。まあ後遺
症が出るかもしれんなら駄目じゃな……」

その後もオステイア軍への対処を話し合いはしたが、これといっ
た案は出ず、『なんとかする！』というアバウトな結果となった。
その結果を得て、アリカは思わず愚痴る。

「ええい、お主達がテロリストで無ければ軍と連携を取らせるとい
うのに……」

「それはもう……ごめんね？」

テロリスト認定を受けた原因となる未央は縮こまり、皆に謝る。
ナギは笑いながら過ぎた事と言い放ち、ラカンはおかげで大口の
雇い主に会えたと笑い飛ばした。

ガトウは苦笑しながら火の付いていない煙草を弄ぶだけだった。
あえて言う事もないのだろう。

「そうじゃ、>完全なる世界くの連中は今回出てくるのか？」

「んー…わからないわね。でも出てくるとしたら、オステイアに顔
を出していない奴だけだと思うわ。」

つまり奴らの中でも二人。ヤミとエヴァンジュリンね」

「ヤミはお主を転生させた神だったか。エヴァンジュリンとは誰じ
ゃ？」

「あら、知らない？ エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。
> 闇の福音くって言われてる奴よ」

答えを聞いたアリカは、手に持っていたカップを落とす。中に入っていた紅茶がテーブルを塗りし始める。本来であればガトウが対処したと思われるが、そのガトウも同様に固まっている。30秒程経過して、漸くフリーズから復帰したアリカが控えめに未央へ問う。

「冗談じゃろ？」

「冗談なら私も良かったんだけどね……」

改めて事実を突きつけられたアリカは、胃のあたりに手を当てながら呻く。

ガトウも頭痛を感じたようで、頭に手を添えている。

そんな中、やはりナギは気楽に言い放った。

「大丈夫だって、俺らに任せとけよ！ 伊達に4年間逃げながら完全なる世界くの奴ら追ってたわけじゃねえから。あんたも国もまとめて守ってやるぜ？」

声を向けられたアリカは、意表を突かれたような表情を得る。ナギの言葉に感じるものがあったのだらう。少しすると、笑みを作りながら、いつもの口調で返す。

「そっじゃな、考えるばかりでは何も出来ぬ。お主達に任せるとしよう。」

しかし、ナギよ

「ん？ なんだ」

「先ほどの言葉、女子への告白にも聞こえるので気をつけると良い」

ほれそっちを見る、とアリカはナギの隣を指差した。
その先には、嫉妬に狂う魔女の姿があった。
魔女の宣告が下る。

浮気者は極刑よ。

打撃音と悲鳴が響いた。

背後に天を突く脚を置いて、未央はアルと連絡を取る。

帝国へ行っている3人には、侵攻戦に投入される戦力を調べてもらっていた。

「どう、アル。わかった？」

「まだ全体は見えませんが、かなり多いですね……」

現状報告とアルが送ってきたデータには、先日の兵力を大きく上回る数が記載されていた。単純に比較しても2倍以上だ。空中戦艦・鬼神兵ともに大量に転移してくる。>紅き翼<の戦力で撃破できない数ではないが、楽勝という数では無い。

「どうやら、何回かに分けて転移させるようです。ここは、前半はあえてオスティアへ転移させ、後半は我々が帝国で殲滅。帰還は概念強化符を使用するプランでどうでしょう」

「それしか無いでしょうね……。オスティアで全部相手にしたら、私達全員居ても撃ち漏らしが出るかもしれないし。転移させる座標がもしわかったら教えて、そこで一人待ち構えるから」

「望み薄かと思いますが、了解しました」

アルは答え、念話を切る。

準備をしていく中で、未央は考える。

オステイアへの侵攻は2度行われているが、それはラカンが>紅き翼<へ接触する前の出来事だ。

先日、一度目を乗り切った後にすぐラカンとの対決が発生した事で、二度目は何かの結果で潰れたのだと判断していた。しかし、大規模転移術式の完成に合わせて再侵攻。わざわざオステイアへ侵攻する理由は何だろうか。転移術式が完成しているのであれば、グレート・ブリッジを先に陥落させ、オステイアを帝国領土から挟撃すればいいはず。

強引にスケジュールを合わせたような違和感を感じる。

やはり、ヤミが裏で糸を引いていると考えるべきだろう。

考えていると、アリカが未央に声をかけてきた。

「そういえば未央よ、ヤミとやらはお主とほぼ同じ容姿だそうじゃな」

「ええ、そうだけど……どうかしたの？」

「具体的にどこが違うのじゃ？」

「髪と肌が白くて、目が赤いのよ。アルビノ体質って知ってる？」

あれよ」

「なるほど、わかった。では防衛戦の準備をなんとか整えろとしよう」

それだけ告げると、アリカはガトウを連れ添って部屋から出て行った。

部屋の主が居ない以上、留まるのは危険だろう。

未央はラカンに声をかけ、床に埋まっているナギを引っ張り出して王宮を後にした。

アリカはガトウを伴い、廊下を歩いていった。

「ガトウよ、用意して欲しいものがある」

「は、なんなりと」

ガトウの答えに頷きながら、アリカはガトウへ告げる。
今から言つものを用意せよ。

。 。 。 それによって、 する。

「……危険では？ 失敗すれば姫様にも罪が及びますよ」

「リターンは大きい、頼むぞ」

「……承知しました」

答え、踵を返して別の方向へガトウは歩き出す。
一人歩くアリカは、不敵な笑みを浮かべている。

見ておれ、未央よ。お主にでかい貸しを作ってくれる。

第二十六話

帝国領に最も近いオスティアの浮遊島郡。

三日前からここは緊張感に満ちていた。アリカ姫が行った【独自に行った諜報活動】の結果、帝国軍が再侵攻をかけたけるとの情報がもたらされたからだ。つい先日侵攻に失敗したばかりという事もあり、当初は疑いの目を向けられていたが、続けて帝国軍が軍備を整えている写真が提示された為、この浮遊島郡へ戦力の補充がなされた。しかし、補充とは言っても帝国軍が本当に侵攻してくれば時間稼ぎにしかならないものだ。それはここに転属となった兵士であれば誰でもわかっている。

先日王都からこの浮遊島郡に転属となった一兵士である自分も、それは十分に理解している。同じ隊の同僚や上司も当然理解しているだろう。

正直、捨て駒だよなあ。

軍に入った以上、オスティアを守る為に命を懸けるつもりはあった。

しかし、いざ死地へ赴いてみると、これがなかなかキツイ。監視塔に立ってみると全ての景色が敵に見えて、夜空の星が敵の偵察艇ではないかと凝視してしまう。眠りにつけば、精霊砲で島ごと粉砕される夢を見て悲鳴と共に起きてしまう。しかも隣で寝ていた同僚にぶん殴られた。

緊張と不安に満ちた日々だ。王都の親元に逃げ帰りたいと思ってしまう。

思わず傍らで休んでいる同僚を見た。雑誌を読みながら、鼻歌を歌っている。こちらの抱いている不安など馬鹿らしいと言われている

る気すらしてくる。

「お、今月の>憧れる人<第一位アリカ様じゃねえか……。わかってる奴ら多いな！ ファンクラブNo21として誇らしいぜ……！」

アリカ様に憧れを抱くのは同意だが、よくもこんな場所で暢気に雑誌が読めるものだ。気を楽に持つ秘策でもあるのかと思い、聞いてみる事にした。

「リラックスしてるみたいだけど、なんかコツでもあるのか？」

「緊張したつてしようがねえだろ、逃げるわけにもいかねえし」

「でも、不安だったり怖かったりするだろ」

「ああ、そういう事か。じゃあ、こう思えよ」

いいか、と前置きをして同僚は告げた。

「俺が逃げたら、その分早く帝国が俺達のオステイアを攻撃する。

俺一人じゃ10秒位しか持たないだろうけど、逃げたらその10秒早く帝国は撃つ。つまり、俺は10秒オステイアを救えるわけだ！」

「……は？」

とんでもない事を言う同僚だ。彼は一人でオステイアを救えるつもりらしい。

「お前も力を貸してくれば多分20秒持つ！ 隊の皆であたれば3分は楽勝だ！ 更にオステイア全軍で向かえば1時間は余裕……！」

「いや、でも前の侵攻だつてそついいながら負けそうだったんだろ？」

「ん？ ああ、そついやお前は転属組だったか」

同僚は今気づいたとばかりの反応を返してくる。

「お前、前の侵攻の時、どうやって勝ったか聞いた？」

「なんとか持ちこたえたって聞いたけど……」

「いんや、俺達だけじゃ負けてたよ。救援があつたんだ」

「聞いてないぞ、連合軍か？」

同僚は違つと首を振り、思いもよらぬ事を告げた。

「>契約の魔女<と>千の呪文の男<、>紅き翼<が俺達を助けてくれたんだよ」

「……幻覚でも見たんじゃないか？ そいつらテロリストだぞ」

「間違いねえよ、そんでもって魔女は俺達に言つたぜ。 貴方達の力になる、と」

そこで同僚は一度区切り、笑みを作る。楽しい事を思い出しているように、こちらを伺いながら、

「相手は魔女だ、代価は要求してこなかったが、きつとそのうちトんでもない代価を要求してくるぜ？ だから、俺らから代価をむしり取るまで生かしてくれるだろうさ。 あ、やべえこれ緘かんじつ口くち令れいきてたわ！ 黙つててくれよ！」

「え、ちょ、おま……！？ 不安の相談したら命令違反に巻き込まれるってどういう事だコラ」

「ハハハ！ すまんー！」

笑いながら外に逃げ出す同僚。気づけば朝食の配給時間だ。自分も貰いにいかねばなるまい。

配給所まで歩きながら、先ほどの話を思い出す。

同僚は>紅き翼<が助けに来る事を確信しているようだが、自分

は無理ではないかと思う。なにせ、>紅き翼<の一人、>契約の魔女<は>オスティアの怨敵<とも呼ばれる人物だ。わざわざ名指しで怨敵呼ばわりされている国を、わざわざ助けたりするだろうか。しかし、以前助けた事はあるようだ。

助けに来てくれるなら、早めに来てほしいよ。

配給所の近くまで来ると、少女とすれ違った。黒い髪に白い装甲服を纏った少女は、3人分の朝食を持って歩いていく。見慣れない装甲服で、自軍の人間ではないと思っていると、少女がこちらに視線を送ってきた。

「おはよう、今日も頑張りましょうね」

声をかけられると、不思議と違和感が霧散していった。

おそらく援軍なのだろう。しかし、こんな少女を戦線に出してくるとは少々情けないと思う。

「ああ、頑張りっつ」

少女に返答して、自分を戒める。

頑張りっつ。俺達が頑張れば、オスティアもこの女の子も助けられる。

少女の後ろ姿を見ながら、覚悟を決めた。

あつぶな、概念も効きづらい相手って居るのねえ。

先ほどの兵士とすれ違った後、冷や汗をかきながらそう思った。

【よく馴染む】という概念を封じた賢石のペンダントをつけているので、相手に違和感を持たれる事はないと思っていたが、先ほどの兵士はこちらを凝視していた。違和感が多すぎたのだろうか、やはり装甲服はオスティアと同じものにしておけばよかっただろうか。

でもしょうがないわよね、ナギにいつもの服の方が似合っつて言われたものね！　しょうがないわねフッフ……！

言われた時の事を思い出すと、思わず笑顔に……というかニヤニヤしてしまう。最前線の浮遊島群に装甲服着た少女が両手に食事持つてニヤニヤしている、という自分の現状をふと顧みる。

気持ち悪いとセルフ申告ね！

落ち着いて表情を直し、再び歩き始める。しかし、戦闘前によくこんな考えをしていられるものだと自分の精神に感服する。アルから今日が侵攻開始日だと聞き、昨晚からナギとラカンを連れて最前線で待機している。朝食を持って二人の下に戻ると、島の縁に腰かけて雑談しているようだ。

「デカイ戦艦は俺が落とすから、お前は小さいのでも落とすよ」「ジャックこそ小さいの落としてるよ！　俺はデカイ奴にデカイ魔法ぶちかますから」

流石に後に控える戦闘の事を話し合っているようだ。戦艦の大きさで戦果は変わらないと思うが、男子なりのスコア換算があるのだ

ろう。そう思っていると、似たような事をラカンが言い出した。

「やっぱデカイ相手を落としてこそだろ！ 戦果もおっぱいもな！」

「……！ 戦果は同感だが女の価値は胸じゃなくて心だぜジャック！」

「その通りね、ナギ」

ラカンの背中に蹴りを入れる。

あ、と間拔けな声を残して悪魔崇拜者は墜落していった。
満足だ。顔も思わず笑顔になる。

「悪は滅びたわね……！！」

「そ、そうだな……」

ジャックが這い上がってきたところで、今日から始まる戦闘の打ち合わせを始める。

作戦を話し合って判明したことがある。ラカンは飛行魔法が使えないわけではない、という事だ。しかし、気合を込めてジャンプ、必要に応じて虚空瞬動をした方が結果的に早く動けるのではない、と本人の言。小回りが利かない空中機動だ、性格通りと思うが今回の戦場ではやはり浮遊島群で迎撃に当たってもらおう事とした。

ナギと自分は杖を媒体とした高速飛行魔法で遊撃だ。【よく馴染む】概念が適用されているうちは、オスティア軍からの精霊砲を気にする必要はないだろう。

問題は、やはりヤミとエヴァがいつ介入してくるかだろう。

先鋒を務める事は無いだろうが、戦闘が激しくなった頃に殴りかられると厄介だ。

ヤミの性格から、間違いなく戦場を混乱させるタイミングで介入してくる事は確実だろう。

「考えてもしょうがねえだろ。オステイアの奴らに警告しても意味はねえだろうしな。まあ戦艦と鬼神兵は俺が抑えてやっから、お前から頼むわ」

「ま、それが順当でしょうね……。ナギ、エヴァの相手いける？」
「そんな聞き方されると無理だな」

珍しく弱気な事を言ってきた。彼らしくないと思っていると、ナギは続けて言う。

歯を剥いた笑顔で、

「勝ってこい、って言ってくれたら勝てるぜ。愛のパワーでな！」

「……やれやれ、本当にしょうがない彼氏ねえ」

しかし、悪い気はしない。ラカンがニヤニヤ笑っているので少々恥ずかしいが、ナギに向き直る。

勝ってこいと言うのは簡単だが、少々味気ない気がする。

少し考えると、ふとアリカの言い回しを思い出し、使わせてもらおうと口に出す。

「勝ってきなさい、私の騎士」

「おう、任せておけよ。俺のお姫様」

気取って言うと、相手もそれに倣い気取った返しをしてくる。相恥ずかしいのが難点だが、意外と悪くない、独占欲が満たされていく気がする。

横で見ていたラカンが口笛を吹き、

「いやぁー流石の俺様もここまで目の前でイチャつかれるとからかえねえわ」

「だ、黙っておきなさいよ！ 私も結構恥ずかしいのよ！」

「未央！ 俺のパワーは120%に充填されたぜ！ 任せとけ！」

からかいはされたが、準備は万端だ。そう思うと同時に警報が鳴り響く。

『偵察より入電、西30kmに帝国の武装戦艦を5隻発見。総員戦闘配備！』

途端に周囲が騒がしくなる。

固定砲台に駆け込む者、自らの杖を持って飛び立つ準備をする者、寝癖をつけたまま司令部へ駆け込む将校と様々だ。

自分達も動く時だ。

アーティファクトで造形した杖を持ち、ナギとラカンに視線を送る。既に二人も準備に入っていた。ナギもまた杖を持ち、ローブの紐を締めなおしている。

防衛の要であるラカンは、仮契約カードを取り出す。先日、ナギと契約して作ったものだ。契約の際に少々あったが、思い出すのもアレなので忘れよう。

ラカンは仮契約カードを手に持ち、呪文を唱える。

「来たれ！」

ラカンの声と共にカードが光を放ち、周囲にアーティファクトを展開する。

アーティファクト>千の顔を持つ英雄く。如何なる武器にも変わ

るそのアーティファクトは自分の物とよく似た性質を持つ。

ラカンの周囲に巨大な武器が現れ、地面に突き刺さる。その一つである巨大な剣にラカンは懐から油性マジックを出し、文字を書き始めた。ラカンの胸には、先日作成した賢石で作ったペンダントが揺れている。込められている概念は【文字は力を持つ】。

「よっしゃ！　じゃあ始めるぜ！　大体あっち……かあ！」

西へ向かい、力の限り剣を投擲した。

ラカンの全力をもって投じられた剣は空気の壁を突きぬけ、音速を超えて突き進む。凄まじい轟音を起こしながら視界から消え去る。流石に30km先では視覚を魔法で強化しても見えないので、偵察兵からの連絡を期待する。すぐにそれは来た。

『て、偵察より入電！　け、剣が飛んできて戦艦1隻を撃沈！？』

「問題なさそうね、汚い字だったから発動するか不安だったわ」

「旧世界で言うシュードウとか言う奴のタマモノだな！」

「書道よ、シュウドウだと別のものになるから間違えないようにね」

剣に書いた文字は【帝国戦艦大当たり】だ。先日ラカンに書かせたところ、あまりにも字が下手すぎたか、ろくな誘導がされなかった。本来の概念では文字の造形ではなく、文字に込められたイメージ力が適用されるものだが、自分が展開したものは異なるらしい。意外な発見に感動しながらも、防衛の要であるラカンが使えないでは意味がない。急遽アリカに頼んで書道セットを調達し、三日間毛筆で書き取りを行った。30km先の敵戦艦にしっかりと誘導・撃墜出来たので、その成果が出たようだ。

「じゃあ、予定通り行きましょうか」

「おう、ジャック、ここは頼んだぜ」
「はいよー」

別の剣に文字を書きながら答えるラカン。
ナギと共に杖にまたがり、空へ飛び出す。

第二次オスティア防衛戦、開始ね。ヤミが出てきたらぶん殴
ってやるわ！

第二十七話

戦闘開始から30分が経過したところで、ラカンの周囲の様子は一変していた。周囲には偵察からの連絡を受け取る念話手、遠視に特化した魔法具を使った観測手、更にはスコアを記録するスコアラ―。最後には待機中の魔法使い部隊がギャラリ―となってラカンを取り囲んでいた。

そんな中、ラカンは大笑いしながら投擲を続けている。

「ジャック・ラカン殿オー！ 新たな敵影、巡洋艦2、駆逐艦6、潜空艦10ですぞおー！」

「了解だあ！ どおりやあー！！」

両手に3本づつ剣を持ち、力の限り投擲する。続けて付近に突き刺さっている槍を掴み、続けて投擲。勢いよく飛び出していく武器達は、爆音を伴いながら即座に視界から消失していく。そして念話手が結果を告げる。

「手前に出てた潜空艦に着弾！ 4隻撃墜ー！」

『ひゃっはあああああー！』

「どんどん行くぜお前らあああー！」

『おおおおおー！！』

まるでゲームセンターに凄腕のプレイヤーが現れたような、そんなノリを多く含む熱狂具合だ。ラカンの戦果を、スコアラ―が空間に転写した資料に反映していく。

【1P ジャック・ラカン 7000Pt 4HitCombo！】

訂正しよう、既に全員ゲームセンターのようなノリだ。オステイア兵達の目からは喜びが溢れており、そのはしゃぎ様はとも軍人らしくはない。しかし、その様子も当然だろう。時間稼ぎしか出来ないと思われた拠点に、突如現れた英雄が次々と帝国軍を蹴散らしていくのだ。

ラカンの投擲射程は30kmを優に超えている。帝国戦艦の主力兵装となる精霊砲の射程は精々10kmであり、オステイア軍はラカンの支援に全力を注ぐ事が最善と判断した。

オステイア軍の兵士達は、誰もが思っていた。

このまま終わってしまえ、と。

オステイアを守る事が出来て、更には自分達も無事に帰れる可能性が見え始めた事で、彼らの応援にも力が入る。しかし、帝国軍

いや、ヤミはそれを許す程、甘くはなかった。

ヘラス帝国軍オステイア侵攻艦隊の旗艦は、オステイアの浮遊島群から西へ100km程離れた場所で滞空していた。先ほどまで周囲に浮かぶ艦隊とゆっくり前進していたが、現在は停止している。旗艦の艦長、作戦の現地責任者である亜人の男は頭痛を感じていた。

予定外の出来事だ。

旗艦を含む第一次艦隊は万が一を考えて超遠距離へ転移、第二から第十艦隊は30km地点へ転移して露払いをする予定だった。し

かし、先ほど第二艦隊が全艦撃沈したとの報告を受けた。本国に待機する艦隊も転移待ちの状態だ。撃沈する直前に飛び込んできた念話によると、撃沈の理由は「剣が飛んできて刺さった」等という意味不明なものだ。相当混乱していたのだろう。

オステイア軍の主力兵器である固定砲台の精霊砲は、帝国軍より技術的に遅れている事もあって射程は8km程だったと記憶している。本来であれば、こちら　帝国側が射程外から蹂躪出来たはずだ。しかし、現実には逆だ。相手は30km超の射程を持つ新兵器を使っている。

クルーにも動揺が走っている。何か対抗手段を講じなければならぬ。

転送地点をもっとオステイアへ近づけるべきか。いや、大規模転送術式の精度はお世辞にも良いとは言えない。下手にオステイア軍基地の近くを転移先に設定すれば、転移先で艦隊がバラけてしまい各個撃破される可能性がある。最悪の結末、全艦隊撃沈の未来が脳裏をよぎる。誇り高いヘラス帝国軍として、それだけは決して許容できない。握った手に痛みを感じる、開いてみると力を込めすぎて血が出ていた。

落ち着かなければ。

手に込めた力を抜き、深呼吸をする。少なくとも、こちらから攻撃する手段が確保出来れば現状を変えられる。思っていると、背後から足音が聞こえた。

「お困りですね、艦長」

「……ヤミ殿ですか。お恥ずかしい処を見せませんでしたな」

上官から本作戦のオブザーバーとしてつけられた相手だ。思わず苦い顔をしてしまう。正直な印象を告白すれば、あまり好みではない相手だ。こちらを見透かしたような笑みをしており、何が楽しいのか上機嫌に鼻歌を歌っている。この場に居ていい人材とは思えない。

信頼出来ないオブザーバーは、こちらの表情など気にせず話を始める。

「射程距離が足りないなら、新しく積んだアレを使えばいいじゃないですか。100kmは楽に飛びますよ」

「……アレですか、本当に信頼出来るのでしょうか。貴方の意見で全艦に急遽搭載されたと聞いています」

疑問で返すと、相手は大きさに肩を竦めた後、泣き真似を始めながら、

「私は、皆さんに勝っていただこうと思……！それが信頼されないなんて、嗚呼、なんて哀しい事か……！」

空々しい、口元が笑っているのを見せている。わざとか？しかし、手段が無いのも事実だ。ここは乗ってみるのも手だろう。

「わかりました……。念話手、全艦隊に到達しろ」

念話手を通じて、全艦に言葉を告げる。

「第三から第五艦隊もこちらへの転移を開始せよ。その後、新たに搭載した質量兵器を準備しろ。数を持ってオスティアへ飽和攻撃を仕掛けるぞ」

ナギと未央は、ラカンと帝国軍オステイア侵攻艦隊の丁度中間で待機していた。先ほどラカンによって撃沈された艦隊を確認した後、帝国軍の出方を見るべく空中で待機していた。

「なかなか動かないわね」

「ジャツクの武器投げにビビってんじゃねえの？」

「うーん……巡洋艦クラスになると魔法障壁で弾いてたから、ちゃんと伝わってれば障壁出力上げて突撃してくるとも思ったんだけどね」

「いや未央。いきなり剣が飛んできて落ち着ける奴はなかないねえって」

手を振りながら真顔で答えられるナギ。未央はそれを受けても尚考え込んでいる。

「うーん……ラカンの投擲は原作にあったから、ヤミも知ってるはず。まさか無策って事は無いと思うけど」

「まあ、なんかあったらその時考えればいいだろ」

「……確かにそうね」

未央は答えて、帝国の艦隊が待機していると思われる方向を見る。警戒を強めようと未央は広域探查魔法の準備を始める。呪文が書いてあるノートを取り出してページを探していると、ナギから声がかかった。

「未央、なんか光ったぞ」

「なんか……？ 何か見えるの？」
「何も見えねえなあ……。いや、やっぱりなんか来た！」

ナギの叫びと共に、未央もそちらを見る。

その瞬間、二人の周囲を大量の『何か』が凄まじい速度で通過していった。何かと振り返った二人の背後をその物体が引き起こした衝撃波と爆音が襲う。展開していた魔法障壁によりダメージはなかったが、驚きを得ていた。通過していった『何か』の行く先を見ると、既に消えており何も見えない。

「な、なんだ今のは！？」

「わ、わかんないけど、帝国の兵器じゃない！？ ジャックに連絡取るわよ！」

未央は動揺を持ったまま、ラカンへ連絡を取る。念話に出たラカンは上機嫌な様子で未央に対応する。

（どしたあ未央。おかわりがこねーぞー。俺様のハイスコア更新の為に探してくれ）

（ジャック！ さっきよくわかんない物体がすごい速度でそっち行っただから防御して！）

（はあ？ なんだそりゃ？）

（帝国の新兵器かもしれないのよ！ いいから早く防御して！）
（へいへい……）

未央は念話の向こうでラカンが兵士に防御の指示を出す声を聞いた。即座に了解の声が聞こえ、未央は一息ついた。

瞬間、念話の向こう側から爆発音が響いた。低く響く爆発音。一度ではなく続けて何度も響く。爆発音の合間からは、人間の悲鳴が聞こえてくる。

(おらぁあああああ!!！)

ラカンが裂帛の気合を込めた声をあげると、遠い爆発音が響く。

(ジャック!? どうしたの!?)

(わ、わからねえが何か着弾したぞ! 途中から気合ビームで迎撃したが何だありゃ!?)

ラカンも珍しく取り乱した声で応答している。念話の向こう側では救護兵を呼ぶ叫び声や火災の音が聞こえる。

(もう一回直撃きたらやべえぞ! こっちは軍と協力して正体さぐっけどお前らもやれよ!?)

(わ、わかったわ!)

「ナギ! さっきの奴が来た方向に急ぐわよ!」

「おう! しかしさっきの奴はなんだよ!」

「私に聞かないでよ! それも聞きに行くの!」

未央はそう一喝し、ナギと共に先ほどの物体が来た方向へ向かう。一刻も早く原因を看破すべく、未央は自分とナギを包むように概念を展開。

【・ものは下に落ちる】

展開が完了。向かう先を『下』に設定したことで、その方向へ向かって自由落下を開始。二人は杖に魔力を込めて自由落下する身を加速させる。魔法障壁により音速突破の際に発生する衝撃を無効化し、音速超過で飛行する。

帝国軍の旗艦では、質量兵器の着弾を確認していた。着弾の際に発生した爆音と発光を見て、ヤミは笑顔で頷く。

「効果があったようですね。いやあよかったです」

「ヤミ殿、この兵器ですが……どのような物なのですか？ 長く軍人をしておりますが、見た事がありません」

「ああ、これですか。旧世界の兵器ですね」

ヤミはそういって、空間に資料を表示する。表示された資料には、旧世界で起きる戦争の様子が映し出されている。海に浮かぶ船から今回使用した質量兵器が飛び出して、敵地へ飛翔していく。

「ミサイル、と呼ばれている兵器ですよ。魔法技術で作ってありますから、オリジナルとは少々違いますけどね。精霊砲より威力は落ちますが、なかなかのモノですよ」

その質量兵器の名前は、艦対地ミサイルと言った。音速を超えて飛ぶそれは、容易く迎撃出来るものではない。ヤミは笑い、艦長へ続けて話す。

「さあ、続けて発射してください。沢山積んでありますからね！」

ヤミの笑顔に薄ら寒い感情を得ながら、艦長は続けて発射するように全艦へ通達する。

それを見届けたヤミは、艦長に背を向けて歩き出す。外へ飛び出

せる後部甲板へ上がり、声を出す。

「さあ、エヴァさん！ 私達も行きますよ！」

「……わかった」

ヤミの影からエヴァが現れる。その表情は相変わらず不満の色を強く出していた。二人は甲板から飛び上がり、高度を上げながら加速を始める。戦艦から30を超えるミサイルが射出されていく様子を見て、二人はその軌跡をなぞるように移動を開始する。

「さてと、実際に手合わせするのは初めてです。楽しみだなあ」

「おい、私は魔女の相手をすればいいんだな」

「はい、私がナギ君の相手をしますので、未央さんをやっつけちゃってください。殺してもいいですよ」

「……わかった」

杖も無しに高速で飛翔しはじめる二人。その速度は音速を超えるミサイルと併走する程だ。

ヤミは笑顔を浮かべながら、エヴァは不満の色を浮かべながら敵へ向かって飛翔する。

音速を超えて移動する両陣営は、すぐに接触を果たした。

一瞬で視線が交差して、位置を入れ替える。

ナギと未央はミサイルを撃墜すべく速度を維持したまま旋回、追撃を開始する。

ヤミとエヴァは、ミサイルを護衛するように散開、お互いの相手

へ向かって行く。
音速超過の戦闘が始まった。

第二十八話

空に浮かぶ雲も、地上に見える森も、加速していく視界から吹き飛んでいく。

帝国軍の新兵器を確認・撃墜すべく向かった先で、旧世界の兵器であるミサイルとほぼ同型のものがオスティアへ向かい飛んでいく姿を確認出来た。更には、その護衛とばかりにヤミとエヴァンジンユリンが随行していた。すれ違った際に視線を交換したヤミの表情は、こちらに挑むような挑戦的な視線をしていた。

オスティアの浮遊島群まで、残り80km。

耳元には残り時間を知る為に呼び出した計算精霊が、必死に計算をしている。

『現在速度、1020m/s。オスティア到達まで後80秒』

浮遊島群は、迎撃態勢を整えている最中だ。ラカンの言う通り、今着弾するのは不味い。浮き足立ったオスティア軍の止めの一撃となってしまう。

阻止だ。

やらなければいけない事を明確にして、杖に魔力を込める。

魔力を充填した杖は、その前方に補助魔法陣を展開。大気を切り裂きながら速度を増していく。

前に行くミサイル郡を確認する。

総数35、ある程度まとまって飛んでいるのが救いだ。

一つ撃墜すれば幾つか誘爆させる事が出来るだろう。

問題は、エヴァがこちらに向かってきている事だ。

既に牽制として魔法の矢を放ってきている。

魔法障壁で弾ける、いや、その衝撃で減速してしまうのは避けたい。

杖に体を押し付けようにして一発目を回避。

続く2発目は杖ごと逆さになり回避して、加速する。

一発一発を丁寧に回避している暇は無い。

加速による速度差を持って、他の矢を置き去りにしていく。

『オスティアまで後70秒』

計算精霊が残り時間を告げる。

ミサイル群の最後方、遅れて飛んでいるミサイルに追いつく。

近くで確認すると、その仕組みを確認出来た。

推進機関は風の精霊と契約しており、先頭には誘導をする計算精霊がつけられている。

なるほど、と得心するが今はそんな場合ではない。

杖に押し付けた体はそのままに、左手で魔法の矢を無詠唱展開。

ミサイルに投じながら爆発範囲から逃れるべく、更に高度を上げる。

衝撃が来た。

矢の直撃を受けたミサイルは爆発、近くを飛んでいたミサイルまで爆発は波及して、3発が誘爆した。

『残り31発』

わかってるわ、そんなに細かく報告しなくていいわよ。

思いながら周囲を確認する。

エヴァはこちらを牽制するように10m程離れて魔法の矢を撃ってきてはいるが、不思議と狙いが荒い。加速をする事で回避出来る程度で、わざと外しているのかとも思う。ナギの様子を確認しようと軽く見渡すが、ヤミ共々姿が見えない。あちらは本気で妨害されたようだ。

ミサイル郡の全体を俯瞰しながら、次に落とすべきミサイルを狙い定める。

時間は限られている、無駄な移動をすべきではない。

考え込む時間も勿体無く思い始め、左から落としていく事に決めた。

軌道をそのままに、魔法の矢による射撃での撃墜を狙う。

無詠唱により、魔法の矢を展開。

姿勢を崩さないように気をつけながら狙いを定めると、背後から気配を感じた。

「流石にそれを見逃すとやかましく言われる」

言葉と共に蹴りが来た。

背中を打ち抜くような蹴りに、痛みで意識が途切れそうになる。

痛みは堪えたが、体勢が崩れる。杖に押し付けていた体が起きてしまい、上半身に前から大きな衝撃が襲う。

起き上がった上半身はエアブレーキの役割を果たし、加速を続ける杖を保持した下半身は上を向く。その場で回転しそうになるが、エヴァに首を掴まれる。

「アレに追いつきたいんだろう？ 手伝ってやるうじゃないか」

何のつもり。

思うより早く相手は行動に移る。自分の首を持った手に力が入る。そのまま振りかぶり、投擲された。杖による加速を軽々と追い越し、一瞬でミサイル郡に到達。しかし、勢いは弱まる事が無い。

ちよ、まさか……！

『オスティアまで後60秒』

暢気にオスティアまでの残り時間を告げる計算精霊の声を聞きながら、自分の体とミサイルが激突した。

エヴァは魔女とミサイルの競演花火を見物する。

ミサイルが多く誘爆しそうな箇所投げたところ、思ったより大きな爆発が発生した。

10発分の爆発を受けた魔女は、焦げながらも未だ健在だ。

ダメージはあるだろうが、まだ生きているな。

気乗りしない作戦ではあるが、魔女を倒す事はまた別の話だ。

気に食わないヤミの作戦をご破算にしてやり、魔女を倒せば最善。

そう思い、落下を続ける魔女の元へ加速した。

近くで確認すると、体の至る所に火傷を負っており、装甲服も一部破損している。

意識もまだ戻っていないようだ。今攻撃すれば更に大きなダメージを与える事が出来るだろう。

そうしよう。

思い切り蹴り飛ばす。

魔女の魔法障壁が抵抗してきたが、大した抵抗にもならず破砕する。

腹部を蹴り飛ばし、更にミサイル郡へと放り込む。

爆発。

今度は余り多く巻き込まなかった。5発分の爆発が発生する。

魔女は相変わらず意識が戻っていないようで、爆煙の中から弾き飛ばされ落下している。

近くに寄ると、まだ呼吸している。

次だ。

同じ攻撃ばかりでは芸が無いと思い、足首を掴んで振り回す。

十分に速度が乗ったところで放り投げる。

飛んでいく魔女と、その先にあるミサイルを見ていると旧世界のスポーツを思い出した。

魔女がボールでミサイルがピン。ボーリングだ。

お、ストライク。

10本分の爆発が起きた。

ボールは欠ける事なく別方向に放り出されている。手元に戻ってこないとは、ここはサービスが行き届いていない。仕方が無いと思いつながら、自分でボールを取りに行く為、加速する。

ボールを確保すると、少々妙な事に気づく。破損していた装甲服が修復している。火傷も悪化どころか改善に向かっている。

よくよく見れば、服の各所から青白い光が漏れており、その光を纏った部分が再生している。

再生能力を付与した装甲服か。ならば益々遠慮はいらん。

ボールを掴み、再びレーンに向き直る。

ピンはだいぶ減っているが、未だストライクを狙える本数だ。ヤミ程ではないが、適度に嗜虐趣味はある。

相手は羨ましい人生を送っているのだ。これくらいは構わんだらう。

2投目だ！

投擲されたボールは、途中で意識を取り戻したのか体を動かしている。

しかし、奴の手元に杖は無い。出来て浮遊術の展開だが、投じられた勢いを消す事は出来ない。

意識がある分、ミサイルに突っ込まされる恐怖があるだろう。ざまあみる、だ。

そう思っていると、ボールがピンと接触した。

動いたせいか、少々残ったな。まあ1発くらいなら防御する

だろう。

5本分の爆発が発生した。

35発あったミサイルは既に1発しか残っていない。

虐殺趣味は無い、1発程度ならオステイア軍も対処出来るだろう。

魔女の行方を確認しようと爆煙を見つめるが、先ほどまでと違い、爆煙から出てこない。

障壁で堪えたか？

思いながら、ミサイルを見送る。

爆煙の中で策を練っているであろう魔女の姿を想像し、どうやって燻り出すか考え始めた。

気絶から復帰してみれば、体がボロボロになっていた。

更にはミサイルへ向かって投げられており、起き掛けに爆発を受けた。

魔術障壁へ魔力を集中させ、なんとか凌ぎはしたが完全に失速してしまった。

再加速してミサイルへ追いつけるか、思索する。

『オステイアまで後20秒』

計算精霊が耳元で残り時間を告げる。

こちらが気絶していた間も、健気に働いてくれていたようだ。

残り20秒、今から加速しても追いつけない可能性が高い。

しかし、エヴァと共に向かっていったミサイルは残り1発だ。

それなら、なんとかなるわ！

杖を新たに造形しながら、念話でラカンに呼びかける。

(ジャック！ 今から言う通りに準備して！)

(ああ！？ こっちも消火に忙しいんだよ！)

(また被害出るよりマシでしょ！ いい！？ 剣に今から言う文字書いて待機！)

ラカンはオスティアの浮遊島群で、巨大な剣をもって待機していた。剣には黒マジックで文字が書かれている。眼下で待機する念話手より、ラカンに報告があがる。

「高速飛行物体！ あと10秒で到着！」

「おう！ まかせとけ！」

返事を返し、ラカンは剣を構える。その構えは剣士のものではない。

両手で柄を持つ。左手を下に、右手を上にして、左足を前に出す事で半身の構えを作る。

野球の右打席に入るバッターの構えだ。

目を凝らすと、空に黒い点が見えた。

来たな！

黒い点は数秒でその身を表した。
未央曰く、旧世界の兵器。相手にとって不足無し！
剣に日が当たり、書かれた文字が露わになる。

【対ミサイル迎撃用バット】

文字を見せつけるように、ラカンは振りかぶる。
旧世界のものには、旧世界のもので対抗する。
旧世界にあるスポーツ、野球。気分は先頭打者だ。

「1番サード、ジャック・ラカン選手う」

空中ではあるが、気で足場を作る。
足場を踏みしめて、力を連動させる。

打球、ミサイルが来た。

モーションに入る。

足から膝、膝から腰、腰から肘、肘から腕と回転を連動させて、
バットに加速を入れる。

加速に入ったバットはたやすく音速を突破、ヴェイパートレイル
を伴いながら、目の前に迫ったミサイルを打撃する。

快音。

「グワアラガキーン！！」

ラカンが自ら出した擬音と共に打ち返されたミサイルは、来る時
の速度にラカンの力を加えられて逆走を始めた。

それを確認したラカンは、笑顔で宣言する。

「先頭打者ホームランだぜ!!!」

ラカンの弾き返したミサイルは、発射した帝国戦艦へ寸分たがわず着弾した

それは残っていたミサイルに誘爆し、内部から爆散する。

それを確認していた他の艦は、ミサイルの威力を改めて確認すると共に、危険性を知る。

「こんなもん積んでいいのかよ……!!」

「上官命令って奴だしなあ、悩ましいもんだぜ……」

「中から爆発しちゃ、障壁なんて意味ないんだぜ!？」

「わかってるよ、とりあえずバラまくか？」

「それで、あの戦艦みたいに爆発するってか？」

うーん、と声を合わせて悩む帝国軍人。旗艦艦長もまた、同じ思いを得ていた。

元々質量兵器の使用には抵抗がある。魔法と異なり、火薬を用いる質量兵器を扱うにはノウハウが足りない。しかし、これ以上近寄っては迎撃を受ける可能性がある。無闇に本国から預かった艦を落とすわけにもいかないが、進まねば戦果は上がらない。

戦艦と浮遊島群の戦場は膠着状態に入り始めた。

しかし、各々の戦いはここから開始される。

ナギとヤミ、未央とエヴァの戦いが開幕する。

第二十九話 前編

戦場の空は奇妙な静けさを保っていた。

空には二つの人影が漂いながら、お互いの様子を伺っている。

一つはエヴァ。

彼女は未央に視線を送りながら、その場で浮遊している。左手の指を時折動かしており、何かを操っているようにも見える。彼女の周囲では、時折光が反射している。それをよく見る者が居れば、ごく小さな氷晶が出来ているのだと判るだろう。

冷やかな視線を未央に送りながら、>闇の福音<はその牙を研いでいた。

相対するは未央。

先ほどミサイルの直撃によって受けた傷は最早完治している。装甲服に刻まれた再生概念により、服共々怪我を治療したのだ。彼女の手には何時もの杖ではなく、何冊かのノートブックを持っていた。魔法の詠唱文が記載されたノートだ。【文学は力を持つ】概念を展開すれば、ページに応じた魔法が発動する。先日のオスティア防衛戦で>千の雷<40発を放ったものと同じものだ。持っているノートにはいくつもの魔法詠唱が記載されており、どのような戦況にも対応出来る。

エヴァの冷やかな視線を受け、表情には不敵な笑顔を浮かべ、内心では大いに焦りながら>契約の魔女<は心の汗を流す。

未央の焦りは、事前の打ち合わせと異なる状況により発生していた。

ナギに相手して欲しかったんだけどね……。戦闘スタイルの

相性的にも。

エヴァは間違いなく最強ランクの敵だ。吸血鬼の真祖ならではの再生能力、膨大な魔力と腕力、更に600年の戦闘経験を併せ持っている。未央自身にはどうしても勝てるイメージが浮かばなかった、ナギであればなんとかしてくれそうなイメージがある。

エヴァの様子を見ながら、ナギの到着までどのように時間を稼ぐか思案する。

二人は空中で円を描くように、お互いを見ながら旋回する。双方ともに動く切っ掛けを探していた。その間をラカンが打ち返したミサイルが轟音と共に通過していく。

瞬間、未央が仕掛ける。

【・ 文学は力を持つ】

一冊のノートを手から放り投げる、空中に投げられたノートは解れ、未央の周囲に展開される。青白く光るページは背中に回り、紙の翼を形成する。

「テスト・テイステイ・テストメント！」

翼が大きく発光すると同時に、未央の体もまた青白く光り始めた。身体強化・障壁強化・思考速度上昇と高速戦闘に必要な強化魔法が一斉に発動した。前傾し、右手にアーティファクトを持ちながら突撃する。造形されたのは白い槍だ。紙の翼が羽ばたき、未央の体に更なる速度を与える。一瞬で音速を超えながら、槍をエヴァに突き出す。

一方のエヴァは、余裕を持って動いた。

彼女には強化魔法など必要ない。吸血鬼の真祖たる体はそれだけで高速戦闘に対応する。右手で>断罪の剣<を展開し、こちらもまた未央に向かつて突撃する。左手は力を抜いたまま放っている。

槍と剣が拮抗する。

拮抗は一瞬、未央は槍を滑らせながらエヴァの側面を抜けていく。地力が劣る未央は力比べを避け、速度比べに持ち込もうと加速する。

エヴァはその無言の提案を却下、先ほどから僅かに動かしていた左手を掲げる。陽光に照らされた指先からは、細い糸が煌いていた。彼女の二つ名は>闇の福音<だけではない。

>人形使い<、その名に相応しい軍勢が彼女の影から引きずり出される。五体の統括人形と、その配下となる三十の武装人形がエヴァの前に整列し、一礼する。意地の悪い笑顔を浮かべ、エヴァはそれを見る。パチン、と指を鳴らす。

「かかれ」

人形達が散開する。

剣を持った者、槍を持った者、弓を持った者と様々な武装を持った人形が未央を取り囲むように展開する。未央はそれを見て、紙の翼に更なる魔力を与える。

「テスト・テイステイ・テストメント！」

翼を構成しているページが三枚剥がれると、同時に三つの魔法が展開された。>雷の投擲<、>白き雷<、>雷の暴風<の雷系魔法だ。展開されたそれらは人形を薙ぎ払うべく力を振るう。それぞれの魔法が幾つかの人形を消し飛ばすが、残った人形が未央へ向かう。

剣が振りかぶられ、槍が突き出され、弓矢が放たれた。

エヴァの操る人形は魔法で強化されており、一体一体が一般的な魔法使いの力を凌駕している。

しかし、今の未央に追いつける速度ではなかった。

剣ごと人形を薙ぎ払い、身を捻る事で槍をかわし、槍を持った人形を引き寄せて弓矢の盾とする。

「ほう……人形では時間稼ぎにもならんな」

エヴァが動く。

左手を払うと、人形が撤退を始める。エヴァの影には入らずに、二人を囲むように円となる。

「……逃走なんかしないわよ」

「何、ギャラリーが居た方がやる気になるだろう？ 貴様はそういうタチだと聞いている」

「心当たりが無いわね、どんな話聞いたの？」

「ヤミからだ。ファーストキスは親の目の前、男への告白も仲間の目の前だったんだろう？」

驚きで嘔き出した。精神的^{トラウマ}外傷を穿り返されて未央は悶える。

「ひ、ひいいい！？ そ、そういうの忘れて！ 今は忘れて！」

「無理だなあ！ ハハハ！！」

頭を抱えて悶える未央と、それを見て高笑いをするエヴァ。

急に二人の間の空気が弛緩する。未央は頭を抱え、エヴァを仰ぎ見る。

「貴方がしたいのよ！ 真面目にやりなさい真面目に！」

「うん？ 真面目にやっているぞ。貴様とのじゃれ合いのおかげでだいぶ精神的にも持ち直したからな」

ふふん、と笑みを浮かべるエヴァ。とてもこれから殺し合いをする表情には見えない。

疑問に思った未央が問う。

「一応確認するけど、貴方の目的って私を殺す事？」

「いいや？ お前を>倒せ<と言われているよ。殺せとは言われていないさ。殺してもいいとは言われているがね」

「倒すって、具体的にどの程度ボコられればいいよ……」

「再起不能に追い込めばいいそうだが、まあ先ほどのようにトラウマを抉る方法もあるが、どちらが好みだ？ ククク」

エヴァの言葉に、未央は行動で返答した。

槍を構えて、紙の翼をはためかせてエヴァの後ろを取り、その勢いのまま槍を振るう。

エヴァは半身をずらし、>断罪の剣<で槍を受ける。

「殴って泣かすわよ、この合法ロリ……！」

「いいだろう、私も貴様を殴って泣かせてやりたいと思っていた！」

剣によって槍を弾き、体勢の崩れた未央に追撃の蹴りが放たれた。エヴァの脚が未央の魔法障壁を一瞬で貫通するが、紙の翼が割ってはいる。防御呪文を記載してあるページが光り輝いてダメージを軽減させるが、衝撃を吸収しきれずに未央は弾かれる。

独楽のように回りながら飛ぶ未央は姿勢制御に集中する。そこへエヴァは魔法を放つ。

「リク・ラク ラ・ラック ライラック、来れ氷精 爆ぜよ風精！」

> 氷爆く！」

エヴァの詠唱完了と共に、未央の周囲に大量の氷が発生。凍気と爆風により未央の装甲服が凍り、体を凍傷に追い込む。爆煙から飛び出た未央の目の前に、エヴァが回りこむ。貫手が繰り出される、> 氷爆くによつて破壊されていた装甲服と魔法障壁はその手を止められず、貫手は腹を貫通する。

「！！！」

未央の背中からエヴァの手が生える。腹を貫いたそれは赤く塗れていた。

吐血。

エヴァの額に未央の血がかかり、弱々しい抵抗の手がエヴァの頭に置かれる。

その反応を愛おしそうに眺めるエヴァ。

「まだまだ行くぞ」

貫いた手を起点に、エヴァは無詠唱魔法により氷柱を発生させる。体を貫いた手から発生した氷柱は、未央の内臓を破壊し、傷から流れる血を凍らせていく。

「！？」

声にならない悲鳴を上げ、未央は懸命にエヴァを蹴りを放つ。しかし、その蹴りもエヴァは右手で受け止め、

「3投目だ、今度のピンは木だがな」

真下へ投げ飛ばした。ダメージの大きい未央は体勢を整える事なく地面に墜落。衝撃で周囲の木を薙ぎ倒した。

「数えるのが面倒な位消し飛んだな、まあストライク扱いでいいだろう」

空中から見下ろし、未央の血に濡れた右手を舐める。

「おや、存外に美味い。捻くれている割に素直な味だ」

予想外の美味に出会い、驚きを得る吸血鬼。その血を褒められた少女は、落ちた地面に倒れ臥していた。展開していた紙の翼は光を無くし、ただの紙となって少女の周囲に舞い散る。

少女は、起き上がる気配が無い。

痛みが意識を支配している。
腹部からは焼けるような痛みと、凍るような寒さを感じる。

あ。

立たなければ、と思う。

アレを倒さなければならぬはずだ。

ついで、で。

立て、と意思は命じるが、瀕死の体は動かない。

腹部貫通、内臓破損、更に脚の骨も砕けている。
視界が暗い、まるで暗幕を垂らしているようだ。
頬に接している大地が暖かい。
そこまで体温が下がっているのか。

口から何か出た。

赤い。

血だ、大量に吐き出されたそれは、地面を赤く染めていく。

ああ、そういえば……死ぬ時こうだったわね……。

前世で死んだ時の事を思い出した。

そういえば、あの時もこんな風に、手足が動かず、視界が暗くな
っていった。

状況は似ている。

あっさり……死ぬのよね……。

口からは何度も続けて血が吐き出されている。
体の感覚がどんどん無くなっていく。

また、死ぬ。

そう思った瞬間、何か頭の中で見えた。

……？

なんだろうか。

思っていると、再び何か見えた。

紅い髪に、笑顔。

瞬間、意識が覚醒した。

彼の笑顔を元に、自分の意識を再構成していく。

死ぬ間際とはいえ、何故忘れていたのか。

覚醒した意識の中で、今までの思い出が流れていく。

ああ、これが走馬灯って奴？ 順序逆じゃない？

そんな事を思う余裕が出てきた。

彼との思い出、仲間達との思い出が高速で過ぎていく。

記憶を見返していく中には、そんな事もあったと笑える記憶があり、忘れていたのにと不満げに思う記憶もあった。

楽しい記憶だ。しかし、現在までの記憶に追いつくと映像は途切れてしまった。

まだ見たい、口惜しい。そう思える記憶だった。

そうだ、まだ見たい。

彼とはまだまだしていない事もある。

まだまだやりたい事もある。

彼にお預けをしたままの事も沢山ある。このまま死ぬわけには行かないだろう。

何故こんなところで寝ているの？

そろそろ体の再生も終わった頃だろう。

いい加減、起きないと。

そう思い、体へ意思を送る。送る言葉は戦場^{じんせい}への進軍を命じる言葉だ。

GO AHEAD
起きて進め！

目を覚ます。体を確認すれば、既に腹の穴はふさがっており、内臓も修復されて、骨も繋がっている。装甲服は力を使い果たしたように黒くなっており、修復が必要だ。

装甲服を脱ぎながら、アーティファクトを取り出し、新しい装甲服を作る。下着姿になり、装甲服を着込んでいると声がかかった。

「おい、何をのんびり着替えている……」

エヴァだ。

「覗くんじゃないわよ、せつかちなババアねえ……」

「誰がババアだ！」

「アンタに決まってるじゃない、やあい600歳」

スカートを穿き、上着に袖を通す。エヴァは何か言いたそうにしているが、こちらの着替えが終わるまで待っているようだ。

意外と律儀ね。

着替えが完了し、声をかける。再び戦う前に、聞いておかなければならない事がある。

「ちよつと、聞きたい事あるんだけどいい？」

「なんだ？」

「貴方、ヤミと何約束したの？」

「何故貴様に教えなければならんのだ」

尤もな疑問だろう。こちらが聞いておこうと思った理由は簡単なものだ。

「いや、それ叶わないから。踏みにじった願いくらい覚えておこうと思うのよね」

「ぶつ……先ほど殺されそうになった奴が言う事か？ 次は容赦なく頭を潰すぞ」

こちらの答えに噴き出して笑うエヴァ。そして、次は止めを刺すという宣言がセットでされた。

しかし、

「それは無理ね、もう負けないわ。……今の私は無敵なもの」

「いきなり強気になったな、その理由を喋ったら私も教えてやろう」「ほんと？ じゃあ言わせてもらおうとしましょう」

右手を天に掲げ、相手を指差しながら振り下ろす。

「昔から良く言うじゃない。恋する乙女は無敵なのよ、相思相

愛なら2倍無敵！」

「……は？」

「ひ、酷い！ いったくけど本気よ私は！」

こちらの言葉に呆けるエヴァだったが、すぐに笑い始める。

「き、貴様本気か……や、やばい腹が痛いぞ」

「これが本気も本気、真剣よ？」

「ああそうか、勘違いしていたよ。　　貴様、馬鹿だな？」

「本気で酷ー！」

こちらのリアクションに、まあいいと言葉を作り、エヴァは話し出す。

「約束なので教えてやろう、私の望みは『人生のやり直し』だよ。

だからこそ、貴様にだけは邪魔させんがな」

「何それ、なんで私へ個人攻撃になるのよ」

「貴様は今まさに『人生をやり直し』している処なのだろう。はっきり言うが、羨まし過ぎて憎らしいな」

なるほど、確かに転生してやり直してるものね。

「ん……わかったわ」

「わかったか？　では死んでくれるか？」

「答え、わかってるでしょ？」

槍を構えると、エヴァも身構えた。

「NO、よ。あなたの願いを踏みにじらせてもらっわ。私の未来の為に！」

「だと思ったよ。気にするな、私も自分の願いの為に貴様の未来を潰してやるよ！」

構えから攻撃に移る。

実力差は変わっていない、変わったのは一つだ。

勝つわ！ 私が、この相手に！

勝てないだろうという諦めを捨てて、勝つ、と口に誓う。

第二十九話 後編

未央とエヴァは、激突を繰り返しながら戦場を移していた。二人の周囲には浮遊島が浮かんでおり、すぐ上には雲が流れている。先ほどの戦場より、高度がある。上空へ上がっていく事で、二人を取り巻く空気は薄くなっていき、互いの体温を奪っていく。しかし、その代償に二人の速度が上がっていく。加速の邪魔をする空気が薄くなっていく事で、二人の加速は更なる速度を体に与えていく。

互いに攻撃を交換し合う。未央が槍を突き出すと、エヴァはそれを回避して、断罪の剣くを振るう。それを弾きながら未央は更に上昇し、エヴァがそれを追う。

未央の背中に紙の翼は無い。魔法の詠唱をカットできる手段として有用なアイテムではあるが、未央はあえて使用しない。必要最低限の強化魔法を展開しただけで、格闘戦をエヴァに仕掛けている。戦闘において、取れる手段の多さはそのまま勝率に繋がる事が多い。勝率を減らすような手だが、エヴァはその狙いを考えていた。

迷いを消す為、か？

接近戦では極短い時間に幾つもの攻防が発生する。思考時間は限られており、考えている間に時間切れとなる事もある。未央はそれを嫌い、あえて翼を外したのか。

もしくは、別の使い方があるのかもしれん。

あくまで紙だ、いくらでも形を変える事が出来る。未央は上昇を続け、雲に突入。エヴァもそれに続こうと加速を入れる。しかし、一つの考えが閃き、雲に入る直前にエヴァは急停止をかける。

畏か？

「雲の中は視界が塞がれる。

吸血鬼の体とて無敵ではない、意識外から致命的な一撃を食らえばしばらく意識が途切れてしまう。先ほどから展開していない紙の翼、人形を消し飛ばした攻撃魔法を展開出来る事から、1枚づつ設置型トラップとして使ってくる可能性もある。しかし、このまま待っていては上空から大規模魔法を展開される可能性もある。

滞空しながら考えを巡らせる。

「畏にあえて突っ込み、突破する事で不意をつくか。

>えいえんのひょうがくを使い、雲ごと畏を粉碎するか。

「どちらも捨てがたい。

30秒程考えても結論が出ず、考えながら雲を仰ぎ見る。雲の切れ目が見え、そこから青白い光が幾つも確認出来た。

「光った？

疑問を得たと同時に、青白い光から黄色い閃光が放たれる。>雷の暴風くが雲から放たれ、エヴァの真横を掠めながら大地を穿つ。マントの裾が焦げ、不愉快な匂いが漂う事でエヴァは思わず舌打ち。上空に展開された青白い光群は、続けて>雷の暴風くを連打、雷の雨がエヴァと大地を激しく打ち付ける。

「不愉快だ、二重の意味でな」

「呟いたエヴァは、自らに迫る>雷の暴風くを見る。

雷を纏った暴風の一撃が眼前に迫るも、エヴァはそれを、

「ふん！」

魔力を込めた鉄拳により打撃した。

軌道を反らすどころか、完全に打ち返された魔法はそのまま発生元であるページを粉碎する。

「あんなもので私をどうにか出来ると思っているのか？」

もう飽きたと言わんばかりに嘆息し、エヴァは上昇を始める。

> 雷の暴風くによつて雲は散らされており、何かを隠せるような雲は既に無い。

上昇しながら他のページから放たれる魔法を弾き返し、粉碎していく。

畏を抜ける。雲の上に到達し、上空には燦然と輝く太陽が見えた。暑い。

そう、暑いだけだ。吸血鬼といえど、エヴァは太陽光で灰にはならないし、弱体化することも無い。

先ほどの戦闘でも、相手はそれをわかっているはずだ。しかし、その相手が見えない。360度、視界を遮るものは無い。

考え込んでいる間に、下へ回りこんだか？ まさか逃げたか？

一瞬そんな考えも浮かんだが、あの気性だ。それは無いだろうという結論に至る。ならば何処かに居るはずだ。改めて周囲を見渡すが人影は無い。真上から照り付ける日光が暑い。光を遮るものが無いからか、はたまた上空の寒気からか余計光が暑く感じる。

待てよ？

太陽に手をかざし、光を抑えながら見る。
黒点が見えた。太陽の表面で温度が低ければ見えるものだ。
だが、その黒点は揺らめいている。

あれか！

追撃の為に上昇、そう思ったが、黒点にしか見えない程に相手は上昇している。果たしてどれほど距離が離れているのだろうか。このまま待ち、防御に徹するべきではないか。

その考えを自ら否定する。

相手を打ち倒せば、自分の望みが叶う。待ちの戦法で勝ち取れるものなど無い。攻め、相手を打ち倒し、勝ち取る。心が決まれば、後は全力で追うだけだ。飛行魔法に更なる魔力を追加して、出力を倍化させる。弾けるような音と共に上昇を開始した。

高度を上げていくと、空気は更に薄くなっていき、寒気を覚えていた体は更なる寒気を訴えている。

未央との接近は未だ果たされていない。相手は一体どこまで上昇しているのか。

今、上空15kmという処か？

飛行呪文と耐寒魔法があるとはいえ、流石に恐怖を感じる高度だ
と思う。

不死である自分すら寒気を覚える高度、未央は一体どんな考えで

この高度まで上がってきたのか。

まさかここまで上がってきたの速度勝負とは言い出すまい。

思い、相手と思われる黒点を見る。変わらずに揺らめいていると思っただが、ふと、黒点が大きくなったような気がした。太陽光が眩しいが、注視する。間違いなく黒点は大きくなっている。そう思っている間にも黒点は更に膨れ上がり、彼方に見える太陽を覆い隠すばかりに巨大化した。

何世紀ぶりか、体に緊張が走る。相手の攻撃の規模は、初めて受けるといつてもいい程に巨大だ。少なく見積もっても数kmの全長を持つ物体を相手は展開している。どこにそんな物を持っていたのか。

槍を造形していたアーティファクト、あれか！

ヤミの話では、質量を増加させる事も分裂させる事も可能なアーティファクトだ。精々巨大な武器　10mを超える斬艦剣程度の質量増加だろうと考えていたが、こちらの想像を超えたアーティファクトだったようだ。しかし、円球状に造形された巨大な物体をどう使うというのか。まさか先ほどまでの仕返しにとボール呼ばわりして投げるつもりか。その場合、15kmの高度から直径数kmの物体が持つ重量をたたきつけられる事になる。

い、痛そうだな。

死なない体とは言え、痛いものは痛い。上半身と下半身を両断された経験はあるが、流石に全身を吹き飛ばされた事は無い。もしか、流石に死ぬのだろうか。どちらにせよ、あの巨大な物体をそのまま造形させる訳にも行かない。阻止すべく、魔法を準備すると、

球体が割れ、中からナニカが生まれ出た。

生まれたナニカは、産声を上げている。低く、何処までも響き渡るような音で。

見えるシルエツトは、巨大な蛇。

卵から孵化したように、球体を割りながらその身を長く伸ばし始めた。

……………オオオオオオオオオオ!!!

咆哮が響く。声だけではなく、衝撃波を伴うそれは体に痺れを与えるものだ。

蛇ではない、竜だ。

竜といえば、帝国の守護聖獣たる古龍・龍樹を思い浮かべるが、全長100m程と聞いている。しかし、今生まれたアレは間違いなくそれより巨大だ。質量差による打撃の威力差は、もはや考えるまでも無い。普通であれば、間違いなく逃走を考える相手だ。

このままでは勝てない、だが、対抗手段はある。

未央はアーティファクトにより造形した竜の頭に立っていた。

頭部だけで50mを超える竜と比較すると、あまりにも小さい彼

女ではあったが、竜は彼女の意のままに動く。

アーティファクトにより造形し、概念を多重展開する事で生まれ出た竜。本来であれば、砲塔や装甲を備え付ける事でより戦闘向き
の竜にしたいと考えていたが、造形できた竜は素体のみだ。しかし、
全長2kmを超える巨大な体躯は、それだけで強力な兵器となる。
腕を組み、笑みを浮かべながらエヴァと思われる黒点を見つめる未
央、しかし、一つの後悔があった。

名前、考えてなかった。

名前さえ考えておけば格好良くエヴァに大見得を切った事だろう。
前々からアーティファクトと概念能力で作れるだろうと検討はつ
けていたが、名前までは考えていなかった。 気落ちしながらも、
頭を振って気を取り直す。今はエヴァを倒す事が第一だ。相手を見
ると、下降する様子も、上昇してくる様子も無い。

対応を迷ってるのかしら……？

ならば、攻撃のチャンスだ。竜へ指示を飛ばす。

『進みなさい』

……………オオオオオオオオオオオオ！！！！

周囲の大気を震わせる応答に、未央は思わず耳を塞ぐ。しかし、
応答は耳を塞いでも体の骨すら振るわせる。

こ、これはキツイ！ 防振術式なんて知らないわよ！

耐えるしかない。

どちらにせよ、この竜は動かすだけで大量の魔力を消費し続ける。未央の残り魔力では戦闘可能時間は2分も無い為、急いで決着をつけなければならぬ。竜は身を軋ませながら加速を開始する。大気を掻き分けながら、竜は空を泳ぐ。杖や箒による高速飛行すら遅いと言わんばかりの速度でエヴァに迫る中、不思議とエヴァの音が響いた。

「リック・ラク ラ・ラック ライラック」

魔法の始動キーだ、この大質量相手にどのような魔法を展開するだろう。未央は自分の魔法障壁を強化する。

「バーサイス 命ある者に トシ・インソ・タナト 等しき死を」

相変わらず、詠唱の音が響く。詠唱から「おわるせかい」とわかったが、あれは凍結させた相手を粉碎する魔法だ。

「ホス 其は アタラクシア 安らぎ也」

果たして、この竜に意味があるのか。

「コスミケー・カタストロフエー おわるせかい」

もはやエヴァを肉眼で視認出来るまでに接近している。

この速度、質量であれば例え一部が砕かれようとも、そのまま突撃による打撃を加える事が出来る。

そう思っていた。

「スタグネット 術式固定!!!」

エヴァは魔法を放たない、手元に膨大な魔力の塊が現れている。

あれは!!!

「コンプレクシオ」
「掌握!」

エヴァが魔力の塊を握りつぶし、その身へ取り込む。

瞬間、エヴァの周囲が凍結した。

大気中に漂う水分が全て凍り、ダイヤモンドダストとなって煌きを放つ。

「アルマティオーネム」
「術式兵装!!!」

その魔法を未央は知っていた。原作ではネギの必殺技として描写されたソレは、彼女が使ったこそ本来の力を発揮する。彼女が吸血鬼となり、苦難の人生を乗り切る為に編み出した技法。

マギア・エレベア
> 闇の魔法<!

エヴァの周囲に膨大な魔力が発生している。それは体から漏れ出した余波に過ぎない。身体的・魔力的に大きな出力上昇をもたらすマギア・エレベア
> 闇の魔法<、今の彼女が使えばどれだけの力を発揮するか想像もつかない。

しかし、想像の必要は無かった。エヴァを確認して大きく顎を開ける竜に向かい、術式兵装を纏ったエヴァが突撃してくる。

激突。

破碎の音が響いた。

竜の牙が、砕けて弾けたのだ。

それだけではない、竜は今静止している。

全長2kmの竜が持つ加速エネルギーすら、エヴァは完全に受け止めたのだ。

驚愕に顔が歪み、エヴァを見る。しかし、エヴァの右手もまた砕けて血を流していた。彼女は自らの血をなめながら、こちらに声をかける。

「お互い、切り札を切ったというわけだな」

「ええ、そのようね……。うちの可愛い竜、どう？」

「なかなか暴れん坊のようだな。教育してやるう」

「ええ、存分に可愛がって頂戴……！ こちらも、全力で行くわよ！」

竜は咆哮を持って、エヴァに再び襲い掛かる。

ちいさな魔王は、右手を再生させながら巨大な断罪の剣くを形成、竜へ踊りかかる。

互いの力量はここへ至り、互角になった。

最後の一手を決める為、全長2kmの幼竜と身長130cmの魔王は、成層圏で決戦を始める。

第二十九話 後編（後書き）

後編と銘打つも、決着はつかず……！
申し訳ありません、思ったより長くなっています！

第三十話

成層圏で繰り広げられる幼竜と魔王の戦いは、先までの高速戦闘とは間逆の展開となっていた。

お互いの動く速度だけで言えば速度は上がっているが、展開が大きく変わっている。

高速で一撃離脱を繰り返すドッグファイトから、近距離で腰を据えてお互いが力を溜め合い、渾身の一撃をぶつけ合う接近戦だ。

攻撃が交換される度に破碎の音が響き、欠片が光を反射して周囲を白く輝かせている。

そんな戦場に、声が響く。

「ハハハッ……！」

エヴァの笑い声だ。己の体を砕かれながらも、攻撃の手を止める事なく。

「おい！ 魔女！」

エヴァは笑顔で未央に問う。

「楽しんでるか！！」

お前も楽しんでるか、と。

幼竜の頭上から、未央は答えた。

「ええ！ あんた、ムチャクチャすぎて笑えてくるわ！」

「ハハハッ！ お互い様だろう！」

二人は笑いあいながら、必殺の攻撃を交換する。

幼竜の尾が唸りを上げて氷の魔王を打つ。打撃され、全身が砕かれる氷の魔王。しかし、周囲に散るのは血肉ではなく氷だけだ。四散した氷は、瞬く間に集結して人の形を作る。再び誕生した氷の魔王は、攻撃を終えた幼竜を囲い込むように魔法を展開、絶対零度の世界を作り上げる。

幼竜の頭上に座する未央が声をあげると同時に、幼竜が咆哮を上げた。

!!!!!!!!!!!!

その咆哮は人間の耳を蹂躪する。その咆哮は音が伝播するなど生易しいものではない。

咆哮は衝撃波となり、魔王の展開した絶対零度の世界を震わせ、全ての細氷を打ち砕いた。

攻防は互角と言えた。

幼竜の攻撃を魔王は無効化する。>闇の魔法<の術式兵装により氷精霊化したその身は、打撃され散ろうとも氷の欠片となるだけで即座に再生する。

魔王の攻撃は幼竜に通じない。>闇の魔法<により強化されようとも、魔王の全てを持って造形された竜は魔術障壁・身体強度ともに桁外れだ。

「竜とは途方も無い生き物だな！ よくそんなものを造ったよ！ お前は！」

「あんたこそ！ 吸血鬼の真祖が精霊化とかよく考えたわね！」

破碎の音が響く。一方は白い竜鱗を撒き散らし、一方は白い細氷を撒き散らしていた。

幼竜は巨大な体軀を生かした一撃を放ち、一撃ごとにエヴァの体を砕く。しかし、エヴァは即座に再生して、断罪の剣による反撃を繰り出す、その一撃はついに幼竜を貫いた。竜の口を真正面から貫き、そのまま真下へ切り裂く事で幼竜の顎を両断する。

「人生色々あつてな！」

「今度聞かせなさいよ！」

「いい……だろう!!！」

会話の間にもエヴァは幼竜の下へ潜り込み、右ストレート。幼竜にヒビが入り、軋みの音が響く。

悲鳴とも怒号とも取れる大音量の音が響き、エヴァに向かって竜の腕が振るわれる。

ただ腕を振るうだけの行為が、巨大な体軀はそれに必殺の威力を持たせる。

直撃、砕氷、再生、反撃。

戦況はエヴァに傾き始めた。

「さあさあどうした！ このまま押し切ってやろうか！」

「いい気になるんじゃないわよ……!!！」

未央は幼竜へ叫びを送る。幼竜はそれを受けて動きを変え始めた。エヴァを中心に、渦を作るように旋回を始める。

「締め付ける気か！」

その声に未央は答えず、挑むような笑みをエヴァへ送る。

どう対応すべきか、エヴァは思索する。幼竜は上下にも幅があり、少々動いただけでは相手の胴体から逃れる事は出来ない。だからこそ、打撃を回避せずに無効化前提のカウンター戦術を取っていた。

氷精霊化した体は、打撃を受ければ氷として散らばり、再結合する事が可能だ。しかし、散らばった氷ごと磨り潰されればそれだけ再生は魔力を消費する。最悪の展開として、闇の魔法が解除されてしまう可能性すらあった。

それであれば、

下になつてでも回避すべきだな。

エヴァは自由落下を開始、そこに加速をいれる事で幼竜の胸を抜ける。

幼竜はそれを待っていたと言わんばかりに裂けた顎を開き、エヴァに向き直る。

飲み込まれる、一瞬でもそう思わせるような速度と迫力を持ち、幼竜の口が迫る。

でかい図体したウスノ口が、速度で勝てると思つな！

魔力の大半を加速に使う事で速度を上げる。幼竜は諦めずにこちらを追ってくる。

背後を振り返り、相手の位置を見る事で気づいた。

幼竜の頭上に居る未央が笑っている。

幼竜は大きく顎を開けて息を吸い込み始めており、その奥には青白い光が集まり始めている。

幼竜の吐息ブレスか！

幼竜と自分は一直線だ。下方へ一直線に加速している自分は、急な方向転換が出来ない。

通常であれば、回避不可能だ。

しかし、自分は通常ではない。

な・め・る・なあー！！

急制動をかけた事で、負担のかかった四肢が碎ける。しかし、その甲斐あつてほぼ90度の方向転換を果たした。

更に横へ距離を取ろうと思つた瞬間、未央の声が響く。

「直径50mの口から放たれる竜砲、これが私の決め札よ……！！」

竜砲が放たれた。

雷鳴が響く。

その雷鳴はエヴァを飲み込み、大地を穿つた。

同時に幼竜自身も自壊を始める。

エヴァの攻撃により入つたヒビが全身を巡り、欠片が落ち始める。未央は気を失つたように、落下を始めていた。

エヴァの姿は見えない、消し飛んだのか、それとも竜の欠片に隠れているのか。

未央とエヴァの決戦から、時間は随分戻る。
ナギは不愉快な存在と相対していた。

「初めましてですねえ、ナギさん。私は」

「自己紹介はいらねえ、ヤミだろ」

「あ、ご存知でしたか。いやぁ大戦の英雄に知ってもらえるなんて
光栄だなあ」

「あ？ 大戦の英雄？ お前何いつてんだ？ 馬鹿なのか？ いや馬鹿だよな早く消えてくれよ、つか通せ」

未央と共に正体不明の飛行物体ミサイルを追う為に旋回したところで、この相手に捕まった。

無視して振り切ろうと加速したが、いつの間にかヤミの目の前に出てしまう。

なんかの概念を展開してやがるな。

思いながら、相手を見る。

未央の言っていた通り、初見の印象は『アルビノ体質の未央』そのものだ。

しかし、相対して声を交わしてみるとその印象はまるで変わる。

こっちを舐めてるのが丸判りだぜ。

自分を上として話している。おかげで警戒が出来るというものが、面白くない。

未央の後を追わなければならないというのに、

「概念能力で閉じ込めてんだろ、出す気あんのか？」

「申し訳ないですが、無いですねえ。未央さんの処にはエヴァさんが行ってますから、それが終わるまで時間稼ぎです」

「時間稼いで、どうすんだよ」

「ナ・イ・シヨ」

うぜえ。

相手がこちらを出す気が無い事だけは分かった。未央の下に駆け

つけるには、この概念空間を突破しなければならない。確か、未央が単身でヤミと遭遇した場合の事をレクチャーしたはずだ。

相手がこちらに何か喋っているが、無視してその時の事を思い出す。

「喋られる前に殴れ」

「な、なんだそりゃ!？」

> 紅き翼<の会議室で、未央は開口一番そう言い放った。

「だから、概念条文を口にされる前に殴りなさい。殴り倒しなさい、それが最善よ」

「豪快な対応ですねえ」

「大味すぎるだろう……」

「いや、やられる前にやれ、という基本じゃろう」

それぞれが思う感想を漏らすと、未央は三度口にした。

「概念条文、唱えられなきや、ただの人。いい？ まずは先制する事が第一よ」

「先制できなかつたらどうすんだ？」

「概念ごとに対応は違うけど、一番早いのはヤミをぶん殴る事ね」

「俺の未来嫁がさつきから殴るを連呼しているぜ……! バイオレンスだな!」

「褒めないでよ、照れるわ」

『褒めていない……!』

3人が何か叫んでいるが無視だ。照れる未央が可愛い、いきなりこんな顔が見れるなら今日はいいい日だ。

「まあ、とりあえず1回気絶させてみる事ね。私はそれでも維持出来るけど、ヤミが出来るとは限らないもの」

確かこんな話だったな。

回想から帰ってくると、ヤミがこちらを伺っていた。先ほどまで何か喋っていたようだ、隙を作らせる為に問い返してみよう。

「なんだって？」

「ですから、貴方の望みを叶える代わりに未央さんをあきらめて気に食わない言葉が聞こえたのでぶん殴った。

「ぐえ」

カエルが潰れた時に出すような声をヤミが発している。まだ意識があるようだ。未央の言う通り、まずボコってみる事にした。

ヤミが吹っ飛ばす先に瞬動。

右ストレートで迎え撃ち、跳ね返す。

その先で左アッパー、跳ね上げる。
上にながって回し蹴り、地面に叩き付ける。

こいつ弱くね？

魔術障壁の手ごたえはあったが、最初の一撃で簡単に砕けていった。

叩き付けた先で、ピクリとも動かない。

……よし、止め行くか！　ここでアイツ倒せば未央の好感度がうなぎ登り……！！

>雷の投擲くを展開する。念には念を入れて10本展開。

「食らいやがれ……！！　ファツキンゴッド……！！！」

放った魔法が着弾する。

地面が大きく砕かれて、砂埃が上空まで舞って来る。

やったか！？　あ、やべ。

未央曰く、攻撃をした後にこう発言するとやってない事になるらしい、概念能力だろうか。
世界の法則に従い、やってないとみなして再び魔法を展開しよう

土煙を振り払い、ヤミが目の前に現れた。こちらの両手を押さえ、ヤミは言っ。

「少し眠っててください」

相手の目が光ると、眠気が意識を奪っていく。

寝てる、場合じゃ……

思いとは別に、意識は暗闇に落ちていった。

第三十一話

緑の平原がある。

周囲には建築物どころか木の一本すら無く、360度地平線を見渡す事が出来る。

一人の青年がそこに佇んでいた。

青年は腕を組み、周囲を見渡しながら歩を進めている。

「……ここ、どこだ？」

ナギは呟く。

先ほどまでオステイアの近郊で戦闘をしており、ヤミに眠らされた後、目を覚ませば平原に立っていた。空には浮遊島も無く、ただ青空が広がっており、森林が生い茂っていたはずの大地には草原が広がっている。ゆえに、ナギは呟いた。ここはどこだ、と。

「普通に考えたら、幻覚か……？」

眠りに落ちた人間の意識を惑わす事は、幻覚魔法の初歩だ。ナギは使えないがアルやお師匠はそう言っていた事を覚えている。地面に膝をつき、草と土を手取る。草は露に濡れており、冷たい感触がある。土は少々冷たく、力を込めると土くれが崩れ、掌に広がった。

「幻覚にしては、感触がリアルすぎるな……」

言っで一息。空を見れば、入道雲がゆっくりと動いている。

それを見て、幻覚じゃねえな、とナギは呟く。

幻覚魔法をかけられた場合、意識はハッキリせずに朦朧としてい

る事が多い。

当てになる体内時計はらどけいを確認すれば、眠りに落ちてからあまり時間は立っていないはずだ。短い時間で体ごと長距離を移動させるのは困難だ。となれば、

「なんかのアーティファクトで、空間ごと封じ込まれている……か」
「ご名答です、意外と賢いですね」

背後から声がする。

ナギは声の出所へ向かって左のバックハンド。唸りを上げて声の主に襲い掛かった拳は、その威力を発揮する事なく振り切られる。背後にはヤミが居た。ナギの拳は頭部を襲ったが、打撃する事なくすり抜けた。

「幻影かよ、ファツキンゴッド……」
「ふ、不敬！ 不敬ですよ！ 私神なんですけど!？」
「てめえに払う敬意なんざ欠片もねえ、ここから出せよ」
「お断りします」

ヤミの全身を>白き雷くが貫く。

雷は地面を炸裂させ、土くれを撒き散らす。ヤミは平然とナギに向かって微笑んでいる。抉られた足元を見ると、ヤミの足は大地についておらず、浮いている。

ナギは舌打ちをしながら、相手の狙いを考える。先ほども言っていた通りならば時間稼ぎが目的だろう。しかし、それであれば隔離した時点で目的は達しているはずだ。わざわざ出てきた以上、狙いがある。そう思い、ナギは問いを作る。

「わざわざ出てきたって事は、用事があるだろ？ 早く言えよ」
「おお、話が早いですね。実はちょっと聞きたい事がありまして、

いいですか？」

「話終わったらここ出せよ」

「満足いく答えなら。じゃあ質問なんですけど……ぶっちゃけ、未央さんのどこに惚れたんですか？ 意外と不良物件ですよあれ」

再びヤミを>白き雷<が貫いた。

ナギは魔法を放った手で、そのまま相手を指差しながら、

「人の女をいきなり不良物件言うんじゃないよ、答える気も失せんだろうが！」

「ああ、すいませんすいません。私結構コミュニケーションスキル低めなもので……」

「神の癖に不得意な事あんのかよ！」

随分出来ない神だ、思いながらナギは考えた。

惚れた理由、か。

4年前の事を思い返す。父親と二人で暮らし、魔法学校へ通っていた頃だ。

友人もおらず、よくわかりもしない授業を延々と聞いて、退屈な日々を過ごしていた。

昔から魔力がずば抜けて高かった事もあり、最初は教師からは期待を寄せられて、

他の奴らからは、距離を置かれてたな。

今の自分ならば理解出来る。魔力は生まれて間もなく最大値がほぼ決まってしまう。

訓練で上げる事は出来るが、それには過酷な訓練と長い時間が必要になる。

だから、最初から誰よりも魔力が高かった自分は、期待と嫉妬を受けた。

しかし、当時の自分はそんな事は分かっていたいなかった。

分かりもしない話を教師から押し付けられ、他の子供からは化け物のように見られていた。

その当てつけに授業は抜け出し、悪戯を繰り返す事で鬱憤を晴らしていたが、

そんな頃に、未央が現れた。

父親が仕事から帰ってきた時に、未央は連れてこられた。

気絶した少女をいきなり背負ってきたので、最初は思わず動転して、

「お、親父！ 親父！ 誘拐は不味いんじゃないか？ 母ちゃん死んで随分経つけど息子と同じ位の女狙うってのはやべえよ！」
「ナギ、違うから。そういう事が目的で連れてきたんじゃないから」

魔獣の住み着く森から出てきたと聞いて、最初はこう思った。

もしかして自分と同じく、生まれつき何か違う子供なのか、と。

起きた彼女と話すと、それは期待通りとも、期待はずれとも言えた。

魔力は人並みだが、変わった能力と変わった性格を彼女は持っていた。

強引に彼女を連れ出す自分を、嘆息しながらも許してついて来て

くれた。

自分の魔力を知っても、気味悪がらずに軽く流してくれた。

今思えば、転生前から俺の事知ってたんだから、不思議じゃねえけど。

救われた、と今でもナギはそう思う。

母親は早くに他界し、唯一の理解者である父親が家を空けがちで、一人で居る事が多かった自分の生活は彼女のおかげで一変した。

家に帰れば、待っている人が居るってのはありがたい。

誰かに話せば、10歳の子供が考える事ではないと笑われるし、何より恥ずかしい。

そして彼女が魔法学校に通うようになると、一緒に居る時間も増えたが、他の奴が彼女に話しかける事も多かった。取られる、とそう思い、魔力障壁展開して突撃する事で蹴散らしたら彼女に叱られたものだ。叱られた後、凹みながら教室に戻ると、他の生徒に質問攻めになるといった事態にもなり、そこから友人も少ないが出来た。

一人だった生活は、彼女を起点に賑やかさを増していき、孤独を感じる事は無くなった。最初はその環境を維持する為に、しかし、その思いは日々を過ごしていくうちに彼女を失いたくないと思いに変わって、

今に至る、ってわけだ。

思い返すと、やはり人に話すには恥ずかしい話だ。未央に聞かれても誤魔化してしまうに違いない。

未央にいけない話を、目の前の不愉快な奴に話すのは尺だ。

そう思っていると、ヤミはこちらを向いたまま瞑目しており、一つ頷いて、

「なるほど、よくわかりました。あ、勝手に心読ませてくださいましたので」

三度、白き雷がヤミの体を貫いた。

衝撃による土煙が収まる前に、追撃が入る。2度、3度と魔法が叩き込まれる事で、ナギは怒りを示す。その怒りは、心を読まれたという事だけでなく、未央にすらない事をヤミに知られた怒りで、

いわば初体験がヤミって事に……！

事実を消し去る為に、ナギは攻撃を重ねていく。

小さかった土煙は、攻撃が重ねられるごとに大きくなり、繰り出される魔法は威力を増していく。怒りの雷撃は青空に雷雲を呼び、青空と草原の広がっていた空間は、雷雲と雷鳴が轟く戦場と化した。重ねられた雷撃の数は20を超え、草原は爆撃を受けて更地となっていた。

ふう、と一息をつくナギ。眼前には巨大なクレーターが出来上がっており、中心にいれば例え竜種だろうと致命傷は免れないように見える。しかし、煙が晴れたクレーターの中心で、ヤミはただ笑顔で佇んでいる。それを見て、ナギは違和感を覚えた。

例え幻影だろうと、大規模な魔法を受ければ吹き飛び、再展開が必要のはず。

相手が何かしら裏技を使っているのだろうとあたりをつける。神を名乗り、概念能力を使える以上、ただの魔法やアーティファクトだけではないだろう、今更ながらそう気づいた。

そして、既にこの空間に入ってから随分時間が立つ。未央やラカの状況が気になる。しかし、脱出方法は未だ検討もつかない。随分魔法を叩き込んだが状況は改善しない、叩き込むところが違うのか、それとも魔法では突破できないのか。

「悩んでいますねえ。あ、回答はそこそこの満足だったのでヒントだけ差し上げましょう。これはアーティファクトと概念能力を使った閉鎖空間です」

「脱出方法を教えるよ!？」

「お断りします、時間稼ぎですからね」

そう答えたヤミは、何かを見上げるような仕草をしてナギに笑いかける。

「いや、もう時間稼ぎも終わりそうですよ」

そう言って、上空に大きな表示枠を展開した。

映し出されるのは、

「未央……!？」

腹を貫手で刺し抜かれ、血を吐き出している未央だった。

表示枠に映る彼女は、血を吐きながらも懸命に抵抗している。しかし、彼女の相手はそれを無視、腹を中心に氷塊を展開する事で、更に彼女を傷つけていく。ナギはそれを見て、仮契約カードを取り出し、未央の召喚を試みる。

エウオコー・ウオース ミニストラエ・ナギ
「召喚！！！」 ナギの従者、 柳 未央！！！」

一瞬カードが光るも、未央が召喚に応じる気配は無い。仮契約による転送距離は長くとも3km、更に空間を隔てている今、いかにナギの魔力に任せた召喚といえど効果は無かった。

「畜生……！！」

そうしている間にも、表示枠の中で未央と敵の戦闘は続く。未央の放つ蹴りを簡単に防ぎ、敵は未央を刺し貫いている手を振りかぶり、地面へ向かって投擲する。表示枠は律儀にもアップとなり、地面へ激突する未央を鮮明に映し出す。轟音と衝撃で表示枠が揺れ、その向こうには、

胴体がほぼ消し飛び、血を吐き出し続ける未央が見えた。

「ああ、これは終わりましたねー」

ヤミの声はナギに届いていない。

ナギはただ、表示枠を食い入るように見つめている。

握る手から血が滴り落ち、震える口元からは怒りに満ちた唸りが発せられている。

「ざけんな……」

背後の雷鳴が収まった。

振り返ると、ナギが仮契約カードを手に持って俯いている。

彼には悪い事をしましたねえ、まあ記憶と精神操作でそんな事も忘れさせてあげますから。

アフターケアだ、そう思いながらヤミはナギに向かっていく。

その時、ふと奇妙な気配を感じた。

張り詰めた空気、世界が緊張している。まるで大きな概念能力を行使する寸前のように。

もう未央さんが居ないのに？ 彼女の遺した賢石かな？

発生元の気配を手繰ると、それはナギから発せられていた。

彼は何かを呟いている。

「……すれば」

呟きはよく聞こえない。

しかし、

【・ 意思おそいを信じて】

聞こえた。ナギの声が概念条文として世界に発せられている。しかし、彼の唱える概念条文に聞き覚えが無い。賢石を媒体にした概念条文だと、賢石さえ砕けば発生を防げる。ナギの何処から概念反応が出ているか、ヤミは探る。

結果は、

彼自身が、概念反応を出して……！

ヤミの顔が驚愕で歪む。概念を司る能力を与えたのは未央だけだ。何故ナギが使えるのか、ヤミは必死で考える。その間にも、ナギは声を続ける。

【・ 意思おもいを信じて打撃すれば、】

声を出しながら、ナギはゆっくりと右腕を振りかぶる。

俯いた顔が上がる、その表情は涙にまみれ、何かを強請る子供のようになっている。

【・ 意思おもいを信じて打撃すれば、いかなるものも打撃する】

泣き叫ぶように発せられた概念条文が完成すると同時に、ナギの右腕が前方の空間を穿った。何か打撃され、弾けるような音が響いた。しかし、その音は目の前から出たものではない。

表示枠から、響いた。

表示枠を見ると、未央の体に変化が起きている。

傷が、無い!？

大きく穴の開いた胴体は無傷の肌を晒しており、体には血色が戻っている。

そして、ごほりと彼女が咳をした。

「蘇生……したんですか……？ いえ、ナギさん、あなたが……」

信じられない、表情でそう言いながらヤミは声をかける。

ナギの右腕は青白く発光しており、彼自身は肩で息をしている。

先ほどの概念条文から、ヤミはナギの引き起こした結果を思う。

貴方が、未央さんの『死』を殴り飛ばしたんですか？

そんな事は、既存の概念能力では出来ない。

蘇生概念の展開は禁止として、黙って未央の能力に制限を加えたのは自分だ。彼の一撃は、間違いなくその制限を打ち破っている。幾つもの考えが浮かんで消えていく中、ナギの声が響いた。

「俺は……！」

既にその顔に涙は無い。

「俺は、未央の騎士だ……！」

決意と共に、彼は宣言する

「どんな危険からも、未央を守っていく……！」

新たに得た力の象徴である、拳を見ながら、

「俺の拳は、不幸だろうが死だろうが……神だろうと打ち砕くぜ！」

自分を打ち倒すと宣言した。

第三十二話

草原に雷鳴が響く。

ナギが拳を振るう度、ヤミは弾け飛ぶ。

幻影であるにもかかわらず、ヤミは苦悶の表情を浮かべていた。

「おおおおお!!」

再びナギの拳が振るわれる。拳は雷光と青白い光を伴って光の線を引く。

しかし、標的となるヤミは100m以上離れている。魔法ならば兎も角、拳による打撃では届かぬ距離だ。

そんな事は構わないと、ナギの拳が空間を穿つ。

瞬間、ヤミが腹部を殴られたように呻き、体を折る。

距離、魔法障壁、幻影、アーティファクトによる空間隔離。

それら全てを無視するように、ナギの攻撃はヤミを打撃していく。

ヤミもただ殴られるだけではない。

歯を食いしばり、痛みを耐えながら概念条文を展開する。

【・ 攻撃力は無限大となる】

概念が展開され、ヤミの頭上には幾つもの魔法の射手くが展開された。

攻撃力が無限大に強化された魔法の射手く、その数実に999本。

一本一本が人間を吹き飛ばして尚余りある威力を秘める。

「貴方風にいえばこういう気分ですよ……! ファツキンヒューマ

ン……!!」

怒声を発し、ナギへ向かって手を振り下ろす。

展開された>魔法の射手くが一斉にナギへ向かう。正面から、上空から、左から、右から、背後から、>魔法の射手くはナギを囲い込み、必殺の動きを見せる。

それを見たナギは回避する様子を見せない。ただ右腕を引き、

「邪魔だろうが!!」

振り払うように振るった。その瞬間、全ての>魔法の射手くが弾け飛び、消滅する。

魔法障壁で弾くでもなく、>魔法の射手くで相殺するでもなく、ただ腕を振る事でヤミの攻撃をナギは打ち消していく。

ヤミの顔には焦りが見える。

絶対的に有利な戦場を用意し、感情的に揺さぶり、相手の洗脳を試みる為の場を用意したつもりが、自分が追い詰められている。

幾つもの考えが浮かび、ヤミを苛立たせる。

何故概念能力を使えるのか。

何故本体にダメージがあるのか。

何故、何故自分はこのなにも追い詰められているのか。

一つとて回答が見えず、闇雲に抵抗する。しかし、その抵抗すら相手は一振りで撥ね退ける。

齒軋りの音が響く。

ヤミだ。

苛立った表情を浮かべ、続けて幾つもの魔法を展開、ナギに放つていく。

ナギはそれらを振り払っていく。

右のストレートで弾き、左のバックハンドで逸らし、左手を返す勢いで更に打撃する。

一歩一歩、ナギはヤミに近づいていた。

両者は感じていた。

距離100m、この距離が無くなり、拳が直接接触した時が決着の時だ、と。

ヤミの表情が引き締まり、大地へ向かって腕が伸びる。

大地には文字が書かれた。

【巨大鬼神兵】

書かれた大地が盛り上がっていく。

大地から引き剥がすように土塊が起き上がり、巨大な人型を形成していく。

ヘラス帝国の主力兵器たる鬼神兵、土で出来たそれが二人の間に出来上がった。

「行け！」

ヤミの号令が下され、鬼神兵がナギへ向かう。巨大な体躯は一步で距離を大きく縮める。

鬼神兵は、土で出来た掌でナギを打撃せんと振り回す。空気が唸りを上げ、その威力を主張するもナギは回避を選ばない。

真正面から、その掌を打撃した。

青白い雷光が掌を貫き、更に雷光は鬼神兵の胴体を貫通。鬼神兵はナギにダメージを与える事なく、ただの土塊に戻る。

その間にも、ヤミは新たな鬼神兵を作っていた。文字を書くだけで量産されていく鬼神兵は、すぐさま10体を超える軍勢となる。

一歩一歩が大地を揺らし、その脅威を主張する。だが、ナギは怯まない。

「邪魔だぞテメエら!!」

鬼神兵へ向かい、ナギは杖を突き出す。

「契約に従い 我に従え 高殿の王！ 来たれ 巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆！」

詠唱と共に、杖から雷が漏れ出す。上空の雷雲はこの時を待っていたとばかりに雷鳴を轟かせる。

「百重千重に重なりて、走れよ稲妻！」

詠唱を唱える彼を見て、ヤミは相手が誰であるか、忘れていた事に気づいた。

彼は概念能力で強さを得ただけの男ではない。

彼は、>千の呪文の男くなのだ。

「>千の雷く！」

詠唱が完了した直後、ナギの眼前に直径30mを超える巨大な魔法陣が展開される。

雷で形成されたそれは、力を充填するかのように回転し、巨大な雷を放った。

土で出来ているとはいえ、その衝撃に鬼神兵の一軍は耐え切れずに消滅。

大きな土埃をあげて瓦解する。

「くう……！ 魔法まで幻影に影響を……！」

ヤミは辛うじて直撃を免れ、土煙の中で伏せていた。

ナギの放つ魔法までもが幻影であるはずの身に衝撃を与えている。地面を殴りつける事で屈辱の思いを少しでも晴らそうとするヤミ。その背後に、赤毛の悪魔が現れた。

「ぐあ！？」

「やっと捕まえたぜ……この糞野郎……」

ヤミの首を鷲づかみ、ナギは告げる。

最早幻影であるという利点は完全に消え去っていた。

ナギの右手はヤミの首を持ち、左手は杖を携えている。

「お前、未央とほぼ同じ能力なんだってな」

ヤミの首を掴む手に力を込めながら、ナギは告げる。

ヤミは概念能力を使おうとするも、ナギの手は喉を潰すように掴んでおり、声が出ない。

「幻影でもさつきから随分痛そうだな、まあ未央に手を出した報いってことで一つ」

ナギの表情は穏やかだ。

しかし、左手に携えた杖からは、充填された魔力が漏れ出して雷を纏い始めている。

「来れ雷精 風の精！ 雷を纏いて 吹きすさべ 南洋の嵐！」

詠唱が始まる。

ヤミは窒息の苦しみと恐怖から汗をかき、ナギは笑顔で詠唱を完了させる。

「ゼロ距離、いつてみつか」

気軽な口調でそう尋ねた。

ヤミは必死で首を振ろうとするも、笑顔とは別にナギの手に込められた力は益々強くなっている。

思わず呻く事で、首が縦に振られた。

「了解も得られた事だし…… 全力行くぜ！！！」

雷を纏った杖はこう言っているようにも見えた。待っていました。

「>雷の暴風く！」

行った。

ゼロ距離の直撃を食らったヤミは、雷と暴風により千切れ飛んでいく。

ナギの概念能力により、全ての攻撃エネルギーがヤミへつぎ込まれる。

暴風の去った後には、草原に一人佇むナギだけが残っていた。

「騎士の初戦にはイマイチ力不足な相手だったな」

数分後、ナギは困惑していた。

「ヤミ倒してもこれ解除されねえのかよ!？」

てつきり倒せば開放されると思っていたが、アーティファクトは未だ健気にナギを捕らえていた。

ナギは困ったように、草原を右往左往する。

やべえ、折角かつこつけたのに、等と呟きながら、顎に手を当てて悩み歩く。

ふと、ナギの頭にある考えが浮かぶ。

『死』とか殴れるなら、空間も殴れるんじゃない？ 多分いけるぜ！

思い、改めて拳を引く。

殴るのはこの閉鎖空間だ。

思うのは、未央の下へ向かう一念、ただ一つ。

【・ 意思おもいを信じて打撃すれば、いかなるものも打撃する】

腕を振った。

瞬間、腕に何かを打撃した感触が返ってくる。

周囲の空間が震え、硝子の割れるような音が響くと同時に眼前の空間が崩れ、違う景色が見え始める。

空だ。浮遊島が見える事から、オスティア近郊なのは間違いないだろう。

出ようと足を踏み出した瞬間、

未央が目の前を落ちていった。

「うおおおおい！！！！ 空から落ちてくる系のヒロインかよ未央
」

慌てて飛び出し、空中で抱きとめる。

未央は気絶しており、先ほどの映像と違って装甲服は白いままだ。
思わずふう、と息を零す。

周囲を見渡すと、上空から白い欠片が降り注ぎ、地面には巨大な
クレーターが出来ていた。

観察していると白い欠片が頭に直撃。

「いてえ！ と、とりあえずこの場を離れるか！」

未央を抱きかかえ、身を翻してオスティアの浮遊島群に向かう。

それを遠くから見る影があった。
エヴァだ。

髪は煤に塗れ、衣装は解れが多く見えるが、体には傷一つ無い。
ナギに抱きかかえられ、自陣へ戻る未央を見て呟く。

「ふん、危機に馳せ参じる騎士ナイトが居るではないか。やはり羨ましい
事だ」

クツクツク、と笑いながらエヴァもまた身を翻す。

帝国戦艦に戻るべきか、ヤミを探しながらうろつくべきか悩みながら、彼女はゆっくりと飛行する。

すると、眼下に面白い物を見つけた。

降下して、声をかける。

「よう、いい格好になったな。ヤミ」

全身に裂傷を負い、うつ伏せで呻いているヤミを見つけた。

エヴァが近づいても気づいておらず、その口からは怨嗟の呻きを発している。

「……放置したいところだが、不服にも契約中だからな。運んでやる」

そう言いながらも、蹴り上げる事でヤミの身を浮かし、肩に乗せる。

荒々しい運送だが、ヤミは気にも留めずに怨嗟の呻きを続けている。

やれやれ、と呟きエヴァは帝国戦艦へ向けて飛び上がった。

第三十三話（前書き）

Caution!

今回、性的な行為を想起させるシーンがございます。

ストーリーはほとんど進んでおりません。作者の自己満足100%で構成されております。

ぶっちゃけR-15です。お読みいただける方は、甘さを中和する苦味成分、背後への警戒心を持ってお進みください。

第三十三話

ナギは無人の浮遊島に設置したテントの中、胡坐をかいていた。広く、大の大人が4人は眠れるような幅を持ったテントに、今は一人が眠っているだけだ。

眠っているのは未央だ、空から落下していた彼女は既に2時間眠り続けている。

最初は顔色が悪く、呼吸の音もあまり聞こえずに心配していたが、今は顔色も良くなっている。時折こぼれるような寝言も聞こえる事から、ナギは安心して彼女の目覚めを待っていた。

「ん……」

寝言が漏れ、かけられた毛布を引き寄せながら寝返りを打つ事で、彼女の肌が見える。

下着姿だ。

流石に装甲服のまま寝かせるわけにもいかず、ナギが脱がせたものだが、それを知った彼女はなんと反応するか想像して、ナギは背中に汗をかく。

ジャックにやらせるわけにもいかねえしな、不可抗力だぜ…

…！

ラカンと自分の二択であれば、自分を選んでくれるはずだ。そう思う事で、とりあえずの言い訳とした。寝返りで肌が見えるようになり、毛布をかけなおそうと近寄るナギは、

寒いだろうから、毛布よせねえとな。そう、それ以外に意図はねえよ。近くで見ようとかじゃねえし。

自分への言い訳を心で作りながら、毛布に手をかける。引くと、毛布を掴んでいた未央も引き寄せる形となり、眠っている彼女がこちらに体を向ける。男のサガとして胸に一瞬目がいったが、自分の心は胸より下に目を向かせた。

ヤミの出した映像で、穴が開いていた腹だ。

今見る限り、彼女の呼吸と共にゆっくりと動き、傷一つ見えない。いや、良く見れば白い線 傷跡らしきものが見えた。自分が彼女を守れなかった罰のようにも見え、毛布の解れではないかと、一縷いとばらの望みを持って思わず触った。

「んー……」

「ひゃあ！」

触った瞬間、未央が飛び起きた。

体を起こす反動で上がった腕がナギの顎を打撃する。

「おごー！」

「あいたあ！？ 何！？ 何事！？」

起き上がった未央は、周囲を見渡して状況を把握しようとして慌てている。

ナギは顎の痛みより、未央の様子を見る事を優先した。

毛布を胸元に寄せ、慌てながら左右を確認する未央。生きている。普段通りだ。

「未央」

「な、ナギ？ ど、どういっしょうきよ」

抱きしめた。

毛布越しに彼女の体あたり、熱を感じる。
人肌の温もりと、彼女の汗の匂いを感じる事で、彼女が生きてい
ると実感を得る。

普段のナギとは違う様子に、彼女は困惑する。

「ちょ、ナ……ナギ？ どうしたの？」

「……すまん、未央」

ナギの声から出たのは、謝罪の言葉だ。

抱きしめながらも、彼女に視線を合わせる事が出来ない。ヤミ相
手に大層な言葉を使ったが、傍に居てほしいと、守ると普段から豪
語していながら、自分は一度、間に合わなかった。その思いから、
口からは謝罪の言葉が出た。

「すまん……」

再び謝罪の言葉が出た。

抱きしめる手は、力以外の何かで振るえ、まるで説教を待つ子供
のようだ。

そんな自分を愚かと思いながらも、ナギは震えを止める事が出来
なかった。

三度、謝罪の言葉が口から漏れ出そうとした時、未央の動きがあ
った。

ナギの頭の後ろに手が回り、胸に押し付けるように抱きしめる。

そうする事で、彼女の心臓から鼓動が聞こえた。

小さいが、心に響く音だ。

「謝る必要なんて無いわよ。私、助けてもらったもの」

その言葉に、ナギは疑問を得る。

自分が概念能力を得た事はまだ話していない。話したとしても、彼女の『死』を殴った事まで話すつもりはなかったが。考えている間にも、彼女は続ける。

「ちょっと酷い怪我した時、ナギの笑顔が見えたおかげで踏ん張れたもの。 ありがとう」

「でも、その怪我だって俺が居れば」

言い訳をしながら顔をあげたところで、口を遮られた。

唇を合わせている感触と、未央の顔が目の前に見える。

驚いている間にも、唇は離れていく。

ん、と一息ついた彼女は、顔を赤くしながら自分を見て、

「私は、間違いなくナギに助けてもらったわ。だから、謝る必要はないのよ」

「でも、腹に傷が残っちゃっただろ……。つまり傷物に……！」

「一気に雰囲気がいっつも通りになったわね……」

じゃあ、と彼女は声を出して、一息ついた後、

「傷物を返品するか、ちょっと確認してみる……？」

毛布を背に、未央は体を横にしていた。

明りに照らされた彼女は、頬が上気しており、体を隠すものは肌着しかない。

腕は身を隠す事なく、抵抗の意を示さずに左右に置かれていた。掌を合わせるように握ると、彼女もまた握り返してくる。ゆっくりと口付けを交わすと、相手の唇に合わせるように、自分の唇が形を変える。唇を離すと、名残惜しそうに唾が糸を引く。

「いつも通り……！ 即ちOKという事だぜ……！」
「む、ムード作りなさいよ、ムードを……」

クレームが入ったので仕切りなおした。意表をつくように、再び口付けをする。

唇を重ね、舌で触れると、彼女の歯に舌が当たった。ふと、4年前のオスティアでの出来事を思い出す。あの時、彼女と口付けを交わした時は、歯が欠けていた。しかし、今はその歯も生え変わっている。思わぬところで彼女との付き合いの長さを確認した。

ナギは手に力を込める、彼女がまた何処かに行ってしまうぬように、決して逃がさないと意思表示をする。長い口付けの中、未央は身をすくめて息を吸う。

「その、なんていうか……て、手馴れてるわね、ナギ」
「ああ……。イメージトレーニングは欠かしてねえからな」

だからムードを壊すな、と彼女の抗議を聞かずに、ナギは唇で未央の首に触れる。

あ、と驚くような、艶のある声が響く。構わずに、舌で首筋を舐める事で確かめる。

「ひい……それ、駄目……」
「そういつつ抵抗しないのが、また昂ぶるぜ……」

言いながら、ナギは合せていた手を離す。

そのまま臍の周りに手を置いて、真新しい白い傷跡に触れる。

指の腹で傷跡に触れると、再生したばかりの皮膚は周り比べて柔らかい。

掌で撫でると、

「……………」

未央の体が震え、堪えるような声がする。

構う事なく、傷跡を改める。それは彼女の腹に白い線を入れるものだが、柔らかく、彼女を損なうものではない。その証と、ナギは傷跡に口付けをする。

「うあ……………」

未央が堪えきれないとばかりに身をよじる。

しかし、足の間にナギがあり、身を乗せている事からむしろナギに傷跡を差し出すような形となった。向けられた傷跡に、ナギは再び口付けをする。舌で触れて、傷跡をより詳しく調べる。臍下から胸に上がるように傷跡を拭う。未央の体が震え、息が詰まる音がする。震えで口の位置がずれ、彼女の身を歯が搔いてしまう。

瞬間、未央の全身が振るえ、大きく息を吐く音が聞こえた。

「け、検品終わった……………」

「ああ、汗の味がした位で、何の問題もなかったぜ」

だから、と声を続ける。

「返品は無しで、開封済みだから早めに召し上がっていいか？」

「こ、こつから先はまだ早いと思うけど……。ど、どうしてもって
いうならいいわよ?」

「どうしても、欲しい」

真つ直ぐに彼女を見つめながら答える。

返答は無く、未央は瞼を閉じる事で返事とした。

その意思を汲み取り、ナギは再び口付けをしようと顔を寄せ、

『あー未央、アリカじゃ。今どこにおる? 相談が……。あ』

未央の真横に念話の表示枠がポップアップした。

表示枠が開いた瞬間、未央とナギの顔が映し出された。

しかも、バストアップされた表示枠では未央は下着しか身に着けておらず、こちらを見る顔は赤い。

た、タイミング間違えたあー!!!

「す、すまぬ!」

思わず念話を切ってしまった。

いや、先ほどの状況ではどちらにしろ一旦念話を切る必要があった。自分の行動は正しい。しかしタイミングは間違えてしまった、それに対して謝罪する必要があるかもしれない。

「姫様、どうされました? 未央と連絡はついたのでですか?」

「ああ、いや。うむ、連絡はついたぞ？　じゃがな？　少々立て込んでおつてな、すぐかけ直す」

傍らに控えるガトウからの問いに早口で答える。

何分くらい待てばいいんじやろうか、まさか続きをしておるわけじゃあるまい……！

考えると、顔が熱を持ち始める。そういった事に触れる機会がほとんど無かった身では、先ほどのシーンは衝撃的すぎた。以前念話をした際は、寝巻きを着た未央と上半身裸のナギが映ったが、そういう空気は無かった。
しかし、先ほどは、

画面越しにでもわかるそういう空気……！　流石の妾も反省……！

なんとか感情の昂ぶりを制御しようと、その場を早足で回り始める。

ガトウが訝しげな目でこちらを見ているが、そんな事に構ってられない精神状態ではない。5分ほどそうしていると、念話のコールが入った。

「……アリカ、未央だけど」

「お、おお！　そ、相談があるので浮遊島群にある軍司令部に来るのじゃ！」

「……わかった、それと」

「な、なんじゃ!？」

「この防衛戦が終わったら話があるわ」

「わ、わかった……時間を取っておく……」

妙に底冷えする声で相手はそういった。

いかん、マジ切れしておる。妾が悪いのか……！？

またしてもグルグルと周り始めたアリカを、ガトウは呆れながら眺めていた。

第三十四話

アリカの呼び出しに応じるべく装甲服を着てテントを出ると、日は既に傾き始めて夕暮れの色を作っており、何処からか鳥ではなく魔獣の鳴き声が聞こえていた。

「魔法世界では、賢い鳥でも流石に生き残れないでしょうからね」

そんな事を呟き、未央は深呼吸をする。アリカの召集直前まで、ナギと『そういう行為』に及ぼすと心構えをしていただけに、精神状態を切り替えられていない。正直に言えば未だ精神は盛り上がったままで、なんとか理性が押さえ込んでいる状態だ。後ろに続くナギも同じようで、何処か落ち着かずにお互い視線を合わせる事が出来ていない。視線を合せたらどうなってしまうか、いや、あえて語る事は無いだろう。

「んあ？ なんだお前ら、もう済んだのか？」

テントの傍らで携帯していた固形食ビスケットを齧っていたラカンから声がかかる。ナギ曰く、最初はテントに居たが、いつの間にか居なくなっていたらしい。普段は粗暴が服を着ているような男だが、中々空気が読める男だ。

「アリカから召集よ、浮遊島群の軍司令部にこいって。ジャックも行くわよ」

「あいよ」

ラカンは了承の返事を返すと掌に残っていた固形食を頬張り、音を立てて咀嚼しはじめた。その様子を見ながら、背後に控えている

ナギに向き直る。ナギは居心地が悪そうに頭を掻き、夕日を見てこちらに視線を向けていない。打ち合わせの席に向かう前に、この状態を改善しておくべきだろうと思ひ、声をかける。

「ナギ、えーと……ほら、ね!？」

私は何を言いたいんだ。

「あー……うん、そうだな!？」

貴方も何を言いたいのよ。

「意味がわかんねえよお前ら」

うつたえる二人を見て、ラカンが声をかける。うっとうしいぜ、
と言いなから、

「暗がり引込んでなあ、ガツといってガンガンやってスッキリ
してくりゃいいだろ!」

「ムードを考えなさいよ!」

情緒の無いアドバイスを吐いた口を下からかちあげた。うごお、
と呻き声をあげながら空中に浮かぶラカンに追撃を入れようと考
えていると、

「その手があつたか……!」

「乗るんじゃない!」

背後の馬鹿もその気になったのでバックハンドの打撃をぶちかま
した。打撃音に続くように、前と後ろから地面に叩き付けられる音
が響いた。土煙が上がリ、周りに立つのは自分一人。勝者私。

そんな事を思っていると、先ほどまで胸に燻っていた昂ぶりが消
えている事に気づいた。怒りに任せて普段通りの打撃をかました事
でスッキリした、というところか。ラカンは打撃された顎を摩りな

がら立ち上がり、こちらを見て何うような表情を見せた。

まさかワザと？ メンスパワー MPが意外と高い男ねえ。

背後で立ち上がるナギは痛みを堪えつつ、ふう、と何処か残念そうな息を吐く。顔を上げてこちらに視線を送ってきた。その表情はいつもの笑顔に戻っている。

「じゃ、さっさと終わらせに行くか」

「ええ、そうですね」

了解の声は違う方向から聞こえてきた。ナギの更に後ろ、テントの影から聞こえた。

「アルじゃない、いつの間に帰ってきたの？ 詠春とゼクトは？」

「ここに居るぞ」

「ワシもおる」

アルの背後から詠春とゼクトも姿を現した。三人とも、ラカンと同じように固形食を手持っていた。齧りかけのそれは、随分前からここに居た事を示しているが、ともあれ帝国領でオスティアを攻める後詰め艦隊を殲滅する為に残っていた3人がここに居る。つまり、

「帝国側の妨害、終わったのよね。首尾はどうだった？」

「ええ、順調に終わりましたよ。見せたかったですねえ、身元をバラさない為に覆面で戦場を駆ける我々を」

「私は忘れない……」

「詠春は黒覆面に黒マントじゃったからのう。あ、ちゃんと写真を保存しておくから期待しておくよいい」

ゼクトの言葉に、詠春が膝をつく。平時から身内による共食いを繰り返す空気が懐かしく、久しぶりに、紅き翼くが全員集合した事を実感する。

「さて、アリカ姫に呼ばれてるし、行きましようか」

各々が、それぞれの言葉で応答する。これから再び戦場に向かうというのに、心に不安は無い。頼れる仲間が居るのは何よりの幸いだと実感しながら、未央は杖に腰かけた。

浮遊島の一つ、軍司令部がある島へ降り立つと一人の少年がこちらに声をかけてきた。

銀色の髪を短く刈り込み、黒く大きな瞳は快活な印象を持たせる。スーツに身を包み、ネクタイをきつちりと締めた姿、更には戦場となる地に居る事からただの快活な少年ではないだろう。

「>紅き翼くの皆さんですね、姫様と師匠からお迎えに上がるように申し付かってきました！」

「そうだけど……貴方、初対面よね。名前聞いてもいい？」

「あ、失礼しました！ 僕はタカミチ・T・高畑といます」

おお、あの>死の眼鏡くデスマガネの若い頃か、と未央は内心納得する。ガトウの下についているのは覚えていたが、オステイアで見かけなかったのを忘れていた。ともあれ、挨拶を返さねばなるまい。笑顔を作り、挨拶を返す。

「私は未央・柳よ、宜しくタカミチ君」

「は、はい。宜しく願います」

初対面の相手に照れているのか、少々顔を赤くしてタカミチ少年は礼を返す。新鮮なリアクションに、未央は思わず笑みを深める。すると、タカミチ少年の顔が赤みを増した。

はて？ 同じくらいの年頃の女に免疫無いのかしら。

そういえば原作でもアリカの笑顔で赤面していた気がする。そう考えていると、後ろから声がかかった。

「俺がナギ・スプリングフィールドだ。まあ宜しく頼むわ」

軽快な口調だ。以前であればドスを利かせて相手を威嚇していたが、流石に年下の少年相手にそんな真似はしないのだろう。そう思っていた。

「あと未央は俺の未来嫁だからな、手え出すなよ！」

「年下の子供にまで変な事言ってるんじゃないわよ」

呆れながら軽くナギの胸を叩く、そんなやり取りを見たタカミチ少年は、気落ちするどころか瞳を更に輝かせている。何が彼をそんなに魅了するのかと疑問に思っていると、アルが耳打ちしてきた。

「貴方とナギは良い意味でも有名ですよ、テロリスト認定されながらも手を取り合って生きる二人、ロマンチックだ、とね。彼は貴方を守る立場のナギに憧れてるんだと思いますよ」

「初耳よ？ どこでそんな話聞いたの？」

「まほネットに専用スレッドが立っていますよ。今度探してみても？」

「アル、貴方って意外と暇なのね……」
「知識の蒐集が私の趣味ですから」

皮肉で返したつもりだが、満面の笑顔で対応されてしまった。ア
ルを閉口させる程の皮肉を言えた事は無いが、たまには一矢報いた
い。そう思いながら、話題が逸れてしまっている事に気づいた。ア
リカの元に向かうべく、タカミチ少年を見るとナギと仲良く話して
いる。

「そこで俺は言ってやったわけよ、この俺が居る限り未央に手出し
はさせねえって……な！」

「か、かっこいい！ 流石、千の呪文の男ですね！」

「おうおう、いいぞ。もつと言え！」

「安い武勇伝のように語るんじゃないわよ……。タカミチ君、案内
頼めるかしら」

未央の一言で本来の役割を思い出し、一言謝罪の言葉を挟んでタ
カミチ少年は先導を始めた。司令部が置かれているだけあり、浮遊
島には多くの魔法使いが詰めている。【よく馴染む】概念を賢石化
して周囲に違和感を与えないようにしてはいるが、周囲に敵となる
可能性の相手が展開している状態は緊張する。そんな中、ラカンが
周囲に向けて手を振ると歓声上がる。

「ジャック、貴方何したの？」

「ん？ 武器投げてるときに支援してもらったからな。あと消火活
動とか色々あってな」

なるほど、と得心する。ラカンは同行して日も浅い為、>紅き
翼くの一員と認識されていない事もあるのだらう。何にしてもオス
ティア軍から好評を得ているのはいい事だ。しかし、時折聞こえる

『オステイアのホームラン王』ってなによ、それ。ラカンを見送る声援を背に受けて歩き続けると、浮遊島の外縁部に到着した。タカミチ少年は更に歩き続け、その先を見ると外縁部を沿うように下り階段が作られており、それを降りていくと浮遊島を横から挟るように穴が開けられており、その中に司令部が設置されていた。中を覗くと一定区間ごとに灯りが点されており、足元を出来る程度の明るさは保たれていた。

「なるほど、穴もオステイア側に開いていますし、これなら空爆対策と緊急時の脱出が楽ですね」

「モグラみたいで陰気だと思っわ」

「未央、いつも言っているが周囲に現地民が居る時はそういう発言を謹んでくれ……」

「事実じゃない、アリカに直接言ってやるっかしら」

「相手は王族だぞ！ 頼むから王族相手にいつものノリやめてくれ……」

「ククク、どうしようかしらね」

胃の辺りを押さえながら、詠春はため息を漏らしている。少々苛めが過ぎたかもしれないと少々反省する。先導するタカミチ少年は迷い無く歩いていく。右折、右折、左折、左折と少々うんざりしながらも着いていくと、歩き始めて3分程度、やっと立ち止まった。そこには4m程の大きさを持つ両開き式のドアがあり、タカミチ少年はこちらがついてきている事を確認し、扉を開いた。

扉の先には、大きな円卓が設置されていた。20人は座れそうな

それには、三人が座っているだけだ。アリカとガトウ、見知らぬ三人目。黒い髪に白い肌の東洋人風の外見を持った女性だ。流石に見知らぬ人物が居るところでアリカに八つ当たりをぶちかますわけにも行かないだろう。アリカに視線を送ると、ぎこちない笑みを浮かべている。こちらは満面の笑みを返した。声を出さずに、口だけを動かして意思を届ける。

う ら む わ よ。

それを見て、相手も返答してくる。

す ま ん、あ と で な。

抗議の意味が通じている事を確認して、着席する。全員が着席した事を確認すると、アリカが話し始める。

「さて、全員揃った事じゃし、始めるとしよう、未央」

「何？」

「既に攻撃の第一陣は終わったようじゃが、ヤミはまだ出てくるかの？」

「んー……私はエヴァと戦ってたから、ナギ、どんな感じだった？」

「ぶつとばしてやったぜ？ そう簡単に復調はしねえと思う」

「この事なので、多分積極的に前線には出てこないと思うわ。出てきたとしても後ろでニヤニヤ笑ってると思うわ」

「ふむ……では、お主達に今回のオーダーを伝える」

そこまで言って、アリカは皆を見渡す。

「ヤミを前線に引っ張り出せ、オスティアにちよっかいを出した代償として、>完全なる世界くを世界に引っ張り出してくれよう」

ヘラス帝国、オスティア攻撃艦隊には本国より衝撃の知らせが届いていた。後詰めとして本国に待機していた艦隊が正体不明のマスクマン達から攻撃を受け、壊滅した。攻めあぐねている現状、誰もが追加戦力を待ち望んでいたが、それが壊滅したという知らせは士気を下げるに十分だった。前進していた偵察艦隊は全滅しており、突破口を開くと自信満々に質量兵器と共に飛び出したヤミは全身に裂傷を負って帰還した。医務室で治療を受けているらしいが、いつ回復するか医療魔法使いも見当がつかないと報告してきた。攻撃は全て空振りに終わり、満足に敵の情報も入手出来ない現状で誰もが思っていた、一度撤退すべき、と。それは旗艦の艦長とて例外ではなかった。

名誉ある帝国艦隊が成果を上げられず撤退、か。

悔しいが、意地になって突撃する事で被害を出すよりは幾分マシだ。攻撃失敗の責任を追及されるかもしれないが、それでも自分一人が罰を受けるだけで済むだろう。

皆を無駄死にさせるわけにはいかん。

そう思い、艦長は命令を出すべく口を開いた。瞬間、背後から発せられた異なる声がそれを遮った。

【 ・ 信じなさい】

「艦長、全艦に連絡しなさい。魔力障壁の出力を最大にしてオスティアへ突撃せよ、と」

突撃命令、兵を無駄に殺すだけだ。いや、問題ないのだろう。信じればいいのだ。

「了解致しました」

信じよう、この方を。背後を振り返り、膝をつけて礼の姿勢をとる。

治療の見当もつかぬはずの身を完治させ、凶暴な笑みを浮かべるヤミを見ながら、艦長はそう思った。

エヴァはヤミの背後に控えていた。艦長を足元につかせ、ヤミは笑っている。それは、いつもの薄ら寒い笑いではなく、何かを押しさえ込むような笑いだ。意識が戻った途端、一度消失したかと思えばすぐに体を再構成する事で怪我を完治させた相手は、体の傷を治しても心はどこか壊れたままのようだ。しかし、そんな事は知った事ではない。こちらは聞く事がある。

「おいヤミ、約束通り未央を行動不能に追い込んだぞ。さつさと転生させる」

こちらの言葉を聴き、首だけをぐるりと半回転させて相手は答える。

「駄目です、ナギが蘇生させたのでまだアレは生きてます」

「殺せ、とは言わなかっただろうに。それに一度殺した事は事実だ。

契約内容は『行動不能にしろ』であつて、『回復不能にまで追い込め』ではなかつただらう」

「詭弁ですよ！ いいから私の指示に従いなさい！」

こちらの答えに、苛立ちを隠そうともせず、舌打ちをしながら答えた。しかも、その内容は一方的に命令に従え、だ。自分の中で、何か切れた音がする。

こんな相手に従つて、下らない虐殺に付き合い、笑顔で両親に会え、と？

自分の心に問いかける。

これでいいのか？ と。

再び両親に会いたい。

吸血鬼などなりたくなかった。

人生をやり直したい。

自分の欲望が次々と列挙されていく中、最後の締めくくりの一言が心に響いた。

だが、こいつの言う成す事、全てが気に食わない。

欲望を発していた心すら、その一言に同調した。つまり、やる事は決まつたのだ。

> あくのまほうつかいくを舐めるなよ、糞つたれの神め。

ニヤリ、と笑いながらそう思った。

第三十五話

浮遊島に設置された固定砲台に詰める兵士達は、夕暮れの空に閃光を描いた。

精霊砲が空を裂き、目標を撃滅せんと光が奔る。

光が奔った先で爆発、帝国の質量兵器だ。再び戦端が開かれた際に口火を切ったそれは、既にオステイア軍の探査魔法の警戒最上位にあがり、戦艦から射出されれば瞬く間に各砲台に情報が伝達される。

既に帝国戦艦は固定砲台まで10kmの位置に迫っているらしい。質量兵器だけでなく、敵の精霊砲がこちらに届く距離だ。

恐怖に震える心を叱咤する。自分は兵士だ。同僚の言葉を借りれば、『オステイアを1秒救える男』だ。

気合と共に、精霊砲に装弾。

「守るぞ！ 俺達の国！」

「おお！ テンションあがってんじゃねえか！ これなら1人2秒は持つな！」

「10秒だって100秒だって持たせるぞ！ ジャック・ラカンみたいな英雄ヒーローだけに任せるな！」

「おうとも！ 雑兵の大事さを見せてやろうぜ！」

相棒の気合も十分だ。

逐一流れてくる情報に目を通し、飛んでくる質量兵器の軌道予測と精霊砲の射線を合せる。精霊砲の銃身に光が点り、再び空を裂く力が満ちている事を周囲にアピールしている。それは、いつでもいけるとこちらに語りかけているようでもあった。

照準、今は何も無い夕暮れの空。しかし、必ず質量兵器は飛んでくる。

まだ、まだだ、もう少し待て。握る手に汗を感じる。鬱陶しい。
軌道予測と射線が合った。

「撃て！」

「あいよつと！」

砲身に展開した魔法陣が一齐に発光し、その身に宿した力を雷鳴と共に射出させる。砲身から一直線に奔る光線の先で、幾つもの爆発が起きる。

直撃だ。探查魔法も質量兵器の撃墜を示す。

「よつし！ 次だ！」

「お前も結構テンション高くなるタイプだな！ ようご同輩！」

「戦場でアイドルの話をするような変態と一緒にするな」

「つ、つねええ！！ そんな事言うなら戦意高揚に来てるアリカ様の生写真やらねえぞ！」

「アリカ様はアイドルじゃない……俺達の姫だ。だからノーカウン
ト」

「お前ひでえよ！」

やかましいので無視して探查魔法の表示を見る。帝国の艦隊も既に捉えているそれは、途方もない数を示している。数えるのが面倒な程の潜空艦と駆逐艦、巡洋艦30、空中母艦が5、極めつけに旗艦らしき超弩級戦艦が1と過剰戦力にも程がある。

オスティアを消し炭にするつもり、と言い出しても不思議ではない戦力だ。

前線基地に詰めている戦力だけで止められるものではない。

だが、止めなければならぬ。それが兵士おれたちの仕事なのだ。

固定砲台に詰める小隊が一丸となり、精霊砲を連射する。質量兵

器を貫き、潜空艦を打ち抜き、駆逐艦の砲撃を堪えて反撃する。

しかし、気合とは別にギリギリと敵は距離を詰めている。幾つもの駆逐艦が砲身をこちらへ向け、破壊の光を灯している。

撃たれれば耐えられない、その前に連射だ。

発射、同時に一隻落とす。次弾を装填する間に、相手の第一射が着弾した。

衝撃が浮遊島を揺らし、精霊砲を受け止める魔法障壁は弾けるような音を立てながらその密度を濃くしていく。揺れる足場の中、次弾装填完了するも視界が開けない。

開いた、瞬間に見えたのは、3連続で発射された敵の精霊砲。

「くそ……!!」

「終わったぁー!？」

「お前ほんとブレないな!？」

こんな時でも冗談めかして驚ける同僚に驚く。破壊の光が迫る中、思っているのは、

結局、何も出来ずに……!

遠く後方の両親が住む地を守れないと、それだけが頭を駆け巡る。せめてもの抵抗に、破壊の光を睨みつける。

その視線を遮るように、細身の男が空中に躍り出た。その男は、細長く曲線を描いた剣を両手で持ち、

「らいっっ」

振りかぶる。

「こおーけえーん!!!」

響く声は、空気を破裂させる程の気迫が込められていた。振った剣からは電撃が刃となって精霊砲の光を真つ向から両断し、その向こう、駆逐艦すら切り裂いた。

剣客。

そんな言葉を思い出した。旧世界で未だ息づく独特の剣術を操る戦士。彼らが持つ『刀』と呼ばれる剣は、何よりも切り裂く事を前提としたものと聞く。精霊砲の光すら切り裂くその剣、その魔技は、まさしく聞いた通り。

彼は一息つく事なく、空中を蹴って別の駆逐艦へ向かう。再び発射された精霊砲をまたしても切り裂き、すれ違う瞬間、駆逐艦を両断。最早落ちるだけとなった駆逐艦を足場として、彼は剣に手をかける。剣身に雷が発生しはじめ、それを確認すると再び技を繰り出した。

「らいこおーけえーん!!!」

剣身に帯電させた電撃を刃として射出し、3隻目を撃沈させる。空いた手を耳に当て、何かを聞くような仕草をした彼は文字通り空を駆けていく。

戦場は10秒足らずで一変した。周囲に展開していた駆逐艦は既に無く、誰1人欠ける事なく立っている。

「た……助かったのか？」

傍らの同僚に声をかけると、何処からか取り出した本を捲っていた。

「おい、こんな時に何を」

「待て、待て……。む、やっぱりか。今のは>紅き翼<の青山 詠春だな。『旧世界のサムライマスター』と呼ばれてる男だ。やっぱり

> 紅き翼く 援護にきたか！」

予想があたったぜ、と無邪気に喜ぶ同僚。しかし、それは要するに、

「魔女が対価を取りに来たって事じゃないか。命でも要求されるんじゃないか？」

「うむ……。そうかもしれないな、しかし、逆に考えてみるよ。いいか、と同僚は告げる。

「対価が何であれ、それを支払えばこの大艦隊を退けてくれる、と。大体の対価は安いもんだと思わねえか？」

「確かに……」

「申し訳ありませんが、そのような安易な考えは困りますね」

自分の答えに、後ろから待ったの声がかかった。同僚と驚き振り向くと、深くローブを被った長身の人物が立っている。ローブから覗く口元は薄く笑っており、何処か胡散臭い印象を持った。

どちらにせよ、不審人物だ。杖を構え、警告する。

「何者だ！ 答えによつては」

「> 紅き翼くのアルビレオ・イマと見た」

「正解です、ご慧眼ですね」

「なあに、あんたら有名だからな」

「いきなり馴染んで……！ 俺の緊張感は一体……」

「何、貴方の反応は実に一般的ですよ、無駄ではありません」

さて、と相手は話を変える準備をした。

「> 契約の魔女くの遣いで参りました、オスティアの担い手達。あなた方に力を貸しましょう。代価は法外、効果の程は貴方達次第」

胡散臭い男は、胡散臭い口調でこちらに問いかける。

手から青く四角い石を差し出し、

「これは、貴方達の意味を力に換えるものです。貴方達の意味が強固なら、それこそ英雄のごとき力となるでしょう。さあ、如何しますか？」

「嘘は……無いのか？」

「ええ、おっと、ここはT e sと答えておきましょうか。魔女は騙らず騙しません」

T e s? と、相手はこちらに問いを作る。

意思が力となる、それは自分の思いを計るものにもなる。つまり、自分達の思いが偽者ならば、力は無いだろう。

ならばと思いつながら同僚を見ると、相手もこちらを見ていた。自信に満ちた表情をしている。恐らく、自分も同じ表情をしているに違いない。

「勝ったな」

「おうとも、しかし、お前も染まってきたじゃねえか」

「そう思つなら、アリ力様の写真は回せよ」

「同志の頼みじゃ仕方ねえな！」

「答えは決まりましたか？」

相手の問いに、声を重ねて答える。

『T e s t a m e n t !』

自分達で国を守る為、魔女との契約を交わした。

アルビレオ・イマの手に載せられた青い石に手を乗せると、彼の耳に声が響いた。

【・ 意思は力となる】

帝国軍の巡洋艦はゆっくりと前進していた。

質量兵器を浮遊島へばら撒きながら、戦線を押し上げていく。魔法障壁を最大展開する事で、時折飛来する武具を弾きながら進むそれは、まさしく戦艦の名に相応しい。

そんな中、戦場に変化があった。

浮遊島の一角が青白い光を放つと同時に、連動するように全体が輝き出した。光は徐々に強くなり、そこへ質量兵器が飛び込んでいく。正しく着弾し、爆煙と破片が撒き散らす。

しかし、着弾した箇所は盾のように光が強まっており、傷どころか煤一つついていない。

誰もが何故と思った瞬間、オスティアの固定砲台から精霊砲が発射された。空を裂く光弾に、青白い光が螺旋となって光弾を押し出す。照準は正確だが、だからこそ巡洋艦は事前に軌道を察知して直撃を避けるべく、横へずれるように機動する。

意思の籠った光弾は、回避を許さない。曲がらぬはずの光弾は、大きく軌道を変えて巡洋艦の正面に着弾した。戦艦の魔法障壁と拮抗する。最大まで高められた帝国戦艦の魔法障壁は、一発や二発の精霊砲で貫く事は叶わない。帝国軍人は誰もがそう思っていたが、光弾の射手はそうは思わなかった。

貫く。

その想いは光弾に力を与える。ガチン、と硝子にヒビが入ったような音がした。続けて聞こえたのは、バリン、と破碎の音。魔法障

壁が砕け、巡洋艦を一直線に光弾が貫いた。

同じような光景が、他の戦場でも展開されはじめた。

押していたはずの帝国が、謎の力を発揮しだしたオステイア軍に押し返されている。

帝国軍の巡洋艦が下がる中、大気を震わせて前へ出る艦がある。

オステイア攻撃艦隊、旗艦。

戦場で最も巨大な力を持った艦が、戦況を変えるべく前進してきた。

迎え撃つは、意思の光を持ったオステイア防衛軍。

その決着を見守るように、幾つもの撮影器具カメラがそれを捉えていた。

第三十六話

青い光の飛沫と共に、光弾は夕暮れの空を飛ぶ。

それに対するは、ヘラス帝国の誇る国際戦略艦隊。魔法世界最高の技術力を持った帝国の最大戦力だ。魔法障壁を貫くと強固な意志を込められた光弾に対し、魔法障壁の出力を高めるのではなく、相殺という手段を取る。左右に備え付けられた小型の精霊砲と、正面に備わる主砲を光弾へ向かい、射撃する。青い光弾と白い閃光が激突、お互いの力を主張しながら押し合い、消し飛ぶ。

互角だ。

帝国艦隊はこれに歯軋りをする。魔法世界最高の技術をつぎ込んだ全火力がたかが前線基地の精霊砲と同等か、と。

オステイア軍は歓声をあげてさらに勢いづく。我らの意思是、技術の差など物ともせぬぞ、と。

その勢いは連射に繋がる。幾つもの固定砲台から、抗いの意思を込めた光弾が飛び出していく。帝国艦隊は総力を持ってこれを迎撃、受けるな、と命令が飛び、戦場の空は相殺の光で照らされていく。

そんな中、帝国軍旗艦から飛び出す影がある。その影は旗艦の上部に着地すると、襲い来る光弾へ向かい、魔法によって巨大な氷柱を展開、勢いよく投げつける。

エヴァだ。

彼女の投擲する氷柱は、概念の力によって強化された光弾を相殺する。その様子に、彼女自身は少々悔しげに舌打ちをした。しかし、直後に笑みを作る。

「魔女め、歩兵^{ポーン}を強化するとは面倒な真似をしてくれる」

笑みのまま呪文詠唱を開始、幾つもの氷柱を展開し、光弾を相殺

し続ける。それによって幾つかの砲撃がオスティアの固定砲台へ襲い掛かる。

しかし、その砲撃は固定砲台へ届く事は無かった。まるで上から殴られたように軌道を下に変え、大地に傷跡を作る。

エヴァは固定砲台の上に赤毛の人影を見た。それはエヴァへ向かって指を突き刺し、かかってこいよと言わんばかりに挑発する。

ナギだ、それに続くように幾つかの人影が固定砲台の上に現れる。

「ほう、あれが魔女の番か。^{つがい}少し味でも見てみるか」

笑みを深くして、エヴァは旗艦から浮き上がり、ナギへ向かって突撃する。

ナギもまた、左手の杖に魔力を込め、エヴァに向かって突撃する。周囲に控える>紅き翼<の面々はそれを見送り、戦場へ散っていく。戦場の中央でナギとエヴァは激突する。突撃の勢いを利用した両者の打撃は、拮抗しながらも周囲に衝撃を響かせる。打撃に込められた魔力が伝播し、雷と細氷が周囲を埋めつくす。

「筋がいい打撃だ、しかし、まだまだガキだな」

「俺の未来嫁に傷つけてくれやがって。泣かしてやるぜ合法ロリ！」
「誰が合法ロリかッ！」

両者はそのまま打撃戦へ移行する。両軍の砲撃が飛び交う中、時には回避、時には弾きながら戦闘を続けていく。

アリカは、オスティア軍の司令部で表示枠を通じてそれを見てい

た。自国の兵士達的意思、決して負けぬという覚悟の力で戦場を押し戻している。>完全なる世界<の一員たる強敵が出てくるも、>紅き翼<がそれをひきつけ、戦場はオスティア軍に傾いている。胸に熱い想いを感じ、手に力が籠る。今から行う作戦が成功すれば、最悪でもこの場を収める事が出来る。最高の結果を引き寄せる事が出来れば、

帝国と連合の、馬鹿らしい戦争は終わりじゃ！

瞑目し、心を落ち着かせる。

作戦の手順を確認し、覚悟を決める。

傍らで表示枠を出して操作する、三人目の人物　魔法世界の報道機関の人間に声をかける。

「状況はどうじゃ？」

「順調にアクセス数も伸びています、各国のまほネットユーザーも動画見て意見交し合ってますね。これならイケそうです」

戦場の様子は撮影機材を通し、まほネットで世界中へ生中継されている。話題性は十分だろう。多くの人間に波及しなければ作戦は意味を成さないが、どうやら杞憂に終わったようだ。

「ガトウ、マクギル元老議員とヘラス帝国の第三皇女はどうか」

「お二人とも、一派の情報統制は終わっているとの事です。いつでも」

続けて各国の協力者を確認する。

今回の作戦は、オスティアが問題提起をぶちかまし、連合と帝国に戦争継続の是非を問うものだ。アリアドネー魔法騎士団の仲介も欲しかったところだが、コンタクトを取るには至らなかった。

無いものを強請っても仕方ない、と己を叱咤する。手元の表示枠には、まほネットへ資料をアップロード中であるアイコンがクルクルと回っている。> 紅き翼くが4年間集めた資料だ。> 完全なる世界くの証明として十分なもので、話の展開次第で帝国・連合内の> 完全なる世界くシンパを一掃出来る。

アリカの前には、幾つかの撮影機材が備え付けられている。まるで会見会場だ。いや、事実これから魔法世界へ向けて意見を投げかけるのだから、間違いではあるまい。

さあ、行くか！

アリカの周囲に光が当てられ、撮影機材が動き始めた。同時に、戦場を移していたまほネットへと連携を開始。

「妾はアリカ・アナルキア・エンテオフユシア、ウエスペルタテイア王国の王女をやっておる。今回は皆に見て、聞いて、考えてほしい事があり、このような場を作らせてもらった」

中継の表示枠には、戦場とアリカが並んで映し出されている。

「2年前から戦端を開いたこの戦争、誰が、何の為に始めたか。一般的には、帝国が亜人種の権利を守る為とも、領土拡張の為とも言われておる」

しかし、と一度区切る。

「果たして、それは本当の事じゃろうか？」

今度は、もしも、と声をつくる。

「帝国と連合の双方に、戦争を起こす事自体が目的の者が居たとすればどうじゃ？　ここで、簡単な陰謀論と笑ってほしくはない。もう少し妾の話聞いてほしい」

傍らのガトウが息をのみ、こちらを見ている。あまり見るな、余計に緊張する。

「2年、2年間じゃ。帝国はその領土を少しづつ拡大してあるが、未だ我がオステイアを攻略するには至っておらぬ。連合本土へ繋がる陸地として攻略が必須にも関わらず、じゃ」

中継を管理している者からクリップボードがかかげられる。【アケセス数急増中！】、よしよし、順調じゃな。

「我が軍が精強だから？　確かに今見てもらっている映像ではそうじゃろう。しかし、これはとある人物の力を借りて盛り返したものだ。そして、これから話す事はその人物からきっかけを得てわかった事でもある」

さて、いよいよ山場じゃな。

「その人物とは、>紅き翼<、>契約の魔女<、未央・柳じゃ。>オステイアの怨敵<と言われる彼女が、何故妾に協力するか。その理由を今から話そうと思う。妾と彼女は共通の敵を認識してある。そして、その敵は帝国・連合双方に入り込み、戦争を起こし、長期化させておる。その組織の名を、>完全なる世界<。>紅き翼<は彼らと敵対し、テロリストと非難を受けながらも戦い続けた」

そして、と区切る。まほネットにアップロードした資料の情報封鎖を解きながら、それを中継画面にぶちまける。表示枠を埋め尽く

す勢いで資料が展開され、帝国・連合の要人が>完全なる世界<と接触している証拠が映し出された。

「これが>完全なる世界<が帝国・連合に入り込んでいる証拠じゃ！ 誰もが戦争の継続を願い、この世界の終わりを望んでおる！」

良いか？ と表示枠の向こう側へ語りかける。

「帝国にも、連合にもこの戦争を続ける為の大義があるじゃろう。帝国は亜人種の権利を、連合は平和の為の防衛と、しかし、その大義はこやつらに利用されておる！」

これで良いはずがない、と声をあげる。

「妾は帝国と連合へこう言おう。何故戦争を続けるのだ、と。妾の言う事が信じられなければ、展開した資料を調べるがよい。映っている人物へ問うがよい」

ふと興味が沸き、封鎖している念話のバックログを頭の中で覗く。何百件もの連合の元老議員から通話が入っていた。まあ取らぬがな！ ククク！

「妾は、汝らの『正義』に問う！ 本当に目の前の相手は敵か！ そして、妾達を信じてくれる汝らに願う！ 手を貸してほしい、と！ >完全なる世界<の頭首、>紅き翼<を陥れた者、妾達の敵である……」

最後の資料を表示枠になげつけた。

「真の>オスティアの怨敵<、ヤミ・オギナを倒す為に！」

憎たらしい写真を、大きく映し出した。

ヤミは、中継の表示枠に映し出された自分の写真を見た。

「・・・・・・・・・・は？」

こぼれた感想は、疑問を表す一声。何故自分が>完全なる世界<の頭首として糾弾されているのか。アリカはそんな疑問を余所に、さらに言葉をつなげる。

「本来、テロリスト認定されるべきはこやつであったが、不運が重なって未央がそうなってしまったようじゃ。妾はここに未央・柳のテロリスト手配解除と、ヤミ・オギナのテロリスト認定を要請する！」

「え・・・・・・・・・・？ ええ・・・・・・・・・・！？ どういう事だ!？」

事態はさらに進んでいく。中継の表示枠に違う人物が現れた。連合のマクギル元老議員と、帝国の第三皇女テオドラだ。

「アリカ様、お話はわかりました。連合としては未央・柳女史の手配解除とヤミ・オギナの指名手配を実施します。連合内の疑いある人物についても、早速査問会を」

「帝国としても受けよう。帝国の大義を利用する不屈き者の処罰が終わるまでは、戦闘行為も自重しましょう。まずはこの戦闘の停止

を」

テオドラの言葉とほぼ同時に、通信手へ連絡が入る。最早内容は聞かずともわかった。

「あ、あの……皇帝直々の撤退命令が……。それとヤミ様の出頭命令が出ています」

「そんなものは無視」

叫んだ瞬間、背後に気配を感じた。振り向くと、影からエヴァが現れた。少々傷ついているが、戦闘に支障があるようには見えない。こんな時に何をサボっているのだ。

「何をしている！ さつさと>紅き翼くをぶちころしてこい！」

「いや、少々気が変わってな」

そう言い、エヴァはこちらの肩を叩いた。その表情は悪い事をたくらんでいますとばかりに、深い笑みをしていた。

「ヤミ、>紅き翼くが戦場で呼んでるぞ、行ってこい」

「は？」

腹部に衝撃を受け、艦首前面の硝子をぶち破りながら外に放り出される。

殴られたのか！ くそ！

殴られた勢いを消しながら姿勢を整える。この戦場に居る意味は最早無い。一刻も早く転移魔法で逃げなければならぬ。思いながら顔を上げると、拳が見えた。

「初めましてじゃな、神とやら。一身上の都合で恨みがあるもので

のこ」

打撃され、目の前に火花が散る。意識ごと揺らされ、魔法も概念の展開も間々ならない。その間にもゼクトの打撃が続けられる。殴り、蹴りながらもゼクトは話を続ける。

「お主が真面目に人間導いてくれればこんな事にもならなかったんじゃない。自業自得という事で納得せい。よし次じゃ」

一際力を込めた蹴りが繰り出され、大地へ向かって蹴り飛ばされる。

地面につけば、影の転移魔法が！

むしろ僥倖、そう思った瞬間、下に人影。青山 詠春が構えている。

「私個人としては、あまり恨みは無いが。ナギと未央の為、戦争終結の為という事で」

鞘に納められている太刀で腹に突きを繰り出してきた。勢いを殺せず、腹部を貫通するような勢いで鞘がつきたてられる。

げぶ、と口から音と共に胃液が漏れる。

「では、次へ行ってくれ」

再び蹴り飛ばされる、まるで蹴鞠だ。飛ぶ先には、アルビレオ・イマが見えた。いつも通りの胡乱な笑みを浮かべた彼は、重力球を両手に展開している。

「未央とナギは孫みたいなものにして、ここは一つお爺ちゃんとして張り切りましょうか」

重力球で上下から挟み込むように打撃。プレス機で押しつぶされるような力を全身に受ける。

いい加減に……！

しろ、と思う間にも弾かれる。

「あと2回です、頑張ってくださいね」

拒否と抗議の思いを浮かべた瞬間、頭部に衝撃を受けた。更に続けて連打が入る。既に重症ではない所が無い。しかし拳は遠慮なく打撃を続ける。

「>紅き翼くオールスターって奴らしいぜ、お前も随分恨まれてんなあ」

ジャック・ラカン、貴様もか！

「よっしゃあ、ラストだ！」

バックハンドで頬を張り飛ばされ、飛んでゆく先には二人の影。ナギと未央、やはり最後は貴様らか。

「未央、この【退場しろ！】って文字かいた棒で殴ればいいのか？」

「そう、私はこっちの【概念封印！】って奴で殴るから」

恐ろしい事を話している。前者はともかく、後者で殴られたら洒落にならない。どうにか回避しようとするも、既に体のどこも動かない。概念条文を発しようにも、口すら動かない状況ではどうしようもない。

やめろ、待て、話し合おうじゃないか。

『セーの』

二本の棍棒が頭を直撃。

カーンと、気持ちいい快音が自分にも聞こえた。

第三十七話

快音を響かせたヤミは、二人の棍棒を頭蓋で破壊しながら後ろへ吹き飛んでいく。クルクルりと独楽のように回転しながら、地面へ一直線。高度を下げ、森林に引つかかりながらも土煙を上げて大地に着弾した。

それを見て、ナギは

「やつ……!？」

何かを我慢するように口を押さえた。

「そう、言ったら駄目よ。ナギ!」

「やったか!? 二人とも!」

『えいしゅううううん!!』

やじたか 生存フラグを成立させてしまった詠春に、抗議の声をあげる。

「折角俺が我慢したつてのに! なんだお前は!? ああ!? 戦争長引かせたいのか!？」

「それでも漫画大国日本出身者!? フラグ管理くらい覚えなさいよ!」

「わ、私が悪いのか? あと私はあまり漫画の類は読まなくてな…」

「つかえねえ男だぜ……」 「いつも私が口をすっぱくして言うてるのに……」

抗議の意味がわからずに困惑する詠春を尻目に、ヤミが落ちた地点を注視する。土煙が上がり、確認出来ないが、

「まあ、【退場】と【概念封印】を叩き込んだし、生きてても脅威にはならないでしょうけど……」

「ワシとしては、生きていればまた殴れて好ましい展開じゃな。概念使えないなら雑魚じゃろうし」

「ゼクト、それ遠まわしに私が雑魚と……！」

「他意は無いぞ」

「まあ、とりあえず2、3発打ち込んでおきましょうか」

アルの声がかかり、>紅き翼<の面々は得意の魔法や技法を土煙の場所へぶち込む。土煙が更に大きくなり、破壊の痕を更に拡大させる。気が済んだとゼクトが手を振ると、突風が起きた。風精との契約により突風を吹かせたのだ。武装解除にも打撃にもならない程度の風だが、土煙を払うには十分だ。

居ないわね。

探查魔法を展開し、生命反応が無い事を確認してやっと一息つく。

長い、長い一日だったわ。

思い返してみれば、一日だけで色々な事があった。

ミサイルと追いかっこをして、エヴァと交戦して、死に掛けて、復活して、幼竜を形成して、起きてナギと……まあ、そんな感じになり、最後の締めにはアリカの演説を聞きながらヤミにトドメだ。

転生前、後の人生を含めて最も濃い一日だった事は間違いない。

帝国の艦隊も後退を始めており、固定砲台に詰める兵士達の歓声も聞こえてきた。間違いなく戦闘が終わった事を実感すると、途端に全身が重くなる。

「疲れた……」

「俺も、今日はムチャクチャ疲れたぜ……」

「二人とも、休みモードに入るのは早いですよ。アリカ姫から呼び出します」

「ええ……」

おのれアリカ。まだ私の前に立ちただかるか。この恨みは何か奢ってもらうまでははせぬぞ。そんな事を思いながら、>紅き翼<の皆と浮遊島へ向かう。

何はともあれ、大きな山場は越えたのだ。もう少し、もう少しだ。

墓守り人の宮殿。

オスティアの最奥部にあり、>完全なる世界<の本拠地でもある遺跡だ。

そこに、低い唸り声が響いた。

唸り声の主は、下半身が既に無く、抉られたような傷跡が全身に及んでいた。

ヤミだ。

未央とナギの打ち込んだ概念により、概念能力は封印されたが、【退場】を概念により命じられた事で戦場からの離脱に辛くも成功していた。両手で床を掴み、這うように移動する。

まさか、概念能力を封じにかかるなんて。

少し考えれば、当然の事だ。概念能力をフルに活用すれば、今の傷とて瞬時に再生する。ナギから受けた傷も概念能力で【高速再生】と己の身に刻む事で完全回復したのだ。しかし、概念能力さえ封じてしまえば、自分は未央と同等の能力を持つだけの魔法使いに過ぎない。確かに達人級の魔法使いではあるが、>紅き翼<のバグキヤラ共を相手にするには力不足だ。

何にしても、回復しなければならぬ。傷は魔法で塞いでいるが、回復が遅ればこのまま消滅してしまう。這いながら、声を張り上げる。

「誰か、誰か居ないのか……！」

宮殿に声が響く。自分の声以外に響くものは何もない。床を殴りつける。

こんな事なら、最初から>完全なる世界<を乗っ取っておけばよかった！

造物主を洗脳して自分がラスボスになれば、もつと気持ちよく出来たに違いない。忌々しい、転生させてやった恩も忘れて思い切りぶん殴りやがって。心の中で悪態をつきながら更に進む。

コツコツと、足音が聞こえた。

見上げると、白髪に藍色のブレザーを着た青年が見えた。

「アーウェルンクス！ いい処にきた！ 早く治療しろ！」

「ヤミ、我らが主様から伝言がある」

「伝言？ いいからまず治療を」

アーウェルンクスはこちらに手をかざす。手の先には魔法陣が展開されていた。

「『貴様の方針は、私と違う。最早之までだ』」

「……は？」

「さようなら、という事さ」

魔法陣が輝き始める。

あれは、まさか>永久石化<の……！

「待て、待て！ 私には利用価値が」

「God be with ye（神が君と共にあらんことを）
いや、君が神だったかい？」

まあいい、と相手は魔法を放った。

瞬間、体が石化し始める。抵抗^{レジスト}する程の魔力も無く、石は一瞬で
体を覆い、口に迫る。待て、と声を作ろうとするもその時点で口が
石に覆われた。嫌だ、と思った瞬間、石化が完了した。

眼前には石像と化したヤミがある。苦悶の表情で固まったそれは、
こちらに慈悲を乞うように手を向けていた。

ゴミだな。

処理しようと手をかざす。砂になるまで砕けば十分だろう。>冥
府の石柱<を発動させるべく、詠唱を開始しようとした瞬間、背後
に気配を感じた。振り返れば、黒衣のローブをはためかせた己の主
>造物主<、>はじまりの魔法使い<が佇んでいた。慌てて膝

をつく。

「主様、ゴミの始末が遅れて申し訳ありません。すぐに」

「片付ける必要はない」

「しかし、主様のお眼が穢れます」

「塵は塵なりの活用法がある」

主の前に魔法陣が展開される。

ディスプレイゲレイト
原子分解魔法。

確かにそれならば塵も残さず分解出来るだろう、しかし、態々使う相手にも思えない。そう考えている間にも、魔法は発動してヤミの体は光の粒子となり、空に舞い散る。その粒子を、主の影が捉えた。舞い散る桜の花びらを丸呑みするように影が起き上がり、一片たりとも逃がさずに飲み込んだ。

それが成された後、主は己の身を見返しながら、

「ふむ……。概念能力か、話に聞いていた程度だが」

【・ 斬れよ】

そう呟き、手近な柱へ向けて手を振られた。青い光が刃のように射出され、石柱をすり抜ける。しかし、数秒経つと石柱が斬れる事は無かった。魔法によって石柱が軽く押されると、石柱は真ん中からズルリと滑り落ちた。切断面は磨かれた硝子のように景色を映している。

「ふむ……。便利なものだが、慣れが必要だな」

ここで主の考えに漸く気づいた。この御方は、ヤミを分解・吸収する事で彼奴の利用価値であった概念能力を得たのか。自分はその

考えに至らないばかりか、危うく概念能力を得る機会を失わせる所だった。

あまりにも浅慮。主の人形であるこの身に在り得ぬ失態。

「申し訳ございませんでした……」

思わず謝罪が出た。処罰されても仕方が無いと、覚悟を持った言葉だったが、

「良い」

一言、許すと主は語り、その身を消した。

アリカの下に行く間、すれ違う兵士達から手荒い歓迎を受けまくった。頭を撫でられるは、叩かれるわ、写真取られるわ、サイン求められるは、後半二つはつい数時間前までテロリストだった相手に求める事じゃないと思う。

アリカの下に到着すると、今度はテオドラ皇女から質問攻めだ。こちらはゴシップまみれの噂の真偽を確認すべく質問のラッシュ。途中から答えるのが馬鹿らしくなり、今度お茶を一緒にするという約束を取り付けて終了となった。

アリカ本人と対面すると、今度はテロリスト解除申請の為、事情聴取だ。内容は口裏あわせのようなものだったが、疲労の濃い中、何度も似たような事を言われるのでこれがまた疲れた。

全て終わる頃には、すっかり日は落ち、夕食の時間も過ぎていた。

今から食べたなら太るわねえ……。

ふらふらと疲れた足取りで案内された宿舎へ入る。水を飲んで空腹をごまかし、寝てしまおう。そう思い布団を剥ぐ。
なんか居る。

「未央、待ってたぜ！」

布団を直した。

おかしい、確かゆっくり休めと言われて1人用の宿舎を案内されたはず。

ナギが寝ていた気がする。

別に一緒に寝る事に異議は無い、しかし数時間前の事もある。ゆっくり出来るだろうか。いやいや待て待て、思考が飛躍しすぎている。疲れから見えた幻覚かもしれない。

もう一度布団を剥いだ。

「どうした未央、疲れたろ？」

布団を直す。

やはり居た。2度見えたという事は幻覚ではないのだろう。

布団を剥いで事情を聞く事にした。

「開いたり締めたり忙しいな未央、折角あっためておいたのに冷えるぜ……？」

「いや、その……なんで居るの？」

「アルに俺はここだって言われたんだけど」

「あの若作りは余計な真似をする……！」

頭痛を感じて頭に手を添えると、もう片方の手で引き寄せられた。

「ひよあ!？」

彼の顔が近い。

「今日は何もしねえって約束するから、とりあえず寝ちまおっせ」
「ほ、ほんとに何もしない？」

「T e s . T e s .」

ナギは軽く答える。笑顔でこちらの頭の下に腕を回し、抱き寄せながら布団をかけなおす。彼の体温と匂いを感じると、

落ち着くわね。

随分馴染んだものだ、と思う。

先ほどまで馬鹿みたいなやり取りをしていたにも係わらず、心は静かだ。全身の疲労も体にのしかかり、眠気が意識を引っ張る。

「ん……じゃ、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

彼の言葉を子守唄にするように、意識は落ちていった。

未央とナギが静かに眠りに入った宿舎の外では、> 紅き翼くの面々が入り口で座っていた。

彼らは背後の入り口を一度見ると、笑みを浮かべて夜空を見上げ

る。

一面の星空が広がっていた。

4年間、追われ続ける彼女を匿い、自分達もまた逃げ続けた。

その苦勞は、和解という形で実ったのだ。

ラカンもそれを聞き、笑みを浮かべて左手に持ったボトルを掲げる。

全員に酒がいきわたり、硝子のグラスを夜空に掲げる。

カチンと、小気味良い音を立てて乾杯がなされた。

乾杯に込められた願いは、二人の子供に向けるものだ。

戦争はまだ続く、しかし、しばしの休憩を彼らに。

第三十七話（後書き）

第二次オステイア攻防戦、これにて完結ッ！！！！
次回からしばらくのんびりとした話が続きます。
宜しければ、今後もお付き合いいただければ幸いです。

第三十八話

心地よくも気だるい眠気に身を任せていると、いつまで寝ていると叱責のような日差しが顔を照らす。閉じた瞼の上から日差しが直撃し、手で光を遮りながら意識を覚醒させる。随分と体が重い、先日の疲労が取れていないのか、はたまたただの眠りすぎか。

疲労、そう、多分疲労よ……わたしわるくない。

心の中で何か言い訳をつくりながら、ゆっくりと上半身を起こす。周りの空気は既に暖かく、日が明けてから随分と時間が経っている事を感じた。傍らに眠るナギは未だ深い眠りにについている。

意外と静かに眠るのよね。

彼がイビキをかいて眠っている姿を見た事はない。少々意外ではあるが、一緒に寝る身にはありがたい事だ。ベッドから抜け出し、布団を直してローブを着込む。昨日の顛末がどう報道されているか気になり、まほネットのニュースサイトを展開する。表示枠には大文字で【停戦なる！】と見出しが載り、各国要人のコメントやアリカの演説全文が記載されている。アリカの演説は概ね受け入れられ、連合・帝国ともに身内の掃除で戦争どころではないのだろう。

「グレート・ブリッジ攻略戦が省略されたのは僥倖だったわね、激戦だったらしいし」

アリカには感謝しなければならぬ、思いながらリンクを辿っていくと、自分達に関する記述が目に入った。興味から読み始めるとテロリストから一転、世界に蔓延る裏組織と戦い続けた英雄扱いだ。

これがプロバカンダというものかと思い、苦笑してしまう。表示枠の右隅にある時計を見れば、既に時刻は昼前を示していた。昼食の用意をしようと歩き出し、外への扉を開く。

予想外の光景が広がっていた。思わず顔面が硬直する。

地獄絵図。

手前には>紅き翼<の4人が倒れており、その先には百人を超え、る兵士がこれまた倒れている。誰もが低いうめき声を上げており、>完全なる世界<の襲撃かと一瞬身構えるが、空気の匂いで原因がわかった。

超酒臭い。

よく見渡してみれば、酒瓶らしきものを持っている者、腹に抱えている者と様々だ。停戦記念パーティーでも開催したのだろうか。一番手近で倒れこんでいた詠春に事情を聞くべく、頬を叩く。ぬうつめき声を作る相手に声をかける。

「ちょっと詠春、これは何事よ。貴方やゼクト、アルまで酔いつぶれるってどういう事？普段そんなに飲まないじゃない」

「いや、色々感無量でな……。>紅き翼<の4人で飲んでいたら、途中から兵士も混じって停戦記念の騒ぎに。流石に洋酒を日本酒で水割りにしたのはやりすぎだった……」

「水で割ってないじゃない、それじゃ酒割りよ。つまり何も割れていないわ……！」

面目ない、と言葉を吐くと詠春はそのままガクリと首を落とす。真っ青な顔色をしており、他の面々も似たような顔色をしている。流石に放置は不味いと思い、アーティファクトで大きめの鉄鍋と柄杓、さらに大量のコップを作る。水精と契約し、水入れに中身を注ぎ込み、概念条文を刻む。

【・ 超苦い二日酔いの水薬】

浮かれて昏過ぎまでダウンしている連中にはいい薬になるだろう。準備が出来た事を確認し、鉄鍋を思い切り杓子で打撃する。金属特有の甲高い音が周囲に響き渡る。二日酔いのゾンビどもがうめき声をあげながら緩慢な動きで起き上がる。本当にゾンビかと思間違うような動きで周りを見渡し、音源であるこちらを皆が見る。

「はいはい、二日酔いの薬を渡すから一列に並んで受け取りなさい」

『グぁーい……』

足を大地に擦りながら整列する様はなかなかシユールだ。しかし、流石に軍隊。整列した後は押し合うこともなく、行儀よく水薬を受け取っていく。誰もが一気飲みで酷い顔を晒し、頭を振って持ち場に帰っていく中、二人組みの兵士が話しかけてきた。

「未央・柳殿、今回は力を貸していただき、感謝します」

「ああ、いいのよ。私も自分の目的あったから」

「ははあ、そうですか？　ところで、お聞きしたいことがあるのですが、よろしいですかね？」

「別に構わないけど、何？」

「アルビレオ・イマ殿から、力を与える際に代価は法外と聞いてまして、どんな要求をされるのか聞いておきたいんですよ」

はて、代価なんて要求したっけ？

心当たりが無く、傍で水薬を少しづつ飲んでいたアルに視線を送る。アルはこちらの視線に気づくと、朗らかな笑みを返してきた。

つまり、

この人達の覚悟を試したのね、捻くれてるんだから……。

さて、それではどうしようと考え。今更「そんなの無し無し」というのも今後の為によくはない。今回はアリカの為、自分の目的の為に参戦したが、彼らが個人で力を貸してほしい場合には対価を要求すると思う、その時にも対価無しだと思われれば面倒だ。

さて、何を要求するか。

金、困っていないし、相手はあまり蓄えがありそうにも見えない。物、何をもらうかさっぱり予想できない。

奴隷になれ！ 冗談にもならない。

なかなか難しいわね。

過去に力を貸した人物は、あちらから条件を提示してきたので楽だった。それも必要ない場合は格好つけて断つたりしたものだが、こちらから条件を提示した事は無かった。顎に手を当てて考え込んでいると、相手は不安そうにこちらを見始めた。とりあえず保留にしようとして手を上げた瞬間、面白い案が浮かんだ。

「そうね、では」

こちらの言葉に反応して、二人組みの兵士が唾を飲む音が聞こえる。

「私とナギが結婚する時に、祝ってちょうだい」

「はい？」

「いい？ 心から祝うのよ？ 心からの祝福を私とナギに与えてほしいわね」

本来、祝福など強制されるものではない。半分冗談のような話で、適当に電報でも打つてもらえればそれで満足だが、相手はそう受け取らなかつたようだ。こちらの言葉を把握すると、二人とも背中を向けて相談を始める。更に表示枠を出して何か相談しているようだ。少し待つと、相手は笑顔でこちらに振り向いた。

「承知致しました！」

「え？」

「我らオステイア軍、この前線基地に詰めております3000人超！ お二人の結婚式に出席させていただき、盛大に盛り上げましょう！」

「な……ちょ、え……マジ！？」

『Tes!』

揃って返事をする、周囲からも同様に返事が聞こえる、先ほどの表示枠は他の兵士に聞いていたのか。まさか真正面から受け取られるとも思わず、どうしたものかと困惑していると背後から抱きつかれた。驚きで振り返ると、ナギが周囲を見渡しながらこちらを抱きかかえている。

「おいおい、出席者すげえ多そうだな！ 招待状出すの大変じゃねえか！ まあお前ら頼むぜ！ 盛り上げてくれよ！」

『おおおおお！！』

「は、話がどんどん進んでるうう……」

ナギは満足そうに周囲へ手を振っている。> 紅き翼くの面々に視線を向けると、皆苦笑しながらも首を縦に振っていた。誰も異議が無いと申すか。

教訓、よくかんがえて提案しよう。

己が引き起こした馬鹿騒ぎを抜け出すのに小一時間を要し、抜ける頃には昼食の時間となっていた。アリカから同席するように連絡を受け、よろよると向かう。

到着すると、開口一番。

「お主、結婚式は随分盛大になりそうじゃの、ククク」

「い、嫌味！ 一日で最初の言葉が嫌味って王族としてどうなの！
もっとイージーな対応を求めろわ！」

「お主に払う敬意など無いと前にも言ったじゃろ、さっさと座るがよい」

不満の表情を浮かべながら着席すると、昼食が運ばれてきた。と
いっても所詮は前線基地、何が出るかと思えばカレーライスだ。好
物なので問題は無い。いただきますと一声かけて食べ始めるが、何
故かアリカがスプーンを持って止まっている。

「どしたの？」

「いや……これはどういう作法で食べるのじゃ？」

「……カレーライスも食べたことないの!？」

「ほう、これはカレーライスというのか……」

特に作法など無い事、ライスの上にかけられたルーを絡めて食べる事を教えると、恐る恐る食べ始めた。一口二口と食べ、感触を掴んだのか笑顔を浮かべて食べ始める。

「これはなかなかいけるのう」

「カレーライスは万国に通じる食べ物よ、つまりカレーは神の食べ物ですネー……」

「うむ、この美味しさは間違いなく神の食べ物じゃな……」

二人で一心不乱にカレーライスを食べ続ける。しかし、アリカの食べ方は流石に王族らしく礼儀正しいものだ。

育ちの差って出るのねえ。

妙なところで実感を得ながら食べ終わる。食後のお茶を飲みながら雑談していると、アリカがふと気づいたように質問をしてくる。

「そういえば、ヤミとエヴァンジュリンはどうなったのじゃ？」

「ん？ ヤミは間違いなく撃退したけど、エヴァはそういえばどうなったのかしら……。連れてきていい？」

「敵だったんじゃない？」

「昨日の敵は今日の友、って言葉が私の故郷にあるのよ。ヤミの撃退にも一役買ってもらったし、どう？」

「まあ、各方面への説得が少々面倒じゃが、今のゴタゴタなら賞金取り下げも通るじゃろう。構わんぞ」

「ありがとう、じゃあちよっとなって来るわ。夕食には戻るから一人分追加よろしく」

大樹の木陰で、ゆっくりと夜を待つ。しかし、夜になったとして

も行動目的も無く寝ているだけになるだろう。ヤミを裏切った手前、>完全なる世界への拠点に戻る気も無く、帝国艦隊から抜け出してオステイア近郊の森林にエヴァは身を隠していた。

森林の木漏れ日が瞼を照らし、眠りを妨げる。なんとも邪魔な日差しだ。吸血鬼の特性上、どうしても昼間は眠くなる。素直に眠れる日もあれば、眠れずに鬱々と時間を潰す日もあるが、今日はどうやら後者のようだ。

転生も無しになったし、どうしたものか。魔法世界の観光でもするか？

連合領よりは帝国領の方が>正義の魔法使いくどもが少ないはずだ、行くならばそちらだろうか、そんな事を考えていると、木漏れ日を遮るものがあつた。

紙飛行機？

額にコツンとあたり、胸に落ちる。手に取ると黒マジックで【エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル行き】と書いてある。こんな珍妙な真似をする知り合いは一人しか居ない。その本人が目の前に降り立った。

「ごきげんよう、エヴァ」

「よう、魔女。どうした？ 先日の続きでもしにきたか？」

「これだからバトル生命体は嫌ねー、お誘いに来たのよ」

「誘い？ 何のだ？」

先日の決着でないとすれば、用件は大体見当がつく。

「うちにこない？ 条件相談で」

やはりそう来たか、まあヤミよりマシだろう。暇だし当面行ってもいいが、少々困らせてみるか。

「転生させる」

「無理！」

「使えない魔女め……。何か手持ちの札を見せてみる、それ如何では考えてやらんでもない」

「そうね、私は貴方に【成長】を与えられるわよ、望むなら【寿命】もね」

なんだと？

思わぬ好待遇に体が動く。

「先渡しなら考えてやるう」

「言うと思った」

魔女が右手を振ると、青い石が宙を舞う。それを取ると、体全体に一瞬青い光が走った。しかし、特に体に変化は無い。

「おい、成長せんぞ」

「そりゃそうでしょ、10歳から止まってる成長を動かしたただけなんだし、年々成長するわよ」

「ふむ……。そういう事が、まあよかるう」

楽しみは後に取っておく事も出来る、やはり体が成長するのは喜ばしい事だ。合法ロリ扱いされる事もいずれ無くなるだろう。

相手を見ると、こちらの表情を伺っている。自信の影に少々不安が見える表情をしているところを見ると、やはり断られる事が不安なのだろう。不敵そうに見えて、なかなか愛い奴だ。

「いいだろう、当分同行してやろう。未央」
「ええ！ 宜しくエヴァ！」

こちらの返事を聞くと、満面の笑顔を浮かべた。笑った顔は歳相応の幼さがあり、なかなか可愛らしい。

おや、こいつ意外と可愛いぞ。着飾らせるのも面白そうだな、
ククク。

当面、退屈しないで済みそうだ。

第三十九話

古都オステイアの王宮にある一室。

否、一室と表現するのは不資格だろう。そこは王が民に姿を見せる場所。

謁見の間。

今、ここに居る人物は二人、オステイアの王女たるアリカ、そして現在の王である彼女の父王の二人だ。二人は沈黙のまま、護衛の近衛兵すら立ち退かせ、時間を消費していた。

王宮の外からは、賑やかな声が聞こえてくる。

事実上の和平、>完全なる世界<との戦いが未だ控えているが、人々は一時の平穏を楽しんでいた。それを聞いたアリカは瞑目し、深呼吸をする。

そして、目を見開いて声をかける。

「父君」

呼びかけるが、父王は沈黙を守る。アリカはもう一度呼びかける。

「父君」

「聞いておる」

重い石が動くような、力の限りを尽くして漸く口から搾り出したような、そんな声で父王は応答した。

「アリカよ」

「はい」

今度は父王からアリカに声がかけられた。

「我とかの組織の關係を知っておるのだな」

「はい、存じております」

アリカの回答に、父王は大きく息を吐いた。憂いが籠ったそれは、恐らくため息なのだろう。ゆっくりと父王の視線が上がる。会合を始めてから、瞑目してアリカを見る事すらなかった父王は、ここで初めてアリカを見る。

アリカの目には意思が宿っていた。青い瞳の奥に力を携えて、父王と対峙している。

「彼らの目的も知っているか」

「存じております」

> 完全なる世界への目的、魔法世界の再構成。いずれ来る消滅を回避する為の次善策。父王の問いに、アリカは知っていると即答した。

「ならば、何故彼らの邪魔をする」

「……」

次の問いに、アリカは即答をしなかった。しかし、回答を持たないわけではない。彼女は父王に先を促している。

貴方こそ、何故彼らに協力するのだ、と。

父王は、それに答えた。

「人の生も」

酷く疲れたような声で。

「この世界も」

彼も悩んだのだろう、己の民を救おうと。

「全ては儚い、泡沫の夢に過ぎぬ」

しかし、答えは出ずに、思い至ったのだろう。

これは、悪い夢だと。

「ならば、彼らに協力し、次は良い夢とする」

その答えを聞いたアリカは、一歩、父王へ近づいた。

「父君、それは逃避です」

更に近づきながら、父王に答えを返していく。

「父君は、何故お一人で抱え込んでしまったのですか」

最早、二人は手を伸ばせば届く距離にある。

「いえ、私も先日までは一人で抱え込んだでしょう」

ですが、

「今は、荷物を預けられる友がおります。そやつは、私と対等の友人で、酷く我侷な奴です」

厳しい表情を緩め、笑いながら、

「失う事は嫌だと、精一杯に足掻く奴です。誰も彼も救おうと、次善策など認めぬと、力を尽くしております」

「それは、無駄な行いだ」

父王は断じる。

「違います」

しかし、アリカは重ねるように返した。

「確かに、私だけでも、そやつだけでも、無駄な行為かもしれませんが。しかし、共に悩む友が、仲間がおります」

アリカは父王に叩き付けるように、言葉を放つ。

「確かに、今の世界は泡沫の夢かもしれないませぬ。ならば、私は友と仲間と共にその夢から起きて行きます。夢の外は辛いと止める者が居るならば、余計なお世話と殴ってでも通りましょう」

アリカは父王へ手を差し出す。

「お選びください、父君。泡沫の夢に沈んだまま消えるか。痛みを得る現実にかき起さるか」

その手を、父王は眺める。そして、一度手で目を拭った。ふと、雰囲気是和らいた。

「……強い娘に育ったな、アリカよ。我が娘とは思えぬ」
「過酷な幼少時代でした故」

ふん、と憤慨したような息を吐くアリカ。

父王は、立ち上がった。その顔には笑みを浮かべている。

「良かろう。泡沫の夢と切って捨てるより、足掻いてみるのが我らの務めであるう」

「はい。いえ、ここは友に倣い、T e s . と」

「うむ。 T e s . 」

アリカの手を、父王は取った。

父王との謁見が終わり、アリカは自室に向かう。その表情は笑顔だ。第二次オステイア攻防戦の開始前は不機嫌に歩いた廊下を、今は上機嫌に歩いている。

良い方向に向かっている。

父王も協力を約束してくれた。連合・帝国との折衝も今後は楽になるだろう。今日はさっさと事務仕事を終わらせて寝てしまおうしよう。きっと良い夢が見れる。そう思いながら上機嫌に自室の扉を開けた。

「それでな、百年くらいしたら正義の魔法使いくを自称する奴らが狙ってきて酷い事になってなあ」

「あいつらウザいわねえ、私もテロリストだって散々追われたわ」

「お主等、人の部屋で何ぐだっている」

未央とエヴァだ。未央は前科犯だが、エヴァは写真で見ただけの初対面にも係わらず、相手は自分の椅子で非常にリラックスしている。こちらの疑問に、何故、と疑問の表情をする未央。

「いや、エヴァの紹介と、ついでにお手伝いとか。というわけで、こちらがエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。齡六百歳を超える合法ロリよ」

「合法ロリはやめろというのに、貴様らはその単語大好きだな！」
「で、こちらがアリカ・アナルキア・エンテオフュシア。オスティアの苦勞人よ」

「その苦勞の一割くらいはお主のせいじゃ」

二人から抗議を受け、未央はやれやれと肩をすくめる。

「我俣ねえ、二人とも。長い名前してんだから気も長くしなさいよ」
「ほう、名前が長ければ気が長いのか。ならば妾は十六文字でお主は五文字、妾はお主より三倍人間が出来ておるな！」

「私は二十二文字か、貴様の四倍だな。まあこんなものだろう。ククク」

「そういう反撃を受けるとは、想定外だったわ……！ 名前の短さが恨めしい……」

「さて、挨拶はこれ位にして、妾は少々片付ける仕事があるので、程ほどにせよ」

「ああ、そうそう。それで手伝える事あるわよ。エヴァ、あれ出して、あれ」

「うむ、よかるう」

エヴァが己の影に手をかざすと、そこから大きな水晶玉が出現した。浮き上がったそれを手に取り、空いた手を振ると床に魔法陣が展開、水晶玉を固定する台が共に現れた。

「なんじゃ、それは」

「ダイオラマ魔法球といってな、現実世界の一時間がこの中では二十四時間になる。書類仕事にはうってつけだろう？ 貸してやるぞ」

なんと、一時間が二十四時間になるとは……！

「十時間かかっても十四時間フリーになるとは、夢のようなアイテムじゃな！」

「ま、その分利用しすぎると老ける」

「オチがあつたのじゃな……」

「多用しなきゃ平気でしょ、手伝うからさっさと片付けちゃいましよ」

うむ、と返答して書類を持ち、水晶玉へ向かう。

水晶球の中は、予想外の景色が広がっていた。

整備された趣のある城、周囲には青々とした森林が広がり、空からは燦々と太陽が輝いている。頬を撫でる風は爽やかで、とても吸血鬼の持ち物とは思えない。

「これはいわゆるバカンス用という奴ではないのか……？」

「私が昔持っていた居城だよ、実務にも耐えうるぞ」

先導するエヴァに未央と二人でついていく。時折侍女姿の人形がおり、すれ違う度に一礼していく。エヴァの作った人形なのだろうが、礼儀が行き届いているのは気持ちいい事だ。数分歩くと、執務室らしき部屋へついた。大きめの机が中央に据えられており、両脇に補佐役のものと思われる小さな机が設置されている。

「さて、ではさつさと済ませる。私は適当に本でも読んでるからな」
「本あるの!? 私も読みたい!」
「お主は妾の手伝いじゃ」

部屋を出ようとする未央の襟を掴み止める。ぐえ、とカエルのような声が響き、恨めしげな表情で振り向いた。それを笑みで迎え撃ち、執務机を顎で指す。肩を落とす、足を引きずりながら歩くそれを見ると少々申し訳ない気持ちになるが、こちらの仕事が優先だ。

「まあ、さつさと済ませるぞ。お主は誤字脱字チェックをせよ。妾が判を押す」
「了解」

二人で書類に向かう。判を押す音と、紙を捲る音。時折辞書を開く音が響く中、ふと疑問に思った事を口に出す。

「そういえば、お主。>紅き翼くの面々はどうした? ナギなどお主と離れるタイプには見えなかったが」

「んー? 停戦記念パーティーとかで、酒場で大騒ぎしてるわよ。男衆の集まりだから、むしろ今回は別行動にしようってナギが言い出した位よ」

「ふむ、そうか」

停戦記念、大変結構な事だ。

停戦記念で開放された酒場の一つ、他より一層笑い声の大きい店

があつた。

多くは兵士達で、彼らが数人を取り囲むように騒いでいる。取り囲まれているのは、紅き翼<の面々だ。

ジャック・ラカンは周りと飲み比べに興じている。彼の足元には三十を超える酒瓶と、十を超える人間が倒れていた。誰も彼も口から色々出しており、酔い潰された事が想像出来る。

ゼクトはひたすらにテーブルの料理を片付けていた。肉、野菜、肉、野菜、肉肉肉と途中から肉を書き込むだけの機械と化していた。まるで人間火力発電所である。

その他の3人、詠春、アル、ナギは手に持ったグラスは時折口に含むだけで、何か議論に花を咲かせていた。ナギの音が響く。

「やっぱりアレだ！　こう、普段強気な相手に迫るとオロオロしながらもOK出してくれるのがいいんだろ！」

「その意見に異議は無いが、普段は清楚な方が実は積極的、という点もポイントが高いぞ」

「フッフ、二人とも自分の伴侶プッシュですね」

好みの女性について語っていたようだ。アルの言う通り、二人とも自分の伴侶をプッシュしているだけにしか聞こえない。互いに譲らず、話題に加わる人数は増えていく。内容は大体こんな感じだ。

未央殿一押しだろ、クール系かと思えばわりとすぐテンパるところが可愛い。あと貧乳こそジャステイス！

アリカ様こそ至高なのがわからない非国民どもが！　巨乳こそジャステイスだろ！

ちらつと見えたただだが、テオドラ皇女もなかなか。きっと将来性高いぜ……！

話によれば、闇の福音<、エヴァンジュリンも、紅き翼<入りしたとか。ついでに踏んでほしい。

近衛殿のよさがわからない愚図どもは引っ込んでいろ！

最後のブッシュは詠春だけだが、アイドル議論は白熱していく。途中からはただの胸部談義になっていき、最終的には酔っ払ったナギが「未央は俺んだろぅが！」とブチ切れで場を一掃した。しかし、この日を境にまほネット上では各々のファンクラブが設立され、無駄に美化されていく事となる。

実に平和な、そしてアホな夜はこうして更けていくのだった。

第四十話（前書き）

話数を進めるのが憚られる程のストーリーー進捗無し……！
ほのぼの展開はまだまだ続きます。

第四十話

ナギは眠りから覚めると同時に、酷い頭痛に襲われた。呻き声を上げながら体に意識を送ると、いまいち反応も鈍い。

こりゃ酷い二日酔いだぜ。

詠春と伴侶自慢の後、ラカンに張り合っつて杯を一气飲みし始めた所までは覚えているが、そこから先の記憶が無い。やはりストツパである未央が居ないとノリでどこまでも飲んでしまう。自重しなければならぬ。そこまで思って、いつも同じ失敗をして同じ結論に至る事を思い出した。

薄々感じていたが、やはり俺はアホか……？

右手で目頭を押さえようとして、右手が動かない。疑問に思いながら逆、左手を動かそうとするもこちらも動かない。正確には、力を入れても何かに抑えられたように動かない。寝ている間に枕代わりにして血でも止めていたのか、それにしても両手はおかしいのではないかと思いつながら、まず右手を見る。

黒い髪。

見慣れた顔。

未央が右手を枕にして眠っている。しかも半裸だ。

なん、だと……？

確か、姫さんの所に泊まるという事で外出していたはずだ。眠る時も間違はなく一人だったはずだが、いつの間にか未央が布団にもぐりこみ、自分の右手を枕にしている。いや、今はそんな事は問題

ではない。いつも自分より先に起きている未央が、今は目の前で眠っている。つまりは、

新体験だな……！

鯉が滝を登るが如くテンションが急上昇していく事を感じる。しかし、冷静に事態に当たらなければならない。テンション上げて動きすぎて起こしてしまっただけではご破算だ。慎重に、しかし心は熱くしながら思考を巡らせる。

選択肢は幾つかある。

- 1． 眺める。
- 2． 撫でる。
- 3． 揉む。
- 4． 抱きつく。

どれも捨てがたい。とりあえずイージーな『眺める』から実行していこう。

寝付きのいい彼女は自分より先に眠りに入るが、自分もそれを追うように寝入ってしまう。しかし、今回は起床直後で意識も完全に覚醒している。

眼に焼き付けるようにじつくりと眺める。眠っている彼女は可愛いものだ、本人は平凡な容姿だと言うが、間違いなく整っている部類だろう。どちらにせよ自分にはドストライクゾーンだ。

続いてく撫でるくタスクを実行しようとして、左手がつかかかった。そういえば左手も動かない事を忘れていた。

見る。

金色の髪。

見慣れぬ顔。

エヴァが左手を枕として寝ている。しかもこちら半裸だ。

なん、だと……？

天を突く勢いで上がっていたテンションが一瞬で急降下していく。地獄に突き進む勢いで下がっていくテンションは、背中に冷や汗を作らせた。

落ち着け。

自分は無実だ。

いや、しかしこの状況はまさに両手に華……！

人形のように整った顔立ちをしており、戦場で対峙した時に感じた刺々しさは寝顔からは感じられない。こちらの間違ひなく整った顔立ちだろう。

少々名残惜しくはあるが、この状況はピンチと言わざるをえない。即座に脱出しなければ命に関わる。いや本当に。

未央の本気嫉妬はやばい。

あまりにも精神的ダメージが大きいので思い出したくない為、説明は省略する。まずはこの場を離脱しなければならぬ。

まずはそれぞれの腕を引き抜けるか試してみる。しかし、右手を抜こうとすれば左手が大きく動き、左手を抜こうとすれば右手が大きく動く。引き抜く事は出来そうだが、どちらか起こしてしまう事は間違いない。つまりこの案は駄目だ。

クツ、何故神は俺にこんな試練を、神ってヤミじゃねえか嫌がらせか！？

次の作戦を考える間にも、事態は進展していく。未央がこちらの胸を引き寄せ、抱き抱える。普段であればテンションが上がる事だ

が、今の状態では素直に喜べない。神と運命を呪いながら考えを巡らせていると、部屋の入り口から音が響いた。

「ナギ、そろそろ朝で……おや」

アルだ。起きてこない自分を起こしにきたようだが、こちらの状況をみて声を止めた。必死に助けを求めろ口パクを実行。それを見たアルは、にっこりと天使のような笑顔を浮かべ、懐に手を入れると、

カシヤリ。

小型カメラを取り出してこちらを撮影した。

アルウウウウ！！

笑顔をデフォルトの状態にしたまま、更にアルはシャッターを切る。五枚ほど撮り終えたところで、一息ついたアルはそのままこちらを見て、親指を立てた。動く口を見ると、こう言っているようだ。

『すえせん、というやつですね』

ちげえええええ！！ それはなんかちげええええ！！

必死に首を振って否定、しかしアルは変わらず笑顔だ。カメラを懐にしまいこむと、そのまま後退し、音もなくドアを閉めていく。状況は悪化の一途を辿る。どうしてこうなったのか、現実逃避気味に考える。

そして、左右からくぐもった声が漏れ始める。右を見ると、ゆっくりと未央の臉が開いた。駄目元で普通の挨拶を送る。

「お、おはよう、未央」

「んう……おはよう」

お、いけそうじゃね？

「おはよう、未央」

こちらの胸に顎を寄せ、エヴァが未央に挨拶を送った。

思わず、嗚呼と心の中で嘆いた。未央が目を見開いてエヴァを見て、こちらを見た。

儂い希望だったぜ。

一連のやり取りから小一時間後、>紅き翼くの一は宿屋の食堂で食事を取っていた。大きな長方形のテーブルを一つ占用し、各々和やかに朝食を取っている。しかし、少々異なる雰囲気を漂わせる一角があった。

赤く目を腫らした未央と、それを宥めるナギ。そして二人を見ながら笑うエヴァだ。

「捨てられたかと思った……」

「俺はいつでも未央一筋だと言っててるじゃねえか」

「お前らは本当に愉快だなあ」

鬱々と手元のコーンポタージュをかき混ぜる未央を、ナギが肩に手をかけて必死で慰めている。それを見てエヴァはクツクツと笑っていた。

同じ机で食事を取る他の面々はラカンを除き、慣れた様子で食事を進めていた。

「なあ、あれっていつもの事なのか？ 随分雰囲気変わるんだな」「未央はあれで繊細というか、ナギ絡みはすぐネガティブになるからな」

「今更捨てるわけないじゃろう……常識的に考えて」

「乙女心は複雑、という奴なのでしよう。未央は未だにアリカ姫からナギを取ったと思っっていますからね。不安なのでしよう」

「あと1時間もすればいつも通りイチャつきはじめるから、気にしなくてもいいぞ。ジャック」

「お前ら、どこ切っても変わってんなあ」

しかし、と詠春は話題を深堀りしようとエヴァに視線を向ける。

「エヴァンジュリン、ナギは馬鹿だから君の趣味ではないんじゃないか？」

「エヴァで良い。なに、将来性はあるそうだからな。あとからかうと未央が面白い」

「いい趣味とは言えんな……」

嘆息する詠春、一方、アルは首を縦に振ってエヴァを肯定した。

「ええ、確かにからかうと面白いですね」

ですが、と一度区切る。

「いかに貴方が魅力的であろうと、ナギは振り向きませんので。傷つかないようにした方が良いでしょうよ、エヴァ」

その言葉を受け、エヴァのこめかみがピクリと動いた。

「なんだ？ 挑発か？」

「いえいえ、事実ですので」

視線で射殺すような目をするエヴァと、それを微笑みで受け流すアル。また一つ胃痛の種が増え、嘆息する詠春の肩にゼクトが優しく手を置いた。

「詠春、お主が>紅き翼<頼みの綱じゃ。全力でつつこんで行くんじゃぞ」

「嫌な頼られ方をしている……！」

「いやほんと、見てるだけで飽きねえわ、お前ら」

周囲にギャラリーを作りながら、>紅き翼<の面々は朝の食事を騒がしく済ませていく。未央とナギ、エヴァとアル、二組が騒ぎ、他の三人が眺めつつフォーローに回るパターンが確立された朝だった。

第四十一話

> 紅き翼く的面々は、エヴァの別荘　ダイオラマ魔法球の中に集まっていた。魔法球の中でもリゾート地のように整備されている一角、砂浜と海に囲まれた東屋で、ホワイトボードを囲んでいる。ホワイトボードの横には、未央が立ち、何かを書き込んでいる。

【ナギの概念能力覚醒について】
文字を書き終わると、背後を振り返って皆に問いかける。

「さて、ではちょっと遅くなったけど、この件について考えていきましょうか。皆が概念能力に覚醒すれば戦力アップするし、心当たり、ある人いる？」

挙手を求める問いかけに、ナギとアルが挙手した。

「愛の力だろ！」

「仮契約の結果かと」

「うん、なんかもう大体予想通りだわ」

肩をすくめる未央だが、二人の意見に意外な賛同者が現れた。エヴァだ。彼女は人形に用意させたトロピカルジュースをストローで吸い上げながら、

「仮契約は仮とはいえ、個人の魂に経路を作るからな。そこに特別な感情が混じれば繋がりには強固になる。未央の概念能力が魂にくっついてるものだとしたら、仮契約がキツカケになりうるだろうさ」

なるほど、と一同は首肯する。

「同じ条件を整えれば再現する可能性はある、と」
「可能性はどれ程か知らんけどな。しかし、それ以前に不満そうな奴がそこにいるぞ」

エヴァの指差す方向には、ナギがいた。彼は慚然とした表情をしており、

「彼氏持ちの女が他の男と仮契約するって、どうなんだよ」

「元々仮契約はそのような意味ではないのですが……」

「パートナーだろ？ あんまり数作るもんじゃねえと思うぜ」

ラカンとアルの二人と契約してるお前が言うな、と未央とエヴァは思ったが口に出しはしなかった。単純な戦力強化の為に仮契約をかわしているが、ナギの桁外れの魔力量があつての事で、元々一般的なものではない。

しかし、一方でナギの主張自体は一般的なものだ。本来の用途はともあれ、昨今では仮契約は魔法使い同士の連れ添いの印でもある恋人以外のパートナーを作る事は不和を招く事になりかねない。

ならばどうしたものか、と皆が悩み始める中、意外な人物から意外な提案があがった。

ゼクトだ。彼は手元の炭酸飲料を飲みながら、軽い調子で言い放つ。

「同性なら良いじゃろ、未央とエヴァが仮契約すればよい」

『はあ！？』

ゼクトの提案に、指名されたエヴァと未央が奇声をあげる。手に持っていた飲み物をぶちまけながら立ち上がり、お互いを指差しながら、

『これと!』

次に自分を指差して、

『私が!?!』

最後にお互いに向かい合い、

『真似するな!』

最後の一言までハッキリと重ねあった。他の面々はそれを見て、拍手しながら、

「息ピツタリじゃないですか、うってつけですね」

「波長もあつてるようじゃいな」

「まあ、同性なら問題なかるう」

「ところで飲み物お代わりくれよ」

「未央は俺んだから、そこは言っとくぞエヴァ」

異議無し、と二人に返した。では早速、とアルが魔法陣を描き始める。二人が苦い表情をしている間にも準備が済む、しかし、

「ちよつと、アル。魔法陣書き直しなさいよ。それキス契約の奴じゃない」

「おっと、失礼しました。つい」

つい、まで言った所で真横から打撃を受けて、アルが吹き飛んだ。空気を破裂させるような音と共に吹き飛び、海の上を跳ねながら数百mほど遠くで水柱を立てた。

殴ったのはエヴァだ。こめかみを震えさせながら、打撃した手は

摩擦で煙を上げている。

「エヴァ……気持ちはわかるけど、マジ殴りはちょっと……!!」
「イラつとしたので殴った、反省をする気は無い!」

ひい、と慄く数人を尻目に、未央は気持ちはわかると首肯しながら魔法陣を描き直す。お互いの血を舐める事で契約を交わす形式に変更し、仕上げを書く段階でふと気づいた。

「で、エヴァ。どっちを従者にするの?」

「ん? 私が主に決まっているだろう」

「だと思っただわ……」

主従関係まで描き終わり、立ち上がると丁度アルが戻ってくる。口から涎の代わりに血を流しながら、殴られた頬を押さえて着席する。

「いやあ、久しぶりに本気打撃を食らいましたよ。いじりすぎましたかね」

「エヴァはまだ慣れてないんだから、難易度低めにしなさいよ」

「とうか私は貴様が気に入らんど、アルビレオ・イマ」
「嫌われたものですねぇ」

残念です、と肩をすくめるアル。しかし、口元は笑っておりシヨックを受けた様子は無い。

「まあ、とりあえず仮契約してみましようか、エヴァ」
「いいだろう」

言って、二人はお互いの指の腹を噛む。薄く血が沸き、指の腹に

赤い玉を作った。契約補助の為にアルが歩み寄り、手を翳すと足元の魔法陣が光を放ち始める。

二人はお互いの口元に指を運ぶ。

未央はエヴァの指を舐め、血を口に運ぶ。

一方、エヴァは指を咥える事で血を口に運んだ。

「ひゃ」

予想外の行為に驚く未央だが、エヴァは気にしない。お互いが血を交換した事を確認して、アルが呪文を唱えた。

「仮契約」

言葉と共に、魔法陣が一際大きな光を放った。契約成立と共にその光も収まるが、

「ちょ、ちょっとエヴァ。指、指離して」

「ふぁ？　ふう、やはり美味しい。もうちょっと吸わせろ」

「嫌よ、なんか変な気分になるもの」

「ククク、エロ女め」

「うっさい！　で、概念能力使えそうなの、エヴァ」

問われて、ふむ、と声を作りながらエヴァは自らの状態を確認する。手を握り、力を抜き、体を見ながらくるりとステップを踏む。しかし、普段と異なる様子は見えない。

「特に何も感じないな。やはり仮契約だけでは駄目なのだろう」

「うーん、やっぱりそう簡単には行かないわよね……」

「あとお前のカード出たが、アーティファクトは無しだな」

「ありゃ、そう簡単にアイテム出ないのね……」

ほれ、と差し出されたカードを見れば、絵柄はナギとの仮契約カードと全く同じだ。違う点といえば、カラーリングが金色ではなく黒となっている。しかし、アーティファクト無しとはいえ、ナギとエヴァからの魔力供給を受けられるのは大きなパワーアップだ。当初の目的であった概念能力の伝播は確認出来なかったが、無駄ではなかったと未央は思った。

未央とエヴァの仮契約が終わり、話題はまた元に戻る。どうすれば概念能力に覚醒するか、意見を出し合うが、

「ナギが覚醒したタイミングを再現してみてもどうだ？」

「私が腹ぶち抜かれたタイミング？ あれ超痛いわよ……」

「普通死ぬからの。流石に危険すぎるじやろう」

「では、パートナー同士の絆を強調してみましようか」

「どういう意味だ？」

「つまり……私とジャック、二人がナギに迫るのです」

飲み物を噴出す音が響いた。提案したアル以外の全員がその場で飲み物を噴出し、咳き込む。ナギに至っては混乱で拳動不審になっており、ラカンも流石にウンザリとした表情を浮かべて抗議する。

「お、俺はノーマルだぞ!？」

「俺も男に迫る趣味はねえよ……」

二人の抗議に、アルは笑顔を持って、いえいえと手を振り、否定

する。

「誰も愛を囁けとは言っていないませんよ。どう思っているか言葉にして確認してみましよう、というだけで」

「酷い羞恥プレイだな……」

「お前はそれでいいのかよ、アル。ちなみに俺は嫌だぞ！」
「つれないですねえ」

怪しげなりアクションをするアルを見て、一同は離れて円陣を組む。

「前々から怪しいと思っていたが、アルは見境が無さ過ぎる」

「面白ければOK、と思ってるフシがあるわよねえ……」

「いや、私も今回の案は少々面白いと思うぞ。私に実害が無いからな」

「お、お前ら！ 人事だからと傍観しやがって！ ジャックも言うてやれよ！」

「俺も今回ばかりはナギに賛同だけ。無しだ、無し」

「しかし、それでは何時まで経っても能力解明が出来んぞ。ここは一つ皆の為と思ひ、尊い犠牲になるのじゃ」

「お師匠までそんな事を……！」

「大丈夫よナギ、私信じてるわ！」

「未央まで……！ 俺らの味方がいねえぞ、ジャック！」

「よく考えたらよ、アルとナギだけでやりやいいじゃねえか、俺はまだ付き合い浅いからな」

「き、切り捨てやがった！」

「では、ナギとアルが頑張るといふ事にしよう」

「詠春！ お前なんかおかしとおもわねえの！？ 止めるよ！」

「我俣を言うな、ナギ。これも戦いに勝つ為だ。では解散」

円陣とむくいが終わると、ナギがふらふらとおぼつかない足取りでアルに向かう。背後では皆が応援しており、彼の精神的な味方は居なかった。裁判官に慈悲を乞うような目でアルを見上げるナギ。天使のような微笑で視線を返すアル。両者の雰囲気は致命的なまでにずれていた。

「さて、ではナギからお願いします」

「俺先行かよ！ 言いたしっぺの法則でアル先行にしようぜ！」
「ふむ、いいでしょう」

ナギが、周りを囲む面々が唾を飲む音が聞こえる。

ゴクリ。

アルはゆっくりと手をあげ、ナギの肩に手を乗せる。そして穏やかな笑みを浮かべ、言葉を作った。

「私は、こう見えて結構な年月を生きています。家族という物を失って随分な時間を過しましたが……ナギ、貴方と未央、>紅き翼<の皆は家族のように思っていますよ。出来れば戦い等やめて、平穏に暮らしてほしい、とも」

ですが、と区切り、表情を引き締める。

「二人とも、それでは嫌だと言うのでしょうか。ならば、私は貴方達の力になりましょう。命を賭して盾となる事も厭いません。ですから、一つだけお願いがあります」

それは、と顔を笑顔に戻す。

「いつか、貴方達の子を見せてください。平和な時を過ごす貴方達の子を……こんな所ですね」

肩に置いた手を、ナギの頭に移して撫でる。普段ならば振り払うであろうナギは、その手を、アルをじっと見ている。

「ま、真面目に言うのかよ、アル。驚いちゃったぜ……」

「ナギ、私は本心を言ったのですが、からかわれるのは余り良い気はしませんね」

「わ、わりい……」

不満そうに異議を唱えるアルに、ナギは謝罪する。周囲の面々も予想以上に真面目な告白に困惑し、反応に困っていた。その間にも、二人の間で話題は進む。

「さて、ではナギ。お願いします」

「お、おう」

困惑しながらも、ナギは姿勢を正してアルを見る。しかし、照れがあるのか、中々話し始めない。

「あー……その、あれだって……」

そんなナギを、アルは笑顔で見ている。

待っている。

ナギが自分から話し出す言葉を、アルは待っていた。普段は聞き出そうと言葉を挟む彼が、今はただ待っていた。それを察し、ナギは咳払いをして、話し始めた。

「正直、最初は胡散臭い奴だと思ってたぜ？ 未央をみっちゃん呼ばわりするわ、上から目線だわ、いいとこねえ奴、と思ってた。でもよ、未央が指名手配されて、シヨック受けてた俺を最初に叱咤し

てくれたのは、アルだった」

四年前、懐かしいと皆が思い、目を閉じて思い出していた。ラカ
ンとエヴァは当時を知らぬ為、少々不満そうに話を聞いていた。

「あの時、アルに言われて飛び出さなかったら、多分未央には追いつけなかった。それから、色々考えてくれて、感謝してる。多分、未央もそう思ってる」

ナギが視線を送ると、未央は頷いた。

「親父とはなんか違うけど、俺も、アルや皆の事は家族みたいなもんだと思ってる。だから、約束するぜ。いつか、俺と未央の子供を見せびらかしてやるよ」

「ええ、お願いします」

「……や、やつぱら恥ずかしいなこれ!? それでアル! なんか使えそうな気はするか!?!」

「ふむ……。残念ながら、特に何も」

「折角恥ずかしい思いしたってのに……!」

「いえいえ、無駄ではありませんでしたよ。益々貴方達を守ろうという気持ちが高まりましたよ、フッフ」

恥ずかしさで悶えるナギの肩に、別の手が置かれた。

詠春とゼクトだ。

「感動的じゃったぞ」

「美しい語り合いだった」

それでな?

『私達の事はどう思っている？』

「と、飛び火しやがった！　だ、誰か助けてくれ！」

助けを求めてナギが視線を送ると、

「アル、今後も宜しくね」

「フフ、お任せください、未央」

「お前ら、仲いいなあおい」

「麗しい事だ」

「あんた達二人もそのうちこうなるわよ、ククク！」

助ける気無しかよ！？

肩に乗せられた手に力がこもり、さあ、と後ろから聞こえる声が響いた。

第四十二話

ダイオラマ魔法球の中で、金属を打ち合わせる甲高い音が広がっていた。

水面を蹴って空中へ躍り出る人影が二つ、交差と同時に音と衝撃が広がっていく。水面は激しく波立ち、音は魔法球の端まで届くばかりの大音響だ。激突による双方の被害は無く、水面に着地して再び構えを取る。

細身の体躯が前に出た。細身の太刀を低く構え、水面を爆発させながら突撃する。一蹴りで速度が乗った体は、水面を滑るように加速していく。

迎え撃つは二mを超える巨体とそれに相応しい無骨な剣。

水面を飛ぶように向かってくる人影に対して、取った対応は、巨大な剣を水面に突き出す行為だ。

剣にかき乱されるように、水面が爆発して水煙が立ち上る。立ち上った水煙は周囲の視界を塞ぎながら雨を降らせる。

視界が遮られた。

しかし、水煙の中で激突が果たされる。鉄をぶつけ合う音が聞こえ、水煙が切られたように線を作る。

詠春とラカンの激突を、>紅き翼くの面々が遠くから観戦していた。全面に魔法障壁を張りながら、飲み物を飲んでいる彼らの姿はまるでスポーツを観戦するようだ。そして、その印象はおおむね正しい。

「折角観戦してんのに見えねえじゃねえか」

「見栄えのする戦闘では実力は計れんだろう」

「そりゃそうだけだよ、お、出てきた」

彼らの視線の先で、ラカンがバックステップで水煙から脱出した。その反対から詠春も姿を現し、太刀から次々と雷光を放つ。その体軀とは正反対に、ラカンは華麗に水面をステップする事でその雷光をかわしていく。

「ジャックは意外と器用じゃのう」

「実は考えて戦う派らしいわよ、ナギも少しは見習いなさい」

「真っ直ぐいつてぶつとばす、右ストレートでぶつとばすぜ」

「アホとしか言いようがないな」

「それで勝てるのですから、それぞれのスタイルというものでしょう」

「まあそうだが……しかし、今回の催しのタイトルはどうにかならんのか」

背後を振り返るエヴァ。彼らの背後にあるホワイトボードには、こう書かれていた。

【もうすぐ決戦だし最強決めておこうぜトーナメント（ポロリもあるよ）】

「センスの欠片どころか原子も感じられん」

「シンプルでいいじゃねえか」

括弧内が問題だ、と抗議するエヴァに、それこそが重要と反論するナギ。それを横目で見る未央は、新たな客人を見た。

ガトウだ。

その背後に小さな人影が三つ。一人はタカミチだ。タカミチに並ぶように歩くのは金髪の利発そうな少年、クルト・ゲイデル。原作でも目立っていたので、よく覚えている。最後尾を歩くのが、未だ人形のように表情が硬いアスナ。先日の第二次オスティア攻防戦以

来、>完全なる世界<に拉致される危険があった為にガトウが保護していた。

先頭を歩くガトウが、手を上げて、

「よう、なにやら騒がしい催しをしてるようだな」

「決戦前に皆の実力チェックをね。ガトウは子供達連れてどうしたの？」

「タカミチとクルトが君らに会いたい、とせがむんでね。お嬢ちゃんも折角だから連れてきた」

なるほど、と子供三人を見る。タカミチはこちらに一礼すると、ナギの元に駆け寄っていった。アスナは相変わらず表情を変えず、クルトの袖を掴んで動かない。最後の一人、クルトに視線を向けると、

なんか、睨んでない。この子。

眉間に皺を寄せてこちらを見ている。見られているのは間違いなく自分だ。初対面のはずだが、彼に何かしただろうか、そう思っていると、相手から声がかけられた。

「はじめまして、ミオ・ヤナギ。僕はクルト・ゲードルと申します。以後宜しく」

「ええ、宜しく……。ところで、私貴方に何かした？」

「ご質問の意味がわかりません。初対面だと思いますが？」

「そ、そうね……」

間違いなく初対面のようだが、やはり睨んでいる。理由を聞いたが、相手は答えるつもりがなさそうだ。はて、と考え込むと、ガトウから音声限定の念話が届いた。

「こいつはアリカ様に心酔しててね、君が友人として相応しくないと憤慨してるんだよ。まあ、適当にあしらってくれ」

「はあ、確かに身元もはっきりしない元テロリストだものね。了解」

答えて、クルトを見る。飽きずにこちらを睨んでいた。

やれやれと思い、はぐらかすべく声をかける。

「クルト君、何でそんなに私見てるのよ。もしかして惚れた？

困ったわねえ、ナギがいるんだけど」

「ち、違います！　そもそも私は貴方を見ていません！」

「ほう、では先ほどから何を注視していたのかしら」

「そ、それは……貴方の背後で起きている戦闘です。中々勉強になりそうでしたので」

そう逃げたか、まあ追いかけて怒らせたら駄目ね。

「じゃあ一緒に見ましようか。ほらいらっしやい」

「別に貴方の傍で見なくとも……」

「解説あるとわかりやすいでしょ、意地張らずにきなさい」

傍による理由を用意すると、クルトは一度目を閉じ、意を決したようにこちらへ歩いてきた。こちらの横に並び、

「さあ、解説してください」

ふん、と息を吐いて腕を組んだ。何か微笑ましいものを感じて、小さく笑う。

では、面倒なお坊ちゃまを相手に解説を始めよう。

詠春は水面を走りながら、内心で舌を巻いていた。何度か剣を合せ、位置を入れ替えながらラカンと攻防を続けていたが、それだと思つた事は、

かなりの古強者、才能に任せた戦いではない。

足の置き方、迎え撃つ攻撃のタイミング、こちらの呼吸を呼んだカウンター、繰り出される攻撃の数々からは、何人もの職種と戦い勝ってきた経験を感じる。先日、怒りに任せて切りかかった際は実力を計れなかったが、こうして相対するとその強さを感じ取れる。考えている間にも、相手は勢いを増している。アーティファクトで展開した剣を必要に応じて使い分け、不要になれば投擲武器として使ってくる。足元の水面に大きな剣が着弾し、水面が弾けて足を押し上げてくる。展開に変化をつけるチャンスだ。

思い、爆発する水の勢いに乗り、体に乗せて大きく上昇する。

水煙に紛れ、一瞬で高度を上げて見下ろすと、ラカンは先ほどまで自分が居た地点を見ていた。

こちらに視界がきていない。

気で足場を作り、虚空瞬動。

空気を抜きながら移動する音が耳に響き、瞬間、ラカンの背中を取る。

好機！

愛刀「夕風」に気を送り、その切っ先に力を宿す。
神鳴流の技法「斬空閃」、例え鉄であろうと切り裂く切っ先がラカンの背中を襲う。

剣閃がラカンの背中に到達した瞬間、弾けるような音がした。疑問、しかし同時に悪寒が襲い掛かる。本能的にバックステップで距離を開けると、数瞬前まで自分の頭があつた位置を、ラカンの拳が轟音と共に通過した。服が裂けている程度で、ラカンの背中には傷一つ付いていない。いや、よく見れば痣は残っていた。

「ううむ、なんたる馬鹿」

「おいおい、言葉足りなくね？」

不足は無い、答えの代わりに剣戟を振るう。

速度は無いが、相手はそれを補う大きさを持つ。軽く四mはある巨大な剣を盾としてこちらの攻撃を全て弾いたラカンは、片手を柄から離してこちらへ攻撃を放つ。左手を振り払うような打撃、顔を引いて掠めるようにそれを回避すると、相手の右半身に勢いがついている。

こちらを両断するように、横一文字の薙ぎ払い。

空気を震わせながら迫るそれに対して、あえて向かう。

攻撃の勢いを連動させてラッシュを放ってくるラカンに対して、中途半端に距離を取るのは危険だ。

速度を上げて、軽くジャンプ。迫る攻撃のタイミングを計り、

剣身を蹴り飛ばす！

ラカンの体勢を崩すと同時に、相手の攻撃速度を利用してこちらの速度をあげる。

見えたのは、再び背中。

服に切れ目が入り、筋肉質の肌が見えている。古傷はあるが、真新しい傷は一つも無い。

恨みは無いが、傷を入れさせてもらう。

先ほど弾かれた時以上に、愛刀へ気を込める。

痣の残る場所へ再び刀を運び、裂ける手ごたえを感じた。浅い。

瞬間、腹を抜けるような衝撃が襲った。吹き飛ばされながらラカンを見ると、左足をこちらに突き出していた。蹴りか、体勢を整えながらラカンを見れば、水面からこちらを見上げている。浮遊術で高度を保っているこちらが見下ろす形だ。

「いやはや、やっぱマトモにやるとアンタもつええな」

「先日の屈辱、ついでに晴らさせてもらうぞ」

「さて、そいつはどうかな？」

笑みを浮かべ、こちらを見上げるラカン。懐から何かを取り出した。黒いマジックペン。何に使うのかと疑問に思い、考えを巡らせる。その間にもラカンは剣に文字を書く。

文字を書く？

思わず息を飲む、文字を書いて特殊な力を与えろといえ、未央の使う概念能力だ。賢石さえあれば誰でも使える為、ラカンはいつの間にか賢石をもらっていたのだらう。こちらの考えがそこに至ったと同時に、ラカンがこちらを見る。持った剣を放り投げるように構え、右腕の筋肉を軋ませながら投擲。

【・ 文字は力を持つ】

後追いで聞こえる概念条文を耳に、足元へ気を送る。自身で成しうる最長距離の虚空瞬動で一瞬のうちに百mを移動する。しかし、巨大な剣は唸りを上げてこちらを追尾していた。

こ、これは洒落にならん恐怖！

察するに、追尾の条文を書き込まれているのだろう。これ以上逃げるのは意味が無いと判断し、剣へ向かう。いかに気で強化されようとも、切り裂く事にかけては、紅き翼く内で自分に並ぶ者は居ない。剣の先端がこちらに接触する刹那、合せるように刀を突き出す。抵抗は一瞬、刀が剣を切り裂き、バターのような切断面を作る。左右に分かれて水面へ落ちていく剣を尻目に、ラカンへ再び向かう。距離を取ったのは失策だった。追尾機能を得た投擲があるならば距離が開けば開く程、ラカンが有利となる。

事実、続くような投擲が来た。

先ほどよりも巨大な剣、しかし、自分に切り裂けぬ物ではない。再び切り裂き、前を見れば短刀が群れとなって襲いかかってくる。

ええい、まどろっこしい！

太刀だけでは手が足りず、腰に下げた白木の鞘を左手に取る。

二刀流！

手数を増やして短刀の群れを叩き落していく。

おお、全部叩き落しやがった。

詠春に投じた短刀は百を超える、実は概念条文無しで適当に放り投げた物だが、自分の天才さ故に全て詠春に向かったようだ。適当故に速度、軌道共にバラついており、叩き落すのは困難なそれを相手は全て叩き落した。自分に直撃しない軌道の短刀すらたたき落したのには、誘導を警戒してのことか。

どちらにせよ、やっぱ真正面からやるとやべえ相手だな。

相手はこちらの投擲が止んだ契機に、こちらへ走ってきている。虚空瞬動で一気に距離をつめないのは、何かしら策略を疑っているのか。

リクエストに答えるぜ。

アーティファクトで全長10mを超える斬艦剣を展開、一つは手元に持ち、即座に詠春へ向かって投擲する。続けるようにもう一つ展開し、上空へ放り投げる。数秒後、進路上に襲い掛かるような軌道のはずだ。詠春は投じられた斬艦剣を見事に真つ二つに切り裂いている。やはり剣術では到底叶いそうにない。そのままこちらへ勢いを増して突撃してきている。

ピンゴだぜ！

右手を振り上げ、迎え撃つ構えを取る。詠春が前方10mに入った瞬間、斬艦剣がその進路上に落下して派手に水飛沫を上げる。

そこに気合を込めた右ストレート。

「ふん……どりゃあ……！」

轟、と音を立てながら腕が振るわれる。気合の籠った衝撃は斬艦剣を砕きながら水面を爆発させる。

「やったか！」

言った瞬間、風が通り抜けた。

爆風の吹き荒れる戦場で、撫でるような風を感じた事に違和感を持つ。

何気なく頭に手を置くと、頭のバンダナが無い。

何処だ？

その思いに、答える声が背後から上がった。

「探し物はこれか？」

振り返れば、詠春が片手にバンダナを持っている。
その表情は、してやったりといった表情で、

「借りは返した、って感じか？」

「そんなところだ」

詠春とラカンの戦いが終わるのを遠くから見て思ったのは、

ラカン、詠春の速度を甘く見すぎねえ。

一度勝った相手、という油断もあったのだろうか。傍らのクルトを見れば、呆気にとられており、こちらを見て、

「か、解説を要求します！」

「ん？ どこから？」

「巨大な剣が着水した時、青山さんは進路をふさがれたのでは！？」

「ああ、回り道しただけよ。詠春は>紅き翼<最速だもの。進路をふさがれたから、回り道して加速、そのままラカンのバンダナを剥いて通り過ぎた、と」

「そ、そんな事が出来るんですか？」

「目の前でやった人がいるでしょ」

はあ、と納得しきれない様子で、クルトは再び詠春を見た。しかし、その瞳にはタカミチがナギを見る目と同じで憧れが混じっている事が見て取れた。

アスナに目を向けると、やはり無表情に詠春とラカンを見ていたが、

「アスナちゃん、さっきのどうだった？」

「……すごかった」

「そう、まだまだあるから楽しんでね」

「……」

沈黙、しかし首が微かに縦に動いた気がした。

ガトウを見れば、そんなアスナの様子を笑顔で見えており、

まるで本物の父親ね。

そんな事を思わせた。

第四十三話

戦いを終えて戻ってきた詠春の元に駆け寄る人影があった。
クルトだ。

年頃の少年らしく、瞳を輝かせている。先ほどまで未央に向けていた目とは正反対のもので、思わず未央は苦笑する。駆け寄ったクルトは詠春に礼儀正しく挨拶をし、質問を重ねている。詠春は驚きながらも、慕われている事を感じて朗らかに対応する。

全く相手にされないラカンが少々慥然としており、その様子は動物園の熊がいじけているようにも見えた。

「ジャック、子供に相手にされないからっていじけるんじゃないわよ」

「別にいじけてねえしー？ ガキにや俺様のかっこよさは伝わらねえからな！」

質問に来ても金取るしな、とはき捨ててラカンは座り込む。控えていた侍女人形が差し出した飲み物を手に取り、一気に飲み。口に含んだ氷をガリガリと音を立てて噛み砕く。

どう見てもいじけてるじゃない。

自棄酒ならぬ自棄ジュースを敢行するラカンを尻目に、詠春とクルトを見る。身振り手振りを交え、詠春が基本の型を教えていた。遠くから見てもクルトの立ち姿は様になっており、凛々しく見えた。何度か素振りをこなし、詠春は頷く。

「ふむ、なかなか筋がいい。良かったら今度稽古をつけるが」

「はい！ 是非お願いします！」

なんとも微笑ましい師弟具合だ。

クルト君、私にもあやつて接してくれないものかしら。

ふう、とため息をついて首を振ると、タカミチ少年が目に入った。クルトと詠春を見て、手を握り締めている。その目は悔しさが見えた。お節介の虫が首をもたげ、足音を立てずに背後に回り、肩に手を置くと肩を跳ね上げながらこちらを振り向いた。

「や、柳さん。なんででしょうか」

「羨ましいなら、貴方も行けばいいじゃない。詠春そんなケチじゃないわよ。あと未央でいいわ」

「いえ……いいんです」

「え？ 名前で呼ぶの嫌？」

「そ、そつちじゃありません！」

そう言い、タカミチ少年は年齢に似合わぬ、憂いを帯びた顔を見せる。

「僕、生まれつき呪文詠唱が出来ない体質で……。あまり要領も良くないですから。教わるなんて、皆さんのお時間を無駄にしていますよ……」

沈んだ表情を更に沈ませて、そう答えた。彼の先天的な欠陥についてには知っている。遠慮がちな子供がそう思うに至っても、仕方が無いだろう。

しかし、だ。

「お馬鹿さん！」

丁度こちらに預けるように傾いた頭部へチョップを叩き込む。

軽い打撃音。

しかし、タカミチ少年には予想外だったようで、頭を抑えながらこちらを見る。

「な、何故……」

「子供の悩みと軽く扱うつもりはないけどね、貴方、もうちょっと踏ん張ってみなさい。意外といいとこまで行けるわよ。魔女が保証してあげるわ」

タカミチ少年は、その言葉を受けても未だ憂いを帯びた顔をしており、自分に向けて一片の自信すらないのだと感じさせた。

根深いわね。

自分より年下、十歳程度でそこまで根深い悩みを持つ程、彼はコンプレックスを感じているのだろう。ナギという才能溢れる英雄に憧れるのも自身に無いものを求めているのだろうか。

いや、これ以上はプライバシーの侵害ね。

勝手に思うのは失礼だろう、しかし、なんとか力になりたい。もう少し話を聞いてみよう。

「タカミチ君、そもそも貴方、なんで力が欲しいの？ ガトウだって別にそういう役割を求めているわけじゃないでしょ？」

「そうですね……、恩返ししたい気持ちもありますし、ナギさんにも憧れますから……」

なるほど、と首肯する。

恩返しだけならば別の形もあるが、ナギへの憧れもあって力が欲しい、と。

しかし、そのナギ自身は才能の塊だ。努力しなかったわけではないが、タカミチ少年とはスタート地点が大きく異なる。

難しい。

悩みの相談に乗る、とは難しいものだ。無責任に肯定しても、否定しても、相手に失礼だろう。だからといって、簡単に答えの出る悩みでもない。確実に言える事は一つだ。

悩んでいるからといって、立ち止まっては解決しない。

ならば、悩みながらも進むしかないだろう。

そこまで考えつくと、行動は決まった。タカミチ少年の手を取り、ガトウに向かって歩き出す。

「や、柳さん？ なんですか？」

未央でいいと言うのに、話を聞かない少年の言葉は無視だ。アスナの相手をしていたガトウがこちらを見て、首をかしげる。

「二人とも、手をつないでどうしたんだ？」

「い、いや、その……」

「ねえガトウ、貴方、咸卦かんかほう法使えるでしょ？ タカミチ君に教えてくれない？」

「触れ回った覚えは無いんだが、よく知ってるな。あまりお勧めできるモノじゃないが、いいのか？ タカミチ」

「え、えつと……」

問いに、タカミチ少年は考え込む。俯きながら、しかし手には力

がこもり、震えていた。彼自身が納得して始めなければ、いずれ脱落してしまう。強攻策なのは自覚しているが、他に手も思いつかなかった。

タカミチ少年の見守っていると、ガトウが歩き出した。煙草を取り出し、口に加えて火をつける。大きく吸い、ふ、と息と煙を吐きながら、

「タカミチ、お前が色々と悩んでるのは知ってる。俺が出来るのは、お前が望んだ事に応えてやる事だけだ」

だからな、と煙草を指に移して、

「言うだけ言ってみろ、子供の願いに応えるのが大人の役割だ。強くなりたいたい、いい目標じゃないか、男の子だ」

はにかむような笑顔で、ガトウはタカミチ少年にそう言った。その声に反応するように、手が開き、力強く握られる。少年の顔が上がった。

「宜しく願います!」

輝く瞳を持って、力強く一礼した。

それを見たガトウは、口元を緩ませる。

「厳しく行くから、覚悟しとけよタカミチ」

「はい!」

微笑ましい師匠具合がここにも! 私も弟子欲しいわ、教えられる事ないけど……。

ガトウとタカミチが稽古について話始める中、ふとアスナの姿が目に入った。

ガトウの裾を持ち、>紅き翼<の皆を見ていた視線が、今はタカミチに移っている。表情からは何を思っているか察する事が出来ない。

聞いてみようと思った瞬間、背後から声がかかった。

「未央、そろそろアルとお師匠のバトル始まるぜ」

「ん……。わかったわ」

ナギに誘われ、観戦すべく歩き出した。アスナに話を聞くのは後でもいいだろう。

水面に立ち、ゼクトと対峙する。

少年のような容姿をしているが、中身は老練の魔法使い、そして歳のせいかわず短気。ナギもよく魔法の講義で頭を叩かれている。

まあ、ナギは叩いた方が覚えますからね。

しかし、自分は叩いていないので博愛派だ。

「何やら不愉快かつ疑問符がつく事を考えておらんか？」
「いえ、特には」

年の功か、考えを読む事も長けている。自分以上の若作りをしている相手は、どれだけの年月を過ごしてきたのだろうか。イノチノ

シヘンで人生を見せてもらおうように頼んだ事があるが、あまり見せたくない、と断られた。

まあ、私自身の人生もあまり見せたくはありませんからね。

その点ではイーブンだろう。

様子を見ながら周囲に重力球を発生させる。一つにつき、最大四倍の重力を相手にかける重力球を四つ展開。挨拶代わりにゼクトへ十六倍の重力を発生させる。

瞬間、概念条文が響いた。

【・　ものは下に落ちる】

十六倍の重力を持ったゼクトが、水面に落ちず、そのままの体勢で、こちらに向かって落ちてくる。そのまま蹴りの体勢に移行して魔法障壁を蹴りつける。

激しく発光しながら抵抗する魔法障壁を破るべく、ゼクトは踏みつけるような蹴りを連打する。太鼓のように打撃音を響かせ始めた障壁は、中央にヒビをいれ、危機を知らせる。

ゼクトへかけた重力を解除しながら背後に飛ぶ。

直後、魔法障壁が割れ、ゼクトの蹴りが水面を爆発させる。

「やれやれ、もう身内には通用しませんね、これは」

「当然じゃろう、随分前に未央が対策をうって以来、皆賢石を貰っておる」

やれやれ、未央も酷い事をするものです。

「え？ どういう事ですか？」

クルトは側で観戦していた未央へ質問を投げかけた。

二人は随分前に未央が対策をうった、と言っていた。対策をうった本人は、たいした事じゃないわ、と最初に言葉を置いて答えた。

「【ものは下に落ちる】、重力の向きを変える概念条文を展開すれば、アルが重力かけた瞬間に重力の方向を変えるのよ。あれは押し潰す系の攻撃だから、地面や水面にたたきつけないと攻撃力にならない。だから、ゼクトは重力の向きを前に設定して、攻撃を無効にしながら突撃の勢いに利用したのね」

「さらっと言いましたが、重力の向きを変えるなんて出来るんですか？」

「出来るわよ」

いつもの事よ、と未央は言い切り、再び観戦に戻った。

重力の向きを変える、そもそも重力に作用する魔法すら聞いた事が無いというのに、クルトは頭を抱えた。

チートキャラの集まりめ……！

自分は覚えがいい方だという自信があるだけに、彼らのやっている事の意味不明さが腹立たしい。そんな葛藤をしていると、未央が呟いた。

「ま、アルも打開策作ってるけどね。問題はゼクトがその前に決めちゃうかも、って事かしら」

「さて、ワシのターンじゃな」

両手を軽く握り、ゼクトは構える。両手を軽く掲げるだけの浅い構えだ。

ゼクトの戦闘スタイルは、格闘もこなす魔法使いだ。先ほどの蹴りはこちらの重力魔法が効かないぞ、というアピールに過ぎない。

本命は魔法、詠唱をほぼ破棄して展開される中級魔法群による弾幕だ。しかし、ただ中級魔法によって弾幕を形成するだけなら問題はない、ナギや未央も似たような事が出来る。

「風精、雷精」

ゼクトの言葉と共に、両手に魔法陣が形成され、右手には風の渦、左手には雷の塊が発生した。

「行け！」

それを前に突き出した瞬間、>春の嵐<と>白き雷<が同時に展開されて襲い掛かってきた。

魔法障壁を再展開しながら、回り込むように右へ移動する。

しかし、ゼクトの両手に展開された魔法陣は未だ力を保っており、ゼクトが腕を振る度に新たな攻撃が打ち込まれてくる。

彼最大の長所がこれだ。

異なる魔法を、同時に発動させる。

相性の良い属性だけではなく、相反する属性の魔法でも同時に扱うのは世界広しといえど彼だけだろう。それだけ精霊との契約が強

固なのか、別の手段なのか、彼は語ろうとしない。是非知りたいのだが、何を対価に提案しても受け入れてもらえなかった。

秘密の多い男ですね、私も人の事言えませんが。

思いながらステップを踏む。

隙間無く展開される魔法は、いずれも相当の威力だ。まともに受けては魔法障壁が粉碎される。だから、魔法障壁に重力の属性を加え、上か下にずらし、受け流す事で凌ぐ。

しかし、あくまで時間稼ぎだ。攻撃に移らなければ守勢に回っているこちらが判定負けにされてしまうだろう。

ならば、攻めるしかありませんね。

思った瞬間、受け流した魔法が足元の水面を穿ち、周囲に霧を作る。

いいキツカケになる。回りこむようなステップを止め、重力球を展開し、ゼクトを巻き込むように、広範囲の水面を打ち付けると水の弾ける音が響き渡った。

ゼクトへのダメージは期待していない、視界を一時的に眩ませる事が目的だ。

前傾し、左右に交錯しながら距離をつめる。

中・遠距離からの重力打撃が封じられてしまえば、残るのは打撃戦だ。他の魔法も使えない事は無いが、ゼクト相手に張り合える程の密度で展開は出来ない。

ゼクトの影が見えた。

加速を右手に乗せて、張り手をぶちかます。

手ごたえを得た。

水に手を入れたような手ごたえ。

水精の囿ですか!?

頭部を形成していた水が破裂すると、体を形成していた水も連鎖するように崩れ落ちる。

本体は何処に?

思った瞬間、真上から衝撃が襲った。

ゼクトは霧に立つように高度を上げていた。

真下の霧へ向けて、>燃える天空くを展開。叩き付けるように射出する。

立ち込める霧を丸ごと蒸発させながら、炎は力を表した。

霧が消失し、アルビレオの姿が現れた。

ローブのあちこちが焦げてはいるが、健在だ。

「まともに当てたはずじゃがのう」

「気合で堪えた、と。そんな所でしようか」

ふむ、気合ならばしょうがないの。気合は全世界で有効じゃ。

しかし、予想通り距離を詰めて来た。距離を置いては勝てないと判断をしたのだろうが、こちらもそれは理解している。

遠距離ならばこちらの完封だろう。

しかし、

「格闘戦じゃな、付き合ってやるう」

「おや、付き合いがいいですね。何か良い事もあったのですか？」

「いや、逆じゃ。お主を殴りたい気持ちがある」
「心当たりがありませんが……」

そうじゃろうな。

「ナギ曰く、「師匠は師匠」だそうで、家族的なポジションが該当せんようだな……。擬似父親ポジションの貴様が憎い」

「また酷い八つ当たりですねぇ……」

「個人的には気のいい祖父ポジションが良かったんじゃ……」

と、いうわけで、

「お主に八つ当たりをする」

言つて、空を蹴り加速する。

手足に魔力を込め、アルビレオに振るう度、重力障壁が手足を反らす。

その度、隙を突くように張り手が飛んでくる、いなしながら思う。厄介な障壁だ、と。

全力で打撃しなければ突破できないが、突破できなければ致命的な隙を作ってしまう。

ナギなら軽々破るんじゃがのう、あの馬鹿は……。

しかし、自分のウリはパワーではない。年の功を生かしたテクニツクだ。

向かってくる張り手をかわし、攻撃として扱われぬよう掴む。掴んだ。

そして引く。急な攻防の変化にアルビレオは体勢を崩した。相手の腹に軽く手を当てる。

よし。

ふん、と腹に力を込め、踵で水面を踏み抜く。続けて腰を回し、肩を回し、肘を固定、左手にエネルギーが送られる。

結果として、接触していた左手が衝撃を放った。

ワインチパンチ、寸勁すんけいとも言われる技法だ。

障壁の反応を許す事なく相手に打撃を送りこむ。

腹を強打されたアルビレオは、ご、と嗚咽を漏らしながら吹き飛ばす。

追撃じゃ。

今ならば反撃を気にする必要もない。全力で打撃だ。

吹き飛ばす相手に追いつきながら、蹴りを放つ体勢を取った。

アルビレオがこちらを見ている。

口の端から胃液を漏らしながら、口を三日月の形に変えている。

なんじゃ？

疑問、まさか誘い込まれたか。

思った瞬間、アルビレオの左手が動いた。

その先にあるのは、黒い円盤。

投げられた。

危機を感じ、身を捻るようにながら回避する。しかし、服にかすった。

掠った服は、刃物で切り裂かれたようにパツクリと裂けており、

新魔法？ 何時の間に開発したのじゃ。

既に体勢を立て直し、アルビレオは立ち上がっている。

更に、両手に先ほどの黒い円盤を展開していた。

「先日、随分長い間研究していた魔法が完成したんですよ。この円盤、実は二枚重ねになっていましたね、お互いが反発するように重力を設定してあります。触れたものは、上下に裂けるように切れますよ。名づけて重力刃、感想お願いします」

「名前が厨二病じゃな」

「貴方はたまにナギのような芸風になりますね……」

失敬じゃな。

しかし、厄介なものを開発したものだ。重力という特性上、あの円盤は魔法すら切り裂くだろう。そして、重力魔法　アルビレオの独自技法のそれは、詠唱が不要。

チートじゃなあ。

思っている間にも、円盤が投擲される。向かってくるそれに、試しと魔法の射手くをぶつけると真つ二つに切り裂かれ、円盤は力を失わずに向かってきた。

速度もなかなかのものだ。さて、どうしたものか。

一撃で勝負を決めたかったですけどね。

ゼクトに重力刃をかわされ、続く投擲も回避されながら思う。

重力刃は確かに切断力は相当なものだが、達人相手なら余裕を持って回避されてしまうものだ。だからこそ、近づいた相手に向かっ

て奇襲としたが、回避されてしまった。
しかし、当たれば一撃で決まるだろう、相手もそれはわかっているはずだ。

長引きそうですね。

長期戦の覚悟を決め、再び重力刃を展開。ゼクトに投げつけながら展開を伺う。

瞬間、ゼクトが加速した。真っ直ぐに向かってくる。予想外の動きだが、対応出来ないものではない。進路を塞ぐように重力刃を投擲する。

二つの重力刃がゼクトを襲う、それに対してゼクトは、

「風精！」

>魔法の射手くを一本だけ展開し、振り払うように重力刃の、円盤の面に叩き付けた。

「あ

その対応は考えていませんでした。

面を打撃された重力刃は大きく軌道を反らした。ゼクトと自分の間には最早何もない。

更に加速したゼクトが、一瞬で懐に入り込む。
先ほどは片手で行われた寸勁すんけい、今度は両手だ。

朝、何を食べたんですって。

腹に衝撃を食らう前に、そんな事を思った。

クルトは、既に自分で理解する事を諦めていた。

ゼクトの複数属性同時行使、アルビレオが放った円盤状の魔法。更には魔法使いとは思えないゼクトの体術と、最早常識という言葉が不要ではないか、という思いに駆られる。周りを見れば、

「おいおい未央、アルのアレなんだよ。すげえ面白そうだな！」

「触ったら駄目よ、あ、でも面のところなら触ってもいいわよ。間違っても縁に触らないようにね。触らないようにね！ わかったナギ！」

「そ、それは触れって振りか！？ すげえ切れてたじゃねえか！ 振りのレベルたけえよ！」

「貴様ら、それよりゼクトの魔法技術だが……」

「ん？ お師匠は昔からアレ出来てたぜ。頼んでも教えてくれねえから聞かれてもわかんねえよ」

「そもそも、ナギは雷属性の呪文以外、詠唱長い奴はアンチヨコ必要じゃない。片手塞がっちゃうでしょ」

「クツクツク……。アンチヨコ必須とはな、>千の呪文の男<の名前が泣いてるぞ、おい」

「ち、畜生。なんか未央とエヴァが結託して俺をなじる……！」

いつも通りすぎる。驚いたのはエヴァンジェリンだけだが、大して興味もなさそうだ。

詠春を見れば、アルビレオの治療の準備をしており、特に驚いた様子もない。

ガトウとタカミチを見れば、こちらは何か話し込んでおり、先ほ

どの試合は見ていなかったようだ。

僕がおかしいのか!?

ふとアスナが目に入った。いつも通り無表情の彼女が、ポツリと
呟いた。

「……………楽しそう」

疑問を挟むのはやはり僕だけか!

狂人の集いに迷い込んだような、そんな錯覚を得ながら頭を抑え
た。

第四十四話

アルとゼクトの戻ってくる様子は対照的だった。

ゼクトは気分良く鼻歌を歌いながら、後ろ手を組み戻ってくる。

従者人形が用意した緑茶を手に取り、一つ啜ると、ほ、と目を弓にして息を吐いた。

一方のアルは、青い顔をしながら、何かを堪えるようにゆっくりと滑るように戻ってくる。出来るだけ上下運動をしないよう、慎重に戻ってきたアルに詠春が肩を貸した途端、詠春がひい、と怯えた様子で物影に高速で連れ込んでいた。

朝はパスタだったわね。

物陰の向こう側で起きている事態を想像して、アルの冥福を祈る。そうしていると、傍らのナギがこちらを見ている事に気づいた。

三戦目は、自分とナギだ。

「未央、覚えてるか？ 腕比べするの、三回目だぜ」

「ええ、旅立つ前に1回、麻帆良武道会で1回、これで三回目ね。前二回とも私が負けてるけど」

笑みを浮かべ、ナギを見る。彼も同じように楽しそうな笑みを浮かべていた。

「そろそろ勝たせてもらいましょうか。負けっぱなしじゃ、パートナーとしてかつこつかないものね」

「そう簡単には負けないぜ？ お姫様に負ける騎士はかつこわりいからな」

思わぬ返し方だ、こちらのツボを抑えており、ポイントが高い。しかし、だからといって負けるわけにはいかない。

二人で並び、水面を歩き出す。

装甲服を普段着の上に着込むように展開し、着替えの手間を省きながら作戦を考える。

ナギは生来の魔力量に任せた大出力魔法、更に身体強化した体術、そこに独自の概念能力まで加えた完全な無敵キャラだ。

真正面から当たって勝てる可能性は無い。半端な作戦も概念能力で殴り飛ばされるだろう。ならば、半端ではない搦め手を講じるしかない。

この時の為、幾つか暖めていた作戦もある。

勝つわよ。

心で、勝ちたいという欲が燃えている事を自覚する。最後の準備に、いつも通り槍を形成すると、ナギから声がかかった。

「未央、賭けしようぜ」

「賭け……？ 別にいいけど、何賭けるの？」

おう、と彼は応じて、

「俺が勝つたら、今晚は俺の言う事聞いてもらっぜ」

……。

「えっ!？」

「前は変なところでステイ食らったからな、やり直し要求だ……!」

先ほどまでと違う熱が顔に浮かぶ。

いや待て、待てといつても別に嫌じゃないんだけど。しかし、こ
う、予想外というか、まさかこんなタイミングでそんな事を言い出
すなんて思わないじゃない？ どうなのそこらへん、ねえ？

「どうよ!？」

「お、おっけい！」

しまった、ついうっかりOK出してしまった。

だから待ちなさい、そういう事はもつとムードある感じに誘うべ
きじゃないの？ 別にクリスマスだのそういう日にしろとは言わな
いけど、もつとこう、ね!？ 色々あるじゃない!？ 最終決戦前
に「もう最後かもしれないから」とかそんな言い訳作って連れ込む
とかね、断れない雰囲気作るのも男の務めだと思ったりするのよ!

「なんか、未央がクネクネしてんぞ」

「ナギがなんか言ったんじやろうなあ」

「ハッキリ言うが、気色悪いな」

「新人は遠慮ない物言いするのう……」

水面に立つ二人を見ていたら、ナギが未央を指差して何か言った
瞬間、未央が拳動不審になった。顔を真っ赤にしながら、槍を抱い
て体を隠すようにしつつ、揺れている。

何を言われたか大体わかるのう。

口に出すのは少々下世話なのでラカンにはノーコメントを貰く。
すぐ傍にはクルトを筆頭に子供三人組も居るので、言及するような
空気ブレイクはラカンもしないだろう。

そんな事を思っていると、アルビレオが口元を拭いながら物影から戻ってきた。その背後に控える詠春はやれやれ、とため息をついている。

アルビレオはふう、と一息ついた後、ナギと未央を見て、

「おや、まだ始まってなかったのですか。というか未央がトリップしてますね」

「……あの様子を見れば、何を言われたか大体わかるというものだな」

「フッフ詠春、何を言われたか分かるのですか？ ちょっと教えてくれませんか？」

『お前全然ブレないな！』

体調を崩しながらもいつもの調子を保つアルビレオに、一同から総ツッコミが入る。

よく見れば、鼻からパスタの切れ端がはみ出ているが、そんな状態でよく普段通りに振舞えるものだ。ある意味感心する。

「お、やっと始まるようだぞ」

エヴァンジェリンの声で向き直ると、ナギと未央がやっと構えを取っている。

二人の戦いを見るのは、四年前の麻帆良武道会以来だ。

「どっちが勝つかのう」

「賭けましようか、私はナギに1ドラクマ」

「それでは、私は未央に乗ろう」

「俺様はナギだな」

「ワシもナギかの」

「くだらん、が、あえて賭けるなら未央だな」

「ふむ、ナギ優勢ですね。ここはゲストの方々にも伺いましょうか」
アルビレオはそういつて、ガトウと子供達に視線を向ける。
ガトウは無精髭をいじりながら、少々考えて、

「やはり、ナギかな」

ガトウが答えると、二人の男子も続いて答えた。
タカミチ少年は少々申し訳なさそうに、

「僕もナギさんかな、と」

クルト少年は眼鏡を指で押し上げ、ふん、と息を吐き、

「ナギさんでしょう、彼は>千の呪文の男<ですよ」

最後の一人、アスナに視線が集中する。

少女はそんな事を気にも留めず、構えを取る二人を見ており、

「……始まるよ」

ステージを見る、と皆に促した。

未央が正気に戻るのに少々時間がかかったが、ついに三度目の腕試しが始まる。四年間、お互いの成長を傍で見ってきたが、麻帆良武道会の時とは比べ物にならない程の実力になっているはずだ。何度か腕試しをしたと思った事もあるが、賞金稼ぎや軍隊に追われ、その機会もなかった。

だけど、ついに機会が来たぜ。

自分が相手のパートナーとして相応しい実力か、お互いに確かめ合う機会だ。

そして、勝てばついに未来嫁を確定嫁にする機会を……！

胸のうちではテンションがダダ上がりだ。しかし、勝つ為には落ち着かなければ。

大きく息を吸い、吐く。胸のうちに冷たいものを感じて、意識を切り替える。

未央を見れば、同じように深呼吸をして切り替えていた。俯き、上がった表情は引き締まっている。いい表情だ、惚れ直すぜ。

意識を切り替えた事で、お互いに構えを取る。

自分は左手、左足を前に、右手を引き、右足を後ろに置く。

未央も同じく、槍をこちらに突き出しながら半身の構えを取った。

「ナギ」

「ん？ なんだ？」

「貴方、自分の概念能力をまだ使いこなせてないわよね」

「ん……。まあな、テンションあがって勢いがねえと物理的なものしか殴れねえし」

「それ、改善しないとこの先どころか、私にすら勝てないわよ」

「やってみねえとわかんねえだろ」

「まあ、そうね。じゃあやってみましょうか」

未央はそう言って、言葉を続けた。

【 ・ ここには

概念条文を読み上げる前に、決める！

未央自身が言った事だ、発動前に潰してしまえば概念能力は意味がない。

突撃する。

こちらは概念条文を読み上げる暇は無い、力任せの一撃だ。

前に出ながら、腰を低く落とし、体を前に倒して未央の懐に飛び込んでいく。

加速する視界の中で、未央が動いた。ほとんど振りかぶる事なく、槍を振る。

その軌道は、こちらの瞬動の着地点で、

誘われたのかよ！

直後に、激突と衝撃が響いた。視界が衝撃で眩み、速度を得ていた体は姿勢を崩した故に転がりながら、未央を通り過ぎていく。完全に行動を読まれた。

【・ ここには居ない】

そして、未央の声が響いた。

姿勢を正しながら振り返ると、未央の姿が見えない。

隠蔽概念。そりゃ俺の概念なら殴れるだろうが……。

見えない物だから殴れない、今の自分はそう思ってしまう。勢いがある時ならば、見えないからなんだ、と拳を振れば間違いなく打撃は通るが、今は出来ないと思ってしまう。自分の能力だが、使いにくいと思う。

姿が見えない、広範囲をなぎ払う魔法は>千の雷くらいしか思い浮かばないが、あれは直線範囲だ。未央が回り込んでいれば完全に無駄になる。

やはり、概念能力でなんとかするしかない。

【・ 意志を信じて打撃すれば、いかなるものも打撃する】

展開、集中。

打撃するなら、未央という存在自体だ。しかし、存在を打撃する、言うのは簡単だが、イメージが難しい。

思う間にも、攻撃が来た。

周囲を囲むように魔法の射手くが展開されている。その数はリアルタイムに増えている。

これなら殴れるぜ！

右腕を引き、力を込めて振り抜く。

その行為に連動するように、周囲の魔法の射手くが吹き飛んだ。

よし！

概念能力自体は問題なく行使出来る。

振り抜いた拳を戻しながら、次の攻撃をどう放つか考える。

腹に衝撃。

なんだ！？

吹き飛ばされながら、いきなり襲った衝撃を思い返す。

硬質の棒で殴られたような感触、槍で殴られたのか？

つまり、未央がいつの間にか距離を詰めていたのだろう。思った通り厄介な概念だ。

存在を殴る、それさえ叶えば間違いなく勝てるが、そこに至るまで自分の勢いをあげなければならぬ。それまでは不本意だが回避専念だ。

戦いは激化している。

遠くから見て、クルトはそう感じていた。姿を消した未央がナギに一撃を入れて以来、ナギは高速で移動しはじめた。

瞬動ではなく、ダツシュ。しかし、身体強化魔法によって引き上げられた脚力によるそれは、最早瞬動に迫る速度だ。

それに対して姿の見えぬ未央が取った手段は、弾幕の形成だ。空を見れば、巨大な円盤がある。その下部からは幾つもの武器が生まれ、こぼれるように落ちていく。彼女のアーティファクトで形成されたものだろうか。さらには、魔法の射手くが大量に展開され、魔法と武器が雨のように戦場へ降り注ぐ。

その中を、ナギは踊るように回避していく。

ステップを踏み、相手へ手を差し出す代わりに虚空へバックハンドする事で、攻撃を殴りとばしていく。

魔法が消し飛び、武器が弾かれ、水面は大きな波を作る。

その波をナギは駆けあがる。

追従するように上空から攻撃が降り注ぐが、ナギはそれを魔法障壁で弾き、拳で弾き、ダツシュする事で抜けていく。

「……すごい」

そうとしか言いようがなかった。

攻撃の嵐をくぐり抜ける彼の姿は、すごい、と思わせ、

「……かっこいい」

横でそれを見ていたタカミチが言った。

同感だ。

二人の感想を併せて「すごいかっこいい」、陳腐だが、その言葉

が心を占めている。

しかし、アスナはまた別の感想を述べた。

「……ナギ、楽しそう」

遠くからは、彼の表情までは確認出来ない。だから、楽しそうかどうか、わかるはずがないと思えば、

「数年ぶりに二人っきりの戦いですからね」

「懐かしい、という気持ちもあるんだろうな」

「二人だけの世界って奴かのう、おお熱い熱い」

同意する。>紅き翼<の三人。古くからの付き合いである彼らもそう思うのであれば、それは間違いないのだろう。

視界の先では、戦場はさらに激化している。

>魔法の射手<だけではなく、>白き雷<や>雷の暴風<まで飛び交いはじめ、武具は短剣や剣だけではなく、戦斧や騎乗槍のような巨大な武器まで現れ始めた。

そんな攻撃を行使する未央に、クルトは今までの疑惑だけではなく、違う感情を持つ。

彼女も、すごい。

攻撃を抜けていく、何度もやばいと思いつつもその事態をくぐり抜け、戦場を走り続ける。息が荒くなってきた。体には細かい傷が幾つも出来ている。

しかし、

テンションあがってきたぜ！

命の危機を感じ、抜ける度に未央に近づいているような感覚がある。姿が見えない彼女の背中が、瞼の裏に見えるようだ。

その距離はとても近い。手をのばせば、届くに違いないと、そう思えるようになった。

ならば、今こそ彼女の期待に答える時だ。

こちらの精神状態に沿った攻撃を繰り返し、待っている彼女へ手をのばす。

その為には、飛び交う攻撃が邪魔だ。

邪魔なものは、殴り飛ばす！

思い、攻撃する。

右の拳が魔法を消し飛ばし、返す左が武具を弾き飛ばす。空を見れば、巨大な円盤が空を覆っている。あれも邪魔だ。

叩き落とすように、右拳を振り下ろす。

破碎の音が響いた。

中央に穴が空き、そこから破壊が始まる。自重で折れ始めるそれは、最早武具を作ってはいない。

邪魔なものは全て殴り飛ばした。

後は未央だけだ。

相変わらず姿は見えないが、いなくなったわけではない。

そこに、居る。

そう思える今ならば、間違いなく打撃が通る。振りかぶる。

「うおらあああー!」

叫び、気合を込めながら振った。

バチン、と弾けるような音と衝撃が手に返って来る。

前を見れば、十m程に未央が居る。隠蔽概念が弾け飛んだのか、その姿はハッキリと見えた。打撃で姿勢を崩し、痛みを堪える表情をしている。

概念条文を追加される前に決める為、走り出す。間合いをつめ、左手で口を塞ぐように掴みあげと、抗議のうめき声があがった。

「よっし、俺の勝ちだろ？」

声をかけると、うめき声が止んだ。

終わったか、そう思っていると、左手で抑えている口が形を変えた。

笑みだ。

違和感を覚えていると、未央の足が動いた。

蹴りの動きだ。

標的は

戦場から音が消えた。

決着がついたのだらう、途中から二人を見失ってしまい、決着の瞬間が見られなかったのは悔しい。果たして、どちらが勝ったのだらうか。

「お、居ましたよ」

あそこです、とアルビレオが指を指す。見れば、未央がナギに肩を貸してこちらに歩いてきていた。

「未央の勝ちですか、これは予想外ですね」

「しかし、ナギが妙に憔悴しているぞ」

詠春の言う通り、ナギは妙に憔悴している。

ぐったりと体が落ちており、足を運ぶのも一苦勞といった様子だ。対する未央は、苦笑しながら足取りを軽く歩いている。

「おかえりなさい、未央。少々予想外でしたが、勝利おめでとうございます」

「ありがとう、ナギ、大丈夫？」

声をかけられたナギは、地面に膝をつき、俯きながら首を振っている。よく見れば、股間を押さえて震えているような気がする。

嫌な予感がする。

アルビレオが、額に汗を書きながら質問を投げかけた。

「……未央、どうやってナギに勝ったんですか？」

「え？ ナギが口掴みに接近してきたところ、金的をガツンと蹴り飛ばして」

ズサ、と砂をかく音が響く。自分を含む男衆が全員、未央から一步距離を取った音だ。

俯くナギに、男衆が駆け寄る。

「ナギ！ しっかりしろ！ 傷は浅いぞー!!」

「しっかりしてください、ナギ。不能はいけませんよ」

「お前もまたすげえ女に惚れたな……」

「未央も加減というものを知らんの」

「これには俺も苦笑する」

「ナギさん、生きて、生きてください!」

恐ろしい、まさに魔女だ。

尊敬しかけていたが、その感情は一気に恐怖に傾いた。

一方、エヴァンジェリンは腹を抱えて笑っている。

「いかん、やばいぞお前達! 笑い死ぬ!」

「そんなに変な手段だったかしらねえ……」

『外道! 外道すぎる!!』

男衆から一斉の突っ込みが入った。それに気おされながらも、未央は皆に問う。

「ま、まあそういうわけで、私の勝ちね。次誰とやる事になるかしら」

「それには及びません、未央が最強という事で」

アルビレオがそんな事を言い出した。男衆が皆それに追従し、首肯する。

「ええ、でもやってみないと」

『やられたら困るんだよ!!』

「ひ、ひい!?!」

確かに、やられたら困る。

自らもそう思い、クルトは首を縦に振った。

第四十五話

第二次オステイア攻防戦から一週間が経ち、各地は平静を取り戻しつつあった。停戦の喜びは未だ残っているものの、アリカの示した新たな敵、>完全なる世界<との決戦が残っている事を皆知っている。

そして、その為の準備は着々と進められていた。

>完全なる世界<と長年戦い続けてきたという>紅き翼<のアドバイスを受け、連合・帝国ともに戦艦の改修を進めていた。精霊砲はより大口径のものが開発され、連合はそれを強化した新型の砲台
神罰砲を搭載した戦艦を新たに完成させ、処女航空を成功させていた。

一方、ウェスペルタティア王国を旗印とした対>完全なる世界<対抗軍の結成が示され、
ヘラス帝国、メセンブリーナ連合、アリアドネー魔法騎士団の四ヶ国の責任者がオステイア入りしていた。その為、オステイアには四ヶ国の兵士が入り乱れ、少々の小競り合いが発生しながらも、決戦に向けた活気に満ちていた。

そんな中で、オステイアの王宮に勤めている者達は最も忙しく、最も気を張った仕事に追われていた。何故なら、各国の要人は全て王宮に滞在しているからだ。粗相があつては一大事と、誰もが普段以上に仕事に力を入れていた。

忙しなく歩き回る使用人達を尻目に、アリカは廊下を進む。澄ました表情をして穏やかに足を運ぶ姿に、すれ違った使用人は一瞬仕事を忘れて立ち止まり振り返る。しかし、すぐに自分の仕事を思い出して忙しそうに歩き出す。

そして、アリカは自室の前に詰める兵士に手をあげ、労いながら部屋に入る。

その姿に、兵士は敬礼で返し、心のうちでアリカ姫の警備につけた幸運をかみ締める。

部屋に入り、まずやる事がある。

部屋を見回し、誰も居ない事を確認すると、大きく息を吸い、鬱憤を晴らすように勢いよく息を吐き出す。

ぶはあ。

とても国民に見せられない姿ではあるが、ストレス解消にはそこそこ効果的だ。

未央に一度見られ、「ため息ついてたら幸せ逃げるわよ」等と言われたが、

「人の未来旦那を奪った幸せ強奪犯が何か言ったか？」

と返したら涙目になって沈黙した。あれは少しばかりスッキリした。

しかし、ストレスが溜まる。>完全なる世界<打倒の為とはいえ、今までロクに国外に出された事もなかった自分が、まさか四ヶ国連合軍の旗印に任命されるとは思いもよらなかった。光栄な事だし、色々都合が良い事もある。

しかし、その為にかかる仕事や心労は少々許容範囲を超えつつあった。旗印　総指揮官だ。大まかな方針を決め、号令を発して後は士気高揚の為のお飾りではあるが、その為に必要な知識を急ピッチで詰め込まれる日々だ。事務机の上には、今晚のうちに読むべき教本や資料が山と詰まれており、それを見て再び大きなため息をついた。

普通にやっては、睡眠時間が足りん。

そう思い、教本や資料をまとめ、持ち上げる。そのまま、部屋の片隅に隠してある水晶玉　魔法球へ近づき、その内部へ進んでいく。

魔法球の内部に入れば、先ほどまで感じていた閉塞感が嘘のように晴れ渡る。青い空と心地よい風は、それだけで閉塞感を吹き飛ばしてくれる。両手に持った大量の紙さえなければそのまま寝てしまいたい程だ。

しかし、自分の務めは果さなければならぬ。エヴァに貸してもらった魔法球内の執務室へ行くべく、足を踏み出すと侍女人形が何処からともなく現れ、両手の資料を抱える。

感動的じゃ。素晴らしい。

エヴァに感謝しながら、軽い足取りで執務室へ向かう。その途中、通路から見える砂浜から爆発音が響いた。何事かとそちらを見れば、>紅き翼くが稽古をしているようで、あちこちで爆発が起きていた。彼らも決戦に向けて、修練に余念が無い。そう思えば、爆発音も騒音ではなく、頼もしく聞こえ　聞こえるように努力しよう。

ともあれ、自分の仕事をこなすだけだ。執務室の扉を潜り抜け、椅子につく。大量の資料が机に、一部は床に置かれ、侍女人形が飲み物のカートを運んでくる。

さて、と勢いをつける為、声を発して、

「平和に向けて、やるとするか」

砂浜に座りながら、未央は皆の様子を見ていた。

ナギは先ほどの戦闘で自分が放った攻撃により、未だ苦悶している。流石に悪いと思い、今は自分が膝枕をして休ませている。その結果、笑顔で呻くという器用な状態をナギは維持していた。落ちないように、軽く頬に手を当てて支えながら、皆の様子を見ていく。

アルとゼクトは、エヴァを交えて重力刃の術式を研究していた。アルのオリジナル魔法だが、ある程度威力を抑えて使えるようにするつもりようだ。三人は魔法議論をかわっており、知的な修練といった所だ。後で自分も混ぜてもらおう。

詠春はクルトに剣術を指導しながら、自分の動きを確認している。見本として動きをつくり、クルトにそれを倣わせる。クルトは懸命に詠春の動きを真似て、再現していく。稽古を始めて数時間にも関わらず、ある程度の形が出来始めている。詠春が言った通り、筋が良い。

ラカンを見れば、ガトウとタカミチがしている咸卦法かんかほうのトレーニングを見物していた。タカミチには、クルトには内緒で学習促進概念【よく学べ】の賢石を渡してある。人の事睨む子にはあげないわいや、でも不公平はやはりよくないかしら、クルトにも渡すべきか悩んでいると、タカミチが咸卦法かんかほうに失敗して、手元に気と魔法の爆発を起こしていた。タカミチはそれに表情を暗くするが、

「タカミチ、気を落とすな。咸卦法かんかほうは究極技法とも言われる高難易度の技法だからな、すぐ会得されたら俺の立場が無い」

ガトウがそういって、苦笑しながら彼をフォローした。タカミチも彼の心遣いで表情を明るくし、再び稽古に没頭し始めた。その様子を見たラカンは、同じように咸卦法かんかほうの仕草を始めた。

「んー……、自分を無に、左手に魔力、右手に気……」

いやいや、流石にラカンでもそれは無理でしょ。

等かんかほうと思っていると、ラカンの体が急に力強いオーラを噴出した。
咸卦法かんかほう、成功。

「おお！ 出来たぜ！ 流石俺様、天才すぎて罪になるな……」
「そんな馬鹿な……」

思わず呟く。ガトウとタカミチも振り返り、ラカンを見て唾然かんかほうとしている。幾ら歴戦の強者であるラカンとはいえ、咸卦法かんかほうのような技巧を一発で覚えるとは、彼のチート具合も大概だ。しかし、戦力アップにはなる為、少々複雑な思いが胸によぎる。

はしゃぐラカンの様子を見ると、何処からかピシリ、とヒビの入る音が聞こえた。何処からの音か、周囲を見渡すがヒビの入った様子の建物や植物は無い。再び音が響いた。ラカンの体からだ。

「ん……？ あ、やべ」

ラカンがそういった瞬間、悪寒に襲われる。ナギを抱えて木陰に走りこむ。ガトウもタカミチを抱えて距離を取った様子が見えた。他の四人は何事とラカンを見て、逃げ遅れた。

更に連続してヒビの入る音が走り、ラカンを中心に爆発が発生した。

半径十m程に魔力と気が迸り、逃げ遅れた四人をなぎ払った。
咸卦法かんかほう、実は失敗してた、という事だろう。

> 紅き翼くの三人はまだしも、クルトは問題だ。姿を探すと、詠春が覆いかぶさって事なきを得ていた。流石の詠春クオリティに感心する。爆発の中心だったラカンを見れば、ギャグ漫画のように黒

こげになっていた。あまりダメージは無いようで、笑いながら体を掻いている。

全く騒がしい、思いながら抱えていたナギを見れば、こちらの腹を抱えこむように捕まっていた。

「……ナギ、何してるの」

「大事なものを決してはなさねえように……捕まえてるのさ」

普段であれば、突っ込みを入れる台詞と行動だ。しかし、今日は彼に少々酷い事をしてしまった事もあり、

「そう、ありがとう」

そういつて、そのまま膝枕に移行した。体を起こして、彼の後頭部を太腿に乗せる。

「み、未央がデレた……!?!」

「何言ってるのよ」

彼の台詞に苦笑する。

「いつもデレてるつもりよ」

「デレてる女は男のチンコーを打撃したりしねえよ!」

「そ、それは悪かったわよ……、もうしないわ」

「絶対だぞ、絶対! あ、これ振りじゃねえから!」

「そんなに念を押さなくてもわかってるわよ」

絶対だからな、と言ってナギは膝枕を堪能すべく、昼寝に入った。

ここまで怒るとは、これは冗談でも二回目は駄目ね……!!

そう心に刻み込んだ。

ふと、離塔にあるアリカの執務室が目に入った。ここ数日、魔法球に入らない日はない程の激務に追われている彼女の手助けを出来ていない。そう思い、右手に意識を集中させる。概念を圧縮するイメージを持つと、掌の上に青い球体が現れる。概念が外に広がるうとする勢いを無理やりとどめている概念能力の結晶体だ。右手でそれを握りつぶすと、イメージした形状の賢石が掌に転がる。

【よく学ぶ】賢石の完成だ。

侍女人形に頼み、アリカへの差し入れにする。そういえば、アリカの机に置いておいた計画書、そろそろ読む頃だろうか。時間が空いた時に、彼女の意見を聞きに行こう。そう思いながら、太腿の上で寝息を立てるナギに手を当てた。

大量の書類と悪戦苦闘を繰り返していると、無性に甘いものが欲しくなる事がある。そんな時は侍女人形に頼むと、何処からかケーキを運んでくるのだから驚いた。エヴァに聞いてみたが、企業秘密だ、と調達元を教えてもらえなかった。

「残念だ……こんなにも甘いというのに」

ケーキを食べ終わり、口に残る生クリームを紅茶で流し込む。満足感で、ふう、と吐息が出た。その吐息と共に、さてやろう、という気概も沸いてきた。書類に向かうと、珍しく侍女人形が作業を止めるように手を出した。その手には、青い石　賢石が握られていた。

何か頼んでいた覚えは無いが、何じやろう。

悪いものではないだろうと思ひ、賢石を手に取り、魔力を込める。

【・よく学ぶ】

響いた声の印象から、恐らく学習促進効果のある概念だろう。気の回る事だ、効果の程を試す為、書類に向かう。その効果は数分で実感出来た。読み書きした文章がただの暗記ではなく、内容を理解して記憶されていく。専門的な単語であろうと頭の隅に辞書があるかのように、意味が理解出来る。

「これは良い、こんな物があるならもつと早くよこすように言わねば」

贅沢な文句を言いながらも、手と目を動かす。睨み合っていた難解な指南書も滞りなく読み終わり、普段の何倍も早く片付ける事が出来た。予定より時間が空いたので、大きくのびをする。ふと、机の端に書類が一つ残っている事に気づいた。

折角終わったと思つたというのに！

自分の不注意だが、爽快感が台無しになつた苛立ちをぶつけるように、乱暴に書類を取り上げる。表紙を見れば、未央の字だ。彼女がわざわざ書類を書いて出すとは何事だろうか、疑問に思い再び表紙を見れば、

【オスティア守護艦隊 作成計画 by 未央・柳！】

「わざわざ感嘆符までつけて、何考えておるんじゃ、あやつは」

やれやれ、とため息をつきながら書類をめくる。
最初は疑念で文字を追いつ、その内容に驚愕する。

アーティファクトで形成した竜を旗艦として、鬼神兵を強化した武神なる機動兵器十二体の配備。

めくったページには、各兵器の簡単なスペック表が書かれていた。ここ数日で培った知識でその性能を読み解けば、異常の一言が相応しい。

旗艦は先日の第二次オステリア攻防戦を経験した者三千人をまとめて乗せ、五十mを超える口から放たれる竜砲と、各部に備え付けられた千を超える砲台が攻撃力を発揮する。武神には未央が作成する騎士型自動人形が搭乗する事で、飛翔して戦場を駆け巡る鬼神兵となる。その武神の装備もまた、既存の戦艦を一刀両断するような武装が搭載されていた。

「あやつはオステリアを軍事国家にでもするつもりか？ それとも、これ程に、完全なる世界が手ごわいのか？」

どちらにせよ、こんなものを意図も聞かずに許可するわけにはいかない。書類を手に持ち、砂浜に向けて歩き出した。

砂浜で日を浴びながら、ナギと日光浴を楽しんでいた。

膝枕状態のまま、ナギは欠伸をしていたが、先ほどついに眠りに入った。寝顔は可愛いものだ、普段の変態具合が欠片も見えない。頬を撫でると、その方向に顔を傾けてくるので、まるで犬を撫でているような感覚に襲われる。

癒されるわあ。

周りで研鑽している皆を見渡しながらのんびりしていると、離塔からアリカが歩いてきている。足取りには力がこもっており、片手に書類を持っていた。机に置いておいた計画書を読んだのだろう、丁度いい。

距離がつまり、日差しを遮るように立ちふさがったアリカが声を荒げる。

「未央！ お主どういっつもりじゃ！」

「ちよっと、ナギ寝てるんだから静かにしてよ。どういっつもりって、何が？」

「この計画書じゃ！」

「出した通りの試みだけど、何？」

「過剰戦力ではないのか？」

「最低限、それくらい必要だと思っわよ。理由話しましょうか」

うむ、と返答してその場に座るアリカ。

「まず、>完全なる世界<には召還魔法の使い手がいるのよ。しかも、召還魔と人形の間みたいな存在で、普通より一段強い存在なの。それが墓守り人の宮殿からワラワラと出て来ると思っわ」

「ふむ、既存戦力で危ういと思う理由はそれだけか？」

「まだあるわよ。忘れてるかもしれないけど、相手も概念能力使ってくるから、召還魔に概念条文刻んだら、通常の戦艦じゃ一撃で落とされる可能性あるわよ」

「……まだあるのか？」

「ええ、更に魔法世界出身者の魔法を無効化する手段を出してくる可能性あるわ。そうなったら、精霊砲や神罰砲も無効化されるから、

それ以外の大火力兵器が無いと被害が増えると思っわ」

「……こういうのはなんじゃが、勝てるのか？」

「勝つ為のプランの一つが、それよ」

そういつて、アリカの持つ書類を指差した。

「……わかった、許可しよう。形成にかかってくれ」

「じゃあ明日には出来るから、宜しく」

「早すぎるわ！」

「私のアーティファクトだもの、それと旗艦の竜を維持するにはアリカの魔力必要だから」

「聞いておらんぞ!？」

「今言ったもの、当然ね。質量の割りに低燃費になるはずだから、テスト付き合ってね」

「わかった……。いいか、ここまでやるんじゃから、絶対に勝つぞ」
「当然よ、私たちに任せて頂戴」

うむ、と返答して、アリカは離塔へ向けて歩いていく。

彼女の承認は得た、後は自分のアーティファクトをフル活用して、軍団を形成するのみ。

先日、エヴァ戦で形成した幼竜、それを守るように展開する十二体の武神。

円卓の騎士って所かしらね。

喧騒も気にせず眠り続けるナギを撫でながら、彼らにつける名前を考えていた。

第四十六話（前書き）

本話あたりから独自設定が入ります。
お見逃し頂ければ幸いです。

第四十六話

赤い光が空間を満たしていた。

石造りの宮殿　墓守り人の宮殿、最奥部。

黒の衣を纏った魔法使い、ライフメイカー>造物主<。

かざした手の先では、二mを超えんばかりの巨大な鍵が浮遊して、赤い光を放っている。

黒い石材で出来た鍵は、青い光を放ちながら、その色を変えていく。

黒一色の身に、赤が混じり始める。

そして、赤黒く染まった鍵は鳴動を始めた。

その鳴動と共に、響く声がある。

【・ Rewrite (リライト)】

その声は、恐らく造物主の声なのだろう。

しかし、幼くも聞こえ、老いても聞こえるそれは造物主の姿を想像させるに至らない。

造物主は鳴動する鍵に触れる。

一際大きく震えた鍵に、造物主は首肯し、背を向ける。

その目の前には、客人が居た。

老いた少年。

「準備が出来た、という処かの」

ゼクトだ。

彼の言葉に、造物主は首を横に振る。

「少しばかり、時が必要だ。概念能力が>黄昏の姫巫女<の、>魔

力完全無効化能力<の代わりに務められるか、見極めなければなら
ない」

「それはどれ程じゃ？」

「一週間程。そして、一度発動すれば七時間で全ては終わる」

そうか、とゼクトは腕を組む。

「やはり、待つてはくれぬか？」

「分かっているだろう。二千六百年、我々は願ひ続けた。善く在れ、
と。しかし、何も変わりはしなかった」

造物主の声には、深い絶望が滲んでいる。

ゼクトも、その言葉を耳にして瞑目する。

造物主は続けてゼクトに声を投げた。

「魔法世界は、もう持たない。人々の腐敗は、止まらない。ここま
で来ては、もうやり直すしかないだろう」

そう言つて、造物主は歩き、ゼクトとすれ違つ。

すれ違いざま、造物主は暗い声で呟くように、言葉を作つた。

「それと、万が一の為、今夜中に>黄昏の姫巫女<は確保する」
「なんじゃと？」

オスティアの王宮正門。

石造りの巨大な門が聳え、両脇に兵士が配置されている。

既に夜も深く、街灯の光が届かぬ先は夜の闇に包まれていた。

門番として詰めている兵士は、両脇に二人づつの計四人。彼らは

眠気を懸命に堪えながら、交代の時間を心待ちにしている。

右方に控える兵士の一人が、愚痴のように声を作る。

「今の情勢で、この王宮に忍び込む奴なんて居ねえだろ」

欠伸をしながら愚痴る。愚痴の声は夜の寒さで白い息となり、傍らの同僚にも伝わった。

「同感だよ、他所の皇族、元老議員、魔法騎士団のお偉いさん。そこらの泥棒じゃ手も足も出ない」

「つまり、お前に任せて俺は居眠りをしていい、という事には」
「ならんな。諦めて見張れよ」

お互いに溜息をつく。

寒い。

オスティアは浮遊島の上にある性質上、気温が変化しやすい。

夜になれば一気に気温が下がる事もあり、兵士達の中でも夜番は敬遠されていた。

寒さをやり過ぎすべく、彼らは手を擦り合わせて僅かな暖を取っていた。

そんな中、何処からか暖かい風が通り過ぎた。

春の陽気のような、穏やかな眠気を誘う風だ。

兵士達は周囲を見回す。しかし、そのような風を出すような火も、太陽も無い。

異常事態に兵士達は武器を構えて、警戒心を持って周囲を見回すと、門の正面にある通りを、一人の青年が歩く姿が見えた。

既に深夜、一般人が出歩く時間ではない。

「止まれ！」

魔法の発動体ともなる槍を突きつけ、一人が警告した。

青年はその声に応じるように、そこで歩みを止める。街灯の光が青年の顔を照らした。

白い髪に青い瞳、青いブレザーのような服を着込んだ青年だ。

両手をズボンのポケットに入れたまま、怯える様子も無く、彼は立ち止まった。

「この時間は王宮に入れる事は出来ない、明日出なおしたまえ」

生真面目に兵士の一人がそう投げかけた。

青年はその声に反応せず、感情の見えぬ瞳で兵士達をただ見ている。

一陣の風が吹く、肌を刺すような冷たい風だ。しかし、兵士達の周りには、未だ暖かい風が纏わりついており、そこで一人の兵士が風の正体に気づき、声をあげた。

「魔法の風だ！ 恐らく睡眠作用の」

そこまで言った所で彼の言葉は途切れた。

彼だけではない、門番として詰めていた他の三人もまた、彼と同様に意識を手放して、その場で倒れこみ、深い眠りに落ちていた。

兵士達が眠った事を確認した青年は歩き出す。すると、彼の影から別の人影が現れた。

炎を纏った巨漢の男。

雷光を奔らせる中背の男。

水を渦巻かせた細身の男。

そして、青年は砂塵を漂わせて門へ進む。

王宮のある一室、キングサイズのベッドと簡素な化粧台と衣装ケースが置かれた部屋。

アスナに宛がわれている部屋だ。

部屋の明かりに照らされているのは四人。

部屋の主であるアスナ、彼女の護衛であるガトウ、そしてガトウの弟子であるタカミチとクルトだ。

アスナはベッドに入っており、タカミチが困りながらもアスナに話をしていた。

「そうしてナギさんと未央さんは、>紅き翼<の皆と世界中を放浪していたんです」

「……」

タカミチが話しているのは、>紅き翼<の四年間の足跡だ。アスナに乞われ、一番詳しいと自己申告したタカミチが話をしている。

ガトウはそれをただ見守り、時折口元に指を送っていた。煙草を吸う仕草のそれは、癖となっっているものだろう。クルトは目尻に薄く涙を浮かべ、欠伸をかみ殺しながらタカミチの話に耳を傾けていた。

「という事もあって、二人のエピソードは事欠かないんだ。それにしても、いきなりあの人達の話が聞きたいなんて、何か気になる事でもあったの？」

タカミチが素直な疑問をアスナに投げかけた。

人形のように感情を表さず、淡々と日々を送る彼女から何か乞われたのは初めての事だ。

その問いも、正直答えがもらえとは思わず、とりあえず発してみたものであったが、予想外に回答があった。

「 楽しそう、だったから」

「 え？」

「 ……」

それ以上は無い、と彼女は沈黙で答えた。

タカミチは首を傾げる。耳を傾けていたクルトもまた、その答えは理解出来なかった。ただ一人、ガトウがその答えの意味を知り、渋い表情で頭をかく。

> 魔力完全無効化能力<を持ち、人としてではなく兵器として扱われ、生きる事の楽しさを一切経験していない少女にとって、> 紅き翼<の様子は理解しがたいものだったのだろう。

大人の都合、言い訳にもならんな。

出来るならば、彼女を平和な世界に送り届けたいと、ガトウはそんな事を思っていた。しかし、王族に連なる彼女の身を、自分一人でなんとか出来るとは思えない。

やるならば、そうだな。 > 紅き翼<の中でも情に脆そうな詠春や未央に協力してもらおうか。

戦後には恐らく英雄と呼ばれるであろう彼らの言ならば、多少の可能性はあるはずだ、と思考を作っている自分に苦笑する。早計だな、と。

苦笑しながら部屋の中をタカミチとクルトに任せ、廊下に出る。

廊下に出れば、背筋が冷えるような冷気が襲う。

寒い、と思いつつも、懐から煙草を出し、火をつけて、肺に煙を入れる。

ふう。

アスナについていけば、煙草の匂いを彼女が嫌っている事もあり、煙草を吸う事が出来ない。吸うなら今のうちに、一人廊下に出て一本だけ、という日々が続いていた。

貴重な一本をゆっくりと味わうように吸う。チリチリと赤い火が

煙草を燃やし、煙を口内で回す。惜しむように口から煙を吐き出す。虚空に踊る紫煙を見て、ふと思った。

煙で輪を作ったら、受けるかもしれないな。

思い、思いつく方法を幾つか試すが、なかなか輪にならない。

難しいな、と呟き、再び吸おうと思えば、もう煙草のフィルター一杯に吸っていた。輪の作り方は次回の課題、と手元の携帯灰皿に吸殻を放り込む。

室内に戻る前、廊下の様子を見ておこうと左右を見た。

右、ランプに照らされた廊下が見える。巡回の兵士も今は居ない。

左、やはりランプに照らされた廊下が見え、人の影があった。

四人。

学生のような青年、筋肉質の男、細身の男が二人。

どう考えても兵士には見えない。

アスナの居る部屋のドアを、強く二回叩き、一拍おいて更に一度叩く。

警戒しろ、という中のタカミチとクルトへの合図だ。

即座に鍵がかかった。それを確認すると、両手をポケットに入れて四人組に向かう。

「申し訳ないが、ここから先は関係者以外立ち入り禁止だよ」

四人組に立ちふさがり、警告を発する。

彼らが止まる事を期待してはいなかったが、意外にも彼らは立ち止まった。

距離十m。

自分の拳なら届く距離だ。そう思いながら、ポケットの中に納めた拳を握る。

居合い拳、適当に名づけた技法のそれは、剣術である居合い抜きを拳でやるものだ。気で拳を抜き、放つ速度を加速させ、拳圧で相手を打撃する。近すぎれば使いにくいものだが、この距離ならば上手く扱える。

学生のような青年が、こちらに応答した。

「すまないけど、少し眠っていてくれるかな」

右手を前に出しながら言った。

魔法を使われる、長年の経験はその思いを得た体を動かした。

右手がポケットから抜き、振る。

空気を切り裂く音と衝撃が青年に向かった。

しかし、彼の手前、虚空でその衝撃が弾かれるのを見た。

魔法障壁、それもかなりの強度。

こちらの対応に、青年の左右に控える男達も動いた。

一人は拳に火を灯し、一人は足に雷を纏わせ、一人は周囲に水を渦巻かせる。

バチリ、と空中で響く音があった。

瞬間、体全体を痺れさせるような衝撃が襲う。目の前には、雷を纏った男。

何時の間に接近されていたのか、と思いながら両手を抜き、右のアップパーカートを放つ。

しかし、手ごたえが無い。やはりというべきか、既にこちらの懐におらず、距離を取っていた。好都合だ、そのまま両手を中央であわせ、かんかほう咸卦法を発動させる。

体に力が沸き上がる事を感じながら、アスナの部屋のドアに立つ。敵は恐らく>>完全なる世界く、未央の話では、アスナは彼らの計画のキーパーソンだ。連れ去られるわけには行かない。

再びポケットに両手を入れ、廊下ごと彼らを打撃した。

タカミチとクルトは、アスナを連れて暗い通路を走っていた。アスナの部屋にある隠し通路、ガトウからの警戒の合図を受け、戦闘音が響き始めた事から彼らは逃走を選んだ。

足元が暗く、時折転びそうになりながら、タカミチは>紅き翼<へ、クルトはアリカへ連絡を取る。

「タカミチ、姫様とは連絡がついた。そちらはどうだ」

クルトがタカミチに声をかける。振り向いたタカミチの顔は苦渋の色が浮かんでおり、

「ナギさんと未央さんは二人で泊まりの外出、ゼクトさんがどこかに外出中で、ラカンさんは酔いつぶれてるって……。これるのは、詠春さんとアルさん、それとエヴァの三人だけらしいよ……」

「何をしているんだ彼らは……！」

クルトは苛立ちを隠そうともせず、不機嫌な表情で眼鏡を押し上げる。

「とにかく、姫様の元へ行こう。相対的にだけど、あそこが一番防御が硬い」

「わかった」

クルトに返事をしながら、タカミチはアスナの手を取る。

「行こう、皆が来るまで僕とクルトがなんとか君を守るよ」

無理に笑顔を作り、タカミチは親指を突き出す。それを見るアス

ナノ表情は、やはり感情が無いものだ。
しかし、

「……ん」

僅かに頷き、タカミチの手を握り返した。
彼らは走る。ガトウの事を信じながらも、不安に心を押しつぶされそうになりながら、アリカの元へ急ぐ。

第四十七話

破裂の音と衝撃が廊下を走りぬける。

桜の色をした閃光が廊下を塞ぐように放たれる。

対抗するように炎が吹き上がり、閃光と激突。

炎の後押しをするように、雷と砂塵の刃が放たれ、勢いを失った閃光は四散する。

そのまま、炎と、雷と、砂塵が白いスーツを纏った騎士を襲う。

彼は舌打ちした、同時に爆発が起きる。

彼の眼前にある石床が砕け、襲い来る力に抗いを作った。

しかし、全て防ぐ事は叶わず、白いスーツの節々は黒く焦げ、雷により膝は震え、砂塵によって切られた体は血を滲ませる。

しかし、騎士は未だ四人の行く先に立ちふさがる。

抵抗の意思は連打となる。

連打は敵の魔法障壁を一つ一つ、着実に破っていく。

四人の眼前まで連打が到達すると、彼らの目の前に流水の壁が現れ、連打を押し返していく。

それを契機に再び桜色の閃光が放たれ、流水は押し返される。

一進一退、いや、白の騎士の顔に汗が浮かぶ。

血が滲み、左腕を包むスーツは赤黒く染まり始めていた。

それでも彼は連打を止める事なく、繰り出し続ける。

やれやれ、こんなクラスの相手が来るとは。

愚痴りながら、眼前の四人が前へ行く動きに合せ、素早くカウンターを合せる。

前へ踏み出す足の膝に、前傾する体の肩に、拳を掴もうと伸ばされた指先に、居合い拳を放つ。

強引に前へ出ようと力を込めた動きが見えた瞬間、咸卦法かんかほうによって強化された攻撃を放つ。拳圧が桜色の閃光を纏い飛び、廊下を覆う閃光は四人組を後退させる。

四対一、数の不利を両の拳と修練による拳速、更に廊下という閉鎖空間を生かしてに抵抗する。目的は一つだ。

> 紅き翼くが来るまでの足止めだ。タカミチとクルトは隠し通路から逃げてるだろうから、精々無駄に時間を過ごしてもらおう。

思いながらも、手は止めずに居合い拳を連打する。

相手に拳が当たる度、咸卦法かんかほうで強化しているにも係わらず骨に衝撃が走る。その衝撃は手首まで響き、痛みがある。しかし、その痛みは足止め出来ているという結果だ。

無駄じゃあない、成果がある限り打ち続ける。

> 完全なる世界くの四人組は、幸いにも足止めに付き合ってくれている。

しかし、何故この部屋の位置がバレたのか、> 紅き翼くの協力で国内の同調者は一掃したはずだ。> 紅き翼くの情報が完全ではなかったのか、それとも別の要因か。

考えて、一瞬思考に没頭していた事に気づく。

連打に一瞬の間隙が出来た。

取り戻すべく拳を強く握り、前を見ると、先ほどまでと違う光景が見えた。

砂塵を渦巻かせた青年が一步前に、他の三人が背後に控えている。先ほどまでと真逆の陣形だ。

青年が口を開く。

「素晴らしい実力だ。技量、精神力、全てが一流。賞賛に値するよ」

「ありがとうよ、それなら俺に免じて引いてくれるかい」

「そうも行かない。こちらも引けない事情があつてね」

そう行つて、彼は右手を上げた。

合図のように、背後の三人が構え、攻撃を放つ。

しかし、それは青年に向かうもので、

声が聞こえた。

【・ 世界は一瞬で真逆となる】

瞬間、視界が塗り変わる。

眼前には一人佇む青年、その横にはアスナの部屋に通じるドアがあつた。

つまり!?

思った瞬間、背後に三つの衝撃が走つた。

タカミチとアスナを連れて、薄暗い隠し通路から脱出を果たした。

王宮を蜘蛛の巣のように走る隠し通路を潜り抜け、出た場所は会議室のような部屋だ。

部屋の中央、人に囲まれている姫様 アリカ様の姿を見る。

「アリカ様!」

タカミチが声をあげる。

馬鹿、姫様の周りに居る奴らが見えないのか。あれは帝国の皇族と護衛だぞ。

彼らに囲まれていたという事は、何かしら問い詰められていたに違いない。下手に口を出せば後に尾を引く可能性がある。しかし、アリカ様は周囲の人間に断りをいれ、こちらに歩み寄ってきた。

その表情はいつも通りだ、冷静な表情を変えず僕らに声をかける。

「よくここまで来た、流石ガトウの愛弟子だな」

そう言って、微笑まれた。

「……はい！」

「……」

タカミチは少し置いて勢いよく返事をしたが、僕は返事が出来なかった。

常に冷静で、表情を変えずに物事に当たる姫様が自分達に微笑みかけてくれたのだ。

記憶を映像化する機械、幾らだったか。

非常事態にも係わらず、そんな事を思ってしまった。

自分の暢気な思考回路に渴を入れて周囲を見る。

連合の元老議員、帝国の皇族、アリアドネー魔法騎士団の責任者、そしてそれらの護衛。

皆が集まっているが、その表情には苛立ちが見える。

ふと、気づいた。

「姫様、父王様がいらっしやいませんが……」

質問に、アリカ様は一瞬目を伏せて、言った。

「父君は兵士を率いて侵入者の撃退に向かわれた」
「……馬鹿な」

声に出て、迂闊さに気づいて口を手で塞ぐ。

アリカ様はこちらに気づいてはいたが、一つ頷いただけで咎める事はしなかった。

こちらに聞こえるように、連合の元老議員が声を出した。

「いやはや、まさか直接襲撃されるとは、なんとも情けないですな。まさか未だ内通者が居るのやもしれませんなあ」

そう言って、周囲を見渡す。

「なんだこいつは？ そんな事を今、この場で話すメリットがあるのか？」

案の定、帝国勢はその言葉を聞いてあからさまに不機嫌な表情を作る。亜人の唸り声が低く響き、部屋に緊張が走る。しかし、その亜人を戒める声があがる。

声の主は、帝国の皇族、第三皇女テオドラ。

「その可能性はある、しかしじゃ。この場を襲撃されれば皆一網打尽、我らは一蓮托生でしょう。内通者は居るかもしれませんが、我らの中には居ないのでは？」

元老議員を微笑みで牽制しながら、亜人を治める。

幼くとも流石皇族だ。亜人の兵士は唸るのを止め、自らの装備の

点検を始めた。それに倣うように、各国の護衛も各々の準備を始めた。

オステイアの兵士はこの部屋に居ない。父王と共に侵入者の撃退に向かったのだろう。

ならば、自分とタカミチが最悪の場合は姫様とアスナ様の盾とならなければならない。

決意を新たに、眼鏡を押し上げる。

ピントを合わせた視界の先には、未だ無事のドアがあった。

石床を靴裏が叩く音が幾つも重なり、硬質の音が耳を叩く。

オステイアの王を中央に、兵士三十名からなる一団が王宮を走る。彼らの懐には、青い賢石が光っている。彼らは先日の前線基地で起きた激戦を経験した兵士達だ。

オステイア王宮に呼び戻され、一部は父王付きの近衛隊として、他は本土防衛隊として再編されている。賢石を持ち、王を守りながら侵入者の排除に向かう彼らの士気は高い。【意思は力となる】という概念が込められた賢石を持つ彼らは、その士気が能力に直結する。

四力国が結託して、完全なる世界くに向かう為、ここで水を差されるわけにはいかない。

誰もがそう思い、戦闘音の響いていた現場へ走る。

そして、廊下を曲がった先、広いエントランスホールに一人の青年が見えた。

ブレザーのような服を着た青年、父王にはそれがアーウェルンクスだと分かり、

「奴は敵だ！ 討て！」

即座に号令を出す。

兵士達は号令に従い、剣を構えて突撃する。

【・ 意思は力となる】

同時に概念条文が読み上げられ、兵士達の体を青い光が包んだ。加速の勢いが増す。床を砕きながら風を切る彼らをアーウェルクスは無表情で観察し、顔を上げて父王を指差す。声が響いた。

【・ 世界は一瞬で真逆となる】

一瞬でアーウェルクスと父王の位置が交換される。兵士達の突撃は父王を襲う形となり、彼らは力の限り急停止をかける。

床が砕けるも勢いは止まらず、彼らは更に動きを追加した。

剣を床に突き刺し、その勢いのまま飛び上がる。

勢いよく飛び上がり、父王を掠めるように飛び去っていく彼らは廊下の果てに激突した。

更にアーウェルクスは動く。

元々父王が居た位置、つまり兵士達の中央で、

【・ 攻撃力は最大となる】

更に概念条文を追加、そして床に向かって指を指し、魔法を発動させた。

「>石の槍<」
ド・ウェルトラス

詠唱に従い、彼を中心とした床が石の槍となって周囲の兵士達に突き刺さる。

石の槍は、概念能力で強化された兵士達を貫くには至らない。しかし、衝撃で彼らを壁面に激突させ、行動不能に追い込む威力を發揮した。

戦闘開始から十秒もたたぬうちに、戦場に立つのはアーウェルクスと父王のみとなった。アーウェルクスは、ふう、と一息ついて服の裾を、埃を払うように撫でる。

「やあ、オスティアの王。僕らの理念に共感してくれていたと思うけど、気のせいだったかな？」

「……いや、気のせいではなかったよ。君達の目標には私も共感していた」

「過去形なのが気になるね。何故心変わりしたんだい」

「娘に叱られてな。しっかりしろ、と」

そう言っつて、父王は腰の剣を抜き、構える。

「やはり、父は娘に弱いものだ」

「……>黄昏の巫女くを渡してほしい、今なら我が主も」

口上の途中、父王の剣が振られた。

アーウェルクスはそれをかわしたが、剣は父王の意思を伝えた。最早貴様らに渡すものはない、と。

止められた剣は引かれ、新たな攻撃を繰り出す。

胸、額、喉、腕、幾つもの剣筋がアーウェルクスを襲うが、彼はそれを悉く避ける。

「仕方が無いね。君はよく協力してくれたけど」

アーウェルンクスの指が床に向かった。

「退場してもらおうか」

言葉と同時に、父王は跳躍した。剣を腰に構え、体当たりのようにアーウェルンクスへ向かう。

「>石の槍トリュ・ペトリスく」

動じず、魔法が発動された。

石の槍は父王の右足を抉り、貫通する。

「ぬぐ……!!」

しかし、止まらない。

残った左足で、父王は更に床を蹴り飛ばす。

父王の狙いは一つ。

相打ちだ。各国要人の、いや、娘の下には行かせぬ！

娘に聞いた限り、概念能力は幾つか種類がある。そして、アーウェルンクスが展開したものは敵味方を問わずに作用するものだ。

つまり、

「私の剣もまた、攻撃力は最大となっているはず……!!」

先ほどからこちらの攻撃を、相手は全て受けずに回避していた事からも、それは確かだ。

突き出された剣は、言葉に従うようにアーウェルンクスの魔法障壁を打ち破る。

胴体の中心、最早避けようが無い。
力の限り柄を握り、吼える。

「おおおお!!」

届いた。

「そうだね、貴方の剣も攻撃力は最大になるよ」

「ただだね、とアーウェルンクスは付け加える。

「概念能力のオンオフ、それ自体は声に出さずとも自由自在さ」

「自らの体で止まる剣を見て、アーウェルンクスは父王に声をかけた。

「そして、僕の魔法は元々貴方を倒しうる威力がある」

「左手が上げられ、詠唱が唱えられる。

「父王は未だ剣に力を込め、アーウェルンクスを貫こうとしていた。

「さようなら。元協力者殿」

「石の槍が父王を貫いた。

第四十八話

オステイアの王宮に至る正門を、三つの影が潜り抜ける。

> 紅き翼くの三人、表情を固くしながら彼らは走る。

門の脇に倒れた兵士達を一瞥し、彼らが眠っているだけと確認すると、王宮へ向かう速度を速めた。先頭に行く詠春が額に汗を浮かべ、焦りながら背後に声を送る。

「こんなイレギュラーな事態になるとは、気を抜いていたと言わざるをえないな」

背後に続くアルが、答える。

「ええ、帝国と連合の和平がなつたら後は最終決戦、未央の言葉を妄信しすぎましたね」

珍しく苦渋の表情を作るアルに、不確かな足取りで最後尾を走るラカンが叱責した。

「どつちにしろ、急ぐしかねえだろ！ つつ、うえ、まだ酒が残ってやがる……」

酔いつぶれていた彼を強引にたたき起こし、水入れごと口に叩き込みんだ結果、覚醒はしたものの酷い二日酔いの状態でラカンは走っていた。

王宮の入り口が見えた、しかし、彼らの足が止まる。

なぜなら、煌々と光る炎を纏った男が瞑目し、腕を組んで入り口を塞いでいたからだ。男の長く伸びきった髪が炎と同化し、夜の闇を照らしている。体の節々から炎が噴出しており、彼が普通の人間

ではない事を主張していた。
男の目が見開かれる。

「>紅き翼くだな」

炎の男が声を発し、一步踏み出した。足元の石床が赤く熱を持っている。

男の異常な様子に、三人は各々の構えを取り、警戒の体勢を作る。返事が無い事を苦とせず、炎の男は再び呟いた。

「暫し戯れてもらおう」

声と同時に、炎の男が大きく息を吸い込んだ。

【・ 熱は命である】

概念条文が響き渡った。同時に男の纏う炎が勢いを増す。

髪は炎は夜空を焼くように輝き、体から噴出する炎は宮殿の石材を溶解させ、周囲の植物を燃やし尽くす。

炎を纏った男から、炎の巨人へと男は変異する。

「灼熱地獄、ですな」

炎が広がった光景を見て、アルが汗を流しながら呟いた。

男には未だ距離があるにもかかわらず、炎の熱気が肌を焼く。

>紅き翼くの三人はお互いの視線を合わせ、首肯する。

炎の男が一步踏み出すと同時に、応じるようにラカンが一步前に出る。

そして、詠春が左に、アルは右に走り出す。

炎の男はそれを見て、

「させぬ」

呟き、左右の腕を広げた。両腕が赤々と燃え、周囲の空気を食い荒らし、炎を大きくした。瞬間、ラカンが叫び、

「おおらああああ!!」

文字通り爆発した。爆発による衝撃波は、男の炎を大きく揺らした。

気を体に充填し、叫びと共に体外へ放出させたのだ。気合大爆発と名づけられた技は、男の炎を揺らして仲間を奥に走らせる。

数分前まで頭痛に呻いていた表情は無く、ラカンの表情は引き締まっている。

体に纏う気は、戦場の空気を軋ませる。

「俺が遊んでやるぜ、熱血男」

構え、挑発するように軽口を叩くラカン。

応じるように、炎の男はラカンへ向かい、構えを取った。

「参る」

「応!」

炎と気合がぶつかり合った。

要人が集う避難室は、重く硬い空気が漂っていた。

断続的に響く戦闘音が一時止んだものの、何かが弾けるような戦

闘音が再び聞こえてきたからだ。

クルトはその中、タカミチと並び、守るべき二人の前に立っていた。

腰に携えた刀を握り締める。詠春と稽古を始めた際、未央から譲り受けたものだ。一方、タカミチはペンダントの青い石、賢石を指でもてあそびながら、何かを呟いていた。

耳を澄まし、呟きを聞く。

「……大丈夫だ、師匠なら大丈夫。僕は出来る事をやる、やるんだ」

繰り返す呟くその内容は、自己暗示にも聞こえた。

わからなくもない。

一旦止んだ戦闘音は、間違いなく師匠ガトウと侵入者のものだろう。しかし、師匠からの連絡は無い。つまり、師匠は侵入者に敗れた可能性が高い。

そう考えると、自分の動悸も激しくなる。戦争孤児である自分達を拾い上げ、育ててくれた師匠が。刀を握る手にジワリと汗が滲んだ。奥歯のかみ合わせが合っていない気がして、カチカチと歯が音を鳴らす。

落ち着け、落ち着け落ち着け！

繰り返す心の中で呟く。今は自分達がアリカ様とアスナ様を守らなければならないのだ。

怯えている暇は無いんだ。

手の汗をズボンにこすりつけるように、拭う。静かに息を吸い込み、浅く吐き続ける。

ふう、と長く細い息をつき、少々の落ち着きを得た。

同時に、入り口のドアから音が生まれた。

カチャリ、と静かにドアが開かれる。胸の鼓動が早鐘のように鳴り響く。

各国の護衛が身構える音が鳴り、室内の皆が入り口を凝視する。開かれたドアから、青いブレザーのようなズボンが見えた。続けて現れた白い髪。入り口から現れた侵入者は、ブレザーを着込んだ白髪の青年、アーウェルンクスだ。彼が部屋に入った瞬間、空気が変わった事を感じる。

血の匂い。

クルトはそう感じた。彼の服の裾についた赤い色は、血の色だ。生理的な嫌悪感が背中を駆け巡る。胃から何か競りあがってくるような感覚を堪えながら、懸命に相手を見る。各国の護衛も、敵意の視線で彼を凝視する。

しかし、彼はそんな視線を意に介さず、無表情に室内を見回した。視線が止まった、こちらを、いや、こちらの背後、アリカとアスナを見ている。

彼は二人へ向けて、手を差し出しながら、

「>黄昏の姫巫女くを渡してくれば、他の人間に危害は加えないと約束しよう」

どうだい、そう言って、彼はアスナ様に向かい、手を差し出した。アスナ様もアーウェルンクスも、共に相変わらざる無表情。

アスナ様は無表情ではあるが、アーウェルンクスに向かわず、タカミチの背に隠れるように動いた。そのタカミチはアーウェルンクスに立ちふさがるように、両手を広げる。

こいつのこういう所は尊敬出来る。

震えながらも、抵抗の意思を即座に示したタカミチの左に移動しながらそう思う。自分も、こういう所は真似出来るようになればいい、思いながら刀を握る手に力を込めた。

アーウェルンクスを睨んでいると、視線に違う色が広がった。

金色の髪、アリカ様だ。三人の前に立ち、アーウェルンクスへ向かって、勢い良く指を指す。

「テロリストの要求には屈せぬ。ましてや、子供を差し出して助命を請う恥知らずはこの場におらぬ！」

「その通りじゃ！」

アリカ様の声に応じたのは、帝国のテオドラ皇女だ。彼女は勢いよく首肯し、アーウェルンクスを指差す。彼女の周囲を固める亜人は、彼女から発せられる次の言葉をわかっているように、身を屈めて力を溜めていた。

テオドラは周囲の兵を鼓舞するように、胸を張って号令が発した。

「討て！！！」

『Ga ……！！！！』

虎の亜人達が吼え、飛び掛る。彼らの持ちうる爪と筋力は、魔法世界でも上位のものだ。その中でも、帝国の要人警護につく彼らの爪は、本来切り裂けぬものなど無いと言い切れる程、強力だ。

しかし、爪が障壁に弾かれる音が耳朵を叩く。彼らの爪は魔法障壁を切り裂く事なく、アーウェルンクスを後退させる事さえ出来ない。

それがどうした、そう言わんばかりの勢いで亜人達は再び飛び掛る。

速度が上がリ、虎の亜人達は捉え切れない速度に加速して、黄色い暴風がアーウェルンクスに纏わりつくような光景となる。

アーウェルンクスは暴風の中を歩く。散歩するような足取りで前進し、時折腕を動かすと、その度、亜人の呻き声上がる。

圧倒的すぎる。

> 紅き翼くは何をやっているのか、彼らの足ならもう到着してもいいはずだ。他人頼りになるようだが、あれを相手に足止めすら自分には出来ないだろう。飛び掛れば、容易く刀を受け止め、折られ、返す貫き手で胸を貫かれるイメージが浮かぶ。その間にも、アーウェルンクスは一步一步近づいてくる。

思わず一步下がってしまった。

その瞬間、アーウェルンクスに纏わりつく風に、新たな色が加わった。

青い鎧に短槍、アリアドネー魔法騎士団だ。

女性だけで構成された魔法剣士の一団が、帝国の亜人と協同し、攻撃の密度を上げる。

爪が弾かれる音の中に、金属質の音が加わる。

更に、自分達、オスティアの一団を、連合の魔法使い達が囲い込む。彼らに連れられて、テオドラ皇女、アリアドネー魔法騎士団の責任者、元老議員が囲いの中に入ると、彼らは即座に魔法を詠唱し、> 最強防衛くを展開。

四力国連合として、アーウェルンクスに立ち向かう。

「無駄だね」

敵はそれを無駄と一蹴する。

同時に姿勢を変えた。ポケットに手を入れ、散歩しているような

姿勢から、足を止めて腕を構え、前傾する。

突撃の構えだ。

亜人と魔法剣士の攻撃が更に密度を上げる。しかし、敵の魔法障壁は何重にも展開され、その身に攻撃は届かない。

突撃が開始された。

亜人と魔法剣士達は障壁に弾き飛ばされ、魔法使い達の展開する
>最強防御くと敵の魔法障壁が激しく拮抗する。敵は更に勢いを加えた。
>最強防御くを殴りつける。左右のストレートが繰り出されると、まるで紙のようにこちらの障壁は破壊される。

その様子に、誰もが思う。

力が足りない、悔しい。

敵は最早魔法使い達に迫り、彼らを蹴散らしている。来る。

握った刀を抜き、眼前に構えると、震える刀身が見えた。力の足りない事を自覚して、怯えで震える刀身だ。

無様だと、そう思う。

しかし、こつも思う。

立ち向かわなければ、一生後悔する。

タカミチを見れば、拳に僅かだが気を纏わせている。咸卦法かんかほうは修めていないが、気の扱い方はある程度覚えたとようだ。

視線が合う。

あつちも怯えていた。だが、抵抗するつもりのようにだ。

「クルト、僕らもやるんだ」

「わかつてる。足を引っ張るなよ」

思わず意地を張る。すると、タカミチが軽く笑い、クルトはいつも変わらない、と呟いた。こんなにも怯えているというのに、そう見えるのか。自分の鉄面皮ぶりに感心する。

眼前には、強敵が迫っている。背後には、憧れの人と守るべき人が居る。

息を吸い、止める。

目の前で、魔法使いの最後の一人が薙ぎ払われた。

敵と自分達を遮るものは、何も無い。

覚悟は決まった。

『うわああああ！！』

自分の掛け声と同時に、タカミチの声が重なって聞こえた。

タカミチとクルトは、アーウェルンクスに飛び掛った。

敵は彼らを障害とすら見做さなかった。

手を握る事もなく、足を止めて腕を軽く振り払う。それだけで、タカミチとクルトは弾かれた。

そして、アリカとアスナはアーウェルンクスと対峙する。

アリカが動いた。アスナを抱え、アーウェルンクスに背を向ける。

その背に、アーウェルンクスは殺意を込めて貫き手を作る。

そして、放った。

その瞬間を、クルトとタカミチは見ていた。

二人は、あ、と声を上げる。それしか彼らには出来なかった。

しかし、彼らが飛び掛った為にアーウェルンクスは少しだけ早く

足を止めた。

その時間が、介入を呼ぶ。

アリカの影から、ずるり、と何かが生えた。

それはアーウェルンクスの手を取り、反対の手で打撃した。

硝子が割れる音が連続して響き、アーウェルンクスが後方へ吹き飛んでいく。

介入者は、小さくも誇り高い悪のラスボスだ。

「少々遅れたが、間に合ったようだな」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。アタナシオティ 童姿の闇の魔王が、砂塵を操る人形に力を振るったのだ。

アリカはエヴァの姿を見れば、ふう、と大きく息を吐き出した。

「遅すぎる、完全に遅刻じゃ」

「王宮の転移魔法妨害が思ったより面倒でな、文句はそちらに言うてくれ」

さて、とエヴァは敵を見た。

打撃で吹き飛んだものの、アーウェルンクスは平然と立ち上がった。

「吸血鬼の真祖か、君はどちらかと言えば、こちらの陣営だと思うけど」

「おいおい、何を馬鹿な事を言っている。お前達は世界を一度滅ぼすのが目的なのだろう？」

「確かに、そういう一面もあるね」

「なら、私の敵だよ」

何故ならな、とエヴァは指を指す。

教えてやるうか、と笑顔を作り、

「私はな、やっと時間が進むんだよ。成長するんだ。しかも賞金首手配も解除。今まで我慢していた事をやり倒さなければならん。日の下で馬鹿みたいな顔で昼寝し、友人とアホな話をしながら飯を食い、好きな遊びをやり倒し、そのうち飽きたら番でも探^{つかい}してみる。人生を謳歌せねばならんだよ」

だから、と続ける。

「次の人生が幾ら幸福になると、今の私には関係ない。今の私だからこそ、楽しめる人生というものがある。六百年の鬱憤を晴らすんだよ。わかったか？ わかったなら」

去れ、という声と同時に、アーウェルンクスの懐に飛び込んだ。アーウェルンクスは反応すら許されず、腹部を打撃され、そのまま断罪の剣くが胴を貫いた。

しかし、アーウェルンクスは体を貫かれながらも生きていた。エヴァの頭を掴み、

【・ 攻撃力は最大となる】

概念条文を唱え上げ、そのまま無詠唱で>石の槍くを発動させた。
>石の槍くは威力が最大まで強化され、エヴァの頭部を容易く貫通、破壊した。

「ひ……!？」

頭部を形成していたものが飛び散ると思い、思わず悲鳴をあげるも、四散したのは霧だ。頭部を失ったエヴァの体は、そんな事を意

に介さず、アーウェルンクスに更なる打撃を加え、壁を破壊し、外へとはじき出した。啞然となり、頭部を失ったエヴァを見てみると、霧が頭部の位置に集まり、一瞬の間に頭部を再生させた。

「ふん、概念能力による魔法強化？ だからどうした。私を殺したのなら一撃で原子すら吹き飛ばしてみろ！」

小さな魔王はそう吼え、外に吹き飛ばされたアーウェルンクスを追った。

オステイアの王宮の上空で、静かに観察していた。眼下では、幾つかの戦闘が繰り広げられている。

王宮正面では、炎の巨人とジャック・ラカンが戦っている。

王宮の右方では、水の魔法使いとアルビレオ・イマが対峙している。

王宮の左方では、雷の格闘家と詠春・青山が拳と剣を競い合っている。

最後に、王宮の最奥部では、アーウェルンクスとエヴァンジェリの戦闘が始まった。

自分　デユナミスの役割は、彼らが>黄昏の姫巫女くを連れ出すのに失敗した際、皆殺しにしても奪うケースとなった場合に召喚魔を展開し、多勢を作り出す事だ。恐らく、そのケースとなったのだろう。そう思い、召喚の準備を始める。

すると、どこかで何かにヒビが入る音がした。

周囲を見ても、何も無い。当然だ、上空に壺や皿があるわけがな

い。

しかし、再び音がした。亀裂が入るような音。それは、自分の真上からで、

「おらああああ！！！」

叫び声と共に、上空が割れた。

まるで硝子が砕けるように空が割れ、向こう側には別の風景が広がっている。

割れた空間から現れたのは、赤毛の少年だ。

その少年は、空間から飛び出し、こちらを見るなり、わめき始めた。

「てめえ、>完全なる世界くだろ！ ああ言わなくていいわかってるぜ、なにせお前超怪しいからな！ つうわけで殴る！」

なんとという直情馬鹿。

しかし、身に纏う魔力は強大。容姿と言葉遣いから察するに、情報にあつた>千の呪文の男く、ナギ・スプリングフィールドだろう。油断は出来ない相手だ。これを差し置いて召喚は出来ないだろう。

なんとか無力化し、召喚の儀式をせねば。

第四十九話

未央と別れ、一足先にオスティアについた時、目の前にはあまりにも怪しい男が見えた。

王宮の各所で戦闘が始まっているにもかかわらず、上空でそれらを見ており、さらに外見は黒のローブと怪しげな仮面をかぶっている。

これで敵じゃなかったら世界が色々間違ってたんな！

そう思い、啖呵を切って殴りかかる。

相手は抗弁なく戦う姿勢を見せたので、やはり敵だったようだ。

世界がまだ正常のようではなかった。

見た限り、間違いなく魔法使い系、後衛タイプだ。ならば、普通の拳で十分対応出来る。

右腕を引き、左手に杖を持って進む。拳が届く距離に入る前、相手に動きがあった。

広がった。

黒いローブが盛り上がり、男を背後から抱えるような黒の巨大人形を造る。影属性の魔法、確か操影術そうえいじゆつの一種だと思いが、よく覚えていない。使えない魔法覚えててもしょうがねえしな！

ともあれ、やる事は一つだ。突っ込んで殴る。

それを成した。

右の拳を相手の胸に突き出す。

しかし、黒の巨大人形が纏う黒衣が滑るように動き、拳を止めた。まるで鋼鉄でも殴ったような手応えが拳にある。

堅い。

しかし、全力で殴れば砕けそうな気もする。そうしようと再び振りかぶると、喉元を貫くような影の矢がある。

「おわ！」

驚きながらもけぞって回避する。追うように追加される影の矢の源は、黒の巨大人形だ。魔法使いが手をかざしただけで思いのままに動いている。

眼下、地上のオスティア王宮でも戦闘音が激しさを増している。> 紅き翼くの皆が戦っているなら、別に援護は不要だと思うが、

王宮を壊しすぎるのは不味い気がすんなあ。

未央が姫さんに申し訳なさそうに頭を下げる図が頭に浮かぶ。そういう場に自分は連れていってもらえない為、それを背後から見ることになるのだが、

女に匿われるダメ男みてえだな。

思わず額が汗をかく。そういう印象を周りに当たるのは不味い。早々に決着をつけてそんな駄目未来の到来を防がなければならない。ふっ、と深く息を吸い、腹に力を入れる。

よし、行くぜ。

夜の空を、より深い闇が包む。

デュナミスの展開する操影術の近接系、> 黒衣の夜想曲くは時間と共にその規模を大きくし、今や二十mを超える巨大な人形となっていた。デュナミスの動きを倣い、ある時は拳を、ある時は影の矢を射出してナギを追いつめる。はためくローブは夜の空を覆い、夜

空の月を隠していた。

一方のナギは、その攻撃を一步も動かずに迎撃する。

魔力で足場を作り、腰を据えて相手を見据える。未だ少年の域をでない彼の体躯は、黒の巨大人形と比較して余りにも小さい。だが、彼の繰り出す拳は全てを弾き飛ばす。

拳が来れば拳をあわせ、影の矢が来れば振り払うように蹴りを放つ。

概念能力を纏ったナギは、自分が信じられる限り、全ての事象を打撃する。

巨人が動き、攻撃を放つ度、青い爆光が夜空を照らす。質量の差があるにも関わらず、戦闘を支配しているのはナギだ。しかし、それをただ許す敵ではなかった。デュナミスは巨大人形に抱かれながら呟く。

【・ 何も居ない所に、何か居る】

呟きが完遂された瞬間、ナギの打撃がデュナミスを捉える。それは連打となって、巨大人形の防御を無視してデュナミスに放り込まれる。

しかし、ナギの攻撃が止んだ。

それは、ナギが背後から攻撃を受けた為だ。

ナギの背後、何も無い空間からいつの間にか巨大な腕が生えていく。その腕は黒い刃を持ち、再びナギへ攻撃を加えようと力を振るった。

「ちい！」

舌打ちと共に、ナギはそれを振り払う。しかし、その腕は一つだけではない。ナギが視線をはずした方向から幾重にも生え、攻撃を加える。視界の外から繰り出されるそれを、ナギは打ち払う。繰り出される行為は、空を拳で抜く。振り返りもせずにナギは全ての攻撃を打ち砕いた。デユナミスはそれ見て呻く。

「なるほど。恐るべき概念能力だ」

言いながらも、さらに影の簡易召喚魔を追加する。鋭利な爪を持った腕、巨大な槌を持った腕、鋭い影の槍が夜空から生まれ、ナギを襲う。

「無つ駄あ！！」

気合いを込めて一喝するナギ、その声に応えるように、彼の全身が青い光を放つ。左右のワンツーで周囲の簡易召喚魔が吹き飛ぶ。しかし、ナギの視界の外からは次々と新たな召喚魔が湧き出てくる。それを見てナギは魔法障壁を強化する。手を止め、腰を落として攻撃を変える。腰をあげて回転するように放つ連打をやめ、全力の一撃を放つべく、力を貯める。

連打が止むと同時に、召喚魔がナギに殺到する。

巨大な腕がラリアートのように薙払いを作る。

刃を打ち鳴らし、幾重もの剣が降りおろされる。

それらはナギの魔法障壁に悉く防がれる、だが、その代償として魔法障壁も砕け散った。

召喚魔達は、再度攻撃を放つべく、降りかぶる。デユナミスもまた、決着をつけるべく、黒衣の夜想曲への従えて突撃した。

黒の軍勢がナギを覆う。

夜空を埋め尽くすような多勢を前に、ナギはただ一人、デュナミスを見つめる。

「吹っ飛びやがれ……！！」

そして、拳が放たれた。

正拳突きだ。

拳は青い光を纏わせ、その軌道を照らす。

振り抜かれた。

拳圧の軌跡を描くように、青い光が一直線の線を描く。

夜空を覆い隠す黒衣を、青い光線が両断する。

そして、打撃は効果を発揮した。

デュナミスの腹部に打撃が走る。衝撃と共に青い光が炸裂し、それは胴体を貫通する。全身を弾かれ、デュナミスの仮面が砕けて、褐色の肌を露わにする。黒い瞳からは白い液体が流れ出た。

デュナミスは落ちる、胴から下が破碎され、上半身だけとなった体が黒衣と共に地に落ちる。

月を覆い隠していた黒のマントが消え、月が再び王宮を照らしはじめた。照らされた王宮では、未だ破碎の音と衝撃が響いていた。ナギはそれらを見て、そのうちの一つに向かう。

下半身を砕かれながらも、デュナミスは意識を保っていた。人間ならば即死だが、>造物主ライフメイカーの手によって生み出された人形である彼は未だ意識を保っていた。

上空では、ナギが王宮の最奥部に向かって移動を始めていた。

敵の死体を確認しないとは、詰めの甘い男だ。

それによって、デュナミスは召喚の儀式を行う機会を得た。上半身のみとなった体ではあるが、> 黒衣の夜想曲<を展開し、体を浮かせ、周囲に魔法陣を展開する。

背後の空間から現れる物がある。

鍵のような杖だ。

> 造物主ライフメイカーからデュナミスが受け取った杖で、魔法世界の根源に繋がる鍵。

杖を手に取り、デュナミスは更に詠唱を重ねた。魔法陣が回転を始める、刻まれた文字が輝き、空間を振るわせる。それを確認すると、デュナミスは呟く。

【 ・ ここには居ない 】

概念条文が完遂されると、魔法陣が消え去った。

隠蔽の概念により、視覚から捉えられる事が無くなった召喚魔法の核、それを確認してデュナミスは撤退する。

役目は果たした、後はアーウェルunks達に任せるとしよう。

「と、言うか流石に治さないと死ぬからな」

一人呟き、デュナミスは転移を開始する。腹に渦が発生し、自らを巻き込むように吸い込んでいく。

デュナミスに作戦を託されたアーウェルunksは、思いの外手こ

ずっていた。

エヴァンジェリンと交戦をはじめ、既に数分。概念能力によって強化された身でありながら、戦況は劣勢だ。

その原因は、エヴァンジェリンの持つ吸血鬼としての再生能力だ。考えている間にも、周囲の気温が急激に下がり始めた。相対する少女を見れば、詠唱が完遂する直前だ。

カウンターのように概念能力を使用する。

「>おわるせかい<」

【・ 世界は一瞬で真逆となる】

位置が入れ替わり、エヴァンジェリンは自らの魔法で凍結する。

しかし、直後に破碎の音が響く。

「ハア〜ハツハ！！ それがどうしたあ！！」

凍結した身を砕き、即座に再生しながら向かってきた。

「なんとも卑怯な合法ロリだね、君は」

「ええい！ 貴様まで合法ロリ呼ばわりか！」

事実なのでしょうがない。

しかし、相手の再生能力は驚異的だ。神話の世界ですら自分の攻撃には無力な化け物が居るというのに、彼女は自分の攻撃を受けても即座に再生する。彼女を倒すにはもっと大火力の攻撃が必要だ。

概念能力で攻撃力を最大にした>冥府の石柱<ならば、可能性はある。しかし、最大にした瞬間にこちらが攻撃を受ければ、こちらの身が砕けるだろう。

リスクが高いね。

しかし、だ。

リスクも無く対価を得ようというのは、傲慢かな。

覚悟を決める。エヴァンジェリンとの格闘戦、魔法戦の技術自体の差は無い。主の期待に応える為、課せられた使命の為に、

「君を倒させてもらおうよ」

【・ 攻撃力は最大となる】

概念条文が響いた。聞こえた内容は、効果をそのまま連想させる。

攻撃力最大、か。リスクを背負ってきたな。

攻撃力最大で全身を打撃されれば、死ぬ可能性はある。>闇の魔法で精霊化すればその可能性も消えるが、今から詠唱しては相手の詠唱が完遂される方が早い。

だから、打つ手は接近戦だ。

相手は詠唱を始めている、付き合わない。右手に>断罪の剣くを纏わせ、突撃する。

剣を振る、首を落とすように上段から斜めに振り払う。相手はそれにカウンターをあわせてきた、左手を振りあげ、その拳を>断罪の剣くに当てる。剣が破碎する、同時に相手の拳も破碎した。赤い血ではなく、白い液体が砕けた手首から流れ出ている。

なんだ？ 人間ではなかったのか？

しかし、今は関係ない。痛みを感じていないように、相手はそのまま詠唱を続けている。再び攻撃を繰り返そうとした瞬間、頭部に衝撃が走った。

衝撃はそのまま頭部を破壊した。視界が消える。

何をされた！？

相手が振りかぶっていた左手は破碎したはずだ。そう思っていると、追撃が来た。腹部を貫くような打撃を食らい、吹き飛びながら腹を失う。

しかし、即座に再生がスタート。

わずかに残った胸部を中心に、まずは頭部が再生する。続いて腹部が再生され、分断された下半身が再生する。分断されて相手の側にある元の下半身を見て、ふと思った。

なんか、自分の下半身が二つあるって気持ち悪いな。後でアレ砕いておこう。

先ほどの攻撃の正体を見極める為、相手を見る。

相手は詠唱しながら、砕けた左手、手首が無く腕だけとなったそれをこちらに突き出していた。

砕けた拳にかまわず、腕をつきだしたのか！

本来ならば大したダメージにはならないだろうが、概念能力で攻撃力は最大になっている。しかし、その攻撃の結果、拳だけでなく腕が割れ、肩まで消失している。

敵ながらいい覚悟だ。

感心している間にも、相手の詠唱が完遂された。上空に幾つもの石柱が展開される。一つ一つが自分の身より遙かに巨大で、押しつぶされれば全身が砕かれるだろう。

痛そうだ、未央の幼竜に打撃された時の事を思い出しながら、警戒する。

石柱を滞空させたまま、相手は空に跳ぶ。身を屈めて力を貯めた大跳躍。相手は一瞬で石柱を背にした。

> 断罪の剣くを両手に展開する。剣身を出来る限り延ばし、三mを越える巨大な剣として、石柱を迎撃する体勢を作る。

「残念、それは意味がないよ」

上空から声がかかった。

しかし、意味がないとはどういう事だ。

【・ 世界は一瞬で真逆となる】

視界が塗り変わった。

相手は地面でこちらを見上げている。

こちらは上空で、

背に石柱!?

巨大なものが風を切る音が聞こえる。

轟、と風が鳴り、背に大音が落下する。

砕かれていく。

背を砕きながら、身を大地に押しつぶすように落とされる。しかし、未だ攻撃は完遂されておらず、自分の身は半壊のままだ。

迫る大地を身ながら、砕けつつある肘で背後を打つ。
石を打つ手応え、直後、砕ける感触がきた。

石柱が割れる。

エヴァの攻撃により、ヒビが走る。直後、先端が弾けるように爆発し、爆発は石柱を上っていく。

エヴァは地面に叩きつけられながら、爆発によって起きた石の雨に穿たれる。

細かな、しかし尖った石は攻撃力最大に強化され、彼女の身に穴をあけるが、それはアーウエルンクスをも巻き込んだ。バックステップで石の雨を回避する彼に、雨は平等に降り注ぐ。高速で後退する彼の足に穴が開き、アーウエルンクスも転倒する。

そこに、砕かれていない石柱が降る。エヴァが砕いたのは一本のみだ。展開された石柱は十を越える。それが、エヴァとアーウエルンクスに向かった。

石柱を見ながら、エヴァはもがく。

再生を繰り返しているが、石の雨がそれを即座に砕く為、逃げる為の体が出来ていない。

死ぬわけにはいかない。

やっと自分の人生がやり直せるのだ。

もう少しなんだ。

少しでも逃れようと、手で地面を掴む。しかし、その手が石の雨で碎かれる。

思わず舌打ちが出た。

四肢が欠け、胴体も穴だらけ、頭も少し欠けているか。

くそ、因果応報という事か!?

吸血鬼になって、長い時を生きていく中で悪事も行った。言い訳をするつもりはないが、生きる為に何人も犠牲にした。自分を呪って死んでいった人間達の顔が思い浮かぶ。

そうか、貴様等か。畜生め。

だが、奴らの思った通りになってたまるか。

奴らが冥府で歯ぎしりする程、人生を楽しんでくれる。

その為にも、なんとか体を再生させねば。

だが、石柱は迫る。もはや目の前だ。

万事休す。

そう思った瞬間、叫び声が聞こえた。

させるか、と。

石柱が、横から殴られたようにその軌道をそらした。

石の雨が、強風に吹かれたように他へ飛ぶ。

傍らに降り立つ人影があった。

夜でも目立つ、赤毛を持った少年。

「あぶねえとこだったな、エヴァ」

ナギだ。

少年は笑顔でこちらを見ている。

それを見ると、助かった、という思いが胸に沸く。

「……今はひどい格好なんだ、こういう姿は見ない振りをしろ、と学ばなかったか？」

感謝の言葉ではなく、皮肉が口に出た。

自分のひねくれっぷりに呆れるが、少年は気にしておらず、

「そういえば、未央もそんな事いつてた気がするぜ……、すまん」

「女と話している時に他の女の話題を出すな、とも言われなかったか？」

やれやれ、と皮肉を重ねてしまう。

一方、心は彼への感謝が溢れ、

いかん、なんだこれ。ちょっとキュンときたな。

彼の笑顔を見ると、なにやら暖かい気持ちになる。

あ、やばいぞこれは。相手は未央のだぞ。しかも一途だから余計罪悪感がある。というか、ナギ自身もベタ惚れで失恋確定コースだ。いきなりそういうのにつっこむのは嫌だ。せつかく取り戻した人生、もうちょっとイージーな男がほしい。というか、数少ない友人の男を取るのはどうなんだ？ いやいや、そもそもこれが恋愛感情とは限らん。

全身が再生する。

立ち上がり腕を組み、思考を落ち着ける。

しかし落ち着かず、なかなか視線をナギに向ける事が出来ない。

お、落ち着け私！ クールになれ！！

「おいおいエヴァ、いい空気吸ってないで敵にとどめいこつぜ」

声をかけられて思い出した。

視線の先では、アーウエルンクスが右足を引きずりながら立っている。左腕は肩から碎け、右足が機能していない。確かに好機だ。

とどめを刺すべく、>断罪の剣<を展開する。

しかし、アーウエルンクスを庇うように、別の影が現れた。角を持ち、両腕が異様に盛り上がった悪魔だ。

「ああ！？ さっき似たようなの倒したはずだぜ！？」

「なんだ、死体は確認したのか？」

「え……………」

「だから、倒した事の確認はしたのか？」

「……………皆そんな事してんの？」

「この馬鹿者が！！！！」

やはり恋愛感情は気のせいかもしれないな。

第五十話

ナギとエヴァの目の前に新たな召喚魔が現れた頃、同じように、召喚魔が王宮の各所に現れていた。

戦闘中の>紅き翼<の側に現れたものは、戦闘の余波で即座に砕かれたものの、王宮に勤める兵士達の元にも現れたものは、戦闘を始めていた。

召喚魔には複数の種類が存在した。

>原子分解魔法ディスタインテグレイトを使う天使タイプと、異様なほど鍛え上げられた肉体による打撃を繰り出す悪魔タイプだ。

王宮の各所では、打撃による破碎音と怒号があがる。

王宮の最奥部、要人の集う避難所でアリカはそれを聞いていた。

何も出来ない。何が王族か。

奥歯を噛みしめると、口に血の味が広がっていく。抱きしめているアスナも、こちらを抱く手がふるえている。

今攻められては、全滅だ。

周囲には、先ほどアーウェルンクスの襲撃で負傷した各国の護衛団しか居ない。

父王と兵士達は未だ戻ってこない。ガトウもまた、念話に応答しない。

敵がここに来た、という事を考えれば。

嫌な結果が脳裏に描かれる。落ち込み始める心をなんとかかすべく、深呼吸をする。

息を吐き、少し持ち直した瞬間、ドアに付く魔法使いが、慌てた声をあげた。

「敵が、ドアの向こうにいます！」

先ほどの襲撃を警戒し、ドアには防護魔法を展開してあった。そのドアが、打撃の音を鳴らしている。

一つではない。

拳で殴りつける音、剣で切りつける音、槌を叩きつける音が連続して聞こえてくる。

負傷した護衛団が立ち上がる。完治には遠い彼らだが、

「おい、仕事だぞ」

「俺、職場間違えたなあ」

「でも金がいいからな、おかげで俺、結婚資金たまったんだぜ。これ終わったらプロポーズするんだ、もう指輪と花束買ってあって」

「その不用意な馬鹿を黙らせるおー！！！」

一人を複数人で押さえつけてボコボコにしている。何やらよくわからないが、士気は高いようだ。

タカミチとクルトもまた、怪我を押さえながらも自分の前に立った。

「姫様とアスナ様は」

「ああ、僕らが守ります」

声は震えていた、足も震えている。痛みと恐怖を堪えて敢然と向

かう彼らは、幼いながらも間違はなく騎士だろう。

ガトウは良い弟子を持ったな。

そう思うと同時に、ある考えが浮かんだ。

自分は何も出来ない、そんな事は無い。

王族の持つ魔力は、魔法障壁を無視する事が出来る。

自分はそこそこ魔法を修めている。

少々だが剣術も修めている。

ならば、抵抗する事が出来るのだ。

目の前の少年二人は、自分よりも少ない魔力で、少ない経験で、しかし確かな意志を持っている。

ならば、私も戦わなければならない。

抱いていたアスナに視線を送る。

表情は変わらないが、手が震えている。

彼女の手を取り、胸の内を告げる。

「アスナ、妾も戦おう。お主を守る為に」

軽く力を込めて握った手が、握り返された。

アスナの瞳に、光が見えた気がした。

「いく、の？」

「ああ、行くよ」

「なん、で？」

「お主と、皆を守る為じゃ」

その答えに、アスナは首を振った。

「わたし、ひとじゃない、よ？」

こんな事を言わせるまで、妾は放っておいたのか。己の成した事に、後悔する。

しかし、間に合ったと、信じたい。

「いいや、お主は妾の可愛い姪じゃ。それで良い」

見よ、と体を避ける。

開けた視界には、タカミチとクルト、更に各国の者が居た。アスナの視線に気づいた巫人の一人が、親指を立てる。

「皆、お主を守るうとやる気満々じゃぞ？ モテモテじゃな」

頭を撫でる。

そして、いよいよドアを叩く音に、軋みの音が混じり始めた。皆の表情が引き締まる。

「良いか、皆」

声をかける。

「敵は可愛い妾の姪を差し出せと言ってきた。どう扱うつもりか知らぬが、可愛がるだけではないのじゃろう」

俺も可愛がりたい、と声が聞こえた。

続いて俺も、と聞こえる。

人気があつて良い事じゃ。

「しかも、差し出さねば妾達を殴ると言った。これはもういかん。交渉の余地無しじゃな」

テオドラ王女が盛んに頷いている。

アリアドネー騎士団の責任者も頷き、元老議員はやれやれと汗を拭いている。なんじゃ？ お主はそう思わんのか？ ん？

「だから、奴らに教えてやるうではないか。妾の可愛い姪と会うには、拳を握らず、柔らかい掌で接するものだ」と

ドアを支える魔法使いが、賢明にドアを強化している。今にも破れそうなそれを見て、最後の言葉を放つ。

「拳を握ってくる奴らに、掌を開いて叩き倒してやるうではないか。手はこうしろ、と。その為にも、この場を死守するぞ」

深く息を吸って、掛け声をあげた。

友人に聞いた掛け声だ。世界を相手に勝利した部隊の掛け声と聞く。

縁起が良いので使わせてもらおうとしよう。

「GO AHEAD
進軍せよ！」

答えが返ってきた。

「Testament!!」

ドアが破られる。

皆が突撃を開始した。

黒の軍勢に、種族を交えた軍勢がぶちあたる。

王宮内に現れた召喚魔の軍勢に、抵抗の声が上がりはじめた。最奥部だけでなく、王宮全域で呼応するように兵士達が盛り返している。

抵抗の最前線に居るのは、かつて前線基地に勤めていた兵士達だ。賢石を持ち、意志を力に変える彼らは持ち味を生かして前線を構築していた。

「いいかお前等！　ここは俺らの王が居る城だ！　賊の好きにさせんなよ！」

「Tes！」

「実は俺、来月結婚式でな。幼なじみとようやく籍を」

「隊長が迂闊な事を言い出したぞおー！！」

「いいから聞けよ。だから負けられねえんだろ。お前等も死ぬない理由、話していけ」

なるほど、と声が響き、

「小生、実は好きな女子がおります！　コクるまで死ぬません！」

「コクったら死んでいいのかわ？　自分は来月発売する戦艦模型を作るまで死ぬません！」

「貴殿、こないだパーツ壊して泣いてたでござろう。拙者は金髪で巨乳の嫁をゲットするまで死ぬないでござる」

「皆、まだまだですね。私は今度娘が男を連れてくるといってまして、そやつを殴るまで死ぬません」

「それは祝福してやれよ！！」

そういつて、皆は騒ぎながら、死ねない理由を告げていく。

「よっし、皆やっぱ死ねねえな！　いつちよ行くぞ！」

「T e s !」

勢いよく突撃する。

彼らの持つ武具は強く輝いており、触れた召喚魔を砕いていく。

しかし、軍勢が大挙して押し寄せる場もあった。

最奥部に繋がるエントランスホール。

アーウェルンクスと父王が激突した場だ。

そこを守護する部隊がある。

彼らは円形に陣形を作っている。

何かを囲むように、部屋の中央を陣取って大挙する黒の軍勢を裁いていく。

口を開く事なく、彼らは武具を振るう。

一体たりとも通しはしない。

その様子から、そんな言葉が聞こえてくる。

円陣の中央、一人の亡骸があった。

父王だ。

剣を地面に突き刺し、死して尚体を横たえない姿を取っている。

光の無い瞳は、未だ何かを睨みつけていた。

周囲を守る兵士達は、父王の姿を背に、武具を振るう。

込められた思いは、自らの職務を果たせなかった嘆きか。

それとも、これ以上誰かを失いたくないという、抵抗か。

ある部屋の前で、小さな抵抗が起きていた。

黒の軍勢が、桜色の閃光で吹き飛んでいく。

閃光を放った主は、背中からの出血が激しく、纏った白のスーツの下半身を赤くしていた。

ガトウだ。

左手を壁につけ、右手のみの居合い拳で召喚魔を打ち倒している。しかし、最早体力の限界か、膝から力が抜けて床に座り込んだ。

「やれやれ………。なんとか生き延びたと思ったら、終わるか」

胸から煙草を取り出し、くわえて火をつけた。

ふう。

吐き出された煙は、輪を作っていた。

「お、出来た」

受けるかね、と呟いた彼に、召喚魔が駆け寄ってくる。

年貢の修め時と、目を瞑る。

瞬間、ガトウと召喚魔の間、天井を抜いて乱入者が現れた。

瓦礫と煙の中、乱入者が動く。

白と黒で色づいた服を纏い、召喚魔達に飛び込んでいく。

彼らの目前まで迫った。

乱入者は懐から何かを取り出す。

拳銃だ。

【 ・ 攻撃力は最大となる】

乱入者は吹き、引き金を引いた。

火薬の炸裂する音が連打される。

召喚魔達は、一発の銃弾でその身を碎かれていく。

抵抗の攻撃も、乱入者は金の髪を振りまきながら回避していく。

掃討は十秒も立たずに完了した。

煙がおさまっていく中、乱入者はガトウに歩み寄る。

ガトウは視線をあげる。

見覚えが無い顔だ。

「誰だ………?」

「T e s . 申し遅れました」

侍女は、スカートをつまみ、一礼する。

「> 紅き翼くの未央様により、この世に生を受けました。侍女式自動人形一号機、ティアと申します。お気軽にティアちゃん、とお呼びください」

T e s ? と侍女は問いを作った。

「ティア………? 未央がもっているのか」

身を起こすと、背中 of 激痛に呻く。

随分酷くやられたようだ、今までよく持ったものだ。

そう思っていると、ティアと名乗った侍女が背後から治療用具を取り出した。

「Tes、つい先ほど未央様も到着致しました。現在、上空から敵軍を倒すべく、捕捉中です。失礼致します」

断って、背広を強引に脱がし治療を始めた。

暖かい光が背中を包む。

痛みが和らぎ、思わずほう、と息が漏れた。

「捕捉中、とは？」

「Tes、上空に待機しております私の妹の武装を使うのです」

妹？ 武装？

ガトウが疑問を得たのと同じ、上空、夜空が大きく歪んだ。

夜空が曲がって見える。それはステルス概念が解除される前兆だ。そして、二kmにも渡る巨大な物体が現れた。

メインカラーは、夜空に己を主張する白。そこに青い線が入っている為、全体を見ればトリコロールカラーといえた。

竜だ。

以前、未央がエヴァとの対決で作り出した幼竜が、再びその姿を現した。しかし、以前とは姿が異なっている。

素体のみだった以前と比べ、まず全体が太くなっている。

戦闘用の装甲が追加されたのだ。鱗のように全身を隙間なく覆っている。

更に、胴体部へ砲台が設置されている。千を越えて設置されてい

るそれは、今、王宮を向いていた。

竜の頭部、外からは装甲で見えない艦橋とも言えるスペースに未央は居た。傍らには、金髪を携えた青い鎧を纏った騎士が居る。

「アルトリア、捕捉、どう?」

「完了している。号令一つでいつでも撃とう」

そう、と未央は応え、右手をあげる。

肘を鳴らし、指揮者のように腕を振った。

「撃つて」

「Tes」

二人の会話の直後、すべての砲台が力を灯した。

青白い光を灯し、爆音と共に光線を発射した。

下部に備え付けられた砲台はそのまま、上部に備え付けられた砲台の光線は、大きくカーブを描いて王宮へ向かう。

王宮の天井を抜いた閃光は、一つ一つが黒の軍勢を貫いた。

防御を許さず、一撃で両断する。

兵士達は、その様子を呆然と眺めていた。

青い閃光は、雨のように降り注ぎ、しかし一発の誤射も無く軍勢を貫いていく。

斉射の時間は僅か数秒。

しかし、その間に葬られた召喚魔の数は三千を越える。

まさに一瞬の出来事だ。

あまりの出来事に、皆は助かったのかわからずに、ただ上空に浮かぶ竜を見ていた。

表示枠に写る王宮の様子を見て、ため息が出た。

まさか、こんな事態が起きるなんて。

ナギと二人、円卓の騎士団を作る為に、紅き翼くの隠れ家に行った事で、対応が遅れてしまった。そのせいで、出た犠牲もあるだろう。そう思うと、心が沈むのを感じる。いけない、まだ終わっていないのだ。

「アルトリア、残存兵力は無い？」

声をかける。背後に控える騎士型自動人形、アルトリア。彼女は幼竜アルトリアの分体、人と直接会話して指示を受ける為の自動人形だ。

騎士型として作成してある為、単独での戦闘能力も高い。欠点としては、自動人形にしては情報処理速度が少々遅い。何故だろうか……。

こちらの問いかけに、少々間を空けて返答があった。

「 砲撃を回避した敵が居るな、数は四」

「 追加砲撃、急いで」

『 その指示は待ってもらおう』

その指示を遮る声があった。

念話の強制着信？

聞き覚えの無い声だ。

目の前にポップアップした相手の姿を見る。
予想外の顔があった。

ゼクトだ。

しかし、念話の声はゼクトのものではない。

『残っている四人、そのまま逃がしてもらおう。さもなければ、この男を殺す』

「誰よ、あんた」

『名乗る必要はない』

「それで交渉のつもり？ そっちから仕掛けてきた癖に」
『飲まなければ、この男が死ぬだけだ』

どうする？ と念話の主は問う。

ゼクトは瞑目しており、表情からは何も読みとれない。
いや、ゼクトが居る事が、相手を知る最大のヒントか。
ゼクトが皆に隠れ、会う相手。

「>造物主ライフメイカーく……」

『そつだ。さあ、どうする』

重ねて問いかけてくる。取り付く暇もない。

ゼクトを切る事は出来ない。四年間、間違いなく自分達を支えてくれた人だ。

「わかった、逃がすわ。アルトリア、その四人に念話飛ばして」

「T e s .」

アルトリアは不満そうに返答した。

『では、こちらも返そう』

その声を最後に、念話が一方的に切られた。

> ライフメイカー造物主く、初めて声を聞いたけど、

女の、声？

相手の声は、年齢不詳だが、何故かそう感じた。

第五十一話

アリカは兵士に先導され、ある場所へ向かっていた。

先導する兵士の顔は暗い。表情の暗さは、叱責を恐れる子供のようにも見えた。

一方、アリカの表情は普段と変わらない。ただ前を見て、兵士を追う。

避難所となっていた部屋から歩き、エントランスホールに出た。

ホールの壁は、兵士達が叩き付けられた事により、鎧を引つ掛けたような傷が至るところに見られた。ホールの中央には、数人の兵士がおり、黙祷を捧げていた。

彼らはアリカを確認すると、一步引き、中央への道を作った。

中央に見えるものがある。

アリカは先導していた兵士を追い越した。

あ、と兵士が引き留めるような声を出すが、それを無視してアリカは歩みを進めた。

そして、アリカは父王と再会を果たした。

息を引き取って尚、何かを睨みつけている父王。

アリカは父王を囲む兵士達をかき分け、彼の眼前に立つ。

「父君……」

声をかけ、アリカは父王の頬に手を当てた。

父王の光の無い瞳と、アリカの目があった。

彼女の動作が止まる。

静止は一瞬、アリカは掌で、父王の瞳をゆっくりと閉じた。

「父君、ありがとうございます」

毅然とした態度で、アリカは父王の亡骸に声をかける。
かけた言葉は、感謝の言葉だった。

「父君のおかげで、アスナを、皆を守る事が出来ました」

父君に守ってもらったようなものです、と続け、アリカは父王の手を取る。

「ですので、もうお休みください。後は、妾と皆にお任せを」

剣を握り締める拳を外し、己の手に重ねて、ゆっくりと父王の身を倒す。

「父君を、休ませてくれ」

傍らの兵士達に声をかけた。

彼らは、その声にT e s . と応答し、抱えていく。

残った兵士達は、アリカの傍で膝をつき、頭を下げる。

「申し訳ございません……！ 我らがふがないばかりに、父王様をお守りする事が出来ませんでした！」

「どのような罰も受ける覚悟です！」

涙を滲ませ、ぐずりながら彼らはそう言った。

アリカは、彼らに向き直り、答える。

「陳腐な言葉ではあるが、父君はそなた達に罰を与える事をよしとしないであろう。妾も罰を与えようとは思わぬ」

「しかし！」
「ならば！」

罰を乞う彼らに、アリカはならば、と言葉を叩きつける。

「そなた達に命じる！ 後に控える、完全なる世界との決戦、命を落とさず、そなた達の大事なものを一つも失う事のない様、尽力せよ！」

よいか？、と一度問いかけて、

「罰として死ぬ事は決して許さぬ！ そなた達の罰は妾が引き取る！ だから、そなた達はただ、救う事だけを考えよ！」

兵士達は、それに応える。
未だ涙を流す瞳を開き、

「Testament！」

兵士達と別れ、アリカは私室に入った。
暗い。
部屋の中は、月明かりが照らすのみだ。
明かりをつけずに、椅子にも座らず、アリカは机に手をついていた。

両手で体を支えており、前髪が降りて影が出来る。
暗闇と影で、アリカの表情を見る事は出来ない。

「はあ」

溜めていた何かを吐き出すように、アリカはため息を吐いた。
吐息は途切れながらも、長く続く。

「っ！」

吐息が止まった。いや、止められた。
何かを堪えるように、アリカは吐息を止めた。
息を吸う事も忘れたように、アリカは呼吸を止める。

部屋に新たな音が響いた。

ドアを開ける音と、閉める音だ。

部屋の主に断りなく入り込んだ侵入者。

「アリカ」

未央だ。

白の装甲服が、月光に照らされて淡く光っている。
振り返らずに、アリカは返答する。

「未央か。今回は助かった。しかし、いつも勝手に入るなど言っておるじゃろう。それと、今日は疲れた。何かあるなら、明日にしてくれ」

まくし立てるように、早口でアリカは告げた。

明日にしてくれ、と言われた未央だが、彼女はドアからアリカに向けて歩き出した。

「……明日にしてくれ、とっておるじゃろう」

「明日じゃ、聞けない事ありそうだし」

そう言って、未央は止まった。
二人の間に、距離は無い。

「何の事が」

「わからない？ 嘘ね、わかってるから、私に帰れって言ったんでしょ」

一息。

「話してよ。浅い付き合い、するつもりないの」

彼女はそういって、自分の体を抱きながらアリカに言った。
しかし、その表情は少し暗い。

アリカが動いた。

振り向き、未央と向き合う。

顔は俯いており、前髪が影となって、未央からもアリカの表情は見えない。

「どこに、行っておった？」

「竜と騎士を作るのに、>紅き翼<の隠れ家に行ってた」

「それは、近くでは出来なかったのか」

「他国の要人を刺激するかと思って、あとは……」

唾を飲む音が聞こえた。

「……ナギと二人で遊びに」

瞬間、部屋に音が響いた。

風を切る音と、何かを弾いた音。

アリカが未央の頬を打つた音だ。^{ぶつた}

打たれた未央の右頬は、紅くなっている。

アリカは振りぬいた手で、未央の襟を掴む。

「……っ！」

「いいわよ、言っつて」

堪えるように口を紡ぐアリカに、未央は促した。

その言葉に、は、とアリカの口から息が漏れる。

襟を掴む手は振るえ、肩までその震えは伝わっていた。

搾り出すように、アリカは声を作る。

「何故……」

何故じゃ、と続いた。

「何故、父君だけ死んでしまったのじゃ……！」

問いに、未央は答えた。

「運が悪かったのよ」

再び頬を張る音が聞こえた。

未央の左頬が赤くなった。

「お主が居れば！ こんな事にはならなかったじゃろう……！」

アリカの顔が上がった。
泣いている。

瞳からは大粒の涙がこぼれ、泣き顔に歪んだ表情は、普段の無表情からはとても想像も出来ない表情だ。

そして、アリカは叫んだ。

言うまいと心に決めていた、未央への言葉。

「お主の お主のせいじゃ！」

息を吸って、眉を吊り上げて、大粒の涙をこぼし、

「お主のせいで、父君は死んだのじゃ！」

一度口にすれば、感情はそれを止める事なく、二度に渡って非難を飛ばす。

それに、未央は短い言葉で答えた。

深く息を吸って、こちらもまた、搾り出すように答える。

「 そうね」

抗弁せず、ただアリカの言葉を認めた。

その言葉を聞き、アリカは襟を掴んだ手を寄せる。

未央の胸元に顔を近づける形となり、

「 やっと、やっと親子だと思えたんじゃ」

ぐずりながら、アリカは続ける。

「それなのに、なのに……」

言葉に詰まるアリカを、未央は抱き寄せた。胸に押し付けるように抱きかかえ、一言。

「ごめんなさい」

その言葉で、アリカは最後まで我慢していたものをぶちまけた。

「あ
」

泣き叫ぶ。

失ったのだと、他の人間から告げられて、再びその事実を認識する。

「あああ
！」

大声で、子供のように泣き続ける。

未央は声をかける事なく、アリカを抱き寄せたまま動かない。

しかし、アリカを抱き寄せる手に力が入っていた。

強く抱き寄せながら、視線はアリカに合わせず、窓の外を見ている。

アリカは泣き続ける。

胸元は涙で濡れ、未央の襟を握る指は力を込めすぎて白く変わっていた。

アリカの泣く姿を見て、未央は思う。

自らの失態で起こった事が、彼女に大きな悲しみを与えてしまった、と。

もう、二度とこんな悲しみは与えないわ。

それは、近く起こる最終決戦への覚悟だ。

私は、人に幸いを与えられる人間になる。

> ラフメイカー 幸いを与える者と名乗り、皆を守っていける人間になろうと
決意した。

決戦の日は近い。

魔法世界の行く末を決める戦いは、すぐそこに迫っていた。

しかし、今はただ、胸元で泣く彼女の悲しみが早く終わるよう、
祈る。

第五十二話

泣き声は長い間続いた。

それが数分なのか、もつと長い時間だったのかわからないが、泣き終わったアリカの目は赤く充血し、喉は荒れて酷い声になっていた。

泣き終わり、こちらを掴んでいた手を離して顔を上げた彼女は、

「はあ」

いつも通り、胸のうちに残る最後の欠片を吐き出すように、大きく溜息をついた。

ふう、と息を吸う彼女に、声をかける。

「溜息つくと、幸せ逃げるわよ」

応える声は、荒れた声だが、いつものトーンだ。

「これ以上、幸せを逃がすのは敵わん。溜息を吐かせないように、力を貸せ」

「Tes . お姫様」

泣きはらした顔を、鼻紙で処理しながらアリカは息をつく。

そして、ごほん、と一つ咳をしてこちらを見た。

こちらの目をまっすぐと見て、

「先ほどの本心じゃから、謝らんぞ」

「ええ、わかってるわ」

「しかし、その……あれじゃ」

「どれよ？」

ええと、その、と両手で指先を弄びながら、

「友人としての付き合いは続行してやるからの」

顔を赤くしてそう言った。

表情は先ほどと違う赤を帯びており、可愛らしさすら見えた。思わず微笑みが出た。

「な、なんじゃ。その笑いは！」

「なんでもないわ。ええ、宜しく。アリカ」

やっぱり、アリカは強いわね。見習わないと。

「何か含みがあるじゃろ、言え！」

「何も無いってば」

そう応えても、何かあるだろうとアリカは食い下がる。

無い、と応えながらドアへ向かうと、違う問いかけが来た。

「なんじゃ、帰るのか？」

「ええ、時計見なさいよ。随分夜も更けたし、帰って寝るわ。アリカも寝なさいよ、明日も忙しいんだから」

「それもそうじゃな……」

「おやすみ、アリカ」

「うむ、おやすみ」

ドアを閉じる時、いつものように、よく眠れるよう概念条文を展開していく。

王宮のほぼ全域が同じ状況になっているはずだ。修繕にどれほどの費用が必要となるのか、素人考えでも背筋が凍る。

これ、建て直した方が早いんじゃないかしら。

そこまでの資産は流石に無いかもしれない。四年間ぶんどり続けた各国の軍資金が空になるかもしれない。泡銭なので精神的には苦しくないが、生きていく為に少しは残さねばならない。

修繕費用の負担は、アリカと相談ね。

少しは容赦してくれると良いのだけど。

王宮を出て正門が見えた。

ナギが待つており、こちらを見つけて手を振っている。

彼の周りには、>紅き翼<の皆が立ちながら食べられる物を持ち、各々が好みの物を食べていた。

駆け足で皆の元に行く。

不意に、白が視界を塞ぎ、何かに衝突する。

同時に頭を抱えられる感触を得た。

「未央様、おかえりなさいませ」

「テイア……、いきなり抱きついてくるとは、どういう事？」

「Tes・未央様の胸元が濡れて乱れております。殿方にお会いするなら、そちらを整えてから」

「あの兵士達の含み笑いそれ!？」

「未央の胸元が兵士達になんだって!？」

「ナギも反応早いわね!」

数分前までのシリアスな空気は欠片もないわね!

胸元を整えて、改めて皆と合流する。

ティアからサンドイッチをもらい、一口食べながらアルの声を聞く。

「さて、今回は我々の油断が招いた出来事、といわざるをえません。未だ戦時中、全員が適当に過ごすには早すぎました」

「遊びに外泊するにや早すぎるんだよ、わかってんのか、ナギ、未央」

「ジャック、酔いつぶれていたお前が言うな」

「私としては遊びだけで離れたつもりじゃないけど、言い訳よね」

ジャックの追求に軽く抗弁しながら、サンドイッチにかぶりつく。ハムとスクランブルエッグを挟んだもので、軽く食べる分には十分だ。

咀嚼していると、ナギがジャックに抗弁をはじめた。

「いや、でもジャック。お前好きな女に「賭けは私の勝ちだから、今晚は私の言う事聞く事」って顔赤くして言われたらどうするよ。俺は我慢しない」

ぶ。

唐突に外泊のきっかけをバラされて、思わず口に入っていたものが吹き出た。

「ちよ、ちよつとナギ!? 何いきなりバラしてんの!?!」

「ああ!? 何か悪いのか!? 事実だろ!」

「適当にぼかしなさいよ!」

「別に隠す事じゃねえと思うんだけどなあ……………」

皆を見れば、円陣を組んでおり、こちらに聞こえる声で、

「男と遊びにいつて被害出すとは……………」

「悪の魔法使いとしてもどうかと思うぞ」

「しかも友人の父親死んでるぜ……………」

「フッフ、また指名手配ですかね？ 次はどこに逃げましょうか」

き、厳しい……………！ 指摘が厳しい！

話を逸らすべく、必死に考えを巡らせる。

皆を見れば、戻っているはずの人物が居ない事に気づいた。

「ゼクトは？」

「お師匠ならまだ戻ってきてねえよ」

墓守り人の宮殿から戻ってくるのに、時間がかかっているのだからか。

まさか>造物主<が宮殿から出た途端、用無しとばかりに不意打ちを

「今戻った」

「うひゃあ!？」

真後ろから声をかけられて、思わず悲鳴をあげる。

気づかずに真後ろを取られる、という状況を徐々に経験したという事もあり、心臓が早鐘のように鳴る。ゼクトはこちらを見て、ふう、と溜息を零す。続けて、ううむ、と唸り、何か思案し始めた。

こちらからは、色々聞きたい事がある。相手の思考を邪魔するよ

うで悪いが、先に聞かせてもらおうと声をかける。

「ゼクト、どこ言ってたの」

「墓守り人の宮殿じゃよ、知っておるじゃろ」

「言葉が足りなかったわ。なんであそこに行ってたの？」

「旧知に会う為に、行っておった」

その言葉に、>紅き翼<の皆も反応する。

聞き耳を立てる、という程度のものだが、一際大きい反応をしたものが二人。

背後から風を切って、二つの影がゼクトに切り掛かる。

エヴァとアルトリアだ。

エヴァは>断罪の剣<を、アルトリアは西洋の剣に装甲板を被せたような剣、カウリングソード機殻剣をゼクトの首筋に当てる。

「ちょっと二人とも、やめなさい」

「何を言っている、敵に通じている、と言ったようなものだぞ」

「同感だ、決戦前スバイに問者は排しておかねば」

首筋に二つの刃を当てられたゼクトは、軽く両手をあげる。

「抵抗はせんが、少しワシの話を聞け」

「問者の話など聞くに値しない」

「アルトリア、黙って。引きなさい。エヴァも引いて」

エヴァは不満そうに舌打ちをして、>断罪の剣<を引く。しかし、アルトリアはそのままだ。

「アルトリア」

「未央、あなたは私の母だが、主人設定はされていない。だから、

貴方の言う事を聞く義務は私に無い」

アリカに贈る為に主人設定してないのが裏目にー！

どうしよう、そう思った瞬間、アルトリアの頭に当てられる物があつた。

黒く鈍い光を放つ鉄塊。

拳銃だ。

続き、銃声が響いた。

弾かれるように倒れこむアルトリア、視線は拳銃の持ち主に向かう。

「ティア、やりすぎじゃない……？」

「Tes・ご安心ください。我々なら平気な弾です」

「……何の弾？」

「ただの鉛弾です」

「なるほど、なら平気ね」

「安心する要素ねえよそれ！！」

やかましい、私が作った自動人形だ。鉛弾程度でどうにかなる相手じゃないのはわかっている。

しかし、>紅き翼<の皆はひい、と一歩引く。

ティアはそんな事は関係ないとばかりに、アルトリアへ向かう。

皆の心配とは他所に、アルトリアは勢いよく立ち上がった。

うむ、やはり私の作りは確かね、とそんな事を思う。

「姉様！ いきなり何をされるのですか！」

「愚妹、いいですか？ ご主人様を持たない貴方は出荷前、いわば半人前以下です。人間で言えば子供のようなものです。だから経験豊かな姉や素晴らしき母の言う事を聞きなさい」

「しかし間者が！」

額に再び銃口が突きつけられた。

「二度は言いません、私は言う事を聞かない妹は嫌いです。

T e s ?」

「ぐ……………う……………。テ、T e s」

「T e s ・ ゼクト様、失礼致しました。お話の続きをどうぞ」

アルトリアの手を取り、ティアは背後に下がる。手をひかれたアルトリアは、不満そうな顔をしながらも、ティアに寄り添うように下がる。

私の知らない間に、姉妹間で力関係が決まっている……………！

ティアはこちらの言う事をよく聞いてくれるので、問題ないと思う。

とにかく、やっと落ち着いて話す事が出来る。

「ごほん、と一つ咳をして、

「よし、じゃあゼクト。聞かせてもらいましょうか」

「なんとというか、お主等いつも通りすぎじゃのう……………。まあ、場所を変えるかの」

そう言って、ゼクトは背を向けて歩き出した。

皆でそれについて歩く事数分、ゼクトの歩みが止まった。浮遊島の端、遠くに小さく墓守り人の宮殿が見えた。

ゼクトは地面に座り込み、宮殿を見ながら話を始めた。

「>完全なる世界<の目的、一度魔法世界を消して、皆の魂を新たな世界に運ぶ。その為の準備はもう出来ておる」

「貴様やはり問者で！ あ、姉様やめてください、ちょ、あつ」

何かを引きずられていく音が響き、ゼクトの語りが止まる。

「続きお願い」

「本当にいつも通りで、ワシはシリアスになってよいのか……」

「勿論よ」

空を仰ぎ、そのまま視界を下ろして墓守り人の宮殿を見るゼクト。

「七日後、世界を無に帰す儀式が始まる」

「アスナがこっちに居るけど、どうやってやるの？」

「概念能力じゃ。ヤミを食った>造物主<が概念能力を得ておる」

アイツ、本当にロクな事しないわねえ。

続けて、と手で促す。

しかし、それには否定があった。

「これ以上言う事はないの。ワシと>造物主<の関係を話すつもりはない」

「おいおい、お師匠。ここまで来て秘密持ったままかよ」

「お主とて、未央とお主の關係に突っ込み入れられるのは嫌じゃろっ？」

え、と声が上がリ、皆の動きが止まった。

それは自分と>紅き翼<の皆の声で、全員の視線が交差する。

代表として、アルが挙手した。

「それはつまり、ゼクトと>造物主<が恋仲、という事ですか？」
「あ」

ゼクトからも声上がる。
しまった、という表情で、

「今の無しじゃ……！」
「そんなのが通るかー！」

全員で突っ込みを入れた。

「なるほど、ゼクトと>造物主<は夫婦仲と」

「別に結婚しとるわけではないがの、本契約とかもしたらん」

「何故ですか？」

「いや、別にいらんと思つてのう……」

「よくないわ、ゼクト。そういうのって男から言い出すものだと思
うの」

ちらりとナギを見ると、視線が合った。親指を立てて笑顔を見せ
ている。

こちらは安心できそうだ。

「ともあれ、重要な点があります。ゼクト……決戦では戦えますか
？」

アルが言った言葉に、場の空気が変わる。

緊張が混じり、皆の視線がゼクトへ集中している。腕を組み、瞑目してゼクトは答えた。

「戦う。ワシは>造物主<とは違う考えを持つておる」

「違う考え、とは？」

「ワシは、人々が完全に腐敗しきっているとは思わん。魔法世界を救って、皆で生きていけると思っておる」

そう言っつて、こちら 私とナギを見た。

「四年間、ナギと未央について魔法世界を旅して思っつたのじゃ。まだまだ捨てたものではない、とな」

だから、

「造物主<を倒し、ワシは先を作る手伝いをする」

と、墓守り人の宮殿を睨み付けた。

視線の先、墓守り人の宮殿は霞がかかり、全容を見る事は出来ない。

しかし、確かにあそこに居るのだ。

この世界を創造した、神といつてもいい存在。

勝つ為には、まだ足りないものがある。

それを得る為に、ゼクトに質問する。

「ゼクト、>造物主<の力、魔法世界を操るアーティファクトのよ
うなもの、知つてる？」

「>造物主の掟<の事か？ そりゃ知つておるが」

「詳細、教えてくれない？」

「別に構わんが、どうするつもりじゃ？」

決まってるじゃない、と前置きする。

皆の視線が背中に集まっている事を感じる、あまり見られると緊張するからやめてほしい。

一息つき、告げる。

「こつちも作るのよ。イメージさえ出来れば、アーティファクトと概念能力で模倣品作れるもの」
「な……」

呆気にとられるゼクトの前に、指を一本突き出して続きを告げる。

「いい？ 私は最終決戦で一人たりとも失うつもりはないの。リライト使われたら、魔法世界出身者は一撃よ。だから、相手が使う手段を解析して、防御手段を講じないといけないわ」

「いや、しかし……」

「無理だと思う？」

「うむ……」

それに対する否定は、背後から出た。

ナギだ。

彼は背後から声をかけながら、こちらに並ぶ。

「お師匠、未央は言い出したら聞かない女だぜ……？ そんでもって、言い出したら完遂する女でもある。だから信じてみてくんねえかな、俺からも頼むわ」

「ナギ、それ褒めてるの？」

「当たり前じゃねえか」

ナギの言葉に、ゼクトは含み笑いを零した。

いや、私とナギの掛け合いにだろうか。
笑い終わると、ゼクトは表情を正し、

「どうせやるなら、あやつ魔法を越える位のものを作るんじゃないぞ」

返ってきた答えは了承だ。

ゼクトの協力が得られれば、何の問題もない。
自信を持って答える。

「Testament・任せてちょうだい」

皆が最後の決戦に向けて動き出す。

> 紅き翼くは、魔法球に籠り、前衛はそれぞれの修練を、後衛担当は未央と共に、> 造物主の掟くの製作と魔法の修練に時間を割いた。

アリカ率いる四力国連合は、国を超えて協同する為の軍事訓練に力を入れる。

誰もが、最後の戦いを見据えて動いていた。

> 完全なる世界くもまた、最後の戦いに備えて力を溜めていた。

第五十三話

朝焼けに照らされる墓守り人の宮殿。

巨大な宮殿が浮遊し、雲を従えている。

宮殿から距離を取り、空を飛ぶ五つの影があった。

四力国連合の魔法使い達だ。

先日のオステイア襲撃以来、五人一組となって常に宮殿の周囲を回り、不意の攻撃が無いが監視していた。

五人組は人種も混合だ。

連合から人間の男女が一人ずつ。

帝国から男の亜人が一人。

アリアドネー魔法騎士団から女の亜人が一人。

オステイアから男の人間が一人の合計五人だ。

チームを組んで七日という短い時間ではあるが、彼らはそれなりの連帯感を持っていた。

以前まではそれぞれが異なる装いだだったが、今は共通の色合いを持っていた。

白だ。

未央と似たデザインの装甲服を、皆が纏っていた。

連合の魔法使いのうち、男の方が皆に声をかける。

「何度巡回しても、敵の本拠地つてのは肝冷えるよなあ」

杖に腰掛け、飛行呪文で風を切りながら飛ぶ。

着慣れない装甲服を慣らすように、大きく肩を回す。

それに答えたのは、帝国の亜人だ。

彼はアリアドネー魔法騎士団の女性が駆る箒の後ろに乗り、片膝

を抱いている。

彼も白い装甲服を纏っていたが、腕の動きを阻害しないノースリーブのものだ。

「敵の凄腕がでてくりや、俺達は時間稼ぎしか出来ねえからなあ。

俺、こないだの襲撃の時に白髪の男に飛び掛ったんだが、全然牙が立たなかったぜ」

「歯が立たない、だろ」

「俺達亜人なら牙さ。爪でもいいけどな」

ニイ、と笑顔を見せると、彼の口内にある牙が姿を見せる。虎系の亜人である彼の口内には、鋭く大きな牙が備わっていた。牙が日光に照らされ、キラリと光る。

よく手入れされてるなあ、と皆が思う。

魔法騎士団の女性が、話を続ける。

彼女の装甲服は、肩と胸を覆うように装甲があり、下半身はスカートに包まれた女性型のものだ。

「まあ、私も共に戦いましたが、確かにあの相手は別格でした。上司に聞いたのですが、あの敵は>紅き翼<クラスの強敵だそうで」「おいおい、そりゃキツイ相手だな」

だが、と話に声を差し込む人物が居た。

オスティア出身の男だ、彼は魔法具である槍に腰かけて、宮殿を見ながら続ける。

「そんな相手にも、数時間後には勝たなけりゃならんよな。勝てなきや、世界滅亡だぜ?」

「……そうだな」

「勝てるのかしら……」

「まあ、勝つ為に七日だけだが、訓練もしたしな」

「四力国連合軍と、>紅き翼<の模擬戦ですね……」

七日という短い時間だが、>紅き翼<の協力の元、濃い訓練を送った。その事を思い出す皆の顔は、同じ顔を作る。

「五百対一なのに、数分で全滅とかな……」

「実は青山氏とか、柳女史には勝てるかなあ、とか思ったんですけど……」

「私達、甘く見てましたよね。見事に全滅しましたし……」

表情を暗くした。

第二次オステイア攻防戦で大きく名をあげた>紅き翼<だが、その中でも戦闘力が高いと言われているのがナギ・スプリングフィールドと、ジャック・ラカンの二人。次いでアルビレオ・イマヤゼクトの名前が上がり、青山 詠春と柳 未央の二人は他より落ちると噂されていた。

しかし、結果としては全員に惨敗だ。模擬戦で勝てない相手に、本番で勝てるわけがない。多くがそう思う中、別の意見を持つ者も居た。

オステイア出身の男だ。

「模擬戦は模擬戦だろ。本番なら俺らの気合いも違うだろうしな」

「気楽だなあ、なんか秘策でもあんのか？」

おうよ、と彼は応じながら、懐からペンダントを取り出した。

青い石 賢石を繋いだだけの簡単なものだ。

「【意志は力となる】、今日を出撃前にこれが全員に配られるらしいぜ。他にも魔女殿は色々やる気らしいな。この装甲服も仕掛けが

あるらしい」

「> 契約の魔女くねえ……、あれを連れてきたんだから、まだ隠し玉はあるんだろっなあ」

そういつて男が指さしたのは、オスティアの王宮が築かれた浮遊島、それに寄り添うように浮いている巨大な竜だ。

概念竜アルトリア。

四力国連合軍の旗艦とすべく、未央が作成した竜だ。

まるで宝に巻きつく竜のように、浮遊島に体を巻きつけて眠る竜を見て、皆は感嘆の息を漏らす。

「あれ、量産する訳にはいかないんでしょっか」

「戦艦乗りにそれ言ってみるよ、渋い顔されっから」

「元から乗っている戦艦に愛着持つてるからなあ」

「それに、流石にあんな大質量の物をポンポン作れないでしょう」

「なんにしても、だ」

そう言つて、オスティア出身の男は槍の頭を上げる。槍頭が上を向き、上昇して宙返りを果たした。

おお、と皆が感嘆する。

機動の頂点で一回転し、槍に座りなおす。尻を置く位置が変わっており、それが目的だったのだらう。派手な座りなおしだ。

「こんな感じで、俺達は得意な事、出来る事をやっていこうや。自分の意志信じて、一発かます。他の奴らも同じ事思ってるぞ」

彼はそういつて、オスティアの王宮がある方向を見る。

> 紅き翼くが滞在している場所だ。

未央は魔法球の中、エヴァから借り受けた工房に居た。
七日間、概念能力で疲労を適度に抜きながら睡眠時間を減らし、
やれる事をやってきた。

そのうち、一つの成果が目の前に浮いている。

白く、大きな杖だ。

先端には大きな球体が二つあり、それを中心として十の小さな球
体が廻っている。

下部は鍵のようなデザインをしており、>造物主の掟くと似た形
だ。

手に取ると同時に、概念条文が響いた。

それは十二に及ぶ概念だ。

- 【・ 文字には力を与える能がある】
- 【・ 名は力を与える】
- 【・ 鉱物は生きている】
- 【・ 植物は支配者である】
- 【・ 全ては落ち行く】
- 【・ 力は無限となる】
- 【・ 熱とは命である】
- 【・ 破壊は再生に繋がる】
- 【・ 全ては加護を得る】
- 【・ 全ては進化していく】
- 【・ 全てを抱え進む】

概念能力の元ネタ、終わりのクロニクルでも特に強力な概念が反
応した。それぞれが一つの世界を支えていた概念で、応用範囲も広
い。十二の概念を口で喋らずに発動出来る点も大きなメリットだ。

まあ、幾つかは作中に出てないから、私が適当に作ったんだ

けどね。

分からなかったのだから、しょうがない。そう思っただけで自分を納得させる。

> 造物主の掟くの模造品としては、十分な能力を備えている。世界の始まりと終わりの魔法>リライトくと、ディスインテグレイト原子分解魔法の抵抗能レジスト力を皆に付与する事が出来る。

世界を改変する能力については、イメージが難しかったので、【ここはここだろ！ 違うか！？】と適当に概念を作った。いける、きつといける。多分いける、もしかしたらいけないかもしれない。まあちよつとは覚悟しておこう。

杖を手に取り、振る。

軽く風を切る音が聞こえる。打撃戦をある程度想定しているので、ラカンが一発殴った程度では壊れない程度の耐久性がある。しかし、あくまで杖なので主武装にはならない。

前を払うように振り、その勢いのまま背の後ろへ放り投げる。

落下による衝突の音は聞こえない。振り返れば、そこに浮いている。

少し離れると、こちらを追尾するように寄ってくる。戦闘中に一々武装を持ち返る暇があるか、疑問ではあるが無いよりマシだろう。

なんとか決戦に間に合ったと、思わずホツとする。すると、視界に突然湯気を漂わせるココアが現れた。それを持つ手には見覚えがある。

ココアを受け取りながら、持ち手に声をかける。

「ティア、一声かけてちょうだいよ。驚いて零したらどうするの」「Tes . . . その際は重力制御でココアを受け取ります。ご安心ください」

この子、最近完璧になってきたわねえ。経験かしら。

ココアを口に含むと、

「あっつー！」

「おや、申し訳ございません。少々熱すぎましたか。入れなおしてまいります」

こちらが怯んだ隙に、手に持ったカップをティアが奪い取り、退室していく。

舌が軽い火傷でひり付くように痛い、次はアイスココアを頼もう。冷たい飲み物が無いか、周りを見渡す。

作業机には工具しか無い、長椅子にはゼクトが毛布をかぶって寝ている。部屋を見渡すと、水差しを発見するも、中身は空だ。

おのれティア、この失態はどうやって償わせるべきか。

思っていると、背後でドアが開く音がした。

振り向くと、手に水を持ったナギがこちらに手を上げて、

「おはよう、未央。お疲れさん」

「にゃぎ……」

舌が上手く動かさずに変な言葉になった。

それにナギが妙な反応を示した。目を見開いて、驚愕したように口を開け、

「み、未央……。今のもつかい頼む」

「……？ にゃぎ」

「……クツ、猫耳をつけていないのが惜しいぜ」

何を言ってるのアンタは。

その思いを半目で伝えるも、ナギはまあ待てと手で止める。

「アルが言ってたんだが、未央くらいの女には猫耳と水着が似合うらしいぜ……」

どこに待つ要素があったのかわからなかったので、魔法の射手くを一本ぶちこんだ。

直撃するも、たいしたダメージにはならなかったようで、ナギはそのままこちらに寄ってくる。

「まあ、話はズレたけど、舌を火傷したって聞いて水持ってきたぜ」
そう言っつて、水を差し出した。ティアの遠回しな心配りだろうか、何か仕組まれている感じを受けるが、水は有難い。

「あひがと」

「舌足らずな未央か……。新感覚だな……」

これ以上喋ると襲われそうな気がする。襲われるのは別に構わないが、ゼクトが居るのでタイミングが悪い。
舌を冷やすべく、水を飲む。よく冷えた水が、火傷で熱を持った舌を冷やしていく。

心地よい。

一息つき、水が残ったカップを傾けて、それに舌をひたす。

「……あ」

「どうしたの、ナギ」

「いや、そういえばティアが、口移しで飲ませるとキスと同時に未央様の口内冷やせてお得です、って親指立てながら言ったのを思い出した」

「……さ、流石に恥ずかしいわよ、それ」

ちょっと成長しすぎじゃないかしら……。

自分の作った自動人形の未来に、一抹の不安を感じた。

舌を冷やした後、寝ていたゼクトを起こして皆と食堂で合流する。魔法球の中、つまりはエヴァの居城にある食堂だが、いつの間にか城内の侍女人形をティアが統率し始め、彼女が全て取り仕切るようになっていた。その為、テーブルには>紅き翼<の皆が好みとしている味付けが並び、皆は黙々と手を動かしていた。

エヴァだけが少々難しい顔をしていた。サンドイッチを口に運びながら、問いかける。

「エヴァ、なんか嫌いなものでも入ってた？」

「いや……、これでも>人形使い<と呼ばれて人形作成技術は自信があつたんだが」

そう言つて、カートを押すティアを見た。ティアはラカンの元に豚の丸焼きを置き、キッチンに去っていく。というか朝から丸焼きとかジャック豪快ねえ。

「チャチャゼロも同じ位に自我はあるが、他の人形を統率する能力は無いからな」

チャチャゼロ、エヴァの作った小さな自動人形だ。思考は簡単に言えば戦闘狂で、ティアのように侍女としての能力は無い。元々がエヴァの戦闘補助として作られたらしいので、並べて比べるのは少々違うと思う。

そう指摘すると、

「それはそうなんだが……。少々悔しい、大戦が終わったら人形作りの腕でも競うか」

「別にいいけど、私の作り方ってチート臭いのよねえ……」

概念能力とアーティファクトの組み合わせで作った、と言って納得してくれるだろうか。

サンドイツチを食べ終わり、皆を見渡す。

まだ食べている者も居れば、既に食べ終わって紅茶や珈琲を飲んでいる者も居る。

「皆、そのままでもいいから聞いてちょうだい。>造物主の掟への対策品も完成したし、いよいよ決戦よ。戦場に行く時は、配った装甲服を着ていつてね」

その言葉に、エヴァが手を上げた。

「なあ、未央。これカラーリング変えられないか？ 白というのは私の趣味じゃないんだが……」

「いえいえ、よく似合っていますよ、キティ」

「キティと言うな！」

「はいはい、エヴァには悪いけど、先人の加護を得る為にもカラーリングは我慢して。アルはあんまりからかつちゃ駄目よ」

「では、程ほどにしましょうか」

お前の程々は信用出来ない。

皆の思いが一つになった気がした。

とにかく、と場を区切り、皆に再び視線を送る。

「決戦では、私はまず全体の支援に回るから、突入は皆に任せるわ。勿論、後から追うけどね。それまで負けちゃ嫌よ」

「何いってんだよ未央、負けるどころか、未央が来る前に俺が全部終わらしておいてやるよ」

「俺様もついでるからな！ まあ負けるこたねえだろ！」

「馬鹿二人の吹かしは置いておくとして、そこは信頼してほしい」

前衛陣は頼もしい声で応じた。

「まあ、そう簡単に負ける事は無いでしょう。優先して倒すべきなのは、影を操るデユナミスという男でしたか。彼が召喚魔を統率しているのであれば、早めに倒す事で未央の合流を早められるでしょう」

「こちらも手勢を増やせばいいんじゃないのう、ワシの知り合いの悪魔呼ぶかの？」

「やめておけ、世界の命運を決める決戦の助勢など、何を要求されるかわからんぞ」

後衛陣は、戦略を交えながら応じる。どちらも、負ける気は全く見えない。

頼もしいと、素直にそう思えた。

「未央こそ、他の奴ら取りこぼすんじゃねえぞ」

「あら、誰に言ってるのよ。この>造物主の掟くの模造品もあるし、アルトリアも居るわ。他の皆だって木偶じゃないもの、なんとかな

るわ」

「そうそう、それですよ。未央」

そう言っ、アルが会話に入ってくる。

それですよ、と背後に浮かぶ模造品を指差しながら、

「既にオリジナルとはだいぶ違う物なのでしょうか？ 名前を考えてあげませんと」

「……そういえば、名前付けてなかったわね」

指摘されて、考える。

少し考え込み、掟は堅苦しいと、そう思い、

「> 幸コード・オブ・ラフメイカーいを送る者との約束く、どうかしら」

「ルビの中はほとんど変わらんが、字面はいいのう」

「メタい感想を送らないでよ、ゼクト……」

何はともあれ、名前は決まった。

> 幸コード・オブ・ラフメイカーいを送る者との約束く、これを持って、一人も失わずに、来る決戦を戦い抜こう。

その為にも、皆の協力は必要不可欠だ。

「皆……、頑張りましょうね」

応じる声は、契約の言葉だった。

『Testament』

任せろ、と。

お任せあれ、と。

任せておけ、と。

任せとけ、と。

なんとかなるじゃろう、と。

楽勝だろっ、と。

それぞれが付け加えて、応答した。

第五十四話

太陽が真上から全てを照らしている。

照らされているものは、いくつかの色だ。

最も多い色は白。

小さな浮遊島を埋め尽くすように、白の衣装を纏った人々が居る。数にしてみれば万を越えるだろう。彼らは四力国連合軍の者達で、大剣を携えた重戦士、槍を携えた兵士、杖を抱えた魔法使いと、その装いも、人種も様々だ。

彼らは近くの者とお互いを鼓舞しあったり、武器の確認をしたりと、これから始まる決戦への心を決めていた。

一際目立つ軍団は、いくつかの輪を作り、

「よっし！ 恒例の死ねないフラグ建築、ようい、はじめ！」

「では私から、先日娘の彼氏と会いましたが、なかなかの男でした。娘の花嫁姿を見たくまりましたね」

「小生、先日気になっていた女史にコクつたらOKもらえたんで、これから二人で生きていく為に死ねないですね」

「自分は相変わらず戦艦模型を作るまで死ねません！ 鑑賞用の棚がもつすぐ完成しますからね！」

「拙者、明日あたりまほネット通販したR成人なゲームが代引で届くでござる」

「お前それ違う意味じゃねえか！」

騒ぐ彼らの頭上を覆う影が出来た。

巨大な体躯は白に染まっている。概念竜アルトリアだ。

その頭部、装甲の内側にある艦橋には、アリカとアルトリアが居た。アリカは外部から持ち込んだ木製の椅子に座り、アルトリアはその横で立っている。

アリカの装いは普段のドレスではなく、皆と同じように白い装甲服だ。

表示枠を展開させ、他の指揮官と連絡を取り合う。

「あー、テステス。テオドラ殿、リカード殿、そちらの準備は如何か」

「テオじゃ。こちら準備万端じゃ」

「リカードだ。こちら問題ないぜ」

概念竜を守護するように、多数の影が現れた。

メセンブリーナ連合、メガロメセンブリアの旗艦であるスヴァンヴィート。

ヘラス帝国、皇族のみが運用する旗艦であるインペリアルシップ。それらを取り巻く艦隊が集結している。

更に、概念竜の上部には、十二の人影が見える。

人影といえど、その大きさは人間ではありえないものだ。人間をそのまま十五m程に巨大化させたようなシルエット。鎧を纏い、兜を被っており、腰には剣を携えているそれは、武神と呼ばれる巨大人型兵器だ。

>円卓の騎士団くと名付けられ、アルトリアの手足となり、敵を打ち破る騎士である彼らは、直立し、戦場が開かれるのはまだかと辺りを見回していた。

そして、その周囲を飛び回る小型の飛行船がある。

船体には、>まほネット中継用くと書かれており、概念竜や武神、戦艦や兵士達を写していた。映像はまほネットに放送され、誰もが世界の命運を決める一戦を見つめている。

> 紅き翼くは、浮遊島の最先端、墓守り人の宮殿が一望できる位置に陣取っていた。

ナギとラカンは縁に立ち、腕を組んで宮殿を睨みつけている。未央はそれに並び、日差しを手で遮りながら宮殿を見ていた。ゼクトは縁に腰掛け、エヴァと飲み物を飲みながら開戦を待っている。

アルと詠春は表示枠を出し、それぞれ別の人物と連絡を取り合っていた。

「ではガトウ、アスナの護衛と、タカミチ君とクルト君の見張りをお願いしますよ」

「承った。まあ、護衛といっても負傷が完治しているわけではないから、大した事は出来ないがな」

「その為に王宮で待機してもらっていますから、他にも何人か兵士がついていますので、こちらの武運でも祈ってください」

「ああ、わかった」

アルとガトウの通信は終了するも、詠春は未だ話し込んでいた。

誰と話しているのか、と背後からアルが近づいて聞き耳をたてる。

「こ、近衛さん。この戦が終わったら、その……、ええと……」

死亡フラグを立てていますよ、この男。とアルがこぼすと、皆が集まってくるが、詠春は気づかずに続ける。

「な、長らくお待たせしており、大変申し訳ないのですが、せ、僭越ながら、青山 詠春。お迎えにあがりまひゅ……！」

最後に舌を噛んだ。しかし、表示枠の向こうからは喜びの色に染まった応答があった。お待ちしております、と。

詠春はそれに満面の笑みを浮かべ、武勲をあげてまいります、と

通信を切った。振り返れば、いじるネタを増やした猛獣達なかもが居て、思わず大粒の汗を垂らす。

「おいおい詠春！ 決戦前にすげえフラグ立てだな！」

「なかなか真似できねえな、俺でも死にそうなフラグだぜ」

「ふふふ、詠春。う・か・つですね」

「まあ、最近オステイアでは死亡フラグを>死ねないフラグ<と言い換えて、加護を貰うのが流行らしいからな。最先端じゃないか」

「最後に舌かんだのはどうかのう」

「ククク、皆いつも通りすぎて、超頼もしいわ！」

「盗み聞きとは、この外道どもめ……！」

いつも通りに話を進めていた>紅き翼<の一同に、いや、この場に詰めている皆に通信が入った。

通信の主はアリカだ。

「さて、皆の者。いよいよ戦端を開く時間じゃ」

「この戦いは、魔法世界の存亡を賭けた戦いとなる」

先ほどまで馬鹿騒ぎをしていた兵士達は、声を収めてアリカの声を聞く。

胸に手を当てる者、腕を組み瞑目する者、十字を切る者。

「敵は、魔法世界を作った相手じゃ。まさしく神と言ってよい。いや、あるいは我ら共通の母のような存在かもしれぬ」

戦艦に詰める兵士達もまた、その声を起立して聞いていた。

詰め襟を直し、ボタンをかけ、帽子を被り直す。

「しかし、その母は今、我らに消えろと言っておる。我らは失敗だ」と

言葉は遠く、メガロメセンブリア元老院の人間も聞いていた。ローブを羽織り、フードを被っているが、時折見える顔は老いている。彼らは一様に暗く、何かを待っているようにも見えた。

「しかし、じゃ。妾達は、明日が欲しい」

その言葉に、テオドラが頷いた。インペリアルシップの艦橋に詰める兵士達も続いて頷く。同じような光景が、連合のスヴァンフヴイートでも繰り広げられていた。

「この魔法世界が崩壊の危機にあるというなら、妾達がなんとかすると、そう主張しても信じてはもらえなかった」

> ライフメイカー 紅き翼くのゼクトが、その言葉に頷く。彼が一人向かったのは、造物主の説得の為だった。しかし、それは無駄に終わってしまった事を、アリカは伝えられていた。

「だから、妾達は示さなければならん。無理だと言う奴に、妾達は未来を作っていける力があると！」

皆が、アリカの声を聞く皆がその言葉に頷いた。その動きに区別は無い。

「この戦いは、明日を作る為の戦いじゃ！ 出来ぬと言うならばやってみせよう！ 最早、妾達に母のお守りはいらぬと証明してみせ

よう!」

人間も、亜人も、精霊も。

「皆の者! 準備は良いか!」

兵士も、魔法使いも、傭兵も。

まほネットを通じて声を聞く力無い人さえも。

「己が歩んできた人生を消してしまわぬように、力を振るえ!」

メセンブリーナ連合も、ヘラス帝国も、アリアドネー魔法騎士団、大分烈戦争に関わっていなかった国々も。

あらゆる境は無く、アリカの声に頷いた。

「GO AHEAD
進軍せよ!」

返事は世界中から響く。

『Testament!!』

白の軍勢が動き出す。

軍勢から抜け出すように、上空へ飛ぶ人影がある。

未央だ。

> 幸いを送る者との約束くを掲げ、彼女は言い放つ。

「我ら、滅びに立ち向かう者達! 国という境を越え、襲ってくる危機に逆襲する者達!」

杖を振る、同時に概念条文が響いた。
杖に込められた概念と、口頭の概念で、

【・ 名は力を与える】

【・ 文学は力を持つ】

【・ 先人の加護を得る】

そして、未央は宙へあるものを放り投げた。

十四冊の本。表題には>終わりのクロニクル<とあり、それらは未央を囲むように静止した。

未央は続けて叫ぶ。

我らの名は、と。

「我らの名は、Universal Counter Attack Team! かつて世界を救った先人よ! この世界を護る為に力を振るう我らに力を!」

叫びが完遂された瞬間、十四冊の本が青白い光を放ち、散っていく。

白の軍勢が青い光を放った。

皆が着る装甲服、その全てに>UCAT<と刻印がされており、刻印を中心に光は広がっていく。

光に身を包まれた皆は、背中を押されたような感覚を得ていた。

そして、誰もが声を聞いた気がした。

頑張れよ、と。

根性出せよ、と。

そして、救っていけよ、と。

声を背に、皆は進んでいく。

墓守り人の宮殿の宮殿へ向けて、航空戦艦は進軍を始めた。
飛行が可能な魔法使い部隊がそれに続く。

そして、本来出番が無いはずの陸戦隊も進軍する。彼らは飛行魔法が使えないが、彼らが着用する装甲服には概念条文が刻まれている。進む先、地面から空になると同時に概念が発動した。

【 ・ 我らの歩みが道となる】

瞬間、空に仮の大地が現れた。

青く光る大地だ。横から見れば、薄く線にしか見えないものではないが、重装備の彼らを受け止め、走らせる。

全ての軍の先頭に行くのは、>紅き翼くだ。

赤毛の少年を先頭に行く彼らは、天上を一瞥すると、その速度を上げる。

白の軍勢が迫り、墓守り人の宮殿でもついに動きがあった。

宮殿内から、黒の軍勢が一斉に飛び出したのだ。

黒の軍勢は、三m程の個体を最小として、巨大なものは五十mを優に超える個体も現れる。それは翼をはためかせ、白の軍勢へ迫る。

ついに両軍は激突を果たした。

白と青の光と、黒と赤の光が衝突する。

第五十五話

戦場の最先端を、>紅き翼くは疾走する。

先頭を飛ぶナギ、その後ろに詠春とアルが続き、エヴァとゼクトが三列目、ラカンが最後尾を守る。

ナギには後ろ以外、あらゆる方向から召喚魔が襲い掛かってくる。正面は勿論、上下左右から同時に襲われるが、彼らは速度を落とさない。

加速する。

正面の敵をナギが体当たりで砕き、左右の敵を詠春とアルが両断し、上下の敵はエヴァとゼクトが砕き、背後からの追っ手をラカンが薙ぎ払う。

黒の軍勢の中を、破碎の光が進んでいく。

しかし、召喚魔の最大の強みは力でも魔法でも無い。数だ。

大軍を持って相手を押し潰す戦法は、どんな相手にも有効だ。

>紅き翼くの周囲、空間を押し潰すかのような量で召喚魔は迫る、彼らの視界は黒に埋め尽くされており、空の色を見る事は出来ない。召喚魔の数は、召喚者を倒さない限り無限に増え続ける。

周囲を確認して、ナギが舌打ちをする。

「まどろっこしいな！ 俺が一発でかい奴かましたら駄目なのかよ！」

「いけません、後に控える強敵の事を考えれば、ナギは特に節制してください」

アルが嗜める。しかし、アル自身も予想を超える物量に頭を痛めていた。

実力的にはまったく問題ないが、突入までの時間が遅くなればなる程、召喚魔は増え続け、他の戦場にも影響を及ぼすはずだ。

それを考えれば、誰かに大魔法を使ってもらうのはアリかもしれません。

召喚魔を重力刃で両断しながら、アルはそう考えていた。

しかし、その思考を遮る声と、破碎の音が聞こえた。

「我らにお任せを！」

周囲の召喚魔が爆散し、自分達を取り囲む者が居る。

それは、白い装甲服を纏い、身の丈程の盾を持った兵士達だ。

> 紅き翼くを取り囲む陣形は、まるで鏃やじりのような形をしていた。

白の軍勢の最先端、> 紅き翼くを後ろに彼らはこう叫んだ。

「我ら、オスティアUCAT近衛兵団！ > 紅き翼くに道を作るぞ

！」

『Testament!』

言葉と同時に、前面に盾を構えて、足で空を踏み抜く。足元には仮想の大地が展開され、踏み抜く事で彼らは速度を追加した。

隊長格の男が、続く兵士達に叫ぶ。

「我が身は、意思を届ける矢文と考えよ！」

叫んだ瞬間、彼らは更なる加速を得た。鏃のような陣形を取り、

戦場を飛ぶ矢のように彼らは走る。

音を抜き去る速度で、一直線に墓守り人の宮殿への軌道を取る。それに、召喚魔の軍勢が迫る。まるで波のように厚みをもち、襲い掛かる。

しかし、彼らは怯まなかった。

「ぶち抜けえー!!!」

おお、と呼応する声が響く。

盾を前面に、身をかがめて更なる加速で召喚魔に突撃する。激突した。

体躯も魔力も敵の方が上、だが、装甲と意思は彼らが上だ。破壊の音が響く。

白の破壊光が、召喚魔をぶち抜いた。

しかし、召喚魔達も一度で駄目なら二度、三度と白の鏖陣形にぶち当たる。

衝撃が連続し、兵士達は吹き飛ばされそうになるも、

「堪える!!!」

隊長格の男が一喝する。

「ここは、父王様をお守り出来なかった我らの贖罪の場だぞ！」

その言葉に、周りの兵士達の様子も変わる。

衝撃で痺れ、開きかけた手を盾に打ち付けて強引に拳とする。

その眼には、意思が溢れている。

鏖陣形が再び加速した。

しかし、召喚魔は更なる数を追加する。砕かれた分を補填しながら、体をねじ込むように空間を埋めて突撃を敢行。兵士達は盾と装

甲を持って耐える。殴られ、蹴られ、穿たれ、弾かれるも、誰もが決して後退しない。

そして、ついに彼らは役目を果たした。

墓守り人の宮殿、その入り口に鏃が激突する。

> 紅き翼くが入り口に降り立ったと同時に、彼らは入り口を塞ぐように盾を構える。

盾を構えた者の肩に人が乗り、その上で盾を構え、それを連続する事で入り口を塞ぐ。

人の壁だ。

隊長格の男が振り向き、

「ご武運を、> 紅き翼くの皆様！」

敬礼し、己も壁に加わっていく。

彼らのおかげで、予定より消耗する事なく到着する事が出来た。

急ごうと背を向けるが、ナギが未だ彼らを見ていた。

「ナギ、急ぎましょう」

「ちよつと待ってくれ、アル」

ナギは彼らに声をかける。

「お前ら、ありがとうな！ ちよつくらぶつとばしてくるから、それまで死ぬんじゃねえぞ！ やばかったら俺の嫁にヘルプ頼めよ、すぐ援軍来るからな！」

その声に、壁となった皆から笑いがこぼれた。

もう嫁扱いかよ、甘く見るんじゃねえよ等と、軽口のようなものだ。

そして、皆の代表とばかりに、一人の男が返答した。

「Tes! あんたらこそ、しくじるなよ!」

「おう、いや、Testament!」

応答する事で、ナギは笑みを浮かべた。

言つべき事は言つたと、彼らに背を向けて、

「よっしゃ、皆。行くぜ!」

駆け出した。

追従し、その背中を見ながら思う。

自分の戦いが控えているにも関わらず、彼らを鼓舞する余裕を見せたナギ。

随分頼もしくなりましたね。

思わず、含み笑いが出た。

こんな気持ちになるのだから、他人の人生を見続けるのは面白い。

墓守り人の宮殿の内部は、奇妙な程、静寂に包まれていた。

外に出れば、両軍の激突による音が響いているにも関わらず、内部には召喚魔の一体も、罨の一つも見当たらない。

「誘い込んで、待ち伏せでもしているのだろうか」

エヴァがそう呟き、皆が頷く。

廊下を抜けると、広大なエントランスホールに出た。

そして、眼前にはエヴァの眩きを肯定するかのようになり、人影がある。

五人の人影だ。

アーウェルンクスを先頭として、火炎の巨人、雷の拳闘士、流水の魔法使い、それらに隠れるように漆黒のローブに身を包んだデユナミスが立っている。

アーウェルンクスが軽く手を上げて、

「やあ、いよいよ最後の決戦」

「聞く耳もたねえ！」

アーウェルンクスの口上を、ナギが拳で遮った。

身を屈め、飛び掛るように殴りかかったナギの拳は、アーウェルンクスの魔法障壁にぶちあたり、障壁を派手に発光させる。

アーウェルンクスはバックステップ、背後に控えていた四人を跳躍で飛び越すが、ナギも大跳躍を果たし、それに追従。拳を連続で放っていく。

「やれやれ、落ち着きのない男だね……」

「やかましい！ 中ボスの口上なんて聞いてられねえぜ！」

「中ボスとは酷いね、どのような立場の者にもハーフソウルだよ」「意味がわかんねえよ！」

打撃の音を響かせながら、二人は奥へ進んでいく。

思わず呆気にとられる四人の前に、>紅き翼くが進んでいく。ラカンは炎の巨人を指差し、

「よう、おっさん。アンタ、俺とな」

「良かるう」

「焦してくれた礼に、肝を冷やしてやるぜ」

「……お主には無理だ」
「やってみなきゃわかんねえだろうが！」

言つて、二人は右方へ跳躍する。
それに続き、詠春が雷の拳闘士に手を上げた。

「貴様は私とだ。先日は世話になったな」

「ふん、自分はその時、本気ではなかったが、貴様が相手か？」

「私も本気ではなかった。精々五割」

「自分は三割程度だった」

「実は私は二割」

「自分は一割」

負け惜しみの笑顔を固定させたまま、両者は左方へ跳躍する。
ゼクトがやれやれ、と溜息をつきながら、流水の魔法使いに声をかける。

「お主、ワシの愚痴に付き合え。>造物主くが出てくるまでの」

「フィリウス……！ 貴方は我らが主を裏切るのですか！？」

「色々思うところがあるんじゃないよ、聞かせてやるから、付き合え」

言葉と同時に、突風が流水の魔法使いを上空へ吹き飛ばした。
ゼクトはそれを大跳躍で追う。

最後に残ったのは、デュナミスとアル、そしてエヴァだ。
その状況に気づいたデュナミスが、手を上げて、

「一応聞くが、そちらの合法口りは応援担当か？」

「いえいえ、そんな訳ありません」

アルを押しつけるように、エヴァが前に出た。

「召喚担当なんだろう？ 真っ先につぶしてやるよ」

わるい笑みを浮かべた。

その笑みに、思わずデユナミスは苦笑いをする。

しかし、直後に胸を張り、

「後方支援担当と、侮ってもらっては困る。悪の大幹部の力をお見せしよう」

「ふん、大幹部如きがラスボスに敵うと思うなよ！」

「フッフ、お付き合いしましょう、魔王様」

エントランスホールに、影と、氷と、重力の刃が炸裂した。

> 紅き翼くが戦闘を開始した頃、入り口を守る兵士達は苛烈な攻撃を受けていた。

概念能力により、防護の加護を受けている彼らだが、多勢の攻撃は許容量を上回りつつある。崩れない壁に、召喚魔達は更なる攻撃を呼んだ。

十mを超える巨大な体躯を持った召喚魔、両腕が大きく盛り上がり、まるで破城槌はじょうつゐのように見える。

槌が振り上げられた。

「でかいのが来るぞ！」

空気を砕きながら、槌が振られた。盾の壁が強打される。

衝撃が壁を震わせ、彼らの背を抜けていく。

しかし、壁は砕けない。

膝をつく者が居た、気を失う者が居た、片腕が砕けた者も居た。
しかし、壁は砕けない。
もう一撃、と召喚魔の腕が振り上げられる。

「くっ……！ もう一発来るぞ！」

再び破城槌が振るわれた。

しかし、その破城槌が壁を打つ事は無い。

黒の軍勢を切り裂くように、上空から三体の白が現れた。

疾風の如き速さで現れた二体は、召喚魔の両腕を両断し、壁の前に立ちふさがった。

最後に遅れて突入してきた三体目は、召喚魔を頭から股にかけて両断する。

白の武神。

背から青い噴出光を放っており、二体は西洋剣を、もう一体は槍を持っている。

武神は手に持った獲物を振り、名乗りを上げる。

「お初にお目にかかる。私の名はガラハッド」

「僕の名前はパーシヴァル」

「自分の名はポールス」

『皆様の援護を務めさせていただきます』

言い放ち、槍を持った武神が前に出た。

腰のハードポイントから、幾つもの短槍が飛び出し、武神の周りに展開される。

「【投槍】パーシヴァル、行くよ！」

武神が手に持った槍を投擲する。

手を離れた瞬間、槍は光となって召喚魔を飲み込んでいく。そして、光の槍に追従するように短槍が飛び、それぞれが違う召喚魔に突き刺さっていった。

一瞬で前面が空き、空が見えた。
そこへ躍り出る武神がある。

「【聖騎士】ガラハッド、参る……！」

右手に持った西洋剣は、片手で扱うサイズを優に超えている。武神とほぼ同サイズ、十五mの剣を片手で持ち、薙ぎ払う。

剣の軌跡が光となり、剣圧と共に飛んでいく。光に触れた召喚魔は、触れた部分から吹き飛んでいった。

召喚魔の逆襲が始まる。

ガラハッドを覆うように襲い掛かる黒の波。

それに対し、ガラハッドは左手の盾をかざした。

赤い十字の刻まれた盾だ、それは青い光を放ち、ガラハッドの周りに障壁を展開する。召喚魔は障壁を殴り、蹴り、噛り付く。

障壁に取り付いた召喚魔は、まるで黒の球だ。

その黒の球に、パーシヴァルの光の槍、第二射が直撃した。

召喚魔を相手に、獅子奮迅の働きを見せる二体の武神を兵士達は見ると、しかし、一体の武神は壁に寄り添い、近寄る召喚魔を切り払うのみだ。

「あんたは行かないのか？」

一人の兵士がそう聞いた。

武神はその声に振り返り、鎧姿にも関わらず、顔を指でかきなが

「お恥ずかしながら、あの二人程、自分は優秀ではありませんので。自分は【信頼】ポールス、敵軍を薙ぎ払う力はありませんが、皆様の信頼にはお答えしましょう」

武神はそう言って、敵へ向き直る。
ならば、と兵士は続けた。

「信じてるぜ！ ポールス卿！」

剣を振りながら、武神の背は答えた。
お任せあれ、と。

第五十六話

墓守り人の宮殿の外、戦場の右翼を担うのは亜人達だ。

帝国UCAT、白の装甲服を纏った彼らは、召喚魔を文字通り引き裂いていく。

亜人である彼らは、獣の特性を強く持つ故に迫害を受けた歴史を持つが、この戦場において、獣の特性は誰の目にも頼もしく映る。

三mを越す召喚魔が一丸となって突撃を敢行する。それは文字通り球体となつて、仮想の大地を転がりながら白の軍勢へ迫る。三十mを越える球体となつた召喚魔の行く先には、皇族の載るインペリアルシップが浮いていた。

無言のまま召喚魔は突撃する、それは巨大さと相まってあまりにも不気味だ。

球体の軌道上となる白の軍勢は、退かず、身構える。

彼らは背後のインペリアルシップを一瞥する。

そして、隊長格の虎の亜人が吠えた。

「帝国UCAT獣人部隊！ 俺達の皇族に、覇を見せるぜ！」

「Testament!!」

応答の叫びが上がり、彼らは仮想の大地にスタートを切る。限界まで身を屈めて走る彼らは、まるで獲物を見つけた獣の群れのようにだ。仮想の大地を狩場とし、流れる風でたてがみをはためかせ、亜人達は球体と激突した。

破碎の音が響く。

だが、球体は砕けていない。砕けたのは、下からかちあげるようにぶちあたった亜人達の装備だ。

しかし、成果はあった。

球体が止まったのだ。

だが、彼らはそれで満足しなかった。数人が球体が進まぬように押さえ込み、他の者は力を溜めるように腰を落とした。

「見せつけるよ！ 獣の力！！」

『G a a ！！』

呼びかけに答えたのは、言葉ではなく咆哮だ。

獣の群れが、球体へ殺到し、下からの打撃を送る。

拳で殴りつけ、膝で蹴りあげ、肩でぶち当たる。

獣の猛撃に、黒の球体が進行してきた方向と逆に、ゆっくりと球体は動き始めた。それを確認した彼らの動きは、さらに加速する。

一人一人が視認出来ない速度で動き始め、残像を作り、球体を打撃する影は幾重にも重なって見える。

ゴロリ、と球体が動いた。

そして、幾重にも重なった人影が消える、亜人達の連撃が止まった。しかし、誰もが構えを解いていない。

両腕を広げ、膝を落とし、渾身の一撃を加えるべく、力を溜めている。

虎の咆哮が響いた。

「G a ！！」

それを合図として、一斉に大跳躍。上空に舞い上がった彼らは、クルリと一回転。態勢を整え、球体を捉える。

「ぶちかませ、獣の一撃！」

宙を蹴りつけ、最後の加速を得た獣達の攻撃が球体に炸裂した。それは球体となった召喚魔を砕きながら、その向こう側まで貫通を果たした。蜂の巣のように穴だらけとなった球体は、自らを支える力すら失って自壊していく。

それを見た隊長格の虎の亜人が、頭を一つ叩いた。

「いつけねえ、やりすぎちゃったぜ。転がしてやるつもりだったんだけどな！」

「隊長！ その分殴りつけてやりましょうぜ！」

「そうだな！ 野郎ども行くぜ！」

「Testament！」

黒の軍勢に向かつて、再び獣達が疾走を始める。

墓守り人の宮殿の右方、先ほどと異なるエントランスホールで、ラカンは5mを越える炎の巨人と対峙していた。既に概念条文が展開され、巨人の炎は石材をも溶かす高温になっている。

しかし、相対するラカンは笑みを浮かべて拳を構える。

「さつて、じゃあ少し眠ってもらうぜ。炎のおっさん」

「お主の拳は、我に届かぬ」

七日前、オスティアで戦った際は炎と化した相手に、ラカンの打撃は通じなかった。炎の精霊と化した相手は、いかに殴ろうと炎が巻き上がるだけでダメージにならなかった。

しかし、ラカンはその言葉を笑い飛ばす。

そんな昔の事は忘れたぜ、と言い放ち、拳を握る。

「試させてもらっぜ」

ラカンは宣言して、炎に拳をぶちこんだ。炎熱で拳の皮膚が焼け、肉の燃える不愉快な臭いが発せられる。その代わり、拳は正しく効果を発揮した。炎が大きく折れ曲がり、くの字に体を折ったのだ。ご、と呻きが漏れ、巨人はラカンを見る。

「精霊化した身に、何故物理攻撃が……！」

その問いに、ラカンはいつもの言葉を放つ。

「気合いだ！」

続けて拳が振られた。一発ではない、高速で放たれた拳は残像を作り、拳の壁となり、相手を面で打撃する。

炎の巨人は起き上がり、それに立ち向かう。こちらも拳だ。巨大な体軀からは想像できない速度で、ラカンの拳を迎撃した。拳骨がぶつかり合う音が多重奏となり、両者のはじけ飛ぶ。ラカンの拳は焼かれて煙を出し、巨人の拳もまた煙を出していた。

両者の拳は拮抗している。

拳撃の嵐の中、ラカンが何かに気づいたように問いかける。

「そいやおっさん、あんた名前はなんつうんだ？」

「……教える意味があるのか？」

「やりあつてる相手の名前くらいしつとくのが礼儀だろ」

「……スルトだ」

「そうか、俺はジャック・ラカンだ。あんたを倒す男だぜ」

その言葉に、スルトの口が笑いの形を作り、呟いた。笑止、と。

そして、巨人となった身をラカンと同等、二m程度の体となる。

「なんだなんだあ？ ハンデなんかいらねえぜ？」

「打撃を通されるならば、閉鎖空間の巨体は利点とならぬ。それに、安心せよ」

陽炎を作りながら、スルトは構えを取った。

「概念能力だけに頼った戦闘より、我は無手の方が強い」

その言葉に、ラカンは笑みを深くし、

「そいつは奇遇だな、俺もだぜ！」

信念を纏った炎と、気合が籠った拳が振るわれ、拳圧が中央で爆発する。

両者は拳を振るいながら、一歩づつ距離を詰める。無数に振るわれる拳は、中央で激突するものもあれば、すれ違って相手を打撃するものもあった。

打撃を受けようと両者は退かず、更に力を込めて拳を振るう。

ラカンの拳は焼かれながら、淡い白光を放って少しずつ再生していく。装甲服に刻まれた再生の加護によるものだが、両者の距離が近づくにつれ、再生が追いつかずに皮膚を焦し始めた。

ラカンは構わずに歩を進める。炎拳の嵐の中、そんなものは効きはしないと示すように、己の身を進めていく。

スルトもまた、ラカンと同様に歩を進める。精霊の身を打撃する拳を受けようと、歯を食いしばり、苦行に耐える修行僧のように歩

みを進めていく。

幾千もの拳圧が交換され、両者の距離がついに無くなり、嵐のような拳圧の応酬が止まる。手を伸ばせば、互いの体に手が届く距離だ。

ラカンの体には幾つもの火傷が刻まれ、スルトの体には拳大の痣が出来ている。

二人の呼吸が響く、荒い呼吸だ。

二人の視線が交差する。ラカンの口元には笑み、スルトの口元は険しい。

「どうしたおっさん、機嫌悪そうだぜ」

「闘いの最中に、機嫌の良いお主が異常なのだ」

「何いつてやがる、楽しんでこそだろうがよ……っと！」

声と共に、ラカンの両拳が動き始める。

拳の軌道を再生の光が追い、虚空へ流星を作る。流星はスルトにぶちあたり、破碎の光を撒き散らす。それを迎え撃つには、煌々と光る紅蓮の拳だ。一際大きく輝きながら、流星と紅蓮が激突し、周囲に光と破裂音を撒き散らした。

薄暗い宮殿の中で、幾つもの光が生まれる。

それは、まるで星が生まれるような輝きにも見えた。

拳を振るうスルトは、ラカンとは対照的に苦悶の表情だ。

「理解できぬ……！ 世界の行末を決めるこの戦を、楽しむなど！」

叫びながら、紅蓮の力を振るう。

炎の塊がラカンを打撃し、その身を焼いていく。しかし、ラカンはそれでもまだ笑みを浮かべ、

「わかってねえな！ だからこそ、だろうが！！」

返答のように、気合を込めて力を振るう。

楽しめ、そう叫びながら炎を振り払うように打撃する。

「我が主の御心を考えれば、楽の心など持てぬ！」

「ああ！？ > 造物主くのおこころお？ ああ、世界が消えるだとか、何千年の絶望だとか言う奴か？」

「それを分かっている、お主はまだ楽しむというか！」

「あつたりめえだろうがあ！！」

ラカンの拳が、スルトの頬を直撃した。

拮抗していた戦場が動いた。

ラカンが更に踏み込み、額をスルトの胸に押し付けるように屈め、そのまま頭突きとした。更に左の拳で突き上げるように胴体へ突き刺し、スルトの体を浮かせた。

「どんな苦境だろうとなあ、楽しみ見出せなきやめげるだろうが！ 陰気な顔して人助けしちやあ、助けられた奴も陰気にならあ！」

吐き捨てて、掌をスルトの胴体に突き刺し、ドアノブでも回すかのようにグルリと回転させた。それだけで、二mを超える巨体が回転しながら吹き飛んだ。

空中を駒のように回りながら、スルトは反対側の壁まで吹き飛び、体を打ち付けて血を吐き出した。血は己の炎で蒸発し、スルトは血を見せる事なく苦痛に呻く。

だが、足元をふら付かせながらも、スルトは立ち上がり、ラカンを睨み付ける。

「お主のように、楽しみだけを追及するような奴に、我らの苦しみ

が理解出来るはずもない……！」
「ああ？」

スルトの言葉に、ラカンは不愉快そうに表情を歪めた。
しかし、それに構わずスルトは呟いた。

【・ 熱とは命である】

概念条文が呟かれた瞬間、スルトの炎が更なる熱を持った。命を熱に変換し、赤々とした炎から、見た者の背筋を凍らせるような青い炎に色を変え、拳の周囲に集中する。表情は険しく、次の一撃に勝負をかける決意が読み取れた。

ラカンは迎え撃つべく、力を溜め始める。周囲の大気を巻き込み、装甲服の裾をはためかせながら気を集中させると、右の拳が白く光り輝き始める。

叩きつけるように、スルトはラカンへ向かって叫ぶ。

「燃え尽きろ、呆気者^{うつけもの}！」

その叫びを跳ね返すように、ラカンは吼える。

「てめえの目に見えるもんだだけで、人を呆気者扱いするんじゃないねえ！」

両者の一撃が放たれた。

青い炎弾は周囲の石材を蒸発させながら、ラカンを焼失させんと迫る。

白い気弾は石材を抉りながら巻き込み、炎弾を迎え撃つ。

部屋の中央で、両者の攻撃は三度目の激突を果たした。

拮抗する炎が気弾を食い荒らすように、その周囲に回りこむ。それは、まるで炎の蛇だ。気弾を包み、丸呑みするかのようにその身へ吸収する。蛇は気弾の軌跡を追いながら、その主へ向かっていく。蛇を眼前に、ラカンはそれでも笑みを崩さなかった。

スルトは見た。

炎の蛇が、ラカンへ向けて口を開けて突撃した。己の全て、死を覚悟して命を注いだ一撃だ。

呆氣者に耐えられるようなものではない！

彼奴を倒せれば、主の障害が一人減る。それならば、己の命など惜しくはない。

そして、その想いが今果たされる。思わず拳を握った。

しかし、スルトは見た。

ラカンが蛇を打撃し、左腕を焼失させようとも笑みを崩さず、右腕を構えた瞬間に蛇が動きを止めたのだ。

何故、という思いに支配される。

何故、己の攻撃が相手を食わぬのか。

何故、己の命を注いだ概念能力が、相手を燃やさぬのか。

一瞬、思考に没入する。

瞬間、目の前に敵が現れた。

背後に炎の蛇を引き連れ、残った右腕を振りかぶっている。

「ラカン……」

その口元は、今も笑みだ。

「インツパクトオ!!!」

正拳突きが己の腹を貫いた。

ラカンの拳を受けたスルトは、床に叩きつけられる。泥状になっていた石材は、その衝撃で周囲に波を作り、壁に波を打ち寄せる。

爆発の中心点には、炎の蛇を従えたラカンと、力を失ったスルトが倒れていた。

「何故、私の攻撃がお主に……」

「ああ？ こいつ概念攻撃なんだろ？ あれだ、うちの魔女曰く、概念能力は死を覚悟した奴には力を貸さねえんだよ。それでだろ」

背後の蛇を一瞥し、ラカンはスルトへ視線を戻した。

「おっさんよ、俺あこれでも結構苦労してんぜ？ 故郷は滅んじまったし、奴隷にやなったしよ。色々あったが、わかった事が一つあるぜ」

「わかった事、だと……？」

おっよ、とラカンは応え、笑みを作る。

「旧世界で言う、笑う門には福来るって奴だ。辛くても笑って抵抗すんだよ、しかめっ面するよか、気合入るぜ」

だからな、と続け、

「俺達が笑えなくなったら、おっさんもう一回あんたの主と攻めてこいや。そんな時まで、俺達が好きにやらしてもらうぜ、笑いながらな！」

そう言って、ラカンは背を向けて走り去る。

後に残るのは、スルトと炎の蛇だけだ。

スルトは蛇を見上げ、

「……死んでもいいと思うのは、駄目か」

蛇が首を懸命に縦へと振る姿を見て、常に苦悶の表情を浮かべていた巨人は、初めて笑った。

第五十七話

仮想の大地の上で、白と黒の軍勢が衝突している。

しかし、戦場は一つではない。

仮想の大地を下に置いた戦場、空を舞う者達も矛を交えていた。

黒の軍勢は翼を持った悪魔型の召喚魔が上がり、その後方には腕の代わりに翼を持つ天使型の召喚魔が控えている。背後には黒く巨大な鍵を持ち、魔法陣が展開されて崩壊の力を持った光を灯している。

対する白の軍勢は、白の装甲服を纏ったアリアドネー騎士団だ。

連合・帝国のどちらにも肩入れせず、中立を保っていた為、構成される人種もバラバラだが、共通点が一つあった。

アリアドネー、>とりわけて潔らかにに聖い娘くの意味を持つ女神の名を抱いた騎士団は、女性のみで構成されている。背に翼を持った戦装束を身に纏い、騎乗用の槍に乗り、剣を携えて空を飛ぶ。その光景は女神というより戦乙女ヴァルキリーと言えた。

空というフィールドで、彼女達は縦横無尽に舞い踊る。

一対一では彼女達に勝ち目は無い。最も小さな召喚魔ですら体躯は3mを超え、その一撃は彼女達の魔法障壁を打ち破るのだ。

彼女達は常に五人で飛び、召喚魔一体ずつを落としていく。二人が召喚魔の両翼を切り落とし、二人が両手足を切り落とし、最後の一人がそれを大地へ叩き落とした。

叩き落された召喚魔は、大地を走る兵士達に囲まれ、砕かれる。空と大地の二面作戦で、彼女達は制空権を握ろうとしていた。

何体もの悪魔型召喚魔が撃破され、白の軍勢の前線が押しあがった事により、後方に控えていた天使型の召喚魔が動きを見せた。灯した光が一際大きくなり、空を舞う戦乙女達に向けて射撃された。

爆撃の役目を持った天使型召喚魔、放たれる原子分解魔法は、射撃範囲に入るものを全て分解し、消し飛ばしながら白の軍勢に迫る。

ディスインテグレイト

光を見て、彼女達は迎え撃つ動きを見せた。

五人が散り、ペンタグラム五芒星くの陣形を取る。陣を象る線は、彼女達が持つ長剣は普段の剣とは異なり、青い光を纏っている。

「アリアドネーUCAT！ 男達に、守護の力というものをを見せてやるわよ！」

「Testament！」

直後、彼女達は剣によって、互いを結ぶ線を作る。線は五芒星の魔法陣となり、彼女達を中心に何者も通さない守護結界が展開される。アリアドネー九七式分隊対魔結界と呼ばれる守護結界は、魔法陣から風を放ち、原子分解魔法の光線を彼女達の中心へ誘導する。

そこに崩壊の光が直撃した。

結界が崩壊の光と拮抗し、周囲に光の飛沫をまき散らす。

結界を展開する彼女達は、結界を形成する長剣を放すまいと力を込め、歯を食いしばりながら、それを放った天使型召喚魔を見据える。

召喚魔が第二射を放とうとする様子を見て、分隊の隊長格である人間の女性が叫ぶ。

「さあ、根性みせなさい皆……！」

叫び、続けて掛け声を放つ。

さん、にい、いち、と続けて、

「お返ししなさい……！」

結界を形成する長剣が、崩壊の光を跳ね返すようにフルスイングされた。同じように結界も動き、まるでテニスラケットに打ち返されたボールのように跳ね返された光は、暴風の銃身を通り、主に叩き返される。

しかし、天使型召喚魔もそれに対抗すべく、原子分解魔法を再び放つ。

同じ魔法が激突し、空に派手な爆光をあげながら相殺される。

天使型召喚魔が一息ついたような仕草をすると、空いている光の軌跡を飛ぶ影が見えた。

アリアドネーの戦乙女達が、崩壊の光によって作られた道に飛び込み、加速してきたのだ。彼女達は騎乗用の槍に身を寄せ、長剣を抱くように前へ構えながら己の最高速で突撃する。

召喚魔は原子分解魔法を連射するも、戦場の最も高い位置で支援を続ける未央の与える加護と彼女達の魔法障壁がそれらを全て弾き飛ばす。

白い閃光を抜けた五つの流星が、黒の天使を貫いた。

墓守り人の宮殿の左方で、超高速の接近戦が行われていた。行っているのは、雷の拳闘士と詠春だ。

互いに残像が見える程の速度でステップを踏み、攻防を交わす。

太刀が空気を斬る音が聞こえ、雷の手首が切り飛ばされる。

しかし、切り飛ばされた手首を打つように拳闘士の腕が振られ、溶け合うように再生する。

そして、腕を振った勢いを利用し、右の掌底がぶちかまされる。

光の線となって飛び込んだ掌底は、詠春の腹部を打撃し、装甲服を破碎させながら吹き飛ばした。

吹き飛ばされ、詠春の足が地面から離れ、その身は壁へ向かって

飛ぶ。

吹き飛ぶ体に、拳闘士が併走し、打撃を放つ。肘と膝で胴体を挟み込むように打撃し、顔面への蹴りを放って壁へ打ち付ける。

詠春は壁に打ち付けられ、膝について呼吸を整える。

雷を纏った拳闘士が構えを解かず、詠春を見据えている。拳闘士は呼吸を整えながら、

「やはり自分の方が速かったようだな。貴様も遅くはなかったが、雷の名を頂いた自分程では無い」

勝利宣言とも取れる言葉を放ち、拳を震わせる。

震える拳の周囲に、雷の線が弾ける。手だけではない、彼の体の至る所から雷が弾け、周囲を威嚇するように照らしていた。

詠春は左手に持った太刀を地面について立ち上がり、眼鏡の位置を直しながら、

「まだだ、まだ勝負は決まっていない……！」

両手で太刀を握りなおし、詠春は攻撃に移る。

その速度は常人に捉えられるものではない。攻撃に移る為に前かがみとなった瞬間、風を巻き上げて突撃した。

硬質の音と衝撃が幾度も走り、宮殿の柱に刀傷がつき、床が打撃で抉られる。

激突の瞬間のみ影が映り、両者が再び現れた時に立ち位置は逆転していた。

だが、立場は変わらない。

詠春が膝をつき、拳闘士は事も無げに振り向いた。

速い。まさに雷の名を冠するに相応しい男だ。

決戦の最中にも関わらず、相手を賞賛してしまつた。
それ程までにこの相手は速く、素晴らしい技量を持っていた。

【・ 雷とは速さの象徴である】

未央からも聞いた事の無い概念条文で、おそらく相手方の概念使いが創造したであろう概念を纏った相手は、その手足を雷に変えて攻撃を放ってくる。

その速度は、まさに疾風迅雷。

こちらが一撃を放つ間に三つの拳を放ち、こちらが一步進む間に三歩は先に行く。

未央によれば、三倍の速度は赤さの特権だったはずだが。

相手は色で言えば黄色だが、確かにこちらの三倍は速い。

本来であれば、戦法を変えてあたるべきだろう。だが、自分が打てる策はそれほど無い。京都神鳴流の剣術と、己の速度しか手札は無い。

いや、普段から持ち歩いている賢石があった。アルの重力魔法に對抗する為の概念で、【ものは下に落ちる】という重力の向きを変えるものだ。普段は下に叩き付けられない為に瞬間的に自分の周囲にしか展開しないものだが、閃きが走った。

これだ。

膝をついていた剣士が、ゆっくりと立ち上がった。その表情には、未だ諦めの色は無い。

精神の強い男だ。

互いに速度を武器とするスタイルである事は、手合わせの中であつた。しかし、主より雷の名を賜つて以来、飛躍的に高まつた自分の速度は相手を上回っている。それにも関わらず、相手は挫けずに向かつてくる。

敬意を表したい。だが、主の邪魔をするならば話は別だ。

拳に力を込め、止めを刺そうと構えた瞬間、剣士が懐に手を入れて呟いた。

【・　ものは下に落ちる】

概念条文に身構えるも、自分の身には変化が無い。しかし、剣士を見れば様子が異なつていた。まるで重力を無視したかのように浮き上がり、虚空を蹴つて突撃してきた。

一瞬遅れるも、迎撃に拳を繰り出す。相手を幾度も捉えた速度で繰り出された拳に、手ごたえが無い。

「!?!」

回避された、と思い、何処だ、と続けて思う。

正面、左右と視線を向け、居ない事を確認する。ならばと上を見ると、相手はそこに居た。突撃の慣性を無視しているような、上空へのバックジャンプだ。

追っ。

雷と化した足の踏み出しは、一歩目からトップスピードだ。

宮殿の室内で、空中戦が始まった。

詠春は概念能力を駆使して、『下』を変える事により縦横無尽に駆け回る。時に床を、時に壁を、時に柱を大地として、ひたすらに加速を重ねていく。

その周囲に雷が落ちる。

しかし、詠春は止まらない。迎撃する事もしない。

まだ足りないかと呟きながら、ひたすらに駆ける。

走る姿勢は、まるで下り坂を全速力で駆け下りるようだ。

加速を重ねた体は音速を超え、周囲に暴風を撒き散らす。

雷によって穿たれ、暴風で巻き上げられた石材が室内に飛び散り、破碎の音を立てる。

細かく、高く響くそれはまるで拍手のようだ。

拍手に応えるように、詠春は更に速度を増す。

高速で、石材の欠片を飛沫^{しぶき}かせて。

「届け……!!」

詠春が吼えた。

駆けながら、足に力を込めて。

ただ前を見て、風を突き抜けながら。

「届け、雲耀^{うんよう}の速さまで！」

言葉と共に、詠春はその身を前に押し出した。

瞬間、詠春の影が消えた。

残像すら残さず、室内には足が石を蹴る音のみが響く。

雷の拳闘士が立ち止まった。

完全に目標を見失い、彼は防御の姿勢を取りながら相手を待つ。彼の狙いは、攻撃を受けた瞬間に拳を叩き込むカウンターだ。両腕で顔面を守るように覆い、左の拳を握りこんでいる。

「来い！」

拳闘士が叫ぶ。

その身から雷が進り、蜘蛛の糸のように周囲の空間に展開された。室内に、加速を重ねる疾走の音と、雷の弾ける音が満ちる。姿の見えない剣士を待つ拳闘士は、反撃の機会を待つ。そして、その機会が訪れた。周囲から響くような声で、詠春の声が届く。

「京都神鳴流、青山 詠春……！」

名乗りを上げた。

それに応えるように、拳闘士も声を上げる。

「>完全なる世界く、イヴァン……！」

次の声は、二人同時に。

『いざ、尋常に』

詠春が現れた。

拳闘士の正面、十mの距離をおいて。

現れた身は前傾しており、両手で太刀を持ち、右に下げている。

『勝負！』

両者が交差した。

交差した両者は、位置を入れ替えて姿を現した。

両者ともに着地に失敗し、地面に倒れこんだ。

地に伏せ、腕をつけて己の体を起こす。

カツン、とプラスチックで出来た眼鏡が落ちた音が響き、そのすぐ傍で倒れる人影があった。

もう一方の人影は、震えながらも膝に手をつき、ゆっくりと起き上がった。

そして、倒れる人影に歩み寄り、傍らに落ちている眼鏡を拾い上げる。

拾い上げた人物は、倒れこんでいる人物へ向けて勝利の宣言を放った。

「京都神鳴流奥義、斬魔剣式ノ太刀に切れぬもの無し。私の勝ちだな、イヴァンとやら」

詠春はそう言って、拾い上げた眼鏡をかけ直した。

しかし、レンズにはヒビが入っており、顔をしかめて眼鏡を外す。

倒れこむイヴァンは、懸命に立ち上がろうと力をこめると、胴体に横一文字の切り傷がはしっており、立ち上がる事は叶わない。

「あまり動くな。それ以上動いては出血で死ぬぞ」

「しかし、貴様は自分達の主の元へ行くのだから……！」

「行くとも。行って、仲間と共に世界を救ってくる」

「自分達の主に勝てると思っているのか！」

背を向けて歩き出している詠春は、その言葉に振り返る事なく答えた。

「勝てるとも。私達が揃えば世界の危機など恐るに足らず、だ。少々馬鹿なのがたまに傷だがな。世界を救うついでに、貴様の主も救ってやるとも」

言い放ち、詠春は走っていく。

残されたイヴァンは、胸の傷を腕で押さえながら蹲り、呟く。

「あの方を、絶望と孤独の淵から救えるものなら、救ってくれ……」

空いた手で、床を殴りつけた。

第五十八話

宮殿のエントランスホールで、エヴァはアルと共に敵幹部　デユナミスと交戦していた。黒いローブに白の仮面を被った、完全なる世界くの大幹部、その実力は地位に見合ったものだ。エヴァの放った初撃の魔法を影の槍で相殺し、黒衣の夜想曲くを即座に発動させ、背後に巨大な悪魔を召喚する。

デユナミスの影から現れた悪魔は、宮殿の外に展開する召喚魔と異なり、幾つもの腕を生やして山羊の頭を持つ。無数に生えた腕は一つ一つが優に10mを超え、六つの眼が忙しなく動き、エヴァをアルを視界に捉えると、咆哮と共に巨大な腕が振るった。

「まるでバフオメットだな！」

「悪の幹部らしいじゃないですか」

打撃を受け流しながら、エヴァは感想を呟く。楽しげに笑みを浮かべ、右手に、断罪の剣くを展開し、襲い掛かる攻撃を切り払う。その背後を守るように立つアルは、両手に重力魔法を展開し、鉄球のように振り回す事で敵の腕を押し潰す。

無数に生えた悪魔の腕は、その巨大さに似合わぬ機敏さを持ち、二人に打撃を送る。間隙無く打ち込まれる拳は、二人とデユナミスの間に壁を作り、主に近づけさせぬとその密度を高めていく。

猛威を振るう。

二人に受け流された拳は、宮殿の床や壁を打ち砕き、破壊の痕を刻んでいく。直撃すれば、アルは重症、エヴァもただでは済まない事が破壊の痕から想像できた。

しかし、二人はその痕を見て尚、攻撃に向かっていく。

エヴァが攻防の中で思うのは、相手と自分の比較だ。戦闘とは、自分と相手の持ち札のぶつけ合いで、いかに相手の上を行くかで勝負が決まる。

敵を知り、己を知れば百戦危うからずと言っからな。

速度は負けていない。千の拳に対し、自分は千と一の斬撃を見舞う事が出来る。

筋力も負けてはいない。巨大な悪魔の放つ攻撃だろうと、自分はその上を行き、押し切れている。

更に、魔力も負けてはいない。吸血鬼の真祖である体は、無限に近い魔力を自分に与えてくれる。

決定的なのは、格が違う。悪魔と大幹部であろうと、自分は悪の大魔王だ。

ここまでの要素で、自分の勝ちが決定的と言っていい。

ついでに要素を付け足すというならば、自分の背後には小賢しく胡散臭い部下がついており、この部下の狡い頭脳はなんだかんだで頼りになる。

ならば、

「私が負ける道理は無い！」

叫びと共に、右腕に展開した>断罪の剣くに魔力を送る。出力を増した光剣は、剣身を太く長大なものに変化させ、周囲に力を示した。光剣に触れる空中の水分がチリチリと音を立てて氷となり、周囲へ冷気を送る。

狙いは、眼前に聳え立つ拳の壁だ。

叩ツ斬る！

気合と共に一閃。

剣の軌道を、細かい氷が白い煙となつて飾り立て、結果が現れた。拳の壁が、横一文字に切り開かれる。悪魔の腕が肘まで上下に割断され、黒い液体を撒き散らしながら宙を舞う。

進路が空いた。

「突撃するぞ！」

「承知しました、魔王様」

応えたアルビレオの声色は、少々の笑いが籠っていた。視線を送れば、恐らく薄く笑っている奴の顔が見えるだろう。こんな時まで笑っているとは、酔狂な奴だ。

思いながらも、身を屈め、突撃する。

敵は腕を無くした悪魔を前に出し、こちらに突撃させる。

「oooooooo!!!」

不気味な叫びをあげ、こちらを押し潰そうと身を投げ出す山羊の悪魔。10mを超える巨大な体躯は、それだけで立派な凶器だ。身がかがめて走るこちらを、悪魔の影が覆う。

「アルビレオ！」

どうしろ、とは言わずに、名を呼ぶ事で援護を頼んだ。

自分は更に加速する為、地面を蹴る足に力を込めて速度を増していく。

身を投げ出した悪魔が眼前まで迫り、数瞬後には激突するタイミングで援護が来た。

重力に従い、こちらを押し潰すように落下していた悪魔の体は、弾かれたように上へ向かって飛んでいく。アルビレオの重力魔法で、悪魔の体が落ちる方向が上へと変更されたのだ。

最早障害は無く、視界に移るのは黒ローブの敵だけだ。

「ぬう！」

敵は動揺し、影の槍を放つ。こちらを貫こうと弧を描いて飛ぶ槍に対して、取るアクションは一つだ。

加速する。

正面に敵の魔法は来ていない。弧を描く影の槍を置き去りにして、相手を両断する為、く最後の一步を踏み抜いた。

影の槍を潜り抜け、横薙ぎの一撃を放つ。

敵の魔法障壁が剣に干渉し、抵抗の手ごたえを得るが、構わず更に力を込めた。

拮抗する魔法障壁と剣が、周囲に白い光を放つ。

不意に手ごたえが軽くなり、剣が魔法障壁を切り裂いた。

一枚切れた瞬間、後に控える魔法障壁も連続で切り裂かれていき、敵を両断すると確信した瞬間、術者が動いた。

「ふんッ！！」

敵が己の両腕を、光剣に叩き込んだ。

無駄な行為、そう思ったが、

「ぬ……！！」

光剣と拳が拮抗する。

術者の手は黒く染まっており、人の手ではなく悪魔のような手にも見える。

召喚した悪魔より本体が強いとは、侮っていたか！

敵の姿を再び確認しようと視線を上げると、

「な………！？」

全裸だ。

悪魔を重力刃で両断し、エヴァの援護に向かうべく視線を送ると、悲鳴とも言える叫びが聞こえてきた。

「へ、変態だああああ！！」

「失敬な。私は変態ではなく、秘密組織の大幹部だ」

敵を見れば、先ほどまで体を覆っていた黒ローブが弾け飛び、仮面とフードだけ残して裸になっている。

半裸、いえ、九割裸と言うべきですか……。

エヴァは顔を真っ赤にして、右手の>断罪の剣<が消失する程に動揺しながら後退した。こちらの傍まで戻ってくると、こちらの足先から頭まで見て、

「こちらに変態だが、全裸でないだけマシか……」

「失敬ですね、エヴァ。私は変態ではありませんよ。少々胡散臭いだけです」

自覚があつたのか、という驚きが聞こえるが、今は無視する。

相手を見れば、両の掌から煙を出しているが、何処にも傷は無い。魔法使いタイプと思っていたが、その裸体はよく鍛えこまれており、筋肉質だ。六百歳の少女の教育に悪い為、エヴァを背に回し、自分が前に出る。

相手はむふう、と仮面の内側で息を吐き、

「>闇の福音く、流石の力だ。更に>紅き翼くのアルビレオ・イマが居るのでは、人形たる我には少々荷が重いかもしれぬな」

「それでしたら、下がっていただけますか。我々も殲滅戦は本意ではありませんので」

こちらの言葉が意外なのか、相手はわざとらしく声をあげた。

「ほう？ 悪の組織の壊滅が目的ではない、と」

「ええ、我々の目的は戦争の終結と、いずれ来る魔法世界の消失を阻止する事です。貴方達さえよければ、消失阻止の為に手を結ぶ事も出来ましても。貴方達は、いわば魔法世界を救う為に動いた先輩ですからね」

機会さえあれば説得してみる、というのは事前に打ち合わせされた内容だ。

魔法世界を救う意思があるのは相手も同じであり、手段は変われど一概に否定出来るものではない。

未央はそう言っていました。私個人としては無理だと思いませんね。

その思考を読んだかのように、相手は応えた。

「お断りする」

「何故、と伺ってよろしいですか？」

「我らは主である。造物主のお考えによって動いている。我が主の御心が変わらぬ限り、我らの行動も変わらぬ。どうしても従わせたい、というならば」

そこで言葉を切り、九割裸の相手は両手を合わせた。その瞬間、影から無数の糸が相手の全身にまとわりつき、肩の後ろに巨大な腕を作り上げ、全身に黒い装甲を形作る。

「拳をもって、従わせるがよい！」

「やはり、そうなりますか」

「ふん、いいではないか」

エヴァが答え、背後から風をまいて飛び出した。相手が裸ではなくなかったから、その声色は普段通りのものだ。

「そちらの方が、随分と分かりやすい！」

エヴァと相手の拳が衝突し、周囲に衝撃と魔法障壁の衝突光が撒き散らされる。

自分も参戦すべく、再び重力魔法を展開する。攻防の中、援護を入れる隙を見出すべく敵を注視していると、何か違和感を覚えた。それは、仮面に隠された相手の表情。纏っている空気ともいえるもので、

笑っている？

策を巡らせて、相手が掌で踊っている事を喜んでいるような、そんな気配を感じた。

普段から他人の様子を見ている自分でなければ分からないような小さな変化だが、相手は間違はなく仮面の裏側で笑っていた。

エヴァは気づいていないだろう、ならば、自分が見破るしかない。思いを胸に、前に大きく踏み出した。

威勢よくあげられる鬨の声を、未央は上空で聞いていた。

墓守り人の宮殿を取り囲むように展開された白の軍は、際限なく湧き出る黒の軍勢に怯まず、抗いを続けていた。

>造物主の掟くを持ち、魔法障壁無効化を狙う天使型召喚魔の魔法に概念能力による加護で対抗する白の軍は、それぞれの武器を振るって戦場を駆け巡る。>造物主の掟くを持った個体が少々少ないのが気がかりだが、今のところは大きな問題は起きていない。

このまま行けば、勝てるかしらね。いや、こういう過信はフラグよ。

>紅き翼くが幹部一同を撃破でき次第、墓守り人の宮殿へ向かう予定だ。未だ連絡も無い為、戦況は折り返しにもかかっていない。

気を引き締めるべく、未央は頬を軽く叩いた。

再び戦場を見渡しながら適時援護を飛ばしていると、顔の横に念話の表示枠が現れた。テオドラとリカード、そしてアリカの三人だ。

「いよう魔女殿！　なんか思ったより楽勝だな！」

「私達の軍勢が強すぎたのじゃろう、これは思ったより早く終わりそうじゃな」

「妾はあまり楽観しておらぬが、このまま行けば勝てるじゃろう」

こ、こいつらは盛り返されるフラグをガンガンと……！

未央が注意しようとして口を開いた瞬間、戦場から先ほどと異なる声が響いた。

驚きの声だ。

何事かと振り返る未央の目に、黒の色が飛び込んできた。

墓守り人の宮殿の周囲から湧き出ていた召喚魔が、生まれ出る勢いを更に増し、空間を黒に染め上げた。日の光に照らされて優美な姿を見せていた宮殿は、召喚魔の群れで形成された黒のカーテンで覆い隠された。

今までは加減していたとばかりに、召喚魔の軍勢が数を増して押し寄せる。早くも新たな召喚魔と衝突が始まり、各地で新たな怒号が生まれ始める。数秒前まで余裕の表情を浮かべていた表示枠の司令官達は、慌てて念話を切り指揮を取る。

未央は全域に援護を飛ばすべく、>幸いを送る者との約束くを一振りし、背後に魔法陣を展開した。しかし、数を増した黒の軍勢は勢いを増し、上空の未央にまでその手を伸ばした。

自分へ向かってくる召喚魔を見て、未央は気づいた。今までの召喚魔と新たに出現した召喚魔は、形状が違う。今までの召喚魔は、悪魔と天使をモチーフにした怪物のような形状をしていたが、新たに現れた召喚魔は人間や亜人の形をしている。

ある個体は西洋鎧を着込み、ある個体は古風な魔女の格好をして、ある個体は拳闘士のような軽装を纏っている。まるで、過去の人物をモチーフにしたようだ。新たな召喚魔は、その風貌にあつた攻撃を放ってくる。

未央に幾つもの攻撃魔法が殺到する。

暴風と雷鳴、火炎と氷柱が飛び交う中を未央は飛ぶ。手に持った

>幸いを送る者との約束くを背後に放り投げ、手近な召喚魔に突撃する。

最も近かった西洋騎士風の召喚魔に接近すると、相手は大型の両手剣を振りかぶり、こちらを両断すべく振りぬいた。身をよじりながら回避し、飛翔の勢いをそのまま蹴りに載せて放つ。蹴りは魔法障壁を貫通し、召喚魔の頭部を貫いた。手に持っていた両手剣が空に浮き、未央はそれをキャッチ。他の召喚魔へ向けて投擲する。

大型剣が唸りを上げて、魔女風の召喚魔を貫いた。

その勢いで周囲の召喚魔を駆逐し、ふう、と未央は一息つきながら戦場を見る。新たに現れた人型召喚魔に、白の軍勢は戸惑いながらも抵抗している。しかし、優勢だった勢いは無く、拮抗状態に持ち込まれていた。

援護を、そう思い背後に回した手が空振りした。

？ > 幸いを送る者との約束<は自動追尾のはずだけど。

疑問に思い、背後を振り返ると、そこには黒い布が広がっていた。いや、それはよく見れば長大な黒いローブだ。

纏った人物の輪郭を覆い隠し、余った裾は空間を舞っている。

ローブを纏った人物は、手に>幸いを送る者との約束<を持ち、こちらを見ていた。

しかし、その顔はフードで隠れており、素顔を見る事は出来ない。だが、その人物を未央は知っていた。

デュナミス以外で、黒衣を纏う>完全なる世界<のメンバー。

「ら、>造物主<………!!」

敵の首魁が、そこに居た。

第五十九話

戦場の空に、空白が生まれていた。

白と黒の軍勢が入り乱れる中で、その一帯には誰も近づかない。

そこには、未央と造物主が向かい合っていた。

未央は右手に本、左手に槍を持ち、造物主を睨む。

造物主は、そんな未央の様子は余所に、奪った杖を口に当てて眺めていた。

造物主は、陽光に当てられて白く光る。幸いを送る者との約束を一頻り眺めて、未央に視線を向けた。

造物主の右手があがり、掌に黒い光が集中する。

それを見た未央は、槍を足に回して箒代わりとして、加速を始めた。

造物主に向けてではなく、回り込むように横に、だ。

加速が始まり、黒い髪が宙に舞う。数瞬間に未央が居た空間を、黒い光線が貫いた。

加速に置き去りにされた未央の髪が光線に触れ、消し炭すら残さずに消え去った。

「やっぱり、^{ディスプレイテグレイト}原子分解魔法<……!?!?」

叫びながら、未央は更に加速を入れる。

それを追いかけるように、造物主は掌を向ける。

今度は両手だ。

二条の光線が伸び、未央を切り裂こうと迫る。

音速を越えて襲いかかる光線を、未央は時に高度を上げ、時に槍から跳躍して回避する。

直線機動の光線だけでは捉えきれないと判断したのか、造物主は動きを変えた。

掌から小さな魔法陣を展開する。
その数は十を越え、黒く輝き始めた。
造物主が叫ぶ。

「消える、異邦人……！」

連射が開始された。

未央の視界が、黒い光線で埋め尽くされる。
まさに弾幕。

未央は足を置いていた槍に座り直した。

右手の本を展開し、背後に浮遊させる。

そして、より空を自由に行く為に槍を跨ぎ、足と手でホールドする。

槍頭が向かうのは、弾幕の向こう側だ。

未央はそちらを睨みながら、

「Go Ahead……！」

空に弧を描きながら、飛び込んでいく。

未央が黒い弾幕に飛び込んだ頃、墓守り人の宮殿の中でも黒の嵐に包まれている二人が居た。

エヴァとアルだ。

彼らの正面には、巨体となったデユナミスがおり、二人へ向けて拳を振るっている。

デユナミスは、本来持つ両手と影が集まって形成された二十の拳で、二人を正面から打撃する。更に、【何も無い所に何かある】という概念を展開して、二人の周囲の空間から巨大召喚魔の腕を召喚、

打撃を放つ。

「ええい！ うざったい！」

「落ち着いてください、エヴァ。そういつて先ほど、背中から思い切り殴られたでしょう」

「ぬぐ……」

二人は背中を合わせ、互いの見える範囲の攻撃を防御する事で攻撃を凌いでいた。

攻撃を凌ぐ事に専念する二人へ向かい、デュナミスが叫ぶ。

「デュナミス大幹部超戦闘形態！ ハイパーバトルモード とくと味わってもらおう！」

言い放つ事で、拳を振るう速度が速まった。

しかし、彼の正面に立つエヴァはその速度に追従する。

お互いの拳が、お互いを破壊して周囲に欠片を振りまく。

しかし、エヴァの拳は瞬く間に再生して攻撃を放つ。もう一方、デュナミスの拳も瞬く間に再生する。腕から影の糸が生え、寄り添う事で失った拳を造形する。

双方ともに、無限に近い再生能力を有しており、徒に時が過ぎていく。

攻防の中、アルは考えを巡らせていた。

激しい攻防ではあるが、こちらは被害を受けながらも対応している。

敵は攻防の密度を上げはするが、新たな策を打ってこない。

狙いは消耗戦だろうか。

否、こちらにエヴァが居る以上、鬭いが長引けばこちらが勝利出

来る。

ならば、敵の狙いはなんだ。

考えなさい、アルビレオ・イマ。仲間から散々胡散臭いと言われ、集めてきた知識を生かす時ですよ。

敵の纏う空気は変わっていない。

狙い通りに事が運んでいるような、そんな空気を纏っている。今の状況、徒に時間を稼ぐ事が目的。

そんな事があり得るのだろうか、とそこまで思考して、ふと気づいた。

時間稼ぎ、自分の勝敗を度外視して最終的な勝利を目指していますね。

そう考えれば、墓守り人の宮殿内部に召喚魔や罾が見当たらなかった事も納得出来る。

> 紅き翼くを、外の戦場と切り離して成し遂げる目的。

「外の軍を、先に撃破するつもりですね……」

こちらの言葉に、エヴァがなんだと、と声を上げ、敵は高笑いを始める。

「フハハハ！ それだけではない！ 我が主はここにはいらっしやらない！ 貴様らは無駄足を踏んだのだよ！」

「なんですって……！」

こちらの考え以上の事を相手が吐いた。

こちらの驚いたリアクションに、敵はむ、と口をつぐみ、

「兎に角、まだまだ私と付き合ってもらおう！」

言葉と共に、攻撃がまた激しさを増した。

しかし、ここに造物主くが居ないとなれば、時間をかける訳には行かない。

外に未央が残っている為、軍勢が即座に壊滅するという事は無いと思われるが、時間をかけては危険だ。

こちらに向かってくる攻撃を受け流しながら、エヴァに念話を通す。

(エヴァ、十秒でいいのですが、時間を稼いでもらえますか?)

(なんだ、何をする気だ?)

(一気に決着をつける算段があります)

(ほう? よかるう、ミスったら覚えていろよ?)

念話を切ると、背中、エヴァの居る方向から破壊の音が響いた。

気にはなるが、今はそのような場合ではない。

早々に戦闘を終わらせる為、懐の仮契約カードに手を触れた。

デユナミスは、突如目の前に現れた物体に視界を封じられていた。宮殿の床を作っていた石材だ。

エヴァンジェリンが足元の床を踏み抜き、視界を封じる程の巨大な石材を空中へ蹴り上げたのだ。

空中に上がった石材が、こちらに突っ込んでくる。向こう側で石材に蹴りを入れたのだろう。

「ぬっ!」

拳を一对向かわせ、石材を砕く。
しかし、破片が大きく視界が万全ではない。
更に拳を振るうと、拳の一つが破裂した。

「!？」

見れば、石材の向こうでエヴァンジェリンが魔法の射手くを放ちながら攻撃を凌いでいる。
破片の隙間から見えたその表情は、口元を吊り上げて笑っており、さまあみろ、といった表情だ。
小癩な、そう思いながら砕けた拳の再生を行いながら睨み返す。
ふと、エヴァンジェリンの背後、アルビレオの姿に違和感を持った。

体格が変わっている？

否、それだけではない。
髪の色が変わっている。
黒毛から、赤毛に、だ。
アルビレオだった人物が振り返る。

「……ナギ・スプリングフィールド!？」

馬鹿な、という思いと、何故ここに、という思いが同時に沸き上がり、最後にアルビレオは何処へ行った、という思いに至る。
困惑の間に、ナギがエヴァを追い抜いてこちらへ迫る。

「ぬっ!？」

困惑する自分を叱咤する。

ここで碎けば、何であろうと問題ない！！

合計二十二の拳をナギへ集中する。

巨龍すら葬り去る猛撃だ、不死の体と再生能力を持つエヴァンジェリン以外に止められるものではない。

だが、目の前に現れたナギはそれを容易く行つた。ある拳を正面から打撃し、ある拳を止め、ある拳は掴みちぎられた。

来る。

赤毛の悪魔が来る。

「おおおおお！！！！！！」

拳を再生する暇は無い。

腕を構成する影をほどき、影の槍として目の前の障害に向ける。

「おい、私を忘れるな」

真上から声が響いた。

金色の魔王が、手に破壊の光剣を携えて笑っている。

赤毛の悪魔は、数百に及ぶ影の槍を薙ぎ払い、こちらへ拳を向けていた。

最早、迎撃手段が無い。

我が主。最後までお供出来ぬ私をお許してください……。

肩から胸にかけて光剣に切り裂かれ、胴体を拳によって貫かれた。

着地して、振り返るとそこには赤毛の男が居た。
外見は間違いなくナギだ、しかし、

「おい、アルビレオ。それは何の手品だ？」

振り返ったナギの表情は、微笑というもので、

「私のアーティファクトで、イノチノシヘンと言います。特定人物の身体能力と外見的特長を再生出来るものですから、今回はナギを再生しました」

声も間違はなくナギのものだが、口調はアルビレオのものだ。
中々気持ち悪い。

「率直に感想言えば、気色悪いぞ」

「つれないですねえ……。そんな事言うなら、ナギの口調まで真似して迫ってあげましょうか、フッフ」

「ば、馬鹿か貴様は！？ 何故そんな真似をする必要がある！」

「先日から未央とナギが並んでいる姿を、少々悔しそうな表情で見えていましたので」

「それは気のせいだ！ 気のせい！ ええい、早く元に戻れ！」

はいはい、と応答したナギの姿が、アルビレオに変化する。

見慣れた姿に戻った事で、思わずほう、と息が漏れた。

「おや、やはりこちらの格好の方が好みですか、キティ？」

「誰が好みか！ いい加減にしるアルビレオ！ そんな事より、すべき事があるだろう」

言つて、傍らに転がるモノを見た。
先ほどまで戦闘していた敵の幹部、デュナミスと名乗った男の成れの果てだ。

左肩から先は無く、下半身も吹き飛んでいるが、まだ生きている。デュナミスは、褐色の肌を晒しながら、痛みに悶える様子も無くこちらを見ており、

「……小芝居は終わりかね？」

「誰が小芝居などやるものか！」

「ここから先は有料ですよ」

「お前はもう黙ってるアルビレオ！」

そうですね、とアルビレオは応え、

「では、行きましようか。外で未央も待っていますし、皆と合流しましょう」

「止めは刺さないのか？」

「ええ、そういう方針ですので。戦争が終わり、気が向いたらこちらにいらしてください」

「我が主がそういう方針になれば、そうしよう」

止めを刺さないならば、もう用は無い。

アルビレオと共に、上階へ向かって跳躍する。

宮殿の上階にあるホールに、一人の男が入ってくる。

詠春だ。

手元に治療用の符を持ち、体に当てながら立ち止まる。

周囲を見回したところで、更に一人の男が入ってきた。
ラカンだ。

彼を見た詠春は、目を見開き、

「おいジャック！ 左腕が無いじゃないか！ どこに落としてきたんだ！？」

「おいおい、おめえの腕は脱着式なのかあ？ 戦闘で消し飛んだんだよ」

「そうか……。随分苦戦したようだな」

そう言って、詠春はラカンの左腕に治療用の符を押し当てる。腕が再生する事は無いが、痛みが和らぎはするだろう、という判断からだ。

ラカンは符が光りだすと同時に、ふう、と大きく息を吐く。彼も随分痛みを堪えていたのだろう。

「他の奴は？」

「私は見ていないな」

「遅れたようですね」

二人に、第三者から声かけられる。

アルとエヴァだ。

二人は衣服の干切れはあるものの、目立った怪我は無い。

詠春とラカンの具合を見て、アルは言う。

「二人とも、怪我でキツいかもかもしれませんが、緊急事態です。 > 造物主くが外に居ます」

「なん、だと……！？」

「ゼクトとナギが来ていないので、二人の援護に向かうか、先に外に出るか決めましょう」

「ワシなら今来たぞ」

ホールの上、吹き抜けからゼクトが皆の輪の中に飛び降りてきた。その身は怪我一つ無く、衣服に乱れも無い。

「では、外に出るか、ナギの援護に行くか決めましょうか」

「決まっておる」「決まっているだろう」

アルの声に、ゼクトとエヴァが応えた。

思わぬところで息のあった二人はお互いを見て、ゼクトがエヴァに先を促す。

「外だ。あの馬鹿^{ナギ}は放っておいても勝ってくるだろうが、外の軍勢と未央はそうもいかんだろう」

「ワシもほぼ同意見じゃな。それで良いか、皆」

詠春とラカンは頷き、それを見たアルも頷いた。

そして、皆は宮殿の入り口へ戻り始める。その中で、アルは念話を発信していた。

相手はナギだ。

（ナギ、緊急事態です）

（なんだアル！ 今ちっと忙しいぞ！）

（未央がピンチですよ）

（なんだと!?!）

（きつと貴方を待ってますよ、先に行つて道を作っておきます）

（分かった、急ぐ）

ナギとの念話が切れると、アルは皆と共に入り口へ向けて速度を上げた。

第六十話

急がなけりやな、とナギは思う。

目の前にいる白髪の男、アーウェルンクスは浅からぬ因縁の相手ではあるが、可能な限り早く未央の所へ行かなければならない。その為には、一刻も早くこの相手をどうにかしなければならぬ。

「考え事かい」

言葉と共に、石つぶてがこちらに襲い掛かる。本来であれば、魔法障壁ではじけるような攻撃だ。

しかし、全力で身を翻す。

風を切る音を立てて通過したそれは、宮殿の壁に着弾すると砕ける事なく石材を貫通する。石つぶてに貫通された石材は、まるで散弾銃に撃たれた痕のようだ。【攻撃力は最大となる】概念は、小さな粒が必殺の威力を持った弾丸に変貌させている。

回避の動きを続け、膝を縮めて跳躍する。

「考え中ついたらタイムしてくれんのかよ!? んじゃタイム! タイムな!」

「僕達のルールでは、タイム無しさ」

「ち、畜生! このド外道……!」

連続して射出される石つぶてを回避しながら、ナギは攻撃を放つ。右手に持った杖に力を込め、魔法の射手くで射撃を放った。

攻撃力が最大になる概念下では、大量の攻撃を放つ事はそれだけで大きなプレッシャーになる。

しかし、アーウェルンクスは魔法の射手くが近づく中、涼しげに言葉を作った。

【・ 世界は一瞬で間逆となる】

瞬間、ナギとアーウエルンクスの位置が逆転する。

自分の放った魔法に襲われるナギは、咄嗟に軌道を変更させて難を逃れるが、その隙にアーウエルンクスは一気に距離を詰めた。

身を屈めて突撃してくる相手を迎撃する為、ナギもまた前に入る。敵は床を滑るように低い位置だ。

それに向かつて、ナギは振り払うように蹴りを放ち、蹴りの軌道が敵の軌道と重なるのを確認する。

蹴りは確かに入った。

打撃音が響き、目の前から裂音が響き、破壊の結果が広がる。

倒れこむアーウエルンクス。だが、床に落ちた瞬間、その身は水となった。

囧だ、とナギが思った瞬間、脇腹に衝撃が走った。

激音が響いた。

発射され、敵の脇腹を穿った槍と共に、敵が壁に激突した音だ。

必殺の攻撃と違っていいものが、間違いなく直撃した。

激突の衝撃で上がった煙で見えないが、そこには彼の骸が横たわっているはずだ。

主様も喜ばれる。

思えば彼らとは長い付き合いだ。

4年前に魔女がつかかかってきて以来、魔法世界に散らばるこちらの拠点を潰しまくる彼らと何度戦った事か。

苦渋を舐めさせられる事が幾度もあったが、結果よければ全て良

しだ。

上機嫌と表現していい心理状態を自覚して、自戒する。全てが終わってからだと思ひ、晴れ始める煙に目を向けた。動く物がある。

まだ煙の中ではあるが、動く影がある。石材の影ではない、人影だ。

「ドリュウ・ベトラス>石の槍く」

待った無しとは先ほど言ったので、待った無しで射撃した。数十を超える石の槍が、煙を穿ちながら影に向かうと、そこから飛び出す影が見えた。

ナギだ。

生きていたか、でも、無傷ではないようだね。

先に放った>石の槍くが直撃した左の脇腹が、赤く滲んでいる。煙から飛び出したナギは、そのまま壁に隠れるように飛び込んだ。まるで逃げるような動きに、らしくないね、と思う。だから、普段の彼に帰れるように手伝ってやるう。

魔法の詠唱を始める、壁ごと向こう側の彼に衝撃を与えるような大魔法、>冥府の石柱く。

本来は数十mになる石柱で相手を打撃する魔法だが、室内という事もある。少々小さめにしておこう。

思う間に詠唱が完遂され、周囲に石柱が浮遊している。

「隠れていたら始まらないよ」

声をかけるが、返答は無い。

「寂しいね」

付き合ってくれない相手を壁に向こうに見据え、石柱を放った。引きこもった相手を乱暴に起こすかのように、石柱が壁をノックする。二度三度とノックされた壁は、耐え切れずに崩壊をはじめ、四度目のノックはそのまま向こう側に突き抜けた。邪魔をする壁が無くなり、後続の攻撃が飛び込んでいく。

今度こそやったか。

声に出さずに、警戒しながら崩落の現場に近づいていく。そして見つけた。

三m程の瓦礫の下敷きになっている白いロープを、だ。

とつた。

震える心を必死に制御しながら瓦礫を退ける。

赤毛の骸が横たわっていた。

その目立つ赤い毛を掴み、どのような表情で果てているのか確認しようと思ち上げた。

目なのだ。

鼻はもだ。

眉はへで、ついでに口もへだ。

文字通り、表情が文字で出来ている。

「は?」

あまりに突拍子も無い表情で、呆気にとられてしまう。旧世界人は死ぬとデフォルメされるのだろうか、いやそんな馬鹿な。

まじまじと観察していると、骸が煙を吹いて消滅する。

「囷か！ いや、むしろ安心した、いや、敵が無事で安心というのは。」

混乱している。

落ち着け、冷静に状況を把握しよう。

煙を吹いた骸は、一枚の紙となった。人型をした紙片だ。

旧世界にある術の一種だろうか、思いながら拾い上げると、文字が見えた。

「馬鹿、と」

どういう意味だろうか。

人形にする際に彼を表す文字が「馬鹿」なのか、囷に騙された僕を「馬鹿」にしているのか。しかし、囷に気を取られていたにも関わらず、攻撃がこない。時間にして一分少々という所だろうか、攻撃するには十分すぎる時間だ。

周囲を見渡すと、血の痕を見つける事が出来た。

それは、宮殿の入り口の方向へ向かっており、廊下を曲がっている。

つまり、

「逃げたのかい！」

ナギは廊下を走りながら思った。

これは逃走じゃねえ！ 入り口に向かって爆走しているだけだ……！

アーウェルンクスを倒しておきたい気持ちはあったが、それよりも大事な事がある。

未央が危機ならば、戦闘中に逃げたという汚名を被ろうと駆けつけなければならぬ。

持ち場？ 知らね。あえて言うなら、未央の隣が俺の持ち場であるべきだな。

走る度に左の脇腹から痛みが来る。恐らく骨が折れているのだろうが、立ち止まって治療する暇は無い。詠春からもらった治療用の符を当てながら走る。

そろそろ囃人形の効果時間が切れる頃だ。十分距離を取る事も出来たと思うので、立ち止まり、概念条文を呟く。

【・ おも意思を信じて打撃すれば、いかなるものも打撃する】

心に描くのは、装甲服を纏った未央の後ろ姿だ。

殴るべきは、二人の間にのさばりやがる距離だ。

邪魔だぜ、と思いながら右の拳に力を込める。

気合を込めて、拳を思い切り振りぬいた。

目の前の空間が硝子のように割れ、違う風景が現れる。

しかし、見えたのは未央の背中ではなく、黒い閃光だ。

「おわあああ!？」

思い切り横に転がり回避する。黒い閃光はそのまま宮殿の壁や廊下にぶつかると、派手な破裂音と共に石材を塵とした。

入っていく隙が無い。逆に言えば、こんな戦場に未央が居るのだと確認できる。なんとか飛び込む隙を伺っていると、割れた空間の修復が始まった。

「おいおいおい待て待て！ タイム！ タータイム！！」

呼びかけに応える事なく、空間は修復される。

畜生、タイム無しルールの世間は辛い。

もう一度空間を割る事も考えたが、繰り返しになるだけかもしれない。

ならば、走るしかない。

走り始める。

足が床を蹴る度に、脇腹に鈍痛が走る。更には何か筋肉が引つ張られるような感じもあり、走りにくい事この上ない。

負傷があり、速度が十分に上がらない。背後からは恐らく敵が追ってきているだろう。

それでも、ナギは思う。それでも未央の所に行きたい、と。

お互いに信頼はあり、相手ならばなんとかするだろうという思いもある。

それでも、俺はお前の傍に居たい。

危機と聞けば、心が焦る。馳せ参じろと意思が命じる。

何故かと問われれば、迷い無く答える事が出来る。

「好きな女の心配するのは当然だろうが……！」

その為ならば、何を言われようが構わない。

心が決まり、動き出せばその勢いは止まらない。

それはやがて、脇腹の痛みすら忘れて体の速度を上げていく。意思を込めて、床を足で打撃する。

返ってくる勢いで、体は更に加速する。

加速は、止まらなくなっていた。

ナギが廊下を疾走していると、正面の屋根が爆音と共に崩落した。屋根の瓦礫と共に舞い降りるのは、アーウェルンクスだ。

「中ボス無視は感心しないね！」

言葉と共に、瓦礫が舞い上がってナギへ向かう。襲い来る瓦礫を見据えて、ナギはしかし何もしなかった。

ただ体を前に倒し、身を低くしながら走り抜ける。すれ違う。

そして、勢いをそのままにアーウェルンクスの真横を通過する。

「無視かい！」

表情を怒りに変えて、アーウェルンクスが追う。前に行くナギを視界におさめると、

【・ 世界は一瞬で間逆となる】

両者の位置が逆転する。

アーウェルンクスが先を走り、ナギがそれを追う形となった。そうやって初めてナギが声を上げる。

「邪魔すんじゃないよ！ 何の恨みがあんだ!？」

「現在進行形で我が主の計画を邪魔している恨みがあるだろう…
…！」

両者が交差する。

ナギは疾走の勢いのまま、魔法障壁を打ち付けるように突進。ア

「アーウェルンクスはその勢いを踏みつけるように、上から蹴りを放つ。衝突。」

アーウェルンクスは蹴りの勢いで宙に舞い、天井に足をつけ、更に蹴りつける事でナギを空中から追う。一方のナギは、アーウェルンクスの蹴りの勢いすら利用して、更に前へ出ていた。

完全にアーウェルンクスを無視している。

その様子に、アーウェルンクスが反応を見せた。

叫びだ。

「いい加減に……しろ！」

激昂と言ってもいい叫びを発して、アーウェルンクスは概念条文を展開する。

【・ 攻撃力は最大となる】

そして、>冥府の石柱くを詠唱する。

現れた石柱は室内にも関わらず最大だ。縦に押し潰すのではなく、廊下に横たわる石柱は、ナギを突き潰すように向かった。

「潰れる!!!」

アーウェルンクスの叫びを受けて、ナギが立ち止まった。

「そいつを待ってたぜ！」

加速の勢いを上半身に回し、バックハンドで目の前の空間を打撃した。

空間が割れる。割れた空間からは、先ほどと同じように黒の閃光が現れるが、それを遮るものがある。

石柱だ。黒の閃光を掻き分けながら、石柱が突っ込んでいく。石柱の後ろに回ったナギは、アーウェルンクスに手を上げ、

「色々終わったら相手してやんぜ」

言いながら、石柱と共に空間へ飛び込んでいった。

「待てッ!!」

アーウェルンクスが割れた空間へ向かって走るも、自動修復が始まっている。

間に合わない。

空間が修復され、その場にはアーウェルンクスと瓦礫だけが残される。

一人残されたアーウェルンクスは、憤りを発散させるように叫びをあげた。

「こんな、こんな馬鹿にした話があるか!!」

不愉快だ、と声をあげて、彼も走り始めた。

向かう先は、宮殿の入り口だ。

第六十一話（前書き）

大変長らくお待たせいたしました。

やっと再始動となります。

なお今回、リライトに関する独自解釈があります。
お見逃し頂ければ幸いです。

第六十一話

空で白の風と黒の風が連続で激突していた。

激突の度に光の飛沫があがり、次の瞬間には新たな飛沫があがる。連続であがる飛沫は、まるで花のように咲き乱れ空を彩っていく。白の風となつて空を飛ぶのは、背に青の翼を持った未央だ。

用いるのは右手に持った槍と、飛翔の速度から生まれる機動力。対し、黒の風を作るのは背後に魔法陣を置く造物主く。

用いるのは背後から射出される黒の光弾のみで、手は光弾を指揮するように動く。

槍と光弾が激突し、掠つた光弾が装甲を削られる。

翼が羽ばたく事で加速し、未央は光弾の群れと立ち回る。

一瞬の休息すら無く空を飛び、飛沫の花を飾っていく。

攻撃、回避、移動を連動させる。繋がりが途絶えた時は終わりの時だ。

今、戦場を見渡せば黒の勢いが強い。

誰も彼も必死で抗い、怒声が途絶える事は無い。

遠くでは竜の咆哮が響き、騎士達の剣戟の音が続いている。

戦艦の精霊砲の音が連続し、魔法使いの唱える詠唱の叫びも聞こえる。

誰も必死だ。

必死で勝ちたがっている。

誰もが苦境に陥りながらも、諦めていないのだ。

負けていられないわ！

強い想いを胸に、未央は前に身を飛ばした。

狙いは造物主くの持つ杖、幸いを送る者との約束くの奪還だ。

>造物主くは奪つただけで満足しているのか、使用してくる気配

が無い。

接近さえ出来れば、>武装解除<の魔法や杖を蹴り飛ばす事で取り戻せる。

それを分かっているのか、向こうは弾幕で未央を近寄らせない。行く手を塞ぐように大挙する光弾は、未央に前進を許さずに、足止めと疲労を狙っている。

手段を考える間にも光弾は連射され、防御するのに精一杯だ。

障害物の無い高空という戦場で、未央の機動力を存分に生かす事が出来るが、>造物主<の弾幕は全周を制圧する。

未央と>造物主<の距離は百メートル程度。

全速で飛べば三秒とかならない距離だが、その間に立ちふさがる弾幕は苛烈を極める。

弾幕の中を立ち回りながら、未央は考える。

如何にして進んでいくか、それとも進まずに済む方法は無いか。

今のスタイルではジリ貧、何か仕掛けるにしても相手が弾幕で隠れている状態では困難だ。

弾幕を一瞬でも消す事を目指す。それが出来れば、戦況を変える事が出来る。

でかい魔法を使う時間は無いし、さてどうしようかしら……。

考えている間にも光弾は未央に迫る。

>造物主<の背後に展開された巨大な魔法陣は、破壊の力を連射し続ける。

弾幕はまるで雨のように押し寄せ、全てを押し流すように迫る。

豪雨の中で声が聞こえる。

それはゆっくりと、吐き出すような声で、

「立ち去れ……!!」

怒りの籠った声だ。

「立ち去れ、部外者……！」

叩きつけるような叫びが響き、激情を代弁するような豪雨が未央に降り注ぐ。

未央は、その叫びの中を突き進む。

密度を増した弾幕はもはや津波のようだ。

「私の救世を、邪魔するな！」

更に射撃が追加された。

> 造物主くの空いている右手から、一条の黒い光線が伸びる。

光線は大気を切り裂き、高速で追尾を開始。

追尾の光線が、未央の背で羽ばたく紙の翼に直撃した。

「！」

青い光と紙の欠片による飛沫があがり、加速の勢いが弱まった。

加速器の役割を果たしていた翼の片側、右翼が消失して未央は空

中で体勢を崩す。

身が回る。

健在の左翼が加速を続け、独楽のように空中を回る。

「……くっ！」

苦悶の声を漏らしながらも、未央は残った左翼を切り離れた。

背を離れた翼は光を失い、ただの紙片となって宙を舞う。

浮遊術を使わず、未央の体は自由落下を開始していた。

地面に向かい投げ出される未央に追撃が迫る。

光弾の集中砲火と、それを縫うように弧をかいて迫る光線の多重攻撃。

それに対して、未央は回避行動を開始した。

【・ 我が歩みは道となる】

落下の勢いをそのままに、加速の跳躍を行った。

未央を追うように光弾が青い光で構築された大地と衝突し、爆発が連続していく。

光弾と光線が降り注ぐ中、未央は垂直の地面を落ちていく。

> 造物主<は弾幕の中心で考えていた。

光弾と光線をかわり続ける転生者、未央についてだ。

右手には奪った杖を持ち、弾幕に覆われて見えない相手の方を向いて、

案外粘る。

事前の情報では、攻撃のターンを渡さねば脆い相手と聞いていた。しかし、攻撃のターンを渡さぬ全方位弾幕を凌ぎ、更に追加した追尾光線をかわしている。

悔りすぎたか、>造物主<は思い、両手を広げる。

万全を期すでしょう。

広げた両手の中央、力の現れとして魔法陣が現れる。

直径3m程度。背後に展開するそれと比べれば余りにも小さい。

しかし、秘めた力は比較にならないものだ。

大気が震えている。

>造物主<の周囲が歪み、ブラックホールのように中心へ全てが吸い込まれていく。

その場にあるあらゆるモノが収束し、黒球を作り出した。

「さらばだ、転生者」

言葉と共に>造物主<が両手を押し出すように前で倒した。
見える色は、黒。

一瞬で三十メートル以上に膨れ上がった黒球から光線が発射された。

発せられた一直線の光線が、>造物主<と未央を結び、
瞬間、声が響いた。

【 ・ 攻撃力は無限大になる】

直後。

光線は未央に直撃、貫通する。

破壊の軌道を示すように、光線の周囲の空気が歪み、周囲を圧倒するように音が響く。

その瞬間、戦場全域に破裂音が響き渡った。

軍勢の怒声も、剣戟の音も、突撃の足音も止まり、両軍は空を仰ぎ見た。

白の軍勢は、呆然とした表情で空を見る。

黒の軍勢は、空を見て力強く頷いた。

白の軍勢からは、嗚呼、と嘆く声が聞こえた。

「あれに、勝てるのかよ……」

アリカも概念竜の艦橋で、ただ呆然と見ていた。戦場とは思えない程の、奇妙な沈黙が流れる。

終わった、と造物主くは思う。

世界を乱す転生者、それを排除した。

後は>リライト<を発動すれば、全ては救われる。

目の前では、未だ放射を続ける原子分解魔法の黒球があった。そこで、>造物主<はふと思った。

直撃の直前、何故攻撃力を増す概念を使った？

自殺、否、ヤミから聞いた限りそのような事をする人物ではない。

ならば、別の狙いがあった。

轟音を立てて流れる黒球と光線は、未だ無限の攻撃力を発揮し続けている。

その時、大気を鳴動させる音の中で、異なる音が聞こえた。

破裂の音。

何かが弾けるような、そんな音が微かに聞こえた。

音の出所を探るべく周囲を見渡す。

下に展開する両軍は静止しており、そちらで鳴る音ではない。

空を飛ぶ魔法使いや戦艦もまた静止している。

ならば、ありえない話と思いながらも転生者が飲み込まれた方を見る。

音が連続して響いた。

津波の中から、破裂の音が何度も響く。しかも、音は徐々にこちらに近づいてきている。

「……まさか」

疑問が口から出る。

ありえない、触れる物全てを崩壊させる光線を。唾を飲んだ瞬間。

破裂の音と、黒の飛沫が目の前に踊った。

「光線の中を、突っ切ってきたのか!？」

纏った服は各部がはじけ飛び、手に持った大槍は根元まで砕かれている。

しかし、この敵は再び現れたのだ。

双眸は>造物主<を見ている、その瞳はまるで問いかけるようだ。どうだ、と。

そして未央は>造物主<へ向けて槍を突きつける。

魔法の触媒にもなる槍を、だ。

虚を突かれた>造物主<は、未央が取った行動に反応出来ず、

「フランス・エクサルマティオー
風花 武装解除!」

未央の魔法が炸裂した。

右手に持った杖と、黒いローブがはじけ飛ぶ。

>風花 武装解除<によって、>幸いを送る者との約束<が空に舞い上がる。

虚空を蹴り、未央は>造物主<に目もくれずに杖を握る。

やっと取り戻したわ！

数分の出来事だったが、随分長い間奪われていた気もする。体の節々が酷く痛む。魔法の中を突き進むという無茶をして、この程度で済んだのは幸運だろう。

魔法の中を行くというアイディアは、原作でナギと>造物主<の対決をヒントにしたものだ。

>造物主<の弾幕を、ナギは魔法障壁を全開にして突き進んだ。自分には魔力量が足りない為に真似出来ないが、似た方法を取る事は出来た。

アーティファクトで槍を修復しながら、魔法の中を突き進む。槍頭に鞘を被せるように、幾重にも刃を重ねる。

そして、その威力を無限大に高める。これによって、魔法の威力が無限大となるが、こちらの武器の威力も無限大だ。

結果として、相殺しながら突き進むという強行手段が成立した。

肝が冷えたわ……。もう一回はやりたくないわね。

そこまで考えて、気が抜けている事に気づく。

戦闘はまだ終わっていないのだ。そう自分に言い聞かせる。

装甲服を修復しながら、振り向いて相手の姿を確認する。

目に飛び込んだできたのは、夕焼けの色。

>造物主<の長い髪が空に踊っている。

振り返った姿に、未央は知人の姿を重ねた。

アリカ？

髪の色以外、よく似ている。

青く大きな瞳をしており、その瞳が怒りを持って未央を睨みつけていた。

「姿を晒したのは何百年ぶりか、もう覚えていない。よくもやってくれたな、転生者」

「その呼び方、やめてくれない？ 私には未央 柳っていう親にもらった名前があるのよ」

「その親も捨てて、己の為に転生してきたのだろう？ ならばその名を名乗る資格はない」

「ぬぐ……！？」

全面否定出来ない……！ 言い負かされたあー！

落ち着け、別に好きで捨てたわけじゃない。己の為の転生というのは現在否定しきれないけど、決して最初から私利私欲に塗れて死んだわけじゃないわ。というか私死んだ後も働かされてるんだからむしろ被害者じゃない？ いや、でも最近は約束ぶつちぎってナギとイチヤイチヤしてるし、あ、駄目ねこれ、言い負かされるわ！ 駄目じゃない私……！

落ち着け。

軽く頭を振り、気を取り直す。

> 造物主くを見る。軽く両手を下げており、魔法の触媒になりそうな物を持っていないが、何かしら手段があるのだろう。

近距離での攻撃を躊躇っているのか、攻撃を即座に仕掛けてくる気配は無い。

ならば、

「話を変えさせてもらおうよ、>造物主<。ぶっちゃけ、戦争やめない？」

「愚問だな、それを受け入れる事が無いと分かっているだろう、転生者」

「貴方、概念能力を得たなら分かるでしょ？ 将来発生する魔力の枯渇なら防げるじゃない」

「何故枯渇するか、それが分からない限りその問いにYESは出せぬ」

「その原因を、うちのナギに思い切り殴らせたなら解決しない？」

「そやつが不老不死で、生涯を世界の為にささげ続けられるなら考えてやるう」

「無理だし、そんな人間一人で支えられてる世界は間違ってるわ」

「己で答えを潰しているぞ、転生者。愚かだな」

「ぬっぐ……」

まだまだ、相手はまだこちらに付き合ってる。ならまだいける。

ふう、と息を吸い、未央は続ける。

「それで、貴方の考える救済が>リライト<？」

「そうだ。全ての民が心からの平穩を持てる完全な世界」

「全員が、心から？ ありえないわね」

「何故そう思う？ 貴様を招待して証明してやるうか」

「それには及ばないわ。そんな世界、行く前から分かるもの」

>リライト<を否定され、>造物主<の視線が強まる。

貴様に何が分かるか、怒りの視線を突きつけられる。

「皆が幸せ？ 大変結構な事ね。一人一人が求める最善？ 素晴ら

しいわ」

でも、と繋げる。

「つまり、それは誰とも向かい合っていないって事じゃない」

> 造物主くが口を開くが、まだ私のターンだ、と手を突きつける。

「それに、その世界には致命的な欠点があるわ」

それは、と声に出す。

己の信念と、仲間達と考えて出た答えでもあるものだ。
自信を持って、答える。

「その世界は、次の世代を、命を紡いで行けないわ」

「ッ！」

「誰もが一人で幸せな夢を見ているなら、誰かと手を取り合って初めて作れるもの。子供を得るといふ幸いを得る事は出来ないじゃない！」

> 造物主くは、放たれた言葉に反論してこない。

ただ、軽く流していた両手を握りしめ、更なる怒気をもって睨みつける。

そのリアクションに、未央はある種の手ごたえを感じ、最後の
押しを放つ。

「> 造物主くライフメイカーの、命を作っていく名前に負けてるんじゃないわよ！」

その言葉に、> 造物主くが動いた。

両手を前に、怒りで震える手を未央に見せ付けるように突き出した。

「貴様に、何が分かる……!!」

搾り出すような声だ。

怒りを押し殺し、肩を震わせて続ける。

「見守り続けた子供達が、お互いに憎み合う姿を見た事があるか……!!」

分かるか、と小さく呟く。

「愛した世界が、何の原因かも知れずに消え去る未来を知った事があるか……!!」

貴様に分かるのか、と小さく呟く。

「手を尽くしても、救う手段が無いと分かった時の絶望を知っているか……!!」

貴様に分かってたまるか、と徐々に声が大きくなり、

「救える手段が分かった頃には、引き返せない場所まで来ていた絶望が」

大きく息を吸った。

「貴様のような小娘に、分かるものか……!!」

叩きつけられた叫びは、怒りだけではなかった。

> 造物主くの頬が濡れている、言葉の途中から目から涙が漏れて

いる。

その事で、未央は心の中で安心を得た。

この人は、間違いなくこの世界の母親だわ。

だから、自分も正直に行く。

「分からないわ」

分かる訳が無い。この世界に来てたかが数年。

この世界を数千年守ってきた相手の気持ちは分からない。

「でもね、これからこの世界で生きていこうとしている私は、一つだけ言えるわ」

「それはなんだ!?!」

言ってる。

「貴方のやってる事は、余計なお世話よ。この世界は、もう貴方の手を借りなくてもやっていけるわ」

「なんだと……!?!」

「この戦場に居る皆は、誰一人として私のような転生者や、ナギやアリカのような英雄が居るからといって付いてきた人間じゃない。

一人一人が、明日が欲しいからこの戦場に来ているのよ!」

未央は、造物主くを指差し、告げる。

「国同士で喧嘩しようと、未来が消えるかもしれないと分かれば、この戦場の皆のように手を取り合ってぶつかっていけるのよ!」

その言葉に、>造物主<は手を下ろした。
目線はただ、戦場に展開する軍勢を見ている。
そこには、国家、人種の区別なく肩を貸して立つ人々が居る。

届いて。

その思いに答えるように、>造物主<が口を開いた。

「……なるほど、確かに私は、世界を信じられなかったようだ」

「じゃあ……！」

「しかし」

未央の言葉を遮って、>造物主<が告げる。

「私より弱い者達が、私より巨大な障害に立ち向かえるとは思わぬ」

言って、背後の魔法陣に再び火を入れた。

魔法陣は光り輝き、光弾を作り始める。

「手を取り合う、大いに結構な事だ。しかし転生者よ。お前の傍には誰も居ないな」

「……！」

「土壇場になれば、やはり人は一人だよ。私とフィリウスのように、な」

投げかけられた言葉は、悲哀を含んでいるように未央は思えた。

そして、己のパートナーを信じて叫ぶ。

「私は一人じゃないわ！ どんな時でも、ナギは私の助けに来てくれるもの！」

「哀れだな」

既に魔法陣は数百を越える光弾を持ち、発射の時を待っていた。そして、>造物主くがそれらに命じる。

「現実を知れ」

手を振り下ろした瞬間、全ての光弾が発射された。
至近距离。

回避など出来るはずもない。

だから、未央は叫んだ。

「ナギイイイイイイイ！！！」

応じる声は、

「呼んだか、未央！」

石柱と共に現れた。

未央の目の前、空間が硝子のように割れて、石柱が盾のように立ちふさがる。

そして、未央の視界に赤い色が舞った。

「ナイスタイミングだろ？」

軽口を叩く彼は傷だらけだ。

至る所に傷があり、脇腹を庇うような動きも見える。
しかし、彼は現れた。

「ええ、最高のタイミングよ」

彼女を救う為に。

二人は手を取り、互いを抱きながら>造物主<に向き直る。

「あれがラスボスか？」

「ええ、頑張ったけど説得には応じてくれなかったわ。だから、手
伝ってくれる？」

「未央はいつだって俺に御願いでいいんだぜ？」

その言葉に、未央は思わず笑みを零した。

彼とならば、なんだって出来るという確信にも似た思いを感じて。

「じゃあ、御願ひ。
>造物主<を救う手伝いをしてちょうだい」

「おう、任せろ！」

二人の眼前に、無数の光弾が待ち受けている。

そして、その向こうには世界を支配する>造物主<。

対するは、>紅き翼<の両翼。

>完全なる世界<と>紅き翼<、決着の時近づいていた。

第六十二話

戦闘再開の初手は、>造物主<から放たれた。

幾重にも重なる弾幕の波が二人へ向かう。波の音は力を宿し、戦場へ響き渡る。

対する二人は、一人が前に、もう一人は後ろに下がった。

前に出たのはナギ、後ろに下がったのは未央だ。

大気すら震えるような怒涛の勢いに対し、ナギは不敵に笑う。

右手に杖を握りなおし、周囲に多数の>魔法の射手<を展開した。

「未央、いいところ見せるぜ！」

「ええ、惚れ直させてね」

言葉の直後、いつもより勢いを増した>魔法の射手<が発射された。

雷の矢群が、弾幕の津波へ飛び込んでいく。

激突。

津波と矢群は互いを砕き、音が鳴り、砕ける光弾の残滓が空を照らす。

全周囲を圧倒する弾幕に対し、>魔法の射手<による矢群は激突する箇所を一点に集中。矢群は津波を穿ち、黒の中に一つの道を作った。弾幕の中心へと続く道だ。

「本命行くぜ……!!」

振りかぶったナギの手に従うのは、巨大な雷の槍。

槍が投擲される。矢群の作った道を行く姿は、まるで導火線に付いた火のようにも見えた。

行く先は、黒の光弾が最も密集している中央部だ。

雷の槍が持つ貫通力が、密集する光弾に衝突する瞬間、ナギの叫びが轟く。

「碎ける！」

雷の槍は、主の命令を忠実に実行した。

碎け、破裂する事で、周囲にその力を拡散させる。

雷鳴が轟く。

破裂の衝撃が連鎖し、津波の光弾が誘爆して次々と消え去っていく。

破壊の連鎖が収まる頃には、空を覆っていた黒の光はすっかり消え去り、昼の空が見える。>造物主くと二人の視界を遮る障害物は消え去ったのだ。

視界、クリア。

そして両者は同時に動き出す。

>造物主くが手を振り、その軌跡に沿って黒石の槍が現れ、ナギは拳を握り、相手を睨みつけて声を放つ。

【・ 意思おぼせを信じて打撃すれば、いかなるものも打撃する】

>造物主くが黒石の槍群と魔法陣からの光弾を。

ナギが打撃の概念をこめた拳を。

同時にぶちかました。

音が結果を告げる。

ヒビが入り、割れ、崩れ落ちる音。

それは>造物主くの背後から生まれていた。

攻撃を放った>造物主くが振り返り、音の発信源を見ると、

「魔法陣を……!?!」

黒の光弾を吐き出し続けていた魔法陣が、崩れ落ちる。陣を構成していた線、文字、記号が支えを失い、解れるように虚空へ溶けていく。

しかし、既に射撃された光弾群は失われぬ。黒石の槍と黒の光弾群が、ナギに向かい襲い掛かる。未だナギの拳は振り切られたままで、戻されてはいない。追加が無くとも槍と光弾の数は数百に上り、人を消し飛ばすには十分な威力を秘める。

だが、ナギの表情は変わらず、不敵な笑顔のまま。その表情に因應するように、未央が前に出る。

「次、私がいいとこ見せる番ね」
「おう、頼むぜ」

未央の手にあるのは、槍ではなく杖だ。
コード・オブ・ラフメイカー
> 幸いを送る者との約束く。
杖は仄かに青く光り、その軌道に光の尾を引き連れ、軽く前に持ち上げられる。

襲い来る攻撃の群れに、未央は杖を突きつけ、

「……んっ!」

杖を上に乗ね上げた。

瞬間、攻撃の群れが杖の動きをなぞるように跳ね上がった。

> 幸いを送る者との約束くによる重力制御だ。

【全ては落ち行く】という概念により、他者の重力すら操作する。光弾と槍にかかる重力を操作する事で、未央は攻撃を防いだのだ。

そして、防ぐだけでは終わらない。

ふ、と息を吐き、未央は跳ね上げた杖で円を描く。その動きに巻き取られるように攻撃の群れが渦を作り、未央とナギの上空を旋回した。

「返すわよ！」

声と共に、未央は掲げていた杖で、造物主くを打撃するように振り払った。

攻撃の群れが、やはり杖の軌道をなぞる。

放った主人の元に帰って行く。

直撃した。

槍と光弾の衝突で、空に衝撃が走る。

それを見る一団が、墓守り人の宮殿の付近に居た。

> 紅き翼くの皆だ。

彼らは入り口を守っていたオスティア親衛隊を見送り、空を見上げている。

砂煙がまきおこり、> 造物主くの姿は砂煙によって見る事は出来ない。

「ナギが先についているじゃないか。私達も援護に行くか？」

「そうだな、ラカンには左腕無いし後方に……」

「ああ！？ 左腕ねえくらいで戦力外扱いすんなよ！ なんなら勝負すつか！？」

「今はそんな場合ではないだろう、馬鹿者どもめ……」

「私まで馬鹿に含まれた……」

「詠春、落ち込んでいる場合ではありませんよ。それぞれ散って戦

闘の援護を、>造物主<は未央とナギに任せておきましょう。まあ、この調子なら勝てそうですね」
「それは分かんぞ」

戒めるように否定したのはゼクトだ。
殿を務めていた彼は、皆の後ろから空を見上げている。

「>造物主<の強さは、あのような光弾や槍の乱射ではない」
皆の視線を受け、催促に応えるように告げる。

「奴の力とは、この魔法世界を操る力じゃ」

空に広がっていた砂煙が晴れる。

そこに、再び黒衣を纏った>造物主<が姿を現した。
それだけではない。>造物主<の左手に黒い杖が握られていた。

>造物主<が杖を振ると同時に、空の色が変わっていく。
青からオレンジへ、オレンジから黒へ。

天上に光る太陽は追い出されるように地平へ沈み、入れ替わるように白く光る月が天を支配した。

「わしは、あの戦場へ行く。行かねばならん」

白髪の少年は宙を蹴り、戦場へ向かっていく。
その背中に、仲間の声が届く。

「馬鹿二人のお守りは大変だと思うが、頑張ってくれ」
「見るだけでいいんじゃないの？ ま、そっちは頼むわ」
「油断しがちな二人だからな、適当に釘を刺しておけ」

最後に、アルが問うた。

「ゼクト、一応聞いておきます。……大丈夫ですか？」

その問いには、背中越しの回答がある。

「覚悟は出来ておるよ」

何の覚悟ですか、と続けて問う声があり、その問いには答える事無く、跳躍する。

跳ね跳ぶ彼は、一人呟く。

「殴つてでも言う事を聞かせる覚悟じゃとも。数千年越しの亭主関白じゃな……！」

世界が変わる瞬間を、未央は見た。

陽光が降り注ぐ白い世界から、月光が照らす黒の世界へ変わっていく。

その世界に、>造物主<の黒衣は溶け込んでいるように見え、未央は思う。

まるで、あの人の世界に取り込まれたようね。

月と星が空に煌き、肌を裂くような冷たい風が吹く。

寒い。装甲に覆われていない指や頬が痛む程の冷気だ。

ここに居る事を咎められている。

先ほどまでの会話の内容と相まって、未央はそんな思いを得ていた。

不安が心を過ぎり、顔が陰ったところで、左手から暖かさを感じた。

見れば、ナギが前に出て左手を握っている。

彼は未央を見て、

「どうしたよ、未央。なんか呆けてるぜ？　これからっばいし、気合入れろよ」

夜の闇の中でも、はっきりと見える表情は笑顔だ。

いつもと変わらない。変える必要は無いとその瞳は語る。

未央は握られた手を握り返す。

手指に感じた温かさが、腕を伝い、全身に広がるのを感じて、

「……ええ、気合入れて行きましようか！」

表情を笑顔に変え、右手の杖を構える。

「おう！　早く戦争終わらせねえとな！　色々やる事あるしよ！」

「やる事って？」

「まずは二人で風呂に入り、その後にごあつ！！　喋ってる時は舌がやべえって！」

「こついつ時くらいしっかり決めてほしいわね、相手、来るわよ」

夜空に溶け込む黒衣に杖、しかし>造物主くの銀髪と白い肌が動き始める。

左手に杖を持ち、右手で星空を指差した。

問いが来る。

「何が見える？」

「……星じゃない？」

「その通りだ。 見せてやるっ」
『は？』

言葉の意味が分からず、二人は揃って疑問の声を出した。
>造物主<の指差す虚空に目を凝らしていると、声が届く。

「その名は、流星という」

名の主が来た。

夜空の星がそのまま落ちてきたのかのような大流星群だ。

一つ一つが直径三十メートルを超える岩石が、二人に向かって降り注ぐ。

それに対し、二人も動く。

未央が流星群へ向かい、>幸いを送る者との約束<を振ると、流星群が勢いを減じた。

しかし、

「……っ！ 量が多くて重い上に、勢いつよ……！」

未央が両手で杖を持ち、額から汗を流す。

>幸いを送る者との約束<による重力制御は、光弾のような重さの無い物や槍のような軽い物を制御する事は容易いが、大質量の物質を操るには相応の力が必要だ。

勢いを減じた流星に、後続の流星が次々とぶち当たり、未央は押されていく。

「ナギ、早めにあれ砕いて……！」
「おう！」

ナギが拳を握った瞬間、再び声が届いた。

「そして、これを業火と言う」

二人の中心に熱く燃える炎が発生した。

「っ！」

爆発が起こった。

炎が荒れ狂い、夜空に熱を撒き散らす。

更に、ゆつくりと流星群も落下を再開した。

爆炎の中から、二つの影が飛び出した。

ナギと未央だ。

装甲服は焦げ、砕けた箇所も多いが、負傷は無い。

「っ！ 流星が落ち始めてる！」

再び未央が杖を掲げた瞬間、

「やせぬ」

再び業火が炸裂した。

流星群が落ちる先には、白の軍勢が居た。

黒の軍勢と交戦を再開し、拮抗している中、流星を砕く力を持つ部隊は無い。

無い、と誰もが思っていた。

空の色が三度変わる。

黒から白へ。

それは太陽が昇ったわけでも、雲が覆ったわけでもない。
氷だ。

見渡す限りの空に、氷が張り巡らされ、流星群が動きを止める。

「ほら、さつさと砕け」

「うむ」「おう」

次の瞬間、空が割れた。

氷ごと流星が割断され、抜け落ちるように四角形の氷塊が落ち、
砕かれる。

エヴァが全天を覆う程の氷を作り、詠春がそれを割り、ラカンが
砕く。

割り砕かれ、小石のように小さくなった流星が、石の雨のように
降り注ぐが、

「塵を残す掃除は、姑に叱られてしまいますよ」

アルが重力魔法により、石の雨の落ちる方向を変え、黒の軍勢へ
差し向ける。

石の雨が黒の軍勢を打ち、怯ませ、そこへ差し込むように白の軍
勢が攻勢をかけた。

「この調子なら問題ないでしょう。エヴァ、あと何回出来ますか？」

「何回？ 知らんよ、私は魔力切れした事が無いからな！」

「そうですか、真祖すごいですね」

高笑いで応えるエヴァに、アルはふう、と一つ息を吐き、放置す
るように振り返った。

視線の先には、連続で炎が膨れ上がり、爆発が連続する空がある。
仮契約カードを取り出し、額に当てる事で念話を発信する。

(ナギ、流星は私達で凌ぎます。貴方達は目の前の戦闘に集中してください)

(アルか！ わかった！)

念話を切った途端、戦場に変化があった。

爆発が止んだのだ。自分の念話による成果を確認し、アルは笑みを浮かべる。

「ゼクトはああ言っていました、ウチの二人もなかなかですよ」

誰かに誇るような独り言は続く。

「二人の力は、世界を操るのではなく、世界を作っていける力ですとも」

その戦場には、あらゆるものが現れていた。

炎、水、風、土、雷、光、影。

熱風が吹き荒れ、大地が降り、雷の雨が降り注ぐ。

>造物主<の居る天から、威圧という言葉を未央は感じていた。

自分の力で世界を操り、あらゆる現象を引き起こす >造物主<の力は驚異としか言いようがない。

しかし、対抗出来る力が二つもある。

一つは己の持つ概念能力。世界の法則を書き換える力。

もう一つは、己の半身とも言えるパートナー。力を持つだけではなく、常に自分を支えてくれる最良の伴侶。

これだけ揃っているならば、戦えないわけがない。

だから、未央は叫んだ。

「ナギ！ お願い！」

何を、とは言わなかった。
しかし、

「応！」

想いは伝わった。

ナギが拳を握り込むと、それを邪魔するかのように世界が襲い掛かってきた。

炎が、水が、風が、土が、雷が、光が、影が。

焼き、穿ち、断ち、潰し、貫き、裂き、割ろうと襲い掛かってくる。

二人はそれを掻き分けて進んでいく。

物体のある殴りやすいものをナギが、それ以外のものを未央が薙ぎ払い、>造物主<の待つ天へ昇っていく。しかし、抵抗の勢いが増した。これ以上近寄せないと叫ぶように、攻撃の勢いは苛烈を極める。

>造物主<の姿は見えない。

しかし、二人はここで攻撃を放つと決めた。

未央が左手に杖を持ち、ナギに視線を送る。

視線を受け、ナギが重ねるように杖を右手で握る。

「誘導は私がするから、ナギは威力御願いな」

「思いつきりぶちかませばいいんだろ？」

「ええ。行くわよ！」

白の杖から、雷光が迸り始める。

杖が輪郭を変えていく。三つに割れた刃が備え付けられ、その身

を太く、五メートル程の雷槍と変貌した。
そして、槍の柄に文字が浮かびあがる。

【我は変わらず意思を届ける者】。

「いつもと違うな？」

「ええ、ただの必中概念だとやり過ぎちゃう可能性あるもの。任せなさい」

「おう、じゃあ……行くぜ！」

二人が振りかぶる。その間にも、攻撃の群れが二人の魔法障壁を叩く。

打撃の音と圧が二人に迫る。しかし、二人は怯まず、天を見上げた。

【・ 意思おもいを信じて打撃すれば、いかなるものも打撃する】

ナギが改めて概念条文を告げ、右手に青の光が宿った。

二つの概念能力が合一し、雷槍に力を与える。

二人分の意志が籠った雷槍が、投擲された。

世界を切り裂き、雷が天に昇って行く。

その姿は、まるで天へ帰る雷の龍のように見えた。

雷が黒雲を裂き、夜空を照らした。

そこに、>造物主<が居た。

黒衣を纏い、銀髪を靡かせた彼女は、幾つもの黒の杖を周囲に漂わせていた。

雷は軌道をかえ、>造物主<に襲い掛かる。

あらゆる攻撃が立ちふさがるが、雷は止まらない。

二人の意志は、あらゆる障害を越え、相手に届こうとその身を前に飛ばす。

「来るな……！」

> 造物主<はそれを拒絶する。

雷にあらゆる攻撃を加えるが、その勢いが弱まる事は無い。そしてついに、雷が>造物主<を貫通した。

「ああ！」

> 造物主<が力を失い、落下していく。

それを抱きとめる人が居た。

ゼクトだ。

未央はナギと共に、>造物主<とゼクトの元へ飛んで行く。

攻撃は止み、黒の軍勢もまた役割を終えたように消滅していった。

「お、終わった……」

「流石に疲れたなあ」

二人とも力を抜き、>造物主<を抱きとめるゼクトへ視線を向けた。

「生きておる……。よくまあ、あれだけの魔法が直撃して生きてるものじゃな」

「殺したくない、って意志は込めたもの。多分何ぶちこんでも死なないわよ」

弛緩した空気が流れ、>紅き翼<の皆も集まってきた。

勝ったと、誰もが確信していた。

白の軍勢の皆が、アリアや、>紅き翼<の皆も、そして未央さえもそう思っていた。

振動が響いた。

大きく一度震えたそれは、空に浮かんでいようとも感じる揺れだ。

「……………何？」

疑問の声があがった瞬間、墓守り人の宮殿から音が響いた。

おお、と轟くような音。

勝利を確信し、弛緩した皆の表情が硬くなる。

「おい、未央！ これから何が始まるんだ！？ 何か知ってるんだらうっ！？」

「し、知らないわよ！ あ、いや、もしかして……………！」

墓守り人の宮殿に起こった異変は、更に進む。

振動、音と続き、宮殿を包むように白い光の柱が立ち上る。

光の柱は、ゆっくりと、確実にその範囲を広げ始めた。

「……………貴様らに、勝負は負けた」

ゼクトの腕に抱かれた>造物主<が語り始める。

「しかし、試合には勝たせてもらっ……………」

「どういう事だ！」

問う声に、>造物主<は宮殿の方向に首を傾け、言った。

「>リライト<が発動した。私でさえも、時間稼ぎだったのだよ。

……………始まるぞ、世界の改編がな」

第六十三話

宮殿を囲むように発生した光の柱。それはゆっくりと、しかし確実に範囲を広げていた。

戦場に展開していた軍勢は、黒の召喚魔が消え去った事で退却し、後方の浮遊島から不安を視線に乗せて光の柱を見ている。

不安の表情は、己が戦場から降ろされたという思いから生まれるものだ。光の柱が発生し、黒の軍勢が消えた事により、展開していた兵士達は下げられたのだ。

その彼らの上を、風と共に進む鯨の群れが通過する。飛行戦艦の群れだ。>リライトくに対抗する為の封印術式を行う為、飛行戦艦には運行上必要な人員以外を降ろし、代わりに魔法使い達を乗せている。

戦艦から降ろされた人員の中で、座り込んでいる一人が零す。

「歯がゆいな。真面目に魔法の勉強しとけばよかった、って後悔してるよ」

「それは今この場に居る皆が思ってる事だろ。一人だけ口に出すなよ、ズルいぜ」

「そうだな……すまん。しかし、ただ待つつてのはキツいな」

「だから、口に出すなよ。思いが強まっちゃうだろ」

待つしかない、先ほどまで戦えていたのに。

もどかしい思いを胸に、空を見る兵士達の中から声が出た。

「では、僕達に出来る事をしましょう」

唐突に会話へ入ってきた者へ、二人は視線を向けた。同じように戦艦から降ろされた年若い男だ。出来る事をしよう、そう言った一

人へ周囲の視線が集まる。何が出来るのだ、と問い掛ける視線だ。彼は、その視線を受けて少々怯みながら、

「簡単です。皆の無事と勝利を祈りましょう」

「祈って、何か変わるのかよ」

「変わりますよ」

確信を持った言葉だ。言葉に続き、彼の手が動き出す。皆の視線を受け止めた手が、装甲服の胸へ当てられた。そこには青い石、賢石が埋め込まれている。

「皆さんの胸にもあるはずですよ。【意思是力になる】という力を持ったこの石が。だから祈りましょう。きっと、僕達の意味は届いて、今も頑張っている人に届きますとも」

その声に応じるように、上空を轟音が通過していった。鯨の群れの中心を飛ぶ一際目立つ影は、巨大な竜の影。アリカの駆る概念竜アルトリアは、己の身に乘せていた乗員を降ろし、軽くなった身を震わせながら空を泳ぐ。

皆は光の柱へ向かう者達を見て、己の胸に手を当てる。装甲服の胸に埋め込まれた青の石は、皆は祈りを受けてぼんやりと光っていた。

隣に居られぬ身なれど、我が祈りが君の盾になるよう。

君の敵を打ち倒せぬ身なれど、我が祈りが君の力にならん事を。

君の傷を癒しにいけぬ身なれど、我が祈りが君の痛みを打ち払う事を。

願わくば、皆無事で帰ってくるように。

祈りと共に手を重ねられた石は、青の光を淡く宿らせていた。

艦隊は宮殿へ向かい、整列する。正面をアリカの駆る概念竜アルトリア、左方はテオドラ率いるインペリアルシップ、右方はリカルド率いるスヴァンフヴィート。三艦を中心とした艦隊が柱を囲み、宙で静止する。

艦隊は柱から百メートル程の距離を維持して様子を見る。

即座に>リライト<の反転封印術式を行わないのは、光の柱の周りで未だ性質の調査が行われている為だ。竜の艦橋からアリカが念話を行い、調査をしている者に連絡を取る。

「未央、どうじゃ。予定通り封印出来そうか？」

「正直、難しいわね」

柱を見上げながら、未央は傍らの表示枠へ声を放った。>造物主<を撃破した直後から発生した光の柱は、墓守り人の宮殿を囲い込み、締め切ったカーテンのように視界を遮っている。また、遮っているのは視界だけではない。

「探査魔法も応答無し、それどころか概念能力で探ろうとしてもこれまた応答無し」

一切の情報を漏らさない鉄壁、それが光の柱だ。傍らで魔法による調査を行っていたエヴァとアルが、腕を組みながらそれぞれの意見を話す。

「通過する瞬間に魔法が消失しているようだ。柱の向こうには何も無いのではないか？」

「世界の改編を行う魔法ですから、そうであつても不思議ではないでしょう」

「ううん、私の知ってる知識だとそこまで強力ではなかつたと思つただけど……」

三人と一つの表示枠が頭をつき合わせ、現状を分析していると、馬鹿な奴らから声がかかる。

「とりあえず出来そうな手段があるなら、やってみればよくね？」

「ガツと押さえ込んでガツ！！と投げ飛ばせばいいだろうが！ 面倒くせえな！」

「……あれ！？ 私、この二人と同じ位置か！？ 訂正を要求したいんだが」

後半無視すると、とりあえずやってみよう、との意見が出されており、それに対する反対案も出ない。

ならば、とアリカは表示枠の向こうで連絡を取り合った。

光の柱を包囲する艦隊から魔法陣が表示され、一つ一つの小さな陣が連結し、巨大な一つの魔法陣を形成していく。

「万が一と思つてお願いしておいた大規模反転封印術式の連結強化版、無駄になればよかつたけど、そうもいかないみたいね」

未央は眼下の雲海を見る。雲海の下には森が広がっており、ゼクトが捕らえた>造物主<と共にいるはずだ。

協力してはもらえなかつたわね。

自分達の意志は届いたはずだが、それに応じる>造物主<ではなかった。分かってくれるのではないか、と甘い事を考えていたが、気の遠くなる年月で培った想いで動く>造物主<は簡単な相手ではなかった。

いずれ任せてもらえる日は来るのだろうか、と思考に没頭する未央の肩が叩かれた。

「おい、どうした未央」

エヴァだ。いつの間にか横に並び、こちらを伺っている。そういえば、と未央はエヴァに問いを作る。

「ねえエヴァ、貴方って四百歳越えてるじゃない」

「それがどうした？ 唐突だな」

「例えばよ？ 貴方が数百年の間大事にしてきたものを、他の人に渡そうと思える時ってある？」

「無いだろうな」

「……質問が悪かったわ。どうすれば渡そうと思える？」

「ふむ。そうだな……」

彼女もまた、長い年月を生きている。自分よりは>造物主<の精神に近づけるだろうと、問いの答えを待った。

「やはり、私と同じだけの想いをもって、それを続けていける奴だと、私が確信した時だろうな」

まあ、そんな時は私に来るか疑問だが。

エヴァはそう締めくくった。

「やっぱり、時間がかかりそうね……」

「大事であればある程、手放したくないのは道理だろう？ お前もナギを他人に渡せるか？」

「……ああ、よくわかったわ」

譲りたくない思いがあり、それを解くのは困難だと己の心からも感じた。>造物主<との和解はこの戦いの中では無理かもしれないと考えていると、再びエヴァから声がかかった。

「封印術式が始まるぞ」

三方に配置された旗艦を青い線が結び、巨大な三角形が光の柱をラインの中へ置く。各旗艦を増幅器として艦隊に乗り込んだ魔法使い達が、一斉に詠唱を開始した。

魔法陣のラインに沿って、雲海を押し退けて光の壁が形成される。宮殿に発生した柱をpushさえ込むように、幾重にも壁が展開し、押しつぶそうと迫っていく。

718

封印術式により雲海が晴れ渡り、森から見上げてもその様子は見て取れた。

夜の森に二つの人影がある。

一人はゼクトだ。白の法衣を着崩して、大樹に背を預けて立っている。空を見上げ、封印術式によって発生した壁を見ながら、隣に座る人物へ声をかける。

「意地を張らずに、>リライト<を解除してくれぬか？」

声をかけられた人物は、所々が破けた黒衣を纏い、両手に枷をつ

けられていた。かけられた声に反応せず、焦げた銀髪を軽くつまみ、不機嫌そうな吐息を吐く。

その様子に、ゼクトは再び言う。

「>リライト<を解除してほしいんじゃないかな」
「断る」

二回目の問いに対する答えは、拒絶という形ですぐに来た。答えはしたが、>造物主<はゼクトと視線を合わせようとせず、下を向いたままだ。

ゼクトは大樹から背を離し、>造物主<の前に膝をついて視線を合わせようとする。合わせるように、ふん、と息をはいて>造物主<は横を向く。

全く取り合ってくれん、とゼクトは胸の内を抱えた。アプロ―チを変えてみるかの、と思い、

「何故そんなに>リライト<に拘るんじゃない、もう次代に任せてもよいじゃろうに」
「……」

答えは無い。

「お主も今上で戦っている連中の事は分かったじゃろう？ ワシはあいつらになら任せてもよいと」

思っておる、と続けようとした言葉が遮られた。

「貴方はそうだろうさ。彼らと旅をして、良くあれと思いつづけた心に触れているのだから」

吐き捨てるような言葉だ。

「だが、私は伝聞でしか彼らを知らなかった。先ほどの攻撃で彼らの意志は分かったが、だからといって任せる気にはならぬ」

「何故じゃ、力もあり、想いもある奴らで……」

「ここに集まっている者達はそうだろうさ！」

> 造物主くが視線をあげた。その表情は、怒りとも悲しみとも取れる表情で、目尻には光を照らすものがある。

「貴方が世界を周り、良い者達を見て回っている間、私は世界を回すものを見ていた！ 多くが力に囚われ、財を欲して、他人を蹴落とす者ばかりだった！」

ゼクトの襟に手がかかる。両手で掴みかかれ、引き寄せられる。> 造物主くの瞳が近くに迫り、その目に浮かぶものがよく見えた。

「それで、どうやって信じると言うのだ。彼らはいいだろうが、その思いが世界中に広がると誰が保証出来る！」

ゼクトは、ここに来てようやく> 造物主くの、彼女の思いを感じた。

「誰も、誰も保証など出来ないなら、私は私の思う皆が救われる世界を作る！」

出来るならば、信じさせて。

人の悪徳を見続けた故に、信じられない。そんな役割を彼女に課し、自分は世界をふらふらと回っていただけ。

今更ながら、ゼクトはその事を悔いた。返答に詰まり、む、と漏らしていると、襟を掴む手が離された。

「私は、>リライト<を止めるつもりはない」

一方的に断じ、再び>造物主<は視線を俯かせる。

どうしたものか、とゼクトは思案する。

亭主関白を決意して来てみれば、至らぬ自分を悔いてばかり。言い返そうにも、確固たる思いを持つ>造物主<に響きそうな言葉を持たない。

さて、どうしたものかと思案していると、

「もとより、アレは一度発動すれば、管理権限は私の手を離れる」

「なんじゃと？」

「気づかなかったか？ 先の戦闘より、私は一度も概念能力を使っていない。私の概念能力は、ヤミを取り込んだ故に使えるものだ」

つまり、と>造物主<が続ける言葉を待たず、ゼクトは念話を開いた。

封印術式の壁が、徐々に柱へ接近していく。柱と接触し、術式の効果を反転させる事で>リライト<の術式核を封印する。

上手く行く事を祈る未央に、念話が飛び込んできた。

相手はゼクトだ。

「どうしたのゼクト、もしかして>造物主<の説得出来たとか」

「違う、良いか未央！ よく聞け！」

珍しく焦った口調、初めて聞くかもしれない思いながら、未央は続きを待った。

「>造物主<の身に、概念能力は宿っておらぬ！」

え、と疑問を得た。

「>リライト<の発動権限が移る、それはつまり」

瞬間、封印術式の壁が消失した。更に、咆哮が耳に響く。

雄叫び。

それは光の柱の中から生まれていた。

そして、雄叫びは一つの結果をもたらした。

高度が下がっていく、否、落ちていく。

浮遊術が突如打ち消され、視界に移る全ての人や戦艦が落下を始めていた。

「ッ！」

未央は急ぎ、右手に携えていた>幸いを送る者との約束<を振り、戦場を包むように浮遊概念を展開させる。戦艦や人の落下は止まるが、>紅き翼<の皆すら魔法が打ち消されており、ゼクトからの念話も途絶えている。

声の届く範囲からは、突如魔法が消えた戸惑いが聞こえてるが、その戸惑いを上書きするような声が響いた。

「お久しぶりです」

念話が途切れ、雄叫びを聞いたゼクトは、造物主くへ振り返った。

「お主、まさか……！」

「そうだ。世界を管理する事にかけてはプロだと、本人も言っていたからな。正式な契約に基づき、管理・運営を依頼した」

目をぬぐい、造物主くは空を見た。

「ヤミ・オギナ。世界を管理するには最適の人材だろう」

光の柱から、神を名乗る少女と、少女に従う大竜が現れた。

世界を改編する為に。

次善の策ながらも、世界に救いをもたらす為に。

第六十四話

光の柱を囲んでいた艦隊は見る。

柱の中より現れた大竜が、天上を見上げて咆哮をあげるのを。

現れた大竜の色は黒。体を包む鱗は鋭利。世界を見る瞳は業火のように赤い。

その姿は、味方として展開する竜、アルトリアと何もかも違っていた。

アルトリアは騎士型の自動人形を端末として持ち、竜の身は東洋で語られる蛇を象った>龍<だ。

一方、現れた大竜は西洋で語られるトカゲに似た姿、>竜<だ。翼を持ち、手足には破壊の爪を、口には全てを噛み砕く牙を備えていた。

大竜は翼を広げ、再び咆哮をあげた。咆哮は大気を震わせ、音は衝撃となって皆を打つ。

咆哮の他に響く音は無く、戦場に静寂が訪れる。

無音の戦場に、告げる声が響く。

『抗いを止めない人々よ』

大竜の頭上に立ち、視線を一点に置きながらヤミの声が戦場に染み渡る。

『貴方達には、貴方達が望まない幸いの世界へ行っていただきます』

胸に手を置き、祈るような手を作りながら、

『中々いい世界ですよ。貴方達の祖となる人も、それを望んでいま
す』

戦場を見渡し、

『今、皆さんは魔法やそれに似た技術が使えない状態です。それは皆さんの最大の武器が使えない、という事です』

だから、

『抵抗をやめていただけませんか』

問いに対する答えは、それぞれの動きで示された。>紅き翼くの
皆は、構え、諦めの勧告を抵抗の意思をこめた眼差しで叩き返す。
ヤミは、ふう、と疲れた息を吐き、

『やはり駄目ですか、では皆さんに……』

言葉は最後まで告げられなかった。

ヤミと大竜に巨大な光線がぶちあたったのだ。

軍勢を縫う軌道で大竜とヤミに打ち込まれた光線の主は、空を滑るように軍勢の前へ出た。

白の竜、アルトリアだ。

青の瞳で大竜を睨み、皆を守るように前へ出た。同時に、アルトリアから叫びが走る。

「未央！ 皆を下げろ！」

アリカの声だ。応答は声ではなく行為で告げられた。

飛翔能力を失い、未央の重力制御で滞空していた艦隊はゆっくりと後方へ向かいながら高度を下げていく。インペリアルシップの艦橋ではテオドラが憤慨し、スヴァンフヴィートの艦橋ではリカードが飛び出そうとして周囲の部下に取り押さえられている。更には、

「おい未央！　なんで俺らまで下げるんだよ！」

ナギを含めた>紅き翼<のメンバーも、同じように後方で下がっていく。

足手まとい扱いをするな、と各々が叫ぶ中、未央は言う。

「ごめんね。でも流石に魔法使えない皆を周りにおいては戦えないのよ」

振り返らず、大竜とヤミを覆い隠す煙を見ながら言った。しかし、その言葉には即座の反論が出る。

「俺と詠春は元々肉体派だから関係ねえだろうが！」

「私も種族的に貴様より戦えるぞ！　というかヤミには私も恨みがあるんで殴らせろ！」

「気の技も使えてないでしょうに、エヴァだって丈夫なだけで主力は魔法なんだから、下がっててよ！」

>紅き翼<の皆は下がりながらも意思は引かず、抗議を続ける。そんな中、破裂の音が響き渡った。それはナギの方から響いた音だ。

未央はナギを見た。彼は後ろに下がらず、空に立っている。

「未央、俺もかよ」

右の拳が白煙を纏わせている。何か殴ったのだらうと察し、彼を見ればローブの裾が浮き上がっていた。

そう、【重力】を殴り飛ばしたのね。

ナギの概念能力は、非常に強力な打撃概念だ。同じような概念を作り打撃しても、未央はナギ程の力を発揮する事が出来なかった。攻撃力という一点では、彼は魔法が使えない状態であれ未央を凌ぐ。しかし、

「そう、貴方もよ、ナギ」

断った。その言葉に、ナギの口元から軋みの音がする。

未央はナギに寄り、その胸に手を置いて、

「勘違いしないでよ？ ナギにはやってほしい事があるんだから」

「……骨を拾ってくれ、とか嫌味じゃねえよな」

拗ねてるわね、と思いながら、未央はもう少しだけ近寄って、ナギの頬に口づけをした。

「」

ナギや、紅き翼の皆が軽く驚いた空気を感じながら、未央は言う。

「ナギ、皆と一緒にゼクトのとこ行ってちょうだい。>リライト<の術式核がどこにあるか聞き出して、それ壊してきてほしいのよ」

それまで、と言って、未央は己の胸に手を置いた。

「私と」

胸に置いた手を、白い竜　アルトリアに向け、

「アリカとアルトリアが時間稼いでおくから」

だから、と続けた言葉は遮られた。

ナギが未央の口を塞いだからだ。

>紅き翼<の面々は、もはや少々呆れながら二人を見る。

「あー、わかったわかった。トカゲとヤミは任せた」

「思うんだけどよ、あいつ等もしかして世界で一番のバカップルじゃね？　ここ戦場だぞ」

「近衛さん……」

「詠春が対抗意識を燃やし始めたので、これ以上ぐだぐだになる前に移動しましょう。といつても、私達の移動は未央任せですが」

あれを最後まで見ろというのか、と皆がお互いを手であおぎ始める中、当人達が会話を進める。

「じゃ、そっちは任せませ。時間稼ぎどころか、倒しちゃっていいからな！」

「T e s . そっちこそ頼んだわよ」

未央がナギの胸を押すと、ナギはゆっくりと>紅き翼<の皆と降

下していく。

そして、未央が振り向くと、二度目の爆発が巻き起こった。

大竜とヤミが煙で隠れているが、アリカは敵が健在である事を確信していた。

光の柱は未だ健在で、アルトリアも警戒を解除していない。だからというように、アリカは未だ煙が舞う中心へ向け、腕を振る。

「アルトリア、追撃だ！」

「Tes . . . しかし、私が竜狩りというのはどうだろう」

知るか、と乱暴にアリカは返した。アルトリアは気を悪くする事もなく、指示を竜へ伝える。攻撃の指令を受けた竜は、おお、と唸りをあげながら大きく口が開き、その奥に青い光を点らせる。一瞬息を吸い込むような音が止み、>竜砲くトランコンプレスが炸裂した。直径五十メートルを越える巨大な青の光は、煙をかき分け、大竜に追加の衝撃をぶちかました。

爆発。

>竜砲くの貫いた空間は、大気やその他の物も消滅し、全て無いものとなる。大気の消え去った軌跡を埋めるように風が巻き起こり、空を揺るがした。

巨大な力の行使に、アリカは精神の高ぶりを得ていた。まだ戦えるという実感を持ち、口元が吊り上がる。しかし、爆煙が収まると同時に、弓の形となった口は舌打ちで歪む。

大竜は未だ健在、体に傷はあるものの、傷を覆うように黒の竜鱗が既に再生を始めていた。

「ええい、先ほどの攻撃が最大威力ではなかったのか！」

「そうなんだが……、私の攻撃力はマスターの意志力によるから半分はマスターのせいだぞ！」

「責任転換か、この駄目騎士……！」

口論の間に反撃が来た。

大竜の口から吐き出された極大の火炎球だ。

「避ける！」

「！」

指示に、アルトリアが一瞬硬直した。

それは竜にも伝わり、一瞬の静止があり、遅れて回避機動が取られた。しかし、遅れた一瞬は大きく、火炎球が尾に直撃した。

艦橋が激震し、アリカは椅子から床に投げ出された。

「ええい、何をしているヘッポコ騎士！」

「今のは迎撃こそ最適だと判断したが、マスターの指示で動作に齟齬が発生したのだ。しかも避けるというが、どちらにどう避けるという指示も無かったぞ！」

「自動人形というのは気が利かないではないか！ ティアは言わぬ事もやるらしいぞ！」

「姉様は素晴らしいからな！ まあ稼働年数も違うからと言いつつ、させてもらおう」

また口論していると、また反撃が来た。

またしても火炎球が迫り、アリカは一瞬の躊躇いを得た。

どう指示すればよい！？

躊躇いの後、アリカは思いついたままに早口で指示を飛ばした。

「高度を上げて火球をまたぐように回避して、竜砲くで反……」

指示を遮るように激震が走る。左側面へ火炎球が直撃したのだ。舌打ちと共に立ち上がり、アリカは思わず舌打ちした。

どうしろというのだ！

簡単な指示では齟齬が発生し、詳しく指示を出す時間は無い。以心伝心という程付き合いが深いわけでもない。

ならば、とアリカは席についた。

椅子から落ちぬように深く座り、アルトリアに声をかける。

「アルトリア」

「次の指示か!？」

「違う」

唾を飲み、アリカは告げた。

「お主に任せる。お主が考える最善を尽くせ」

指揮を丸投げした。

告げた言葉に、アルトリアが呆けた為、続ける。

「妾にお主の力を見せてみよ、騎士の象徴たる名前を掲げる自動人形。妾はお主を信じる事に専念しよう」

続けた言葉に、アルトリアが動きを見せた。

少し体を震わせ、それが止んだ時、背筋をピンと伸ばした。

「Testment！」

今までで最も気合いの入った応答だった。

艦橋に振動が走る。

左側面に受けた損傷の回復が終わったと、アリカの手元の表示枠が告げた。

竜が震え、損傷した装甲が振り落とされると、真新しい白い鱗が揃っている。

これからだ、とアリカは思った。

これから己の剣と大竜の戦闘が始まるのだ。

己に出来る事をしようと思ひ、アリカは眼前の騎士に声を放つ。

「行け！ 我が騎士よ！」

竜が前に出る。

ヤミは大竜の頭部から背中へ移動していた。

アルトリアの>竜砲くを受けた衝撃で飛ばされた事もあるが、戻れない理由もあった。

その理由が襲いかかってくる。

青の光弾が上空から降り注ぐ。

左右へのステップで回避するも、光弾は大竜の装甲を穿ち、更にその破片が襲いかかってくる。破片を打ち払うのに足を止めれば、重力が増して己の体を潰そうと圧力を高めてくる。

上空を見る。

そこには、杖を掲げた白い魔女が居た。

回避行動を続けながら、

「久しぶりですねえ、以前より能力を使いこなしているようでビックリしますよ」

「そう思うなら即座に退場なさい」

つれないなあ。

そう思っていれば、相手は攻撃を続けたまま、こちらに問いかけてくる。

問いかけの内容は、

「ヤミ、貴方……何をしたいのよ」

「今更な質問ですね？」

口元が緩んだ事を自覚しながら、襲ってくる破片をたたき落とす。こちらは魔法を使えるのだから、迎撃手段は豊富だ。

「私ね、最初は貴方の事結構好きだったのよ」

「おや、それはありがたいですね」

「ネギの保護者役になれ、なんて話をしてくるから、てつきりハッピィな方向にブレイクしたいもんだと思ったら」

相手が杖を振りかぶった。

不味い、と直感的に跳躍する。

ふん、と力を込めた声と共に杖が振り切られた瞬間、一瞬前まで自分の居た位置が上から打撃を受けたように潰れた。

重力制御による打撃、と見当をつけた。

「いきなり介入してきて、大戦で遺恨を無くそうとする私の邪魔！？ 果ては>リライトくを発動完了させようと邪魔してきて、貴方は何がしたいのよ!」

「いい質問です」

そう、いい質問だ。

目的は確かにある、しかし、それを話す理由は無いとヤミは思い、
「最初は遊びにきましたが、今は>造物主<の心に感動してお手伝いを」

横殴りの衝撃に襲われ、体が宙に浮き上がった。

眼前には、敵が杖を振りきった反動で体を捻り、再び打撃を加えようとしていた。更にその背後には大竜の装甲片が浮き上がっており、鋭利な破片がこちらを狙っている。

「嘘臭いわ!」

攻撃が放たれた。

攻撃の衝撃で起きた風を、未央は真正面から受け止めた。
大竜の黒い背中に着地し、飛び散る破片を防ぎながら正面を見る。

魔法無しなら、最大威力の打撃だけど、どうかしら。

>幸いを送る者との約束<による重力制御、それに【攻撃力は無限となる】概念を併用した重力打撃だ。

しかし、

「痛いですねえ」

塵と風を吹き飛ばすような風が吹いた。

打撃を放った地点を起点とした風は、巻き起こした主の姿を見せる。

無傷だ。

「高速再生の加護が無ければ、もう死んでますよ?」

そう言った相手は、軽い調子で体の埃を払う。

憎たらしいわね。遊ばれてるみたいで。

「そう睨まないでください、と御願いするだけ無駄ですね。まあ、今の私は間違いなく>リライト<を完遂させようとしていますので、真面目にやりましょうか」

「全く、やりにくいわね……!」

「簡単に構えればいいんですよ、私は貴方の敵ですからね」

敵が、ヤミが構えた。

手には何も持っていないが、油断は出来ない。言葉を発する事が出来ればあらゆる事が可能なのだ。

どのような概念で来るか考えていると、ヤミは軽く跳んだ。数センチ跳んだだけの行為。

続いて言葉が聞こえた。

【・ 大地とは、足を掴むものである】

何それ?

全く聞いた事の無い条文に、未央は一瞬呆けてしまった。

次の瞬間、ヤミの左手に黒の装甲片が握られ、投じられた。五十

センチ程の破片が迫り、未央は回避しようと左足に力を込めたが、

動かない!?

違う、足が地面から離れない。

何故、と思った瞬間、破片が激突した。衝撃が腹部から突きぬけ、背中から倒れこんだ。

追撃が来る、と体を動かせば背中は剥がれる。しかし足はやはり離れない。

ならば、と未央は告げた。

【・ 大地とは、足を掴むものではない】

告げた直後、力を込めて足を振り上げると、確かに離れた。

「そうそう、理解が早いですね。攻撃行きますよ」

馬鹿にして、と思いながら足を振り上げた勢いそのまま後ろに転がる。転がる未央の後を装甲片が貫き、装甲の破片によって道が出来ていく。

足が地面につくタイミングで蹴りあがり、未央は回転しながら宙へ上った。

「概念を想像する能力、イメージ次第で世界を変えられる能力。この力は、貴方が思うより厄介な能力ですよ」

神の名を持つ相手が、両手を広げて未央を見る。

世界の法則が変わり、未央へ牙を向く。

第六十五話

「行きますよ」

軽い口調でヤミは語る。同時に未央も動く。地に足をつけてはならない、と未央は跳躍して重力制御によって浮遊した。

どんな攻撃で来るのかと未央が構えていると、ヤミは言葉を放つ。

【・ 大地とは、足を掴むものである】

己から動きを制限する概念を放った。何故、と思っただけならば、

【・ 世界は南を下とする】

直後、未央は背中から落下を始めた。

「な……！？」

落ちながら、未央は己の視界が向きを変えている事を感じた。南が下になる、それ自体は聞き覚えがある概念だ。概念条文の通りに南が下となり、重力がかかる方向が南となる。

下を上書きされたってどこかしらね！？

思っている間にも落下速度は加速し、大竜の背部装甲を転がり続ける。

足をつければ、と背部装甲を蹴りつけるが、

……くつつかない！ 概念切ったわねアイツ！

足はつかず、むしろ蹴りつけた事で速度が上がり、未央の体は転がっていく。戸惑いながら転がる先を見れば、大竜の背部装甲にある鋭利な角があった。

数秒後の未来を想像してしまい、思わず吐き気を催しながら未央は>幸いを送る者との約束くを振る。

己にかかる重力をカットし、無重力状態となった体は激突の直後、背部装甲から離れ始める。宙の上で、未央は体勢を整えて復帰すると、眼前に黒い物体があった。

鋭利な円盤だ。

「……っ！」

精一杯胸を逸らし、円盤を回避する。胸の装甲服を掠り、前髪を切り飛ばしながら円盤は彼方へ飛び去った。

「貧乳でよかったですねえ、今の攻撃巨乳なら回避不可でしたよ」「安い挑発ね、その程度で怒ると思ってるの？」

涼しげな笑みを浮かべ、回避の動きを連続させる事で移動しながら未央は思う。

絶対殴るグーで殴る一発じゃなく二発は殴る。

怒りの感情は体を突き動かす。

右の腕がまるで腰から獲物を抜刀するような動きを見せ、その一瞬で未央は新たな武器を創造する。

アーティファクトによる造形は使えない。封じられている魔法の範疇にアーティファクトの使用が含まれるのか、維持は出来ても新たに作り出す事が出来ない。

だから、未央は代わりの武器を用意する。

素材は眼下に転がっていた。

抜刀の動きを見せる腕の動きに合わせて軋むような音があがり、音は足元から響く。

竜の背を構成する黒の竜鱗が剥がれ、圧縮されて鋭利な槍を作りはじめた。

右の拳をヤミへ向かい突き出しながら、未央は叫ぶ。

「穿たれなさい、駄神！」

気合と怒りが込められた叫びが発せられ、槍が発射された。

対して、ヤミは一言。

【・ 鉱物は生きている】

言葉に呼応するように、ヤミの足元にある竜鱗が動きを見せた。

意志を持つかのように、槍とヤミの間に浮遊し、隊列を組んで盾のように幾重にも立ちふさがった。

穿たれる。

圧縮されて硬度を高められた槍は、同じ竜鱗であるにも関わらず盾の群れを容易く貫いていく。

しかし、盾の群れはただ貫かれるだけではない。己が貫かれた瞬間に動き、少しでも軌道を逸らそうと抵抗する。

その結果、槍は勢いを減じて最後の一枚で停止した。槍の穂先はヤミの寸前まで到達していたが、穿つ事は敵わなかった。

「残念でしたね」

「構わないわよ、狙い通りだから」

未央の言葉に、ヤミが疑問の表情を浮かべた。

その間にも未央は更に周囲の竜鱗をはぎ取り、幾つもの槍を造形して放つ。

ヤミもまた、盾を追加していく。槍と盾がぶつかり合い、金属を切り裂く金切り音が発生する。多くの竜鱗が割れ、欠片となっていく中、未央が言う。

「いいのかしら、ヤミ。そんなに竜の装甲使っちゃって」

「どういう意味ですか？ ……まさか！」

「気づくのが遅いわね」

未央は応答しながら大きくバックステップ。

ヤミが立っている位置は、竜の装甲である鱗が攻防で消費され、剥き出しになっていた。

そこへ、青の光線が雨のように降り注ぐ。

ヤミは光線の奔流によって吹き飛ばされる。

それを追うように、竜の体を構成する黒石もまた吹き飛ばされる。光線によって引き裂かれたそれらは、破片となってヤミの体を削っていく。

身を削られながら、ヤミは舌打ちをする。

まさか、最初からあの白い竜をアテにしてたとは！

一対一の攻防を約束したわけではない。足場に使っていた黒竜と白竜が攻防を始めたならば、余波が及ぶ事も当然だ。

しかし、まさか自分の攻防をしながら黒竜の装甲を剥ぎ取り、攻撃を誘導させるとは考えていなかった。

「信頼、という奴ですかね」

私とは違いますね、と思わず自嘲気味に呟き、体勢を立て直す。黒竜は既に遠い。白竜と射撃戦を繰り広げており、こちらへ飛んでくる余裕は無いだろう。

現状を把握する思考の最中にも、体の傷は再生していく。衣服へ再生概念を仕込んでおいてよかったと思いつつながら未央を探すと、すぐに見つける事が出来た。

視線の先には、杖をこちらに突き出し、背後に巨大な魔法陣が展開している未央の姿がある。

馬鹿な、魔法は封じているはずです。

しかし、そのシルエットには見覚えがある。

【文字は力を持つ】概念を持った武器を構え、背後に魔法陣を展開する魔女。

「そうか……！ 【文字は力を持つ】、1st-Gの概念で魔法を再現したんですね！」

「大正解……！」

未央の持つ杖には、青の文字が浮かび上がっていた。

>千の雷<。

文字の通り、未央の周囲には>千の雷<を構成する魔法陣が光を放った。

準備完了。

「浮遊島は浮いてるし、>リライト<自体も未だ展開中。ならアンタがやった事は恐らく、自分の敵のみ魔法を封じる事！ 概念能力による再現は魔法じゃないからOK！」

「酷い詭弁ですね……！」

「敵に言われるなら褒め言葉よ、それ。じゃあ、そついつ事で……！……！」

雷の奔流が走り、ヤミを貫通した。

雷が天から大地を穿つ頃、全長二キロメートルを優に超える二体の竜が、己の息吹を放ちながら戦場を泳いでいた。

アルトリアは青の光を放つ光線型の>竜砲<と、体中に備え付けられた三千を超える副砲を連打する。

対する黒竜が放つのは赤の炎球を放つ>竜砲<のみ。しかし、その炎は数の不利を覆す。

白竜の>竜砲<と副砲が吼え、青の光線がカーブを描きながら黒竜へ向かうが、黒竜は回避の動きを取らない。

ただ翼を羽ばたかせ、白竜へ向かって一直線に飛翔する。

青の光線が黒竜へ着弾し、黒の装甲を破壊していく。

しかし、止まらない。

黒竜は咆哮を上げながら、炎の>竜砲<を放つ。

未だ着弾していなかった後続の光線が炎と衝突した瞬間、炎は勢いを増した。

炎に、光線が食われたのだ。

勢いを増した炎は白竜に直撃する。炎が直撃した装甲が衝撃で吹き飛ばずに、周囲の装甲に燃え移り始めた。

ええい、と内心で頭を振りながらアルトリアは燃える装甲を自らの副砲で吹き飛ばす。

被害を最小限に留める為とはいえ……！

痛覚は既に切り離している為、損傷は情報として伝わってくるだけだ。しかし、直撃を受けるといふ不快感と、副砲で己を撃つという違和感は自動人形の思考が出来だと自己評価を叩き出す。

敵は厄介だ。再生概念を頼り、己の傷を構わずに突撃してくる。それは、常に最大威力を振るう為の特攻だ。

アルトリアも出来なくはない。再生概念は備えられており、敵を倒すという目的の為ならば自壊さえも厭わない覚悟はある。

だが、

ここには、我が主が居る。

艦橋に存在する己の端末の背後、椅子に座るアリカを思う。

再生頼りの攻撃一辺倒になれば、間違いなく艦橋は被害を受けるだろう。

自分の端末である騎士人形は破壊されても問題は無い。あくまで魂が宿る器でしかなく、自動人形という特性から竜か騎士人形のうちらかが残っていればそちらに魂が残り、再生出来る。

しかし、人間はそうはいかない。替えの端末など無いのだから、

守る事こそ、我が役目と知れ！

自らを叱咤し、白竜が咆哮をあげる。

既に黒竜は接近しており、互いの距離は百メートルも無い。

全長二キロメートルを超える巨体がすれ違うように接近し、互いを作る気流がぶつかり合っつて風がかき乱される。

黒竜は前の両足で白竜を掴みかかろうと襲いかかり、白竜はそれに対抗する動きを見せた。

それは回避ではなく、突進だ。

激突の音は、初期の拮抗を作り、しかし黒竜の両足が白竜を押し返す。

黒竜に噛み付くように顎を開いた白竜は、その顎の上下を押さえつけられて押し返されるが、

「想定通りだとも！」

白竜の開かれた顎の奥では青い光が煌々と輝いていた。

一瞬、黒竜が唾を飲むように怯む様子を見せた。

「怯もうと、許してやらん！」

叫び、アルトリアは己に命令を下した。

閃光が発射され、空に爆発が生じた。

夜空に青の花が咲き、黒の欠片が宙に振りまかれる。

黒竜の頭部が完全に吹き飛ばされ、アルトリアを掴んでいた両足が離される。

艦橋ではアリカが腰を浮かせ、右手を握る姿が見える。

しかし、

「まだだ！」

再び黒竜の前足がアルトリアを掴んだ。

白の装甲が軋みをあげる。白煙をあげる黒竜の胴体が頭部を再生しながら、アルトリアを引きちぎろうと力を込め始め始めた。

アルトリアの頭部と胴体の接合部にヒビが入り、抵抗として副砲による射撃が黒竜の両腕を殴打する。

だが、アルトリアは気づいた。

再生の速度が、こちらより速い！

副砲による破壊は即座に修復され、最早時間稼ぎにもなっていない。

そして視界の中、ついに黒竜の頭部が完全な再生を果たした。

頭部を押さえられ、アルトリアの>竜砲<は大地を向いている。

艦橋の正面で、黒竜の口が大きく開かれた。その奥では、赤々と燃える炎が見える。

直撃する。

アルトリアはそう思考した瞬間、己の魂を騎士人形に移し、アリアを押し倒すように覆いかぶさった。

瞬間、至近距離で炎が炸裂した。

未央は、背後から爆発の音を感じた。

だが、既に未央は身構えていた。

眼下、雷で穿った大地が煙をあげる中、未だ気配を感じていた。

「>千の雷<に【力は無限となる】概念を加えてぶち込んだってのに……」

何故、と未央の言葉が続こうとしたその時だ。

砂煙が吹き飛ばされ、穿たれた大地の中心から光が生まれた。

爆光の中心、人の形を作りつつある光がある。

それは生まれた光を飲み込み、造形を完了させた。

造形を終えたヤミが残光を振り払いながら、両手を広げて天を仰ぐ。

ふふん、と己を誇示するかのように鼻を鳴らし、

「言い忘れましたが、私はただ物理的に消し飛ばしても無駄ですよ」
「あら、弱点でも教えてくれるの？」
「ええ、私は公平ですからね。いいですか？」

ヤミはそう言うと、くるくると身を回しながら浮上する。

「復活した私が初めに行ったのは、己の改造です。つまり、私は今人間ではありません」

「最初から人間じゃないでしょ、アンタ」

「肉体的には人間でしたよ。……まあ、それで改造しましたよ、自分を材料とした自動人形にね」

「な……!?!」

その言葉で、未央は思い至る。

自動人形とは、魂が人形に宿った種族だ。魂を格納するスペースさえあれば、宿る対象は人型に限定されず、体の換えも利く。

つまり、

「魂を消し飛ばさなければ、倒せないと……」

「さて問題です、この体は先の体と同様、ただの遠隔端末です。私の魂は何処にあるでしょうか」

それが分からない限り、

「未央さん、アナタは勝てませんよ」

再び、ふふんと鼻を鳴らしてヤミは胸を張った。
しかし、

「>リライト<の術式核、「トド・オブ・ザ・ライフメイカー」造物主の掟のグレートグラウンドマスター

キーでしょうね」

「……え？」

疑問の声をあげたヤミに、未央は続ける。

「本来の>リライト<は、アスナちゃんを核とした特殊な魔法。それが欠けても発動してるのは概念能力による代用でしょう？ そして、アンタの事だから>造物主<が万が一裏切っても壊せない物に魂を納めておくはず。つまり、>造物主<が最も大事にしてる物しかありえないわ」

構え、

「丁度良かったわ。皆が>リライト<の術式核を探しにいつてるもの。最悪、アンタ相手にしながら私が壊しに行くわ」

「出来ると思いますか？ 二対一ですよ？」

二、という言葉に疑問を覚えた瞬間、背後から再び爆音が響いた。振り返る。

見えるのは、ただ黒い空間。

否。

「竜が……！」

大きく口を開け、未央を飲み込もうと加速してきていた。それを認識した瞬間、未央は振り返り、ヤミを見た。

【・ 世界は一瞬で真逆となる】

と、言いかけたが、それは叶わなかった。

ヤミもまた、黒竜の口内に飛び込むように突撃してきたからだ。
ぶち当たる。

カハ、と反射的に腹から息が漏れ、未央はヤミと共に竜の口内で
ぶち込まれた。

第六十六話

白の色に染まった石床を、一人の少年が駆け抜けていく。
赤髪を揺らし、息を荒げながらの疾走。

その彼の後ろを、四つの人影が追う。

ナギと>紅き翼<の面々だ。

彼らが行くのは、墓守り人の宮殿の最奥へ通じる通路。ウエスペルタティア王国の王族しか入れぬと言われる最奥の間、彼らはそこに向かいながら、外から響く衝撃と爆破の音を聞く。

「畜生、魔法さえ使えれば……！」

と、通路を走りながらナギが零した。

走る速度は、百メートルを五秒足らずで駆け抜ける俊足。魔法による身体強化は解除されているが、彼が身にまとう白の装甲服はいまだ彼を補助し続けていた。

しかし、それでは足りないとは彼は、ナギは思う。

魔法が使えれば、この十倍速は余裕だったのに！

再び外から響く衝撃音を耳に、彼は焦燥感に駆られる。

急げと思う心に体が追従出来ていない。少しでも軽く、走りやすい格好になると装甲服を脱ごうかとも考えるが、残っている身体強化すら消えてしまったては本末転倒だ。

ゆえに、焦りを抱えながら走るしかないとの結論に行き着く。

再び響く衝撃音。

ちつくししょう、間に合え……！！

走る。

心だけは先に、体には追いつけぬ速度で。

未央と別れた後、彼らは以前聞いていた情報を頼りに>リライト<の術式核が最奥の間にあると推測した。光の柱に包まれた宮殿へ直接侵入する事に危機感を覚えた者も居たが、ヤミと竜が出てきた事からいきなり消失はしないだろうと判断し、ナギが空間を打撃して宮殿への入り口を作り、飛び込んだ。

結果として、光の柱は外周を覆っているのみで、墓守り人の宮殿は変わらず健在が確認できた為、彼らは考えの通り最奥の間へ向かって走る。

通路を駆け、幾つかの広間を抜け、本宮から奥へ渡る渡り廊下へ差し掛かる。

外が見える。

未だ光の柱が煌々と輝き、大地から天上へ向けてそびえていた。

その向こうから、まるで彼らの歩みをせかさように破壊の音が連続して響く。

分かつてる、そんな思いを持ちながら、ナギは走る。

百メートルはある渡り廊下を走り、半ばまで来た時。

激震と激音が重なり、彼らを襲った。

石材で出来た渡り廊下が弛む。

誰もが思わず立ち止まり、周囲を見渡す。

音は上から、揺れは上から伝わるように全体へ。

渡り廊下が割れる。

真ん中が下へ向かって折れ始め、廊下としての役割を果たせず、皆を空中へ放り出そうと動き始める。

一瞬、ナギはこの揺れに覚えがあった。つい先ほど経験した事のような気もする。

思い出す為に思考へ入りかけた瞬間、詠春の叫びが耳に入った。

「走れ！」

叫びに応じるように皆が動いた。

先頭を走っていたナギが奥へ、少し遅れていた皆は本宮へ戻るように走り出す。

次の瞬間石の欠片が襲い始めた。

廊下の破片だけではない、明らかな害意を持った軌道を持つ石礫だ。

その攻撃で、ナギは敵の正体に思い至った。

「アーウェルンクス！ てめえか！」

応じる声は無い。代わりに勢いを増した石礫と石剣が飛んできた。石礫は足を、石剣は胴体を刺し貫こうとする軌道だ。このまま走っているのは、足に穴をあけられた上で胴体が串刺しにされるだろう。

ワンパターン野郎が！

ナギは向かってくる攻撃を迎撃しなかった。

余計な事をしては速度が下がる。だから、彼はあくまで加速していく為の行動を成した。

加速する為に身をかがめ、身を倒しながら走る。

先ほどまで彼の頭があった位置を一本の石剣が通過し、髪を掠っていく。

だが、未だ攻撃は来る。

足を穿つ石礫と、先ほどより下、腰を穿つような軌道を持った石剣だ。

同じような方法ではかわせない。しかし、加速を止める事も出来ない。

ならば、同時に行おう。

【・ おもい 意思を信じて打撃すれば、いかなるものも打撃する】

概念条文が発せられ、ナギは床を軽く蹴り、前転しながら宙を舞う。

逆さになった視界には、攻撃の群れ。

その隙間からはこちらを伺う>紅き翼<の中間達。

すまねえけど、迂回路でも探してきてくれ。

思いながら、ナギは迎撃を行った。

足を狙った石礫は既に床に激突しており、腰を狙った石剣が眼前まで迫っていた。

迎撃する、動きだしたのは拳ではなく、足だ。

足を引き、靴の踵で石剣を蹴り飛ばす。

概念能力が発揮され、青の光を発しながら靴は石剣を弾き飛ばす。

そして、ナギの体は石剣が当たったエネルギーを持って前へ飛ぶ。着地、そして再び疾走。

前にあるものにしか用はないと、振り返る事なく走る。

崩れる渡り廊下を走りぬけ、離宮へ入ると背後から声が聞こえる。

「どこまでも僕を無視するつもりだね……!!」

アーウェルンクスだ。

ナギは走りながら、後ろへ声を送った。
腕を振り、走る事に集中しながら、

「今忙しいんだよ！ 止めたらテメエも消えるぞ！」

返答は声ではなく、攻撃で行われた。

黒い石で作られた武器の群れが、ナギの道を塞ぐように突き刺さる。

あつという間に廊下だけでなく、壁や天井にも突き刺さり、更にその武器へ衝突する事で武器の壁が作られた。

進路をふさがれ、ナギは僅かな戸惑いを得た。武器の壁は刃をこちらへ向けて造形されており、触れた者を傷つけようと立ちふさがっている。

そして背後には、追走の足音が聞こえる。

間違いなくアーウエルクス。

構っている暇は無いと言っているが、事實は少し違う。魔法が使えない今、勝てるという確証が無かった。

進むのも戻るのも困難だ。
ならば、

前だ！

心を決め、ナギは突撃する。

武器の壁は隙間なく空間を埋めているが、それぞれを激突させて無理やり塞いでいる構造上、崩しやすいはず。

立ちふさがる壁に向かって跳躍、体を回しながら蹴りを放つ。

硬質の音が連続し、武器の壁が大きく揺れる。

次の瞬間、壁が崩れ始めた。

しかし、攻撃の反動でナギの体は勢いを失っており、空中で静止してしまう。

天上からは砕けた刃の欠片が降り注ぎ、身を切り裂く。そして、

「やっと追いついたよ」

背後から蹴りが入った。

「ぐ……あ！」

壁は抜けた。

しかし、背に痛みを得て、姿勢を乱したまま廊下に叩きつけられる。

バウンドし、床を滑りながらナギは敵を見る。

石の欠片が振る中を、悠然とアーウェルクスが着地した。

その表情はいつも通り変わらず、感情を読み取る事が出来ない。

「君は、僕からよく逃げるね。……怖いのかい？」

挑発だ。分かっている、構っている暇はない。とナギは思う。だが、いい加減腹が立った。

「ああ？ てめえが怖いわけじゃねえよ！ 構ってる暇は無いってんだろ！ てめえこそ今の状況が分かってんのか！？」

「>リライトくが発動し、魔法世界が皆へ幸いを届ける完全な世界に作り変えられるところ、だろう？ 僕が君を邪魔するのは当然だ」

「この>リライトく、本来の形と違っててもかよ！」

「……本来と違う？ 変な事を言うね」

こちらの言葉に、アーウェルンクスが興味を持った。

よし、とナギは体を起こしながら己の状態を確認する。

細かい傷は装甲服が癒してくれているが、背から受けた一撃は未だ痛む。恐らく、アーウェルンクスとの第一戦で折れた肋骨が、再び折れている。

「本来の>リライトくってのは、黄昏の姫神子を中心にして発動する術式だって、しらねえのか？ 対して信頼されてねえな、お前」

「……その情報は何処からだい？ 君がデタラメを言ってるだけじゃないのか」

「俺の師匠が誰か忘れたのかよ？ それ以上は教えてやれねえな」

こちらの挑発に向こうは素直に反応している。不愉快そうに眉を潜め、こちらを睨む。

その間に、状態の確認も終わった。

拳を振るう事は出来るが、痛みが酷い。痛み止めの符も、治療の魔法も使えない今では長期戦は出来ない。

止まらずに加速して引き離せば、術式核を壊したり持ち出す事も出来ただろう。しかし、一度足を止めてしまった以上、最高速度まで加速するには時間が必要で、アーウェルンクスがそれを見逃すはずがない。

やるしかねえ。

戦闘を決意し、拳を振るえるように、右拳を背の後ろで握る。

「それに、俺達はお前らの主を倒してるぜ？ 今は魔法を封じる手枷をつけてお師匠が見張ってる。つまり、この>リライトく……お前らの主以外じゃない、ヤミが好きに操っちまう可能性があるだろ？ いいのか？」

「……」

続けて挑発すると、相手は俯き、考えに没頭し始めた。あまりにも上手く行ってしまい、少々躊躇いを得るが、

まあ、チャンスに代わりはねえ。時間もないしな！

握っていた右の拳を構え、全力を持って振るう。

アーウェルンクスまでの距離は五メートル程、しかし打撃概念の前に距離は無意味だ。

打撃力が行使され、アーウェルンクスが打撃を受けて仰け反った。しかし、

「……考えが纏まったよ」

ゆっくりとアーウェルンクスの体が戻る。

打撃力が行使された証として、頬に傷があり、口からは血が流れている。

それだけだ。

アーウェルンクスは口元をぬぐい、

「僕が今すべき事は、君を倒す事だ」

その表情は、いつもの無表情ではない。

両目がつりあがり、口には力が入って軋みをあげている。

「どんな意図があるにせよ、>リライト<は主様の悲願。そして…

…」

相手が構えを取る。魔法によって造形された黒い石剣が数十本。

「散々僕を馬鹿にしてくれた君が魔法を使えない。徹底的に殴れるいいチャンスだ」

「色々いつといて、私怨かよ!」

「私怨? ……そうか、そうだね。初めてだよ、個人の感情で何かするのは!」

石剣が振られる。

ナギに向かってくる軌道は、一直線ではなく、左右に移動しながらアトランダムな軌道を持って向かってくる。刃の立て方など考えない、ただ当てようとする軌道だ。

「食らえよ! 僕の敵!」

怒りに任せた荒々しい攻撃だ。しかし、故に読みづらい。デタラメに振るわれる攻撃に、ナギは拳で弾き、ステップで回避し、同士討ちさせるように受け流すが、

「!」

更に追加された石剣が、空間を埋めるように迫る。

刃の壁だ。

背は白い壁。

逃げ場は無い。

ナギは息を吸い、正面を見た。
瞬間、激突した。

赤い色が、宙を舞う。

第六十七話

墓守り人の宮殿、その最奥にある離宮で音が響いた。
割れるような音。

更に、獣の唸り声に似た音も聞こえる。

音の正体は、二人の男と一つの攻撃によって出されたものだ。
割れるような音は、刃と拳の激突の音。

獣の唸り声に似た音は、アーウェルンクスの唸り声だ。

そこには、赤の色が舞っていた。

白い床や壁には、血が飛び散っている。

ナギは立っている。

しかし、全身に刃が突き刺さり、無事といえるのは頭部と右の拳だけ。

左の拳は血に塗れ、刃の破片のようなものが突き刺さっていた。
しかし、立っている。

常人であれば、気絶してそのまま死を迎えてもおかしくはない重傷だ。

唸り声を上げるアーウェルンクスは、激昂のまま問う。

「何故だ!!!」

手を振り、更に攻撃を加える。

一メートルほどの石槍が投擲されるが、それは容易く殴り落とされる。

ナギの視線は見えない、軽く俯いた顔は前髪によって眼を隠している。

「何故死なない!! 何故動ける!!!」

問い掛けながらも攻撃は続き、それらは悉く殴り落とされる。しかも、負傷した左手によってだ。無傷の右手は温存したまま、ナギは左手一本でアーウェルンクスの攻撃を打ち落としていく。

「何故か……って？」

掠れた声がナギから発せられた。

声を出すのすら苦痛なのか、身を振りながら、

「まだやる事があるから、だろうが……！」

ナギは、己の身体を確かめる事を止めた。

魔法無しでこの相手を倒すのは、普通に戦っているは無理だと思っただけだ。

だから、まず二つのものを殴り飛ばした。

【痛み】と【流血】の二つだ。

体の治療ならば、戦後に行える。自慢ではないが、自分のパートナーの治療技術は魔法世界一だ。概念能力を併用した回復魔法は、生きているならばなんだったって救ってきた。

だから、生きていれば救ってくれる。だから、動くのに邪魔な痛みと、流血を失くす事で意識を失う事を防ぐ。

生きて、この戦争を終える。

その一点だけを考え、今の負傷はなんであろうとも無視する。

「アーウェルンクス」

「なんだい……！」

敵を見れば、今まで見た事もない程苛立たしげにこちらを見てい

た。

ざまあねえな。

冷静に遠距離から魔法を重ねられては完封される危険がある。だから、ここは押しの一手で挑発だ。

「お前、なんの為に戦ってんだよ」

「……主様の命だからだよ。それが僕の存在意義だからね」

「はっ、そんだけイラついておきながら、結局それかよ！」

いいか、とナギは相手に言い放つ。

「そうやって、命令にだけ従ってるから、てめえらに>造物主<は救えなかった」

「なんだと！」

「ただ妄信してるだけの馬鹿には、相手が何を悩んでるかわかんねえだろうしな！　だが、俺らは違う」

息を吸うと血が喉に入るが、強引に吐き出し、

「俺らは、この世界が不満だから作り直すなんていってやがる>造物主<を殴り倒して、これから俺達を作る予定の超ハッピー世界を教えてやる！」

「……は？」

「俺達の作る超ハッピー世界では、喧嘩もありゃあ、殴り合いもある。だがよ、人が想いを伝えていける、そんな世界になる予定だぜ？　不幸が一切ない世界より、余程上等だろう」

「それでは、結局今と変わらないだろう！」

「いいや、変わるね！　誰もがちよつとした勇気で、他人に想いを伝えていける。ただそれだけだ、その程度で世界は変わっていきける！　俺達は、そう信じてる！」

拳を握ると、爪の間や傷から血が噴出した。

「それにあれだ、てめえらの作ろうとしてる世界……。夢みたいなもんだろ？　じゃあ、その中でどんだけかつこよくなっても、未中央に見てもらえねえだろうが！」

「……結局それか……！」

「それで十分だろうが……！　贅沢にも程があるぜ……！」

再び攻撃が再開された。

血が目に入り、一つ一つの攻撃はよく見えない。

だから、【攻撃】そのものを打撃する。

左の拳を力の限り振るうと、確かな手ごたえが返ってくる。

ただひたすら、左の拳で攻撃を打ち払う。右の拳はタイミングを見て、でかい一撃を放つ為に必要だ。

左を引いて、放つ。ただそれだけだ。

攻撃が来る。拳を放ち、引く。攻撃が来る。引き、放つ。

徐々にタイミングが早くなり、ボクシングのジャブのように左拳が高速で動く。

アーウェルンクスの苛立ちが大きくなり、打撃音の切れ目から舌打ちが聞こえる。

魔法が使えない相手が、魔法が使える自分と拮抗しているのが気に食わないのだろう。

だからだ、早く概念能力使ってこい。

その想いに応えるように、声が聞こえた。

【・　攻撃力は最大となる】

瞬間、攻撃を打ち払っていた左の拳が、攻撃と共に砕け散った。
左手が跳ね上がる。

「……死ね！」

アーウェルンクスの気配が近づいてくる。

直接殴りに来ているのだろう。散々挑発され、激昂した相手は直接殴らなければ気が済まないのだろうと、ナギは思う。

そして、それは彼の思い通りだ。

「倒れるのは、てめえだ！」

右の拳が放たれる。

ナギの耳に、空気を切る音と、アーウェルンクスの唸り声が聞こえた。

負けてなるものか。

その思いが声に出た。

『うおおおおー!!』

声は重なり、空気を震わせる。

そして破裂音が二つ鳴り響き、ナギとアーウェルンクス、二人の影が床に倒れ込んだ。

ゼクトは、見上げた空を黒竜が舞うのを見た。

対になるような白の竜は地に落ち、黒竜を止めるものはない。

自由に空を泳ぎ、咆哮を上げる黒竜を見てゼクトは、

「まるで勝利の舞じゃな」

そう呟いた。

「まるで他人事だな」

そう応えたのは、隣に座る>造物主<だ。

「お主のお気に入り達は、ヤミと黒竜に敗れたのだぞ」

>造物主<は、どこか投げやりにそう応えた。ゼクトの知る限り、彼女は勝利が確定してもそういった態度を取る事はない。ならば、そういった態度を取る理由はほかにある。

「まだ、じゃな」

「なんだと？」

「まだじゃと、言ったんじゃよ。聞こえなかったかの？」

空からは強い風が送られてくる。

黒竜が舞う風は、黒竜以外を遠ざけるように弾かれ、暴風となって周囲へ当たっていく。

しかし、それでもゼクトは、

「ワシは、勝てると思っている。ここからでも逆転は可能じゃとな」
「白竜は落ち、娘は黒竜に飲み込まれた。>紅き翼<の者どもも、未だ宮殿内から反応がある私の使徒達によって倒されるだろう。どこに勝算がある？」

説き伏せるように、>造物主<は言葉を放ってくる。

真剣な眼差しで、しかし長年の付き合いだからこそ分かる少しだ

け弱気な態度でだ。

その様子を見て、ゼクトは、

お主は、とことん素直ではないの。

> 造物主<は、未央達の説得に応じていたのだと、そう思った。しかし、事前に用意していた作戦が動き出し、己の意思では止められない為に、

勝ってほしいと、そう言えない意地もあるのじゃろう。

引き起こした戦争と、己の為に働く使徒と、今もって動いているヤミ達への事と、色々ながらみ彼女にのしかかっているのだからと、ゼクトは思った。

解放してやらねばならん。

唾を飲み込むと、思いのほか大きく音を立てた。

緊張しているんじゃないかなあ、と何処か他人事のような感想を持ち、一つ咳をする。

> 造物主<の正面に回り、膝をつき、視線を合わせると、> 造物主<が視線を合わせてきた。

「> 造物主<よ、少し聞きたい事がある」

「……………なんだ？」

「例えばの話じゃが、お主、この戦いに負けたらどうするつもりじゃ？」

「……………これだけの事を引き起こしたのだから、生きてはいられ」

「ああ、駄目じゃ駄目じゃ。そういうのは無しで頼む」

「は？」

「死んで解決は無しじゃ。少し質問を変えよう、何をしたい？」

その問いに、>造物主<は少し考えて、

「死にはせずとも、やはり魔法世界には居られないだろう」

「なら、旧世界で観光じゃな」

「……は？」

「詠春という男が京都に詳しいらしい、お主も行った事ないじゃろう？ 歴史的にも価値のあるところらしいぞ。まあワシらより年下じゃろうがな！」

「……何を」

「だから、これからの生き方の話じゃ」

手を取る。

白の手枷が音を立てて上がり、

「これ、邪魔じゃのう」

取り払った。

手枷が音を立てて割れ、砕け散って消えていく。

>造物主<の手が自由になり、改めてゼクトは手を取った。

「ハッキリ言うがの、ワシは誰になんとわれようと、お主を死なせるつもりはない。無論、お主が死ぬといっても先ほどのように却下する」

「……そうか、狂ったか？」

「とつくに狂っておる。お主もな！ 数千年生きた奴が今更正気面するでない！」

「は、話をズラすな！ お前は結局何が言いたいのだ！」

「おお、そうじゃな。その話をしよう」

ごほん、と一息ついて、もったいつけるように話す。

「手伝つてくれんかの？　ここから逆転するのを、世界の為じゃなく、ワシの為にな」

「……何を言っている、そんな事が出来るわけがない。私は＞完全なる世界＜の盟主、＞造物主＜だぞ」

「残念じゃが、そう思っているのは極一部じゃ。先のオステイア攻防戦で世界中にヤミが盟主と言ったからの！」

「しかし、ごく一部の者も知っているし、私の使徒達だって知っている！」

「知ってる奴にはワシから黙っておいてもらおうように言おう。お主の使徒達こそ、お主が黙っていてほしいと頼めば黙っておくじやろう」

「いや、しかし、私は……＞造物主＜だぞ？」

「うむ」

ゼクトは＞造物主＜の手を引き寄せ、抱き寄せる。

抵抗なく＞造物主＜はゼクトに体を預け、ゼクトの答えを待つ。

「お主は、先ほどの問い。一度も無理だとは言わなかったの。だから、重ねて頼む。

手を貸してほしい」

「しかし、私は……！」

耳元では、最早泣き出しそうな＞造物主＜の声が聞こえる。

「＞造物主＜。もうよい、責任やら、意地やら、その他面倒臭いもの全部ワシのせいにしてしまえ。誰かに何か言われたら、ワシに言われたせいにしてしまえ。お主はそうして良いんじゃない」

「でも……それじゃあ……」

「お主、さっき言ったじゃろう。ワシは少し楽をしすぎた。千年く

らいはワシだけ貧乏くじを引き続けても良い。だから、ワシと生きていかぬか。魔法世界はもう親離れ出来る歳じゃよ」

「……あ、あ……！！！」

あ、と更に声が漏れ、そのまま小さな嗚咽が漏れ出した。

> 造物主くが泣いている。

数千年を過ごし、魔法世界を救う為に戦争すら厭わなかった彼女が泣き出した。

それをゼクトはゆっくりと撫でる。

遅くなってすまなかったの、と呟き、

「これからは、お主と二人。育てた世界や、隣の旧世界を巡っていい」

その言葉に、ゼクトに身を寄せて泣く>造物主くが、ただ頷いた。

第六十八話

黒竜は、ただ空を楽しんでいた。

誕生してすぐに戦う事を求められ、それが役割と教えられて、よく分からずに戦った。

しかし、白い竜と戦ってみて、とても楽しかった。

相手がすぐに動かなくなってしまったのが残念だ。

邪魔といわれていた少女も飲み込み、最早周囲に敵は無い。

ゆつたりと空を泳ぐ。

しかし、戦う事に比べると退屈だ。

何処かに戦えそうなものは居ないかと、周囲を見渡す。居た。

随分離れた場所に、数え切れない程の人間と、幾つかの白く大きな人形が居る。

白い竜程ではないだろうが、少しは楽しめるだろう。

移動を始めた黒竜の前に、別の人影が現れた。

ヤミに教えられていた人だ。

>造物主くと呼ばれている人。味方だ。

どうしたのだろうと、そんな事を思っていると>造物主くが両手に黒の杖を出した。

なんだろう、思った瞬間、衝撃に殴りつけられた。

突然頭上に現れた岩石が、頭にぶつかってきたのだ。

味方ではなかったのか、なんでこんな事をするのだと、抗議の意思を込めて睨む。

「悪いな、黒竜よ」

謝罪の言葉が出た。

許してやらなくもないが、何故こんな事をしたのか説明してほし

い。

「悪いが、お主を止めて、お主の腹の中に居るヤミも黙らせる」

この相手は、味方ではなかったのか。

「明らかな敵対宣言だ。」

何故こんな事をする。何故。

怒りと疑問で吼えると、相手は言った。

「悪いな、全てはゼクトという夫のせいじゃ。そいつを恨んでくれ」

こんな時に、笑顔でそう言った。

アリカは、ふと意識を取り戻した。

自分の上には、アルトリアが押し倒すようにのしかかってきており、重い。

少し揺らすと呻き声が漏れ、生きている事が分かった。

アルトリアの向こうに光が見え、あまり動かさずに自分から引き離す。

「今、どういう状態じゃ……？」

周囲を見渡せば、白の欠片が散乱していた。

竜の艦橋、であった場所だろう。見慣れたパーツが幾つか散見され、その向こうでは押しつけられた森林と土砂が見えた。

力及ばず、負けたのか。

思うのは、背後に倒れる自分の騎士の事。そして空に姿が見えない友人達。殺しても死ぬような奴らではないと信じているが、どうなのだろうか。

後方に下げた兵士達も気になる。

そこまで思った瞬間、空から爆裂音が響いた。

「な、なんじゃ!？」

見上げれば、そこには竜と舞う女の姿があった。

両腕に黒の杖を持ち、オレンジの髪を振りかざす女は、

「>造物主く!?! 何故黒竜と戦っておる!？」

アリカは咄嗟に前へ歩き出した。足元を見ないまま放り出した足は、散乱していた破片に足を取られ、身を支えられずに宙へ泳いだ。転倒する。

腰を強打し、涙が滲んだアリカの頭上では、敵だったはずの女が戦っている。

その姿を見て、己は何をしているのだと、そんな思いを得る。

腰に帯剣してある剣に手を当てる。父王が亡くなった際、受け継いだ王家の剣だ。

黄金の剣、民を守る王の剣。

しかし、

「妾には、力が無いではないか……!！」

悔しい、情けない。やり場の無い怒りに襲われ、どうしようもないまま、

「……!！」

憤りを込めて、何かを叫んだ。

その時だった。アリカの肩を叩くものがある。

それは、騎士の籠手を纏っており、

「マスター……、私はまだ、戦える」

アルトリアが居た。

体の各部が破損し、剣も折れ、鎧として意味を成していない箇所もある。

だが、

「マスター、私は貴方の騎士であり……貴方の剣でもある」

「だから……なんだ!？」

八つ当たりをしていると、自分でもアリカは分かっていた。

幼稚な怒りだと思いつつ、そうしてしまう自分を恥じるアリカは、しかしそうでもしなければやっていられた。なかった。

「最早竜は落ちた! もう力は無いではないか! 妾は……、今戦える力が欲しいのだ……!」

涙で滲む視界に、一つの色が入ってくる。

青の光だ。

アルトリアと、竜の欠片の全てから光が放たれている。

「マスター、貴方は意外と話を聞かない。直さなければならぬ欠点だぞ?」

笑顔で騎士はそういった。

そして、言葉を続ける。

「私は、否、私達は未だ戦える。しかし、こつも思っただの。何か違うのではないか、と」

「何か、違うだと？」

「そうだ。私達は未央に作られた姿ではなく、貴方の望む姿がある。そんな気がする。」

それさえ分かれば……」

また戦える。

「妾が、望む形か……」

「そうだ、マスター。貴方はどんな姿を望む？」

問いながら、アルトリアはアリカの手を取り、膝をつく。

「妾の、望む姿……」

改めて問われると、少し考え込んでしまう。

戦う姿のイメージと聞かれると、

「……やはり、騎士じゃろう」

描く姿は、自分がベースだ。

鎧を纏い、兜をつけ、黄金の剣を持ち、戦場を駆ける。

そう、

「旧世界の伝承で、お主があやかった名前の騎士の王。

妾の考えるイメージは、それじゃな」

答えた瞬間。

ほのかに光っていただけの青の光が爆発的に膨れ上がり、一帯を包み込む。

「な、なんじゃ!？」

「慌てるな、マスター」

手は未だアルトリアに握られたまま。

周囲の光がアリカの周囲に収束をはじめ。

よく見れば、周囲に散乱していた竜の欠片は全て光となり、アリカの周囲に集まっている。

「マスター、御願いがあ

「な、なんだ？」

「貴方の帯剣しているその剣を、こちらに差し出してくれ」

言われるまま、アリカは剣を差し出した。

光の粒子が剣にまとわりつくように動き、さらにアリカの身を包む。

身を包む粒子に触れると、アリカはふと懐かしさを感じた。

そう、これはまるで、

「父君を前にしているような……」

「そうか、そう思うか」

「え……?」

顔を上げれば、一面は白の世界。

そこで、父王が立っていた。

「父、君……? 何故?」

「アリカよ。お主に問わぬまま逝ってしまったが、王位を継承する際に必ず問わなければならぬ問いがある」

「は、はい!」

思わずアリカは背筋を伸ばし、構える。

その様子に父王は頷き、

「国とは、なんだと考える?」

「民あつてのものかと」

「では、王として民の為に犠牲となる決意はあるか」

「勿論です」

そうか、と父王は呟いて、

「では、人としての幸せは、諦めるのだな?」

「……王として、仕方の無い事かと」

その問いに、父王は大きく溜息をした。

不味い答えだっただろうか、とアリカは不安になり、父王を伺う。

「あの、父君……」

「いかん、いかんぞアリカ!」

「は、はい!」?

「私はもはや王ではなく父親なので言わせてもらおう。幸せを諦めるのはいかんぞ、アリカ! 私も父より受け継いだ際はその答えに Yes と答えたが、お主と私では条件が大きく違う!」

「お、王となる為の設問だったのでは!」?

「そんなもの私の代で廃止にしてくれる。お主には大変頼りになる友人が居るではないか。存分に頼り、難題を押し付けてやれ」

「い、いや。しかし……」

「アリカ」

父王は言葉を切ると、アリカの肩へ手を置く。
そして、心の底から搾り出すような声で、アリカへ願う。

「王は孤独でなければならぬなど、誰が決めたのだ？ 王とて、人から生まれたのだ。ならば、王の親は当然子の幸せを願っている。もっと欲張ってよいのだ」

「……つまり、国を守り、民を守り、己も幸せになれ、と」
「ああ、出来ぬか？」

問われ、アリカは考えた。

脳裏に浮かぶのは、友人達の顔。

誰も彼も笑顔で、困難に馬鹿な真似をしながら挑む奴らだ。

出来ると、そう思う事が出来た。
だから、今度こそ安心して父王を送り出す為、アリカは告げる。

「皆とならば、出来ます」

真っ直ぐと父王の瞳を見返す。

「そうか……。ならば、今こそお主に王位を渡そう」

「T e s . お受け致します」

その言葉を待っていたかのように、周囲の空間が動き出す。
白の空間は、滞留した白の粒子。

それらが再びアリカに集まり、アリカの視界が白に染まる。
父王の姿が消える。

思わずアリカは叫び、手を差し伸べた。

「父君……！」

手に触れたのは、人の肌ではない硬質の手触り。
視界が晴れる。

地面から二十メートルほど離れており、三百六十度風景を見渡せる。

アルトリアの艦橋のようなフレームが視界の各所に見られ、

操縦席。

そして、手が触れているものに視線を落とす。

それは、王家の剣。

柄頭から柄へ手を滑らせ、握り締める。

瞬間、先ほど父王に問われた問いが脳裏を駆け巡った。

「大丈夫です。忘れておりません、父君。私は王として民を守り、
そして……」

柄を握り締め、突き刺さっていた剣を抜いた。

「己を捨てる事もしませんとも！」

言葉に応じるように、脳裏へ言葉が走る。

一抜剣完了《Succession of Excalibur has been completed!》!

ようこそ、我が担い手。我が王!

その誕生を見た者は三人しか居なかった。

>造物主くとゼクト、そして黒竜。

彼らは光の爆発が生じた大地に目を向けると、そこに佇む騎士の姿を見た。

全身は白を基調とした鎧に、金の装飾が描かれている。

頭部には竜をあしらった兜をかぶり、後頭部からは金の髪が優美に踊っていた。

武神。

落ちた竜の体を使い、人は騎士の体を作った。

その双肩は人を守る盾のようで、背の飛翔器から出る光はマントのよう。

そして、大地に突き刺さった黄金の剣を引き抜いた。

新たに現れた白色の騎士は、剣を構え、息を吸い、名乗りを上げる。

「武神ペンドラゴン」

黒竜は現れた騎士に向かって炎球を放つ。

反応が遅れ、>造物主くがその炎球を掻き消そうと動きを見せるが、それより早く騎士が動いた。

恐れず、炎球へ向かい飛翔する。

金の髪を揺らし、背後のマントをたなびかせ、

「……！！」

突っ込んだ。

全長三十メートル程の武神が、五十メートルを超える炎球へ突撃した。

直後、炎球が内部より破裂する。

炎を打ち払った騎士は無傷で、振った様子 of 剣を再び構えた。

「>造物主く、貴女は今味方か？」

「気に入らないなら、貴女の友人に言ってちょうだい」

「こつという事をするのは、未央か……。そうさせてもらおう」

勘違いされた、と呟く>造物主くの言葉は無視され、騎士が>造物主くと並び、

「行くぞ！」

黒竜と激突を開始した。

第六十九話

夜空を白金の武神が突っ走る。

音を置き去りにして飛翔する白金の線が空に描かれ、黒竜を翻弄する。

黒竜の巨体に比べ、武神の体軀は余りにも小さい。

しかし、その武神はかつて竜だったものだ。

空を燃やす火炎を剣の一振りで切り裂き、霧散させる。

空を割る爪の一撃は受け流され、返す刀で一刀両断される。

「おお……!!」

武神は更に加速していく。

飛翔器から吹き出る青の光をはためかせ、空を描く線は更に細く、長く伸びていく。

最早音だけが闘いの様子を表していた。

剣が空を裂く音と、鉄の切り裂かれる音が響く。

飛翔器の爆裂音と、火炎が吹き飛ぶ音が轟く。

響き渡る。

斬、碎、壊、裂。

音は響くごとに、黒竜の体が削られていく。

その光景を見るものは、その名を浮かべるだろう。

武神という名を。

アリカは思う。

この身は、己の望むままに動く。

あらゆる行動は、思えばどのようになればよいか思いつく。

手が、足が、体全体が望む通りに動いてくれる。

実践で使えるとは思わなかった剣術すら、この体は与えてくれる。武神ペンドラゴン。概念竜アルトリアのパーツを使い、騎士人形アルトリアと己が合一する事で生まれた武神。

自動人形の高速思考でサポートされた思考の中、アリカは全力を發揮していく。

黒竜の迎撃に対して、何よりも早く反応し、攻撃や回避を返していく。

武神の身に当たる風を感じる。

硬い風だ、速度を上げようとする身を押し込めようとするようにも感じる。

邪魔だ。

もっと、もっと速度を上げる。

自分には、戦う力が宿ったのだ。

友に任せるだけでなく、友と並ぶ事が出来る力を得た。

友は言った、最早誰にも失わせたりはしない、と。

聞いた時は戦う力を持たなかった。

手伝おうとも思ったが、役割が違つたと自制し、しかし僅かな疎外感を得たが、

これからは、妾もそうしていく！

突っ走る。

剣閃を重ね、黒竜の動きを削っていく。

剣閃は檻のように重なり、黒竜の動きを完全に封じ込める。動きが止まった。

だから、特大の一撃を放つ為、声を放つ。

「頼む！」

放った声は、間違いなく届いた。
黒竜を押し潰すように、特大の岩石が炎を纏ってぶち当たった。

>造物主<は両手に持った>造物主の掟<を振るい、黒竜へ追撃を与える。

宇宙から降り注ぐ流星を創造し、炸裂する爆炎を創造し、全てを貫通する雷を創造する。

それら全てが黒竜へ直撃するが、

オオオオオオオオオオ!!

「なんとという耐久力……」

思わず顔をしかめる。

めげずに攻撃を送っていくと、横に白金の武神が現れる。

『凄まじい再生能力じゃな。一撃で吹き飛ばすような魔法はないのか?』

その言葉に、>造物主<はふう、と一息つき、

「正直無いが……、あっても吹き飛ばしていいのか? あの中にはヤミだけでなく、転生者が飲み込まれたままだぞ」

『未央なら心配いらぬ。あれは殺しても死なぬタイプじゃ』

信頼なのか投げやりなのかよくわからんな、と>造物主<は思った。

「ともあれ、このまま攻撃を続けて拘束する。貴様の方でも手段を
考える、そんな大層な体をしているのだ。まだ何かあるのだろう」
『ふむ……、アルトリア、どうか？　　ふむ。あるにはあるが、
出力が足りぬらしい』

「武装とは使えなければ意味が無いというのに……、　　！？」

相談をしていた二人を吹き飛ばすように、黒竜の炎球が炸裂する。
しかし、ペンドラゴンは腕を振るだけで炎を払い、>造物主<は
転移を繰り返して回避した。

黒竜が前傾する。

攻撃を受けながら、それらを無視して突撃を敢行する。

「攻撃力だけならこちらが上だ！　とにかく攻撃しろ！」

言葉よりも早く、ペンドラゴンは既に動いていた。

黒竜の周囲に白金の線が生まれ、裂音が群れとなる。

空に剣戟と、爆炎と、再生光が舞い踊り、攻撃と再生が競いはじ
める。

黒竜の内部に、広大な空間が広がっていた。

果ての見えない空間は、黒竜の体躯より遙かに広大だ。

黒竜の内部は、別の空間に繋がっていたのだ。

そこは白く、一片の黒すら存在しない世界。

その中で踊る二つの人影があった。

未央とヤミの二人だ。

攻勢に回っているのは未央だ。

杖をバズーカのように構え、杖の先端からは青の光が弾丸のよう
に発射されていく。

光弾が空を駆け抜け、敵を捉え、爆発する。
しかし、

「いやあ、中々頑張りますね」

ヤミは即座に再生し、未央へ反撃を送ってくる。

ヤミの攻撃は、魔法を用いた多種多様な攻撃だ。

炎が炸裂する事もあれば、風が肌を切る時もあり、雷が身を穿つ時もある。

それらを相殺し、かわし、時に受けながら未央は攻撃を続ける。
しかし、

「……ぐ！」

一歩踏み出した脚から、血が噴出した。

攻撃を受けたわけでもなく、ただ動いただけで、だ。

体が揺らめき、更に追加で血が吹き出る。

今度は脚ではなく、両腕からだ。

「黒竜の内部空間に満ちる【破壊】の概念。胃液みたいなものはありませんが、破壊の化身たる竜の身に入ったんです。これくらいあってしかるべきでしょう？」

そう言うヤミも同様に体の至る所から血が流れている。

しかし、ヤミの体は本体ではない。どれだけ破損しようとも、作り直せばいいだけだ。

だが、未央はそうもいかない。体に纏った装甲服が持つ再生概念と、>幸いを送る者との約束<が持つ破壊を再生に転換する概念を同時に走らせても、【破壊】の概念は未央の身を蝕んでいく。

こんな状態に、未央は既知感を覚えていた。何をしても上手く行かない、結果が出ずに、痛みだけが重なっていく。

転生前の体を思い出すわね。

攻撃と回避を続けながら、未央は己の過去を思い出す。

朝も、昼も、夕も、夜も。いつ如何なる時も痛みを襲われ、息を吸う事すら苦しみを覚える事すらあった。家族に負担をかけ、友人や医者に気を使わせて、自分はただ本を読んで時間を消費していた頃だ。

あの頃の自分と比べて、今の状態はどうだろう。

確かに、常に痛みを得ている。敵は何度倒そうとも復活し、自分の体力ばかり消費していく。

しかし、まだ動ける。抵抗出来る。

心も全く折れてはいない。それどころか、負けてなるものかと心に炎が点っている。

何故だろうと考え、答えはすぐに思い至った。

「私は……、彼と歩いていきたいのよ……！」

攻撃の群れの中を疾走する。

攻撃が胸を掠り、装甲の欠片とある物が外へ飛んだ。

仮契約カードだ。

ナギのものだけではない、エヴァのものもある。

手を伸ばし、空中でひったくるようにカードを掴み取る。

ほっと一息つき、カードに視線を落とすとエヴァのカードに傷がついていた。

怒られるわね、と思った瞬間、別の考えが閃いた。
彼女と戦った際、彼女が行った切り札の魔法術式。
思いついたと同時に、未央は考える。

それで本当にいけるのか、失敗のリスクはどれ程か、幾つもの考えが浮かぶが、それらの全てを検討した後、考えの中から消し去った。

やらないまま、時間を消費するよりマシ！

己の右手にある杖を見る。

> 幸いを送る者との約束くと名づけた杖は、今も主人の為に力を
使い続けていたが、

「……ごめんなさい！」

未央は、その杖を眼前の攻撃へ放り投げた。

ヤミはその光景を見た。

唯一無二の武器を、未央が放り投げたのだ。

なんのつもりですか!?

攻撃の群れが杖に直撃する。

杖は攻撃を受け、破損していく。柄が折れ、寄り添うように浮遊
していた十二の球体が砕けていく。

その一方で、未央は右手を前に差し出していた。

その手には、光で文字と絵が走る。

手に添うように翼の形が輝き、その横に文字が描かれる。

【・ 意思は力となる】

それは、一見すると概念条文に見えた。
しかし、続く文章がある。

【・ 我は命を繋ぐ者】

【・ 我は幸いを送る者】

次々と文章が浮かんでは消えていく。
それは、まるで呪文の詠唱のようだ。

【・ 己の行いに一切の後悔せず】

【・ 己の行いに一切の逃避せず】

未央への攻撃は止み、彼女の前には壊れかけの球体群だけが残った。

そして、その球体群も消えていく。

中央に浮かぶ二つの球へ吸い込まれ、最後に二つ残った球も、一つへ溶け合い、

【・ 術式固定】

その一文が、未央の右手に走った。

彼女の手が、最後に残った一つの球体へ伸び、

【・ 掌握】

掌握した。

瞬間、空間が震えた。否、

破壊の概念が、消えた!?

未央を見る。

そこには、普段と異なる彼女の姿があった。体は薄く青の光を放ち、先ほどまでであった傷は全て消え去っている。

彼女の右腕に、最後の一文が走る。

【・ 充填完了、概念兵装】

その一文が走った後、未央は背伸びをした。ん、と息を止め、両手を空へ伸ばす。動作する度に、彼女から光の粒が零れ落ちる。

「……！」

何を呆けているのか、とヤミは思い直す。

自分は彼女の敵なのだ、と魔法を展開し、彼女へ差し向ける。

先ほどまで、彼女が必死に避けていた攻撃だ。しかし、彼女は全く反応せず。

彼女に攻撃が到達する瞬間、ヤミの視界一杯に攻撃が現れた。

直撃する。

「……！！」

吹っ飛ばされる。

体が碎かれ、即座に再生される。

体を起こし、攻撃が来るかと身構えれば、相手はこちらを見ているだけだ。

何のつもりだろう、と黙っていれば、

「……ああ、貴方。そういう目的だったの」

そんな事を、彼女は言い出した。

「いきなり何を言い出すんですか？ 私の目的は>造物主<の代わりに>リライト<を」

「ごめんなさい、今の私に嘘つけないのよ。【秘密とは隠し事ではない】って概念もこの体にはあるから」

事実だ。

概念能力とは、世界の法則を変える【力】だ。>闇の魔法<は力の塊を体に取り込む術式だ。ならば、魔力でなくとも掌握は可能と考え、未央は概念能力で無理やりそれを成した。

その結果、未央の体の内あらゆる概念能力が渦巻いている。

「貴方の目的は、最初から二つ。暇つぶしと……」

ふっ、と息を吸い、

「……私の敵、憎まれ役である悪役をやる事ね」

その言葉に、ヤミは空を見上げ、あー、と呟き、

「本体からは、確かにその二つを受けてきましたよ。でも私個人の目的は暇つぶしですからね」

「素直じゃないわねえ……」

「善意だけに結び付けて欲しくないんですよ、イラつきますからね」
「あ、そう。じゃあ遠慮いらさないわね」

同時、音を立てて、ヤミの周囲に魔法の群れが出現する。
更に、

【・ 力は無限大となる】

概念条文が唱えられ、その力を増幅していく。
その力と相対した未央は、

「……っ！」

両手を挙げ、まるで降参したようなポーズを取った。

「行け！」

しかし、ヤミは攻撃した。第一波は総数千を超える魔法の射手
く。

放った直後から追加を初め、あっという間に一万を超える大軍に
変貌する。

未央は、ただ両手を振り落とした。

それだけで、一万を超える大軍が全て砕け散った。

「……化け物ですか！」

「そだね……、世界を変える力を持った生命体だもの。まさしく全
竜ね」
イアサン
レヴァ

更に、未央は続ける。

「すぐに貴方の魂まで到達してあげるわ。少し待ってなさい」

そう言って、左の掌をあげた。

すると、赤い光を持つ球体が発生する。

「この空間にあった【破壊】の概念、勝手にもらっておいたけど」

返すわ、と左手を振り払った。

腕の動きに合わせて、赤い光が変化する。

球体から、横一線の斬撃へ。

白の空間を、赤の線が走る。

ヤミの身が震え、白の体が赤く変色し、ほつれていく。

「くぁ………!!」

苦悶の音が漏れ、ヤミが消えていく。

そこに残ったのは、未央のみ。

「さて、また足止めされる前に出ましようか」

そう言って、未央はもう一度左手で空間を一閃した。

その軌道をなぞるように、白の空間に亀裂が入った。

亀裂からはヒビが入り、そのヒビは周囲へ広がっていく。

空間が、割れた。

アリカは、黒竜が身を擦るのを見た。

こちらが与えている傷ではなく、まるで体の奥にある異物を吐き出そうとする動きだ。

その直感に従い、アリカはペンドラゴンを動かす。黒竜の腹部へ移動し、剣の柄で打撃を放った。鈍い打撃音が響き、黒竜がハ、と息を吐き出した。口からは少しの炎と、

「やっと出てきおったか！」

未央が体を宙に放り出す姿勢で吐き出されてきた。加速して、受け止めると、

「……誰？ ああ、アリカとアルトリアね。進化概念で進化したのね」

「よく初見で見抜くのう。というかお主、なんか光っておるぞ」

「これが私の最終形態、なんてね。どう？」

「不健康に見えるのう……」

酷い評価だわ、と俯く未央の横に、>造物主くが現れた。

一瞬身構えた未央だが、やはり即座に状況を理解し、

「ありがとう、って言っていていい？ それともゼクトの馬鹿と？」

「貴様にだけは両方言われたくないな。転生者」

「皆の評価が厳しい……」

言っている間にも、黒竜が態勢を立て直し、こちらを睨みつけている。

状況は好転したが、未だ黒竜を消し飛ばすような攻撃は放てない。そう考えていると、未央がこちらの装甲に手を当てて言う。

「ああ、出力があるのね。分かったわ、任せて」

頷きながら、未央が空を上がっていく。
軽い動作だが、その速度は高速だ。
青い光が、夜空に上っていく。

流れ星が、空に帰って行くようじゃな。

戦場の遙か上空、地平を見渡せるような高度で未央は停止した。
周囲を見渡せば、世界がよく見える。

光の柱は更に上まで伸び、後退していた軍勢が見え、更にオステ
イアの街並みが見える。

そして、未央は感じていた。

皆の祈りが、ここに集まっている。

【意思とは力である】概念賢石を持った軍勢の祈りだけでなく、
中継されていた戦場の通信を見ていた皆の祈りも、ここに集まっ
てきている。

祈りとは、想いだ。

「皆の想い、使わせてもらっつわよ……！」

【・ 意思は力となる】

概念条文が世界へ染み渡っていく。

今までの一時的な改変ではなく、世界そのものの法則へと変わっ
ていくのだ。

ふと、魔法が封じられたままだった事に気づき、更に概念を追加
する。

【・ 言葉には、意思^{おせい}を伝える能がある】

「再び概念条文が世界へ染み渡っていく。
すると、未央の周囲に光が生まれた。
光を手にとってみれば、それは手紙の形をしていた。
誰かの祈った想いを文章となり、受け取った人物へ想いが伝わる
と手紙がほどけ、力に変換される。」

ロマンチックな変換ね。

手紙が雪のように舞い降りる。
ゆっくりと、しかし一点に向かって。
向かう先は、白金の武神。
アリカ、ペンドラゴンに向かって人の祈りが集まっていく。

アリカは周囲に舞い散る光を見ていた。
光の一つ一つが、ペンドラゴンに寄り添うように浮遊し、吸い込
まれていく。
そして、その度に声が聞こえてくる。

頑張つて。
負けるな。
死にたくない。
アリカ様のお力で世界をお救いください。

最後の祈りは聞き覚えのある少年の声だった気がするが、同じよ
うに祈りの声が幾つも聞こえてくる。

マスター、出力が上がったぞ！ これなら竜を吹き飛ばすー

撃も放てる！

アルトリアからの声上がる。
やるべき事は既に理解している。両手で剣を持ち、肩に担ぐように構える。

「……行くぞ！」

大きな力が来る。

ペンドラゴンの周囲、まだまだ降り注いでくる祈りの力が剣に集中していく。

その事が、手ごたえからアリ力は分かった。
力を思う。

これは、祈りの力だ。人の希望を集めた力。
それを束ね、放つ剣はまさに民を束ねる王の剣といっていい。
その重責を思い、僅かに目を伏せた。
しかし、

この重みは、一人で背負うものではない！

目を見開き、眼前の黒竜を見据える。

感謝しよう、お主のおかげで、妾はこの思いを得た！

剣を握る両手に、力が入る。

最後の一撃だ。

アルトリアから全ての準備が整ったと報告が上がり、声を放つ。
剣の名を叫び、力を放出する。

「エクスカリバー千の希望を束ねる剣！」

光の結晶と化した剣が振られた。

剣閃は光線となり、黒竜に直撃する。

光は一瞬で竜を穿ち、その背後にそびえる光の柱を横一文字に切断した。

黒竜は光線の直撃を受け、最後の咆哮を上げながら消滅していった。

黒竜が消滅し、更に光の柱が切断された。

未央は思わず一息ついてしまうが、まだやる事があると己を戒める。

>リライトくを止め、ヤミに最後の一撃を加える仕事が残っている。

墓守り人の宮殿へ向かおうとする未央を、引き止める声があった。

「おい、転生者」

>造物主くだ。

彼女は手に持った黒の杖を、未央に放り投げる。

慌ててキャッチする未央。

「つと……」

「>造物主の掟く、その一本だ。貴様にやる」

「え？」

「ヤミはグレートグランドマスターキーに宿っているのだろうか？」

現在のマスターキーを破壊すれば、それに魔法世界の管理者権限が移る。だから、それを貴様にやる」

「それって……」

認めてくれた、と。

>造物主<の心が伝わってくる。

最早、子離れの時期とは分かった。私は贖罪をしながら、ゼクト……フィリウスと共に行く。

だから、と続いた。

魔法世界、頼むぞ。未央・柳。しくじったら叱りに来るからな。

「……Testment・頑張るわ」

返答を聞くと、>造物主<は別の>造物主の掟<を手元に出し、転移魔法で消えていった。

さて、と気合を入れなおし、未央は行く。

恐らく、ナギが既に近くまで行っているはずと思い、>造物主の掟<を使い、ナギの近くまで転移する。

転移魔法によって視界が塗りかわり、一面には白い壁が広がっていた。
いた。

否、その白い壁には赤い色が寄りかかっていた。

「ナギ!？」

悲鳴の原因は、彼の状態にあった。

左手は拳が無く、装甲服は全損。体中に裂傷があり、流血が無い

だけで間違いなく重症であった。
ナギは未央の悲鳴に振り向き、

「……未央に超似てる天使か？ わりいけどまだやる事あったから、帰ってきてくれよ」

「な、何馬鹿な事いつてるのよ！ すぐ治療よ！ 治療！」

「んあ？ 本人か？ それにしちやイメージが違うな……」

「青く光ってるから、それも当然ね……。似合わない？」

未央がナギへ手を当てると、それだけで負傷が回復していく。

ふう、と安堵の息を吐いたナギは、再び未央を見て、

「……、俺としては普通の未央がいいな。なんか青く光つてると不健康そうだぜ」

「この戦闘終わったら、私この兵装封印するわ……。はい、終わり」

未央が手を離すと、既にナギの左手は再生しており、体の裂傷も消えていた。

「普段よりすげえなあ。まあ、それより>リライト<の術式核なんだけだよ」

「ええ、見つけた？」

「あの扉の奥だな」

ナギの指差した方向には、十メートルはあろうかという扉がそびえていた。

そして、その方向からは圧力を感じる。

「ナギ、いける？」

「ああ、行こうぜ」

ナギが未央の手を取り、二人は並んで通路に行く。
一歩一歩、ゆっくりとした歩みで行く。

「未央、覚えてるか？ 俺と初めてあった時の事とか」

「ええ、筋肉痛の私を貴方が引つ張っていったのよね。ターン制、覚えた？」

「おう、会話のキャッチボールとかだろ。でもあえて無視するのも乙なもんだぜ」

笑いあいながら、二人は歩みを進める。

「麻帆良学園では、武道大会とか、>紅き翼<の皆と会ったり、色々あったわね」

「そうだなあ。そういえばあの時、初めて未央に>千の雷<ぶちかましたんだよな」

「あれは痛かったわあ……」

今までの旅を思い出し、笑い合いながら進む。

「オステイアは本当に色々な事があったな。未央が暴走して遁走したもんな」

「ま、まだそれ言うの？ 悪かったって言ってるじゃない」

「いや、ある意味感謝してるんだぜ？ おかげで告るタイミングが出来たしな」

「やだもつ、そういう遠回しな口説きまで覚えたの？」

辛い思い出も、笑いながら話せるようになった二人は、先を見ながら。

「未央」

「ん？ 何？」

「旅に出て、良かった。俺はそう思ってるけど、未央はどうだ？」

「……ええ、私もそう思うわ」

旅路の果てに、最後の扉に到着した。

声を揃え、セーの、と扉を開く。

扉の先には、二十メートルほどの広間があった。

その中央に、黒の巨大な杖が浮かんでおり、その周囲五メートル程を光が覆っていた。

声が響く。

『ようこそ、世界改変の間へ』

「ヤミか、ためえ本当に俺らに付きまとうの好きだな」

『まあ、これで最後ですけどね』

「そう願いたいものね」

言つて、ナギと未央は手を繋ぎなおす。

ナギは右手を前に、未央は左手を前に。

「私が力を集めるから、ナギは思いっきりぶちかまして」

「おう、任せろ」

未央が集中を始めると、幾つかの青い光が二人へ向かってくる。

先ほどと同じような、祈りが手紙となったものだ。

手紙が、二人の手に触れる。

これで終わりだ、しくじるなよ。二人とも。

最後こそ気を引き締めるんですよ、二人とも。特に未央は意外と抜けてますからね。

お主達、はよ終わらせる。ワシはこの後女房と逃げる算段じゃからな。

戦争終わっちゃったら傭兵家業はしけっちまいそうだが、まあやっちなえよ。

さっさと済ませろ。私はもう観光や休暇の予定を考えているんだからな。

ナギさん、頑張ってください！ あ、それと未央さんも頑張ってください！

アリカ様の勇姿を拝見出来ましたので、後は興味ありません。早く済ませてください。

戦争終結、いいものだ。しっかりやって、元気に戻ってきてくれ。戦争、終わったら……、遊ぶ約束。忘れないでね。

言っておくが、この後はオステイアの復興に力を貸してもらおうからの、逃げるなよ。

> 紅き翼くの皆、アリカとアスナ、ガトーやタカミチやクルトの意思が伝わってくる。

皆、素直に応援してくれる者も居れば、捻くれていつも通りの野次を飛ばす者も居る。

思わず二人とも苦笑が漏れるが、

「何よりの応援ってもんだな！」

二人には何よりの言葉となった。

二人の手に、青の光が収束していく。

「ナギ、御願い！」

【・ 意思おもいを信じて打撃すれば、いかなるものも打撃する】

ナギの概念条文が展開され、そこに未央が力を追加する。

「皆の意思力と、私達の意志力を接続！」

意志が力となり、武器としての形状を取る。
剣。

これから先、全ては自分達で切り開いていこうと、そんな想いの
籠った形だ。

青の光剣を、二人は振り上げる。

その時、ヤミが声を放った。

『本当に、後悔しませんか？ >造物主<は健在で、魔法世界が消
える原因は不明のまま。世界の人々は、この戦争が終わればまた仲
違いを始めるでしょう。』

そんな世界より、夢でも楽しい世界がいいとは、思いませんか？』

問い掛けに、即答が来る。

「当然！」

「人間なめんな！ 諦めずにやっていくのがいいんだろうがよ！」

そして、光剣がついに振り下ろされる。

黒の杖に光剣が接触し、最後に声が聞こえた。

『そうですか……、では、皆さんに幸いがあらん事を』

穏やかな、幸いを願う言葉だった。

光剣によって、黒の杖が両断される。

物理的にも、>リライト<の術式核としても、ヤミの魂としても、
ナギの打撃概念は全てを等しく打撃した。

次の瞬間、>リライト<の終焉と共に、ヤミの魂に付与されていた概念能力が世界に散っていく。

青い流星が世界中に飛び去り、魔法世界だけでなく、旧世界でも目撃情報があり、流星は全世界に溶け込んでいった。

そして、ナギと未央、二人も振り返り、帰って行く。

共にあるべき人と、共に居られる場所へ、そしてこれからの事を考える為。

そして物語は、一年後の春に移る。

第七十話

青空の下、青々とした林道がある。

林道には鳥の鳴き声が時折響き、風が土や木の匂いを運んでいた。林道を抜けた先には、中世の建物がそのまま残っているようなレング造りの街並みがあった。人はまばらに見られ、のんびりと歩いている。

林道を抜けて、街へ入る二つの人影があった。

少年と少女の二人組。

少年は黒一色に染められた服で、少女は緑のワンピースを着ていた。

林道を抜けて、街並みを眺めるように二人は立ち止まる。

ワンピース姿の少女、未央は街を眺めながら、

「懐かしいわね……、5年半ぶりかしら」

「そうなるなあ。旅に出たから一回も戻ってこなかったからな」

「色々、ノギさんに怒られそうね」

「実はもう怒られてるぜ……。俺が受け止めておいたから安心しな
！」

「あら、それは気が利くわね」

二人は談笑しながら、止めた足を再び動かし始めた。

街の時間がゆっくりと流れるような、牧歌的な雰囲気懐かしい
と思いつながら、未央は歩く。

戦争が終わって一年間、アリカの下で世界中を飛び回った。

戦後処理や、>完全なる世界くの残党捕縛、更には元老院の内部

整理等々。

漸く一段落ついた、と皆が思えるようになり、ついにアリカから休暇をもらえた為、帰郷したのだ。

5年ぶり、その時間の意味を未央は街を見て思う。

店が変わって、人が成長して、または衰えて、顔見知りから久しぶりと声をかけられる。

意外と、忘れられてないわね。

幸いな事だ、と思った時だ。先を歩くナギが声をかけてくる。

「お師匠、やっぱ逃げちまったな」

残念だと、そんな思いが籠った声だ。

ゼクトは戦争終了後、行き先を告げずに造物主くと共に消えていた。

> 造物主くの使徒であるアーウェルンクスやデユナミスといった面々は残っており、オスティアで観察処分を受けている。

「まあ、きつと元気でやってるんじゃないかしらね」

無責任だが、そう信じている。

その言葉に、そうだな、とナギも頷いた。

「それにしても、やっと休みを貰えて……。詠春なんかやっと帰れるって泣いてたわよ」

「ああ、嫁さん待たせてるんだもんな。戦後すぐに抜けようとしたから皆でとめたんだが、あの時のマジギレっぷりはもしかしたら最強だったかもしれねえな」

「実は私が裏でフォローしてて、何も問題ないと知ったらどう思う

でしょうね」

詠春は京都に戻っている。

武勲をあげ、恋人にも胸を張って帰った事だろう。本人がすぐに帰れないといいつらそうだったので、裏から連絡して承諾を取っている。

しかし、どうやら近衛さんも一芝居打ったようだ。いや、案外本心だったかもしれない。

「アルは当分オスティアに居るらしいな。そのうち麻帆良の図書館島の司書やりたいつつつたけど、司書資格持ってんのか？」

「実は持つてるみたいよ、まあ、引越したら連絡くれるんじゃないかしら」

アルはオスティアに滞在して、希少価値のある本を読み漁っている。

時折、デュナミスとこつそりと何かの研究をしているようだが、触れると巻き込まれそうだったので放置した。

「一番意外なのは、ラカンよね……」

「ああ、まさか……。魔法世界で野球リーグを作っちまうとは。ハマりすぎだろ」

「拳闘にのめりこむのと、どっちが健全なのかしらね……」

ラカンは、魔法世界全土を巻き込んだ野球リーグを作り、自分も選手兼監督として参加している。

正直、やっちゃったって思うわぁ……！

恐らく、アリカの次に原作とかけ離れた人物に違いない。そんな

にミサイル打ち返したのが癖になったのか。魔法かけ放題だから消える魔球とかそんなんばっかりよ、あの野球リーグ。

少々俯いて考え込んでいるところで、ナギが次の話題を振ってくる。

「エヴァはどこ行つたんだっけ？」

「さあ……？ 私から【成長】と【老衰】の概念賢石を貰った後、観光するって出て行つたらそのまま戻ってこなかったから……。まあ、そのうちどこかで会うんじゃないかしら」

エヴァは賞金も解除された為、気ままな観光旅行に出たようだ。正直ライバルが一人減つたので安心している。それはともかく、今度会つたら純粋な友人同士として遊びたいものだ。

「それにしても、アリカも人使いが荒えよなあ。一年間休みだった日は片手の指であるかどうかだったろ」

「まあ、しょうがないとは思うけどね。オスティアの女王として、UCATの責任者としてやる事はたくさんあるもの」

言つて、アリカの事を思い起こそうとした瞬間。

不意に突風が吹き、空が鳴動した。

雲をかき分け、巨大な飛行戦艦が現れる。

それは、

「おい、オスティアじゃねえかアレ。なんでここ飛んでんだよ」

「知らないわよ……。というか、ここ通るなら乗せてって欲しかったわね」

飛行船団>オスティア<。

UCAT、Universal Counter Attack

k Team」は戦後も継続される事となった。最高責任者にはアリカが選ばれ、メセンブリーナ連合やヘラス帝国、その他の魔法世界国家の垣根を越えてトラブルに対処する集団だ。

そこで新造したのが、飛行船団>オスティア<だ。ウエスペルタティア王国の国土を改造したわけではなく、一ヶ月ほどかけてアーティファクトで建造したものだ。

約三十キロ平方メートルの面積を持ち、UCATの人員十万人ほどが乗り込んで生活を営みながら世界を回る船団だ。

それが今、上空を飛んでいる。

「もしかして、すぐ戻って来いっていう催促かしら。それともティアを預けてある事への遠回しな抗議？」

「勘弁してくれよ、俺は一週間ははたらかねえって決めてるんだからな」

その言葉に失笑しながら、未央も頷いた。

街並みを進んでいく。着々と近づくのは、過去に住んでいたスプリングフィールドの家だ。

帰ってきたと、思っていたのかしらね。

今更だな、と思いつながら未央は考えた。

自然と一緒に帰る事にしてはいたが、よく考えればまだノギさんにナギとの事を自分から話した事は無い。ナギの口からは伝わっているかもしれないが、自分から話すのはまた別だ。

許してもらえなかったらどうしよう。

思考がダウンーに入っているな、と自覚しながら、不安を振り払う材料が無い為に思考が落ち込んでいく。

視線が俯き、地面を見ながら歩いていると、人の足が見えた。

「どうしたんだよ、未央」

ナギだ。前に回り、こちらの行く先を止めるように立っている。

「あ、いや。ちょっとノギさんになんて言って顔合わせしようかな、って考えてて」

「ああ、なるほど。でもその必要はねえよ」

「……？　なんで？」

「今、家に親父いねえから」

はて？

「……ノギさんと会う為に帰郷するんじゃないの？」

「あ、いや、それもあるっちゃあるんだがな……」

珍しく歯切れの悪い答えだ。

ナギの顔は赤く、落ち着かない様子だ。

珍しいわね？

彼のこんな様子は、恐らく初めて見る。

何か隠しているのは確実だが、それが何であるか全く検討がつかない。

ナギは数分ほどそのまま落ち着かない様子で周囲を見渡し、人が無い事を確認すると、よし、と一息ついてこちらを見る。

「……未央、話がある」

真っ直ぐに、こちらを真剣な眼差しで見ている。

「……何？」

「手、出してくれるか。左手」

疑問のまま、左手を差し出した。

すると、彼の手が添えられ、

「……！？」

「これ、受け取ってくれるか？」

指輪が、薬指に。

落ち着け。落ち着けいや喜んでいい死ぬ程喜んでいい。いや死んだら駄目だがそれは比喻表現でとにかく喜んでいい。アリカには悪い気がいまだにするけどそれも今更じゃないだろうか、とにかく私は今とても嬉しいので喜びを彼に伝えなくてはならないのではないか。

「……未央、そ、その、どうだ？」

ナギの問いに、はっと気がつく。

喜びのあまり思考が暴走していたようだ。

返事をしようと口を開くが、

「あ、え、あ……」

口が！ 上手く！ 動かないいいいい！！

緊張のあまり、口が震えて声が上手く出ない。

息を深く吸い、何度か深呼吸をする事で多少マシになり、

「あ、う……。あ、ありがとう……。嬉しいわ……」

途切れながらも、了解の返答を成した。

途端、ナギもまた深く息をつき、

「やっぱ、こういうのは俺も緊張するわ。多分大丈夫だとは思ってたけどな……！」

どう答えていいか分からない。

だから、行動で示す事にした。

彼に寄り添い、目を閉じながら、押し付けるように口付けをする。ん、と彼からも腕が回され、口付けを交換する。

遠くから、教会の鐘の音が聞こえる。

少しの間そのまま、二人は満足したように離れ、ほ、と息を吐く。

そして、改めて未央は言う。

「ありがとう、嬉しいわ……」

「ああ、俺もだ。ありがとう、未央」

互いが笑みを浮かべ、再び歩き出す。

視界には、目的地である生家が見え始めた。

二人で近づいていき、ナギが一足抜けてドアを開け、中に入る。そして、振り返り、

「おかえり」

迎える言葉を放った。

それに答えるのは、

「ただいま」

ここが己の居場所だと、定義する言葉。

未央はその居場所へ飛び込むと、彼によって抱きとめられる。

「ナギ、御願いがああるの。私と、人生を一緒に過ごしてくれ
る？」

かつて旅立つた時とは逆に、未央から問いがあり、

「Testment・俺は、未央と一緒に人生を過ごしていくよ」

契約の言葉をもって、彼が返した。

互いに契約を交わし、二人は先の事へ思いを馳せる。

二人で共に迎えるであろう出来事への期待を持って。

世界を変える言葉を持つ少女と、意思を力に変える少年。

二人の行軍記は、これからも共にあるという言葉を持って終了となる。

「ずっと、一緒よ」

言葉と意思の行軍記 完

第七十話（後書き）

これにて行軍記は終了となります。

お付き合いいただき、ありがとうございました。

構成の見直しが出来次第、原作編を書いていきたいと思っておりますので、その際はお付き合いいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7797n/>

言葉と意思の行軍記

2011年6月24日16時40分発行